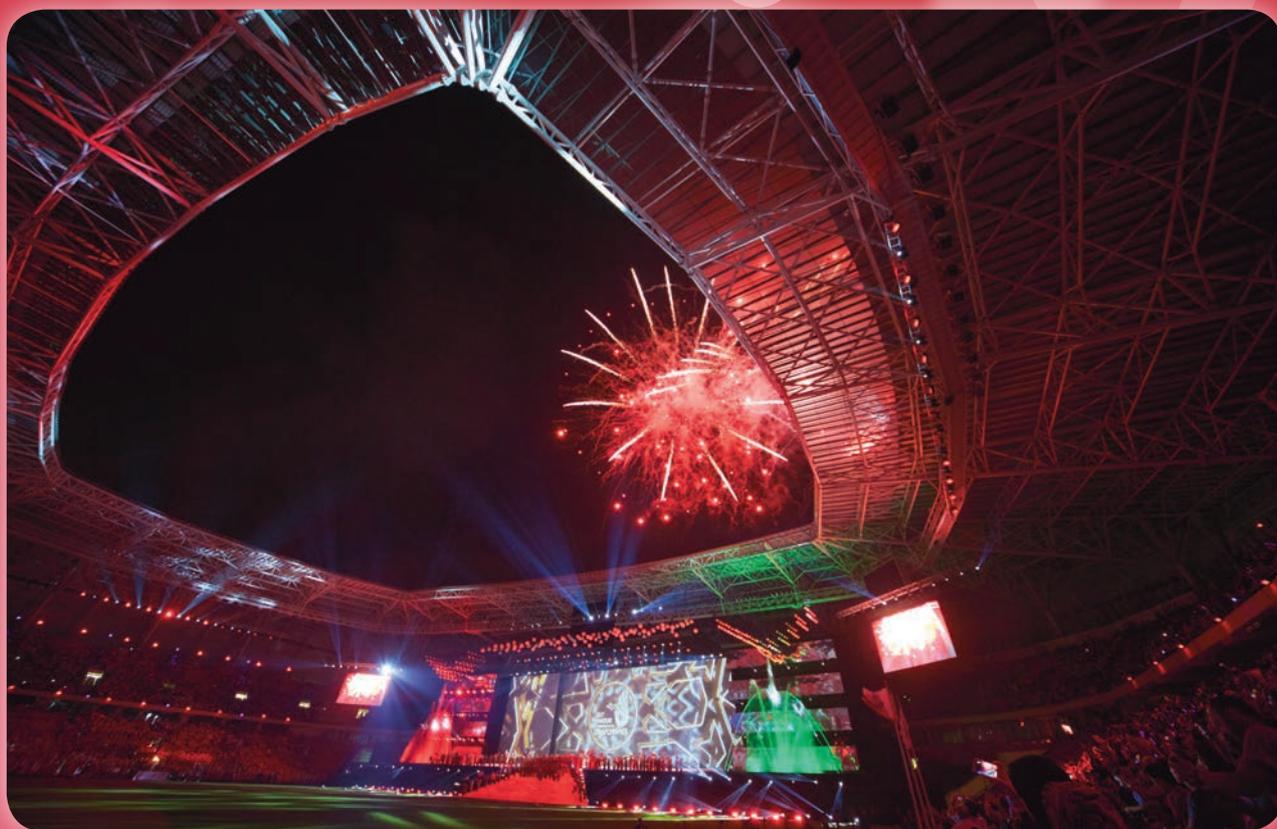


# 第23回 夏季デフリンピック競技大会 日本選手団参加報告書



開会式

一般財団法人 全日本ろうあ連盟

# 秋篠宮同妃両殿下下ご接見



写真提供 (宮内庁)



早瀬主将による決意表明



団旗を山根団長から古島旗手へ



HANDSIGNによる応援ソング『HERO』



メダルをとるぞ！

出発セレモニー



サムスンに向けて出発



成田空港にて出発セレモニー

## 結団式

7月18日 選手村



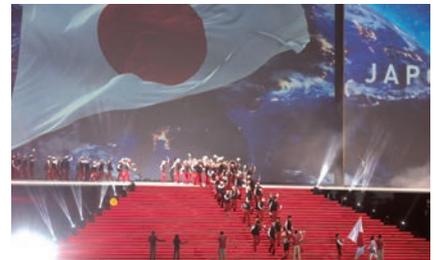
鈴木大地スポーツ庁長官のご挨拶



心をひとつに!

## 開会式

7月18日 19Mayis Football Stadium



## 選手の活躍～メダリスト



金メダル 陸上男子4x100mリレー  
左から：佐々木選手・設楽選手・山田選手・三枝選手



銀メダル 陸上男子円盤投げ  
湯上選手(左)



銅メダル 男子ハンマー投げ  
石田選手(右)



銅メダル 女子棒高跳び  
滝澤選手(右)



金メダル 陸上男子200m 銀メダル 陸上男子400m  
山田選手(中央)



銅メダル バドミントン女子シングルス  
長原選手

# 選手の活躍～メダリスト



銀メダル 水泳男子4x100m自由形リレー  
左から：茨選手・金持選手・藤原選手・津田選手



銀メダル 水泳男子200m背泳  
個人・リレー合わせてメダル7個を獲得  
金持選手



金メダル 水泳男子400m自由形  
個人・リレー合わせてメダル9個を獲得  
藤原選手



銀メダル 水泳男子200m個人メドレー  
個人・リレー合わせてメダル6個を獲得  
茨選手(左)



水泳 男子リレーで3個のメダルを獲得  
津田選手



銅メダル 水泳混合4x100mメドレー  
中央：藤川選手 右：久保選手

# 選手の活躍～メダリスト



銅メダル 卓球女子団体  
左から 亀澤選手・川崎選手・高岡選手



銅メダル 卓球女子ダブルス  
左：川崎選手 右：亀澤選手



銅メダル マウンテンバイク女子  
早瀬選手



銅メダル ロード女子  
左：小笠原監督 右：箕原選手



金メダル  
バレーボール女子チーム

## 選手の活躍



陸上



陸上



陸上



陸上



バドミントン



バドミントン

## 選手の活躍



ビーチバレーボール



ビーチバレーボール



サッカー (男子)



サッカー (男子)



自転車



自転車

## 選手の活躍



空手



空手



水泳



水泳



卓球



卓球

## 選手の活躍



テニス



テニス



バレーボール (男子)



バレーボール (男子)



バレーボール (女子)



バレーボール (女子)

# 解団式

7月30日 選手村



古島旗手から団旗を山根団長に返還



最後に全員で「ありがとう！」

# 閉会式

7月30日 Yasar Dogu Sports Hall





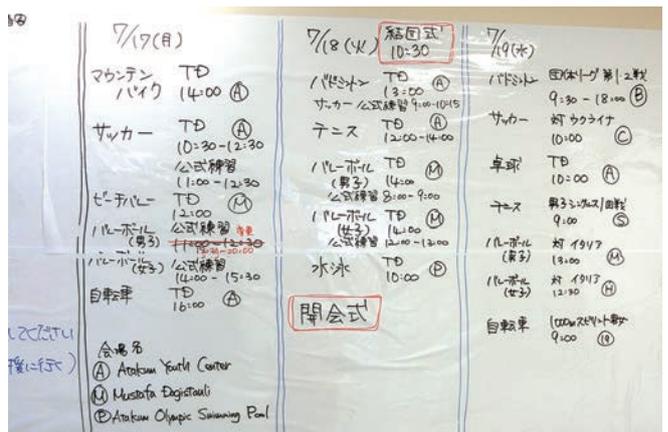
本部事務局



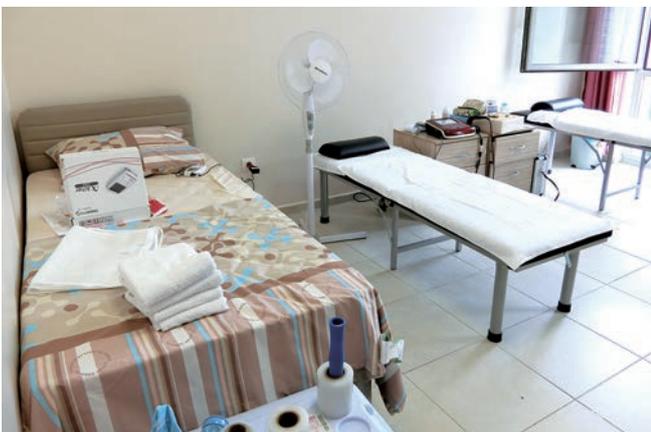
本部事務局



インタビューブース



情報共有のための掲示



トレーナールーム



メディカルルーム

# 大会の風景



# 目 次

1. 日本選手団参加報告書の発刊について（お礼）	1
2. 第23回夏季デフリンピック競技大会2017サムスン及び日本選手団の概要	2
3. 日本選手団名簿	4
4. 成績一覧	
①日本代表選手メダル獲得数	13
②国別メダル獲得ランキング	14
③各競技成績一覧	15
5. 日本選手団団員報告	
①本部役員報告	23
②陸上競技チーム	38
③バドミントン競技チーム	53
④ビーチバレーボール競技チーム	59
⑤自転車競技チーム	63
⑥サッカー競技男子チーム	69
⑦空手競技チーム	81
⑧水泳競技チーム	84
⑨卓球競技チーム	91
⑩テニス競技チーム	97
⑪バレーボール競技男子チーム	101
⑫バレーボール競技女子チーム	111
6. 参考資料	
①主なスケジュール	121
②日本選手団派遣にかかわる公式行事・式典等の概要	123
③日本選手団の編成にかかる指針	126
④選手推薦等申請用紙	128
⑤健康調査票	131
⑥聴力検査票	137
⑦デフリンピック開催地一覧	140
7. マニュアル	
①日本選手団必携マニュアル	141
②ソーシャルメディアガイドライン	163

## 第23回夏季デフリンピック競技大会（サムスン2017） 日本選手団参加報告書の発刊について（お礼）

一般財団法人全日本ろうあ連盟理事長  
デフリンピック派遣委員会委員長  
石野富志三郎

第23回夏季デフリンピックがトルコ・サムスン市で7月18日から7月30日の13日間にわたり開催され、日本からは選手・スタッフ合わせて177名を派遣いたしました。そして過去最高の27個のメダル（金6、銀9、銅12）を獲得することができました。このような素晴らしい報告が皆様にできることを心から嬉しく感じております。

出発前には秋篠宮同妃両殿下とのご接見で温かい励ましのお言葉を賜りました。また、これまでのデフリンピックでは初めてとなる壮行会や帰国報告会を開催し、安倍内閣総理大臣からの激励のメッセージや、鈴木大地スポーツ庁長官をはじめ多くのご来賓をお迎えして皆さまからのメダルへの期待が込められたお言葉を頂戴し、選手一人ひとりが日本の代表として日の丸を背負い世界の舞台に向かうという責任と誇りを改めて認識しました。

その思いは、表彰式で日の丸が揚がるたびに選手やスタッフの胸に深く刻まれ、メダルを取った選手は4年後の大会でもまたこの表彰台に上がるという決意となり、惜しくもメダルを逃した選手は自己のプレーを振り返り、「次こそは」という信念に変わりました。

東京2020オリンピック・パラリンピックを間近に控え、障害者スポーツへの関心が高まっています。帰国後の選手たちの活躍を報じるマスコミや行政等による表彰なども、4年後の大会への大きなモチベーションとなっています。連盟としてもデフスポーツの国民への理解の輪を広げるべく、更なる普及・促進に努めてまいります。

ご支援を賜りましたスポーツ庁をはじめ、宮内庁、外務省、公益財団法人日本障がい者スポーツ協会・日本パラリンピック委員会、障がい者スポーツ・パラリンピック推進議員連盟デフリンピック支援ワーキングチームの皆様、デフリンピック応援ソングを担当してくださったHANDSIGNの皆様、一般社団法人全国手話通訳問題研究会、国立障害者リハビリテーションセンター、メディカルサポートの皆様、関係各団体、そして選手やスタッフを快く派遣してくださいました学校・企業の皆様、日本選手団を多方面で支えていただいた皆様等にこの場をお借りし厚く御礼申し上げます。

日本はメダルランキングを前回大会の16位から6位に上げましたが、世界のレベルも格段に上がってきています。今回の成績に甘んじることなく、4年後の夏季デフリンピックに向けて更に鍛錬してまいりますので、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

# <サムスン 2017 デフリンピック競技大会概要>

- 1 大会名称 第23回夏季デフリンピック競技大会（通称：サムスン 2017 デフリンピック大会）
- 2 開催期間 2017年7月18日（火）開会式～7月30日（日）閉会式（13日間）
- 3 開催国・都市 トルコ共和国・サムスン
- 4 運営主体 国際ろう者スポーツ委員会（International Committee of Sports for the Deaf）  
第23回夏季デフリンピック競技大会組織委員会  
（the 23<sup>rd</sup> Summer Deaflympics Organizing Committee）
- 5 参加国・地域数 86ヶ国
- 6 参加人数 2,859人（選手）
- 7 実施競技 陸上、バドミントン、バスケットボール、ビーチバレーボール、ボウリング、サイクリング、サッカー、ゴルフ、  
ハンドボール、柔道、空手、マウンテンバイク、オリエンテーリング、射撃、水泳、卓球、テコンドー、テニス、  
バレーボール、レスリング（フリースタイル）、レスリング（グレコローマン）（21競技）

## 9 大会ロゴと日本選手団ロゴ



## 10 大会スケジュール

	7/18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
開・閉会式	●												●
陸上						●	●	●	●	●	●	●	
バドミントン		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
バスケットボール		●	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●
ビーチバレーボール			●	●	●	●	●	●	●	●		●	
ボウリング			●	●	●	●	●			●	●	●	
サイクリング		●		●		●		●					
サッカー	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ゴルフ				●	●	●	●	●	●				
ハンドボール			●		●		●		●	●	●		
柔道			●	●	●								
空手							●	●	●				
マウンテンバイク							●						
オリエンテーリング				●		●		●		●		●	
射撃		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
水泳			●	●	●		●	●	●				
卓球			●	●		●	●	●	●	●			
テコンドー											●	●	●
テニス		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
バレーボール		●	●	●	●	●		●	●	●	●		
レスリング グレコローマン				●	●								
レスリング フリースタイル								●	●				

## ＜日本選手団派遣概要＞

- 1 派遣規模 選手 108 名・役員 69 名 合計 177 名  
実施 21 競技中、11 競技に参加

		選手		役員	
		男子	女子	男子	女子
1	陸上	19	9	9	3
2	バドミントン	3	3	2	1
3	ビーチバレーボール	4		1	1
4	サイクリング	3	2	1	2
5	マウンテンバイク				
6	サッカー	20		6	
7	空手	4	1		1
8	水泳	5	4	2	1
9	卓球		3	2	2
10	テニス	4		3	
11	バレーボール (男子)	12		7	
	バレーボール (女子)		12	3	2
12	本部			9	11
	計	74	34	45	24

- 2 構成
- 1) 団 長 山根昭治 (一般財団法人全日本ろうあ連盟 スポーツ委員会委員長)
  - 2) 主 将 早瀬久美 (自転車競技)
  - 3) 旗 手 古島啓太 (サッカー男子)

- 3 派遣期間 2017年7月14日(金)成田発～8月1日(火)成田着  
※競技ごとに派遣日程が異なる。競技スケジュールに合わせて渡航。

- 4 公式行事等
- 1) 秋篠宮同妃両殿下ご接見 2017年6月28日(水)
  - 2) 壮行会・記者会見 2017年6月28日(水) 参議院議員会館
  - 3) 結団式 2017年7月18日(火) 選手村
  - 4) 開会式 2017年7月18日(火) 19 Mayis Football Stadium
  - 5) 解団式 2017年7月30日(日) 選手村
  - 6) 閉会式 2017年7月30日(日) Yasar Dogu Sports Hall
  - 7) 秋篠宮同妃両殿下ご接見 2017年8月31日(木)
  - 8) 帰国報告会・記者会見 2017年8月31日(木) 参議院議員会館
  - 9) その他 2017年8月30日(水) 日本障がい者スポーツ協会特別賞表彰式  
2017年12月5日(火) 文部科学大臣表彰式

## 日本選手団名簿

※年齢－2017年5月16日現在

通し	No	競技名	役職 (スタッフ/選手)	名前	ふりがな	性別	年齢	住所	所属団体	勤務先・学校名等
1	1	本部	団長	山根 昭治	やまね しょうじ	男	61	北海道旭川市	公益社団法人北海道ろうあ連盟	北海道旭川聾学校
2	2	本部	総監督	栗野 達人	あわの たつひと	男	60	東京都渋谷区	公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構東京都聴覚障害者連盟	
3	3	本部	総務	倉野 直紀	くらの なおき	男	44	三重県多気郡	一般社団法人三重県聴覚障害者協会	三重県聴覚障害者支援センター
4	4	本部	総務	川俣 郁美	かわまた いくみ	女	28	栃木県宇都宮市	一般社団法人栃木県聴覚障害者協会	ランスタッド株式会社
5	5	本部	手話通訳	長山 綾	ながやま あや	女	37	京都府京都市伏見区		社会福祉法人 京都聴覚言語障害者福祉協会京都府聴覚言語障害センター
6	6	本部	手話通訳	加藤 かおり	かとう かおり	女	45	大阪府大阪市住之江区		
7	7	本部	手話通訳	黒石 恵理子	くろいし えりこ	女	38	静岡県静岡市駿河区		駿河区役所駿河福祉事務所
8	8	本部	トルコ語通訳	KENAN KONNOLU	けなん こんのる	男	47	トルコ		FLEX TOURISM & TRAVEL AGENCY
9	9	本部	トルコ語通訳	江澤 登美	えざわ とみ	女	48	トルコ		FLEX TOURISM & TRAVEL AGENCY
10	10	本部	広報	古 隆喜	ふる たかよし	男	37	兵庫県尼崎市	公益社団法人兵庫県聴覚障害者協会	株式会社 村田製作所 野洲事業所
11	11	本部	事務局	岡安 澄子	おかやす すみこ	女	53	東京都練馬区		一般財団法人全日本ろうあ連盟
12	12	本部	事務局	加茂下 和子	かもした かずこ	女	45	東京都西東京市		一般財団法人全日本ろうあ連盟
13	13	本部	医師	立石 智彦	たていし ともひこ	男	49	神奈川県鎌倉市		社会福祉法人 同愛記念病院財団 同愛記念病院
14	14	本部	医師	松村 恵津子	まつむら えつこ	女	35	東京都文京区		東京医科歯科大学 附属病院 運動器外科
15	15	本部	医師	中村 香織	なかむら かおり	女	36	ドイツ		
16	16	本部	アスレティックトレーナー	平田 昂大	ひらた あきひろ	男	28	横浜市		慶應義塾大学ラグビー部
17	17	本部	アスレティックトレーナー	砂川 あゆ未	すながわ あゆみ	女	27	神奈川県川崎市幸区		ブライトスターズ
18	18	本部	看護師	鯨井 恵子	くじらい けいこ	女	57	埼玉県所沢市		国立障害者リハビリテーションセンター病院
19	19	本部	輸送	石澤 慧	こくざわ けい	男	34	東京都千代田区		近畿日本ツーリスト株式会社
20	20	本部	輸送	山崎 陽一	やまざき よういち	男	50	東京都千代田区		近畿日本ツーリスト株式会社
21	1	陸上	監督	三枝 隆行	さえぐさ たかゆき	男	48	兵庫県伊丹市	公益社団法人兵庫県聴覚障害者協会	株式会社 日興商会

通し	No	競技名	役職 (スタッフ/選手)	名前	ふりがな	性別	年齢	住所	所属団体	勤務先・学校名等
22	2	陸上	中・長距離マ ラソンコーチ	山田 真人	やまだ まさひと	男	51	福島県いわき市	一般社団法人福島 県聴覚障害者協会	株式会社タンガロ イ
23	3	陸上	跳躍コーチ	平井 勇気	ひらい ゆうき	男	38	神奈川県横浜市 保土ヶ谷区		株式会社チェース システムズ
24	4	陸上	跳躍コーチ	岡田 知彦	おかだ ともひこ	男	45	東京都立川市	公益社団法人東京聴覚 障害者総合支援機構東 京都聴覚障害者連盟	東芝デバイス&ス トレージ株式会社
25	5	陸上	短距離コーチ	水野 史生	みずの ふみお	男	33	東京都町田市	公益社団法人東京聴覚 障害者総合支援機構東 京都聴覚障害者連盟	ほけんの窓口グ ループ株式会社
26	6	陸上	トレーナー	大塚 健吾	おおつか けんご	男	32	静岡県駿東郡		EARTH GO
27	7	陸上	トレーナー	山岸 亮良	やまぎし あきら	男	42	神奈川県横浜市 港南区		Total BODY Design 山岸整骨院
28	8	陸上	投擲コーチ	鷲見 英治	すみ えいじ	男	53	愛媛県西予市		愛媛県立長浜高等 学校
29	9	陸上	国際手話通訳	宮本 一郎	みやもと いちろう	男	58	東京都八王子市	公益社団法人東京聴覚 障害者総合支援機構東 京都聴覚障害者連盟	
30	10	陸上	トレーナー	内海 優	うつみ ゆう	女	44	滋賀県大津市		滋賀県聴覚障害者 センター
31	11	陸上	スタッフ	正垣 亜矢子	まさがき あやこ	女	31	東京都大田区	公益社団法人東京聴覚 障害者総合支援機構東 京都聴覚障害者連盟	株式会社 gloops
32	12	陸上	スタッフ	三坂 香	みさか かほる	女	31	東京都練馬区		株式会社リレー ション
33	13	陸上	選手	湯上 剛輝	ゆがみ まさてる	男	24	愛知県豊田市	一般社団法人愛知 県聴覚障害者協会	トヨタ自動車株式 会社
34	14	陸上	選手	佐藤 賢太	さとう けんた	男	27	鹿児島県霧島市	一般社団法人鹿児島 県聴覚障害者協会	京セラ株式会社 鹿児島国分工場
35	15	陸上	選手	森光 佑矢	もりみつ ゆうや	男	21	石川県金沢市	社会福祉法人石川 県聴覚障害者協会	金沢星稜大学
36	16	陸上	選手	吉田 利幸	よしだ としゆき	男	29	神奈川県川崎市 中原区	神奈川県聴覚障害 者連盟	東芝情報システム 株式会社
37	17	陸上	選手	山田 真樹	やまだ まき	男	19	東京都文京区	公益社団法人東京聴覚 障害者総合支援機構東 京都聴覚障害者連盟	東京経済大学
38	18	陸上	選手	佐藤 麻梨乃	さとう まりの	女	21	神奈川県横須賀市	神奈川県聴覚障害 者連盟	横浜国立大学
39	19	陸上	選手	竹花 康太郎	たけはな こうたろう	男	30	神奈川県横浜市 南区	神奈川県聴覚障害 者連盟	横浜市立ろう特別 支援学校
40	20	陸上	選手	田井 小百合	たい さゆり	女	38	長崎県東彼杵郡	一般社団法人長崎 県ろうあ協会	SMBC 日興証券株 式会社
41	21	陸上	選手	村尾 茉優	むらお まゆ	女	21	徳島県阿波市	特定非営利活動法 人徳島県聴覚障害 者福祉協会	四国大学
42	22	陸上	選手	石田 考正	いしだ たかまさ	男	30	愛知県岡崎市	一般社団法人愛知 県聴覚障害者協会	EYアドバイザリー ・アンド・コンサル ティング株式会社
43	23	陸上	選手	山中 孝一郎	やまなか こういちろう	男	35	東京都町田市	公益社団法人東京聴覚 障害者総合支援機構東 京都聴覚障害者連盟	株式会社 日立製 作所
44	24	陸上	選手	佐々木 琢磨	ささき たくま	男	23	宮城県柴田郡	一般社団法人宮城 県聴覚障害者協会	仙台大学

通し	No	競技名	役職 (スタッフ/選手)	名前	ふりがな	性別	年齢	住所	所属団体	勤務先・学校名等
45	25	陸上	選手	前島 博之	まえじま ひろゆき	男	29	鳥取県鳥取市	公益社団法人鳥取県聴覚障害者協会	鳥取県立鳥取聾学校
46	26	陸上	選手	滝澤 佳奈子	たきざわ かなこ	女	17	神奈川県横浜市保土ヶ谷区	神奈川県聴覚障害者連盟(横浜市立ろう特別支援学校3年)	横浜市立ろう特別支援学校
47	27	陸上	選手	佐藤 将光	さとう まさみつ	男	36	愛媛県松山市	愛媛県聴覚障害者協会	
48	28	陸上	選手	嶋田 裕子	しまだ ゆうこ	女	45	大阪府堺市南区	公益社団法人大阪聴力障害者協会	ミズノ株式会社
49	29	陸上	選手	小松 彩香	こまつ あやか	女	24	神奈川県横須賀市	神奈川県聴覚障害者連盟	横須賀市立ろう学校
50	30	陸上	選手	高田 裕士	たかだ ゆうじ	男	32	東京都港区	公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構東京都聴覚障害者連盟	エイベックス・グループ・ホールディングス株式会社
51	31	陸上	選手	中村 晃大	なかむら こうだい	男	26	長野県北安曇郡	社会福祉法人長野県聴覚障害者協会	松川村役場
52	32	陸上	選手	谷岡 真帆	たにおか まほ	女	15	愛媛県松山市	愛媛県聴覚障害者協会(愛媛県立松山北高等学校1年)	愛媛県立松山北高等学校
53	33	陸上	選手	高橋 渚	たかはし なぎさ	女	28	静岡県沼津市	公益社団法人静岡県聴覚障害者協会	明電システムソリューション株式会社
54	34	陸上	選手	岡田 海緒	おかだ みお	女	19	東京都立川市	公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構東京都聴覚障害者連盟	日本女子体育大学
55	35	陸上	選手	長内 智	おさない さとし	男	26	千葉県佐倉市	社会福祉法人千葉県聴覚障害者協会	パンチ工業
56	36	陸上	選手	池田 ブライアン 雅貴	いけだ ぶらいあん まさき	男	20	神奈川県横浜市港北区	神奈川県聴覚障害者連盟	慶應義塾大学
57	37	陸上	選手	岡部 祐介	おかべ ゆうすけ	男	29	神奈川県横浜市神奈川区	神奈川県聴覚障害者連盟	ライフネット生命保険株式会社
58	38	陸上	選手	三枝 浩基	さえぐさ ひろき	男	26	神奈川県横浜市瀬谷区	神奈川県聴覚障害者連盟	エイベックス・グループ・ホールディングス株式会社
59	39	陸上	選手	設楽 明寿	したら あきひさ	男	22	茨城県つくば市	一般社団法人群馬県聴覚障害者連盟	筑波技術大学大学院
60	40	陸上	選手	中村 開知	なかむら かいち	男	20	鳥取県鳥取市	公益社団法人鳥取県聴覚障害者協会	
61	1	バドミントン	監督	中西 潤	なかにし じゅん	男	36	埼玉県熊谷市	一般社団法人埼玉県聴覚障害者協会	株式会社 日立ハイテクファインシステムズ
62	2	バドミントン	コーチ	井上 美緒	いのうえ みお	女	33	埼玉県越谷市	一般社団法人埼玉県聴覚障害者協会	花王ビジネスアシエ株式会社
63	3	バドミントン	アスレティックトレーナー	岡野 篤郎	おかの あつろう	男	26	東京都多摩市		帝京大学スポーツ医科学センター
64	4	バドミントン	選手	吉田 美香	よしだ みか	女	33	福岡県福岡市	社会福祉法人福岡県聴覚障害者協会	パナソニックシステムネットワークス株式会社
65	5	バドミントン	選手	品田 千紘	しなだ ちひろ	女	27	埼玉県朝霞市	一般社団法人埼玉県聴覚障害者協会	埼玉県立特別支援学校坂戸ろう学園
66	6	バドミントン	選手	長原 茉奈美	ながはら まなみ	女	23	北海道釧路市	公益社団法人北海道ろうあ連盟	北海道白糠養護学校
67	7	バドミントン	選手	柿内 康平	かきうち こうへい	男	32	鹿児島県鹿屋市	一般社団法人鹿児島県聴覚障害者協会	鹿児島県立鹿児島養護学校

通し	No	競技名	役職 (スタッフ/選手)	名前	ふりがな	性別	年齢	住所	所属団体	勤務先・学校名等
68	8	バドミントン	選手	太田 歩	おおた あゆむ	男	26	神奈川県川崎市 中原区	神奈川県聴覚障害 者連盟	株式会社 JAL サン ライト
69	9	バドミントン	選手	沼倉 昌明	ぬまくら まさあき	男	31	埼玉県朝霞市	一般社団法人埼玉 県聴覚障害者協会	さいたま市役所
70	1	ビーチバレー ボール	トレーナー	岩田 秀治	いわた ひではる	男	50	大阪府大阪市 淀川区		学校法人摺河学園 ハーベスト医療福 祉専門学校
71	2	ビーチバレー ボール	ゼネラル マネージャー	平井 望	ひらい のぞみ	女	33	茨城県つくば市	一般社団法人群馬 県聴覚障害者連盟	筑波技術大学大学 院 技術科学研究科
72	3	ビーチバレー ボール	選手	天羽 弘志	あもう ひろし	男	47	徳島県吉野川市	特定非営利活動法 人徳島県聴覚障害 者福祉協会	大塚製薬株式会社
73	4	ビーチバレー ボール	選手	瀬井 達也	せい たつや	男	34	東京都大田区	公益社団法人東京聴 覚障害者総合支援機構東 京都聴覚障害者連盟	国際石油開発帝石 株式会社
74	5	ビーチバレー ボール	選手	今井 勇太	いまい ゆうた	男	24	大阪府大阪市 城東区	公益社団法人大阪 聴力障害者協会	大正区役所
75	6	ビーチバレー ボール	選手	竹村 徳比古	たけむら のりひこ	男	33	神奈川県横浜市 金沢区	神奈川県聴覚障害 者連盟	ほけんの窓口グ ループ株式会社
76	1	自転車	監督	小笠原 崇裕	おがさわら たかひろ	男	36	東京都町田市		自転車競技選手
77	2	自転車	スポーツアロマ コンディショニ ングトレーナー	西川 昌子	にしかわ しょうこ	女	56	東京都杉並区		スポーツアロマ コンディショニン グセンター
78	3	自転車	手話通訳	田村 梢	たむら こずえ	女	39	神奈川県横浜市 中区		社会福祉法人神奈 川聴覚障害者総合 福祉協会
79	4	自転車	選手兼 スタッフ	早瀬 久美	はやせ くみ	女	42	神奈川県横浜市 西区	神奈川県聴覚障害 者連盟	昭和大学病院
80	5	自転車	選手	簗原 由加利	みのらはら ゆかり	女	34	東京都中野区	公益社団法人東京聴 覚障害者総合支援機構東 京都聴覚障害者連盟	株式会社ティーガイ ア (T-Gaia Corporation)
81	6	自転車	選手	早瀬 憲太郎	はやせ けんたろう	男	44	神奈川県横浜市 西区	神奈川県聴覚障害 者連盟	学習塾 早瀬道場
82	7	自転車	選手	箭内 秀平	やない しゅうへい	男	29	東京都北区	公益社団法人東京聴 覚障害者総合支援機構東 京都聴覚障害者連盟	東京都立大塚ろう 学校
83	8	自転車	選手	川野 健太	かわの けんた	男	26	東京都練馬区	公益社団法人東京聴 覚障害者総合支援機構東 京都聴覚障害者連盟	伊藤忠オリコ保 険サービス株式会社
84	1	サッカー	監督	中山 剛	なかやま つよし	男	41	兵庫県姫路市		特定非営利活動法 人 西播磨サッ カー協会
85	2	サッカー	コーチ	植松 隼人	うえまつ はやと	男	35	東京都品川区	公益社団法人東京聴 覚障害者総合支援機構東 京都聴覚障害者連盟	サインフットボ ールスタイル
86	3	サッカー	トレーナー	佐保 泰明	さほ やすあき	男	34	東京都		帝京大学
87	4	サッカー	スタッフ	鈴木 猛仁	すずき たけひと	男	36	茨城県那珂市	一般社団法人茨城 県聴覚障害者協会	日立製作所
88	5	サッカー	スタッフ	田口 昌弘	たぐち まさひろ	男	42	東京都江東区	公益社団法人東京聴 覚障害者総合支援機構東 京都聴覚障害者連盟	株式会社 ニチレイ
89	6	サッカー	スタッフ	野呂 啓	のろ けい	男	41	愛知県名古屋市 緑区	一般社団法人愛知 県聴覚障害者協会	株式会社 大林組
90	7	サッカー	選手	中島 正行	なかじま まさゆき	男	34	東京都大田区	公益社団法人東京聴 覚障害者総合支援機構東 京都聴覚障害者連盟	株式会社 SOU

通し	No	競技名	役職 (スタッフ/選手)	名前	ふりがな	性別	年齢	住所	所属団体	勤務先・学校名等
91	8	サッカー	選手	吉野 勇樹	よしの ゆうき	男	24	神奈川県川崎市 中原区	神奈川県聴覚障害者連盟	アクサ生命保険株式会社
92	9	サッカー	選手	岡田 侑也	おかだ ゆうや	男	20	神奈川県平塚市	神奈川県聴覚障害者連盟	東海大学
93	10	サッカー	選手	桐生 聖明	きりゆう きよあき	男	27	神奈川県大和市	神奈川県聴覚障害者連盟	東芝マイクロエレクトロニクス株式会社
94	11	サッカー	選手	竹内 裕樹	たけうち ひろき	男	26	東京都大田区	公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構東京都聴覚障害者連盟	日本空港テクノ株式会社
95	12	サッカー	選手	千葉 駿介	ちば しゅんすけ	男	28	東京都葛飾区	公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構東京都聴覚障害者連盟	富士ゼロックス株式会社
96	13	サッカー	選手	松元 卓巳	まつもと たくみ	男	27	福岡県福岡市東区	社会福祉法人福岡県聴覚障害者協会	あいおいニッセイ同和損害保険株式会社
97	14	サッカー	選手	河野 翔	こうの しょう	男	28	千葉県市川市	社会福祉法人千葉県聴覚障害者協会	富士通ネットワークソリューションズ株式会社
98	15	サッカー	選手	岡田 拓也	おかだ たくや	男	20	埼玉県川口市	一般社団法人埼玉県聴覚障害者協会	中央学院大学
99	16	サッカー	選手	塩田 知弘	しおた ともひろ	男	29	東京都中央区	公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構東京都聴覚障害者連盟	株式会社ファーストリテイリング
100	17	サッカー	選手	松本 弘	まつもと ひろし	男	31	東京都大田区	公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構東京都聴覚障害者連盟	あいおいニッセイ同和損害保険株式会社
101	18	サッカー	選手	古島 啓太	ふるしま けいた	男	26	大阪府守口市	公益社団法人大阪聴力障害者協会	シャープエンジニアリング株式会社
102	19	サッカー	選手	仲井 健人	なかい けんと	男	24	東京都板橋区	一般社団法人茨城県聴覚障害者協会	公益財団法人 日本サッカー協会
103	20	サッカー	選手	江島 由高	えじま よしたか	男	31	神奈川県横浜市 磯子区	神奈川県聴覚障害者連盟	東日本旅客鉄道株式会社
104	21	サッカー	選手	大西 諒	おおにし りょう	男	23	埼玉県八潮市	一般社団法人埼玉県聴覚障害者協会	ソフトバンク株式会社
105	22	サッカー	選手	山森 裕介	やまもり ゆうすけ	男	24	福井県鯖江市	福井県ろうあ協会	越前市役所
106	23	サッカー	選手	東海林 直広	しょうじ なおひろ	男	24	東京都足立区	公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構東京都聴覚障害者連盟	株式会社オークネット
107	24	サッカー	選手	林 滉大	はやし こうだい	男	20	埼玉県さいたま市 桜区	一般社団法人埼玉県聴覚障害者協会	亜細亜大学
108	25	サッカー	選手	伊丹 秀行	いたみ ひでたか	男	18	千葉県柏市	社会福祉法人千葉県聴覚障害者協会	学習院大学
109	26	サッカー	選手	西 大輔	にし だいすけ	男	18	大分県大分市	社会福祉法人大分県聴覚障害者協会	ソイテックスジャパン株式会社
110	1	空手	手話通訳	田口 雅子	たぐち まさこ	女	61	東京都渋谷区		
111	2	空手	選手	稲葉 考一	いなば こういち	男	52	東京都町田市	公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構東京都聴覚障害者連盟	東芝情報システム株式会社
112	3	空手	選手	新垣 愛花	あらかき あいか	女	23	沖縄県那覇市	一般社団法人沖縄県聴覚障害者協会	株式会社 御菓子御殿
113	4	空手	選手	北村 亀太	きたむら きゅうた	男	17	福岡県春日市	社会福祉法人福岡県聴覚障害者協会(福岡県立福岡高等聴覚特別支援学校3年)	福岡県立福岡高等聴覚特別支援学校

通し	No	競技名	役職 (スタッフ/選手)	名前	ふりがな	性別	年齢	住所	所属団体	勤務先・学校名等
114	5	空手	選手兼 スタッフ	坂口 健二	さかくち けんじ	男	49	沖縄県那覇市	一般社団法人沖縄 県聴覚障害者協会	
115	6	空手	選手兼 スタッフ	宮下 昭宣	みやした あきのぶ	男	50	埼玉県越谷市	一般社団法人埼玉 県聴覚障害者協会	SMBC 日興証券
116	1	水泳	監督	豊田 律	とよだ ただし	男	50	京都府京都市 伏見区	一般社団法人京都 府聴覚障害者協会	株式会社 村田製 作所
117	2	水泳	コーチ	鈴木 しのぶ	すずきしのぶ	女	51	静岡県焼津市		特定非営利活動法人 パシフィック・ドル フィン
118	3	水泳	トレーナー	佐藤 学	さとう まなぶ	男	44	東京都府中市		株式会社 MARKS
119	4	水泳	選手	金持 義和	かなじ よしかず	男	23	大阪府堺市西区	公益社団法人大阪 聴力障害者協会	エイベックス・グ ループ・ホールディ ングス株式会社
120	5	水泳	選手	茨 隆太郎	いばり りゅうたろう	男	23	神奈川県秦野市	公益社団法人東京聴覚 障害者総合支援機構東 京都聴覚障害者連盟	東海大学大学院
121	6	水泳	選手	藤原 慧	ふじはら さとい	男	21	東京都目黒区	公益社団法人東京聴覚 障害者総合支援機構東 京都聴覚障害者連盟	日本大学
122	7	水泳	選手	津田 悠太	つだ ゆうた	男	16	静岡県御殿場市	公益社団法人静岡県 聴覚障害者協会 (飛 龍高等学校 1年)	飛龍高等学校
123	8	水泳	選手	星 泰雅	ほし たいが	男	18	宮城県塩釜市	一般社団法人宮城 県聴覚障害者協会	仙台大学
124	9	水泳	選手	藤川 彩夏	ふじかわ あやか	女	21	東京都国立市	社会福祉法人長野 県聴覚障害者協会	東京女子体育大学
125	10	水泳	選手	久保 南	くぼ みなみ	女	20	愛知県豊田市	一般社団法人愛知 県聴覚障害者協会	東海学園大学
126	11	水泳	選手	齋藤 京香	さいとう きょうか	女	16	山形県酒田市	一般社団法人山形県聴 覚障害者協会 (山形県立 酒田光陵高等学校 2年)	山形県立酒田光陵 高等学校
127	12	水泳	選手	中東 郁葉	なかひがし いくは	女	15	長野県松本市	社会福祉法人長野県 聴覚障害者協会 (松 商学園高等学校 1年)	松商学園高等学校
128	1	卓球	卓球団長	大平 静也	おおだいら しずや	男	58	新潟県長岡市	一般社団法人新潟 県聴覚障害者協会	日本精機株式会社
129	2	卓球	監督	須藤 聡美	すどう さとみ	女	40	埼玉県八潮市		S クラブ
130	3	卓球	コーチ	大倉 峰雄	おおくら みねお	男	56	宮城県仙台市 青葉区		東北福祉大学
131	4	卓球	手話通訳	井出 敬子	いで けいこ	女	54	神奈川県相模原市 中央区		障害者スポーツ文化セ ンター横浜ラポール
132	5	卓球	選手	亀澤 理穂	かめざわ りほ	女	26	東京都中野区	公益社団法人東京聴覚 障害者総合支援機構東 京都聴覚障害者連盟	花王株式会社
133	6	卓球	選手	川崎 瑞恵	かわさき みずえ	女	21	東京都小平市	公益社団法人東京聴覚 障害者総合支援機構東 京都聴覚障害者連盟	大正大学
134	7	卓球	選手	高岡 里吏	たかおか りさと	女	24	東京都江戸川区	公益社団法人東京聴覚 障害者総合支援機構東 京都聴覚障害者連盟	アクサ生命保険株 式会社
135	1	テニス	監督	齋藤 一茂	さいとう かずしげ	男	40	静岡県袋井市	公益社団法人静岡 県聴覚障害者協会	NSK ワーナー株式 会社
136	2	テニス	アスレティック トレーナー	佐野村 学	さのむら まなぶ	男	47	東京都日野市		帝京大学

通し	No	競技名	役職 (スタッフ/選手)	名前	ふりがな	性別	年齢	住所	所属団体	勤務先・学校名等
137	3	テニス	チーム ドクター	笹島 浩泰	ささじま ひろやす	男	57	京都府京都市 左京区		京都府立医科大学
138	4	テニス	選手	梶下 怜紀	かじした れいき	男	23	広島県広島市 安佐南区	一般社団法人広島 県ろうあ連盟	マツダ株式会社
139	5	テニス	選手	親松 直人	おやまつ なおと	男	24	埼玉県熊谷市	一般社団法人埼玉 県聴覚障害者協会	ブリヂストンスポ ーツアリーナ株式会 社 テニスハウス浦和
140	6	テニス	選手	松下 哲也	まつした てつや	男	43	大阪府貝塚市	公益社団法人大阪 聴力障害者協会	株式会社富士通工 フサス
141	7	テニス	選手	笹島 航太	ささじま こおた	男	19	京都府京都市 左京区	一般社団法人京都 府聴覚障害者協会	京都産業大学
142	1	バレーボール (男子)	監督	鹿谷 明生	しかたに あきお	男	51	大阪府大阪市 大正区		NBK dreamers
143	2	バレーボール (男子)	マネージャー	中野 智久	なかの ともひさ	男	31	奈良県奈良市	一般社団法人奈良 県聴覚障害者協会	大阪府立生野聴覚 支援学校
144	3	バレーボール (男子)	手話通訳	平 英司	たいら えいじ	男	41	兵庫県宝塚市		関西学院大学
145	4	バレーボール (男子)	コーチ	海野 洋馬	うんの ようま	男	29	静岡県静岡市葵区		BREZZA
146	5	バレーボール (男子)	トレーナー	中村 裕斗	なかむら ゆうと	男	26	兵庫県神戸市 垂水区		HPH 訪問鍼灸リハ ビリマッサージ
147	6	バレーボール (男子)	コーチ(分析)	逸見 尚史	へんみ ひさし	男	48	埼玉県越谷市		埼玉県立三郷工業 技術高等学校
148	7	バレーボール (男子)	コーチ(戦術)	山下 博史	やました ひろし	男	37	京都府京田辺市		東大阪市教育委員 会
149	8	バレーボール (男子)	選手	加賀 辰樹	かが たつき	男	24	兵庫県西宮市	公益社団法人兵庫 県聴覚障害者協会	大和ハウス工業株 式会社
150	9	バレーボール (男子)	選手	加賀 充	かが みつる	男	26	新潟県新潟市東区	一般社団法人新潟 県聴覚障害者協会	新潟県立新潟聾学 校
151	10	バレーボール (男子)	選手	狩野 拓也	かのう たくや	男	24	広島県三原市	一般社団法人広島 県ろうあ連盟	興生総合病院
152	11	バレーボール (男子)	選手	若原 正享	わかはら まさゆき	男	34	栃木県宇都宮市	一般社団法人栃木 県聴覚障害者協会	栃木県会計局会計 管理課
153	12	バレーボール (男子)	選手	坂下 真一	さかした しんいち	男	18	大阪府大阪市 阿倍野区	公益社団法人大阪 聴力障害者協会	大阪府立中央聴覚 支援学校
154	13	バレーボール (男子)	選手	高橋 竜一	たかはし りゅういち	男	29	愛知県高浜市	一般社団法人愛知 県聴覚障害者協会	株式会社豊田自動 織機
155	14	バレーボール (男子)	選手	吉田 翔	よしだ しょう	男	32	佐賀県佐賀市	一般社団法人佐賀 県聴覚障害者協会	NHO 佐賀病院
156	15	バレーボール (男子)	選手	成木 俊介	なるき しゅんすけ	男	27	愛知県高浜市	一般社団法人愛知 県聴覚障害者協会	株式会社 豊田自 動織機
157	16	バレーボール (男子)	選手	信田 光宣	のぶた みつのぶ	男	46	兵庫県神戸市西 区	公益社団法人大阪 県聴覚障害者協会	株式会社 日立イ ンスファーマ
158	17	バレーボール (男子)	選手	田底 佳樹	たぞこ よしき	男	18	鹿児島県霧島市	一般社団法人鹿児 島県聴覚障害者協 会	京セラ株式会社 鹿児島国分工場
159	18	バレーボール (男子)	選手	秋元 翔馬	あきもと しょうま	男	17	愛知県岡崎市	一般社団法人愛知 県聴覚障害者協会 (愛知県 立名古屋聾学校3年)	愛知県立名古屋ろ う学校

通し	No	競技名	役職 (スタッフ/選手)	名前	ふりがな	性別	年齢	住所	所属団体	勤務先・学校名等
160	19	バレーボール (男子)	選手	千原 浩平	ちはら こうへい	男	15	静岡県静岡市葵区	公益社団法人静岡県聴覚障害者協会(静岡県立沼津聴覚特別支援学校1年)	静岡県立沼津聴覚特別支援学校
161	1	バレーボール (女子)	監督	狩野 美雪	かのう みゆき	女	39	東京都三鷹市		JDVA
162	2	バレーボール (女子)	ヘッドコーチ	村井 貴行	むらい たかゆき	男	33	千葉県船橋市		JDVA
163	3	バレーボール (女子)	トレーナー	中川 菜保	なかがわ なほ	女	40	愛知県名古屋市千種区		
164	4	バレーボール (女子)	手話通訳	岡田 直樹	おかだ なおき	男	35	横浜市港北区		JDVA
165	5	バレーボール (女子)	ゼネラル マネージャー	大川 裕二	おおかわ ゆうじ	男	50	東京都大田区	公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構東京都聴覚障害者連盟	公益財団法人 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会
166	6	バレーボール (女子)	選手	尾塚 愛実	おづか あいみ	女	19	鹿児島県阿久根市	一般社団法人鹿児島県聴覚障害者協会	京セラ株式会社 鹿児島川内工場
167	7	バレーボール (女子)	選手	高良 美樹	たから みき	女	26	沖縄県豊見城市	一般社団法人沖縄県聴覚障害者協会	株式会社沖電工
168	8	バレーボール (女子)	選手	三浦 早苗	みうら さなえ	女	31	神奈川県大和市	神奈川県聴覚障害者連盟	ほけんの窓口グループ株式会社
169	9	バレーボール (女子)	選手	村木 玲奈	むらさ れな	女	20	千葉県千葉市中央区	社会福祉法人千葉県聴覚障害者協会	淑徳大学
170	10	バレーボール (女子)	選手	前島 奈美	まえじま なみ	女	28	鳥取県鳥取市	公益社団法人鳥取県聴覚障害者協会	
171	11	バレーボール (女子)	選手	畠 奈々子	はた ななこ	女	25	大阪府吹田市	公益社団法人兵庫県聴覚障害者協会	田辺三菱製薬株式会社
172	12	バレーボール (女子)	選手	中田 美緒	なかた みお	女	16	神奈川県三浦郡	神奈川県聴覚障害者連盟(神奈川県立平塚ろう学校2年)	神奈川県立平塚ろう学校
173	13	バレーボール (女子)	選手	宇賀耶 早紀	うがや さき	女	26	大阪府大阪市城東区	公益社団法人大阪聴力障害者協会	富士ゼロックス株式会社
174	14	バレーボール (女子)	選手	長谷山 優美	はせやま ゆうみ	女	16	神奈川県茅ヶ崎市	神奈川県聴覚障害者連盟(神奈川県立平塚ろう学校2年)	神奈川県立平塚ろう学校
175	15	バレーボール (女子)	選手	安積 梨絵	あづみ りえ	女	25	兵庫県姫路市	公益社団法人兵庫県聴覚障害者協会	
176	16	バレーボール (女子)	選手	平岡 早百合	ひらおか さゆり	女	18	埼玉県児玉郡	一般社団法人埼玉県聴覚障害者協会(正智深谷高等学校3年)	学校法人智香寺学園 正智深谷高等学校
177	17	バレーボール (女子)	選手	山崎 望	やまさき のぞみ	女	32	高知県室戸市	一般社団法人高知県聴覚障害者協会	有限会社仙頭車輛

# 成績一覽



## サムスン 2017 デフリンピック日本代表選手メダル獲得数

メダル	氏 名	種 目	
金メダル	尾塚愛実 高良美樹 三浦早苗 村木玲奈 前島奈美 畠奈々子 中田美緒 宇賀耶早紀 長谷山優美 安積梨絵 平岡早百合 山崎 望	バレーボール	女子
	山田真樹	陸上競技	男子 200m
	山田真樹 三枝浩基 設楽明寿 佐々木琢磨	陸上競技	男子 4 × 100m リレー
	藤原 慧	水泳	男子 400m 自由形
	藤原 慧	水泳	男子 1500m 自由形
藤原 慧	水泳	男子 400m 個人メドレー	
銀メダル	山田真樹	陸上競技	男子 400m
	湯上剛輝	陸上競技	男子円盤投げ
	藤原 慧	水泳	男子 200m バタフライ
	藤原 慧	水泳	男子 200m 自由形
	金持義和	水泳	男子 100m 背泳
	金持義和	水泳	男子 200m 背泳
	茨隆太郎	水泳	男子 200m 個人メドレー
	藤原 慧 金持義和 茨隆太郎 津田悠太	水泳	男子 4 × 200m 自由形リレー
	藤原 慧 金持義和 茨隆太郎 津田悠太	水泳	男子 4 × 100m メドレーリレー
銅メダル	滝澤佳奈子	陸上競技	女子棒高跳び
	石田考正	陸上競技	男子ハンマー投げ
	長原菜奈美	バドミントン	女子シングルス
	早瀬久美	自転車 (マウンテンバイク)	女子クロスカントリー・オリンピック
	亀澤理穂 川崎瑞恵	卓球	女子ダブルス
	亀澤理穂 川崎瑞恵 高岡里吏	卓球	女子団体
	蓑原由加利	自転車 (ロード)	女子 35km 個人タイムトライアル
	藤原 慧	水泳	男子 200m 個人メドレー
	金持義和	水泳	男子 50m 背泳
	茨隆太郎	水泳	男子 400m 個人メドレー
	藤原 慧 金持義和 茨隆太郎 津田悠太	水泳	男子 4 × 100m 自由形リレー
	金持義和 茨隆太郎 藤川彩夏 久保 南	水泳	混合 4 × 100m メドレーリレー

獲得メダル数	金メダル	6
	銀メダル	9
	銅メダル	12
	合計	27

## 国別メダル獲得ランキング

順位	国名	金	銀	銅	計
1	ロシア	85	53	61	199
2	ウクライナ	21	42	36	99
3	韓国	18	20	14	52
4	トルコ	17	7	22	46
5	中国	14	9	11	34
<b>6</b>	<b>日本 </b>	<b>6</b>	<b>9</b>	<b>12</b>	<b>27</b>
7	イラン	5	9	20	34
8	ヴェネズエラ	5	5	8	18
9	ケニア	5	5	6	16
10	アメリカ	5	3	8	16
11	ペラルーシ	4	9	3	16
12	台湾	4	5	8	17
13	ドイツ	4	5	3	12
14	イギリス	3	1	5	9
15	スロバキア	2	2	2	6
16	ギリシャ	2	1	2	5
17	キューバ	2	1	0	3
18	チェコ	2	0	2	4
19	タイ	2	0	0	2
20	リトアニア	1	5	7	13
21	イタリア	1	3	8	12
22	ポーランド	1	3	7	11
23	クロアチア	1	3	2	6
24	フランス	1	2	6	9
25	カザフスタン	1	1	5	7
26	インド	1	1	3	5
27	スイス	1	1	0	2
28	ブラジル	1	0	4	5
29	ノルウェー	1	0	1	2
30	シンガポール	1	0	1	2
31	ラトビア	1	0	0	1
32	メキシコ	1	0	0	1
33	モンゴル	0	4	5	9
34	ジョージア	0	2	1	3
35	南アフリカ	0	2	0	2
36	アルメニア	0	1	4	5
37	インドネシア	0	1	1	2
38	ポルトガル	0	1	1	2
39	エクアドル	0	1	0	1
40	マレーシア	0	1	0	1
41	スウェーデン	0	1	0	1
42	キルギス	0	0	4	4
43	ブルガリア	0	0	3	3
44	オーストリア	0	0	1	1
45	エジプト	0	0	1	1
46	エストニア	0	0	1	1
47	フィンランド	0	0	1	1
48	ハンガリー	0	0	1	1
49	イスラエル	0	0	1	1
50	オランダ	0	0	1	1
51	スペイン	0	0	1	1
	<b>合 計</b>	<b>219</b>	<b>219</b>	<b>294</b>	<b>732</b>

サムスン 2017 デフリンピック日本選手団 各競技別成績一覧

【陸上 男子】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	順位(位/人)	記録	POINT	風力	成績
佐々木 琢磨	男子 100m	64	予選	4	1/7	11.43		-2.1	7位 / 入賞
		24	準決勝	2	4/8	11.13		+0.9	
		8	決勝	—	7/8	11.30		-0.9	
山田 真樹	男子 200m	61	予選	9	1/7	22.75		-0.7	金メダル
		24	準決勝	1	1/8	22.46		-1.0	
		8	決勝	—	1/8	22.30		-3.1	
	男子 400m	43	予選	6	1/7	49.93			銀メダル
		24	準決勝	2	1/8	49.50			
		8	決勝	—	2/8	48.10			
長内 智	男子 400m	44	予選	3	2/4	52.47			準決勝敗退
		24	準決勝	1	7/8	52.22			
森光 佑矢	男子 800m	24	予選	2	1/6	1:59.64			失格
		16	準決勝	1	2/8	1:54.56			
		8	決勝	—	—	—			
	男子 1500m	21	準決勝	1	3/10	4:09.28			7位 / 入賞
		12	決勝	—	7/12	3:55.85			
山中 孝一郎	男子 5000m	13	決勝	—	11/13	18:21.31			11位
	男子 10000m	13	決勝	—	5/13	33:28.75			5位 / 入賞
	男子 マラソン	27	決勝	—	4/27	2:38:43			4位 / 入賞
高田 裕士	男子 400m ハードル	12	準決勝	1	4/6	57.89			8位 / 入賞
		8	決勝	—	8/8	59.68			
前島 博之	男子 走り高跳び	9	決勝	—	5/9	1m90			5位 / 入賞
竹花 康太郎	男子 棒高跳び	7	決勝	—	4/7	4m50			4位 / 入賞
中村 晃大	男子 三段飛び	11	決勝	—	7/11	13m62			7位 / 入賞
湯上 剛輝	男子 円盤投げ	16	予選	A	1/8	54m53			銀メダル
		12	決勝	—	2/12	55m58			
石田 考正	男子 ハンマー投げ	10	決勝	—	3/10	53m40			銅メダル
佐藤 将光	男子 槍投げ	16	予選	—	7/16	58m14			8位 / 入賞
		12	決勝	—	8/12	59m51			
佐藤 賢太	男子 槍投げ	16	予選	—	4/16	60m03			4位 / 入賞
		12	決勝	—	4/12	63m72			
前島 博之	男子 十種競技 総合	6	決勝	—	4/6	5027			4位
	(十種競技 100m)	6	決勝	—	3/6	12.12	628		(3位)
	(十種競技 走り幅跳び)	5	決勝	—	3/5	6m17	624		(3位)
	(十種競技 砲丸投げ)	5	決勝	—	5/5	9m72	469		(5位)
	(十種競技 走り高跳び)	5	決勝	—	2/5	1m82	644		(2位)
	(十種競技 400m)	5	決勝	—	3/5	55.62	574		(3位)
	(十種競技 110mハードル)	5	決勝	—	4/5	18.61	467		(4位)
	(十種競技 円盤投げ)	5	決勝	—	5/5	25m85	383		(5位)
	(十種競技 棒高跳び)	5	決勝	—	4/5	3m	357		(4位)
	(十種競技 やり投げ)	5	決勝	—	5/5	40m88	455		(5位)
(十種競技 1500m)	5	決勝	—	3/5	5:24.59	426		(3位)	
吉田 利幸	男子 マラソン	27	決勝	—	9/27	2:50:02			9位
(予)三枝・中村開知・設楽・佐々木 (決)三枝・山田・設楽・佐々木	男子 4x100m リレー	16	準決勝	3	1/5	43.97			金メダル
		8	決勝	1	1/8	41.66			
(予)池田・岡部・森光・長内智 (決)池田・岡部・森光・山田	男子 4x400m リレー	14	準決勝	1	3/5	3:24.57			5位 / 入賞
		8	決勝	—	5/8	3:19.29			

【陸上 女子】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	順位(位/人)	記録	POINT	風力	成績
小松 彩香	女子 100m	31	予選	4	1/6	13.00		-3.1	4位 / 入賞
		24	準決勝	2	1/8	12.55		+0.3	
		8	決勝	—	4/8	12.68		-1.9	
	女子 400m ハードル	8	決勝	—	5/8	1:03.67			5位
岡田 海緒	女子 800m	10	予選	1	4/5	2:19.94			6位 / 入賞
		10	決勝	—	6/8	2:22.35			
	女子 1500m	10	決勝	—	7/10	4:50.25			7位 / 入賞
田井 小百合	女子 100m ハードル	7	決勝	—	7/7	16.92			7位
滝澤 佳奈子	女子 棒高跳び	5	決勝	—	3/5	2m55			銅メダル
佐藤 麻梨乃	女子 棒高跳び	5	決勝	—	—	—			記録なし
谷岡 真帆	女子 走り幅跳び	13	決勝	—	10/13	4m88			10位
村尾 茉優	女子 ハンマー投げ	9	決勝	—	5/9	48m94			5位
高橋 渚	女子 槍投げ	8	決勝	—	5/8	37m67			6位
嶋田 裕子	女子 マラソン	12	決勝	—	6/12	3:35:48			6位

## 【バドミントン 男子】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	勝敗	対戦相手 (選手名・国)	マッチ	セットポイント					予選成績			成績		
								1	2	3	4	5	順位	勝	負			
柿内 康平	男子 シングルス	63	予選リーグ	3	勝	MOHSENPOUR Masood ZAHID Saqib Ali	イラン パキスタン	2-0	21-5 21-4	21-18 21-7					1/3	2	0	ベスト16
		42	決勝トーナメント	—	勝	SHARMA A.	インド	2-0	21-19	21-17								
沼倉 昌明	男子 シングルス	63	予選リーグ	3	勝	TANG Kaifeng	中国	0-2	16-21	10-21					2/3	1	1	決勝トーナ メント進出
		42	決勝トーナメント	—	負	SANTOS Daniel de Re DING Yibo	ブラジル 中国	2-0	21-10	21-7								
太田 歩	男子 シングルス	63	予選リーグ	3	負	URAL Baris mehmet	トルコ	1-2	20-22	21-15	15-21				2/3	1	1	決勝トーナ メント進出
		42	決勝トーナメント	—	負	WITTE Oliver HUANG Cheng-J	ドイツ 台湾	0-2	6-21	8-21								
柿内・沼倉	男子 ダブルス	27	予選リーグ	3	勝	SHARMA Abhinav	インド	0-2	8-21	17-21					2/3	1	1	ベスト16
		18	決勝トーナメント	—	負	LE BLANC S./ROUBIRA SEO M./SHIN H.	フランス 韓国	2-1	21-19	17-21	21-15							

## 【バドミントン 女子】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	勝敗	対戦相手 (選手名・国)	マッチ	セットポイント					予選成績			成績		
								1	2	3	4	5	順位	勝	負			
吉田 美香	女子 シングルス	40	予選リーグ	3	勝	KOLITSOVA Gabriela	ブルガリア	2-0	21-11	21-11					2/3	1	1	予選通過
		26	決勝トーナメント	26	負	FAN Jung-Yu	台湾	0-2	7-21	10-21								
品田 千紘	女子 シングルス	40	予選リーグ	3	勝	DE OLIVEIRA Geisa V DORMIDONTOVA Olga	ブラジル ロシア	2-0	21-1	21-3					2/3	1	1	予選通過
		26	決勝トーナメント	26	負	BOON Wei Ying	マレーシア	0-2	5-21	18-21								
長原茉奈美	女子 シングルス	40	予選リーグ	3	勝	HOROBETS Ivanna	ウクライナ	2-0	21-9	21-13					2/3	1	1	予選通過
		26	決勝トーナメント	26	勝	NEUDOLT Katrin	オーストリア	0-2	12-21	15-21								
		26	準決勝	4	負	ZYMANTAITE Vaiva	リトアニア	2-0	21-9	21-8								
		2	3位決定戦	2	勝	HUBANOVA Bohdana	ウクライナ	2-0	21-8	21-8								
吉田・品田	女子 ダブルス	19	予選リーグ	3	勝	SOBOLEVA Alena Igor	ロシア	2-0	21-14	21-6					1/3	2	0	予選通過
		12	決勝トーナメント	26	勝	BOON Wei Ying	マレーシア	3-0	9-21	21-9	21-19							
		2	3位決定戦	2	勝	JEONG Seonhwa	韓国	1-2	11-21	21-16	14-21							銅メダル
		2	3位決定戦	2	勝	WANG Meng Xing	中国	2-1	9-21	21-11	21-17							

## 【バドミントン 混合・団体】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	勝敗	対戦相手 (選手名・国)	マッチ	セットポイント					予選成績			成績		
								1	2	3	4	5	順位	勝	負			
柿内・吉田	混合 ダブルス	38	予選リーグ	3	負	DOVYDAITIS T./ZYMANT	リトアニア	1-2	21-13	19-21	17-21				2/3	1	1	予選通過
		24	決勝トーナメント	24	勝	HUANG C./TU W.	台湾	2-1	17-21	21-11	21-17							
沼倉・品田	混合 ダブルス	38	予選リーグ	3	負	WOO J./LEE S.	韓国	1-2	21-15	21-14	21-17				2/3	1	1	予選通過
		24	決勝トーナメント	24	勝	GULOMZODA S./SHTAYGE	ロシア	0-2	13-21	9-21								
太田・長原	混合 ダブルス	38	予選リーグ	4	勝	TAKALO P./CHORNA A.	ウクライナ	2-1	14-21	21-11	22-20				2/4	2	1	予選通過
		24	決勝トーナメント	24	勝	WEN Y./WANG M.	中国	2-1	25-23	12-21	21-19							
団体戦		12	予選リーグ	3	勝	ANTONOV V./DORMIDONTO	ロシア	2-0	27-25	21-18					2/3	1	1	予選通過
		8	決勝トーナメント	8	負	FRANCIS TAN H./BOON W	マレーシア	0-2	16-21	23-25								

### ■最終結果

順位	国名	順位	国名
1	中国	5	ウクライナ
2	ロシア	5	日本
3	台湾	5	トルコ
4	韓国	5	インド

## 【ビーチバレーボール 男子】

選手名	ラウンド	対戦相手		勝敗	マッチ	セットポイント			予選成績			成績
		選手名	国			1	2	3	順位	勝	負	
竹村 徳比古 天羽 弘志	予選リーグ B グループ	ORZEL/CZAPLICKI	ポーランド2	負	0-2	16-21	19-21		4	1	3	
		METIN/CIFTCI	トルコ2	勝	2-0	21-15	21-8					
		KIRILLOV/AFANASYEV	ロシア2	負	0-2	15-21	6-21					
		DRABENOK/LITVINKA	ベラルーシ	負	0-2	10-21	13-21					
	敗者復活戦	OKATAN/TEKIN	トルコ1	負	0-2	17-21	18-21					
今井 勇太 瀬井 達也	予選リーグ D グループ	KONE/AWOTINE	ガーナ	不戦勝	2-0	21-0	21-0		2	3	1	ベスト16
		ZIDEK/BOCEK	チェコ	負	1-2	18-21	21-17	10-15				
		SEGOVIANO Valdivia/FLORES	メキシコ	勝	2-0	21-17	21-13					
		KARALIS/KOUREMENOS	ギリシャ	勝	2-0	21-14	21-15					
	決勝トーナメント	SUDY/PAEHLER	ドイツ	負	1-2	24-22	18-21	7-15				

## 【自転車 ロード】

選手名	種目	出場数	順位(位 / 人)	記録	成績
早瀬 憲太郎	男子 1000m スプリント	40	6/40	13.69	6位入賞
	男子 50km 個人タイムトライアル	42	10/42	1:15:38.8	10位
	男子 100km 個人ロードレース	50	20/50	2:36:21	20位
	男子 50km ポイントレース	46	11/46	3	11位
川野 健太	男子 1000m スプリント	40	18/40	14.33	18位
	男子 50km 個人タイムトライアル	42	37/42	1:24:57.7	37位
	男子 100km 個人ロードレース	50	39/50	2:45:55	39位
	男子 50km ポイントレース	46	18/46	-16	18位
早瀬 久美	女子 1000m スプリント	15	10/15	17.03	10位
	女子 35km 個人タイムトライアル	14	11/14	55:15.2	11位
	女子 70km 個人ロードレース	19	5/19	2:21:04	5位入賞
	女子 40km ポイントレース	18	8/18	3	8位入賞
養原 由加利	女子 1000m スプリント	15	12/15	17.72	12位
	女子 35km 個人タイムトライアル	14	3/14	49:54.1	銅メダル
	女子 70km 個人ロードレース	19	7/19	2:21:10	7位入賞
	女子 40km ポイントレース	18	7/18	9	7位入賞

## 【自転車 マウンテンバイク】

選手名	種目	出場数	順位(位 / 人)	記録	成績
箭内 秀平	男子 クロスカントリー・オリンピック	32	6/32	1:14:23	6位入賞
早瀬 久美	女子 クロスカントリー・オリンピック	8	3/8	1:07:30	銅メダル

## 【サッカー 男子】

プログラム	対戦国	勝敗	スコア	P K	成績
First Round	ウクライナ	勝	2-1		勝点4 1勝1敗1分 *得失点差
	アルゼンチン	引	2-2		
	イタリア	負	2-3		

### ■最終結果

順位	国名	順位	国名	順位	国名
1	トルコ	6	イギリス	9	サウジアラビア
2	ウクライナ	7	ロシア	9	韓国
3	エジプト	8	イラン	9	ベネズエラ
4	イタリア	9	日本	9	フランス
5	ドイツ	9	アルゼンチン	9	ナイジェリア
				9	ブラジル

## 【空手 女子】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	勝敗	対戦相手		マッチ	成績
						(選手名・国)			
新垣 愛花	女子 形	15	1回戦	15	負	MARCANO CABEZA	ベネズエラ	1-4	5位
		4	敗者復活戦	4	勝	ISIK Kader	トルコ	5-0	
					負	MAZHARA Inna	ウクライナ	1-4	

## 【空手 男子】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	勝敗	対戦相手		マッチ	成績
						(選手名・国)			
北村 亀太	男子 形	25	1回戦	25	勝	/		不戦勝	7位
		15	2回戦	15	勝	MOUTSOKOS Nikolaos	ギリシャ	5-0	
		8	準々決勝	8	負	PHANTIB Phongsathat	タイ	1-4	
			敗者復活戦		負	DI GUIDO Daniele	イタリア	0-5	
宮下 昭宣	男子 形	25	1回戦	25	勝	KALINYK Oleksandr	ウクライナ	1-4	1回戦敗退
稲葉 考一	男子 組手 -60kg	9	1回戦	9	勝	/		不戦勝	9位
		8	2回戦	8	負	KOLYAN Tigran	ロシア	0-10	
			敗者復活戦		負	KAO Wen-Fu	台湾	0-3	
坂口 健二	男子 組手 +84kg	9	1回戦	9	勝	/		不戦勝	7位
		8	2回戦	8	負	TETYUSHKIN Mikhailovich	ロシア	0-8	
			敗者復活戦		負	KULA Osman	トルコ	0-1	
北村・宮下・稲葉	男子 形 団体	8	1回戦	8	負	CHIU Yi-Hao / KAO Wen-Fu LU Ching-Feng	台湾	0-5	1回戦敗退
北村・宮下・稲葉・坂口	男子 組手 団体	8	1回戦	8	負	AKBULUT Fatih / TIRYAKI Burak ATAS Abdullah / TASKULAK Yucel GENC Oguzhan	トルコ	0-2	1回戦敗退

## 【水泳 男子】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	順位(位/人)	記録	成績
藤原 慧	男子 50m 自由形	51	予選	6	12/51	0:25:20	15 位
			順決勝	1	15/16	0:25:74	
	男子 100m 自由形	49	予選	6	6/49	0:53:83	4 位
			決勝	—	4/8	0:53:08	
	男子 200m 自由形	39	予選	5	2/39	1:55:39	銀メダル
			決勝	—	2/8	1:52:82	
	男子 400m 自由形	24	予選	3	1/24	4:05:13	金メダル
			決勝	—	1/8	3:57:90	
男子 1500m 自由形	17	予選	3	1/17	16:12:33	金メダル	
		決勝	—	1/8	15:37:64		
男子 200m バタフライ	23	予選	2	3/23	2:10:50	銀メダル	
		決勝	—	2/8	2:05:59		
男子 200m 個人メドレー	29	予選	4	6/29	2:15:74	銅メダル	
		決勝	—	3/8	2:08:08		
男子 400m 個人メドレー	15	予選	2	3/15	4:42:45	金メダル	
		決勝	—	1/8	4:28:49		
茨 隆太郎	男子 200m 背泳	21	予選	1	4/21	2:12:82	4 位 / 入賞
			決勝	—	4/8	2:09:76	
	男子 50m バタフライ	50	予選	7	6/50	0:26:46	5 位 / 入賞
			決勝	—	5/8	0:25:93	
男子 200m 個人メドレー	29	予選	2	1/29	2:11:50	銀メダル	
		決勝	—	2/8	2:05:71		
男子 400m 個人メドレー	15	予選	2	2/15	4:41:64	銅メダル	
		決勝	—	3/8	4:31:67		
金持 義和	男子 50m 背泳	32	予選	4	3/32	0:27:91	銅メダル
			決勝	—	3/8	0:27:29	
	男子 100m 背泳	29	予選	3	3/29	0:59:75	銀メダル
決勝			—	2/8	0:57:87		
男子 200m 背泳	21	予選	2	2/21	2:10:50	銀メダル	
		決勝	—	2/8	2:07:77		
津田 悠太	男子 1500m 自由形	17	予選	3	4/17	16:49:26	7 位 / 入賞
			決勝	—	7/8	17:02:56	
	男子 200m バタフライ	23	予選	1	6/23	2:12:18	7 位 / 入賞
決勝			—	7/8	2:11:48		
星 泰雅	男子 50m 自由形	51	予選	4	36/51	0:26:84	36 位
	男子 100m 自由形	49	予選	5	28/49	0:57:99	28 位
(予)藤原・津田・星・金持 (決)藤原・茨・津田・金持	男子 4 × 100m リレー	12	予選	1	3/12	3:45:05	銅メダル
			決勝	—	3/8	3:35:44	
(予)星・藤原・金持・津田 (決)藤原・金持・茨・津田	男子 4 × 200m リレー	10	予選	1	3/10	8:11:48	銀メダル
			決勝	—	2/8	7:51:82	
(予)金持・藤原・茨・星 (決)金持・茨・津田・藤原	男子 4 × 100m メドレーリレー	10	予選	1	3/10	4:06:46	銀メダル
			決勝	—	2/8	3:55:87	

## 【水泳 女子】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	順位(位/人)	記録	成績
藤川 彩夏	女子 50m バタフライ	28	予選	3	3/28	0:29:66	5位 / 入賞
			決勝	—	5/8	0:29:79	
	女子 100m バタフライ	22	予選	1	6/22	1:07:26	5位 / 入賞
決勝	—	5/8	1:06:26				
	女子 200m 個人メドレー	27	予選	3	14/27	2:41:18	14位
久保 南	女子 50m 平泳	21	予選	1	2/21	0:34:28	4位 / 入賞
			決勝	—	4/8	0:34:25	
	女子 100m 平泳	18	予選	3	4/18	1:16:71	6位 / 入賞
決勝	—	6/8	1:16:10				
	女子 200m 平泳	13	予選	2	6/13	2:48:52	7位 / 入賞
決勝	—	7/8	2:44:54				
齋藤 京香	女子 400m 自由形	19	予選	2	7/19	4:47:89	4位 / 入賞
			決勝	—	4/8	4:43:58	
	女子 800m 自由形	14	予選	2	6/14	9:54:77	5位 / 入賞
			決勝	—	5/8	9:47:50	
女子 200m 個人メドレー	27	予選	4	11/27	2:36:60	11位	
女子 400m 個人メドレー	20	予選	3	6/20	5:24:63	5位 / 入賞	
		決勝	—	5/8	5:19:58		
中東 郁葉	女子 800m 自由形	14	予選	2	12/14	10:12:63	12位
	女子 100m 背泳	22	予選	2	10/22	1:11:20	10位
	女子 200m 背泳	20	予選	3	3/20	2:30:35	6位 / 入賞
			決勝	—	6/8	2:30:34	
女子 400m 個人メドレー	20	予選	2	10/20	5:28:70	10位	
齋藤・久保 藤川・中東	女子 4 × 100m リレー	8	決勝	—	5/8	4:18:18	5位 / 入賞
中東・久保 藤川・齋藤	女子 4 × 100m メドレーリレー	8	決勝	—	5/8	4:38:32	5位 / 入賞

## 【水泳 混合】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	順位(位/人)	記録	成績
星・中東 藤川・津田	混合 4 × 100m リレー	15	予選	1	9/15	4:06:20	9位
金持・久保 藤川・茨	混合 4 × 100m メドレーリレー	14	予選	1	2/14	4:19:10	銅メダル
			決勝	—	3/8	4:13:37	

## 【卓球 女子】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	勝敗	対戦相手 (選手名・国)		マッチ	予選成績			成績
						順位	勝		負			
亀澤 理穂	女子 シングルス	44	予選リーグ	4	勝	MOLL Annalena	ドイツ	3-0	1/4	3	0	予選通過
					勝	BEDOYA Angie Lizeth	コロンビア	3-0				
					勝	CIFTKURAN Nevroz	トルコ	3-0				
		28	決勝トーナメント	28	勝	LEE A.	韓国	4-0				ベスト16
					負	WANG Z.	中国	1-4				
川崎 瑞恵	女子 シングルス	44	予選リーグ	3	勝	MARKOVICH Ksenia	ロシア	3-1	1/3	2	0	予選通過
					勝	IOLA Pamela	ハンガリー	3-0				
		28	決勝トーナメント	28	勝	KAHRAMAN E.	トルコ	4-0				ベスト16
					負	KONDRATOVA A.	ロシア	0-4				
					負	JURKOVA Eva	スロバキア	0-3				
高岡 里吏	女子 シングルス	44	予選リーグ	3	勝	SZECSI Krisztina	ハンガリー	3-1	2/3	1	1	予選通過
					負	LEE J.	韓国	0-4				
亀澤 理穂 川崎 瑞恵	女子 ダブルス	16	決勝トーナメント	16	勝	DORSZ / ZYLA	ポーランド	4-0				銅メダル
		8	準々決勝	8	勝	KONDRATOVA / MARKOVICH	ロシア	4-3				
		4	準決勝	4	負	LIN / WANG	中国	0-4				
団体戦		10	予選リーグ	5	負	中国		0-3	2/5	3	1	予選通過
					勝	インド		3-0				
					勝	ポーランド		3-0				
					勝	トルコ		3-0				
		4	準決勝	4	負	ウクライナ		0-3				銅メダル

### ■最終結果

順位	国名
1	中国
2	ウクライナ
3	日本
3	ロシア

## 【テニス 男子】

選手名	種目	出場数	ラウンド	勝敗	対戦相手 (選手名・国)		マッチ	セットポイント			成績		成績
					1	2		3	勝	負			
梶下 怜紀	男子 シングルス	42	トーナメント	勝	Sai Chandan Lingapuram	インド	2-0	6-2	6-1		1	1	2回戦敗退
				負	Gabor Mathe	ハンガリー	0-2	0-6	2-6				
親松 直人	男子 シングルス	42	トーナメント	勝	Joshua Andrew Anburaj	インド	2-0	6-0	6-0		1	1	2回戦敗退
				負	Mario Kargl	オーストリア	0-2	3-6	1-6				
笹島 航太	男子 シングルス	42	トーナメント	負	Sercan Yesilova	トルコ	1-2	7-5	2-6	4-6	0	1	1回戦敗退
松下 哲也	男子 シングルス	42	トーナメント	勝			不戦勝				2	1	ベスト16
				勝	Hungary Gabor Varkoly	ハンガリー	2-0	6-1	6-0				
				負	Mikael Alix Laurent	フランス	0-2	2-6	1-6				
梶下・親松	男子 ダブルス	18	トーナメント	勝			不戦勝				0	1	ベスト8
				勝	Mahmut Can Aydin/Sercan Yesilova	トルコ	2-0	6-1	6-2				
				負	Urs Ferdinand Breitenberger Hans Todter	ドイツ	0-2	4-6	1-6				
松下・笹島	男子 ダブルス	18	トーナメント	勝			不戦勝				0	1	2回戦敗退
				負	Jack Alexander Clifton Lewis Gordon Fletcher	イギリス	2-0	1-6	6-7				

## 【バレーボール 男子】

ラウンド	対戦国	勝敗	マッチ	セットポイント					予選成績			成績
				1	2	3	4	5	順位	勝	負	
予選リーグ	イタリア	負	1-3	17-25	25-18	20-25	20-25		グループ A 3位	2	2	予選通過
	ベネズエラ	勝	3-2	34-36	25-22	25-22	22-25	15-13				
	トルコ	負	0-3	15-25	22-25	18-25						
	ブラジル	勝	3-0	25-19	25-21	25-18						
準々決勝	ロシア	負	0-3	18-25	18-25	21-25			7位 / 入賞			
5-8位決定戦	ブラジル	負	2-3	24-26	18-25	25-19	26-24	9-15				
7-8位決定戦	アメリカ	勝	3-1	25-22	25-19	18-25	25-16					

### ■最終結果

順位	国名	順位	国名
1	トルコ	6	イタリア
2	ウクライナ	7	日本
3	ロシア	8	アメリカ
4	イラン	9	ベネズエラ
5	ブラジル	9	ポーランド

## 【バレーボール 女子】

ラウンド	対戦国	勝敗	マッチ	セットポイント					予選成績			成績
				1	2	3	4	5	順位	勝	負	
予選リーグ	イタリア	勝	3-0	25-21	25-17	25-17			グループ A 1位	4	0	予選通過
	カナダ	勝	3-0	25-6	25-11	25-16						
	トルコ	勝	3-0	25-17	25-9	25-19						
	ロシア	勝	3-0	25-16	25-22	25-15						
準々決勝	ブラジル	勝	3-0	25-5	25-23	25-12			金メダル			
準決勝	ウクライナ	勝	3-0	25-18	25-23	25-20						
決勝	イタリア	勝	3-0	25-15	25-14	25-17						

### ■最終結果

順位	国名	順位	国名
1	日本	6	ポーランド
2	イタリア	7	トルコ
3	アメリカ	8	ブラジル
4	ウクライナ	9	カナダ
5	ロシア		

# 日本選手団団員報告



団長 山根 昭治

### 1. はじめに

第23回夏季デフリンピック競技大会サムスン2017(以下、「今大会」)は、2017年7月18日～30日までの期間、トルコ・サムスンにおいて開催されました。夏季大会としては、過去最多の86カ国から2,859人の選手が参加し、21競技で最高峰を目指し熱戦が繰り広げられました。日本からは、11競技に全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会(以下、「連盟」)で定めた基準を満たした選手108名を選出し、派遣しました。

### 2. 盛大な壮行会とその結果

国会議員による「障がい者スポーツ・パラリンピック推進議員連盟」の中に、このたび「デフリンピック支援ワーキングチーム」が発足されました。デフリンピックやデフスポーツに理解を示してくださる先生方々からの支えをもとに、6月28日参議院議員会館において日本選手団の壮行会が開催されました。丸川珠代東京オリンピック競技大会・パラリンピック競技大会担当大臣、鈴木大地スポーツ庁長官、衛藤晟一デフリンピック支援ワーキングチーム座長をはじめとする役員の皆様等に激励のご挨拶をいただきました。その後、10社を超えるマスコミの記者会見に臨み、選手たちにとっては今までにない、情熱と熱気あふれる壮行会となりました。そして、その場で「日本代表としての自覚と責任を持ち、チームワークに徹して臨み、メダルの目標は、金メダル5個、銀メダル10個、銅メダル10個計25個以上とする」と決意を述べました。

その結果、金メダル6個、銀メダル9個、銅メダル12個と過去最高の27個を獲得することができました。国別金メダランキングは、6位となり、前回の16位より大きく躍進しました。デフアスリートの競技環境が十分良いといえない状況の中で、過去最高のメダル数を獲得したことは、選手たちがあきらめずに最後まで頑張り続けてきた情熱の賜物です。彼ら選手たちを誠に誇りに思います。

### 3. 各競技アスリートの活躍ぶり

各競技チーム全て目覚ましく活躍しておりましたが、その中でも特筆すべき競技チームをいくつか挙げていきます。

16年ぶりに金メダル奪回したバレーボール女子チームは、予選リーグから決勝トーナメントの試合全て3-0で勝利をおさめるなど、圧倒的な強さを誇りました。日本チームはベテラン、中堅、若手が一丸となった素晴らしいチームワークが安定しており、徹底的に守って拾ってセッターに繋いでいく素晴らしいプレースタイルによる試合運びを見せておりました。選手層も厚く、10代選手が4人いるので、次大会に向けての更なる成長が楽しみです。

水泳競技は3人の選手の頑張りによる連日メダルラッシュが続き、総15個も獲得しました。大会後に就活シーズンに入る選手もいますが、就職後もトレーニングに邁進できるよう、有望なデフアスリートをバックアップできる企業が現れることを願っています。

陸上競技はフレッシュな選手が現れ、男子4×100mリレーでは、アジア界で、日本が初めて金メダルを獲得する快挙を成し遂げました。リオオリンピックでの日本男子リレーチームを彷彿させるかのようなバトンパスが見事でした。日本選手権で

も上位の実力を持つ円盤投げ選手は金メダル候補でありながら、惜しくも銀メダルとなりました。自分の記録に自信を持っていたのですが、デフリンピックは甘くないと思い知らされたようです。次回でリベンジを果たしたいという決意を固めていました。

卓球とバドミントンは、かつて毎大会必ずメダルを多く獲得するメダル常連の強さを誇っていましたが、昨今ではアジア勢の新勢力に押され気味でした。今大会もメダル獲得ゼロというところまで追い込まれましたが、最後まで諦めずにそれぞれ2個と1個獲得でき、面目を保つことができました。今後は若手の育成及びエースの輩出が早急の課題です。

自転車は、女子選手たちの活躍でメダルを2個獲得しました。男子選手もメダルを期待されるほどの有力な選手だったのですが、コースの前方で発生した集団転倒に巻き込まれてしまい実力を発揮できなかったのが悔やまれます。自転車には年齢制限がなく、欧州諸国には複数大会に連続して参加しているベテラン選手もいます。今の自転車チームは前大会に続き、デフリンピックに参加するのはこれで2回目であり、まだまだ成長の段階です。自転車チームの皆さんからも、今大会で一区切りにはせず、まだまだ続けて夢を追い求めていく決意を新たにしていると聞いております。

バレーボール男子チームは、最後まで諦めない粘り強さで8年ぶりに決勝トーナメント進出を果たしました。その成長が見込まれる競争力はもちろんのことですが、試合中に見せた元氣良いパフォーマンスやスポーツマンシップとしての試合マナーは見えて誇らしく感じるものでした。その姿勢はトルコの子どもたちにも伝わり、日本選手団は一躍人気者となりました。

サッカー男子チームは前大会から4年間、強化合宿等で体幹トレーニングを中心に基本から鍛えなおし、初決勝トーナメント戦進出という夢を持って臨みました。初戦で前大会の銀メダリストであるウクライナに打ち勝つ快挙を成し遂げましたが、予選リーグ最終戦のイタリア選で惜敗し、予選敗退となりました。イタリア戦はまさに双方チームの実力が拮抗した戦いであり、アディショナルタイムの僅かな時間で相手チームのゴールが決まった瞬間、日本チームの選手一同、茫然自失となりしばらくは立ち上がれない有様でした。しかし、アジア以外の欧州や南米の強豪チームと互角に闘えるようになったことは確かであり、これまでの大会と比べても確かに成長していることが見てとれるようになったことは大きく評価できます。

ビーチバレーボール、空手、テニスも含め、他の競技全体に言えることですが、大会を経るごとに、国際的な競争力が非常に高まっています。今大会はデフリンピックをオリンピックと同格に捉え総力挙げて取り組む国と、そうでない国の差が極端に分かれた結果となりました。陸上や水泳の個人記録は、もはやオリンピック並みに迫りつつあります。言い換えると、オリンピック並みの養成や強化に取り組まなければ、日本は取り残される恐れがあります。国内における競技スポーツの普及や強化の取り組みの遅れが、そのまま今大会も含め国際大会の試合結果に顕著に表れるようになりました。これを踏まえ、競争力がある競技チームはもちろんのことながら、遅れをとっている競技チームに対しても、その競技スポーツの国民浸透を図るとともに若手育成に力を注がなければなりません。少なくとも、各競技チームが抱える有力選手がメダル獲得を目指して邁進していく道を塞ぐ障壁を少しでも取り除いていくことが我々の務めです。今大会はデフリンピックを取り巻く国際情勢の激動、そして、我々が優先して取り組むべき課題がよりくっきりと見えてきた大会でした。

#### 4. 総括

総括として、大きく4つのことが挙げられます。

1つ目は今大会をきっかけに、大会が始まる前から国内におけるデフリンピックの知名度が高まるとともに、デフアスリートに対する公的なサポートの規模が大きくなったことです。国会議員による「障がい者スポーツ・パラリンピック推進議員連盟」の中に「デフリンピック支援ワーキングチーム」が発足され、「デフリンピック」の名前を公的な場や報道機関でよく見るようになりました。日本から新聞社が現地サムスンへ記者を派遣し、連日、リアルタイムで報道していただきました。また、鈴木大地スポーツ庁長官、薬師寺みちよ議員、在トルコ日本国大使館の中村耕一郎臨時代理大使が日本選手団の結団式や開会式、また試合会場へ応援に駆けつけてくださいました。このようなデフリンピックを取り巻く一連の動きが大きな波となり、社会を動かすに至りました。例えば、金メダルを獲得した日本女子バレーボールの決勝戦は会場が満席でしたが、今大会の多くがライブ中継されていたので、1点を取るごとに声援が会場で、または、ライブ中継を通して、FacebookやTwitterでこれまでにない盛り上がりを見せました。国を動かすには、やはり、政府の皆様からもご理解いただき共に取り組んで頂けることが何よりも肝心であることを痛感しました。これからも、政府とより一層連携した取り組みを展開し、一人でも多く国民の皆さまにデフリンピックのことを知ってもらうための活動に邁進します。

2つ目は、日本代表選手団の団結力です。今大会は初めて選手村が地元の大学寮に設置され、デフリンピックに参加する選手全員が選手村で生活しました。本部事務局部屋前のロビーやいくつもの棟をつなぐ長い階段で顔を合わせるたびに、「おはようございます」「お疲れ様です」「今日も頑張り」「メダルおめでとう」とコミュニケーションを交わす姿が日常的に見られ、選手団全員がお互いに切磋琢磨していき、一つにまとまっていく様が見られました。早瀬主将や古島旗手は率先して他競技チームの試合に駆け付けて応援してくれたおかげで、日本選手団全体で1つ1つの試合に臨む姿勢が見られました。それは、また同時に、異国において、私たち日本の和の精神を自覚し、日本人であることを誇れる機会となりました。選手村の食堂で食べ終わった食器を選手が自ら下膳していたのをトルコの人たちに称えられましたことは、今でも思い出すたびに、自分が日本人であることが誇らしくなる思い出です。

3つ目は、選手が自国の誇りを自覚しながら試合に臨んだことです。金メダルを獲得した日本女子バレーチームの選手全員が表彰式で君が代を手話で歌う姿に、同じ日本人としてとても誇りに思いました。デフリンピックの代表選手が日本人として誇りを持って試合に臨むことの重要さをそれぞれの選手が自覚しつつあります。選手の皆様は、オリンピックで日本代表選手が表彰式で金メダルをもらい、上がっていく国旗を眺める様を小さい頃からテレビで見えています。しかし、国旗が上がっている間に君が代の国歌が流れていることを知るのは、大きくなってから聞こえる親や友人との話の折に初めて知ることができるのです。国旗が上がっている間は、ろう者にとっては旗を見つめるだけの時間でした。しかし、今大会の女子バレー競技の表彰式で、日本代表選手が表彰台の上に立ち、掲げられていく日の丸を見ながら君が代を手話で歌う様を、私たちは生まれて初めて目にしました。それは、国内のろうの子供にとって、大きな影響を与えたとはいえませんが、また、東京2020オリンピック・パラリンピックのスタジアムで、聞こえる人も聞こえない人も一緒に手話で君が代を歌うことがあるかもしれません。デフリンピックを通して、国の将来を担うろうの子供に夢

や希望、誇りを与えられることを、皆様にもより理解して頂きたいと思います。

4つ目は、1つ目と反するかもしれませんが各選手の周囲からのサポートが不足している環境です。選手たちは、仕事が終わってから夜遅くまで練習します。合宿ができるのは土・日のみです。合宿場所としてナショナルトレーニングセンターを使用できず、勤務先の公休が認められず、デフリンピック出場を断念する選手がいるなど、選手を取り巻く周囲からのサポート環境は決して良いとはいえません。今後、選手の所属している職場において、デフリンピックへの理解促進を図るとともに、オリンピック、パラリンピックアスリートとの格差を解消し、デフリンピックアスリートの競技環境を整備し、金銭的な負担を解消する、そして休暇が容易に取得でき、報奨金制度の構築等を求めたいと思います。

最後に日本選手団をご支援くださった宮内庁をはじめ、スポーツ庁、厚生労働省、外務省、障がい者スポーツ・パラリンピック推進議員連盟およびデフリンピック支援ワーキングチーム、日本スポーツ振興センター、日本障がい者スポーツ協会、全国手話言語市区長会、手話を広める知事の会、駐日トルコ大使館、在トルコ日本国大使館、筑波技術大学、全国聾学校長会、全国聾学校体育連盟、ドリームサポーター、支援くださった企業、手話関係団体、全国加盟団体、ホームページに応援メッセージを投稿してくださった皆さま、選手およびスタッフをご支援くださった皆さまに心から感謝申し上げます。

総監督 栗野 達人

#### 1. 事前取組

今回で通算6回目の参加となりました。これまでの経験をフル活用し、前大会よりさらに強化された日本選手団になる様、尽力しました。ここでは日本選手団を結成するより以前の段階での取り組みから報告します。

今大会のトルコでの開催は2011年のICSD評議員会にて決定されていましたが、当時はアンカラ市での開催を予定しておりました。前大会の時に、アンカラ市ではなく他の都市になる可能性があるとの報告がICSDよりありましたが、いずれにしてもトルコ国内での開催となることは間違いのないということで、トルコ情勢を顧みながら準備を続けてまいりました。国情勢事情によりテロ危機等の不安がありましたが、ICSDを通してトルコ政府より今大会の開催通知および正式な招待が発せられるに至り、それを受けて、日本選手団も2017年3月に正式に設立しました。総監督として日本選手団の各競技チームがメダルを多数獲得できる環境を強化させたく、連盟にて下記取り組みを行いました。

#### (1)現地事前調査および説明会で情報提供

1年前から大会運営に関する情報収集およびテロ対策、セキュリティ対策を目的とし、大会現地の事前調査および大会組織委員会との打ち合わせを下記の通り実施しました。その結果は研修会や説明会等で全競技チームに報告し、日本選手団全員による情報共有をはかりました。

・事前調査1回目 2016年7月16日

当初はサムスンで開催される第1回団長会議への出席を兼ねて事前調査を行う予定でしたが、トルコでクーデター未遂事件が発生し、渡航フライト全てが欠航となり渡航を中止にしました。

・事前調査2回目 2016年10月26日～31日

トルコ国内の社会情勢に関する情報収集を常にはかり、クーデター未遂事件の影響も落ち着いた頃に事前調査を行い、アンカラでトルコろう者スポーツ委員会や在トルコ日本国大使館を訪問して情報収集をはかるとともに、大会現地であるサムスンにて全競技会場と選手村等を訪問しました。各競技会場の環境や交通手段、選手村における本部設立の環境や条件などを確認するとともに、大会組織委員会の関係者と面談し日本選手団本部用の部屋を設立することや日本選手団の輸送手段等について交渉してまいりました。

・事前調査3回目 2017年2月17日～22日

サムスンで開催された第2回団長会議に出席し、全競技会場の案内やテロ対策についての説明を受けてまいりました。大会組織委員会よりテロ対策として大会期間中は警察、州兵隊、軍隊による5,000人の警備隊を用意し、参加選手および観客を守衛するとの説明がありました。日本から選手団を送り出しても、トルコ現地ではトルコ政府が責任を持って守衛にあたることを確認できたことは大きな収穫の1つでした。

・事前調査4回目 2017年5月3日～8日

団長および総務と共に渡航前の最終確認として事前調査を行いました。各競技会場はもちろん、選手村や日本選手団本部用部屋など、細かな情報収集に務めました。各競技チームに現地の雰囲気をつかんでもらうために、今回は多くの画像や動画を撮影し、報告に役立てました。

## (2) 日本選手団選考について

2015年11月に連盟にて「トルコ・サムスン2017日本選手団の編成にかかる指針」を策定し発表しました。前大会以降、各競技チームがメダリストレベル以上の選手の育成・強化に務めてきました。本部としても、派遣する以上は必ず成果を残すことを目標とし、前大会と同様もしくはそれ以上に厳しい基準を策定しました。各競技チームにその基準を満たした選手・スタッフの推薦をお願いしたところ、当初は総計で約200人の選手候補および約100人のスタッフ候補の推薦がありました。

前大会以降に開催された全国ろうあ体育大会、関東ろう体育大会、全日本選手権大会などを見回って、有望な選手の試合運びを実際に視察し、それぞれのデータを蓄積しました。それらデータをもとに全競技監督会議を実施し、競技団体それぞれと個別ミーティングを行うなど調整に調整を重ね、最終的に選手108名およびスタッフ69名による177名の日本選手団を設立するに至りました。

また、主将と旗手を日本選手団の中から以下の者に決定・任命しました。

主将 自転車競技選手 早瀬 久美  
旗手 男子サッカー競技選手 古島 啓太

## (3) ユニフォームについて

日本選手団ユニフォームのデザイン仕様については、リオオリンピックやリオパラリンピックにおける日本選手団および世界各国選手団等の資料を集めて検討しました。そして他国のカラーやデザインと被らない様、黒と白と赤でオリジナルデザインウェアを作成して発注する事にしました。連盟でも審議し、日本選手団公式ユニフォームとしては、ジャージ上下、ハーフパンツ、ポロシャツ、キャップとすることを決定しました。「JAPAN」のロゴについてもJOCに申請してリオオリンピック日本代表と同じフォントを使用することの許可をもらいましたが、これは選手一同にとっても、リオオリンピックやリオパ

ラリンピックの選手と同じように日の丸を背負って世界大会に臨むことをより自覚してもらえたと思います。

## (4) メディカルチームおよび手話通訳チームについて

メディカルチームについては、過去大会で経験のある医師やアスレティックトレーナーを中心に編成しました。大会期間中は手話通訳がつくとは言え、やはり、メディカルチームには聴覚障害の特性やコミュニケーションに対する理解が求められます。これまでの経験を活かし、選手団の選考段階から各候補選手・スタッフの診断書をチェックし、身体面で問題ないかどうかチェックいただきました。また、各選手が日常から使用している薬品やサプリメント等がドーピング規則違反にあたらないかどうかチェックいただき、もしもドーピング規則に触れる恐れがある場合は代用品を提案いただくなど、それぞれの状況にあった的確なアドバイスを頂きました。

手話通訳チームについては過去大会の経験がある手話通訳者を最低でも1人は入れるようにしました。その者から自分の経験をもとに、大会期間中の手話通訳体制を築いていただき、万全たる体制を構築することができました。

## (5) 目標および成果

### ① 目標

今大会に先立ち、2015年10月に台湾・桃園で開催された第8回アジア太平洋ろう者競技大会では、全参加国チームのうち、メダル獲得数で第2位という成果を収めました。この成果を踏まえ、今大会では前大会を上回るメダル数を目標とすることにしました。日本選手が出場する全競技で必ず最低でも1つはメダルを獲得することとし、それに加え、ダブルス戦や団体戦などを考慮し、金5個、銀10個、銅10個による合計25個を目標としました。

### ② 成績と評価

#### ・過去最高のメダル数

今大会における日本選手団メダル獲得数は総27個を成し、目標数を超えて過去最多のメダル獲得数となりました。

参加国86ヶ国内、国別金メダルランキング順位は第6位となり、メダル獲得総数順位では第7位でした。

#### ・メダリストたちの頑張り

世界情報によるとデフリンピック金メダルランキング上位国は全て国からの支援、環境など十分に整備されており、メダル獲得数で上位の国でもメダリストに賞金が出るそうです。ある国では2個のメダルを取った選手に500万円(日本円)を支給していると情報があり、その他新しい家かそれにあった賞金をもらえたり、生涯に毎月賞金がもらえるそうです。さらに5か月間仕事、学校を休んで強化合宿に参加している選手もいるそうで、かなり選手は必死になって練習を積み重ねて来たと思われる国もあり、4年前よりかなりレベルが上がっていました。日本では残念ながら、その様なメダル獲得報酬がなく、メンタル面で不利がある上、オリンピック並の練習環境や支援が不足していながらも、ここまで頑張り、メダルを27個獲得出来たことは4年前より実力がアップしたことを示しています。これも皆さんから多大なご支援、ご協力を頂いたおかげであり、深く感謝しております。改めてお礼申し上げます。

ただ、今後は更なる厳しさが想定されるため、今まで以上に皆さまから熱いご支援と応援をいただきたく、心からお願い申し上げます。

## 2. 大会の競技運営などの報告

### ■7月18日開会式について

新築のスタジアムで開催されました。8年前の台北大会以来、久しぶりの大規模な開会式で日本選手団全員が行進出来た事が特に嬉しかったです。世界の選手団行進やトルコダンスなど披露があり、デフリンピックの聖火も灯されました。日本選手団が入場すると、トルコの観客の大きな拍手とエールで大いに盛り上がりました！！また聖火ランナーがスタジアム内のコートを走って聖火台に上って点火した時にも盛り上がりました。

### ■セキュリティ対策について

サムスンでは、選手村、空港、ホテル、競技会場など全てセキュリティ対策がされており、選手一同が安心して競技に集中出来たことは大いに評価したいと思います。トルコは親日派と言われ、現地ボランティアも日本選手団によく尽くしてくれ、大いに助かりました。ある競技で日本が他国と対戦した時、トルコ人観客達が日本旗を振って日本選手を応援してくれました。

### ■選手村および食事について

現地へ下見に行き、ホテル確保を検討していましたが、組織委員会よりセキュリティ対策の為に指定した選手村に泊まっていたと指示を受けました。それに従って日本選手団全員の人数分の部屋を予約しましたが、現地に行ってみると交渉との違いが発生し、部屋数が不足してしまい、大至急、近畿日本ツーリストの協力を得て別のホテルを確保して不足分を充てるなど、本部にて臨機応変で対応していきました。下見の時に組織委員会より用意する送迎バスで競技選手輸送、ホテル整備などを行うと説明を受けたので、それに合わせて日本選手団行動スケジュールなど段取り準備しました。しかし実際に現地に行ったら組織委員会の手配バスが時間通りに来なかったり、ホテル環境にすれ違いが発生したりして混乱となってしまいました。その為、日本代表選手により環境を作る為に専用車を手配して輸送したり環境不足を自ら対応するなど対策を取りました。

トルコで17日間過ごしましたが、一番苦労したのは食事でした。もちろん寿司もそばも中華もなく、トルコ料理で一番多かったのはケバブでした。また「羊飼いのサラダ」を意味するチョバン・サラタスが多かったです。賽の目切りにされたトマトやキュウリ、たまねぎなどが和えられたトルコの定番サラダでレモン汁、オリーブオイル、塩で味付けされることが多く、さっぱりしていましたが、毎日同じ食事では飽きてしまうので、各自、日本から持ってきた調味料、カップヌードル、味噌汁、非常食を合間に食べていたのが多かったです。

トルコでは定番と言われる紅茶のチャイも毎日ご馳走していただきました。トルコ人は紅茶をよく飲む文化で、食後や一息つきたい時に、友達と話しながら1日に何杯も飲みます。また、牛乳は入れず、角砂糖を2、3個好みに合わせて入れて飲むことが多いです。

日本と違った環境の中で慣れない食事でも苦勞しながら日本選手団が物凄く頑張って過去最大の実績を出せたことは素晴らしい、皆さんにもYouTubeやホームページを見ていただきたいと思っています。そして評価していただきたいと思っています。

### ■航空およびIDカード手続きについて

各競技のスケジュールに合わせて数回に分けた渡航スケジュールにしました。その為、デフリンピック期間中に6回もIDカード手続きに往復することになりましたが、本部で手分けし、協力しあったおかげで日本選手団全員の登録を無事に終えることができました。帰国の時にサムスン空港からイスタンブール空港へ小型航空機で向かった時、オーバーブッキングのため、一部の荷物と8人のメンバーが乗れず、別の航空機に回

されるというハプニングもありました。近畿日本ツーリストの交渉により、最終的に全員と荷物全部が成田空港に着く事が出来ました。その様なトラブル発生に対して臨機応変に対応しました。

### ■視覚的な情報保障について

デフリンピックの競技ルールはオリンピック競技にほぼ準じていますが、聞こえない選手はピストルスターターの音や審判の合図が聞こえないという、競技上、不利な状況におかれています。デフリンピックでは、競技に必要な音声情報やコミュニケーションの全てが、視覚的な合図（フラッシュ、フラッグなど）や国際手話などにより、視覚的に保障された競技環境が構築されています。今大会でも、視覚的な情報保障がなされている事例がいくつか見受けられました。

#### ①サッカー競技や水泳競技での事例

聞こえない選手たちは主審の笛が聞こえません。そのため、副審だけでなく主審も旗を持ち、シグナルを知らせます。

また、水泳ではレースのとき、最後のターンである旨を水面にしぶきを立てて知らせます。

#### ②陸上競技や水泳競技、空手競技での事例

光でスタートや判定を知らせるために、フラッシュ機器を使っています。

#### ③コミュニケーションでの事例

強くなるために招聘した監督やコーチは手話ができません。監督やコーチと選手間の指示やコミュニケーションが円滑に行われるよう、手話通訳を配置します。

また、メディカル場面でもドクターや看護師、トレーナーと選手間の診察やコミュニケーションも手話通訳が必要となります。

## 3. 反省・まとめなど

今大会期間中、毎日、総務・医師班・手話通訳・広報などの本部そして各競技チームおよび監督達と連絡を取り合い、行動しましたが、兼任する仕事があるため余裕がなく負担をかけてしまいましたが、よく頑張ってくれたことに感謝しています。また本部および事務局、近畿日本ツーリスト、全競技チームと共に全員で、わずかに半年程の短期間でありながらも何度も打ち合わせ等を進め、無事に日本代表選手たちを派遣出来たことに対しての評価を認めていただきたいと思っています。

デフリンピックはICSDと加盟国の努力で積極的に取り組まれ、開催されてきています。日本選手団も積極的に国際手話などでコミュニケーションを図り、現地で競技運営に対して抗議、意見を出すことで改善されてきていると思います。デフリンピックという大規模な国際大会で慣れもありましたが、団長、総務と医療班、手話通訳班、広報、全競技団体と共に協力しあいながら進めることが出来、助かりました。本部全員で素早く臨機応変で対応したおかげで最後の日に全員が無事に帰国出来た事を喜びたいです。

全競技を見回ってサポートしてきましたが、全競技試合を見てみて、日本選手レベルは世界から見てトップレベルに達していると感じ取れました。しかし上記の成績評価で述べた通り紙一重で負けたり、自分のミスで勝てなかったことが多く、メンタル面の弱さと経験不足を感じました。全競技で今後の国際大会に向けての課題になると思われるので、ぜひ頑張りたいと思っています。

連盟では連日、あらゆる面で確認と連絡を取り合い、準備が欠かさないよう尽くしましたが、まだ足りない所もあった事を反省しています。

今回で日本選手団が前回よりも強い体制で取組み、ここまでの成果を出した事は評価して頂けるのではないかと自負しています。

デフリンピックの知名度が上がればそれだけ、デフスポーツに対する理解が広まり、ひいてはろう者の社会的地位の向上につながるものと信じています。今後、今回の取り組みの教訓を生かし、各競技団体を中心とした関係団体との信頼関係をさらに深めていくとともに、デフスポーツの発展と技術の向上を図っていく必要があります。日本も今後のデフリンピックアスリート環境整備、さらに金メダル多数獲得を目指して頑張らなければならないと強く感じております。また、常に世界選手情勢収集の為にアジア競技大会、世界選手権大会など多数の大会経験、鍛錬をしないと世界一になれないと強く感じました。今回の実績をきっかけとして全競技の日本選手一同も、さらに次の大会に向けて頑張っていきます。

最後に、多くの皆さんからいただいた多大なご支援、ご協力に改めて心より深く感謝申し上げます。

## 総務 倉野 直紀

今回、総務として参加しました。初めてのことであり、不安いっぱいな気持ちでしたが、任務遂行を無事終えた今、支えていただいた本部スタッフの皆さまに心から感謝申し上げます。

### ①事前視察

2016年10月、2017年2月、5月と3回に分けた事前視察を行いました。なお、本来は2016年10月ではなく、2016年7月でしたが、出発直前に中止（理由は②危機管理体制を参照）となり、振替えました。視察では、各競技会場や選手村、輸送面、医療関連、トルコ組織委員会、在トルコ大使館を回り、調査を行いました。組織委員会とのヒアリング、大使館訪問ができたことが後にプラスになりました。ヒアリングの際、事前に入念な聞き取り項目を設定していくことが重要です。

### ②危機管理体制

現地（サムスン）の下見を行うため、まずは2016年7月に栗野総監督を始めとする視察団を派遣予定でしたが、出発日にトルコでクーデター未遂事件が起き、アタチュルク空港が閉鎖される事態となりました。幸い、事前に危機管理体制を構築してあったため、出発直前まで視察団やトルコ組織委員会などやり取りをし、派遣を中止しました。また、トルコはシリア問題がからみ、治安情勢に不安が見られたため、その後の危機管理体制は外務省や在トルコ日本大使館との連携も構築したものととなりました。次回の派遣時にも、外務省・現地大使館・競技団体、旅行会社・連盟を組み込んだ危機管理体制が求められます。

### ③事前準備及び説明

スポーツ庁及びJPCへ主に派遣費用を主とした交渉及び相談、また今回始めてスポーツ委員会の中に医科学委員会を設け、日本選手団編成を行いました。競技団体の責任者を招集し、研修会及びデフリンピック説明会を行い、視察報告、現地状況、エントリー手続き、選手団本部、危機管理体制、壮行会や結団式等の説明を行いました。

### ④日本選手団壮行会

6月28日、参議院議員会館にて日本選手団壮行会を開催しました。壮行会は福澤朗アナウンサーの司会にて進み、丸川珠代東京オリンピック競技大会・パラリンピック競技大会担当大臣、鈴木大地スポーツ庁長官、アフメト・ビュレント・メリチ駐日トルコ大使、衛藤晟一障がい者スポーツ・パラリンピック推進議員連盟デフリンピック支援ワーキングチーム座長をはじめとする役員の方々と、ドリームサポーターの一人である平野早矢香さん等にご挨拶をいただきました。今回、日本選手団を大いに励ますため、サムスンデフリンピック2017応援ソング『HERO』を初めて連盟公認ソングとし、また、吉田沙保里選手を始めとするアスリートたちに「ドリームサポーター」にご就任いただきました。応援メッセージでは、手話を広める知事の会会長平井伸治鳥取県知事や、全国手話言語市区長会長岡克介石狩市長など、たくさんの自治体長からもいただくことができました。

障がい者スポーツ・パラリンピック推進議員連盟の中に、デフリンピック支援ワーキングチームが設置されたことにより、議員関係からの理解や支援が以前と比べられないほど深まっています。また、大会には鈴木大地スポーツ庁長官やデフリンピック支援ワーキングチームから薬師寺みちよ参議院議員が視察に来られたことも過去に例がなく、特筆すべき点といえます。

### ⑤結団式

7月18日、開会式前に選手村内で日本選手団結団式を行いました。結団式には、日本選手団のほか、薬師寺みちよ参議院議員、スポーツ庁鈴木大地長官、在トルコ中村耕一郎臨時代理大使にもご出席いただきました。残念ながら、各競技の公式練習が重なり、出席できなかった選手もいましたが、最後はみんな「世界一の高みを目指して夢咲かせよう！」と締めくくり、心がひとつになった瞬間でした。しかし、各競技によって競技日程が異なるため、それぞれに合わせた出発日を設定しており、結団式に出席した選手はほぼ先発隊だけとなりました。

### ⑥選手村及び日本選手団本部の設置

サムスン市内の大学の学生寮が選手村となり、選手は基本的に3人1部屋、役員2人1部屋、その他トレーナー室やメディカル室等を設ける予定でしたが現地に着いてみると部屋が不足していたため、急遽別にホテルを確保し、本部の宿泊は選手村、ホテルと分けることになりました。

日本選手団に割り当てられた建物のフロアにある会議室に日本選手団本部を構えました。開放時間は朝8時～夜9時まででしたが、早朝から深夜まで競技団体の役員や選手が訪れました。情報発信や共有、選手団の結束を重視し、ホワイトボードや模造紙を活用して各競技の成績結果やメダル獲得速報等を本部部屋の外壁に張り出し、モチベーションが高められるよう取り組みました。

本部ミーティングを毎日実施しましたが、外回組と本部待機組に分かれ、また本部車両も1台しかなく、競技会場周り和本部集合の時間の調整に毎日頭を悩ませることになったのが今思うと残念です。

### ⑦さまざまなトラブル

現地に到着し、すぐに組織委員会本部へアクレディテーションカード（以下、アクレ）の取得手続きに向かいましたが、2時間以上待たされることになり、選手たちが空腹や疲労を訴えました。待機時間の軽食など用意しておけばよかったかと思えます。また、アクレは選手、メディア等それぞれ分かれており、

取得に関してもさまざまなトラブルが起きました。組織委員会本部と掛け合おうにも、まずは担当者を探すことから始めなければなりません。

競技会場へ向かうバスについても、当初は予約できるという話だったが、日が経つにつれ組織委員のスタッフやボランティアに問い合わせても話が進まず、結局は当日早朝から確保に走り回ることになりました。また、帰国の際にもサムスンからイスタンブールへの飛行機がダブルブッキングし、急遽乗れなかった選手を他空港へバス輸送、飛行機への荷物積み残し等が起きました。ダブルブッキングが起きたときの対応も今後は視察の際に調査しておかねばならないと思います。

選手たちの体調については発熱及び胃腸の不具合等、数名の選手から不調の訴えがありましたが、メディカルチームの適切な診療のお陰で次第に快方に向かい、大きな問題はありませんでした。

#### ⑧解団式、帰国報告会

大会最終日の7月30日に解団式を実施しました。各競技日程が異なっていたため、一足先に帰国する選手もあり、全員揃うことはできませんでしたが、最後に応援してくれた国民やトルコの方々への感謝メッセージ動画を収録、発信しました。

そして8月31日に参議院議員会館にて、帰国報告会を実施しました。早瀬憲太郎さんの司会にて進み、鈴木俊一東京オリンピック競技大会・パラリンピック競技大会担当大臣、水落敏栄文部科学副大臣、鈴木大地スポーツ庁長官、衛藤晟一障がい者スポーツ・パラリンピック推進議員連盟 デフリンピック支援ワーキングチーム座長をはじめとする役員の方々と、ドリームサポーターの一人である東尾理子さん等にご挨拶をいただきました。また、今回金メダルを獲得した競技の中から水泳、女子バレー、陸上の3競技の選手代表から大会成績やデフスポーツならではの特徴や今後の展望について報告をしました。

#### ⑨まとめ

今大会は前大会以上にさまざまな方面からのご支援の輪が広がり、メディアにも多く取り上げていただいたお陰で、史上最多のメダル獲得という結果を残すことができました。これも各競技団体の選手やスタッフ達が日本の代表の誇りを持ち、団結した日本選手団となったからです。

次回2019年に行われる第19回冬季デフリンピック競技大会や2021年の第24回夏季デフリンピック競技大会に向け、さらに取り組んでいきます。

最後にデフリンピック日本選手団を応援していただいた国民の皆さま、多方面の方々へ厚く感謝申し上げます。

総務 川俣 郁美

#### 1. はじめに

今大会では歴代大会最高である3000人超の選手が参加し、日本からも「世界一の高みを目指して夢咲かせよう！(Aim for the Top of the World and Let Our Dreams Flourish!)」のスローガンのもと、108人の選手が11競技に出場しました。多くの方々のご支援のおかげで、日本は過去最高のメダル27個(金6、銀9、銅12)を獲得することができ、参加国の中でも第6位という好成績を収めることができました。

私は2016年度より連盟スポーツ委員会国際事業部付になり、今大会日本選手団本部スタッフ総務として参加させていた

できました。

#### 2. 事前準備

##### 【資金造り】

国庫からの満額助成が決まったものの、3分の1は自己負担なので、経済的負担軽減のため資金造りを行いました。今回作成したデフリンピックグッズは下記の3点になります。SNSと手話動画を駆使した宣伝で多くの方に注文・購入いただき、完売することができました。

3色ボールペン 4,000本

タオル 1,000枚

ピンバッチ 1,700個

#### 3. 大会実行委員について

##### 【トルコの手話に対する寛容な姿勢】

トルコはヨーロッパ、アジア、中東、アフリカに近接している地理的特性から、多くの民族が出入りしてきた歴史があり、実に民族の多様性に富んでいます。そのせいか、「手話」に対する違和感がそれほどないようで、むしろ手話の大切さを理解してくれており、普及・活用に尽力していました。トルコ手話は2005年に制定された障害者法で法的に言語として認知されているそうです。

デフリンピック実行委員会は、デフリンピック開催前に1,500人のボランティアを対象に国際手話とトルコ手話の手話講座を行ったそうです<sup>1</sup>。国際手話ボランティア養成対象は500人で、そのうち半数はろう者です。国際手話ボランティア養成講座の教材として作成された国際手話辞典はフルカラーで、収録語は1,200語以上に及びます。手話表現を動画で見ることができるQRコードが全単語に付いており、それが無料で配布されたそうです。ICSD評議員会でも配布されていました。

聞こえるボランティアの数のほうが圧倒的に多かったものの、手話のできる人できない人、ろう者と聞こえる人がバランス良く配置されていました。日本専属ボランティアは聞こえるトルコ人の大学生3人で、夏休みを活用してボランティアに来てくれたそうです。手話はあまりできませんでしたが(講座には参加しなかったそう)、日本語と英語が得意な学生でした。開会式・閉会式の時はろうの国際手話ボランティアもサポートに加わってくれました。デフリンピックが終わる頃には、4人とも簡単な日本手話と国際手話ができるようになっていました。

開会式では、選手団は入場前にスタジアム外で待機するのですが、手話アナウンス用の大型スクリーンが設置されていました。デフリンピックのために建てられた3万人収容のスタジアムはほぼ満員で、ステージに立っている人はアリの様に小さいのですが、国際手話とトルコ手話通訳の高画質映像が大きくスクリーンに映し出されており、実行委員会の手話への理解が見られました。

大会公式アプリには手話で問い合わせができる窓口、テレビではデフリンピック啓発CMやニュースの放送、デフリンピックカラーに染められた街中。ハード面・ソフト面両方でデフ・フレンドリーに環境整備がなされ、サムスン全体でデフリンピックを歓迎してくれているように感じました。このようにデフリンピックがきっかけとなり、社会のろう者に対する理解が深まり、環境も整備されていくのはとても嬉しいことです。デフリンピック終了後も、持続的に発展を続けてほしいと思います。

<sup>1</sup> <http://deaflympics2017.org/en/volunteers-are-ready-to-overcome-obstacles-detail/104>

#### 【国際オリンピック委員会（IOC）からの支援の厚さ】

今大会初めてIOC委員がデフリンピック開会式に臨席し、祝辞を述べました。ICSDは2016年IOCと覚書を取り交し、IOCより技術的支援を受けられるようになったそうです。そのひとつとして、オリンピック・パラリンピック同等のオンライン中継の実現があげられていました。

#### 【厳重なセキュリティ】

2016年より、イスタンブールをはじめトルコ各地でテロが起きるなど、安全面が心配されていましたが、テロが起きたとは感じさせないほど、サムスンも穏やかな町という雰囲気でした。ただ、会場や選手村のセキュリティは厳重に管理されており、すべての入口にセキュリティゲート（金属探知と顔認証）が設置されていました。加えてアクセディテーションカードでアクセス範囲も応援席、メディア席、コート・フィールド等と細かく制約されていました。村外スタッフやビジターへのアクセディテーションカード発行は、大会運営本部でできるという事前案内があったにもかかわらず、アクセス制限ルールが大会開始後も不確定なままでなかなか発行されず、コートや選手村に入って直接選手をサポートできない等といった問題もおきました。

#### 【充実したインターネット環境】

今大会のインターネット環境は今までのデフリンピックで最高だったと聞いています。まず、全会場にハイスピードWi-Fiが設置され、アクセディテーションカード保持者は1人2台までWi-Fi接続が可能でした。情報発信も公式サイト、公式アプリ、Facebook、YouTube、Twitter、速報等で素早く配信されていました。ハイスピードWi-Fiのお陰で携帯やパソコンからオンライン中継（全競技ではありませんでしたが）を見ることができた上に、試合結果もリアルタイムで更新されていたため、情報共有をスムーズに行うことができました。

## 4. 本部

### 【本部】

デフリンピック史上初めて、選手村が設置されていました。大学の寮エリアに設置され、日本選手団はD棟の7～9階でした。9階ラウンジの会議室に本部をおき、本部入口横の壁には縦2m×横4mほどの大きなホワイトボードシートを貼り、情報掲示板を設置しました。掲示板には、カフェテリアやランドリーサービス、部屋の掃除サービス、シャトルバス等といった選手村に関するインフォメーションや本部からの連絡、試合予定・結果、メダル獲得数を掲示しました。掲示板がエレベーターの目の前でしたので、情報伝達がスムーズに行えました。また、本部ドアはガラス張りになっていたため、選手やスタッフと顔合わせがしやすく、コミュニケーションがとりやすい構えだったと思います。

### 【大会期間中の業務】

大会期間中の業務は下記の通りです。

- ・試合スケジュールの管理
- ・大会実行委員、技術委員、各競技団体との連絡
- ・試合結果の共有  
(日本選手団公式HP、フェイスブック、本部掲示板)
- ・選手・監督インタビュー
- ・インタビュー動画編集・発信
- ・ICSD・APSD総会への出席

## 5. おわりに

運動能力は聞こえる人と変わらないデフアスリート達が、スタートピストルの代わりにスタートランプを使う、ホイッスルの代わりにフラッグを使う、手話または手話通訳を介してコミュニケーションをとる、などといった視覚的ツールが活用し、「聞こえないこと」にハンデを感じることなく公平に、そして全力で戦っている姿は、とても眩しくかっこよかったです。また、試合中のみならず開会式やメダル授与式など大会全体がデフ・アクセシブル&デフ・インクルーシブであることで大会に「完全参加」できることや、同じ聞こえない仲間と国境を越えた交流を通してデフであることや手話を使うことへの誇り、デフ・アイデンティティを形成していき、地球全体で平等な社会を築いていくことができるのもデフリンピックの魅力だと思います。

今大会で初めて議員をはじめ、スポーツ庁、在トルコ日本大使館、新聞社などが現地に視察へいらっしやり、デフリンピックは今までにないほど大きな注目を集めています。デフスポーツやろう者、手話への理解がますます高まってきているのだと、実感させられた大会でした。これもひとえに、連盟や各スポーツ団体をはじめ、皆さんの日頃からの努力の積み重ねがあったからこそであり、感謝の気持ちでいっぱいです。このような素晴らしい大会が日本でも開催できたらと願ってやみません。日本で開催できるまで、まだまだ多くの課題が残っていますが、慌てず一歩一歩確実に、皆さんと力を合わせて一緒に解決していけたらと思います。

広報 古 隆喜

### 1. 自己の役割とその評価、団体内の担当とその内容

今回広報担当として選出され、7月14日～8月1日までの間、各競技に出場する日本選手の活躍、視覚的なルール、コミュニケーションなどのデフリンピックの特徴的な場面を写真と映像にて記録し、Facebookと今大会特設ホームページに掲載しました。また、撮影した写真を取り入れた競技結果の内容のプレスリリースも取り入れて日本国民に知らせるという役割も担いました。さらに、デフリンピックの特徴である視覚的なルールやコミュニケーション（国際手話）などを撮影した写真と映像を今後作成する啓発パンフレットやDVDの材料として収集する役割も担っています。

メディア班としては、カメラ担当の狩野氏（ろう者）、ビデオカメラ担当の近藤氏（聞こえる人）が構成メンバーに入っていました。出発前に前作業として狩野氏と近藤氏とサムスンデフリンピックでの撮影ポイントや位置付け、作業内容、データの受け渡し方法など、選手団広報としての体制をメールにて確認しました。しかし、当日に本部スタッフ全員が選手村で宿泊するはずが、主催側の手配ミスで部屋数が足りず、日本代表選手団のスタッフとメディア班メンバーの数名が別のホテルに宿泊することになりました。当初の予定では広報メディアメンバーはWi-Fi環境の整っている選手村にて写真データ変換や映像データ編集を行う予定でした。しかし、確保できたホテルは20km離れている上、Wi-Fi通信速度が遅く、写真や映像などのデータをスムーズに送ることができませんでした。本部とメディア班の連絡などの体制を整えたり、スムーズなデータの受け渡し方法を模索するなど、色々工夫しましたが、厳しい状況でした。

また、新聞社やメディア関係の多くから写真や映像データを

要求されていましたが、インターネット環境が悪い上に、1日に行われる競技の全てにメディア班として対応するには時間が限られており、結局は競技期間中はほぼ毎日22時～23時頃にホテルに帰着次第、編集作業に取り掛かることになり、疲労や睡眠不足が蓄積していました。5日間ほどその状況が続きましたが、ホテルに有線LAN設備のある部屋があることを知り、急遽メディア体制を変更し、速報のFacebookや緊急性が高いプレスリリース、インタビュー対応は本部へ窓口業務を委ね、メディア班は1日に撮影した写真や映像をすぐ編集して、変換したデータを本部へファイル転送を行う体制をとりました。ただし撮影した写真データは特殊なソフトでない他のパソコンではJPGファイルに変換ができない、また1枚の変換に相当な時間がかかってしまうために限られた数でしかピックアップJPG変換を行うことができませんでした。映像データも同じく特殊なソフトがない限り変換が難しく、編集にも変換にも時間がかかりました。映像データの容量は写真の容量よりかなり重く、アップロードに時間がかかってしまうのです。

期間中の各競技場までの交通方法は、最初は本部の手配した車で行いましたが、1台しかなく、選手の命に関わることつまりメディカル班の移動ルートを優先しているため、広報として希望する各競技場への移動は叶わず、メディア班としてはデメリットを感じました。

サムスンに着いてから1週間ほど経つと、環境や交通方法が掴めてきてメディア班として本部車を使わず、かつ費用負担の無いルートを利用してなんとか希望する各競技場への移動ができるようになりました。しかし、徒歩や電車の場合はカメラマンとビデオカメラマンの重い機材は身体への負担が大きく、疲労も大きくなりました。そのため、持ち運びやすい工夫するなどフォローしあったり、アクセサリやメディアセンターから巡回しているバスに乗車して、負担を減らす事が出来ました。

メディア会議においては、最初の説明会には問題ありませんでしたが、会議の招待メール通りに行ってみると実施されていなかったり、場所が突然変更になったり、実行委員会の組織内部がきちんと連携を取れていないと思われることがありました。その時はその場にいたメディア担当者やボランティアに確認することができましたが、聞こえる人で手話ができない担当者が多かったです。英語での筆談でなんとか把握できましたが、ろう者に対する理解はそこまで周知されていないと感じました。

自分は、2009年台北デフリンピックには選手として出場していましたが、広報担当としては初めてデフリンピックに行きました。行って一番驚いたのは今大会の各競技場のメディア環境でした。Wi-Fi環境、有線LAN、テレビ局メディア機器、ドローン等々の設備が整えられていました。開幕式では、巨大なスクリーンに国際手話通訳者とトルコ手話通訳者が映し出されており、視覚的に分かりやすい部分が多く、また選手の入場行進も見やすく工夫されていると感じました。開閉幕式の内容は台北デフリンピックと同等に感じられるほどの迫力ある内容でした。それだけではなく、国際手話通訳者とボランティアの多さに驚きました。実行委員会は5年前からトルコ手話と国際手話講座を講義し、手話の学習を積み重ねてきたと聞きました。メディア環境の課題も多くありましたが、なんとか本部スタッフの皆様と選手の皆様のご協力のおかげで乗り越えることができました。

カルチャーショックもありましたが、今までにない体験もで

きて大変勉強になりました。この経験を忘れず地元を持ち帰って今後の活動に生かして頑張っていきたいと思います。

## 2. 今後の課題、反省・まとめなど

- ・メディア班は本部と同じく選手村に滞在すべきでした。本部との連携が難しく、会議に出席するため選手村までの交通方法が不便であり、行き帰りの時間もかかって勿体なかったです。ホテルのWi-Fi環境が乏しく、全く使えなかったことが今回の一番の課題であると考えます。有線LANのある部屋があったのが幸いでした。
- ・カメラマンが競技場から別競技場へ向かう為に1時間以上重いカメラ機器を抱えて歩くことで肩を負傷してしまったり、軽い熱中症を発症していました。ホテルにいたメディカル担当に診てもらいなんとか回復できましたが、外出後の編集作業なども抱えており、疲労と睡眠不足で身体への負担は大きく、メディア担当の人数を増やすべきだと考えます。
- ・編集できる写真と映像の特殊なソフトについては、事前に確認していなかった為、編集のフォローが出来ませんでした。ソフトの種類も確認すべきでした。
- ・重さのあるカメラ機器とビデオカメラ機器を考慮して、計画的にスムーズに移動できるように本部車は3台以上あったほうが良いです。各競技場は密集しているわけではなく、交通が便利とは限りません。
- ・HDDは個別に持参している為、種類や要領などにバラツキがあり、一つにまとめられるよう本部用のHDDを用意した方が良いと思います。
- ・最初から監督ミーティングも実施すべきでした。そうすればメディア班として日本代表選手出場の情報を知るため、またインタビューできる時間や交通方法などを明確に知ることができて連携しやすく、TD会議の内容や報告などについても情報交換の場が必要と考えます。
- ・総監督は監督やスタッフ、選手に励ましや情報、意見交換が重要な役割であるため、ホテルよりも選手がいる選手村に滞在すべきであると考えます。

## メディカル（医師） 立石 智彦

### 1. 自己の役割とその評価

前大会、前冬季大会に続き3回目の帯同でした。手話はまだまだ勉強中ですがメディカルサポートは少しずつ継続性をもって、選手に良い情報や環境を提供していければと思いました。ブルガリア大会は内科・外科という分け方でしたが、今回は選手firstで考え男女1名ずつのサポートになりました。どうしても性別が違うと相談しにくいこともありますので今後もこの方向性が良いと思いました。

まず帯同が決まって、メディカルチェックとして3月に調書と健康診断書の確認し、追加検査の場合はお願いしました。薬のチェックに関しては、JPCの草野修輔先生、スポーツファーマシスト兼選手(主将/自転車)の早瀬久美氏に多大なるサポートをいただき、感謝しております。トルコの薬の持ち込みは制限が多く、申告等の手続きにて色々とお世話になりました。また、旅立つ前から在トルコ日本大使館医務官：伊東貴雄先生にも現地情報や緊急時に連絡とりあえる体制を構築していただき本当に心強く思いました。幸い伊東医務官に連絡をしなればならないような緊急事態は起こらず助かりましたが、このような“備えあれば憂いなし”のサポートあってこそではないかと思

いました。

6月25日に行われたオリエンテーションで多くの方と顔合わせできたことも、今大会に向けてよかったと思います。また10年以上本部メディカルサポートしていただいている中島幸則先生（アスレティックトレーナー）には、大会前から大会期間中の後方サポートをお願いしました。

メディカルスタッフは、合計6名

医師：男性 立石 女性 松村 / 中村

トレーナー：男性 平田 女性 砂川

看護師：鯨井

大会としてこの4年間で変化を感じました。

- ・スポーツ庁・外務省・日本障がい者スポーツ協会などのサポートがより強く現場に反映され選手の励みになっていました。
- ・日本でも多く大会期間中報道があり、また帰国の時の報道陣の多さには驚きました。今大会を通じて情報を得るスピード、連絡を取るのにLINEなどSNSでの情報の共有スピードが格段にアップしたことが我々メディカルでも手に取るように感じられました。特に“文字での伝達が重要なツール”となるろう者のスポーツ大会では今後必須になるのではないかと感じました。
- ・メディカル部門としては、聴力検査を行う人数が前回大会の倍以上になっていた（正確な集計はできておりませんが約2割）こと、ドーピングコントロールは優勝者や大会新記録の選手が必ずしも行われていたわけではなく、検査の頻度にはややばらつきがあったように思われるなどが感じられました。

今後注目されるようになればなるほど、選手の自覚・責任が必要となり、メディカルスタッフの責任やニーズも多くなってくるものと思います。各競技団体のメディカルスタッフ（ドクター・トレーナー）も増員する必要も出てくる中で、ろう者のマインドをより理解したスタッフによるPlayer's firstの献身的なサポートができる、しかも継続性のある体制を構築していくことが必要となってくると思います。また、このたびデフリンピックのサポート体制作りと並行してスポーツ委員会の中に専門委員会として医科学委員会を作っていただくことになりました。前出の中島幸則氏・早瀬久美氏とその一員に加えていただいております。今後とも選手たちがより良いコンディションで羽ばたけるようサポートしてゆく所存です。よろしく願いいたします。

## メディカル（医師） 中村 香織

今回初めて、デフリンピックのサポートをさせていただきました。私は松村医師と交代で後半の7月24日～8月1日までの期間、立石医師、鯨井看護師、トレーナーと一緒に本部ドクターとして活動させていただきました。遠方・後半のため事前準備は書類確認のみにて、研修会、移動時帯同、及びメディカルルーム、トレーナールーム整備は他の皆様にお任せさせていただきました。後半も前半に引き続き、大会のスケジュールに応じて医師1人及び看護師が村内待機、医師一人、トレーナー1人もしくは1人が競技場巡回を行いました。

後半期間中のメディカルルーム受診に関して、7人軽度の胃腸炎での受診がありましたがいずれも重症度は低く、整腸剤内服にて改善が得られる程度でした。各チームの選手村での食事に対する具体的対応は確認出来ておりませんが、選手村の食事

に関して、種類や多様性、栄養面では不十分であるものの生野菜や油による大きな問題はありませんでした。気温は28～30度程度であり熱中症症状での受診のあった選手はビーチバレーの1人のみで重症には至りませんでした。外科系疾患に関しては現地病院受診、検査が必要となる障害はありませんでした。処方薬に関して整腸剤、感冒薬等準備があったものの受診が想定より多く不足する事態となりました。今回不足及び必要となった薬品の準備ともに各競技団体への予防・事前対策の周知の徹底で改善できると考えます。

メディカルルーム受診の際には希望を確認してからとなりますが、ほぼ必ず手話通訳をお願いしました。はじめ問診時に診察時の通訳を希望されなかった選手も通訳を介すことで理解の程度が深まり、スムーズなコミュニケーションがとれるため、後半診察時はほぼ全員に通訳をお願いしていました。また問診時のコミュニケーション補助のため、痛み評価のグラスゴースケール・便の性状評価のプリストルスケールを使用し、視覚的に分かりやすいようスケール表を作成し、問診時に使用しました。加えて薬の飲み違えを防ぐため処方薬の内容、内服方法を表にして薬と一緒に渡しました。メディカルルーム受診の際には必ず手話通訳をお願いすることでお互いのコミュニケーションはスムーズに図れるようになりましたが、それでも理解の相違があることが多いため、視覚的に分かりやすい評価表を使用することで情報が得やすくなりました。自身もまだ勉強不足であり、手話を使用できればコミュニケーションのギャップが小さくなるとは思いますが、医療用語や、緊急時の対応、お互いの理解の相違に気が付かないことも多いため、視覚的にもお互い理解しやすいスケールやポスターを増やしていければ良いと思います。

今回競技団体によりトレーナーが到着してから選手の健康管理やコンディショニングが顕著に改善されたという傾向がありました。選手のパフォーマンス向上のためにも各競技団体との連携、サポート体制を確立して連絡を密に行うことが重要と考えます。もちろん各競技団体で諸事情が異なりますが、今回、トレーナー帯同の有無、及び医師帯同の有無それぞれ異なった課題がでてきたため、今後各競技団体で行うべきベースラインと、本部で行うべき内容をより明確にする必要があると感じました。

今回、遠征帯同の機会を与えて頂きました連盟の皆様、デフリンピック準備から現場での各種対応頂いた本部スタッフの皆様、また選手の皆様に感謝を申し上げます。今後、より良いサポート活動ができるようこの貴重な経験を活かしていきたいと考えております。

## メディカル（医師） 松村 恵津子

今大会のメディカルスタッフは、医師2人、トレーナー2人、看護師1人でした。私は、本部メディカルの医師として前半7月14日～25日に帯同させていただきました。

出発前に日本選手団全員の健康診断書を元にメディカルチェックを行い、選手の既往や内服薬、コミュニケーションの希望を把握し、中島幸則先生のご協力のもと日本選手団全体のチーム状況（トレーナーの有無など）の情報を得ることができました。またトルコは内服薬の持ち込みの規制が厳しいため、自転車競技選手兼スポーツファーマシストの早瀬久美さんに内服薬のチェックと申請をしていただきました。さらに本部スタッフと各競技団体スタッフで事前ミーティングを行ってトル

この医療状況や環境、水制限などについて各事前調査の情報を共有する機会がありました。

大会開催2日前に選手村に入り、本部横にメディカルルーム、トレーナールームを設置し、各競技場の視察を行いました。大会中は2班に分かれ選手村待機組と外傷が多い競技・トレーナー不在の競技を中心に会場へ巡回する組に分かれ活動しました。メディカルルームの利用方法は事前のマニュアルより変更し、選手の動きに合わせて朝6時から夜は試合終了後までとしSNS（LINE）で連絡をもらってから来ていただくようにしました。

大会中は、SNSを使って毎朝チームスタッフより選手の体調報告をお願いし、全チームの選手の状態把握するようにしました。またドーピングコントロールなどの情報がわかれば、すぐ他の競技にもSNSを通して情報を共有しました。

コミュニケーションについては基本、診療は手話通訳をお願いしました。その他ホワイトボードを使用する場合もありましたが、自分も手話ができればもっとよかったですと感じました。

大会中、2件の救急搬送がありましたが、いずれも医師と一緒に乗り合わせることができ、搬送先の病院より情報を引き継いで本部でもスムーズに治療を継続することができました。

大会本部の事情で予測不可能なことが多く、突然の聴力検査や長い待ち時間、交通事情などでの疲労が重なり選手はコンディション作りには苦労したと考えます。また、内科疾患（風邪症状、胃腸障害）については、選手村の環境（空調がなく窓の解放、扇風機連続使用）、食事（栄養バランスの偏り、生野菜）、気温の変動などが一つの要因と考えられ、海外遠征で起こりうる事象として事前の準備である程度は予防することができたなと思いました。幸い感染性胃腸炎や、風邪が蔓延することはありませんでした。各競技団体レベルの管理問題ではありますが、競技団体により環境と情報にばらつきがあり、栄養指導を含めて今後本部メディカルがお手伝いできる部分ではないかと考えます。

デフリンピックの日本選手団により良い環境を作り、活躍していただくために大会中のサポートはもちろん日頃、スポーツ医学の勉強会（体調管理やパフォーマンス向上など）を選手と競技団体に行える機会が増えればと思います。

今回、中島幸則先生、立石智彦先生よりデフリンピックに帯同する機会を与えて頂き、日本選手団の皆様のご協力のもと貴重な経験をすることができました。そして、多くの感動を与えていただきました。この経験を活かし、より良いサポートができるよう努めます。本当にありがとうございました。

## アスレティックトレーナー 平田 昂大

### 1. 自己の役割とその評価

アスレティックトレーナー（AT）として、本部メディカルスタッフの一員として帯同させていただきました。今回帯同したAT2人はデフリンピック本部ATの経験がありませんでしたが、大会前から大会中に至るまでスポーツ医科学委員の中島先生にサポートしていただいたことで円滑に準備を進めることができました。

今回の本部ATは男女1人ずつで、そのうち1人は日本障がい者スポーツ協会公認の障がい者スポーツトレーナーと日本体育協会公認AT（JASA-AT）の資格を有し、もう1人はJASA-ATと鍼灸あん摩マッサージ師の資格を有しており互いの得意分野を活かしたサポートができたのではないかと感じています。

今大会では選手村内に設置された日本選手団本部に隣接する形でメディカルルーム（医師・看護師）、トレーナールーム（AT）を設置することができました。1人のATがトレーナールームに常駐し、もう1人が各競技会場を回るようにしました。外回りでは各競技のスタッフと連携を図るとともに、各会場に設置された医務室、会場ドクター体制、水や氷の配給状況の確認を行いました。また、卓球と空手は帯同トレーナーがいなかったため優先的に回りました。

各競技団体との連絡はLINEグループを作成し、毎朝のコンディション報告とメディカル・トレーナールーム利用の連絡、現地の氷に関する情報発信を行いました。

### 【トレーナールーム利用者数】

メディカル・トレーナールーム開設の16日間で延べ130人の選手対応を行いました。その内トレーナールームの利用は22人でした。前大会の利用者数91人から大幅に減少しています。これは前回大会と比べて各競技団体の帯同トレーナーが増えたことに関係していると考えられます。最も利用が多かった競技はサッカー、空手、水泳の順でした。サッカーは帯同トレーナー1人に対し選手が約20人と多いこと、空手は帯同トレーナーがいなかったことが利用理由であると考えられます。また水泳は帯同トレーナーが到着する前の対応でした。

利用時間については、当初8時～20時で開設しましたが、早朝または夜遅い時間帯の利用が多かったため、ドクター1人トレーナー1人がそれぞれメディカルルームとトレーナールームに宿泊するように変更しました。今後もこのような状況が想定されるため、開設時間を見直し、昼間はスタッフの休憩時間や外回りにあてるなど、検討の余地があると感じました。また、トレーナールームの使用用途もトレーナー対応に加えて、セルコンディショニングスペースとしての提供により力を入れた方が良いのではないかと考えます。

今大会の対応件数と内容は以下の通りです。

### <Medical/Trainer Room 対応件数>

	(延べ、件)	
	Dr./Ns.	AT
内科	66	0
整形外科	23	22
その他	19	0
計	108	22

\*その他（創傷処置、ものもらい、虫刺され）

### 【外回りでの対応状況】

本部ドクターは会場での診察、救急搬送に同行するといった対応があり、本部ATはアイシングやストレッチなど疲労回復に対する対応がありました。

外回りでの対応件数とその内容は以下の通りです。

### <外回り対応件数>

	(延べ、件)	
	Dr.	AT
診察	3	
救急搬送	2	
ストレッチ		1
アイシング		4
計	5	5

### 2. 今後の課題

今大会は本部ATが帯同した3回目の大会となりました。前回、前々回大会と比較して各競技団体に帯同しているトレー

ナススタッフが増加していました（11 競技中 2 競技）。

今後の課題及び検討事項を以下に箇条書きで示します。

- ・ホテルや会場での氷の手配が不確実であることが予想されるため、ホテルや選手村の冷凍庫の設置状況を事前に確認する必要がある。
- ・冷凍庫が確認できた場合、各競技団体、本部 AT が各自で氷を作れるように製氷皿を用意することが望ましい。
- ・各競技団体の帯同トレーナーが増えてきたことから、各競技団体との連携やトレーナールームの活用方法について検討の余地がある。
- ・各競技団体一つ一つにメディカルスタッフの継続的な帯同が必要であるとともに、それらをサポートする本部メディカルスタッフもスポーツ医学委員会を中心にコンセンサスをもって各競技の国際大会やろう者アジア大会などで継続して活動を行い、経験を蓄積していくことが必要である。

## アスレティックトレーナー 砂川 あゆ未

### 1. 自己の役割とその評価

今大会、本部のアスレティックトレーナー（以下 AT）として帯同させていただきました。前大会であるソフィアデフリンピックでは女子サッカー AT として帯同し、台湾で行われた第 8 回アジア太平洋ろう者競技大会では本部 AT として帯同させていただいたことはありましたが、デフリンピックの本部 AT としては初めてとなります。今大会で本部スタッフとして AT が派遣されるようになり 3 度目となりましたが、今まで帯同されていた中島幸則先生が今大会では帯同されなかったため、中島先生サポートの元準備から現地でもアドバイスを頂いて円滑に業務を行うことができたと思います。

各競技団体において AT やメディカルスタッフが帯同する競技が増えている中、本部メディカルチームとして活動体制を確立すること、各競技団体との円滑な連携を取ることを目標に今大会に臨みました。

本部 AT 2 人はどちらも日本体育協会公認アスレティックトレーナーを有し、平田氏は障がい者スポーツ協会公認アスレティックトレーナー、私は鍼灸あん摩マッサージ指圧師を持ち、お互い共通理解のもと各々の分野を活かすサポートができたと思います。

活動体制については、選手村にはメディカルルーム（医師、看護師）とトレーナールーム（AT）が設置され、整形外科的な問題であればメディカルルームにて医師の診断の元、トレーナールームでのコンディショニングを実施しました。また、メディカルチームの実際の動きは、医師と AT 1 人ずつ 2 班に分かれて本部待機班と各競技を回る班として活動しました。

今大会におけるトレーナールーム利用数は 22 件であり、前

#### <実施内容>

	(延べ、件)
超音波治療	14
電気治療	6
ストレッチング	5
鍼灸	4
アイシング	3
テーピング	2
運動療法	1
コンディショニング指導	1
マッサージ	1

大会の 91 件と比較すると大幅に減少しています。これは各競技団体に AT あるいはメディカルスタッフが帯同するようになったためだと考えられます。今大会ではトレーナーが不在であった競技団体は卓球と空手のみでした。卓球チームには今大会は帯同されていませんでしたがトレーナースタッフがいるため、実際は空手のみと考えられます。以前より各競技団体に AT あるいはメディカルスタッフが帯同するようになっていることは喜ばしいことである反面、トレーナールームの提供の在り方を改めて考え直す機会でもありました。また各競技団体のメディカルスタッフも多様であるために、共通理解を得られるような準備も必要であると思いました。

各競技を回る上ではトレーナースタッフがいない競技、受傷の可能性が高い競技を優先に、全競技回るようにしました。実際に回っていく上で、医師あるいは AT がチームのサポートにあたることもあったので、医師と AT が 2 班に分かれて各競技を回ることの必要性を感じました。

今大会より、初めて各競技トレーナースタッフと LINE を活用したコミュニケーションを取ることを試みました。以前から各競技トレーナースタッフと本部メディカルスタッフの直接的な連絡手段が現地携帯のみ、あるいはメーリングリストを作るなどの案もでておりましたが、昨今の主な連絡手段である LINE を活用することでスムーズな連絡を取り合うことができたので、今後もこういった連絡手段は有用であると感じました。ただ現地についてから当該スタッフと連絡を取り合うようになったので、予め LINE グループを作成しておけば大会に影響が出るような選手の怪我や体調不良について共有しやすいのではないかと思います。

### 2. 今後の課題

今後の課題については、まずほとんどの各競技団体にトレーナースタッフが帯同されるようになったため、各競技トレーナースタッフと本部メディカルスタッフの打ち合わせの場を事前に設けたほうが良いかと思います。各競技団体と本部の研修会の日は設けてありましたが、トレーナースタッフとは打ち合わせの場はなく、競技団体トレーナーより個人的に本部メディカル体制について質問を受けることがありました。選手の状況やメディカル体制についてそこで話し合うことができれば、実際に大会中のコミュニケーションもさらに円滑に行われるのではないかと思います。

また、トレーナールームの提供については先ほども述べました通り、以前と競技団体のトレーナー事情も変化している中で改めてトレーナールームについても見直しても良いかと思います。

氷や水等現地手配するものに関しては、大会本部からの情報と実際が異なることも多々あると思うので、ない場合に際してどのような対応をするのか、予めあらゆるパターンを考えておけるとより臨機応変に現地で対応しやすくなると思います。

最後になりましたが、今大会において一緒に活動できました日本選手団の皆様、応援して下さった皆様、全ての方々に感謝申し上げます。

看護師 鯨井 恵子

### 1. 自己の役割とその評価

2017 年 7 月 14 日～ 30 日において、本部メディカルチームの看護師として、選手・スタッフ・177 名の健康管理、体

調不良、病気、怪我の対応・治療に帯同医師、アスレティックトレーナーと共に看護業務に付きましました。選手団は、練習・試合前後における身体ケアは、コンディショニングを行うアスレティックトレーナーが対応し、病気や怪我に対しては医師が対応するため、メディカルチーム内での情報共有のための、情報を整理し情報提供を行いました。

#### 【メディカルルームの設置】

選手村D棟最上階9階本部に隣接した2部屋をメディカルルームにあて診療室・トレーナールームとして環境調整を行いました。感染症の疑いがある選手・スタッフを集団から隔離し休養できる様にしました。

出発当日、トルコへ向かう飛行機内で発熱した選手がいたため、到着後選手村内の大学病院へ医師付き添いのもと搬送し点滴を受け解熱が確認されるまで、メディカルルームで隔離対応しました。スタッフの発熱に対しても持参していた点滴を行い隔離対応しました。診療時間は、選手の利用状況を考慮し開設当初しばらくの間、早朝6時から診療を行い、練習や試合に出発する前に受診できるようにし、夜は練習や試合を終え選手村へ戻ってから、受診できるようにと、特に時間決めずに対応し、不在時や緊急時は、メディカル専用の携帯電話や、LINE 連絡を利用しながら対応することとし、各チームからは毎朝メディカルLINEに選手やスタッフの体調報告なども入るようにしていました。

毎日行われるミーティングでは、メディカルスタッフの翌日の行動予定や、診療状況の報告などを行い他の本部スタッフとの情報共有をはかっていました。医師とアスレティックトレーナー2人はホテル宿泊でしたが、早朝からの診察に備え交代で選手村宿泊し、対応していました。

選手とのコミュニケーションは、手話通訳の方々を介して行ったり、筆談で行いました。今回下痢症状を訴える選手も多く、下痢の状態を確認するためブリストルスケール表を使用し便の性状を7段階評価で可視化して共通理解できる形を取りました。薬の飲み方もメモを渡す形式を取り、手話通訳の方の説明をより理解しやすい方法を取りました。

## 2. 今後の課題

今回は、整腸剤・感冒薬・外傷処置に必要なガーゼ・包帯・被覆剤が不足し、ガーゼなどは現地で購入して対応しました。外傷用の軟膏類や、眼科の点眼薬などの準備もあったほうが良いと思いました。部屋の使い方として、可能であれば隔離・静養できる部屋の準備も必要ではないかと思いました。

問診票の内容について、見直しを行ってチェックリスト形式+記入式にし、受診時にチェックしてもらうような方式を検討してみるのはいかがでしょうか。薬剤を渡す際の小分け袋や用法用量を書いて薬と一緒に渡せるようにすることなど今後の検討課題と感じました。

## 3. 反省とまとめ

今回のデフリンピックは、サムスンまで12時間超の移動時間を要したこともあり、到着早々体調不良を訴える選手スタッフもいたため、メディカルとしての準備が整わない状況の中で、準備をしながらの対応でした。時間が経過すると共に、現地の環境にも慣れてきたことありますが、想定外の事象などもある中、メディカルスタッフ・本部スタッフの連携のもと無事大会を終えることが出来ました。これは、帯同スタッフ間の円滑な人間関係を築くことができたためではないかと感じています。今回このようなスポーツ大会に、看護師として参加し、

召し駆るチームのメンバーとして必要な看護ケアを提供できていたか、看護師としての役割を果たせたかどうか振り返りつつ、この経験を今後の看護へ繋げられるよう努力します。

手話通訳 長山 綾  
加藤 かおり  
黒石 恵子

## 1. 自己の役割とその評価

本部手話通訳者として帯同させて頂いた3人より、業務内容と所感、課題を報告させていただきます。

### 【業務内容】

#### ア) ローテーション

外勤・内勤・休憩または待機とローテーションを下記の通り組みました。

本部の宿泊場所が選手村と離れたホテルの2ヶ所となり、状況を見ながら調整しました。ミーティング後それぞれの動きをSNSで確認し、急な予定変更時はその都度連絡を取り柔軟に対応しました。休憩もできるだけ取るように努めました。

	長山	加藤	黒石
7/16	外	外	A+B
7/17	A+ 外	A+B	AM 外 +C
7/18	A+ 結団式 + 外 + 開会式	結団式 + 外 + 開会式	A+ 結団式 + 開会式
7/19	外	A+B	外
7/20	外	外	A+B
7/21	OFF	A+B	A+C
7/22	AM 外 +C	A	PM 外
7/23	AM 外 +C	早 +PM 外	A
7/24	A+ 外	AM 外、PM OFF	早 +C
7/25	A	C	早 +AM 外
7/26	A+ 外	早 +C	AM 外、PM OFF
7/27	早 +C	外	A
7/28	外	AM 外 +C	早 +A+B
7/29	AM 外 +C	早 +A+B	外
7/30	早 + 解団式 + 閉会式	解団式 + 外 + 閉会式	解団式 + 閉会式
7/31	帰国		
8/1	帰国後、記者対応		

早…6時～9時、A…8時～13時、B…13時～15時、C…15時～21時  
外…団長・VIP・メディカル同行、OFF、空いてる時間は休息

#### イ) メディカル通訳

メディカルスタッフが競技場や選手村内のメディカルルームで選手・スタッフに対して体調不良、ケガの治療、経過観察等で訪れた際の手話通訳を行いました。また途中より早朝メディカルも交替で実施しました。開始当初、通訳者不在で対応していることがあり、すぐに連携を取り改善しました。事前にメディカル利用時についてのアンケートが行われていたようですが、通訳者に共有されていませんでした。打合せで通訳者の任務をきちんと確認しておくべきでした。

#### ウ) ぞ来賓の通訳

スポーツ庁長官、参議院議員、在トルコ日本大使館が来訪され、食事会や各競技場を案内された際に団長に同行し手話通訳

を行いました。

#### エ) 本部ミーティング時の通訳

各担当から一日の出来事、課題、明日の予定等が報告されていましたが、通訳者の報告は特に設けられていませんでした。通訳者は意見を出して良いのか不明瞭だったこともその一因です。この項目に限らず、通訳者の立場や役割、本部の中での位置づけに最後まで納得できる答えを見出せず試行錯誤を繰り返しました。また、スケジュール等の都合上、ミーティングは全員出席が叶わず情報共有に限界を感じました。その場の雰囲気や経緯まで全ては伝えられず、伝達力が必要とされました。ミーティングはとても大切な時間であり、物理的な課題はあるにせよ日々皆が顔を合わせられる工夫や努力は必要と感じました。

#### オ) 監督会議、結団式、解団式の通訳について

日本選手団としての結束力を高めるためのとても大切な機会でした。しかし、資料を確認する時間が思うように取れず、打ち合わせも十分とは言えませんでした。通訳時の資料を通訳者側で情報収集し準備することもありました。会議や式典、マスクミ対応等を通して、スポーツ用語や競技の専門用語が飛び交い、事前の勉強や知識不足を痛感しました。手話のみならず、大会に関する専門用語や競技ルールの事前学習がとても重要です。

#### カ) チームワークについて

離れている宿泊場所や移動時間等の拘束もあり、日々の報告や打合せ等、顔を合わせて話をする時間が十分に取れず、お互いの状況を把握できませんでした。やはり、宿泊場所は1か所にまとめることが全員の心をつなぐための最善策であると思います。そのような中でも3人で会えるときはできるだけ話し、SNS等を通じての状況報告等をそれぞれが工夫し、最終日まで役割を全うするよう努めました。海外という特殊な環境と177人の大所帯のなか、3人の手話通訳体制は妥当であり、今後も3人体制の継続は必要です。

## 2. 今後の課題

- ① 出発前に手話通訳者全員で顔合わせをすること
- ② 本部担当者間の業務を理解共有すること
- ③ 毎日通訳者ミーティングを行うこと
- ④ メディカル時は同性通訳者とする
- ⑤ 多様なコミュニケーションに対応できるようにすること
- ⑥ デフリンピック認知度向上について

初めて関わる立場にとって、経験者から話を聞きイメージを持つ時間は必要ですが、当日まで通訳者全員で会えず、不安を感じました。競技団体とは違い、知り合い同士ではない人たちが集まるのが本部なので、双方の業務内容を把握する機会は必要であり、その中で本部において手話通訳者の役割も確認できたと感じました。調整の結果やむを得ず女性3人となったが、プライバシーを守る意味でも男女の通訳者は必要です。予想を超える事態も多く起こりましたが、その都度声をかけあう雰囲気があったのは救いでした。

デフリンピック本部手話通訳者となり、多くの貴重な経験と成長する機会を頂きました。選手の頑張りを間近で感じ、本部の方々をはじめ見えない部分の努力に気づき、サムスン市挙げてデフリンピックを盛り上げようとする温かさを感じられたこと等全てが大切な財産となりました。今後も関わらせていただいた経験を忘れず、デフリンピックが多くの国民から注目されるよう、私たちにできることをしていきたいと思っております。

## 1. 自己の役割とその評価

### 【輸送班の役割】

- ・選手および荷物の輸送手配、管理
- ・トルコ語通訳の手配、管理・大会実行委員会との折衝
- ・選手村および本部ホテルの手配、管理
- ・日本選手団本部の運営補助・選手団本部車両の運行

### 【自己の役割についての評価】

- ・選手および荷物の輸送手配、管理

トルコ航空と2016年後半より綿密な打ち合わせを行っていた為、渡航日程が決定した後、スムーズな行程を手配することが出来ました。一部、乗り継ぎ時間が長時間になるパターンも発生したものの、休憩用ホテルを手配することにより解決しました。往復の荷物運搬についても結果的に紛失等なく完了しましたが、復路についてはサムスン空港までの荷物トラックの遅延やイスタンブールでの70個のロストバゲージがあり、通訳とともに強く交渉を行う事象が発生しました。尚、陸上競技のポールは航空貨物での運搬となりましたが、近鉄エクスプレスがグループ会社として綿密な連携を行えた為、予定通りの運搬ができました。

- ・トルコ語通訳の手配、管理

通訳1人と現地手配会社の日本人スタッフを下見より継続的に業務に従事してもらい、継続的に実行委員会と日本選手団との橋渡し役として活動をしてもらっていた為、大会期間中においても日本選手団運営を円滑に進めていく大きな助けとなりました。

- ・大会実行委員会との折衝

日本選手団担当のボランティア3人が窓口として様々な調整にしっかりとトルコ語通訳と連携して取り組んでもらえたことで、実行委員会への依頼や要望、情報伝達がスムーズに行えました。

- ・選手村および本部ホテルの手配、管理

選手村での提供室数がサムスン入り以前に連絡がなく、事前準備として7月11日に選手村入りをした際に要望よりも少ない部屋数しか提供されない事が判明するという事態が発生しましたが、バックアップホテルを手配していたことで、何とか全員が宿泊することができました。しかしながら、選手の要望を必ずしも叶えることはできませんでした。

- ・日本選手団本部の運営補助

日本選手団本部業務の補助として、必要物品の調達や情報収集を主な業務として行い、業務の円滑化に努め、本部業務が支障をきたすことなく進みました。

- ・選手団本部車両の運行

毎日の本部車両の運行管理においては、試合のスケジュールやメディカル・メディアの業務内容に応じて適切なコントロールを行うことができましたが、選手村とホテルが離れていることでスムーズな運航を阻害することがありました。

## 2. 今後の課題

今回、全体的にはスムーズに大会期間を終えることができたが、開幕までにすべての準備が整ってはならず、開幕後に次第に体制が整っていくような状況だった事に加え、直前での変更も数々あった為、情報を収集し、必要なものを整え、日本選手団に展開するという作業に大きな労力を使う事になりました。ただ、今回も日本選手団の出発前に事前準備期間を設けたことにより、実行委員会とのミーティングや現地での各セク

ション担当者との人間関係構築が出来ていたため、そのような状況でも対処ができていました。実行委員会の準備状況については各国の文化や財政により変わり、いずれにしても日本のような流れで準備は進んでいきません。よって、今後の大会においても開幕1週間前には一部スタッフが現場入りをして準備を進めていき、より選手への環境提供を実現できるようにすべきと考えます。

## 事務局 岡安 澄子

### (1)総務スタッフの業務

#### ①各デフスポーツ競技団体との連絡調整

今回のデフリンピック選手及びスタッフ選考の「指針」を2015年11月に発表し、それに基づき各競技団体から選手・スタッフの推薦調書の提出をお願いしました。各競技団体には連絡窓口担当者を決めていただき、その後の連絡が窓口担当者を通して行いました。専従の職員スタッフなどがいない中、各担当者には細々した調整や確認に対応していただきましたこと、感謝申し上げます。事務局から各競技団体へ依頼した内容は下記の通りです。

- ・選出予定選手・スタッフの報告
- ・推薦調書のまとめ、提出
- ・選手・スタッフの推薦（履歴書等の作成依頼）
- ・各競技選手・スタッフへ、内定承諾書、ユニフォームオーダー表、会員確認書、薬物調書、聴力検査表、健康診断書等のとりまとめ提出
- ・勤務先への派遣協力依頼の調整
- ・壮行会・帰国報告会・ご接見等の調整
- ・このほか、旅行会社から依頼した荷物アンケート、パスポート情報、IDカード用写真などのとりまとめ

#### ②通訳者の確保

トルコでの音声言語はトルコ語がメインになり、英語はほとんど通じないということから、音声言語通訳は、日本語-トルコ語の通訳者を準備しました。これについては、近畿日本ツーリストを通じて、事前下見の時からお世話になった現地ガイドに依頼をすることができました。トルコ人の男性と日本人の女性の2人をお願いできたので、それぞれの持ち味を生かすことができたと思います。また、現地では組織委員会からの情報がなかなか入ってこないこともあり、現場での交渉事などにも大いに活躍していただきました。

手話通訳者については、本部スタッフ内での通訳および、選手と本部メディカルスタッフとの通訳が必要となります。従来通り、一般社団法人全国手話通訳問題研究会へ依頼し2人を手配いただきました。もう1人は本部でお世話になっている方を通じて協力いただくことができました。今回の手話通訳者は3人とも女性でしたが、診察時の通訳などを考慮すると、男性の通訳者も必要と考えます。しかし、手話通訳の技術に長けていることはもちろんのこと、約3週間という長期の海外同行のためには、職場の理解や金銭的な補償の無い中での理解を得ることは大変厳しいものがあります。専門職である手話通訳者の確保については、各競技団体に帯同する手話通訳者も同様のことが課題になると思います。

先述の通り、トルコ国内では英語はほとんど通じませんが、組織委員会やICSDからの連絡は英語が使用されているため、書記英語は必要となります。また、公用語としては国際手話が

使用されます。今回は本部スタッフの中に英語および国際手話ができる者がおり、組織委員会やICSDへの連絡・交渉は本部スタッフが兼ねて行いましたが、余裕が持てるようであれば、英語および国際手話通訳の帯同ができればベターであると考えます。

#### ③メディカルスタッフの編成

ドクター2人、アスレチックトレーナー2人、看護師1人の体制を組みました。国際大会へのメディカルスタッフの恒常的なチームを確立することを主目的に、2017年度より連盟スポーツ委員会の中に医科学委員会を設け、そのメンバーを中心にスタッフの編成を行っていきました。ドクター1人は全期間の帯同が難しく、前半・後半でバトンタッチする形を取りました。

看護師は国立障害者リハビリテーションセンターへ依頼し、職務として1人を派遣していただくことができました。

携行為医薬品の準備については、医科学委員会のメンバーであり、今回の日本選手団選手でもある早瀬久美氏にお願いして手配をしていただきました。

今回はドクターが帯同した競技団体もあり、今後、本部ドクターとチームドクターとの連携も必要であると感じました。

#### ④薬物調書・持ち込み医薬品の集計

選手には使用薬物調書を記入・提出してもらい、本部帯同のドクターのチェックの後、JPC医科学委員会の草野ドクターにチェックのご協力をいただき、数名の選手には草野ドクターから使用中止や注意などを直接ご連絡いただきました。

トルコの組織委員会から、出発前に持ち込み薬物および持ち込み医療機器の提出を求められました。このような提出を求められたのはこれまでのデフリンピックでは初めてのことでないかと思います。全選手・スタッフから提出してもらい、ここでも早瀬氏に協力をいただき、英文でのリスト作成とドーピング検査に引っかかりそうな薬物を使用している選手には注意事項を作成して連絡をしました。

#### ⑤エントリー作業

ファイナルエントリーはオンラインシステムを使って行うこととなっており、事務局にてあらかじめ入力したデータを競技団体に確認しながら作業を進めました。

また、ID用の写真は組織委員会HPの中の専用サイトを使って、事前に組織委員会に送る方法になっていましたので、事前登録をすることができました。

#### ⑥VIP対応

今回のデフリンピックでは初めて、スポーツ庁の鈴木大地長官とデフリンピック支援ワーキングチームの薬師寺みちよ参議院議員が日本から現地まで視察・応援に来ていただきました。また、事前の下見の際に、アンカラにある在トルコ日本大使館を訪問して大使に面会をしたことを契機に、トルコにいる日本人会へPRや情報の収集などに大変ご協力をいただき、大使には結団式および開会式へも出席していただけることとなりました。

そのため、組織委員会へVIP登録やホテルの情報収集などを行いました。VIPの出席に際しては、スポーツ庁および外務省大臣官房人物交流室、また在トルコ日本大使館の方々には大変お世話になりました。

#### ⑦現地での業務

現地では以下の通り業務を行いました。

- ・本部部屋・メディカルルーム・トレーナールームの設営
- ・後発で到着する選手団の出迎えと、宿泊棟までの荷物運搬の手伝い
- ・ICSD および組織委員会からの連絡事項の伝達（公式練習時間・TD 会議・開会式・閉会式等）
- ・翌日の試合の予定や試合結果の情報発信
- ・本部ミーティングの準備
- ・メディアとの連絡

今回、日本選手団の宿泊は大学の寮を利用した選手村が用意され、日本選手団は本部スタッフの一部を除き、全員が選手村で生活を共にすることとなりました。宿泊部屋は基本的に3人部屋で、日本選手団に割り当てられた部屋数が十分でなく、各競技団体の希望に沿う形にはなりません。食事は早朝から夜遅くまで食堂にて無料で提供されましたが、メニューのバリエーションが少なく、選手にとっては体調管理が大変だったかもしれません。しかし、全員が常に同じ棟にいるということで、選手や競技スタッフと本部スタッフとが、顔を合わせてコミュニケーションできたこと、またメディカルスタッフが常駐できたことはメリットであったと思います。

また、組織委員会がスマートフォンのアプリケーションを公開し、競技スケジュール・競技結果・競技会場の情報などを即時的に見ることができたので、本部・各競技団体ともに大いに活用していました。

## (2)反省・課題・まとめ

- ①障害者スポーツへの関心の高まりもあり、今回のデフリンピックに対するメディアからの問い合わせは今まで以上にあったと感じます。また、メダルを獲得した選手には帰国後に行政から報奨金が支給されたり、表彰が行われたりと、少しずつではありますがデフスポーツが注目されてきています。しかし、まだまだデフリンピックの認知度はパラリンピックに比べると低い状況にあり、そのため選手が競技を続ける上でも資金面でもネックになっており、さらなる広報活動が必要であると思っています。
- ②現地では本部部屋の開所時間を決めてはありましたが、時間内に業務が終わらずに深夜に及ぶこともありました。本部の部屋がオープンだったという良い点もありますが、本部スタッフの疲労も増していました。きちんと休憩の取れるようなローテーションを組むなど、効率の良い仕事ができるような体制を考える必要があったと反省しています。
- ③今回のデフリンピックで初めてだったことが多くありました。壮行会と帰国報告会を開催したこと、スポーツ庁長官らの視察・応援があったこと、新聞社2社が現地まで全期間の取材に入ったこと、デフリンピックの応援ソングを連盟が公認したこと、デフスポーツ以外の有名アスリートにドリームサポーターとして協力いただいたこと、選手村が設置されたこと、組織委員会がスマートフォンのアプリケーションを作成したこと、等々です。それぞれに多くの方々との協力があり、デフリンピックが開催され、そして日本選手団を派遣することができました。スタッフの方々、全国から応援をくださった方々、ご寄附をくださった方々、関係者に心より感謝申し上げます。

## 1. 自己の役割とその評価

事務局として、書類の作成等を担当し、今回は現地同行もしました。

### 【事前準備】

#### ①選手選考等における資料の提出や作成

競技団体へ提出〆切を提示しても、なかなか守れない競技団体がありました。〆切直前でも延期の依頼をすればそれでよしとする競技団体もあり、他の競技団体と並行して準備・調整を進められないこともしばしばありました。

#### ②聴力検査、健康診断書などの提出について

2015年に台湾にて第8回アジア太平洋ろう者競技大会が行われた際、新規として聴力検査を受けた選手が成長し今大会に出場しているせいか、今大会での聴力検査は24件となりました。健康診断書は今回から肺呼吸検査（スパイトメトリー）の添付が義務となったため、大きな病院での受診が必要となり、検査予約をしてから結果が出るまでにかなり時間を要さなければならぬ選手も出ました。

#### ③壮行会等イベントについて

国会議員によるデフリンピック支援ワーキングチームが発足したことをきっかけに、出発前に壮行会を開催するなど、今までにない事務活動が出てきました。事務局2人だけで様々な準備を進めていくのは困難なため、連盟職員の力を借り業務分担をしました。

#### ④現地の情報収集

本部からは団長会議も含め、下見を3度行いました。また、実行委員会のウェブサイトや連絡をもとに情報収集を試みましたが、毎度の通り、なかなか確かな情報をつかめないまま、現地入りとなってしまいました。出発前にどのように情報を取るかは大きな課題です。

### 【現地】

#### ①選手村について

大学を貸し切った選手村では、日本選手団は競技によって分かれることなく、1棟に集結することができました。

本部事務局もその棟内の会議室を使用し、いつでも自由にスタッフや選手が立ち寄れるようドアをオープンにしていました。小さな売店もあり、買い物にもそれほど不自由はしませんし、なんといっても自然の中の大学施設なので空気が良く、静かで選手がコンディションを整えるには良い環境であったと思います。

食事は薄味で米やパン、マカロニなどの炭水化物もあったため日本人に合わないということはないと思いますが、バイキング形式であり追加補充がありませんでした。そのため早い者勝ちの状態となり、場合によってはサラダしかないといったこともしばしばみられました。

選手村にはWi-Fiが完備されていました。アクセディターションカード番号を入れてログインをすれば、Wi-Fiが使えるのですが、皆が一斉にログインするため、なかなか繋がらなかったり、繋がっても速度が遅いといった状況でした。日本からもWi-Fiは持参しましたが、外出する者に渡してしまうと、本部事務局の在庫は少ないので、なかなか仕事はかどらないこともありました。

#### ②競技団体とのコミュニケーション

上記で説明をしたように本部事務局をオープンにし、一目で

見て分かるように試合の結果や翌日のスケジュールを掲示しました。また、部屋はガラス張りの部屋だったため、選手たちにも本部の仕事の状況を知ってもらうこともでき、たくさんの選手やスタッフが毎日のように顔を出してくれました。顔を合わせることで選手たちの健康状態やチーム内の状況も想定することができるので、今回の部屋の作り方は良かったと思います。

### ③本部内について

本部は大きく分けてメディカル、広報、事務方となっています。主な連絡方法にはLINEを活用しました。それぞれが自分の業務をしながらも、毎日全員でミーティングをすることを決めました。しかし、試合が始まると、試合の結果や選手の体調の状況によっては全員が集まれないことがありました。1度も会議に参加できなかった本部スタッフもいました。会議に出席できなかったときは、後で申し送りをしました。本部では車を1台しか準備できなかったため、その車を誰が使うか、どこに行くために車を使うのが優先となるのか、そのことがミーティングの多くの時間を取り、本来話し合いたいことがなかなか議論できないということもしばしばありました。

様々な対応に追われ寝不足が続き、体力が落ちて体調不良になるスタッフもいましたが、大きなケガや病気はありませんでした。

## 2. 今後の課題

### ①現地の情報収集

やはり、十分な情報収集ができるかどうか、派遣前の準備や大会期間中の活動において鍵となります。メールでの問い合わせだけでなく、下見はできる限り何度も行い、実行委員会やICSDの役員と顔を合わせて積極的に話を聞く場を持つことが肝要だと思います。そしてその際は同じ者が行くのではなく、下見の目的に合わせ、派遣するスタッフを変えた方が色々な見方ができて良いと思います。

### ②インターネット環境について

通信状況が事務作業の効率に一番影響を与えるので、今回は想定以上の容量、数のWi-Fiを持参する必要があると思います。

### ③広報活動

今大会は初めて現地に新聞社が取材に来てくれたり、国内でも今までとは比べ物にならないほど、デフリンピックをニュースや新聞で取り上げてもらえました。また、我々もデフリンピックを1人でも多くの国民に知ってもらいたいと、現地からFacebookや選手団ウェブサイトにて速報を流すなど新たなことに取り組みました。これは、世間からとても高い評価を得ることができましたが、その一方、今後も今大会と同じレベルを保つ、いえ、それ以上の啓発活動や発信を期待されているという事です。それに応えていくには、古い考え方ややり方の良い面は残しつつ、新しい知恵や発想力も必要となってくると思います。そして、日本国内からの後方支援も含め、本部内体制を今一度熟慮する必要があると思います。

## 陸上競技チーム

監督 三枝 隆行

## 1. 選手・役員の選考基準・方法

### 選考について

日本聴覚障害者陸上競技協会の選考基準に基づいて定めてい

る選手権大会、聞こえる人の大会の記録や継続的に行っている強化指定選手から選考、選出しています。

### スタッフ、コーチについて

長期的に派遣可能な範囲で選出した人材であり、選手と一緒に戦う気持ちももてるか（信頼）に重点をおきました。また、選手がパフォーマンスを発揮できるようサポートする手腕とコミュニケーション（手話、手振り身振り）が取れる事を大事にし、チームの統一感を第一に考えました。トレーナーはそれぞれの違う得意分野により、多種多様にケアとリカバリーが出来る人材。コーチは選手の絶大な信頼が必要であり、継続的に選手を指導している方を中心に選出しています。スタッフは前回のデフリンピックまた世界大会を経験している人材を継続して選出しました。

## 2. 総評

私はデフリンピックに3回、世界大会に2回参加していますが、今回はかなり違った緊張感を覚えました。出国するまでには、色々なニュースや新聞でテロリストによる発砲や爆発等みられ、これは競技以外の行動でもさらに危機管理を徹底しなければならないと思いましたが、現地に着いてみると、警察や軍隊、セキュリティ等は万全に準備されていて素晴らしいです。滞在が長くなるにつれてテロの危機など忘れるほどでした。

宿泊については何十年ぶりの選手村宿泊方式（以前は各国別々の宿泊だった）を実施していました。少し期待はずれがあり、苦労もありました。宿泊棟から食堂棟への移動が長い階段で選手にはかなり大変だったと思います。

食事は2～3日のサイクルで同じメニューが出てくるため、十分な栄養やパフォーマンスを発揮できる食事ではなく、反省点のひとつでした。ただ、バックサポートの方々やショッピングモールで惣菜をテイクアウトして選手村まで運びました。またスタッフによる炊き出しが一番好評でした。

競技は全体的には好成績を収め、前回より1個多いメダル6個を獲得しました。決勝進出が多く、選手同士も切磋琢磨していました。特にリレーは初参加となった2008年の世界大会から9年を経て、ようやく初めての金メダル獲得となりました。これまでの道のりは長く苦しいものがありました。

今回の結果は私ひとりの力ではなく、短距離コーチをはじめトレーナー、スタッフ、選手を含めたチーム力の集大成であると自負しています。

陸上競技とは個の競技ですが、実際にはコーチや選手の応援等がひとつのチカラになります。

### 反省について

私は2013年ソフィアデフリンピック後、代表監督を引退しましたが、今回は事情により復帰しました。3年のブランクがあり、自分自身の監督統制力があるのかどうかも不安がありました。春から始まって強化合宿を数回こなし、出国するまで、チームワークを構築する時間をもっと欲しかったと思います。

また、選手たちも新規選手が多く、コミュニケーションがはかれなかった事が悔やまれます。これを機に4年サイクルでしっかりと地につくような合宿を構築していきたいと思っています。本当にありがとうございました。

## 1. 団体内の担当とその内容

私はデフリンピックに参加するのは4回目ですが、コーチとしては初めてです。色々な情報を収集し、過去のデフリンピックの経験を生かしてレースの流れや指導法の勉強をしてきましたが、まだまだ未熟な新米コーチです。大会前は選手団の大会及び練習会場への引率、練習およびランニングアシスタントサポート、TD会議出席を担当しました。デフリンピック期間には朝練のパートナーランナー、調整トレ、本練も含めてアシスタントランナー、インターバル及びペース走のタイムキーパー、競技中のタイムキーパーを担当しました。マラソン2日前、選手達とスタートから4kmまでのコースを下見しながらジョギングを行いました。未熟な点もありましたが、選手達のために出来ることを全うするため、アシスタントランナーなどのサポートにがむしゃらに動き回りました。

男子800mにおいて、進路変更違反（セパレートレーン左側のラインを踏むと失格の対象となり、スタート直後はレーンに区切られたセパレートゾーンを走ります。1周目第2コーナーを抜けるとレーン制限がなくなり、オープンになる）として失格がありましたが、競技終了20分後に初めて発覚しました。すぐに審判団に事情説明を求めたところ、第2コーナー100m手前でセパレートレーン左側のラインを踏んだという事でした。証拠として日本チームの村外スタッフが撮影した家庭用ビデオカメラの画像を見ましたが、小さすぎてわかりませんでした。その後パソコンを持ってきてくれましたが、抗議時間が試合終了30分を超えたため、時間切れになり抗議を断念しました。監督はじめ私も涙が出るほど悔しかったです。証拠として提出できるよう、ビデオカメラを持参すべきだったとの後悔が残りました。

中長距離マラソン選手たちは暑い中でも800m男子準決勝で日本ろう者新記録（800m男子決勝、進路変更違反による失格）、800m女子と1,500m男女で自己ベスト近くの力を発揮し、入賞出来ました。10,000m男子とマラソン男女も気温が高い中のレースでしたが、日本のお家芸である粘り強さを発揮した走りでした。

## 2. 反省・まとめ

800m男子での失格では家庭用ビデオは根拠にならず、公式に根拠になるビデオを撮らなければなりませんでした。ラインマンも人間ですから見間違えることもあります。すぐに証拠を入手し、抗議出来るようにしなければなりませんでした。用意がなかったのは、かなりの痛手でした。今後はスタッフ2名がビデオカメラとパソコンを持ちまわれるよう準備する必要があると思いました。

男子中長距離マラソンでは、ほぼケニアの選手がメダルを独占してしまい、実力の差も痛感させられました。また、女子もヨーロッパのレベルが前回大会より高くなっており、男子で世界と戦うためには実業団、日本選手権、箱根駅伝等に出場できるレベルが必要です。女子も中距離は国体かインターハイ県代表に匹敵するレベル、マラソンも大阪国際女子マラソンにエントリー出来るレベルでなければメダル獲得すらできません。夏場にサブスリー（フルマラソンで3時間を切るタイムで走ること）でなければ勝てないと感じました。

コーチとしてはまだまだ未熟でした。選手たちに出来る範囲でサポートしましたが、足りない所があったと思います。

最後になりましたが、今大会お世話になった本部のスタッフ、

頑張ってくれた監督、コーチ、トレーナー、マネージャー、スタッフ、国際手話通訳者、現地のボランティアに感謝申し上げます。本当に有難うございました。

余談ですが、今回の選手村内は移動するのがかなり大変でした。選手村の急向斜の長い階段があり、会場へ持ち出す大型荷物運びが一番つらかったです。移動による選手たちの体力消耗はさけたいところでした。次回こそ、荷物運びの負担の少ない選手村あるいはホテル設置をしていただければ嬉しいです。

## コーチ 平井 勇気

### 1. 自己の役割とその評価

サムスンデフリンピックでは、棒高跳びを中心とした跳躍コーチとして参加させていただきました。棒高跳びの選手は3人とも、同じ練習場所で活動をしてきた選手たちです。私は選手らが、世界の舞台であっても通常通りの競技力を発揮できることを念頭に指導をしてきました。単に競技技術の指導だけではなく、プレッシャーが生じる中でも精神力を用意することも重要と考えていました。幸いなことに、3人とも海外遠征は初めてではなく、昨年度のブルガリア世界選手権など経験を重ねた上で臨めました。そして、私自身の役割についてですが、競技力が向上し、選手がメダルを獲得する可能性が高くなればなるほど、コーチ側が気を遣いがちになる事を経験しています。タイトルが大きくなればなるほど、世にいうアスリートファーストなどという言葉の影響を受けることでしょうか。2020の東京オリンピックがさらにその拍車をかけていると思います。しかし、コーチは常に冷静でなければなりません。周りの期待、選手の過度なモチベーション向上、最高の舞台への高揚感。時にこれらの要素は選手へ良い働きになるとは限りません。むしろ、選手に混乱をもたらすものとなることの方が多いと感じます。メディアもまたそのひとつと言えます。こういったメンタル的な要素に対する態度を指導していくことが非常に重要だと思います。状況がよくない時があれば、時に正確に伝えるべき時もあるでしょうし、逆にあえて伏せてアドバイスに徹する事もまた必要なコミュニケーションであります。選手が高揚しすぎれば、冷静さを提供しなくてはならず、悲観的であれば、上手に気持ちを乗せていく事も必要です。どんな状況であってもこの「心が常に中心に位置する事」を理解できるように指導したいと思っています。経験と年齢を重ねた選手ならば、この気持ちのコントロールを選手自身ができるように促すことも必要になります。個人的な見解ですが、特に個人競技である陸上においては相手や環境を意識している試合は集中しきれていないと言えます。選手が順位、記録、メダルなどの結果的な要素を試合中に意識しているケースに良かった試合はありません。

好記録を残した試合を振り返ると順位や記録への意識はなく、気づけば相手選手がいなくなっていた、気づけば自己ベストだった、というような、パフォーマンスを発揮する事に集中するあまり、競技を終えて初めてコンディションの良さに気づくといった思考と行動が大切なのです。今回の試合で不振で終わってしまった2人の選手とメダルを獲得した選手の差はここにあったと思っています。

さて、今回の結果に対する自己評価としては前述の通り残念ながら良好なものであったとは言えませんでした。今大会を最後の挑戦としていた竹花選手は、自己ベスト記録を下回る4位で競技を終えています。女子選手では、順当にいけば佐藤選手が3位獲得を見据えられておりましたがノーマークで終了し、メ

ダルへの期待をあまりかけていなかった滝澤選手が3位に滑り込むという結果でした。選手がいわゆる「ゾーンに入る」「波に乗っている」状態にするためのアドバイスをメダルが期待されていた2人に対してできなかったことが敗因であったと認識しています。もし、今シーズン初頭から練習時間、対話、準備など、すべてが満を持して行う事ができていれば前述の2人の結果は変わっていたと思います。一つの区切りに立ち会えたことの感慨深い思いと共にもう少し工夫できる事があったのではないか、という自問自答がまた次項への考えにつながります。

## 2. 今後の課題

まとめると4点の課題が挙げられます。

### ①選手が自分で考える力

よく言われる事で「自分で考える力」を育むことができていなかったのではないかと思います。選手の個性にもよりますが「自分で考える力」は必ずしも自発的に育つものではないように思います。子供たちを指導して感じる事ですが、この「自分で考える力」を養わせるどころまで指導しないと選手が育たないように思います。ルールに乗せると例えるなら、そこまでしないと選手は自発的に行動し始めないかもしれないという思いを最近を持ち始めました。むしろルールに乗せたら、一人立ちを始め、行動し始めます。そうでなかった場合は半永久的に教えるを乞うだけの選手で終わってしまうでしょう。選手とコーチの習熟度は、教えてもらう関係ではなく、確認をしあうだけの関係へと変わる事が望ましいと思います。デフだけでなく、様々な環境で競技する選手のコーチをしています。これから「自分で考えられる力」を意識して指導に当たる所存です。

今回の不振に対する要因を考えると、竹花選手は職場の異動を機に練習を見る機会が激減していました。佐藤選手も同じ練習環境で活動をしていても、練習の機会が多かったとは言えませんでした。各々、そうなった事情はある中で、コーチと選手が練習を共に行う時間が競技結果に直結してしまったと言えます。今季の練習経過を振り返ると、この練習機会の減少、試合回数不足を感じていました。竹花選手の参加する試合の指導は今季ではトルコ本戦が初めてでしたし、佐藤選手に至っては対抗試合で思うような結果が出せないままトルコへ向かった状況でした。もともと難しい状況の中での参戦となっていました。デフリンピックを最も大きな舞台と選手が認識しているのなら、なぜ計画的な準備ができていなかったのでしょうか。逆に一年という区切りを置いた中で、選手自身が、何が足りないのか、何が必要なのか、どんな変化をつけていくか。選手自身がそのデザインを思い描いていたのが課題であったように思われます。

### ②レガシーの共有

私はデフの選手と競技活動を続けてはや9年になります。当時の若手選手は、いまやベテラン選手へと成長し、これからの世界大会は入れ替わりが始まるのではないかと思います。競技をやりきった人間が得た経験はとても大きいものです。今後の合宿や強化練習会で工夫しても良いと思うのですが、あえて練習時間を削る合宿を提案します。実のところ、練習はどこでもやれます。しかし、全体で経験を共有する機会はありません。合宿での行動を振り返ると、宿舎では課題が多く夜遅くまで提出物に追われる状況を見てきました。ここ近年のデフ選手の成長は目覚ましいものです。この成功体験は、レガシーとして全体へ提供してほしいと思います。なぜ勝てたのか、

なぜ今まで勝てなかったのか。その変化や差分を知っているのは、経験を積んだ選手にほかなりません。この経験を共有してほしいと思います。

### ③デフ指導者育成

競技生活の一線を退いた選手がいれば、今後は指導スタッフとしての活動に切り替えられる体制を構築すべきだと思います。名選手が必ずしも名コーチになるわけではありませんが、経験を活かして現役の選手と理解を深めていく必要があります。指導者として失敗もしなければいけませんし、その中で答えを見つけなくてはなりません。選手だけでなく指導者を育てる事業もまた必要不可欠です。デフの環境で特に感じるのは指導者不足です。どうしても、聞こえる人との環境に差があります。聞こえる人の社会では、学校活動の中で良い指導者が多く存在しています。しかし、デフの社会ではそもそも人口が少ないなど条件が異なります。デフで熱意のある人間がコーチとして活動できる環境やサポートが必要だと思います。コーチが存分に活動できる体制を整え、育成から競技支援まで一貫したサポートが確立できると良いと思います。

### ④メディア対応と選手の在り方

今後、デフの認知度が上がってきた際のメディア対応も必要だと考えます。現状では、自己負担をしながら活動していく中で、今後は経済的な援助の機会に恵まれるのではないかと考えています。選手、メディア、スポンサーは切っても切れない関係があります。選手はメディアにあげられることでスポンサーの支援の手が届きます。認知度＝宣伝力です。ただ、選手の知名度上がる事で、選手としての在り方を間違えてしまう事もあります。選手は芸能人ではありません。選手は競技で活躍する事が本分であり、名声にぶれることのない選手の在り方を知っておかなければいけません。必要以上の経済的なサポートが付けばなおの事、チーム運営に問題が生じる事が容易に想像できます。これは運営スタッフが前もって準備しておかなければならない事のひとつと言えます。

コーチ 岡田 知彦

## 1. 自己の役割とその評価

### 自己の役割

陸上競技 跳躍コーチ担当（走高跳、走幅跳、三段跳、十種競技）、跳躍選手とのコミュニケーション、選手付添、スタッフミーティング

### その評価

今回初めてデフリンピックの跳躍コーチとして派遣いただきました。これまでの国際大会では2015年アジア太平洋ろう者競技大会（桃園）、2016年第3回世界ろう陸上競技選手権大会（ブルガリア）のコーチを務めました。今大会は日本聴覚障害者陸上競技協会より跳躍コーチの依頼を受けました。

5月のGW日本代表強化合宿、6月中旬の第1回フィールド強化合宿、7月上旬の第2回フィールド強化合宿（最終調整）に参加し、跳躍選手（3人）の指導、サポートをしてきました。跳躍選手は怪我もなくデフリンピックのために調整練習出来たと思います。選手とコーチの橋渡しと跳躍ブロックのモチベーションをあげるために切磋琢磨しながら練習に取り組みました。

サムスは日差しが強かったのですが湿度は日本より低く、環境や競技場のコンディションは良かったと思います。しかし競技場のグラウンドは日本のとは違い、走ってみると柔らかい感じがして気にする選手もいましたが、本番までに調整する時間がたっぷりあったので問題なかったと思います。それを考えると最初に予定されていた出発日より早めに現地入りしてよかったと思います。

跳躍選手へは個人練習メニューは各自に任せ、調整練習でサポート、選手村でも各選手のコンディションに問題ないかチェックを行いました。

本番の試合では3選手は最後までよいパフォーマンスを発揮できたかと思いますが、跳躍コーチとして未熟な部分とコミュニケーション不足もあったかもしれないと思います。選手たちへの貢献が及ばず私の力量不足に反省しています。

## 2. 今後の課題

大変だったのは跳躍コーチが私一人のみだったことです。練習や試合の時、幅跳び・三段跳・走高跳が重なって同時に指導・サポートができない部分もあり選手たちに迷惑をかけてしまいました。跳躍は種類が多いので、できれば専門のコーチを増やして選手に負担をかけないよう配慮ができればいいと思います。

今後の選手の強化、デフ陸上発展のためにも日本選手権入賞者や国際大会での経験者がある元選手や関係者を講師としてお招きし、指導していただけるとありがたいです。

今回のデフリンピックは多くのことを学ばせていただきました。協会関係者、監督、コーチ、スタッフ、選手のみなさん本当にありがとうございました。

### コーチ 水野 史生

日本代表選手、スタッフ、みなさん本当にお疲れ様でした。

4年前は選手として出場をしましたが、昨年に引退をして今大会は短距離のコーチとして派遣依頼を頂きました。競技生活で感じたことや学んだことを活かしていこうと気を引き締めました。

トルコは2020年オリンピックの招致をしていた国であっただけに設備は大体揃っておりましたが、競技場のトラックはコストを抑えるためか、今時珍しいチップ（ポコポコして肉体的な負担は軽減される分、記録を出しにくい）でした。ただ、開催決定時は無いと言われていたサブトラック（200mほど）があっただけでもプラスに考えました。競技場自体が最低限の作りということもあり、屋根がメインストレートのスタンドと招集所のみでアップの時に日差しが当たらない場所を確保するのが困難でした。

選手村は大学の寮でしたが、寮舎が山の傾斜に沿って建てられており、日本選手団の寮舎は下の方で毎朝登るのが大変でした。食事面ではバイキング形式でほとんど同じような内容、味つけも単調で苦しかったです。競技場では強い風も常に吹いており、気温も非常に高く、食事を含めて選手たちはコンディションを整えるのは難しかったと思われます。

監督からは普段のスタイルは任せるが、情報の共有（連携）をしっかり取るようにと指示を受けていました。主に短距離選手と中距離選手の帯同（競技開始前の午前と午後の練習、大会の帯同）をメインにし、他のスタッフからの指示（買い出しなど）に従う形でした。

選手たちには日本国内でのコーチの有無によって対応を変えており、基本的には見守る形でした。状況に応じて選手の邪魔にならない範囲に必要な器具の準備を手伝い、声かけをするときは選手の集中を乱さないように慎重に言葉を選んで対応しました。

結果としては、思うような結果を出せなかった選手もいれば、満足のいく結果を出せた選手もいると思います。どちらにせよ、大事なことは『その結果をどのように受け止め、次へ繋げるためにはどうするべきか』です。スタッフやトレーナーたちは選手たちの最大限の能力を活かされるように寝る間を惜しんでサポートをしてきました。不手際もあればミスもあったと思いますが、それに対して選手もこういうときにどうすべきかと自主的に考えて欲しかったなと思います。スタッフやトレーナーにいくら不手際があっても、個人競技は自己責任、団体競技（リレー）は選手全員の責任となります。また、選手だけではなくスタッフでも小さなミスが選手の明暗を分かちということがあります。今回で終わりということではなく、次に繋げるために何が足りなかったのかを考え、その積み重ねがよりよい関係を築いていけるのではないかと思います。

今大会では世界記録も複数種目を出しており、年々レベルも上がってきているなど感じました。日本も4年前と比較して総合的にレベルアップはしていますが、それ以上に世界も上がってきています。協会としても選手たちが長く続けられるようにサポートができる環境作りをしなければと思います。

今回はコーチとしての参加となり、選手時代には見えなかった部分を学ぶことができ、貴重な経験となりました。次があるかわかりませんが、この経験を人生に活かせたらと思います。

最後になりましたが、コーチとして行くことができたのは派遣をして頂いたJDAAの関係者、コーチ就任の後押しをして頂いた選手たち、送り出してくれた会社、いろいろな方々の応援と支えがあってこそです。私としては満足のいく結果とはなりませんでしたが、支えがなければここまで至ることはできませんでした。関係者皆様、本当に有難う御座いました。

### トレーナー 大塚 健吾

## 1. 団体内の担当とその内容

2014年にチームに合流してから【A】安全で安心にスポーツが行える環境づくりと【B】セルフケアからセルフトレーニングへとという目標をつくりました。【A】は具体的には、選手やスタッフへの啓蒙活動（熱中症、雷、水分補給、緊急時の行動計画）や現場の活動（水分補給計画、WBGT測定、体重管理、コンディショニングチェック、CPR+AEDライセンスの取得）があります。この中でも安全管理は最優先事項に挙げられますが、頭では大切だとわかっていながらも、具体的に何をしていいのかと、どこか難しい印象がスタッフにあったようです。安全管理をチーム内に浸透させるためには、トレーナーとしてスタッフにCPR+AEDライセンスの取得を促しました。

【B】として、カラダの使い方のセミナーを合宿で行いました。ストレングス&コンディショニングスタッフとして、ひとり一人のカラダが違うことを感じつつ、評価を行い、目の前の選手の現在の状態にあったトレーニングを提供できれば、たった1回のトレーニングでもカラダに変化を起こすことができ、その変化を選手が感じられます。変化を感じ取ることで、選手自身が自分の可能性を感じることに繋がります。そうした評価、トレーニングの提供が主な役割です。

## 2. 反省・まとめ

デフリンピック期間中の陸上競技は、午前中は試合に向けた練習時間、午後に試合というスケジュールでした。選手1人1人によって練習、試合、オフ、コンディショニングと様々でしたが、毎朝のコンディショニングチェックからはじまり、3人のトレーナーは競技場と選手村にわかれ、それぞれ対応しました。

強化合宿のときからデフリンピックのシミュレーションをしてきた、試合・練習後の疲労回復としてアイスバスが活躍しました。他国の選手やコーチから「どこで購入するのか?」「少しでも良いから浸からせてほしい」という要望や関心をいただきました。トレーナー活動を現地で行う上で、現地スタッフとあいさつをかわし、コミュニケーションをとり続けることで、氷や水の確保、競技場の救急体制の確認もスムーズに行うことができました。

選手村以外の食事では、協会が持参した炊飯器で米を炊き食事の確保を試みましたが、栄養バランスのかたよりもみられました。競技中盤からモールで野菜炒めや煮込み系のテイクアウトを試したところ、味や栄養バランスも良くなり、体調面やパフォーマンスにも良い影響があったのかもしれない。

国際大会では調整（コンディショニング）がメインとなりますが、国内でいかに「強化すること」の必要性を選手に伝えることができるか、実践できるかが鍵になると考えています。ペースを上げずに調整＝セルフケア、セルフコンディショニングだけで世界で結果を出すことは難しいでしょう。強化＝セルフ“トレーニング”が必要になってくるとは思いますが、トレーニングには金銭面や周りに指導者がいるかどうかなどの課題もでてきます。しかしながら自らの目標設定が非常に大切であり、偽りの目標にだまされないこと、自分が本当に達成したい目標が何なのか、そのために何をするのかを明確にすることが最も重要であり、目標がクリアになれば自然と行動できるのではないかと思います。トレーナーはカラダに関するだけでなく、目標設定にも関わっていくことで貢献できればと思いました。

トレーナー 山岸 亮良

### 1. 自己の役割とその評価

今回のデフリンピックにトレーナーとして初めて帯同させていただきました。私自身の役割としては、トレーナー業務全般を受けて、選手のコンディショニングや健康管理を重点にし、ケガの予防とケガ後の施術を行えるよう、事前合宿の段階から準備を進めていきました。監督、コーチ、スタッフまた他2人のトレーナーとの連携の確認も行いました。7月17日に現地入りしてからは7月23日の競技開始まで練習期間がしばらくあり、練習を通して選手の状態をチェックし、コンディショニングを整えてベストな状態で競技に臨めるよう調整を行っていきました。選手村では選手のコンディショニング、マッサージや物理療法、また疲労回復の為に酸素カプセルを使用し、調整しました。競技場では選手の健康管理、動きの確認、アイスバス、ストレッチングやマッサージを行い、必要に応じてテーピング処方を行いました。他2人のトレーナーと連携し、国際大会に於いて代表選手を担当するにあたり、事故やミスが起こらないよう細心の注意を払っておりました。結果、大きなミスや事故もなく、陸上としては金2個、銀2個、銅2個のメダルを獲得できたことは非常に良い結果だと思っています。

自身の評価として、トレーナーとしての業務に関しては出来ることは確実にこなすことが出来ました。日本を出発してから

帰国までの16日間と長期にわたり事故もなく業務をこなせたのは、他のスタッフと選手の協力のおかげだと思っています。

## 2. 今後の課題

全体の評価から今後の課題も出てきました。事前の準備期間が短く、私に限っては陸上のトレーナーとして決まってから事前合宿などで代表選手全員に会うことが出来ず、現地で初めて会った選手もいました。期間が短かったとは言え、強化選手とコミュニケーションを取れる環境を事前に持つことが今後の課題です。また、いい結果が得られた裏でメダルを獲得できる実力があるにもかかわらず、不本意な結果になった選手もいました。今後の課題を検証し、次の国際大会などで結果が出るようにアドバイスをやりたいと思います。具体的には連日の試合で疲労回復までに時間がかかり、思うような結果が得られません。また、現地に入ってから調子を崩した選手もいたので、特に食事に関しては事前の準備とアドバイスをもっとしておけばよかったと思います。その他、選手の中には試合まで期間が長く、調整がうまくいかなかった選手もいたので、この点もアドバイスをしていかなければいけないと思います。全体的には、今後も強化活動を通じて国際大会で活躍できる選手を発掘し育て、デフリンピックやデフスポーツを社会的に認知してもらえよう活動を行いたいと思います。

コーチ 鷺見 英治

この度、台北大会以来8年ぶりに陸上競技の投てきコーチとして参加させていただきました。まずは選考していただいた三枝監督、連盟の方々に感謝申し上げます。

さて、8年ぶりのコーチでしたが、ギリギリまで投てきコーチがいなかった点に疑問を感じました。三枝監督とは年賀状やメールなどで連絡はとりあっていたものの、大会が迫った中で私に依頼があったことを考えると、コーチがなぜ決まらなかったのかと感じました。投てきがある程度でき、手話もできる人物が本当にいないのだろうか。そういう人物は存在するとは思いますが何故決まらなかったのか、それは『お金』の問題であるかと思っています。大会前に返ってくるともわからない30万円近くの大金をなぜコーチが支払う必要があるのでしょうか。この状態は普通ではありません。このことがコーチ就任を足踏みさせる原因なのだと思います。大会前の合同合宿の往復の旅費においても、連盟などが事前に資金を準備したり、合宿中に返金するなどの措置が必要です。選手にしても同じ事が言えると思います。日本代表レベルの選手達がなぜ50万円近くのお金を払って出場しなければならないのか甚だ疑問です。資金面を連盟や国がしっかりと管理し、免除する方向に持って行かない限り、今後は選手ほかコーチを快く引き受ける者はいなくなると思われます。スポンサーを上手に使いながら資金工面や工夫をぜひお願いしたいと思います。

投てきコーチとしての役割の一つは、前もって選手達の投げのくせや練習環境・性格等を把握し確認しながら、試合当日どうベストなパフォーマンスを発揮させられるかを考えることが鍵となってきます。だから事前の合同合宿や合同練習会などの回数を増やし、コミュニケーションをしっかりと取りながら戦うプランを各々と練っていかねばなりません。実際、今大会では大切なコミュニケーションを取れる時間が少なく、台北に参加していたベテランの選手達を通じてうまくコミュニケーションを取りながら過ごすことができたことは幸いでした。別

仕事の関係で27日に日本に帰ることとなりましたが、残りの投てき陣の試合が気になって仕方ありませんでした。インターネットで簡単に結果は確認できましたが、最後まで帯同できなかったことを後悔しており、最後まで責任を持って帯同できるコーチを選考すべきです。だからといって私自身適当に仕事したつもりはなく、監督の片腕となって責任を持ってコーチングしたつもりです。

試合の感想について、台北の時もありましたが「誤審」があることを頭に入れておかなければなりません。いわゆるアウェーでの戦いは特に厳しく、誤審もあり得ます。今回も男子円盤で明らかな誤審がありましたが、湯上選手が日本選手権にも出場している強者だったから良いものの、ハートの弱い選手であつたら予選は通過できなかったかもしれません。そういった意味でもコーチの存在が大きく、常に冷静で臨機応変に対応し、コーチングしなければならないことを痛感しました。

男子のやり投に出場した佐藤選手らの対応は対照的でした。ベテランの佐藤選手とは教え子ということもあって全てが言い合える関係であり、試合中でも一投一投確認ができました。一方若い佐藤選手は、投げ終えた後コーチを見ることを習慣化しておらず、悪い部分を上手く指摘できませんでした。普段からのコミュニケーションの浅さを感じただけでなく、試合前の選手との確認も必要であつたと後悔しました。

女子ハンマーの村尾選手、女子やり投の高橋選手は完全に力負けしていたので、選手選考の際にはコーチも参加して考える必要がありそうです。その反対に男子ハンマーの石田選手は普段からストイックに取り組み、この大会に掛けてきた気持ちが銅メダル獲得という形に繋がりました。本当に選手の鏡と言えます。台北では、森本選手の世界記録を目の当たりにしながら入賞、ソフィアでは4位でメダルを逃し、苦渋を味わってきました。一つ一つ階段を乗り越えての今回の銅メダル獲得はどれだけ嬉しかったらうと思ひ、想像もできない並々ならぬ努力があつたに違いありません。このように努力を続け、プライドのある言動ができる者が本当の日本代表だと思います。

また、トレーナー達の仕事ぶりは素晴らしく、本当に手厚い処置を選手たちに施していました。他の国にはこのように全てにおいてサポートしてくれるトレーナーの存在はありませんでした。ゆえに日本の選手達はその存在に甘え、一流選手と勘違いしている者も多かつたと感じています。雇われている以上、彼らは他国にはない愛を持った仕事をきちんとこなしていましたが、普段高校生を指導している私だからそう思うのか、誰でもありそうな軽い疲労でもトレーナーに頼っていたのは腑に落ちませんでした。日本代表とは、石田選手のように普段からストイックに、普段からデフリンピックや結果にこだわり、プライドを持った者だけが許される勲章であると私は思います。つまり今回のような手厚いトレーナーさんたちにばかり頼っている弱い日本代表では世界では戦えないと思います。また、心労の絶えない監督さんと正垣さんのような素晴らしいスタッフ、影で支えてくださった連盟のみなさまに感謝の気持ちを持つ者でなければならないと思います。

普段の練習でも聞こえる高校生や大学生が合同練習をすれば、その門を自ら叩いて参加したり、他競技の人と環境が不利なところで練習する等、常にハングリーな状況で練習を重ねていくことも日本代表選手たちに求めます。日本代表になって当たり前前に思っている者、変なプライドを持った者はこの大会にはふさわしくないと肌で感じました。

陸上は結果が全て。強い者が勝つ世界。だからこそ日本代表である以上、常に誇りを持って厳しい状況でも戦える『タフな

心』を持った選手であつて欲しいと熱望します。

今回スタッフとして8年ぶりに参加させていただき、心から感謝しています。普通に生活しては決して経験できないことをさせていただきました。また、投てき選手全員が入賞できてホッとしていると同時に、頑張った選手たちにも感謝しています。途中で帰国することを許してくださった三枝監督、連盟の皆様本当にありがとうございました。次の世界選手権の東京大会にもできれば何かの形で参加させていただければ幸いです。

## 国際手話通訳 宮本 一郎

### 1. 自己の役割とその評価

陸上競技の期間中、国際手話通訳として、陸上競技チームの監督・コーチ・スタッフ・選手が、他国とのコミュニケーションを取るあらゆる場面で、そのコミュニケーションがスムーズに捗るようにすること、文化風土や生活感覚などが異なる異国で2週間余りを過ごすため選手・関係者の気持ちを落ち着かせ、士気を維持させることを心がけてきました。選手間のコミュニケーションでは、私は中立の立場に徹し、他国選手の関心が国際手話通訳の私へ向けてしまわないように、コミュニケーションの発展を心がけました。

通訳対応は、陸上競技場と選手村、シャトルバスの中、技術委員会議が主であり、スタートランプ関係のアクレディテーションカード発行、スタートランプに関する話し合い、国際ろう陸上競技連盟の会議も対応しました。本部に国際手話通訳を川俣さんが担ってくれたため、開会式・閉会式は日本選手団全体関係を任せ、私は陸上競技へ注力するように対応しました。

日本聴覚障害者陸上競技協会関係者の取り計らいで、前年の全国聴覚障害者陸上競技大会（沖縄県）、本年の強化合宿（熊谷市）で、国際手話通訳として参加させていただき、選手やコーチ関係者とコミュニケーションを図り、国際手話講習会を開きました。そのお陰で、デフリンピック期間中は、陸上競技チームメンバーの一人として溶け込むことができ、日本聴覚障害者陸上競技協会関係者に対して、大変感謝しています。

### 2. 今後の課題

国際手話通訳者・手話通訳者は、陸上競技の専門用語と規定・ルールを予め理解して習得できていることが重要ですが、国際手話通訳者自身も監督・コーチ・関係者・選手とのギャップ感を生み出さないように、前年の大会へ参加するなど、早くからコミュニケーションを図ることが、重要だと感じられました。

また、フィールドなどの競技会場に、監督コーチ・選手以外の人が入れない場合、国際手話通訳者も入れなくなることを考慮して、監督コーチ・選手が自ら国際手話で話して他国選手の国際手話を理解できるようにするため、国際手話講習会開催や国際手話テキスト配付等、スタッフへ国際手話通訳者自身から相談して働きかけていくことの意識行動を持つことが必要だと、今回のデフリンピックで改めて思いました。

競技場で、出場選手の名前を読み上げている時に、日本選手に関するコメントが話されたことがありました。このアナウンスがあつたら、競技から戻ってきた該当選手へ伝えるように努めました。しかし、一部の選手から宮本自身の感想だと早合点してしまわれたことがありました。おそらく、国内競技大会でコメントなどのアナウンスがあると選手へ知らされていなかったため、デフリンピックでのアナウンス内容に驚き、戸惑った

のではないかと思います。今後、国内の大会で選手に関するアナウンスがあれば、その情報を提供できる環境を作っていくことも、陸上競技だけでなくあらゆる競技全体の今後課題の一つだと感じました。

## トレーナー 内海 優

### 1. 自己の役割とその評価

役割…選手及び、スタッフの安全管理。選手村内外環境、移動中、競技場、サブトラック（アップ、待機時）選手及び、スタッフの健康管理。飲料水、食品、温度、湿度、熱中症、リカバリー、ケア、コンディショニング。本部ドクター、トレーナーとの連携

### 評価

- ・トレーナー3人体制は初めての試みでしたが、非常に良かったです。トレーナー同士で役割分担、連携がしっかりできていたことで、誰がどこで何をするのか明確であり、それぞれの特性が活かされ、安全管理もしっかりと行えました。
- ・LINEを活用できたことで、全体の把握がしやすかったです。
- ・ケアの中に足ツボを取り入れたことで、足部・脚部の疲労回復はもちろん、内臓の不調（便秘・腹痛・胃もたれ、背部痛など）の緩和、自律神経のバランス回復につながりました。

### 2. 今後の課題

- ・スタッフ間の連携、目的・意志統一は大切。

帯同しているスタッフとして、何のために、今、どう行動するのか。各自が意識していなければ困難が発生し、選手からの信頼も失います。各役職の役割、全体の把握（誰が何をするために来ているのか）などは、事前にもっと話し合いを持つなど、お互いに把握、自覚しておく必要がありました。そうすれば、現地でイレギュラーな事態が起こっても、頭を切り替えて対応できます。

- ・選手村、宿泊ホテルでの食事について

海外の大会において、毎回悩みが付きません。文化の違いはあるにせよ、衛生管理、加熱調理時間の管理、保存状態の管理など、食品の安全に関わることは最低限しっかり計画、実施できるよう大会本部からの働きかけを、徹底してほしいと思います。

また、選手・スタッフ自身も、食に関する知識を得て深めたり、普段から実践していく必要があると感じます。そうすれば自ずと、何をどう食べるのか、なんのために食べるのか、海外遠征に何を準備するのかが、わかるようになると思います。

## スタッフ 正垣 亜矢子

### 1. 自己の役割とその評価

選手が国際大会で最高のパフォーマンスを発揮しやすくするには環境や食事面が一番大事です。また、食事面以外にスタッフ同士で協力や選手からの意見や相談、また緊張感からリラックスさせることなどもスタッフの役割だと思っています。今回の開催地はテロということもあり、不安の声が大きかったのが現実です。スタッフとして不安を少しでも取り除けるよう、他団体からの情報や現地での状況の情報を収集しました。また、現地では競技内のコール場所等の情報を全員に共有したり、試合前後の補食準備・アイシングのための氷準備やリザルト確認

など最低限の情報共有や報連相を心掛けました。

国際大会では日本と違って油物が多い、お米もパサパサしていることもあるため、日本食を海外でも食べられるよう炊飯器やみそ汁、OS1を持参するなど、アスリートにとって何が不可欠か、現地での役割などを監督・トレーナー・スタッフで事前確認・準備をしてきました。生の食べ物はお腹を壊しやすいと注意もあったため、現地では野菜不足にならないように野菜ジュースを協賛いただけるか企業にも交渉して日本から多数のスムージーや野菜ジュースを持参し、現地で配布しました。

スタッフとして力不足な面もありましたが、陸上は史上初の金メダル（男子400mリレー）を獲得するなどの感動がありました。メダル獲得まであともう少しの選手が数名いましたが、陸上は金2、銀2、銅2、入賞19個獲得と選手は頑張っており、応援して下さった国民に感動等を与えてくれました。メダル獲得することができたのはスタッフのサポートだけではなく、選手がデフリンピックに向けて練習し、試合が終わった選手が選手のサポートをするなどの切磋琢磨があったからこそだと思います。

### 2. 今後の課題

デフリンピックは今回で2回目の帯同となりますが、4年前と違うことはホテルではなく、選手村であることでした。

1点目は食堂のご飯の火が通っていないなど、日本選手団だけではなく各国でも腹痛や下痢の症状が出ただけでなく、食堂は毎日同じメニューで栄養が偏っていた状況でした。スタッフ・選手が日本から持ってきたインスタントカレーやみそ汁、缶詰、お米だけでは体力が回復しにくく、競技への集中力などにも影響がでていたため、トレーナーと食事面についてどうすべきか話し合いました。他のホテルに宿泊していたスタッフにテイクアウトを依頼した結果、選手の回復力が早く、集中力などの向上に繋がりました。1日でも早くテイクアウトをすれば良かったとスタッフとしての力不足で悔しさもあり、反省しました。今回の反省点を次回に活かして食事面をもっとしっかりと対策・準備していきたいです。

2点目は監督・トレーナー・スタッフ全員でのMTGが思うように出来ず、一部のみで確認をしあうという結果から慌たらしい日もありました。トレーナーと出発前に準備すべきものを念入りに確認していたものの準備期間が短く、事前準備ができていなかったのが大きく、次回はもっと余裕をもって事前確認・情報発信・準備をしていきたいです。

## スタッフ 三坂 香

### 【大会中の主な業務内容】

- ・記録確認、大会結果速報

試合結果を陸上協会ホームページとFacebook、Twitterにて、試合結果を報告する。

- ・選手の食事準備

陸上競技チームは炊飯器を持参し、毎食、白米の準備をしていました。飲み物、補食の補充。

- ・選手移動時の付き添い

- ・簡単な通訳

### 【反省】

今回、初めてデフリンピック大会に帯同しました。初めてのことで分からないことが多くありましたが、先輩スタッフに教

わりながら10日間を終えました。初日から2日目までは流れをつかむ事に必死で、先輩スタッフの動きを見ながら、できることを交代してやらせていただきました。3日目からは自主的に動けるようになり、その時に必要なことを探しながらサポートにあたりました。

陸上チームは、炊飯器と保温ジャーを持参していた為、朝昼夕と白米を炊き、選手とスタッフが食べ慣れている日本食を食べることができました。また、各自が日本からレトルト食品を多く持って行き、足りない場合は後発組に依頼をして持って来る等の対応をしていました。身体のケアについては、トレーナー3名が酸素カプセル、メドマー、カップリング、EMS、マッサージ等で、試合前後の選手の身体のケアを行っていました。競技場には試合を終えた選手の身体の炎症や筋肉疲労をいち早く取り除ける様、アイスバス、マッサージベッドを用意しました。また、日頃から言われている気温や湿度が上昇による熱中症の対策として水分補給、食事についての注意喚起が行われていました。結果、大きな怪我や体調を崩す選手、スタッフはおりませんでした。

男子400mの山田真樹選手が銀メダルを獲得した際、記者の方のインタビューが行われ、通訳を担当しました。山田選手と記者の方はトラックに、私はベンチから通訳をしていたため、距離が遠く、周りの音が大きく、記者の方の声が聞き取れない場面が何度かありました。スタッフが少ない中で選手のサポートをしなければならず、難しさもありますが、競技を終えた選手の側にすぐに向かえるスタッフ（通訳）や記者の方に対してもスムーズにインタビューができるよう、通訳がつくとより良くなるのではと思いました。また、男子200mで山田真樹選手が、金メダルを獲得した際、トルコのテレビ局の方が山田真樹選手のお父様にインタビューをしたいという申し出がありました。その際、トルコ語（トルコテレビの方）→国際手話（トルコ人スタッフ）→日本語（陸上の国際手話通訳の宮本氏）→音声通訳（三坂）→山田父。日本語（山田父）→日本語（三坂）→国際手話（陸上の国際手話通訳の宮本氏）→トルコ語（トルコ人スタッフ）→トルコテレビ、という流れで、通訳をさせていただきました。この経験は大変貴重なものでした。それと同時に簡単な挨拶だけではなく、今後は国際手話も覚えていきたいと思うようになりました。

大きなトラブルはなかったものの、選手にとって大会に集中でき、不快感のない良い環境作りができたのか、もっとできた事はあったのではないかと反省が残ります。

## 選手 湯上 剛輝

### 1. 当初の目標（自己目標）

世界記録をマークし優勝

### 2. 結果に対する評価

55m58で2位と目標とは程遠い結果となりました。6月末に日本選手権、7月上旬にアジア選手権派遣と、大きな大会が続き（移動などの拘束時間が長く）あまり練習が詰めていなかったのも原因だと思います。それに加え、競技場のサークルの状態が非常に悪く、練習でも満足いく動きができずフォームが崩れ気味だったのも一つの原因です。本番でも悪くなっていたところが全部出てしまいました。

### 3. 今後の課題

デフリンピックで出た課題ではありませんが、ターンの精度、リリースの速度を高めていくことが今後の課題だと思います。現在新しいトレーニングにも取り組んでおり、それを継続していけば、より地面からの力を円盤に伝えられるような投げになるはずです。もちろん4年後のデフリンピックへのリベンジも大事ですが、まずは日本記録の更新、世界大会への出場を最優先にして練習していきます。

## 選手 佐藤 賢太

### 1. 当初の目標（自己目標）

メダル獲得、記録更新を目標に、4年前の屈辱をリベンジするため練習を積み重ね、その成果を試合で発揮させて結果を出すことを目標にしてきました。

やり投げはただ投げるだけでは飛びません。周りからは、簡単でしょ？と言われますが、違います。全身運動で最後のクロスステップから左足で踏み込むブロックをする際にその微妙なタイミングで投げるために、やり投げという競技は説明だけでは難しいものです。技術面が非常に求められます。ですから、パワー面だけではなく技術面を活かして練習に励んでいました。技術を特に優先してマスターしていきたい目標でした。

### 2. 結果に対する評価

試合は何が起こるかわかりません。いつも通り、練習のように投げればよかったのですが、その時の自分はいつもの自分ではありませんでした。自分自身との戦いに負けてしまい、それが今回の結果につながり、情けない試合となってしまいました。「プレッシャー」に負けたのか、自分自身の気持ちの問題でもありました。試合に強い自分を磨き上げていきたいです。

### 3. 今後の課題

- ・もっと精神的に強くなること。
- ・やり投げの技術面をもっと向上させていくこと。
- ・体調管理には特に気を使って、怪我などしないこと。
- ・外食やコンビニ弁当を控えて、自炊を続けてバランスのいい栄養をとること。

やり投げ選手として現役でいる限り、出来るところまでやっていきたいという気持ちもありますが、競技を続けるには限界もあります。これからの人生の事もありますので、何処まで続けられるかは自分にしか分かりません。今は練習を頑張り、自分の目標としている記録までやっていきたいです。

## 選手 森光 佑矢

### 1. 当初の目標（自己目標）

2016年6月末にブルガリアで開催された世界ろう者陸上選手権で1500mで金メダルを獲得できました。

デフリンピックはハイレベルなレースになると聞いていたので、1500m、800mにてメダル獲得を目標に掲げていました。

### 2. 結果に対する評価

1500mは、予選を通過することを考えてレースを進めました。決勝には進めたものの、予選でのレース展開を考慮すると自分が持っているレースプランでは戦えないということもあ

り、決勝では7位入賞を果たすことが精一杯でした。

800mは、予選、準決勝と順序よく通過することができたものの決勝ではセパレートゾーンでレーンをはみ出してしまい、失格に終わりました。また、レース展開も良いものではありませんでした。その理由として、ベストを更新したいという思いから体に力みが生じたこと、スピードの緩急に耐えられなかったことが挙げられます。

今回の経験をこれからの競技に活かしていきたいです。

### 3. 今後の課題

今後の課題として、挙げられることが2つあります。

1つ目に基礎となる体力を底上げすること。今回のレースでたとえ自分の得意とするレースプランに持ち込んだとしても選手一人一人のペースが異なるため、自身が得意とすることを出し切れないままに終わってしまうということがありました。そのため、冬季練習では今回のことを踏まえ練習に励みたいと思います。

2つ目にレースプランを増やすこと。1つ目の基礎体力を挙げたことと密接に関係しますが、レースは前半を抑えて、後半でスパートをかけるという極端なものが多いです。今後のことを考えると、レースプランをいくつか増すと同時に、その一つ一つのレースを作り上げるための練習も必要になります。まずは、土台となる基礎体力をつけ、いろいろなレースパターンを練習していきたいです。

4年後のデフリンピックでは自分自身のレースができるようにしたいです。

最後にこのデフリンピック期間中、スタッフを含め選手の皆様にはたくさんの応援、サポートをいただき安心して競技に挑むことができました。本当にありがとうございました。

## 選手 吉田 利幸

### 1. 成績に対する自己評価

成績：男子マラソン 9位 (2:50:02)

昨年の世界ろう者陸上競技選手権(ブルガリア)では同種目に出場し優勝を飾ったため、今大会もメダルを獲得することを目標にしました。また、夏のレースであるためタイムに拘らず順位を優先することを意識しました。

当日、時間が経つにつれて日差しが強く、体感的にはとても暑く感じるコンディションであったため、腹痛と左脚の痙攣に見舞われ、思うような走りができなかったことで目標を果たせませんでした。

### 2. まとめ、反省など

国際大会の経験がまだ浅いため、海外レース前の過ごし方に対する注意不足が原因だと思います。特に食事面においてレース前日の昼食で消化しにくいものを胃の中に入れてしまい、レース中に腹痛が起きたと考えられます。次回よりこのようなことが起きないように注意していきます。

今大会に初めて出場してみて、世界中の聴覚障害者にとって最高峰の大会であり、世界の壁の高さを改めて実感できました。ケニア勢に圧倒的なスピードを見せつけられ、次回上位を狙うためにはやはりスピードが不可欠だということをほんの僅かな時間で体感できました。今後スピード強化を目的としたトレーニングを積極的に取り入れていきます。

今大会のレースはコースやスペシャルドリンクなどの要領が

はっきりしないまま現地入りしました。三枝監督と山田コーチがTD会議で情報を網羅し、レース前日に要領を確認できたことで安堵できましたが、スペシャルドリンクの準備時間が足りませんでした。次回に向けて極力1~2週間前に要領を公開できることを検討していただけますと幸いです。

最後に、日本選手団、陸上スタッフ、会社などの方々、応援とサポートをしていただき、誠にありがとうございました。心より感謝いたします。

## 選手 山田 真樹

### 1. 当初の目標(自己目標)

私は今回のデフリンピックが初出場でした。デフリンピックは去年の世界ろう者陸上選手権に続いて2度目の国際大会になります。2016年の世界ろう者陸上選手権では、400mで優勝することが出来ませんでした。デフリンピックでは、世界大会の優勝者である選手に打ち勝ち、400m優勝をすることを目標にしていました。また、世界ろう者陸上選手権では4つのメダルを獲得したので、今回も4つのメダルを獲得することを目標としました。

### 2. 結果に対する評価

自己ベストを出すことはできましたが、世界大会優勝者である選手に圧倒的な差をつけられ、負けてしまいました。努力はしたつもりですが、練習内容を工夫していれば、もっと優勝選手と近いところで競り合えたのではないかと悔やまれます。

また、目標としていた4つのメダルを獲得することはできませんでしたが、金メダルという最も輝くメダルを2つも獲得することができたので、大変満足しています。

### 3. 今後の課題

200mでは優勝することができ、巻き返しを期することができましたが、400mで優勝出来なかった悔しさをバネにし、4年後のデフリンピックに向けて課題の一つひとつクリアしながら、世界を目指して頑張ります。

また、私は4×100mリレー(略:4継)と4×400mリレー(略:マイル)の両方に出場しました。4継チームは2017年4月に入ってから2週間に一回のペースでバトン合わせ練習をこなせてきました。それに対して、マイルチームはほとんどバトン合わせ練習をしていませんでした。そこで勝敗が分かれたと考えられるので、今後国際試合があるときは、積極的に4継チームだけではなくマイルチームも練習に励みたいと考えます。

## 選手 佐藤 麻梨乃

### 1. 当初の目標(自己目標)

世界記録(3m30)を更新し、金メダル獲得すること。

### 2. 結果に対する評価

ソフィアデフリンピックでは2位で銀メダルを獲得しましたが、今回は記録も順位もなしという結果に終わってしまいました。国内最終調整でも調子がよく、練習通りの動きができれば自己ベストが出てもおかしくないコンディションでした。事前ランキングは3位相当で、跳べばメダル確定という位置にいな

がらにして実力が発揮できなかったのは自分の弱さであり、今後の課題です。

### 3. 今後の課題

デフリンピックは2回目の出場で、国際大会には何度か出場し、リラックスして臨むことができました。前述のとおり、結果を残すことができなかったのは自分の弱さであり、今後の課題です。4年後、8年後と今後もメダル獲得を目指す身として、必ず克服しなければなりません。

全体としては、陸上の副キャプテンとして動きました。初出場の選手の不安を少しでも減らそうとしたり、全体の士気を高められるようにキャプテンと協力して盛り上げることができたと思います。ブロック間で選手同士サポートしていたこともあり、雰囲気はとてもよかったです。

今回は選手村に全競技が宿泊したことで、他競技の情報が入りやすかったです。これは日本選手団として出場しているという自覚が高まり、応援しやすくなり、競技を超えて刺激をもらえるという利点があります。実際に私はバレーや卓球の応援に行ったことで刺激をもらい、自身の試合への気持ちが高まりました。また、陸上の試合にも他競技の選手やスタッフの方が応援に来てくださったことで、応援がより選手に伝わったのではないかと思います。今後はもっと他競技に関心を持ち、互いに応援しあって、日本代表として活躍できる雰囲気も大切にしていきたいです。

出場するにあたり、多くの方から応援・サポートをいただきました。現地で動いてくださったスタッフをはじめとする多くの方々にお礼申し上げます。

### 選手 竹花 康太郎

#### 1. 当初の目標（自己目標）

4m80cmの自己ベストタイで金メダルを獲得

#### 2. 結果に対する評価

これまで世界大会でメダルを獲得し、前回のデフリンピック大会でもメダル獲得していたので、今回も自己ベストタイもしくは自己ベストを出せばメダル獲得は射程内だと思いながら臨んでいました。しかし、結果は自己ベストタイにも届かず4位で終わってしまいました。大会のレベルが一段階上がっていました。

今回いいパフォーマンスを発揮できなかったのには2つの原因があると思います。1つ目に私はいつも大きな大会の時、緊張病なのか、足が攣りそうになり、ふくらはぎが震えてしまうことです。プレッシャーを抱えすぎてしまうことが原因だとは思いますが、大きな大会ではいつも起こることと承知した上で対策を講じる必要があるなど改めて思いました。攣ってしまうのは体質であり、メンタル部分を強化しても治る目処はありません。競技中は緊張している中でも冷静さを保ちながら跳ぶぞと自分に言い聞かせていましたが、今回も終盤の方は攣りそうになってしまい、力を出しきれませんでした。

2つ目は今年、職場の異動があり、その影響で仕事と練習とのバランスがうまく保てなかったことにあります。練習を思う存分積むことができれば、結果も変わってきたのかもしれませんが、仕事で疲れきった体を競技が始まる前に完全回復させれば、いつも以上に走れるようになって助走の精度もあがることに期待していましたが、結局は調子が良い状態と現在、もっ

ている技術との噛み合わせがうまくできず、なかなか記録ができませんでした。走れないと技術の部分が、巧みになり高く跳べます。調子が良ければ良いほどうまく技術とマッチングさせることができず、動きがバラバラになってバーを超えることすらできませんでした。

### 3. 今後の課題

今後は、身体ともっとコミュニケーションをとりながら調整していく必要があると思いました。コンディショニングの知識や経験を積んでいけば、競技力を維持させることができると思っております。競技は引退しますが、趣味としてまだ高く舞い上がる体を保持させるように頑張ります。

皆様からたくさんの応援とご支援をいただいたからこそ、ここまでのぼってることができました。心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

### 選手 田井 小百合

女子100mハードル 16秒92 (-1.2) 第7位

銅メダルであった4年前のリベンジを果たすべく、今回のデフリンピックに臨みました。今シーズンは調子がなかなか上がってこなかったため、不安を感じていた時期もありましたが、7月に入ってようやく調子が上向きになり、自信を持って調整を進めていくことができました。現地でも好調を維持し、今までにないほど集中して晴れ晴れとして気持ちでスタートラインに立つことができましたが、調子が上がりがすぎたのか、レース中盤でハードルに足をぶつけてしまい、流れが止まってしまいました。ゴールまで何とか走ったものの、4年に一度の大舞台で自分の力を出し切れずに終わってしまい、本当に悔しさとやりきれなさしかありません。多くの方々の応援、サポートに結果で応えることができなかったのは本当に申し訳ない気持ちでいっぱいです。

自分の競技は非常に残念な結果となりましたが、男子4×100mリレーではチーム力と抜群のバトンパスで史上初の金メダルを獲得しました。また、今大会は若い選手の活躍がめざましく、多くの選手がメダル獲得、入賞を果たし、次回のデフリンピックにつながる結果を残してくれたことは、とても嬉しく、頼もしく思います。国内においても、デフリンピック開催前後に今までにないほど新聞やテレビなどのメディアを通じて数多く取り上げていただき、国内のデフリンピックに対する興味・関心が高まってきていると感じています。今大会の盛り上がりを一過性のものにせず、今後よりデフリンピック、デフスポーツの認知度が上がるよう、競技以外の場面で微力ながら協力、貢献できればと思っています。

最後になりましたが、三枝監督をはじめ、コーチ、スタッフ、トレーナー、応援して下さった多くの方々へ感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

### 選手 村尾 茉優

#### 1. 当初の目標（自己目標）

今までやってきた事を活かし、またコーチがいない中で普段通りに試合へ取り組んでベスト8に入る事が目標でした。

## 2. 結果に対する評価

目標だったベスト8に入る事は達成しましたが、その目標を細かく分析すると、50m以上は投げるべきだったのではないかと思います。また、海外のハンマーサークルに対して慣れていなく、対応不足だったので少し悔しい気持ちです。48m台には他2人も居て、いつ抜かれるのか分からない状態で自分が普段通りに6投目までに記録をアップしたら、もっと自分に対してモチベーションが上がり記録も伸ばしていただろうと思います。

## 3. 今後の課題

今大会へ出場させて頂き、同じ障害を持っている選手が日本ハンマー選手よりも強い事が分かりました。1投目から決める事が出来なかったのが、今後の課題として1投目から決め、動きを安定させ、集中して投げる事が課題です。

また、他選手の動きや集中の仕方までも1から見て、自分ならどうするかをイメージすると勉強になりました。今回の経験を活かして、今後の大会に繋げられるように初心に戻ってトレーニングをし、4年後デフリンピックへ出場する事が出来たら日本聴覚障害者陸上競技協会、連盟へ良い結果を出して、恩返しが出来るように自分を厳しくして取り組んで行きたいと思います。

## 選手 石田 考正

### 1. 当初の目標（自己目標）

前大会では4位だったので、今大会こそメダルを獲得して、息子たちの首にかけてやる！という思いを持って厳しい環境の中で練習に励んできたので、最低でも銅メダルを取ることを目標にしていました。

### 2. 結果に対する評価

正直言って、60%しか満足していません。練習では遠くへ(60m近く)投げたにも関わらず試合中にファール(ネットに触れる)が多かったこと、持っている技術を出し切れなかったことが原因です。いつも通りにできていれば銀メダル、うまくいけば金メダルを獲得してもおかしくありませんでした。いくら遠くへ投げる事ができても、他の選手と一緒に投げないと力の差はわからない部分があるため、こういった大会では一緒に投げてこそ本当に強いのは誰が決めるのだと思いました。それだけに悔しいの一言です。

### 3. 今後の課題

海外試合は何が起きるかわかりません。3大会連続出場して来ましたが、各国で異なります。環境の違いや日本では考えられない問題が発生し、メンタル面で追い込まれました。出る度に学ばされます。そういった雰囲気にもみ込まれないようにうまくやって行く為には、強いメンタルを身につける必要があることを改めて強く感じました。いついかなる場合でもパフォーマンスを発揮できる選手になりたいです。メンタル面だけではなく、ハンマー投げの技術をもっと磨きたいです。お恥ずかしい話ですが、この歳になっても私が持つハンマー投げの技術は他の選手と比べて乏しいと感じます。次の世界選手権大会迄には理想的な技術を身につけたいです。順位も記録もこだわって優勝したいです。もちろん、世界記録を狙います。

### ①成績に対する自己評価

7月23日(日) 19:20 10000m

33分28秒75 5位/11名(エントリー人数:19名)

7月29日(土) 7:30 42.195km

2時間38分43秒 4位/21名(エントリー人数:28名)

7月29日(土) 18:10 5000m

18分36秒 11位/11名(エントリー人数:19名)

今回は3種目に出場し、マラソンを中心にそれぞれの自己評価を述べます。

#### 10000m

32分台で上位入賞することが目標でしたが、33分もかかり5位に終わりました。内容も消化不良という印象が残ってしまいました。順位は及第点とはいえ、入賞するのが精一杯でした。

#### マラソン

前回に引き続き、格上のケニア勢の1名に勝ち、メダルを目標に臨みました。ケニア勢以外の走力では私の方があると分析し、レースの作戦を練りました。夏のレースを考慮して、2時間35分を目標とし、終盤にケニア勢の1名を抜くと想定しました。

本番では、先行したケニア勢以外の選手が後方において、私が一人で走る展開になったのは想定外でした。後半は陽射しが強くてきつい中、自分のペースで進めました。結果、ケニア勢の3人とも2時間30分切りとハイレベルで、私は約8分も差をつけられて競り合えず終わってしまいました。タイムは目標を下回りましたが、最初から一人旅でしたし、後続に約5分の差をつけて4位入賞したので、結果は出せたと思います。

#### 5000m

マラソンの後のため、コンディショ的に厳しく途中棄権も考えました。しかし、これ以上の舞台で走る機会はないので、最下位でしたが走りきれて楽しめました。

### ②反省・まとめなど

マラソン当日に、5000mも走るのには現実的にありえません。現地で公表されたエントリー一覧に私の名が記されていて驚きました。マラソンスタッフとエントリーはしないと確認したにもかかわらず、どういう経緯でエントリーされたかは未だに謎です。結果的に故障もなく無事に完走しましたが、理由がなく棄権をすると罰金を取られるので、再発防止のために他競技も含めエントリーの際には注意していただきたいと思います。

今回もマラソンが無事に実施されたことに感謝します。この4年間に出走したレースを通じて私自身の経験値を高められたのが、今回の結果に繋がったと思います。

職場、選手団、応援・サポートして下さった方々に改めて感謝します。

## 選手 佐々木 琢磨

### 1. 当初の目標（自己目標）

100m 10" 20 世界新記録 金メダル

4×100mR 40秒90 世界新記録 金メダル

## 2. 結果に対する評価

100m 決勝 11" 30 7位  
4 × 100mR 決勝 41" 66 1位

100m 予選はスタートでつまずき、準決勝は30mで右ハムがつりかけ、決勝もまたスタートでつまずき、20mで右ハム、60mも左ハムがつりかけてしまい、3本とも気持ちよく全力で走れなかったため、今までで一番最悪な内容となりました。世界一にはなれませんでした。体調不調でも決勝に残れる力があるというのはプラスとしては考え、入賞できてよかったと思います。4 × 100mR はアンカーとして、みんなのためにといい気持ちで必死に走り、夢の金メダルを獲得でき、嬉しかったです。

## 3. 今後の課題

4 × 100mR は嬉しかったのですが、個人的にはやはり100mが悔しいです。悔しさが大きく、もう走りたくないという気持ちが強くなってしまいましたが、応援くださっている皆さんの期待に満足いく形で応えたいから絶対に金メダルを獲てやる！という気持ちに切り替え、最後の最後まで走れたことに自分でも驚き、不思議に感じました。本当に周囲の方々のおかげです。感謝してもしきれません。最高のライバルである山田選手が200mで世界一になった時には本当に泣きたいぐらい嬉しかった反面、日本で再び勝負できるのが楽しみだと思ひ、感動しました。勝っても負けても何度も真剣に勝負をし、陸上を楽しむ。その環境が日本デフ陸上界を少しずつ成長させているような気がします。次のデフリンピックのリレーは誰が走るかわからないからこそ、陸上に対してモチベーションを維持できます。その気持ちを忘れずに今後もしっかりトレーニングや試合をすれば、どんな不幸も困難も必ず乗り越えられるはず。

次のデフリンピックでは4冠王、大会新記録、最後に9秒を出すという目標を掲げ、励みたいと思うので今後も応援の程、宜しくお願いします。

最後に金メダルを獲れたのは皆さんのおかげです。本当にありがとうございました。今後も日本デフ陸上界の応援を宜しくお願いします。

## 選手 前島 博之

### 1. 成績

走高跳 5位 1m90cm  
十種競技 4位 5027点

### 2. 所感

今回のデフリンピックが3回目の出場となりました。これまでは走高跳をメインに世界に挑んできましたが、今大会はさらなる可能性を追求し、十種競技にも挑戦することを決意しました。今大会が開催されたトルコは第1回世界ろう者陸上選手権が2008年に開催されたこともあり、久しぶりでした。結果は十種競技がメダルにあと一步の4位でとても悔しかったのですが、それと同時に、様々な厳しい条件を乗り越えて十種目を完走できた達成感でいっぱいでした。もし、もう一度十種競技をやれと言われても難しいと思います。それくらいやり切った感覚が私の胸の中にあります。

デフリンピックの陸上は、天候に左右され、好条件の時はよい記録が出ますが、逆に悪条件だとなかなか自分の思うような

パフォーマンスができず、苦しみました。それでも日本チームのみんなで励ましあったり、トレーナー達が懸命なケア・マッサージをしてくださったり、監督・コーチが冷静に状況を分析し、的確なアドバイスをくださったりしたおかげで、私はこのような結果を残すことが出来たと思います。支えてくださった皆さんの力がなければ、ここまでこられなかったと思います。この場を借りて皆さんにお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

また、今回のデフリンピックは、選手として戦うことのほかに、デフリンピックの様子をしっかりと目に焼き付け、若者たちにデフリンピックのすばらしさを伝えていくために行ったわけなので、今後は今回のデフリンピックで学んだこと、感じたことを次の選手達に伝え、日本からメダリストを輩出できるような環境を作っていきたいと思います。まだまだ私たちの戦いは終わりません。ここからがスタートだ！

## 選手 滝澤 佳奈子

### 1. 当初の目標 (自己目標)

- ・試合前の自己ベストである2m40を超えること
- ・一本一本確実に跳び、自分の流れを作ること

### 2. 結果に対する評価

練習跳躍では自分の納得できる場所まで跳んだので、自信をもって挑めたことが今回の記録につながったのだと思います。2m55になった途端に慌ててしまい、落ち着いた跳躍ができなかったのは悪かったと思います。ただ、自分にあえてプレッシャーをかけて3本目の跳躍で跳べることができてよかったと思います。

### 3. 今後の課題

今は大学受験で練習ができていない状態ですが、次に始めるときは3mを超えられるジャンパーになりたいと思います。今までは、先輩やコーチ、トレーナーさんにすべてお任せしていて積極性に欠けていたので、次世代にバトンタッチした今、私が先輩になり、練習や周囲にも気を配れるようにしていきたいです。

## 選手 佐藤 将光

### 1. 当初の目標

8位入賞

### 2. 結果に対する評価

予選 7位 (58m14)

決勝 8位 (59m51)

最低でも入賞が目標だったので、達成できてよかったです。また、今回で3度目のデフリンピックとなりましたが、デフリンピックでの自己最高記録を出すことができました。たくさんの温かい応援があってこそこの結果だと思います。

### 3. 今後の課題

課題はデフリンピックの認知度の向上・デフリンピアン育成です。そのためには我々の行動が不可欠です。自分たちのことを社会に積極的にアピールすることが今後の課題です。

デフリンピックは2大会ぶり3回目の出場となりました。デフリンピックにもう一度出場したいと思い、去年の春から本格的に練習を再開し、まず参加標準記録突破を目標にして挑みました。そして、デフリンピック代表も内定し、大きな故障のないように心がけて練習を積み重ねました。

メダル獲得を心の中で考えていましたが、2大会前と違い、ハイレベルになってきており、メダルはほど遠い結果になりましたが、入賞は果たせて良かったと思います。あと2年くらい練習すればメダル獲得もできるはずだという自信になりました。今回はいい刺激を受けて、今後に活かし、初心に戻って再度4年後の出場を目指して、メダル獲得したいです！

貴重な経験をさせていただいた今回の派遣に感謝しています。

## 選手 小松 彩香

### 1. 当初の目標

100mと400Hに出場しました。環境が変わり、心と体が一致せず、今年で引退だと思っていました。これまでも短い時間の中で集中して練習に取り組んできたので、「いつも通りに。練習の成果を発揮するだけ」と自分に言い聞かせ、平常心を保つようにしていました。

### 2. 結果に対する評価

今回は運が悪く100mと400Hの競技が同じ日になってしまいました。100m決勝の前に専門である400Hの決勝があり、あっという間に終わってしまいました。400Hのラスト100mの強風の向かい風がなければ、自己ベストだったな、と思うと悔いはありません。次の100m決勝のラスト1本で自分の陸上人生が終わりだと考えていました。今大会の競技場のタータンが柔らかいということもあり、予選、準決勝で速い選手の何人かが肉離れを起こしていました。準決勝では2着の状態できざ100m決勝を迎えました。1本目、誰かが動いてやり直し。2本目もフライングがありやり直しになりましたが、それに気付かず70mまで走ってしまいました。体力が持つかと焦りながら呼吸を整え、スタートラインに戻って3本目、スタートはいつも通りうまくいきましたが、後半に足がもつれてしまいました。速報を見ると4位。しかも0.02秒差。コーチ、元教え子に対し「メダルを取れなくてごめん、約束果たせなかった」と思い、なんとも言えない気持ちでした。ただ、冷静になって振り返ってみると、今年は日本で聞こえる人の大会で結果を残していないために、デフリンピックでもこのような結果になったと考えられます。タイムも悪いのにチャンスだと思ってしまった自分の甘さ、弱さを実感しました。

### 3. 今後の目標

このまま引退したら後悔する、とたくさんの人達に背中を押され、やはり、日本での聞こえる人の大会でもっと結果を残せる選手になろう、と決心しました。

その後、元教え子から手作りのメダルをかけてもらい、目頭が熱くなりました。「3年後の世界大会の開催地が日本だからその時にメダルをかけてあげるね」と約束をしました。次は3年後なので、1年1年目標を立てて、少しずつ練習を積み重ねていきたいと思っています。

### 1. 当初の目標（自己目標）

2016年世界ろう者陸上競技選手権大会では男子400mハードルにおいて決勝5位入賞であったため、今大会ではメダル獲得及び自身の日本記録更新を目標に設定していました。

### 2. 結果に対する評価

- ・男子400mハードル予選1組4着 決勝進出
- ・男子400mハードル決勝8位 入賞

当初の目標としていたメダル獲得には届かず、最低限度の決勝8位入賞という結果に終わりました。また、自身の日本記録も更新できませんでした。今年は腰のヘルニアの影響で、4年に一度の大事なシーズンで思うような走りができず、非常に残念ですが、そのような中でも現状できる限りのことをして臨んだ結果が決勝進出及び8位入賞につながったと思います。応援有難うございました。

### 3. 今後の課題

今後は腰のヘルニアをしっかりと治し、ショートスプリント(100m)のスピードを高めることにフォーカスしてトレーニングを行い、400mハードルでの持ち味である前半のスピードを磨いていくことに専念していきたいと思っています。スピードを高めることと並行して、福岡県在住の吉形政衡コーチ(男子400mハードル日本歴代9位記録保持者)の指導を仰ぐ機会をこれまで以上に増やし、ハードルの技術も並行して高めていきたいと思っています。

## 選手 中村 晃大

三段跳びに出場させて頂きました。3月末の世界ろう者アルペンスキー選手権を終え、すぐに陸上モードに切り替えて本番まで時間が許される限りトレーニングを行ってきました。

現地に到着すると、食事の面で思わぬ苦戦を強いられるという誤算はあったものの、本番までの計画を予定通りにこなすことができ、当日は自己ベストを大幅に更新できるのではないかとこの位に、アップの時点から調子が良かったです。1本目は慎重に跳躍したもののファール。続いての2本目もファール。あとがなくなった3本目では決勝進出を狙って安全に跳躍し、無事決勝進出できました。今回の目標はメダル獲得でしたので、そのためには攻めに攻めないと上位進出できないということが頭の中にあり、決勝の残り3本も攻めに攻めました。しかし、3本ともわずかなファールを連発してしまい、3本目の記録が最終結果13m62で7位入賞となりました。今までの中で最も攻めることができた試合でしたが、攻める気持ちが強すぎたせいか、試合の流れを作れなかったという面では反省点であり、今後に向けた大きな課題となりました。

今回は治安の面で非常に心配でしたが、現地の方々、なによりも日本選手団の皆様の支えがあってより競技に集中することができました。そして現地の方々のボランティア精神、手話の普及度には驚かされました。ゆくゆくは日本でデフリンピックの開催だけでなく、日常の中で手話があふれるような環境になってほしいと社会的な面でもとても勉強になった大会でした。今回も日本代表として派遣して頂き、ありがとうございました。次は2年後の冬季デフリンピックでメダル獲得できるよう頑張りますので、これからもよろしくお願ひします。

## 選手 谷岡 真帆

### 1. 当初の目標（自己目標）

自己ベスト 更新 5m10cm 8位内 入賞

### 2. 結果に対する評価

自己ベスト更新ならず、10位(4m88cm)という結果でした。踏み切りと助走スピードが安定しないのも要因であると考えられますが、一番の問題として、助走してから踏切り板をふみきる時の歩幅とリズムが高さのある跳躍を生み出せていない要因であることに気が付くことが出来た試合でもありました。無論、納得がいく結果ではありませんが、あらゆるコンテションの中で対応できる技術が欠けていたという事だと思います。しかし、16歳で国際大会を経験できたことは今後の課題を見つけることに繋がったと思います。諸先輩たちの努力と向上心を間近に見ることが出来、他国の選手たちとの交流が私に新しい風を運んでくれたことに感謝しなくてはなりません。

### 3. 今後の課題

日々の生活を一から見直し、食生活の面においても筋力アップに繋がるよう努めたいと思います。そして、練習日誌を活用し、毎日のトレーニングの中で今の自分の課題を考えることが大切だと感じました。現状として、高さのある跳躍に繋がるように最後の3歩のリズムと歩幅の改善に取り組みたいです。改善のためには練習あるのみだと思います。自分自身のことは自分で管理していく力が求められる中で、練習プランなどもデータ化することで練習内容が充実したものになるよう、考えたいです。

4年後の大会を見据え、自分自身と向き合う中で多くの課題に対して、その時々で対応できる技術を持つためには陸上競技におけるあいとあらゆる分野に対する知識を高めていかなければなりません。

## 選手 高橋 渚

### 1. 当初の目標（自己目標）

前回大会はメダルを逃し4位でしたので、「ママになって4年ぶりの自己ベスト更新してメダルを獲得し、息子にプレゼントをする」ことが当初の目標でした。

### 2. 結果に対する評価

7月27日に女子やり投げに出場し、37m67cmで6位入賞しました。自分らしい投擲ができなかったこと、メダルを獲得できなかったことがとても悔しかったです。ハイレベルな中で最後まで負けずに、諦めずに戦うことができたこと、3回目のデフリンピックに出場できたことをとてもうれしく思います。出産・育児により陸上に復帰できるのか、デフリンピックまでに限られた時間の中でフォームを改善できるのか不安もありましたが、主人や家族や友達、陸上の仲間たちからたくさんの支えがあったからこそここまで頑張ることができました。

### 3. 今後の課題

女子やり投げで40m越えるのが当たり前である程ハイレベルな戦いだった現状を受け、投擲コーチのそれぞれの専門コーチ(円盤、ハンマー、やり投げ、砲丸投げ)が必要ではないかと思いました。コーチとの信頼関係をもっと深めていく必要が

あり、4年後までにどのようにレベルアップしていくのか、メダル獲得するためには何が必要なのか、ライバルの海外の選手の記録の情報をたくさん収集しなければならないのが大きな課題だと思います。

4年後に出場できたら、「リベンジでメダル獲得!!」を目標として戦いたいです。

## 選手 岡田 海緒

### 1. 当初の目標（自己目標）

デフリンピック初出場ですが、メダル獲得を目標に頑張っていくこと、自分の活躍を通してデフリンピックの認知度・理解度を上げていくことです。

### 2. 結果に対する評価

800m 6位、1500m 7位でメダルには届きませんでしたが、得るものが大きかった大会でした。いずれも世界との差を痛感し、自分に足りない部分や弱さを改めて感じました。ただ、2種目ともに自己最高記録に近いタイムで終わり、ベストタイムを出せばメダルの可能性があっただけに悔しい思いをしました。今大会でレース展開や雰囲気は日本と違って、ここで怖気づいたら自分の持っている力を十分に発揮できないことが分かりました。また、万全な状態で現地に飛び立ったとしても、食事や生活リズムが狂うと身体の状態が大きく変わります。選手村での食事が私の口に合わず、部屋で日本から持参したレトルト食品や協会が用意した炊き込みご飯をふりかけやお茶づけにして味噌汁と2品のみの食事をする日がしばらく続きました。現地入りして3日後には体重が3キロほど落ちてしまいました。このままではいけないと思い、試合の3日前にモールドをしっかり食事を摂ったため、幸い競技に大きな影響はありませんでした。食事はアスリートにとってトレーニング以上と言っていいほど重要な要因であることを再認識させられました。これらの過ごし方も含め、今大会は自分のキャリアにとっても大きな糧になりました。

### 3. 今後の課題

世界を相手に戦っていけるような選手であるためにはこのような経験を積み重ね、より一層高みを目指していく必要があります。また、自分の中で崩せない強いこだわりをひとつでも持って生活していくことで海外生活でも対応できると思います。海外遠征の合宿や試合を増やしていく必要もあると思います。合宿は日本選手のみならず、外国選手との合同練習がお互いにとって良い影響があると思います。

## 選手 長内 智

### 1. 当初の目標（自己目標）

400m ファイナリスト メダル獲得  
4×400mR 金メダル獲得  
自己ベスト更新

最低でもメダルを獲得することを目標にしていました。

### 2. 結果に対する評価

400mで準決勝進出、4×400mRで決勝進出という結果になりました。私自身としては、コンディションもよく、モチ

ベーションも最高の状態でした。そんな万全の状態でも挑みましたが、予選でアキレス腱を痛めてしまい、400m準決勝・4×400mRにも大きく影響が出てしまったと思います。怪我をして不安の中で、曇り空にのみこまれてしまったのか、自分の走りが全くできず、思うように動きませんでした。本当に悔しいです。スタッフ等皆さんが応援・サポートしてくださったおかげで、ここまでくることが出来ます。そうでなければ出場することもできませんでした。

今回、出場するにあたって、メダルを獲得して今までお世話になった方々に恩返ししたいという気持ちで挑みました。結果、メダルを獲得することは出来ませんでした。この舞台に立てたこと、日本選手団の皆さんと戦えたことに誇りに思っています。そして沢山の方々に感謝の気持ちを伝えていきたいです。本当にありがとうございました。

### 3. 今後の課題

今回のデフリンピックに参加して、心技体ともに世界との差を改めて感じました。これが足りない。あれも足りない。と、きりがないので、全て一度リセットし、1から作り上げていきたいと思っています。

選手 池田ブライアン雅貴

#### 1. 当初の目標（自己目標）

2016年ブルガリアで開催された世界選手権ではマイルリレーで準優勝したため、今回のデフリンピックでは日本ろう新記録を更新するとともに優勝を狙っていました。また、マイルリレーのラップタイムでは48秒台を狙っており、次の走者によい流れでバトンをつなげる事を意識して前半から飛ばして1着でバトンを渡す事が1走者としての目標でした。

#### 2. 結果に対する評価

今回のデフリンピックは去年の世界選手権のマイル記録と比べ、タイムが下がっていました。各国の代表はタイムが世界選手権の時よりも全体的に上がっており、ハイレベルな試合でした。世界選手権は準優勝だったので、デフリンピックで5位入賞は全く納得のいく結果ではありませんでしたが、このような結果に至ってしまったのは単純に実力不足であったと考えられます。慣れない曇り空に押されてしまう事があり、メンタルの部分で負けてしまったこともありました。

#### 3. 今後の課題

今大会を踏まえ、世界で戦えるような選手になるためにもメンタルを鍛えなければならないと思います。練習も怪我が多く、周りの選手より練習量が不足しているため、まずは怪我をしない体を作り、そこから練習の質を高めていくべきであると気付く事が出来ました。

選手 岡部 祐介

#### 1. 当初の目標（自己目標）

4×400mリレーで2016年世界選手権のときよりも、良いタイムを出し、メダル獲得を目指しました。

### 2. 結果に対する評価

7月28日男子4×400mリレー準決勝1組3着 決勝進出  
(池田・岡部・森光・長内)

7月29日男子4×400mリレー 決勝5位  
(池田・岡部・森光・山田)

残念ながらメダル獲得には至りませんでしたが、一人一人がチームのメンバーとして全力で走ることができました。私自身の反省点として、決勝のように多くの選手に囲まれている状態の中で走り抜く対応力が、まだまだ不足していると感じました。

### 3. 今後の課題

もっと400mの競技力を高める必要があるため、ショートスプリントなどを磨いてバトン練習や大会に出る機会を増やしていこうと考えています。さらに今回は身体の故障が多かったので、怪我対応もしっかり取り組む必要があると感じました。

選手 三枝 浩基

#### 1. 当初の目標（自己目標）

今大会のデフリンピックの4×100mRでは41秒台を出すだけではメダルには届かないという想定の中、日本チームがメダル獲得するためには41秒60,70というタイムがボーダーになると思っていたので、この目標に向かって力を合わせて挑みました。

#### 2. 結果に対する評価

41秒66（日本新記録）で金メダル獲得という結果で、目標にしていた金メダルに届きました。準決勝直前にアクシデントを起こしてしまい、心が折れそうになりましたが、第2走者の中村選手に無事バトンを繋げる事ができ、なんとか立ち直ることができました。準決勝の翌日だったので、怪我で苦しい状態の私が一緒に走るメンバーの足を引っ張るのではないかと不安になりましたが、決勝の競技開始前にウォーミングアップでコンディションを確認し、痛みが無ければ起用してもらう方針だったので、他のメンバーや水野短距離コーチに最後まで信じていただき、素直に嬉しかったです。

いよいよ本番、ピストルが鳴った瞬間に良いスタートが切れ、一時加速を終えてから「スピードを作れている。隣のレーンのウクライナ相手は遅れている。思ったより近い。」と感じました。アドレナリンが出て、準決勝よりも身体の軽さも違いましたし、スタートも決まっていたので、第2走者の山田選手に好位置でバトンを託しました。2走～4走まで華麗なバトンパスで、アンカーの佐々木選手が最後の直線で2位・ウクライナの選手を引き離してゴールした直後、渾身のフィニッシュを決めた佐々木選手に僕が体ごとぶつかると荒々しく抱きつきました。

国民の皆さんの温かい励ましや大きな声援があったお陰で、恩返しできてよかったです。また、一緒に頑張ってくださった山田選手、設楽選手、佐々木選手と一緒に不屈の精神で悲願の金メダル獲得できたので、若手たちに世界一の座を与えることができました。

最後になりましたが、三枝監督をはじめ、コーチ、トレーナー、スタッフ、選手たちには感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

#### 3. 今後の課題

4年後のデフリンピックでは各個人の走力のレベルアップが

期待できる可能性が高く、世界記録（41.10）すら夢ではないと思えました。また、日本チームは世界にバトンパスの重要性を認識させられたと思います。次回のデフリンピックは各国がきちんと練習を強化してくると思うので、今回より厳しい戦いになることも予想されます。我々も連覇で世界記録樹立を目指します。

## 選手 設楽 明寿

### 1. 当初の目標（自己目標）

世界ろう新記録を更新し、金メダルを獲得すること。

### 2. 結果に対する評価

世界ろう新記録の更新にはならず、日本ろう記録の更新での金メダル獲得だったので、心残りです。また、準決勝で肉離れを起こし、決勝ではベストな状態で走れず、最低限の走りしかできなかったことが一番の後悔です。

### 3. 今後の課題

準決勝、決勝と肉離れなどの怪我や違和感が出ないように身体を再び作り直し、次の次元へ進化させます。また、個人種目の出場が出来なかったため、個人種目でも勝負できる力をつけます。

## 選手 中村 開知

### 1. 当初の目標（自己目標）

- 4 × 100m リレーで金メダルを獲得
- 4 × 100m リレーで日本ろう新記録を出す
- みんなのサポートをして、最高の状態を作り、様々な良い結果を出せる様にする

### 2. 結果に対する評価

初の世界大会出場でした。2年前に出場したアジア太平洋ろう者競技大会とは違い、様々な国の選手が集まり、レベルが高く、さらに激しい戦いでした。

4 × 100m リレーに出場したことはいい経験になりました。準決勝で第2走者として走りましたが、意外と緊張もせず楽しく走れたのが1番印象に残りました。今までは緊張して、力を発揮することができず、不完全燃焼な結果に終わる事がよくありました。以前の自分よりも強くなったと感じました。

### 3. 今後の課題

今後は短距離だけではなく、他の種目も挑戦するつもりです。その為には自分の体を理解し、練習方法を研究しながら、強くなれるよう練習を積み重ねていきます。

## バドミントン競技チーム

## 監督 中西 潤

### 1. 選手の選考について

#### 1-1. 日本代表ナショナルチームの立ち上げ

2014年11月に開催された、日本代表ナショナルチームの選考会を通して男女各6名の選手選出を行い、同年12月より始動しました。それまでは国際大会が開催される半年～1年前に同大会に出場する日本代表選手を選考会などで選出してチームを構成し、大会終了後は同チームを解散させていました。同システムは大会本番に照準を当て、その時のベストな選手を選出し、本番に向けた強化練習などを行う点では良い反面、大会後にはチームを解散するため、大会で得られた経験や反省点などを生かした練習ができず、長期的に選手強化をすることができない点もありました。同課題を解消する方法として対策を採ったのが、冒頭に挙げた日本代表ナショナルチームの設立です。同チーム設立後の活動として、年間を通じた強化合宿、対外試合への積極的な参加、国際大会への選手派遣を行ってきました。

#### 1-2. 日本代表ナショナルチームの活動内容

2014年12月に開催した強化合宿を皮切りに、今大会までの間、以下内容で活動を推進していきました。

2014年度（12月～）
・強化合宿2回開催
2015年度
・強化合宿8回開催
・台湾との交流試合
・第4回世界ろう者バドミントン選手権大会派遣
・第8回アジア太平洋ろう者競技大会派遣
2016年度
・強化合宿9回開催（内1回中止）
・関東障害者バドミントン大会派遣
2017年度（～7月）
・強化合宿4回開催

年間を通じた強化合宿を行い、固定したメンバーで練習を行うことで、長期的な選手強化が可能になり、また選手間のコミュニケーションを図ることもできるようになりました。

特に、2015年度は国際大会が2回、台湾との交流試合があり、それぞれで国際的な経験を日本代表ナショナルチームの中で積むことができたことは大きな成果であり、その結果今回のデフリンピックで各選手がこれらの経験を大いに活かすことができたように思います。

また、2015年度からはトレーナー体制を構築し、合宿期間中の選手へのトレーニングと体のケアができるようにしました。また、2017年度からは外部コーチを招へいし、選手たちの技術面のレベルアップを担当していただきました。これらのように選手強化環境を着実に改善していき、選手たちが練習に専念できる環境を提供することができたと思います。

#### 1-3. デフリンピックへの派遣選手選考について

デフリンピックでのメダル獲得のため、派遣選手選考のポイントとしたことは、男女ダブルスでどれだけ確実に勝ちを取れるかでした。これまでの国際大会から見ても、特に女子ダブルスは2015年の世界選手権大会でも銀メダルを獲得していること、日本のダブルスは世界から見ても上位レベルにあることから、男女ダブルスに重点的においた選考を行いました。

また、男子シングルスは近年、世界に水をあけられていましたが、2015年の世界選手権大会で5位入賞を果たした選手が現れたこともあり、団体戦での戦い方をコーチ間で構想を固め、それに沿った選考も行いました。その結果、男女各3人の派遣

選手を選出しました。然しながら、デフリンピック開催地であるトルコで起きたテロ騒動の影響などから、一度選出した選手が辞退することもありました。致し方ないことではありますが、周囲環境や情勢に選考が左右されることもあるという難しさを感じさせられました。

## 2. 成績一覧

バドミントン競技は、6つの種目があり、①団体戦、②男子シングルス、③男子ダブルス、④女子シングルス、⑤女子ダブルス、⑥混合ダブルスです。日本からはすべての種目に出場し、下記の成績を収めました。

### 2-1. 団体戦

#### ・予選リーグ グループD

第1試合 日本 ○5-0× 香港

第2試合 日本 ×1-4○ 台湾

⇒1勝1敗 リーグ2位 決勝トーナメント進出

#### ・決勝トーナメント

1回戦 日本 ×0-3○ 韓国

⇒最終成績 5位(入賞)

### 2-2. 男子シングルス

#### ・柿内康平選手

予選リーグ 2勝0敗 リーグ1位(決勝T進出)

決勝トーナメント 3回戦敗退

⇒最終成績 ベスト16

#### ・沼倉昌明選手

予選リーグ 1勝1敗 リーグ2位(決勝T進出)

決勝トーナメント 1回戦敗退

⇒最終成績 ベスト64

#### ・太田歩選手

予選リーグ 1勝1敗 リーグ2位(決勝T進出)

決勝トーナメント 1回戦敗退

⇒最終成績 ベスト64

### 2-3. 男子ダブルス

#### ・柿内康平&沼倉昌明ペア

予選リーグ 1勝1敗 リーグ2位(決勝T進出)

決勝トーナメント 2回戦敗退

⇒最終成績 ベスト16

### 2-4. 女子シングルス

#### ・吉田美香選手

予選リーグ 1勝1敗 リーグ2位(決勝T進出)

決勝トーナメント 2回戦敗退

⇒最終成績 ベスト16

#### ・品田千紘選手

予選リーグ 1勝1敗 リーグ2位(決勝T進出)

決勝トーナメント 1回戦敗退

⇒最終成績 ベスト32

#### ・長原菜奈美選手

予選リーグ 1勝1敗 リーグ2位(決勝T進出)

決勝トーナメント 準決勝敗退(3位決定戦進出)

3位決定戦 長原 ○2-1× 中国選手

⇒最終成績 3位(銅メダル)

### 2-5. 女子ダブルス

#### ・吉田美香&品田千紘選手

予選リーグ 2勝0敗 リーグ1位(決勝T進出)

決勝トーナメント 準決勝敗退(3位決定戦進出)

3位決定戦 吉田・品田 ×0-2○ 韓国選手ペア

⇒最終成績 4位(入賞)

### 2-6. 混合ダブルス

#### ・柿内康平&吉田美香ペア

予選リーグ 1勝1敗 リーグ2位(決勝T進出)

決勝トーナメント 1回戦敗退

⇒最終成績 ベスト32

#### ・沼倉昌明&品田千紘ペア

予選リーグ 1勝1敗 リーグ2位(決勝T進出)

決勝トーナメント 準々決勝敗退

⇒最終成績 5位(入賞)

#### ・太田歩&長原菜奈美ペア

予選リーグ 2勝1敗 リーグ2位(決勝T進出)

決勝トーナメント 準々決勝敗退

⇒最終成績 5位(入賞)

## 3. 成績と評価

まず団体戦では、今大会の組み合わせはすべてがアジア国で初顔ではなかったため、比較的平常心で試合に挑めるのでは、と期待しましたが、選手たちは目に見えない重圧感に悪戦苦闘している様子でした。試合の入りもあまり良くなく、終始相手にペースを握られたまま終わってしまった感が否めません。2015年の世界選手権で銅メダル、同年のアジア太平洋ろう者競技大会で銀メダルを獲得した実績もあり、今大会で2001年以来のメダル獲得をめざしてきましたが、5位入賞しか果たせませんでした。デフリンピックという大舞台でのメダル獲得を果たすために今のチームに不足しているものを整理し、課題を一つ一つ確実にクリアできるようにしていきたいです。

個人戦で特に感じたことは、日本チームの技術的な面は以前より確実に上がってきており、世界に通用できるところも所々感じられたことは大きな収穫でした。然しながら、メンタル、特にハングリー精神においては海外選手の方が上であり、実際の試合でもメンタル面をやられて敗退してしまったケースもいくつか認められました。ハングリー精神を向上させることは一朝一夕でできることではありませんが、メンタル面の強化を更に推し量っていくことが必要と感じました。また、団体戦に続いての個人戦で、1日の間にシングルスとダブルスと異なる種目をこなしていかなければならず、選手たちにとっては心身ともに疲弊し、トレーナーのケアを施しながらの試合となってきました。先ほど挙げたように、技術面では以前より向上しても体力が無くてはせっかく習得した技術も活かせなくなってしまうため、長期間安定したパフォーマンスを発揮できる体力を今より更に身につけていく必要があることを今大会で痛感させられました。

メンタル面や体力面も共通して言えることであるが、一朝一夕で習得できることではないため、強化合宿だけではなく、日常生活の中で選手各々が如何に強化に励めるようなプログラムを用意していくかなど、選手自身もアスリートとして生活していく意識を高めていかなければならないでしょう。また、これまで実施してきた強化合宿は主に1泊2日であるため、どうしても短時間での練習となってしまいます。もう少し長い期間の合宿を設け、長期間の練習を通じた体力づくりをしていく方法も視野に入れて、選手強化環境の再見直しをしていく必要があ

と感じています。その中で、女子シングルの銅メダルを獲得することができました。彼女は日本ではあまり見られなかった気合を全面的に出し、サウスポーを上手く活用したショットを多用しながら自分のペースでの試合運びができたことが今回の結果に結びついた大きな要因でしょう。まだ20代前半と若いため、今後も鍛錬を続けて頂き、更なる飛躍に期待したいです。

#### 4. チーム（コーチ）体制と各コーチの役割

バドミントン競技のチーム体制を下表のように構成し、選手たちへのサポートにあたりました。

氏名	肩書	役割
中西 潤	監督	チームの最終意思決定者 (采配、選手起用) チームスタッフのまとめ役 選手団との連携
井上 美緒	コーチ	選手のまとめ役 選手への技術的指導
岡野 篤郎 (聞こえる)	トレーナー	選手の体のケア トレーニング担当 選手団医療チームとの連携

今大会初めてバドミントン競技としてトレーナーを派遣したことが、大会本番時にトレーナーが選手たちのそばにいることの意義を大いに感じました。前大会までは選手たち自身で体のケアをしていましたが、十分なケアが行えず、試合でベストパフォーマンスを発揮できないまま終えてしまった反省点を今大会で活かせることができました。その反面、トレーナーへの負荷も大きくなっている感も否めません。その点については次大会への課題とし、更なる検討を重ねていきたいです。

また、コーチ体制についても、更なるメダル獲得を果たすためにはより専門的なコーチの採用が必要不可欠であると思われます。然しながら、派遣費用などの関係で派遣を断念してしまっているのが実情です。現在、外部コーチを採用して強化合宿範囲での技術指導をして頂いているが、大会本番にも同行できるようにしていき、より専門的な技術指導を施しながら試合に挑める環境構築の実現を今後めざしながらやって参りたいと存じます。

#### 5. 競技スケジュール（渡航スケジュール）

バドミントン競技としての競技スケジュールについては以下の通りです。今大会は団体戦が2大会振りに導入されたこともあり、非常にハードなスケジュールとなったが、トレーナーを同行させ、選手へのケアなどを十分に行えたことで、最終日まで大きな怪我もすることなく戦い抜けたことは大いに評価したいです。

日程	内容	出場種目（※）
7/15（土）	日本出国	
7/16（日）	トルコ入国	
7/17（月）	公式練習	
7/18（火）	公式練習、結団式、開会式	
7/19（水）	団体戦 - 予選L	団体戦
7/20（木）	団体戦 - 予選L・決勝T	団体戦
7/21（金）	団体戦 - 決勝T、練習	
7/22（土）	公式練習	
7/23（日）	個人戦 - 予選L	MS,WS,MD,WD,XD
7/24（月）	個人戦 - 予選L	MS,WS,MD,WD,XD
7/25（火）	個人戦 - 予選L	MS,WS,MD,WD,XD
7/26（水）	個人戦 - 決勝T	MS,WS,MD,WD,XD

7/27（木）	個人戦 - 決勝T	MS,WS,MD,WD,XD
7/28（金）	個人戦 - 準決勝・決勝	WS,MD,WD,XD
7/29（土）	休養日	
7/30（日）	解散式、閉会式	
7/31（月）	トルコ出国	
8/1（火）	日本帰国	

※ MS…男子シングルス、WS…女子シングルス、MD…男子ダブルス、WD…女子ダブルス、XD…混合ダブルス

#### 6. 大会の競技運営などの報告

今大会のバドミントンにおいて、競技規則の適用などについて大きな問題点は認められなかったが、審判が聞こえる人のため、聴覚障害者の選手や監督・コーチとのコミュニケーションがスムーズに行われないうまま進行していたことは改善が必要であると考えます。デフリンピックは聴覚障害者を主体とした大会であることを十分に意識した配慮が必要であることを忘れてはなりません。それについては、国内でも同様のケースが認められるため、その点については我々としても何らかの対策が必要でしょう。

今大会は選手村と会場はシャトルバスで1時間も要し、選手たちに大きな負担を強いられてしまいました。バドミントンの競技ルールに沿った会場が近くになかったことが要因でしたが、移動にかかってしまった体への大きな負担を如何に取り除き、ベストな体調で試合に挑めるための体制の強化をもう少し強く意識していく必要があると感じました。具体的な対策としては、引率トレーナーの増員などが挙げられるでしょう。また、昼食として大会実行委員会から弁当が配布されるシステムを利用しましたが、弁当の内容が試合に挑む選手の体を考慮されたものではありませんでした。大会会場付近は飲食店やスーパーが全くなく、体育館に軽食店があるのみでした。また、選手村での食事時間帯によっては提供されているメニュー数が少なく、十分な食事ができないこともありました。食事面について、事前に情報があり、選手たち自身が日本からドライフードを持参するなどに対応できましたが、特にビタミンが多く含まれるフルーツなど、どうしても現地調達が必要な飲食物もあるため、現地で買出しができるかどうかを事前に情報収集し、臨機応変に対応できる体制を構築する必要があると感じました。

#### 7. 反省・まとめなど

バドミントン競技は2009年を最後にメダルから遠ざかっていた現状を打破すべく、国内での競技力を底上げすることが最優先課題であったことから、選手強化事業に本腰を入れて取り組んでいきました。団体戦や女子ダブルスは特にメダル獲得を期待していたので、それが果たせなかったことは悔いが残ります。そんな中、女子シングルスで銅メダル獲得を果たすことができたことは大きな喜びであり、今後の日本デフ・バドミントンにとっての明るい材料となりました。今回のデフリンピックに向け、2014年から準備を進めてきて日本代表ナショナルチームの設立など、これまでなかった新しい取り組みを試行錯誤しながらやっていき、少しずつですが、確かな手応えを感じてきています。以前と比較してより専門的な指導、トレーナー体制構築による選手への協力的なサポートなどを果たすことができました。その反面、新しい選手の発掘が遅れている課題も残されています。今回の成果を今後さらに大きくしていくためにも、新しい選手の発掘に今後は多くの時間を費やしていく必要があると今大会を通して強く感じました。

最後になりますが、今大会出場にあたり、連盟をはじめ、国

会関係者、日本から暖かい応援を頂いた日本国民の皆様には厚くお礼を申し上げます。デフリンピックは多くの方々の支えなしにできるものではないことを再認識し、更なる多くの国民の皆様に応援頂けるよう、選手強化は勿論、デフリンピックに対する啓蒙活動も更に推し量っていきたく存じます。

最後になりますが、このデフリンピックにおいて多くの方々にご協力いただきありがとうございました。皆様のご厚情に深く感謝の気持ちを申し上げます。

## アスレティックトレーナー 岡野 篤郎

### コーチ 井上 美緒

#### 1. 自己の役割とその評価

デフリンピック期間中チーム内において私の主たる役割は、監督の補佐、選手が試合及び練習に専念できる環境作り、コーチングでした。国際大会が初めての選手はいませんでしたが、長いフライト、時差ボケなど日本の環境とは異なる中で試合開始までの2日間である程度順応させていかなければなりませんでした。

選手村の食事に関して生野菜は食べないよう気を使っていたため、国際大会ならではの偏った食事となり、あらかじめ日本で水やお湯でご飯が食べられるアルファ米やカロリーメイト、プロテインバーなどを購入し、選手には昼食や軽食、エネルギー補給として毎日会場に持参してもらいました。実際に、会場にサンドイッチやピザの軽食はありましたが宅配だったので待ち時間もありませんでした。またトレーナーからの提案で、会場でスープや味噌汁が飲めるように現地でケトルを購入し、日本から持参したステンレスタイプの魔法瓶ポットに沸かしたお湯を手配したことは選手がリラックスした状態で食事や待ち時間を過ごすことができたので非常に良かったと感じています。

今大会はバドミントン会場が選手村からバスで片道40分前後かかる郊外にあり、体育館の周りには何も無い状況の中でも選手個人が自分なりのリズムで試合に臨んでおり、大きなケガもなく、このチーム体制で4年間のまとまりと成長を感じることができた大会でもありました。そして、12年ぶりに女子シングルスで3位の銅メダルを獲得することができましたが、団体戦やその他の種目でメダル獲得ができなかったこともあり、コーチングとしては力不足であったことを痛感しています。必要な時に適切なアドバイスや指示を行うことができるほどの力量を持ち合わせていなく、選手の持ち味を上手に引き出せなかったように思います。

#### 2. 今後の課題

浮かび上がってきた選手の課題は、①「レシーブ力」、②勝ちにもっとこだわらなければいけない「ハングリーさ」、③負けられない試合という時の「メンタルの強さ」だと感じます。特に、メンタルの弱さは以前からの課題であります。

戦える力や技術は世界に劣っていないにもかかわらず、競い合っている場面やこぞという場面で確実に決めなければならないスマッシュをサイドアウトにしまったり、ネットにひっかけるなど流れが相手のペースに持っていかれる場面が多く、あと一歩が足りませんでした。バドミントンは個人競技なので、自分自身との戦いでもあり、大会の空気感に飲まれてしまわない様な強い精神力が重要です。いつもとは異なる環境でも自分の持っている力を発揮できる選手が本当の強い選手であると言えると思います。その鍛える環境づくりというところでは、合宿を国内だけでなく、海外でも実施し、いつもと違う環境、食生活で取り組む事を視野にいれていかなければならないのかなとも感じました。

#### 1. 自己の役割とその評価

私は、今大会のバドミントンにおいてアスレティックトレーナーとして帯同させていただきました。デフリンピック期間での主な活動内容は①選手のコンディション管理②競技会場、ホテル内でのコンディショニング指導③ドーピングに関しての対応④緊急時対応の準備、などになります。

選手のコンディション管理では、毎朝選手に体温などを測定・報告してもらい、管理しました。また、選手やスタッフの体調に関しては本部メディカルスタッフにも報告しました。大会期間中は選手が下痢や風邪などの内科的な症状になることなく、コンディションを大きく崩すことはなかったですが、スタッフ1名が中耳炎の症状がでました。しかしそこは本部メディカルチームと連携して対応できました。

競技会場、ホテルでのコンディショニング指導では、今回の大会では試合期間が10日間（団体戦2日間、個人戦6日間、調整日2日間）と長く、試合数も多いことから大会期間を通して疲労を残すことなくベストパフォーマンスに近いコンディションをいかに維持できるかがポイントになりました。また、試合の間隔が選手によって変わる為、個々のスケジュールに合わせた指導も必要になりました。そこで、今回は国内の合宿の時から継続して選手にトレーニングやセルフケアなどを指導し、自分自身でコンディション調整ができるように準備してきました。その上で大会期間中の選手の体調や状況を確認しながら競技会場でのウォーミングアップ、トレーニング指導、ホテルでのトレーニングやセルフケアなどのコンディショニング指導を行いました。また、国際大会では食事があわず体重が減少してしまう選手がいた為、今回はアルファ米や栄養補助食品、果物、100%ジュースなどを用意してもらい補食などの栄養指導もしました。その結果、大きく体重が減少してしまう選手はいなかったです。

ドーピングに関しての対応では、国内合宿時にはJADAによるドーピングの講習会だけではなく、代表チームで講習会を開き、ドーピングの知識や対応について指導しました。現地においても競技会場のドーピングコントロールルームを確認したり、選手にドーピングの対応に関しての打ち合わせをしました。大会期間中は1名ドーピング検査を受けましたが、問題なく対応ができました。

緊急時対応の準備に関しては、本部メディカルチームと選手団本部、またはチームのスタッフと連携をとって傷害などが発生した場合に即座に対応できるように準備しました。結果的に今回は大きな傷害などが発生することはなく、無事に競技日程を終えることができました。

#### 2. 今後の課題

今回は、女子シングルスにおいて銅メダルを獲得できましたが、チーム全体として考えるともう少し結果を残せたのではないかと感じています。国際大会で経験した反省をふまえ、国内合宿から準備してきたこともあり、大会期間中は大きくコンディションを崩すことなく競技日程を終えることができました。しかし、もう少しうまくコンディショニングの環境を作る

ことができましたし、今回はスケジュールの関係で使用できなかったのですが、本部メディカルルームの活用などをすればもっと良いサポートができたのではないかと感じました。また、これ以上結果を出すためには、大会期間中のサポートを充実させるだけでなく、国内合宿時、または選手各自が普段からコンディショニングをしっかりとできるような体制作り、土台となるフィジカル面の強化からしっかりと行わないとこれ以上の成績は難しいと思います。なので、国内での環境面、サポート体制を充実できるようにスタッフと協力していきたいと思いません。

## 選手 柿内 康平

### 1. 当初の目標（自己目標）

2年前に初めて出場した世界選手権大会の成績(団体戦3位、男子ダブルス・混合ダブルス ベスト16、シングルス ベスト8(5位入賞))より勝ち進み、1位・2位・3位・4位と順位を決める最高の舞台で戦うこと。試合が終わるまで「感謝の気持ち」を忘れず自分が持っている力を全て出し切ることが目標でした。

### 2. 結果に対する評価

結果は、団体戦ベスト8、ダブルス・シングルス・混合ダブルスの個人戦全てベスト16に終わり、十分に力を出し切れず悔いの残る結果となりました。

団体戦は、初戦(香港戦)シングルスからのスタートでした。会場の雰囲気にも呑まれ、空調に苦戦しました。なかなか自分のペースで試合運びができなかったのですが、相手のコートに入れることだけに集中して2対1で逆転勝ちしました。初戦のプレーを反省し、次からのゲームは集中して挑むことができました。2試合目は、いつも3対1で負けている台湾に今回も3対1で負けてしまいました。チームとしての力が付いていないため、3度も同じ後悔を味わうことになりました。予選は2位上がりで、準々決勝へ進出しました。韓国との対戦で混合ダブルスに出ましたが、リードしておきながら大事な場面でのミスが響き、逆転負けしてしまいました。チームに貢献することができず、団体戦は一人が勝ってもチームとしても勝てないことを実感しました。勝つためにはどんな相手であろうが、技術が劣っているが関係なく食らい付くしかないと感じました。選手全員が力を十分に出し切れなかった結果がベスト8であると思います。

混合ダブルス・男子ダブルス個人戦では、パートナーと試行錯誤しながら練習を積んできたが、団体戦に引き続き後もう一步ギアを上げることができず、中途半端に終わってしまいました。もう一段階集中してプレーすることができれば、準々決勝・準決勝へと勝ち進むチャンスがありました。前衛・後衛の動き、返すコースなど精度を上げる必要があると感じました。

シングル個人戦は、2年前の大会で負けた選手(第1シード)と準々決勝でリベンジできるチャンスがあり、楽しみにしていました。まず、予選から決勝トーナメント2回戦までは自分のペースで試合運びができ、2-0で勝ち進むことができましたが、3回戦(ベスト16)で今回優勝した選手に2-0で負けてしまいました。初の中国選手との対決でしたが、ショットの正確さや動きに無駄のない足運び、崩れない体幹の強さなど、抜群の安定感がありました。初めて試合の中で今のプレーでは勝てないと思いましたが、打っても打っても返ってくる試合展開が

凄く楽しかったです。こんなラリーは今までありませんでした。一人でフルコートを動くのはきついです。改めて「バドミントンって奥が深いな、楽しい、もっと強くなりたい、あのショットはどう打ってるんだ、僕もあのショットを打ちたい」等、何かを感じさせられた試合でした。できれば準決勝や決勝で対戦したかったのですが、組み合わせも決まりがあるので仕方ありません。最終的には強い選手が勝つのだ、と実感させられた今までにない体験となりました。もう一度対戦したいです。

最後に、バドミントンのキャプテンとして不甲斐のない結果となり正直、申し訳ない気持ちでいっぱいです。四年後、出場するチャンスがあれば挽回して連盟のために日本のために少しでも恩返しできたらいいなと思いました。

### 3. 今後の課題

最終目標は、4年後のデフリンピック大会で「メダル獲得」です。出場するためには、来年・再来年に「アジア大会」「世界選手権大会」が行われるため、まずは選手として選出され、上位を目指していきたいです。

また、今回ベストコンディションで挑めなかった怪我(右膝)をしっかり治すことを優先したいと思います。その間は、今大会の決勝戦の様子を見て、足運びや打ち方などを研究してイメージトレーニングを積んでいきたいと思います。怪我が治り次第、体幹トレーニングや基礎打ちなどを徹底的に練習していきます。来年(1月)から大会や合宿に参加していきたいと考えています。それまでは、怪我の状況をトレーナーに報告していきたいと思います。

デフリンピック開催まで仕事、練習、合宿に費用等の面での大変さはありませんでしたが、今大会を通して、知名度が高まり、オリンピック・パラリンピックと同じくらいメディアに取り上げてもらえるようになってほしいです。

デフリンピック、お世話になりました。また、ありがとうございました。

## 選手 沼倉 昌明

### 1. 当初の目標（自己目標）

- ①自分の力を100%発揮する。
- ②悔いのない試合をする。
- ③メダルを取る。

デフリンピックのような世界中の選手が参加するような大きな大会に出場することは初めてであり、全体のレベルが掴めなかったため、上記目標をたてました。

### 2. 結果に対する評価

競技の結果については、団体戦、シングルス、ダブルス、混合ダブルスはすべて決勝トーナメントへ進出を果たし、最終的には団体戦と混合ダブルスは5位入賞となりました。中でも特に自分の中で一番評価したいのは、混合ダブルスで強豪の中国、シード権を持つロシアに大接戦の末、勝ったことです。しかし、この後の銀メダリストのマレーシアとの試合は直前の試合(男子ダブルス)の疲れで思うように体が動けなかったことで負けてしまいました。もう少し体力があればメダルが取れたかもしれないと未だに悔やまれますが、ノーシードからベスト8入りを果たすことができたのは自分の中で大きな自信となりました。

### 3. 今後の課題

1つ目は、ダブルスと混合ダブルスにおいては、コンビネーションの完成度をより高め、ラリーの主導権を簡単に相手に渡さないようにしていくことが大事だと思いました。

2つ目は、技術は五角であっても、疲れにより試合の勝敗が決まるということが自分も含め、大会全体にもそのような傾向が見られました。世界で勝つためには、疲れにくい体力作り、回復力をあげるトレーニングをしていく必要があると思います。

また日本でのデフリンピックに対する認知度が他の国に比べ、まだまだ低いように感じましたので、認知度を上げていく活動を行っていくことは競技のレベルアップにも繋がる、大切なことだと思います。

## 選手 太田 歩

### 1. 当初の目標（自己目標）

今回で6度目の国際大会ですが、デフリンピックは初出場です。ここまで応援・支援して下さった方々の感謝を胸にメダルを獲得し、良い報告ができるよう大会に臨みました。

### 2. 結果に対する評価

団体戦：ベスト8（入賞）、個人戦では、男子シングルス：ベスト32、混合ダブルス：ベスト8（入賞）となりメダルを獲得することができませんでした。

### 3. 今後の課題

内容としては、反省点いっぱいの大会となりました。試合中に一番悩んだことは、冷房により風の影響が強く、シャトルをコントロールすることが難しかったです。風を意識しすぎて、自分のペースを持続させにくく崩れてしまう場面が多々ありました。風の影響を強く受けることは日本では経験したことがないので戸惑ってしまいました。シャトルの影響を受けるのは相手も同じなので、いかに早く慣れるか、気持ちを切り替えられるかが鍵となります。今回の試合を通して感じたことは、試合を有利に進めていく為には足と体幹が重要であることを強く感じました。また、瞬発力こそあるものの、フェイントを受けると体幹がぶれてしまいシャトルに追いつくのが遅れてしまうパターンが多々ありました。技術は海外の選手と比べてそれほど差異はありません。どんなシャトルも取りに行ける足が大事になります。フットワーク力と体力をあげることが世界で上位を狙う為の条件です。今後についてまだ決めていませんが、デフリンピックでの悔しさはデフリンピックでしか晴らせません。4年後に向けて、人生設計を建てて計画的に行っていくことが大事になってきます。

最後に、デフリンピックに向けて運営して下さった協会スタッフの方々、指導、応援して下さい下さった皆さまのおかげで最高の舞台に立つことができ、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

## 選手 吉田 美香

### 1. 当初の目標（自己目標）

団体戦、混合ダブルス入賞、女子ダブルス優勝

### 2. 結果に対する評価

前大会を上回る4位（女子ダブルス）、ベスト8（団体戦）、メダルを目標にしていたのですが、結果を残すことが出来ませんでした。

振り返ってみると今大会で3度目の出場なのですが、1回目、2回目の時はベテランの先輩方がいて自分がついていくだけでした。今回は自分が引っ張らなければいけない立場であったにも関わらず、うまく引っ張れませんでした。女子ダブルスの3、4位決定戦では相手選手のデフリンピックに懸ける想いに押しつぶされ、自分たちのペースにできず、終始攻められてしまいました。

団体戦でもなかなかうまく次の選手へバトンを渡せず、チーム一丸となることの難しさをいつも以上に感じさせられ、反省する事だけです。

### 3. 今後の課題

男女ともにレベルが毎年あがってきているのはアジア大会、世界選手権で身を持って感じていましたが、それらの大会で勝ってもデフリンピックでは簡単には勝たせてくれないのは自分が一番よく知っているつもりでした。これまで以上に練習をしてスピードもスタミナも体力もつけ、合宿で大学生とスパリングをするたびにパートナーとのコンビネーションを磨き、力をつけていきました。トレーナーもむかえ、色々トレーニングをしてきたのにいくら練習しても色々指導をうけても試合のなかでうまく活かされませんでした。なぜメダルが獲得出来なかったのか、なぜ目標を達成する事が出来なかったのかと考えると、一番の要因は4年前からしっかりとデフリンピックを見据えて準備してきていなかったこと、チームワークの良し悪しを左右するチームメイトとのコミュニケーションが不足していたことだと思います。

今後選手として続けるか今は考えていませんが、今後の取り組み方を考える上で、今回の経験を色々な形で活かしていかなければいけないと思っています。

最後に、みなさまにメダルを見せる事が出来ず申し訳ない気持ちでいっぱいですが、応援していただき本当にありがとうございました！！

## 選手 品田 千紘

### 1. 当初の目標（自己目標）

- ・団体戦でメダルを取る
- ・女子ダブルスで金メダルを取る
- ・女子シングルスでベスト8に入る
- ・混合ダブルスでベスト8に入る

### 2. 結果に対する評価

まず、自分の中で一番の目標に掲げていた「女子ダブルスで金メダルを取る」という目標を達成することができませんでした。準決勝と3位決定戦について、メダルが欲しいという気持ちが前面に出てしまったことが敗因だと思います。4年前も同じところで敗退し、今回も同じところで敗退したということが今回のデフリンピックの中で一番悔しいところであり、反省すべき点です。メダルが見えてきたときに、点数を意識したり、メダルを意識したりする気持ちを上手くコントロールできるようになることが必要だと考えています。

次に混合ダブルスでは、国内の合宿の時に上手くいかず、悔

しい思いをたくさんしたことと、パートナーといつも一緒に練習ができる環境であったことが今回の結果につながりました。また、デフリンピック中に試合を重ねていく中で大きく成長することができました。例えば、試合の中でよいラリーができたときに自分がどのようにラリーをつくれれば良いのか、自分のポジショニングをどこに置けば良いのかをつかむことができ、瞬時に適応することができました。混合ダブルスでは予選を突破することがなかったのととても大きな自信となりました。

### 3. 今後の課題

1つ目は試合の経験をデフリンピックのパートナーと4年間重ねていくことです。今回混合ダブルスで結果を出すことができた点と、自分自身の課題がラリーの組み立て方やポジショニングの取り方にあると考えていることから、パートナーを固定して数多く様々な相手と試合を重ね、修正を積み重ねていくようにします。4年という長期スパンで積み上げていくことが金メダルを取るために必要なことだと考えています。

2つ目は、練習の質をあげていくことです。他の国の上位選手と比較したときに、仕事をしながら選手を行っている点から練習量に大きな差があると考えています。練習時間の差は埋めることが難しい面もあるが、練習の質をもっと高めていくことは可能であると考えます。練習の質をより高めていくことができるように常に考えながら練習に取り組んでいきます。

## 選手 長原 茉奈美

### 1. 当初の目標（自己目標）

団体戦では韓国に勝ち、3位。シングルスは表彰台に上がることに、ミックスではベスト8に入ることに目標としていました。

### 2. 結果に対する評価

結果として団体戦ではベスト8となりました。韓国戦では自分の試合で勝てば次につながれるという場面の中で負けてしまいました。試合の内容としては悪くはありませんでした。試合に負けて悔しかったというよりは、次につなげることができなかったことと先輩が今回の大会で引退することから、もう少し長く試合を続けさせたかったのに負けてしまい、申し訳ない気持ちでいっぱいです。

シングルスでは自分の中ではマレーシア戦が1番ピークだったと思います。また、他の選手より試合数が少なかったことから余力があり、勝つことができたと思います。準決勝から3位決定戦ではメダルは獲得できましたが、メンタルの弱さからあまりいい試合内容ではなかったと反省しています。

ミックスでは目標は達成することはできましたが、内容としてはあまりよくありませんでした。パートナーのカバー力、レシーブ力、戦略の立て方にまだまだ詰めが甘いところがありました。あとはパートナーの調子をどうコントロールしていったらいいか考えることも必要だと改めて思いました。

### 3. 今後の課題

今後の課題としては全種目を通して、メンタルの弱さを鍛える必要があります。体力の面では体幹を安定させ、前へ入るときのスピードを上げること、技術の面ではネット前のショットの安定さ、クロスネットに課題があり、練習を重ねていきたいと思っています。これらを4年後のデフリンピックに向けて準備をしていきます。

ありがとうございました。

## ビーチバレーボール競技チーム

## ゼネラルマネージャー 平井 望

### 1. 選手・役員の選考基準・方法

前回デフリンピックのソフィア大会が終了し、その年の12月から選考合宿、強化合宿を重ねてきました。監督や手話通訳者、スタッフがソフィア大会後も同じメンバーで継続していたため、新体制でのスタートはスムーズでした。その中でトレーナーの新規追加をし、さらに聞こえる人でビーチバレー女子日本代表の元監督や国内トップレベルのプロ選手にコーチとして技術指導を受ける等、選手をサポートする環境を万全に整えてきました。

選手については、デフビーチバレーの人口がかなり少ないため（把握している範囲では全国で約20人ほどである）、選考合宿に集まった候補選手は男女合わせても15人にも満たないほどでした。全体的に人数は少ないですが、インドア（6人制）デフリンピック元日本代表のメンバーの数人がビーチバレーに転向しており、他にもインドアの全国大会や国体でも活躍した上位選手も多く、技術的には世界と同格と見ています。

選考基準については、まず、A、B、Cのランクで分け、定期的に体力測定を実施し、ジャパンデフビーチバレーボールカップや日本ビーチバレーボール連盟（JBV）公認の大会での結果など総合的に評価しました。最終的にデフリンピックに男子選手4名を派遣することを決定したのは、2017年1月に2016年世界選手権の3位と4位の成績を持つポーランドチームを日本に招致し、沖縄での合同練習や試合を実施した際の結果や過去の成績を考慮し、連盟に届け出た経緯があります。

### 競技スケジュール

7月20日～24日 予選、敗者復活戦  
25日～29日 決勝トーナメント

### 成績と評価

#### ■今井勇太・瀬井達也ペア

##### 【予選／グループD】

- 2（21－0, 21－0）0 ガーナ2（※不戦勝）
- 1（18－21, 21－17, 10－15）2 チェコ
- 2（21－17, 21－13）0 メキシコ
- 2（21－14, 21－15）0 ギリシャ

##### 【決勝トーナメント】

##### 1回戦

- 1（24－22, 18－21, 7－15）2 ドイツ1

予選では3勝1敗、リーグ2位で決勝トーナメントに進出しました。トーナメント1回戦で強豪ドイツとあたり、大接戦の末1－2で負けてベスト16の結果になりました。負けた相手のドイツ1は、2年前のデフ欧州選手権でロシアを倒し準優勝の成績を持つペアであり、今井・瀬井ペアはそのドイツと互角に戦っていたので、日本は間違いなくメダルを狙えるレベルであることが分かりました。そのことが今井・瀬井ペアにとって今回のデフリンピックに向けて大きな自信になったようで、大きな収穫になったと感じています。

## ■竹村徳比古・天羽弘志ペア

### 【予選／グループB】

- 0 (16 - 21, 19 - 21) 2 ポーランド2
- 2 (21 - 15, 21 - 8) 0 トルコ2
- 0 (15 - 21, 8 - 21) 2 ロシア2
- 0 (10 - 21, 13 - 21) 2 ベラルーシ

### 【敗者復活戦】

- 0 (17 - 21, 18 - 21) 2 トルコ1

予選では1勝3敗、リーグ4位になったため、敗者復活戦に出場しましたが、その対戦相手のトルコ1に負け、最終的に予選敗退という結果となりました。

## 2. 総評

### 今井勇太・瀬井達也ペアについて

今井選手と瀬井選手は、2人とも元インドア日本代表のエースで、過去にデフリンピックや世界選手権の出場経験がありますが、ビーチバレーでは今大会が初めての参加でした。もともと基礎能力が高く、技術も戦術も高いレベルにあり、初めて合宿に参加した時から監督もトレーナーもスムーズに指導ができました。2人はペアを組んでわずか半年でありながら、聞こえる多くの選手を倒してきており、実力がどんどんついてきているのが分かります。今回のデフリンピックは残念な結果になりましたが、次こそ4年後のデフリンピックでメダル獲得を目指し、次世代の見本としても練習に励んでほしいと思っています。

今井選手は、身長が182cmで体格も大きく、強烈なスパイクが武器です。ボールのコントロールもチームの中でもっとも安定しており、ビーチバレーでは特に難しいといわれるオーバーハンドパスでのセット（インドアというトスのこと、ビーチバレーでは審判に厳しく見られるためドリブルの反則をとられやすく、経験が長く上手い人でも頻繁に使わないほど難度の高い技術）が得意で、強豪国のチームでもあまり使わないプレーを見せ、多くの関係者を驚かせました。24歳と年齢的にも若く、目標意識が高いので、4年後にどこまで上達できるか期待したいです。

瀬井選手も、185cmと日本人では大型選手の類に入ります。インドアのエースとして2008年世界選手権の銅メダル、2012年世界選手権4位入賞に貢献したことがあり、日本人離れた長い手足を活かしたスパイクとブロックは世界に通用できるレベルで、大会期間中は試合のたびに周りから常に注目されていました。決勝トーナメントでのドイツ戦の終了後に、疲労と日射病で倒れ込んでいたため、暑さに負けない体力作りが課題であると思われます。

### 竹村徳比古・天羽弘志ペアについて

竹村選手と天羽選手は、身長が170cmと世界からみれば低く、海外の長身選手と比較すると不利な面がありますが、敏速な動きは負けていません。基本的に穏やかな性格ですが、お互いの競技に対する考え方や価値観の違いがあり、合宿中に何度もぶつかり合うことがありましたが、デフリンピックの最後まで本音を言い合えるような関係を築いていくことはできなかったとみられます。しかし、二人とも予選では得意のレシーブで粘り、対戦相手の強豪ロシアを惑わせた場面が多く見られました。

天羽選手は、過去にデフリンピック1回、世界選手権1回、海外大会1回の出場経験があり、日本代表歴が8年とチームの中でもっとも長く2012年世界選手権では5位タイ、2015年

ラトビアオープン大会の決勝戦でロシアを倒した経験があります。47歳という大ベテランであり、デフリンピック初出場の竹村選手をフォローしてくれるだろうと期待していた中の一人です。

竹村選手は、実は競技歴イコール日本代表歴です。今の体型からは全く想像できませんが、3年ほど前に初めて選考合宿に参加した際は、現在より15kgほど体重があり、やや肥満体型でした。当時はボールを扱う技術も日本代表レベルでは話にならないほどでした。インドアの経験もほとんどありませんでしたが、本人の一人倍の努力が実り、わずか2年半で、天羽選手に劣らないほどにまで上達していった点をあまり前例がないため評価したいです。

### チーム体制と各コーチの役割

日本選手団メンバーは、選手の今井勇太、瀬井達也、天羽弘志、竹村徳比古、GMの平井望（ろう者）、トレーナーの岩田秀治（聞こえる人）の6人です。日本選手団メンバーではない、村外スタッフ（日本スポーツ振興センター助成金対象）は、牛尾洋人（聞こえる人・監督／総合指導）、牛尾正和（聞こえる人・コーチ／技術指導）、根本由家（聞こえる人・手話通訳）、岩澤良介（聞こえる人・トレーナー）がおり、実際、デフビーチバレー日本代表チームは、全部で10人のチーム構成になっています。このチームにトレーナーが2人いるのは、岩澤がフィジカル担当、岩田がコンディショニング担当で、身体作りとケアの役割で分けているからです。

日本選手団の公費対象になるのが選手4人に対しスタッフは2名までと、連盟から通達がありました。公費対象外のスタッフが日本選手団に入るには、全額自己負担が必要です。4人分の費用となると高額となるため、その費用を捻出することができず、6人のスタッフの中から2名をどう選ぶか大変悩みました。なぜなら、大会会場のコートに入るためのIDカードがないと、スタッフは試合前の練習でボール出しや直接的な指導ができないからです。選手村でのスタッフの役割を考えると、TD会議に出席するために国際手話を理解するには平井でないといけないのと、選手の身体をケアできることを考慮すると岩田になるため、日本選手団に入るスタッフは平井と岩田に決定したという経緯があります。

### 大会の競技運営などの報告

まず、セキュリティ面については、選手村と同じように、複数人の警官が手荷物をX線検査で通し、セキュリティゲートにくぐる形で競技会場に入りましたが、特に大きなトラブルはありませんでした。

コートの砂質は、きめ細かいほうでどこかの砂浜から持ち込まれたものなのか人工的なものではなく、踏み込んでみるとやや深い印象がありました。良質ではあるが、深ければ深いほど体力の消耗が早くなるため、砂質は試合の中でも重要なポイントです。

競技会場のコートは全部で44面あり、試合用が2面、練習用が2面でした。試合用の2面は、観客席スタンドに囲まれたメインコートと練習用と変わらないサブコートで、メインコートは1日おきに男子用と女子用が入れ替わりますが、決勝トーナメント1回戦当日の朝、支柱の不調（ネットの高さを調整する部分が故障したと聞いている）のため、試合直前になるまで男子のコートがどっちになるか分からないというアクシデントがありました。

飲料水の提供については、試合の間のみと言われ、試合前の

練習で飲む飲料水は、会場から徒歩 10 分ほどのところにある売店で購入するしか方法がなく、ほぼ毎日スタッフが売店まで足を運びましたが、売店においてあるミネラルウォーターは冷えていないものばかりでした。また、大会運営側から氷の提供はなく、選手村や村外スタッフの宿泊先から運んでくるなど、苦労した面も少なくありませんでした。

### 競技規則の適用（問題点など）

TD 会議で試合の組み合わせ抽選を行っていました。ガーナチームがビザの関係でトルコに入国できていないと聞いていました。すでにガーナが不参加と分かっているのに TD 会議では、どういうわけかガーナは抽選の対象としており、予選リーグに入れられていました。男子のエントリーは、ガーナの 2 チームを含めて全部で 22 チームでしたが、ガーナなしで抽選を行うとすると 20 チームになるため、4 チームずつの予選グループ 5 つが成り立ちます。決勝トーナメントに進出できる条件が明確であり、どの国のチームが勝っても負けても公平であると考えられます。TD に問い合わせると、ICSD のルール上、不参加と明らかになっていても削除することはできないと言われ、結局予選リーグの 3 グループが 4 チームでの構成、残り 2 グループが 5 チームでの構成となりました。つまり、ガーナと対戦するチームはすべて不戦勝となるわけです。また、予選終了後、グループ内の 2 位と 3 位のチームは一斉抽選になり、リーグ 2 位が別の 2 位チームとあたり、リーグ 3 位が別の 3 位チームとあたるという不公平感のある組み合わせになってしまいました。今井・瀬井ペアは予選で 2 位になったのに、別リーグ 2 位のドイツとあたることになったのです。最終エントリーをしていたとしても事情で大会に参加しないと分かった時点で、棄権として扱うほうが大会運営もスムーズではないでしょうか。公平性を考えると、このルールは改正すべきであると考えます。

### 選手村での問題点

男子選手 4 名、男性トレーナー 1 名、女性マネージャー 1 名の構成を考えると、部屋は 4 つ必要になります。選手とスタッフは一緒になることは常識的に考えられませんが、トルコ大会組織委員会から日本に渡された部屋の数が予定よりも少なかったため、ビーチバレーチームに与えられた部屋は 3 つだけでした。やむを得ず、選手 2 名、選手 2 名プラストレーナー、女性マネージャーの 3 部屋に分けることになりました。2 週間続けて同じ部屋になると選手同士でもストレスがたまるのに、選手とスタッフが一緒に、立場の違いもありお互い大変気を遣ったとの声がありました。特に、選手は翌日の試合のために早く就寝しなければならないのに対し、同じ部屋にいるスタッフが業務のため遅くまで起きていることによって生活スタイルが異なります。こういった部屋割りが試合に影響を与えたことを否定することはできません。

### 村外スタッフ分の ID 取得について

デフリンピックの数ヶ月前から、費用がかかってもいいから村外スタッフにもデフリンピックの ID を与えてほしいと交渉を続けていましたが、ID を取得できないままトルコ入りしました。現地入りしてから予選が始まるまでの間の練習のみという限定で、ICSD より村外スタッフのビーチコートへの入場が認められましたが、予選が始まると村外スタッフがコートに入れないために、お互い試合を控えている選手同士で、本来やるはずのないボール出しをしたことで、竹村・天羽ペアの後に、試合を控えた今井・瀬井ペアが、大事な初戦であるチェコ戦で大

接戦の末負けてしまいました。コートにスタッフが入れないためにサポートしてもらえないという不安があったとみられます。勝てる相手だっただけに、村外スタッフがコートに入っていればと、大変悔しい思いをしました。しかし、その日の夜、ICSD の本部に直接行けば交渉次第だが ID がもらえるかもしれないという情報をドイツチームの役員から教えてもらいました。翌日に交渉しに行ったところ、無事に取得することができました。これで村外スタッフもコートに入れるようになり、翌日から試合に専念することができ、選手は精神的にも体力的にもかなり楽になったと話していました。ID 取得ができる、できないかで、ここまで選手に影響を与えてしまうものなのだと思います。日本選手団に入りたくても資金がないからやむを得ず村外スタッフになっているわけで、日本チームが勝つために、メダルを獲るために、次回からは村外スタッフに対しても ID 取得を認める必要があるのではないかと思います。

### 今後の課題

2 チームとも多くの国際大会の経験を積む必要があると感じました。大会期間も長く、気候や普段の食事、生活環境も違うため、コンディショニングやリカバリーなど体調管理の面について十分な状態で臨めなかったと感じました。国際大会だけでなく、海外での合宿も視野に入れ、次の強化計画を組み立てていきたいと思います。また、デフビーチバレーの普及が急務と思われます。インドア人口と比べて、まだまだビーチバレー人口が少ないので、ボトムアップが重要です。人口が増えることで、代表候補メンバーの層が厚くなり、競争力も生まれ、日本のデフビーチバレー界全体のレベルアップが期待できます。今後は、全国各地でビーチバレーのスクール事業や、大会開催などを通じて、ビーチバレー人口を増やすことに注力したいと思います。また同時に代表候補メンバーの強化も 4 年後のデフリンピックに向けて動き始め、個々のレベルアップはもちろんのこと、国際大会などの経験を積ませられるよう、サポートしていき、メダル獲得を目指したいです。最後に、デフリンピック派遣に尽力いただいた連盟、応援して下さった皆様に感謝申し上げます。

メディカルトレーナー 岩田 秀治

### 1. 自己の役割とその評価

はじめに、ソフィア大会男子バレーボール日本代表チームトレーナーに引き続き、今大会においてもビーチバレーボール日本代表チームメディカルトレーナーとして帯同させていただいた日本デフバレーボール協会に感謝申し上げます。

今回コンディショニングトレーナーとメディカルトレーナーの 2 人体制で選手のサポートにあたってきました。メディカルトレーナーの仕事は、スポーツ傷害の対応、治療、動作分析、コーディネーショントレーニング、栄養指導、ドーピングコントロール、テーピングなどが主な業務でした。

#### ①スポーツ傷害の対応、治療

ビーチバレーボールは砂の上で行うため、スポーツ外傷は非常に少ない反面、スポーツ障害が発生することが多いです。疼痛に対しては徒手療法と物理療法を用いて除痛を図り、パフォーマンス向上には PNF (固有受容性神経筋促通法) を用い、機能障害を軽減することができました。

#### ②動作分析

映像による動作分析では、動作フォームの改善はもとより、

動作から機能障害を抽出し評価結果から傷害予防やパフォーマンス向上につなげることができました。

### ③コーディネーショントレーニング

神経系のトレーニングを導入することで協調性を高め、パワーだけではなく外界からの刺激に反応できる身体機能獲得を目指しました。

### ④栄養指導

国内強化合宿において、筋量増加または減量が必要な選手に対し代謝のメカニズムを詳細に説明しながら栄養指導を行いました。これによって選手がトレーナーに依存するのではなく、最終的にセルフマネジメントできることを目的としました。大会期間中、今なにを選択しどのくらいの量を摂ればよいかということをごちから指示しなくても選手自ら選択できるようになりました。

### ⑤ドーピングコントロール

選手には現在服用している薬や体調不良等で服用することになった薬についての報告をお願いし、常にスポーツファーマシストと連携し、禁止薬物の服用がないように心掛けました。

### ⑥テーピング

インドアスポーツと違い、汗だけではなく砂の付着によるテーピングの粘着性低下は必至であり、材質の選択と施行方法を模索しました。

## 2. 今後の課題

選手村では組織委員会から割り振られた部屋数が要望していたものよりかなり少なくなったため、選手とスタッフが同室の部屋割りとなり、選手は心身ともにリラックスできなかったのではないかと思います。そのため、選手とスタッフは別室であることが望ましいと考えます。

今大会、JPN1（今井・瀬井ペア）がヨーロッパ選手権準優勝のドイツを相手にフルセットまで持ち込んだこと、JPN2（天羽・竹村ペア）が銅メダル獲得のロシア2に大きく点差をつけてリードするなど、日本と強豪国の距離感を把握することができました。その上で、日本選手が諸外国勢と互角に戦うためには敏捷性と持久性の獲得は不可欠であると考えます。

その他、ビーチバレーボールはそのルール上、スタッフと選手が試合中にコミュニケーションを図ることができないことや、1チーム2人で構成されるという点から個人競技に分類され、選手同士の信頼関係の構築が重要となります。そのため、テクニカルやフィジカルの強化のみならず、選手自身の人としての質的な成熟が求められることも今後の課題と位置づけられます。

デフリンピック期間中は大きなスポーツ傷害や、著明な下痢や熱発などの体調不良は発生せず、軽度の熱中症を呈した選手もいましたが、本部ドクターの迅速な対応によって軽快しました。

日本選手団本部メディカルスタッフとチームトレーナーとの連携は、選手のパフォーマンス向上に大きく反映され、大会期間中大変心強い存在でした。

最後になりましたが、大会派遣にあたり連盟をはじめご協力いただいた方々、応援していただいた皆様に深く感謝申し上げます。

## 1. 当初の目標（自己目標）

今回のデフリンピックで3回目の出場となり、前回と前々回のデフリンピックはインドアバレーで、今回のデフリンピックはビーチバレーでの出場でした。ビーチバレーは元々、昨年の世界選手権に出場してないため、連盟が設定するデフリンピックの派遣基準を満たしてない状況でした。2017年の1月に世界選手権で3位と4位のポーランドチームを沖縄に招聘し、親善試合を行い、結果を出したことによって、デフリンピックの派遣を認めていただくことができたという経緯がありました。

実際にビーチバレーで世界大会を経験したことないままでの出場でしたので、自分のレベルが世界レベルのどの位置にあるのか分からなかったです。過去の日本チームの最高記録（ベスト16）を塗り替えることを第一にデフビーチバレー史上初のメダル獲得を目指してきました。

## 2. 結果に対する評価

結果は予選グループを3勝1敗で2位通過、決勝トーナメント1回戦で敗退し、ベスト16で終わりました。過去の日本チームの最高記録を塗り替えることはできませんでした。

世界レベルを初めて自分の肌で経験したのですが、ベスト8以上のチームはどのチームも優勝する実力が備わっており、今大会で負けた相手は全てベスト8以上のチーム（ドイツ（5位）、チェコ（7位））であり、両方ともフルセットで負けています。

結果だけ考えると残念ですが、強豪チームと互角に戦えたのは、これまでの日本チームではできなかったことであり、今後の可能性を示すことができた結果ではあると思います。

## 3. 今後の課題

私が考える今後の課題は2つあります。1つ目は、ビーチバレーのできる環境について、ビーチバレーは他競技に比べてフィジカルや頭脳力を必要とする競技ですので、練習を重ねなければ向上しにくいです。月1回の合宿だけでは、週3～4で練習している海外チームに勝つのは厳しいと思います。ビーチバレーのできる環境が身近であれば個人で定期的に練習を重ねることができて、レベルアップに繋がります。

2つ目は、海外チームとの対戦する機会について、デフリンピックまでの合宿で国内のプロチームとたくさんゲームを重ねてレベルアップを計ってきましたが、日本人と戦うことは慣れても外国人と戦うことは慣れてなく、デフリンピックで外国人と戦って戸惑う部分があったのは否めません。強化費の関係で難しいとは思いますが、そういった機会があればまた違った結果となったのではないかと感じました。

## 1. 当初の目標（自己目標）

メダルを獲得すること

## 2. 結果に対する評価

初出場となったデフリンピックにおける結果はベスト16と目標の最低ラインに到達することは出来ませんでした。結果に対する収穫としては初めて自力で決勝トーナメントに進出できたことが大きかったです。

予選リーグの結果は3勝1敗で1敗はフルセットでの敗北と

ほぼ想定通りに結果を出すことが出来ましたが、決勝トーナメントの一回戦は前回の欧州選手権で2位、今回の大会で5位を取ったドイツとあたりました。そのドイツ戦ではフルセットの末に敗退という形になりましたが、今回の試合では日本が世界を相手に戦っていけるということを証明し、今後に繋げられる内容だったと確信しています。

### 3. 今後の課題

前大会までは決勝トーナメントへ自力進出もできませんでしたが、今大会では自力で進出し、上位入賞した相手と戦えたということは非常に大きな意味があったと思います。しかし、当初の目標であるメダルを獲得するためには普段からの練習で国内トップレベルの選手達やプロ選手らにも指導しているコーチを招へいして技術や戦術の底上げが必要と実感しています。実際にデフリンピックの年である2017年4月からトップレベルのプロ選手らやプロ選手に指導しているコーチからの指導を受けることによってわずか3ヶ月半でドイツと互角に戦うことが出来たし、この環境が無かったら決勝トーナメント進出ですら危うかったと感じています。

今後の課題としてはデフスポーツを取り巻く環境を聞こえる人と変わらない仕組みにすることだと思います。繰り返しになりますが、国内トップレベルの選手らと合同練習したり、プロ選手へ指導しているコーチを招へいし、指導を受けられる環境を作っていかなければメダル獲得は出来ないと思います。今回の大会で培った経験を次世代に伝えられるようにし、デフビーチバレーボール界を盛り上げられるようにしていきたいです。

## 選手 竹村 徳比古

### 1. 当初の目標

まずは予選を突破することが目標でしたが、私にとっては初めてのデフリンピックでしたので、環境（コート、ボール）にすぐ慣れるよう努力しました。

また、緊張感、責任感が多く不安でしたが、スタッフ、選手共に行動し、常に連絡しあったことで不安もなくスムーズに行動ができ、試合に集中することができました。おかげでホームコートであるトルコ戦で勝利することができました。

### 2. 結果に対する評価

試合前になるとどの選手からも緊張感が伝わってきて、こちらにも負けれないと戦術を練っていましたが、お互いの主張があり言い合いになることもありました。ただ、お互いの主張によって、より良い人間関係が生まれ、攻め方や守り方を強化する事が出来ました。

身体能力は世界と比べて低いほうですが、スピードやトスなどの技術は負けていませんでした。作戦の数が少なかった事が敗因でしたが、開催国トルコで観客のほとんどがトルコチームを応援していた中、勝てた事は私にとっては大きな一歩となりました。

### 3. 今後の課題

技術面やフィジカル面はもちろん、試合のための作戦をいくつか持っておくことが一番重要だったので、国内の大会でいくつか作戦をたて、次のデフリンピックに繋げていく所存です。

### 1. 当初の目標（自己目標）

大会に向けて3月までは毎月2回の合宿を行ってきました。4月以降は毎週土日に厳しい練習をしてきました。基礎練習、試合を繰り返し、最後の合宿で追い込みはコーチやビーチバレーの選手達とやりました。目標はメダルを獲りたいと思い、本当に地獄のようなトレーニングに耐えてきました。

### 2. 結果に対する評価

ブルガリア大会に引き続き、今回のトルコ大会で、2大会連続で出場させていただきました。予選リーグではポーランド、トルコ、ロシア、エストリアと戦い、1勝3敗で4位となりました。復活戦でトルコとの対戦に挑みましたが、2対0で敗退し、悔しい結果となりました。万全を期して臨んだトルコ大会でしたが、試合内容は厳しいものでした。トルコのコートは細かく柔らかい砂で深さもあり、跳びにくい状態でした。また、黒海から吹き上げてくる風がネットの上を流れるため、ボールが流れタイミングをとるのが難しかったです。

### 3. 今後の課題

今年は仕事が忙しく疲れが残り、結果として、攻撃やサーブ、アタック力、ジャンプ力等でトレーニングをしてきたことを十分に発揮することができなかったことが悔やまれます。私は特に腰痛がひどかったのですが、今大会では2人のトレーナーの方に毎試合ごとに調整していただくことができました。そのおかげで試合本番では痛みを気にすることなくワクワク楽しい気持ちでプレーすることができました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

39歳から始まった選手生活でしたが、この間、たくさんの出会いがありました。最高の監督、コーチ、手話通訳、マネージャー、トレーナー、ドクター、そしてビーチバレーの選手達、仲間と助け合い支え合って頑張ってきました。この9年間の選手生活に悔いはありません。これもたくさんの方々を支えていただいたおかげだと感謝しております。本当にありがとうございました。

## 自転車競技チーム

## 監督 小笠原 崇裕

### 1. 選手・役員の選考基準・方法

選手／2016年12月までの成績、入賞率などから4人の推薦者を同年12月に選考し、補欠者として4人を推薦順に選考しました。ろう自転車競技協会の役員会で承認され、連盟に提出しました。2017年3月に、連盟よりエース選手の手助けをするロードレースの競技特性によるアシスト選手が認められ、5人の枠をいただけたので補欠者の推薦順に基づいて1人を繰り上げし、5人を代表選手としてろう自転車競技協会の役員会で再度承認し決定しました。

トレーナー／2014年から大会、合宿への帯同を行っており、トレーナーとしてのケア以外にも選手への食事指導なども行い、選手からの信頼が厚いです。英語も堪能であり、海外の大会では抗議等を行う場合の文章作成が行えることもあるため、スタッフとして多岐に渡るサポートを行えます。

手話通訳／監督が手話ができないこともあり2014年から大会、合宿への帯同を行っていました。手話通訳者自身も自転車やランニングを嗜むこともあり、自転車競技の専門用語にも深く精通しており難しいニュアンスの指示も的確に伝えることができます。帯同経験が豊富であり選手のメンタルも含めてサポートを行えます。

監督／2014年より監督に就任し、大会や合宿への帯同しており、アジア太平洋ろう者競技大会などの国際大会への帯同もしていました。

## 2. 総評

### ・チーム体制

今大会へは、男子選手3人、女子選手2人、トレーナー、手話通訳、監督の5人の体制で挑みました。トレーナーはデフジャパンチームの大会参戦、合宿に帯同しケアを行ってきたアロマコンディショニングのトレーナーで、選手のケアだけではなく体調管理や食事管理にまで精通しており選手からの支持も厚いベテランです。手話通訳者は普段も手話通訳士として重要な仕事を任せられるベテランで、自身も自転車に乗っており、大会参戦、合宿への帯同も豊富で自転車特有の専門用語にも精通しており、選手と監督の意思疎通に欠かせません。監督はプロ自転車競技者として15年のベテランで、後進を育てるべく日本自転車競技連盟ナショナルチームのコーチとしても活動。2014年より、ろう自転車競技の監督に就任しています。

### ・競技スケジュール

自転車競技は5種目あります。(ロードが4種目、マウンテンバイク(MTB)が1種目)ロード種目は1日おきに競技が開催され、7月19日の1日目は「1,000mスプリント」。予選で200mの距離でタイム計測を行い、男子は16人が勝ち抜き戦の本戦へ進めます。女子は参加人数が16人に満たなかったため、組み合わせを決める予選となりました。本戦では2人ずつで走り、1,000m先のゴールに先着した選手が勝ち上がり、決勝まで行います。

7月21日の2日目は「タイムトライアル」。(男子は50km、女子は30km)時間を置いて1人ずつスタートし、他のライダーを風避けなどに使わずにスタートからゴールまで個人の力でゴールタイムを競います。

7月23日の3日目は「ロードレース」。(男子は100km、女子は70km)一斉にスタートしゴールの着順を競います。個人競技に近い形態ですが、エースを勝たせるためにアシストが風避けになったり、補給のボトルを受け取りに行ったりとチームプレーが必要となる種目です。

7月24日の4日目はマウンテンバイクの「クロスカントリーオリムピック」。(男子は26km、女子は18km)一斉にスタートし、ゴールの着順を競います。起伏のある周回コースで行われ、シングルトラックと呼ばれる自転車1台分しか通れない細い道幅が多くあり、天候によって大きく路面状況が変わるので体力とテクニックが重要です。

7月25日の5日目は「ポイントレース」。(男子は50km、女子は40km)一斉にスタートし、周回コースで競います。2km毎にポイント周回となり、1着から4着までポイントが与えられ、ポイントの合計得点を競います。自転車競技のチェスと呼ばれ、高度な戦術、戦略が必要となります。

### ・競技運営

日本国内の大会は非常にシステムチックに運営されており、

スタッフや選手など大会に関わる全ての人達が自発的に考えて行動しているが、海外の大会に行くとならざるを得ない「待つ」ことが必須となり、運営スタッフに質問をしても「わからない」の一言でその場で終わることが多々ありました。こういった経験を選手とスタッフが積んできていることもあり、今回のデフリンピックの「競技運営」自体はいわゆる海外大会と同等以上の運営がされていたと感じました。ただ、IDカードの発行手順、開会式の待ち時間、選手村、食事、送迎バスといった競技運営以外の部分では改善の余地が多分にありました。世界一の規模の大会を開催する場合、お国柄という言葉では済まされないこともあるように思います。

### ・競技規則

非常に多くの問題が日々繰り返されました。一番大きな問題として、チーフコミッセル(審判のトップ)と、その下に付くコミッセル達との間の連携が上手く取れていなかったことがあります。チーフコミッセルは手話のみで全ての関係者に規則やスケジュールなどを伝えていくが、コミッセルは全てを把握していなかったり、解釈の違いが出ていたのか、同じ質問を両者にしても相違があることが多くありました。チーフコミッセルの決定が一番の効力を発揮するが、チーフコミッセルが早急に捕まらない場合が多々あり、そういった場合にコミッセルに指示を仰ぎ言われたように準備を進めるが、後にチーフコミッセルに再度同じ質問をするとコミッセルとは真逆の答えが返って来ることもありました。チーフコミッセルが伝えたことは全て文章化し、インフォメーションボードに張り出せば手話を読み逃した部分や、解釈の違う部分を再度確認に行く手間が省けます。これは多くの国が同じように読み逃した部分を確認しにいており、チーフコミッセルに聞けば10秒で済む確認をするのに5分ほど待たされたりしました。

また、競技開始時間が遅れることがほぼ全種目で起こっており、スタート地点で選手、スタッフに向けて競技規則、ルールの説明を長々と行っていることが原因でした。本番のスタート地点でルール説明をするのは初めての出来事です。競技関係者は「知っていて当然」のルール等の事柄を説明する必要はなく、知らない選手はルール違反を犯して失格になっていくのが公式戦です。どういった理由で説明の時間を設けていたのかは不明ですが、ルールを知っている選手達にとっては集中力が削がれていくことになりかねません。参加規約に規則、ルールの周知徹底という文言を入れてもらいたいです。

### ・競技中

翻弄されたこととして、競技中にルールが次々に変更になっていった点があります。

① TD会議で35kmと決定された距離がゴール後に計測器を見たら30kmでした。(当初は30kmの予定で、TD会議で35kmに変更され決定)。

②競技中における水分等の補給と機材交換は無し、というTD会議での決定でしたが、競技が始まってしばらく経つと水分補給の為にボトルをスタッフが渡す国が始め、次には機材交換の為に予備ホイールを道端に準備する国が出てきて、結局はすぐに対応が出来た国はなし崩し的に補給と機材の準備を行いました。問題は、こういった重要な決定事項が全ての国の監督が集められて行われるのではなく、どこかの国がOKをもらって動き始め、それを見た他の国が動き、徐々に広がっていったことにあります。電気の無い時代のようなことが行われていまし

たが、スマートフォンを誰でも持っている時代なので SNS に登録しておき、一斉に送信すれば各国に平等に情報が届けられます。

③補給ボトル等の補充、機材交換が行える場所がレース開始後に危険、受け取りにくいという理由で変更になり、30m ほど場所が移動しました。これは事前に念入りにシミュレーションを行っていなかった運営側のミスであり、変更をするために遊歩道の木柵を叩き壊す必要があり、何と壊している最中に選手達が来てしまってあわやスタッフと激突寸前でした。スタート後に変更がされるのは通常ではありません。

#### ・大会までの準備

デフリンピックへの帯同は初めてのことであり、準備段階から大会についての様々な情報が非常に少なく、選手村のシステムや競技会場までのアクセスなど、事前に把握しておきたい情報がありませんでした。過去の大会に参加していた選手達は「前もこんな感じ」と、不安もなく準備を進めており、初参加の身としては選手に救われることもありました。5人の選手達は海外経験も多くあり、競技に必要な物、自分に必要な物をしっかりと把握しており、監督からは自転車に関する特殊なメカニカルな部分の指示をしたのみでした。ただ、自転車競技はとにかく荷物が多く、日用雑貨のような現地調達ができる物ではできるだけ持たないようにし、競技種目によって自転車の種類が違うので、1人で2台を持ち込みました。また、全員の選手が予備のホイールを準備しました。スタッフ側は、トレーナーが持ち込む物資が多くなります。落車することを想定するとテーピング類の消費は激しくなり、炊飯器や米など日本食を持ち込む案がありましたが、選手村で3食が提供され、安全性にもしっかりと留意しているとのことだったので、ふりかけや醤油などの最低限だけ持ち込みました。選手達の強化準備として大会のコースが発表になってから、似たようなコースレイアウトの場所で練習、合宿を行いました。自転車競技はコースレイアウトが大会毎に大きく異なり、上りの少ない平坦基調のレイアウトと、上りが多い山岳地帯のレイアウトでは求められる要素がガラッと変わってくるので、大会のコースレイアウトに準じた強化を行う必要がありました。

また、自転車本体やホイールといった機材もコースレイアウトによって優劣が出てくる部分であるため、長さや斜度、風の強弱、路面の状況などを考慮した機材を用意しました。

#### ・成績

早瀬憲太郎

スプリント 6位入賞  
タイムトライアル 10位  
ロードレース 20位  
ポイントレース 11位

川野健太

スプリント 18位  
タイムトライアル 37位  
ロードレース 39位  
ポイントレース 18位

箭内秀平

マウンテンバイク 6位入賞

早瀬久美

スプリント 10位  
タイムトライアル 11位  
ロードレース 5位入賞  
ポイントレース 8位入賞  
マウンテンバイク 3位 銅メダル

簗原由加利

スプリント 12位  
タイムトライアル 3位 銅メダル  
ロードレース 7位入賞  
ポイントレース 7位入賞

#### ・評価、まとめ

男子は各国のレベルアップが顕著に現れており、メダルを獲得する選手達は日本国内の間こえる人の中に混ざって競技を行っても優勝争いができるほどの実力を持っていました。私自身が監督として今回のデフリンピックに参加するまで、世界各国からトップレベルの選手が集まる大会を経験していなかったことが悔やまれます。トップ選手も参戦するデフ・ワールド・台湾の国際大会は経験しているものの、参加人数やレース形式の違いなどがあり、正確なレベルの把握が行えませんでした。いち早く世界レベルを認識していれば、もう少し対策を取れたかもしれません。

女子は入賞をする選手は大柄でパワフルであり、スプリントやポイントレースでのダッシュ力に優れた走りが多く見られました。その反面、持久力や忍耐力が必要とされるシーンでは日本チームに分がある場面もあり、諦めない走りがロードレース、ポイントレースでの入賞に繋がりました。瞬間的なパワー不足を補う練習を積んでいけば、ゴール手前の最終局面に自信を持って挑んでいきます。

また、スプリントは一瞬の判断ミス、躊躇したことによるコンマの差で勝ち負けが決まってしまう種目です。相手の脚質や得意な展開などを把握する情報収集をもう少し行いたかったです。予選のタイムトライアルでは早瀬憲太郎選手が3位のタイムだったので力では負けておらず、今後を見据えて仕掛けるタイミングや戦術の練習をしっかりと行っていきたいです。

タイムトライアルは個人の力量がはっきり出て、実力が如実に出る種目です。ペースを維持して最大限の力で最後まで走り続けた簗原選手がこの種目初の銅メダルを獲得しました。聞こえる人の競技の世界ではロードレースは展開によって上位に食い込む事がありますが、個人の力のみのタイムトライアルでは歯が立ちません。その中で銅メダルは世界レベルの実力が備わっている事を証明してみせました。ポジションの改善により更に上を目指せるように感じられました。

ロードレースでは男子2人の落車によってチャンスを逃してしまいましたが、1～3位までが入った逃げ集団に早瀬憲太郎選手がしっかりと入った事は評価したいと思います。女子2人は揺さぶりで集団から何度も遅れてしまいましたが、持ち前の忍耐力で集団復帰し、ゴール手前まで第一集団で進んでゴール勝負に持ち込んだのは、諦めない走りをした賜物です。男女ともに世界と比べて大きな差は感じられませんでした。ろう者のみのレースにてもう少し経験を積ませたいです。

ポイントレースの男子は非常にスピーディな展開が繰り返され、ロシアのチームワークが突出しており、他国にポイントを取らせないように組織立って動いていました。川野選手は先頭に周回遅れにされた後に先頭バックに付いて走り、一步も引か

ずに戦い続ける姿勢を見せてくれました。こういった走りが次の大会に繋がっていきます。女子は2人ともに入賞を果たしましたが、展開を読む力を身に付けたら更に上の順位を狙えると感じられました。攻めるときと休むときを明確にし、自ら展開の流れを作れるとメダル獲得が見えてきます。

マウンテンバイクでは男子の筋内選手がゴール手前まで4位争いをして6位入賞。テクニックよりもフィジカルが求められるコースレイアウトであったが、体脂肪を極限まで落とし、上りで軽さを生かした走りで善戦しました。女子では久美選手が前大会に続き銅メダルを獲得しました。唯一全種目にエントリーし、連日疲労との戦いでもあったかもしれませんが、練習で総合的な力を身に付けてきた成果が現れました。男女ともに1分～3分間の最大出力を高めれば更に上位に食い込むことが感じられました。

全体としては、刻々と変わるスケジュールや運営に振り回されながらも各自の冷静な判断力でもって競技に挑めたように感じられました。大きなトラブルもなく、5選手が全種目のスタートラインに立ち、ゴールまで走りきったことは日本選手団が一丸となって戦った証です。連日、日本より駆けつけた応援団の姿があり、そして日本からも大きな声援を送って頂いて、選手、スタッフともに心の支えとなって頑張ることができました。

ありがとうございました。

## マッサージ 西川 昌子

### 1. 自己の役割とその評価

自己の役割

マッサージとして、選手全員の心身の状態を常に把握し、万全な状態で試合に臨むことが出来る状態にする事。

評価

2015年以来自転車チームの要請の元、スポーツアロマ・コンディショニングトレーナーとして『Deaf JAPAN 自転車チーム』と共に、国内の大会は元より、海外に於いて「アジア太平洋ろう者競技大会」「デフ・ツール・ド台湾」を『レースを共に戦って来た!』と言う自負の元、共に切磋琢磨して挑んだ『デフリンピック』でした。

選手の皆さんの心身の状態に関しては、彼らの中に身を置くことで、手話のできない私でも、表情ややり取り、動きを見る事で様々な事を把握し、対応していく様に努めました。選手は何を欲しているのか? 痛みのあるところはないか? 気になる事は一つずつ、何気なく雰囲気を読みながら解消していくようにしました。身体の動きや自転車に乗っている時のポジションから見えてくる動きの「くせ」や歩行時の身体の「ゆれ」等もケアの際の注意事項の1つです。そして、実際選手の皆さんの身体を触らせていただく事で、選手本人も意識していない不調や以外な不具合がみえてきます。何よりアロマの優れたところは、選手一人一人の心はどうなのか? 落ち込んでいるのか? ピリピリ神経質になっているのか? 緊張しすぎていないか? きちんと眠れているのか? 等、色々な状況に応じたアロマオイル(精油)を駆使してこの様な多くの事柄に対応する事が可能になる、と言うことです。

大会中は環境の変化から予期せぬことが起こります。体調維持や管理も大切です。こんな時もアロマオイル(精油)の助けを借ります。緊張にはラベンダー、寝つきの悪さにはラベンダーやオレンジ、イライラした心の安定にはグレープフルーツ、緊張にはイランイラン、頭痛、歯痛にはペパーミント、とその時々

に応じたアロマオイルを使用します。今回はそれに加えてカップリングを持参し、限られた時間で選手の皆さんの身体を整える為にアロマオイルとともに使用することで最高のパフォーマンスを引き出すことができる様努めました。しかしながら今回は腹痛に悩まされ、中々ベストな状態でレースに挑む事が出来なかった選手に対しての対応に苦戦しました。こんな時はさすがに新薬に頼らざるを得ませんでした。それもままならず。本人はたいへん悔しい思いでレースを乗り切るしかありませんでした。

### 2. 今後の課題

選手の皆さんとのコミュニケーションが大切です。選手が何を望んでいるのか? レース前に解消しておかなければならない事は何か? 何気ない会話の中から選手の様々な情報を拾い集め、レースに挑む際には万全な状態である様に努め、全てのトラブルはレース前までに解消します。レース会場では選手がレースのみに集中できる環境作りに努めます。

## 手話通訳 田村 梢

### 1. 自己の役割とその評価

自転車チームの手話通訳として、初めてデフリンピックに帯同させていただきました。日本ろう自転車競技協会発足当時から、研修などの通訳を担当し、小笠原監督就任の2014年からナショナルチームの通訳として強化合宿や国内大会に帯同してきましたが、今回が初めての海外の大会への帯同でした。

大会中は日本手話通訳として、監督と選手、スタッフ間のコミュニケーション、朝・晩のミーティングなどの通訳を担当しました。その他にもスタッフとして、レースのための物品の用意・運搬、選手の昼食の準備やレース情報収集、レース時の選手のケアサポート、写真や動画などの記録も行いました。

マウンテンバイクでは、男子と女子のレースが時間差で行われ、先にレースを終えた男子選手がドーピング検査に選ばれたため、監督が女子のレースに付き添えず、代わりにドリンクや補給食、替えのホイールの用意やフィード(補給)を急ぎよ担当することになりました。フィード担当の可能性は事前に想定して、国内大会で練習の機会があったので、落ち着いて対応することができました。また、レース中に選手がケガをし、救急車で運ばれるということがありました。たまたま応援に来てくださっていた本部の医師や通訳者の方に、処置と病院への付き添いをお願いできたおかげで、スタッフも選手も次のレースに集中することができ、本当にありがたいことでした。

「選手が快適に、余計なストレスなく競技に集中し、最高のパフォーマンスが発揮できる環境作り」をモットーに努めたつもりですが、空港での検査など初めての経験に戸惑うことも多く、反応が遅れ、必要な時に、必要な場所で、必要なサポートができなかった時もあり、大きな反省として残っています。

今大会では食事や移動、荷物の運搬、情報収集などの面で苦しい状況があったにもかかわらず、自転車チームは銅メダル2つ獲得、入賞率80%という素晴らしい結果を残しました。選手の皆さんとデフリンピックという素晴らしい時間を共有できたことは、とても幸せな得難い経験となりました。このような機会を与えていただいたことに、日本ろう自転車競技協会の皆さんをはじめ、応援して下さったすべての方に、深く感謝申し上げます。

## 2. 今後の課題

やはり専門性を持った通訳者の育成が課題だと思います。

デフスポーツにおける通訳者には、手話通訳の技術の他にも、競技に関する知識、長期の帯同に耐えうる体力、選手のメンタルに寄り添える人間力など幅広い力が求められます。今回はチームに国際手話ができる選手がいたので助けられました。競技に集中してもらうためには、やはり英語や国際手話が堪能なスタッフも必要です。選手のケガやドーピング検査など、緊急時のことも事前に想定してどのように対応するか備えておくことも大切だと思いました。帯同できるスタッフは限られているので、通訳に加え、幅広い役割を担える対応力と柔軟さ、専門性を備えたスタッフの育成が欠かせません。

デフスポーツ分野の通訳者の数は限られており、個人が試行錯誤している状況だと思いますが、個人の経験で終わらせることなく、知識や経験を共有し、引き継いでいけるような集団での学びの場を設けることができれば良いと思います。

私自身、英語力や国際手話力はもちろん、フィードや機材の知識や技術など、どんな状況でも落ち着いて対応できるスタッフとしての力をもっと身につけていくことが必要だと痛感しました。また、今回得た経験を一人でも多くの人に伝えることで、デフリンピックの認知度と選手の競技環境の向上に少しでも役に立つことができればと思っています。

選手 早瀬 憲太郎

### 1. 当初の目標（自己目標）

具体的な目標として「全4種目のうちロードレース競技において3位以上でメダル獲得」としました。4種目のうち自分の専門種目がロードレースであり、4年間この種目をメインに国内大会出場や練習を重ねてきました。2016年のデフ・ツール・ロード台湾の実績から世界トップ6位以内の力があり、特にロードレースでは展開やアシストのサポート次第でメダル獲得の可能性が高いと自己評価しています。

### 2. 結果に対する評価

【スプリント6位入賞、タイムトライアル10位、ロードレース20位、ポイント11位】

- ・ロードレースにおいて57人中20位という成績は自分の実力的にも惨敗といってよい結果となりました。ただ60人近くの選手の中でメダル獲得圏内の5人の逃げ集団に入ることが出来た点、落車に巻き込まれた後も復帰して完走した点は評価できます。この2点から4年間かけた強化の方向は間違っておらず、確実に世界でメダルを争えるところまで力をつけることができている、今後も十分にメダルを狙えるということを証明しました。
- ・スプリントの6位入賞について、決勝で敗退しましたが予選で世界4位のタイムを出していました。スプリントそのものの練習は少なかったですが、ロードレースの中のゴールでのスプリントの練習の一環として取り組んでいたことが結果に結びつきました。また通常直線が多いのですが、直角コーナーが2か所も入ったコースレイアウトだったこともコーナーのあるロードレースでの練習が生きた形となりました。
- ・大会直前の鎖骨骨折にも関わらず出場でき、入賞することができたのは帯同ドクターの立石先生の力によるところが大きいです。ロードレースでの落車後も適切な処置により復帰できました。

## 3. 今後の課題

- ・ロードレースでの落車は避けようがない状況でしたが、当時5人の中の4番目に位置しており1、2番手に位置することができていれば落車は避けられたと考えることもできます。そのためにはデフリンピックの年の時点で世界トップ3位以内の力を確実に身につけて挑む必要があると思われます。ただ選手としては年々確実に成長しており、1年ごとの国際大会に標準をおいてしっかり強化と結果を残していくことが出来るという自信を今回のデフリンピックで得ました。
- ・オリンピックと同様各国とも4種目それぞれ専門の選手、ロードレースでは4人以上がチームとして出場していました。特にロシアは9人の選手を揃えており、エースを確実に勝たせるためのチーム戦略をみせていました。日本においても専門の強化及びロードレースにおいて、最低1人以上のエースと並ぶくらいの力のあるアシストは今後も必須です。

選手 川野 健太

### 1. 当初の目標（自己目標）

- ・男子ロード日本チームとして入賞以上
- ・エースのアシストをしつつ自身も入賞、完走

### 2. 結果に対する評価

出場種目は1,000m スプリント、50km 個人タイムトライアル、50km ポイントレース、100km ロードレースの計4種目。個人の結果としては

- ① 1,000m スプリント 19位
- ② 50km 個人タイムトライアル 37位
- ③ 50km ポイントレース 39位
- ④ 100km ロードレース 18位

男子ロード日本チームとしては入賞以上の結果はエースである早瀬憲太郎選手の1,000m スプリントの6位のみという結果に終わりました。

自身は全種目完走したものの、落車などのトラブルに見舞われ入賞に絡むことは出来ませんでした。機材競技である以上、落車やメカトラブル等のトラブルはつきものですが、日本チームとして狙っていた100km ロードレース、50km ポイントレースでもトラブルに巻き込まれてしまい、不甲斐ない結果で終わってしまったのは非常に残念です。しかし、トラブルに見舞われるまでの動きは今までのレースや宿泊、国際大会での経験をしっかりと活かす事が出来、3年前に感じた世界との圧倒的なレベルの差を感じることもなく、世界で戦える大きな自信をつけることができました。

### 3. 今後の課題

ろうの国際大会及び、国内の実業団レースにおいては、オフシーズンのベースの強化により、先頭集団で走れるようになっています。特に平坦のレースではしっかり前方で走ることが出来ます。ただし、最後のゴールスプリントや登り区間、タイムトライアルのように空気抵抗を受け続けるシーンなどのパワーを必要とする場面ではまだ力が足りません。今後はベースの強化と共に筋力トレーニング、高負荷トレーニングをパーソナルトレーナーの指導のもと行っていきます。

### 1. 当初の目標（自己目標）

前大会の成績を上回ることですが、4年に一度の失敗できない大会に、自分の走りが完璧にできるにはこの目標を細かく分解しなければなりません。良い結果を出すために有力な選手をマークしてついていくこと、落車に細心の注意を払ってバイクを見守ることを考えていました。

### 2. 結果に対する評価

参加人数が前大会より2倍に増加し、世界レベルが高くなってきていると実感しました。

7月19日1000mスプリントは、まずタイムトライアルを行われ、予選では12位という成績を残しました。トーナメント戦を行い、初戦は5位のロシアの選手と当たり、ギリギリまで競い合い、ゴール直後は勝敗がすぐにわからず、2回戦前にコマ差で勝つことができたと知り、嬉しかったです。2回戦では7位の中国の選手を抑えてスパートをかけましたが、ゴール前に抜かれて敗れてしまいました。5～8位決定戦が行われなかったため総合結果12位となりました。

7月21日タイムトライアル30kmはアップダウンが激しいコースですが、少しでもタイムを削るためのタイムトライアルバイクで臨みました。コース状況に対応し、ペース配分を考えて走り出して良いパフォーマンスができました。集中してスムーズにパワーもスピードも乗ることができましたが、喉が乾く前に水分補給をしようとしたら、いつの間にかボトルを落としていました。パニックになりましたが、どんな状況があっても結果のために！という気持ちでいつも通りに進みました。気持ちを切り替えてからペースが上がり、身体がなんとか動いて脚が回ってくれました。自分を信じて、水分が摂れなくても最後まで走りきったレースでした。トップからは約1分差の3位でした。

7月23日の銅メダル獲得した翌々日のロードレース70kmでは他選手からマークされることもあり、攻めにくくなりました。序盤、上り坂でアタックがかかって何回もちぎれて戻りを繰り返してしまいましたが、自分の持っているスピードを精一杯上げてギリギリ追いついていけました。ラスト3kmくらいは日本を含めロシア、ベネズエラ、中国の有力な選手らの10人で絞り、その後ドイツやロシア選手の2人が落車したのを避けてクリアすると、各国の選手数人がすぐアタックして逃げ切り、勝負する展開となったため自分も精一杯追走しました。だが、この展開に対応できないままフィニッシュし、7位入賞となりました。終始トップ集団についていく体力不足やスピードが無くちぎれる部分がありました。

7月25日ポイントレース40kmは、黒海沿い平坦コース2kmを20周回しますが、序盤から各国の数人選手がアタックを頻発していたので、前方に位置しながらそのまま周回を重ねました。ポイントを多めに加点できなかったものの、7位入賞となりました。まだ世界の壁が厚いと肌で感じられました。私の感謝は全4種目の結果で表したかったです。

### 3. 今後の課題

世界レベルがどんどん上がってきています。世界と差をつけられ、金・銀メダルを取れませんでした。敗因は体力、パワー不足です。今後は入賞を逃した1000mスプリントに対するダンシングでのペダリングパワーアップ等、足らなかった部分のテクニックも勉強を重ねていきたいです。

### 1. 当初の目標（自己目標）

・マウンテンXCOにおいては「2大会連続メダル獲得」、ロード競技においては「エースの箕原選手にメダルを獲得させる」ことを目標としました。

### 2. 結果に対する評価

#### 【マウンテンXCO】

- ・メダル獲得という目標を掲げて4年間取り組んできておりレース直前もメダルを獲るという強い意志をもってスタートラインに並びました。
- ・大会期間中何度も試走を重ねて、他の国の選手の走りを観察してシミュレーションを繰り返しました。そのため本番では冷静に走ることが出来ました。レース序盤では前大会銀メダリストのドイツ選手との上りの争いでは、相手の心を折るべく一度も前を譲らずに差をつけるようにしました。またトップ2人との差がついたときは無理に追わず、4位との差を確実に広げるレース運びをするなど、4年間の強化の集大成が結果となって表れたレースとなりました。
- ・確実にメダルを獲得できた一方でトップ2との差や様々な要素を分析しても金メダル獲得の可能性はあったと考えています。3大会メダル獲得および金メダルを獲得するために何が必要なのかが今回のレースで明確になりました。

#### 【ロード競技】

- ・小笠原監督によりロード競技も日本代表に選出していただいた以上、自分の役割としてはアシストとして箕原選手にメダルを獲得させること。アシストとして出来るだけのサポートを行ってきました。また箕原選手の調子が悪いときはいつでも自分がバトンタッチして結果を残せるよう強化を重ねてきました。
- ・ロード4種目においてロードレースで5位入賞、ポイントレースで8位入賞できたことは、自分自身マウンテン銅メダル獲得と同じくらいの評価をしています。
- ・ロード競技とマウンテンXCOの両方の競技に取り組んだことでそれぞれに良い影響があり相乗効果によりしっかりと結果を残すことが出来たと考えています。

### 3. 今後の課題

- ・日本の女子の自転車競技人数を増やすことが当面の最も重要な課題です。今回の女子の活躍を様々な方法でアピールして選手発掘と育成をしていき、メダル獲得の経験を伝えることが自分の役割と考えています。
- ・選手としては小笠原監督により加齢による体力の低下が年2%としてもそれを補ってもあまりある年3～4%の成長が出来るポテンシャルがあると言われています。1万時間の練習（約10年）で1人前と言われるなかで自分はまだ競技歴6年です。今回のデフリンピックにおいて痛感したのは世界との筋力やパワーの差でありこの差を埋めることで3大会連続メダル獲得はもとより銀メダル、金メダルを狙えると考えています。パーソナルトレーナーをつけての長期的な身体作りが今後の課題です。

## 1. 当初の目標（自己目標）

『メダルを狙い、最低でも入賞以上を目指す』

## 2. 結果に対する評価

私は、マウンテンバイククロスカントリーオリンピック競技の男子日本代表選手として、6位／31人中（トップ差+4'37）で、アジア勢初の入賞を果たすことができました。目標であったメダル獲得には及びませんでしたが、自転車競技の本場であるヨーロッパ・アメリカをはじめ、世界を驚かせることができたと思っています。

男子は、コース1周8.8kmを3周します。コース前半は、ゆるやかな登りが続き、山頂に近づくにつれて斜度がきつくなってきます。山頂には壮大な牧場があり、細かなアップダウンを走り、ハイスピードで一気に下ります。日本で稀に見ないコースレイアウトでした。

号砲が鳴り、スロバキアとロシアの選手が前に飛び出し、先頭バックを形成してきました。登り区間では、パワーのある他国選手が物凄いスピードで登っていきます。スピードの変化に対応しながら走りのリズムを掴み、ダウンヒル区間でテクニックを活かし、順位を一桁台まであげていくことができました。

最終周回に入ると、前回大会3位のKLISH John (USA) と、FOLDI Bence (HUN) と、抜きつ抜かれつの三つ巴戦が始まり、惜しくも僅差で敗れましたが、持てる力は全て出し切ることができたと思っています。

## 3. 今後の課題

メダルを獲得するためには、日本自転車競技連盟 MTB 公認レースのトップカテゴリーであるエリートクラスで、上位選手と戦えるレベルまで持っていく必要があります。そのために、トレーニングの一環として、ロード競技・シクロクロス競技、もしくはトラック競技で、世界に対抗できる絶対的なスピードをあげていく所存です。

## サッカー競技チーム

## 監督 中山 剛

## 1. 選手・役員の選考基準・方法

## ①選手の選考方法

2013年9月の富山県で開催されました連盟主催「全国ろうあ者体育大会」から日本ろう者サッカー協会（以後、JDFA）主催の「全日本ろう者サッカー選手権大会」の全国大会を年2回視察し、選手選考を行いました。これらの選手選考を元にデフリンピックまでに代表合宿（候補合宿）を21回開催しました。また、2014年にはイランで開催されました3rd Asia Pacific Deaf Football Championships、2015年には台湾で開催されました8th Asia Pacific Deaf Games、2016年にはイタリアで開催されました3rd World Deaf Football Championshipsに参加し、3回の海外大会と2017年6月にJDFA主催で韓国を招待し毎年海外のチームとの試合経験を重ねてきました。これらの遠征・合宿を通して選手選考を重ね世界と戦えるベストメンバー20人を選考し大会に臨みました。

なお、協会役員の選考方法は日本ろう者サッカー協会の会長、

## 2. 成績一覧

優勝 トルコ、準優勝 ウクライナ、3位 エジプト  
4位 イタリア、5位 ドイツ、6位 イギリス  
7位 ロシア、8位 イラン、9位 日本、アルゼンチン、  
サウジアラビア、韓国、ベネゼエラ、フランス、  
ナイジェリア、ブラジル  
決勝 Turkey 0 (4PK3) 0 Ukraine  
3位決定戦 Italy 1 - 2 Egypt  
準決勝 Turkey 4 - 0 Italy  
Egypt 0 - 1 Ukraine  
5位決定戦 Great Britain 1 - 4 Germany  
7位決定戦 Iran 2 - 4 Russia  
5～8位決定戦 Iran 1 - 2 Great Britain  
Germany 4 - 3 Russia  
準々決勝 Turkey 4 - 0 Iran  
Germany 1 - 2 Egypt  
Italy 0 (5PK4) 0 Great Britain  
Russia 0 (4PK5) 0 Ukraine

## 3. 成績と評価

## First Round

7月19日、10:00 Carsamba Stadium  
対ウクライナ 2 - 1（前半1 - 0、後半1 - 1）

## 【先発メンバー】

GK 千葉、DF 河野、竹内、仲井、岡田侑、  
MF 岡田拓、中島、東海林、古島、FW 林、塩田

## 【得点者】

古島（直接FK）、吉野（西）

## 【選手交代】

塩田→吉野、岡田拓→西

7月21日、14:00 19 Mayis Stadium  
対アルゼンチン 2 - 2（前半0 - 2、後半2 - 0）

## 【先発メンバー】

GK 千葉、DF 河野、竹内、仲井、岡田侑、  
MF 吉野、中島、東海林、古島、FW 林、塩田

## 【得点者】

吉野（古島）、西（PK）

## 【選手交代】

塩田→大西、吉野→西

7月23日、18:00 Carsamba Stadium  
対イタリア 2 - 3（前半2 - 1、後半0 - 2）

## 【先発メンバー】

GK 千葉、DF 河野、竹内、仲井、岡田侑、  
MF 吉野、中島、東海林、古島、FW 林、塩田

## 【得点者】

林（吉野）、古島（PK）

## 【選手交代】

岡田侑→桐生、古島→西

大会は各大陸予選を勝ち抜いてきた16ヶ国が4チームを4ブロックに分けて予選を5日間、3試合行います。各ブロック上位2チームが決勝ラウンド（8チーム）に進むことができます。

《First Round 結果》

1位	イタリア	勝点5	1勝2分
2位	ウクライナ	勝点4	1勝1敗1分 *得失点差
3位	日本	勝点4	1勝1敗1分 *得失点差
4位	アルゼンチン	勝点2	1敗2分

これまで2005年、2009年、2013年と3大会出場しているのですが日本は予選リーグで1回も勝ったことがありませんので、1勝する、予選リーグを突破するというのは、世界デフサッカー関係者内では想像出来ない事でした。各国監督会では、ウクライナ（過去2大会優勝、準優勝、今大会準優勝）が間違いなく1位通過、2位をアルゼンチン（昨年デフワールドカップベスト4）とイタリア（今大会ベスト4）が争って日本は勝ち点0で敗退と、全員が予想し、大変なリーグに入ったので勝ち点1でも取れば頑張ったと思うよと、声を掛けられ続けました。

大会前出来る準備は全てやり切りましたので、不思議と気持ちも落ち着いて初戦を迎えました。ウクライナには、気持ち、コンディションを120%最高の状態で挑み、チームで戦い、組織で戦い、全て出し切り全員で勝利をつかみ取りました。

2戦目のアルゼンチン戦は0-2から執念で2-2に迫り、4チーム全てが決勝ラウンド進出の可能性を残したままでの最終戦は、1年前に2-5と完膚なきまでに叩かれたイタリアでした。しかし立ち上がりから相手を圧倒しました。これまでの3試合で1番チャンスを作り攻撃しましたが、最後の最後に勝利の様子は微笑んでくれませんでした。

全てが終わり宿舎に戻って試合のビデオを見返すと、終了間際のショートコーナーからの失点は1993年のドーハの悲劇を思い出し、ロスタイムの失点は2006年ドイツワールドカップ対オーストラリア戦が思い出されました。不謹慎かもしれませんが、悲しいとか、悔しいよりも監督に就任した4年前と比べて、よくここまで選手とチームが成長し世界と戦える様になったという嬉しさが込み上げ涙が止まりませんでした。

#### 4. チーム（コーチ）体制と各コーチの役割

##### ①チーム体制 / 役割

監督・コーチ・トレーナー 各1名、協会スタッフ6名

中山剛（監督）：チームに関する全ての責任者

植松隼人（コーチ）：監督補佐

佐保泰明（トレーナー）：/選手コンディションチェック試合準備、傷害発生時の対応、本部メディカルとの連携

高橋孝司：国際手話通訳、買い出し、選手サポート

鈴木猛仁：団長、ベンチ、TD会議出席

小林隼：副会長、買い出し、選手サポート

野呂啓：技術委員長、ベンチ、TD会議出席

浜津哲也：広報委員長、買い出し、HP更新

田口昌弘：理事、ベンチ、選手サポート

#### 5. 競技スケジュール（旅行スケジュール）

男子サッカーは、選手団本部と同日に入りし、トレーニングを開始して大会に備えました。

7月14日（金） 21:30 成田空港

7月15日（土） 5:00 イスタンブール空港→サムスン空港

14:00 アクレカード発行

15:00 非公式トレーニング

7月16日（日） 11:00 非公式トレーニング

7月17日（月） 11:00 公式トレーニング / 結団式

7月18日（火） 9:00 公式トレーニング / 開会式

7月19日（水） 10:00 試合 vs ウクライナ

7月20日（木） 17:30 公式トレーニング

7月21日（金） 14:00 試合 vs アルゼンチン

7月22日（土） 18:00 公式トレーニング

7月23日（日） 18:00 試合 vs イタリア

7月24日（月） 10:00 ミーティング

7月25日（火） 8:00 非公式トレーニング / 試合観戦

7月26日（水） 7:30 非公式トレーニング / 日本選手団応援

7月27日（木） 7:30 非公式トレーニング / 試合観戦

7月28日（金） 7:30 非公式トレーニング / 日本選手団応援

7月29日（土） OFF / 観光

7月30日（日） 10:00 解団式 / 決勝戦観戦 / 閉会式

7月31日（月） 6:30 サムスン空港

8月1日（火） 19:30 成田空港

※非公式トレーニング（大会本部の会場準備がなく自らグラウンドを確保して行ったトレーニング）

#### 6. 大会の競技運営などの報告

体調のコンディショニングのため4日前に現地入りしましたが、公式トレーニング以外の日にグラウンドが確保されておらず、こちらで確保が必要でした。現地スタッフとボランティアは生活面でのサポートはありましたが、サッカーに対する理解度は低く、競技運営の経験のある現地のボランティアスタッフの方がいれば何が必要かも理解していただき、もっとスムーズにできたのではないかと思います。日本代表とは言え、サッカー競技選手の自己負担金は派遣経費の一部負担に対する支援がなく、選手村は大学の寮を利用し3人1部屋（普段は2人部屋にベッド1個追加）で食事は約200段の階段を食堂まで往復し、そして部屋と食堂にエアコンがない環境でした。宿舎と食堂や出入口までの移動、食事内容、参加費補助などもっと参加競技選手のことを考えて頂ければありがたいと思いました。ただ、会場や大会運営については、試合当日の宿舎からのバスの送迎、試合会場・練習会場での誘導などとてもスムーズな運営でした。また、試合会場でミネラルウォーターも準備してもらえました。競技場では余計なストレスを感じることなく、いままでの海外での大会の中で1番試合に集中できる環境が用意されていました。また、街のいたるところに天然芝、人工芝のグラウンドやフットサルコートがありサッカーを楽しんでおり文化としてサッカーが根付いており、試合で使用しましたスタジアムの雰囲気や芝の状態も素晴らしかったです。

#### 7. 競技規則の適用（問題点など）

サッカーに関しては、FIFAのルールに準じていた為問題なく競技規則が適用されていました。また、審判員については、素晴らしく普段はトルコのトップリーグを担当している方々で判定に対するストレスは全くなく選手のいい所を見極め伸ばしながら判定して下さったので試合に集中することが出来ました。

#### 8. 大会参加までの準備状況

毎年海外大会（イラン、台湾、イタリア）参加の経験のおかげで荷物準備、渡航準備等、特に混乱をきたしたことはなかったです。チームの荷物に関して現地に到着後は古島主将と副将を中心に話し合い役割分担をはっきりし選手が管理しました。日本国内の合宿でも行ってきたことで特に問題はなかったです。

トレーニング等に関する準備に関しては、他国のように長期合宿はできなかったのですが、年間での合宿開催もJDFAが

配慮して下さりいまままでに以上に回数をこなしフットサル代表とも連携し強化を図ってきました。

コーチ 植松 隼人

## 9. 総評〈反省・まとめ〉

デフサッカー界では2006－2009尾上直也監督が土壌を耕し2010－2013柴田英輝監督が種をまき、川元剛フットサル監督が栄養を与え、2014－2017中山剛が引き継ぎ、前田崇資コーチが水を与え、世界と本気で戦えるチーム作りを継続的に行ってきました。

その結果、アジアで1番のチームに成長しました。昨年の7月イタリアワールドカップではサウジアラビアに5－0、今年6月の日韓戦では4－0と圧勝し、アジアの雄イランは監督が変わりチーム力が落ちている現在試合をすれば余裕を持って勝つことができるでしょう。アジアチームの最高位がイランの8位だったので、アジアレベルで満足することなく世界を意識し次回大会は予選突破を最低ラインと考えてメダル獲得することを考え選手、協会スタッフは普段からどこかのチームに所属し試合/大会を経験し食生活から世界大会を意識し4年間過ごしていく必要があります。

大会期間中、日本国国旗に「和」と選手の決意を記入し戦ってきました。結果だけ見れば最終戦ロスタイムで・・・と惜しかったね、残念でしたねと落ち込んで下を向いていると思われる方がほとんどだと思いますが、ここまで戦えた選手達、共に4年前から戦ってきた仲間達を本当に誇りに思いますので、全員を讃えてくださればと思います。

次のデフリンピックに向けて7月25日(火)8:00から練習を開始しました。次大会に向けての取り組みとしては、おそらく世界で一番早かったのではないのでしょうか。準々決勝以降5試合を観戦し勉強にいった時は、他国の監督やスタッフから声をかけて下さり、試合をみながらホワイトボードを使用し片言の英語で情報交換を行いました。お互いのストロングポイントとウィークポイントや練習、強化方法や戦術について情報交換ができ、何が通用し何が必要なのかも明確になったことが大きな収穫です。日本代表チームの成長と代表選手の平均年齢が25歳という若いことに驚かれ、次の大会はこの大会を経験しているのもっとよくなると確信しました。現時点の世界ランク1位は間違いなく優勝したトルコで、このレベルの選手が次世代も続くのであればこの国も勝つことは難しいと思うくらい選手個人のレベルが跳びぬけています。2位グループはウクライナ、ドイツ、ロシアで、その次のグループにエジプト、イタリア、イギリス、日本が入り現在の世界ベスト8という意見が多く聞かれ、やっと世界でスタートラインに立つことができました。

今大会は今までで最高のレベルで真っ向から戦い、ウクライナを破った試合はまさに『サムソンの奇跡』です。しかしこれに満足せず、今後はこのレベルを最低ラインに考えて次につなげてほしいとの思いから、今大会は『サムソンの悲劇』だとミーティングで選手に伝えました。

次にバトンを渡す時がやってきました。今大会協会スタッフと日本選手団本部皆様のサポートがあり、特に選手のコンディションをいい状態に保ち続けて一人で何役もこなすサポートして下さった佐保泰明トレーナーがいたから、チーム力を落とさずに5日間で3試合の日程でも世界の強豪と戦い抜くことができました。今まで応援して下さった皆様と支えてくれた家族に改めて感謝させて頂き、今後の日本デフサッカーの発展を心より祈念し4年間の旅を終わらせていただきます。本当にありがとうございました。

## 1. 団体内の担当とその内容

主に監督業務のサポートを行い、トレーニング時はメニューに応じての準備や選手へのフォローといった業務を行いました。試合時は戦い方によるチェックや得失点の状況、イエロー・レッドカードの状況をメモ書きし、選手交代時のサポート、給水のサポートを実施しました。オンとオフ時の選手への配慮やコンディションはどのような状況か、ちょっとした変化が起きていないか監視しておく事の他に、チーム内でのコミュニケーションをマメに取るように実施しました。

## 2. 反省・まとめなど

これまでデフリンピックでは1勝もした事のないチームでしたが、Cグループは強豪揃いのチームが集まり、初戦は前大会の準優勝国であるウクライナが相手でした。この試合を通じて、コーナーキック時のマークの確認を徹底し、ベンチ選手から日本DF選手らに確認として伝え合っていました。先制点となったフリーキックからのゴールはとても大きい起点となり、ボール支配率はウクライナの方が圧倒的に上でしたが、それでも粘り強い1対1と全体的に隙間を与えないようコンパクトに守ることができていたため一体感が増しました。残り3分もないところで日本がPKを獲得し、しっかり決めることができ、歴史的初勝利を飾りました。強豪相手でもしっかり戦えることを証明できましたが、これは幸運なことであり、今でもまだ10回戦って1回勝てるぐらいの確率であると認識しています。この確率を上げていき強豪国と肩を並べられるようにしていくことが課題であると再認識しました。

第2戦は2016年W杯4位という戦績を残しているアルゼンチンが相手でした。前半序盤から相手に不用意なPKを与えてしまい0－1というスコアから押し込まれる格好となり、また相手のコーナーキックから2点目となるゴールを決められてしまうという悪循環が続きました。ハーフタイムの時、アルゼンチンは「勝つためのサッカー」をしているが、日本は「いいサッカー」をしていることを話しました。きれいにやろうとすることよりも、ゴールを奪うことを目的とすること。もっとチームのために走り、相手が止まっている時に走るというような勢いと意識を変えていこうと指導しました。後半からは攻めの選手から積極的なプレスが相手を混乱させるという、チームらしさがやっと出てきました。シュート数も前半に比べ増えていき、流れの良いパスワークからシュートまで持っていくシーンが増え、最後には2－2と引き分けまで持っていけました。これはチーム内の結束が高まり、1つの束になって挑めた成果でした。

第3戦は2016年W杯で2－5と敗戦してしまったイタリアにリベンジとなる試合でした。第2戦の反省点として試合の入り方が良くなかった事から、選手内ミーティングでよく話し合い挑みました。前半20分には相手も反応できないほど素早いタイミングでパスを受けたフォワードの選手がきちんと枠内にシュートしてくれました。立て続けに2点目となるPKから得点を奪いました。前半の終わり頃からイタリアからの攻めが続き、フォワードやサイドハーフの選手との意思統一がされていなく、プレスのかけ具合やボールを奪うための運動性が噛み合いませんでした。後半入ってもイタリアから攻める時間が増え、ロスタイムにはイタリアから3点目となるダメ押しを食らいました。日本の選手がボールを持っている時に押し込まれている場合はゴールキーパーからボールをもらうアクションを

取るように11人がフォローし合い、密度の高いコミュニケーションをとる必要がありました。ドーハの悲劇を思い起こさせるような試合でまさに「サムスの悲劇」だと非常に悔恨の残る試合となりました。

イタリア戦の勝敗で予選敗退の分かれ道となりましたが、これまでにない日本サッカーの成長を感じ、これからの可能性を感じた大会でした。強豪国との戦い方は間違いなかったと確信し、今後のワールドカップやデフリンピックでは必ず予選突破が当然のラインであり、ベスト8以上に残る強豪国と肩並べられるようになっていくためにさらなる強化事業を検討してまいります。

## トレーナー 佐保 泰明

### 1. 自己の役割とその評価

#### ①大会前の役割

私が本チームに帯同することになったのは2016年3月からであり、本チームを率いた中山剛監督の指示により合宿のみならず2016年6月に開催されたデフサッカーワールドカップ2016においても全てはデフリンピックに向けた準備とシミュレーションとして取り組んでほしいと伝えられ準備を進めてきました。

今大会に向けた準備として、合宿においてはウォーミングアップおよびクールダウン方法、体幹トレーニングの落とし込みの指導を行いました。また、アイシングやリカバリーを徹底するよう指導しました。その結果、大会ではウォーミングアップ等の準備を選手が進んで行うようになり、アイスバス等も自主的に行うようになったので成果を成し得たと思います。

デフサッカー代表選手の普段の活動現場では、アスレティックトレーナーが所属している環境は殆どありません。そのため、新規に発生した傷害の状況やリハビリの進捗状況、コンディションを把握するのに苦慮しました。新規の傷害発生時にはLINEでの連絡を徹底し、関東地区の選手の場合は今大会の本部ドクターである立石医師を紹介するなどして詳細な情報が得られるように努めました。しかしながら、他の地域に関しては選手自身に任せる形となり、各地域で拠点となる医療機関の設定が必要であると感じました。

大会に向けた準備としてサプリメントや薬物の摂取状況、アレルギー、既往歴等の一般情報の収集を行います。また大会に向けたトレーナー用品、コンディショニング用品、補食やサプリメント、市販薬の手配、物理療法機器の手配などを行いました。

#### ②大会期間中の役割

大会期間中の役割は選手のコンディションチェック、ウォーミングアップ、クールダウン、テーピング、アイシングの準備、アイスバスの準備、傷害発生時の対応および本部メディカルとの連携、試合・練習前後の補食の手配などを行いました。

前年に国際大会に参加していたため、その経験を活かし、大会に向けた準備はスムーズに行うことができました。中1日の試合が続く中で、リカバリーを徹底した結果、疲労度合いは低かったようです。しかし、出国直後に発熱した選手がほとんど試合に出場できず、内科的症状を訴える選手が複数いたことは反省すべき点でした。

### 2. 今後の課題

チームに帯同したトレーナーは1人であったため、試合中に

傷害が発生した場合の対応に時間が取られると、連続して発生した傷害の状況把握、控え選手のウォーミングアップへの対応が困難となりました。今大会は本部ドクターとトレーナーが観客席で待機していただき、プレー継続が困難と判断し交代した選手については本部ドクターにその後の対応をお願いすることができました。様々な制限がありますが、今後はトレーナー2人体制を検討することが望ましいと考えます。

今後の大会へは様々な状況を想定することが求められます。入国後のアクレカードの発行の際には長時間待たされることとなりましたが、食事の対応など考慮されず、急遽近隣に買い出しに行こうとしたが許可されませんでした。次回大会ではこの経験を生かし、本部への準備の依頼や協会としても軽食など用意しておく必要があります。開会式への参加は、サッカーチームからは翌日午前中からの試合であったため希望者だけの参加となりました。開会式を終え、選手村に戻った時刻は23時を過ぎていたため、コンディションのことを考えると、翌日に競技を控えている種目のチームは原則として開会式は欠席する方がよいと感じました。

本大会では入村後にメディカルスタッフのグループ専用のLINEグループを作成しましたが、次回以降は派遣される選手団が決定した時点で専用LINEグループ等を作成し、事前準備の段階から情報を競技間で共有できるようにすることが望ましいと思います。

私自身は初めてのデフリンピックでしたが、前回大会の情報がほとんどない状況でした。今後は後任に引き継ぎや情報が伝達されることで、競技サポートに集中しやすい環境となることを望みます。

## スタッフ 鈴木 猛仁

### 1. 自己の役割とその評価

#### 【役割】

- ・全体統括
- ・スケジュール管理、スタッフ及び選手の状況確認
- ・TD会議出席
- ・物品の買い出し
- ・本部への連絡

#### 【反省】

##### 【事前準備】

アジア大会やワールドカップを含めたこれまでの大会では、現地に到着してから非公式での練習環境の手配をしていたため、今回も同様に行おうと思っていましたが、想定していた状況とは違っていたため、練習場所、バスの手配ができずに非公式練習の会場を確保できませんでした。選手たちの協力もあり、練習できる場所を探して見つけた選手村内のバスケットボールコート、大学内の野原、トラック&フィールドを使って体を動かすことができましたが、しっかり整備されたグラウンドで練習させなかったのが、反省しております。

下記項目を事前に把握することで、現地に到着する前に非公式練習の手配を進めて、練習環境を整えられるよう、以下の事項をまとめてマニュアル化すべきでした。

- ・到着日の確認
- ・公式練習日時、場所の確認
- ・非公式練習日時、場所の確認
- ・移動手段の確認

## 【出国】

荷物重量オーバーのため、搭乗手続きに時間がかかってしまい、サッカー選手らが出発前の全体撮影に加わることができませんでした。選手らに重量制限を厳守するよう、徹底して指導すべきでした。

## 2. 今後の課題

### 【スタッフ数】

日本代表団を結成するにあたっての指針にある、スタッフ枠が選手4人に1人とする計算では足りませんでした。サッカーチームは選手20名エントリーのため、スタッフ枠は6名となり、競技スタッフ（監督、コーチ、トレーナー）と支援スタッフ（理事3名）となりました。日本ろう者サッカー協会の判断で村外スタッフ3名を補充することで、チーム全体のフォローがかるうじてできましたが、予選突破そして上位に食い込むためには更なる競技スタッフの追加が必須であることを痛感しました。

### 【費用】

サッカーチームは全競技チームの中でも大所帯であり、選手らの自己負担金を軽減させるためには豊富な資金力が必要となり、財政面で非常に難しい問題があります。4年後こそは、財政面でも対策を講じて、準備をしていく必要があると思います。

### 【旗手】

サッカーチームから旗手が選出されることは名誉であり、大変喜ばしい限りですが、サッカーチーム選手から旗手が選ばれるにあたって旗手、そして選手としてのスケジュール管理調整が困難でした。開会式の翌日に試合があるため、選手としては開会式に参列せず休養させたかったのですが、旗手として開会式に参列させることにし、旗手としての務めを果たした上で早退させてもらいました。結団式も公式練習と重なってしまい、団体競技としては一人でも抜けた状態での練習は意味をなさないため、やむを得ず結団式のほうを欠席させてもらいました。

以上から、旗手は団体競技から選出するよりは個人競技から選出、もしくは、開会式と試合のスケジュールを事前に把握した上で、試合に影響がない競技から選出することを提案します。

### 【輸送】

帰国当日にサッカーから5名がオーバーブッキングのため搭乗手続きができず、5名がサムスン空港に残されました。ケナンさんの懸命なる交渉、長山さんの専心な通訳により、特に動揺するようなこともなくケナンさんの指示に従って動くことができました。また、1泊延長という最悪な状況を回避することができ、お二方には非常に感謝するばかりです。結果的には、サムスン空港ではなく、別空港からのフライトを手配してもらい、イスタンブール空港で合流して全員一緒に帰国できました。オーバーブッキングを回避するために空港内での長時間待機でも構わないから、早めにチェックインして、無事搭乗手続きを終えられるよう、空港の規模やスケジュール時間など輸送についての見直しが必要だと思います。

### 【総括】

今回はウクライナチーム相手に歴史的な1勝を挙げることはできましたが、予選突破できなかったことは大いに悔やまれます。しかし、確実に世界との差は縮まっていると感じた大会でした。

全体を統括して動いていただいた日本代表団本部、献身的にチームを支えていただいたスタッフ、強敵にも怯まず全力を出し切ってくれた選手、応援していただいた皆様に重ねて感謝の念を申し上げます。

スタッフ 田口 昌弘

## 1. 団体内の担当とその内容

サッカー競技チームにおけるスタッフ業務を担当。チームスケジュールの把握、広報用写真撮影、試合のビデオ撮影、練習・試合でのロッカールーム管理、水・氷・補助食品の準備などを担当しました。

## 2. 反省・まとめなど

14日に出発、15日に到着してから17日のオフィシャルトレーニングまでの2日間の練習場所の確保が事前にできていなかったため、選手村内のバスケットコートや、選手村から徒歩10分ほどの大学内の整備されていないグラウンドで練習を行わざるを得ませんでした。他国チームはどこか場所を確保して練習を行ったようであったため、事前にTDと交渉して練習場所を確保し、試合に臨むべきだったと反省しています。

また18日の開幕まで試合会場の視察などを行いたかったのですが巡回バスが整っておらず、本部と相談してトルコ人通訳の方やボランティアスタッフの方に無理をお願いしてしまいました。

本部のインフォメーションは様々な情報が壁に張り出されており、非常に役に立ちました。

選手の1名が成田離陸後の機内で発熱し、結果的に4日ほど部屋を隔離する必要がありました。本部医師的的確な措置により初戦には間に合いませんでしたが、第2戦から戦列に復帰できました。本部のメディカル体制からのサポートに感謝したいと思います。

18日にオフィシャルトレーニングがありましたが、同時間に行われる日本選手団の結団式に参加できず残念でした。このあたりもTDと交渉して変更するなど事前に対応できていればよかったと思います。

19日に行われた第1試合は選手村から1時間ほどかかるチャルシャンバスタジアムでのウクライナ戦でした。試合の2時間半前に選手村を出発したことで、余裕をもって試合に臨むことができました。山根団長ほか本部の方々、スポーツ庁鈴木大地長官、薬師寺みちよ参議院議員も観戦にいらっしやり、ハーフタイムには薬師寺先生がバックスタンド側まで来て選手たちを激励いただくだけでなく、現地観戦者に日本国旗を配布するなど日本の応援を盛り上げてくれました。試合は前回ソフィア大会で準優勝しているウクライナに対し、風をうまく利用しFKで先制、後半に同点にされるも試合終了間際にウクライナを突き放すゴールを決め、過去3大会で実現できなかったグループリーグ初勝利を挙げることができました。

試合後のロッカールームで、早くも2戦目に向けて気持ちを切り替えたことで、2戦目のアルゼンチン戦に集中することができました。

21日に行われたアルゼンチン戦は、選手村から30分ほどの決勝戦が行われるスタジアムでの試合でした。試合はアルゼンチンに2点先取されるも、中山監督のハーフタイムでの激励と、後半の交代策が功を奏し、引き分けに持ち込むことができました。

ただ、この試合終了後にアルゼンチンの選手が判定に抗議し、

審判やTDに詰め寄るなど興奮していたため、日本の選手ともみ合うシーンがありました。日本チームは冷静に対処しましたが、後味の悪い試合となってしまいました。アルゼンチンは選手村の食堂で一緒になることもあり、少し脱み合いが続くなど穏やかではなかったのが残念です。

3戦目は引き分け以上で決勝トーナメント進出が決まるイタリア戦でした。2-1とリードして後半を迎えましたが、試合終了間際とロスタイムでの失点により、まさかの予選敗退となってしまいました。

以前までのデフリンピックやワールドカップでは予選敗退となっても下位トーナメントがありましたが、今回のデフリンピックではそれもなく、イタリア戦の翌日から最終日までの約1週間はオフとなってしまいました。選手らは仕事を休んで大会に臨んでいることもあり、早く帰国できないのかと気にした選手もいましたが、中山監督は残り期間は試合がなくても練習を行い、次の大会に向けて何ができるのかを考えるよう選手に説明し、有効に時間を使っていました。

スタッフ陣としては、サッカーの決勝トーナメントや女子サッカーの視察（ビデオ撮影）を行い、今後の強化に必要な情報収集を行えたことは良かったと思います。

## スタッフ 野呂 啓

### 1. 自己の役割とその評価

#### 【自己の役割】

- ・日本代表団本部や現地からの情報収集
- ・チーム全体のスケジュール調整
- ・試合におけるベンチサポート
- ・選手のサポート

#### 【評価】

私はこれまでは選手の立場でしたが、スタッフとして初めてのデフリンピック参加でした。村内スタッフは3名で編成され、それぞれの担当役割を確認しながらの行動をしました。また村外スタッフとも調整をし、会長の指示のもと日程を消化して行きました。

サッカーのスケジュール、連盟のスケジュール、その他のスケジュールなどの管理を行い、調整しながら日程を進めて行きました。試合の時は、ベンチに入って水を選手に渡したり、記録用の写真を撮ったりしました。ベンチでは選手から選手へ水を渡す事が禁止されているので、スタッフがやらないといけない事になっていました。これは合宿から調整していましたが、試合となると熱中になるあまり水を取りにくる選手に気づかない事がしばしばあり、これは反省しなければならない点に挙げられます。

### 2. 今後の課題

デフリンピックを終えて思う事は、まず金銭面でスタッフが各競技全員公平に派遣出来る環境作りが大事かと思います。スタッフ体制を村内と村外に分けるのはやめたほうがよいと思われます。なぜならお互いの調整、時間などに苦心します。同時に情報を共有して共に行動に移せてこそスタッフです。また、試合に勝つ為にはスタッフの増加も必要であり、トレーナーも最低でも2人は必要かと思われます。サッカーチームは選手20人と人数が多いのでトレーナー1人では対応しきれません。スタッフの増員については金銭面などの問題がありますが、何かの対策を練る必要があります。

各競技チームにおいてスポンサーや支援金がそれぞれ異なります。金銭面の支援がなかなか受けられない競技チームにとって、試合も満足の出来ない内容となってしまいます。例えば、事前視察など試合に向けて万全の準備態勢を整えることができません。日本代表団本部で事前調査を行い、試合会場や現地の情報を集めて頂いたのはありがたいですが、やはり、それぞれの競技で専門的に見るポイントが異なります。知りたい情報を掴む事が出来ないと、大会期間は苦心してしまう事になります。現地に着いてからでも周辺調査や交通手段調査など情報を収集するのに時間を取られ、スムーズに進められません。過去大会を振り返ると、サッカー競技は会場が街の中心より遠く離れてしまう傾向があり、簡単に移動する事が出来ません。他競技より事前に情報をもらえたとしても、大会当日に大会方針や運営に関する情報が二転三転したりすることもあります。巡回バスが簡単に捕まえられなく、タクシー移動も検討したこともありますが、調べてみるとかなりの高額になってしまい、予定時間までに到着することを諦めた事もありました。

また、情報の明確さもポイントとなりました。日本代表団本部からの情報、視察組からの情報、現地の情報など食い違う部分があり、現地で電子レンジを購入しました。

身体を現地の時間に慣れる為のトレーニングに関してや、公開練習がいつからなのか、公開練習以前は各自で手配するようになどの指示も必要だったかと思います。過去大会では現地到着後すぐTD会議が行われ調整しやすかったのですが、今大会は大会期間が開始されてしばらくしてからやっと調整に入りました。これも反省点とし、次はTDからの情報をしっかりと把握した上でスケジュールの調整に取り組みなければならないと痛感しました。また大会期間中でもTDとすぐ連絡が取れるように調整しておくべきです。これを反省とし次大会へ繋げられるようにしたいと思います。

## 選手 中島 正行

### 1. 当初の目標（自己目標）

グループリーグ（予選）を突破して、メダルを獲得することが目標でした。

### 2. 結果に対する評価

1勝1敗1分で予選敗退という結果になりました。第1戦はウクライナに2-1勝利、第2戦はアルゼンチンに2-2引き分け、第3戦のイタリア戦は2-3負けて、グループリーグを突破することができませんでした。

サッカーの怖さ、勝つことの難しさを改めて実感し、本当に不思議な大会だと身をもって感じました。今回の悔しい思いが、今後の人生において自分の糧になると信じています。

デフリンピックを通して、思うこと気づかされたことがたくさんありました。その中でも一つだけ言えることは、自分の持っているものを全て出し切れたということです。世界の舞台で後悔なく全力で出し切った経験は私にとって大きな財産となりました。今大会で得た貴重な経験を自身の中に留めず、日本でデフサッカーのさらなる発展に貢献してまいりたいと思っています。

### 3. 今後の課題

1対1でも強い選手になれるように努力します。チームが勝つためには、まず1対1で勝たなくてははいけません。「抜かれた、ボールを奪われた、けど勝てた！」なんて絶対にありえま

せん。死にもの狂いで点を取りに行き、死にもの狂いでゴールを守る。試合に勝つためにはいくつかの勝負どころで、「絶対に負けない。逃げない。」という強い気持ちが必要です。ただサッカーが上手いだけでは勝てません。どんなに苦しい状況になっても90分間粘り強く戦える選手にならなければいけないと、今回のデフリンピックで思い知らされました。

## 選手 吉野 勇樹

### 1. 当初の目標（自己目標）

個人的な目標としては、出場する全ての試合で結果（ゴール、アシスト）を出すことでした。デフリンピックにおいてサッカーの試合では結果が全てとなるので、その結果に直接結びつくようなプレーで得点に絡み、チャンスをモノにすることにこだわっていました。

そして、チームの勝利に貢献することです。いくら個人で良い結果を出してもチームが勝てなければ意味がないので、チームが勝つために相手を上回る結果を出すことを心がけていました。

### 2. 結果に対する評価

デフリンピックで出場した試合は予選リーグの全3試合に出場しました。初戦のウクライナ戦では負傷交代による途中出場が決勝ゴールを決めました。

次戦のアルゼンチン戦ではスタメン出場で途中交代となりましたが、前半の2失点から追いつくために後半で反撃の狼煙をあげる貴重な1点目を決めました。結果的に2-2でドローとなり、予選突破への貴重な勝ち点1をもぎ取りました。

3試合目のイタリア戦では、試合の序盤で先制点をスルーパスでアシストしました。結果的にロスタイムで逆転負けを喫することになり、惜しくも予選突破となりませんでした。

今大会の結果を通して、個人的な目標としては全試合結果を残せましたが、チームの勝利に貢献出来ていなかったことが自分の実力不足でした。自分にチームをまとめるためのコミュニケーション能力、戦況を読んで勝つための試合運びやゲームコントロールができる力があれば、チームの勝利にも貢献できたのではと思いました。

### 3. 今後の課題

今後は攻撃に特化しつつ、試合で確実に勝ち切るためのゲームコントロール能力やチームの統率力の向上を図りたいと考えています。そのためには自分自身のフィジカル改革を行い、実戦経験を積み、自分のプレーに自信を持つことでチームに良い影響を与えることが課題です。

## 選手 岡田 侑也

### 1. 当初の目標（自己目標）

初のデフリンピックとしてこの大会に懸ける特別な思いは特にありませんでした。今後の自分の糧になる、良い収穫が出来れば良いと思いました。サッカーは聞いたところ、今までのデフリンピックで予選突破をした事がないとの事だったのでメダルを取るより、予選突破を絶対の目標にこの大会へ臨みました。

### 2. 結果に対する評価

結果は予選敗退でした。今大会のサッカー競技で準優勝したウクライナに勝てたとはいえ、予選突破しければ勝った意味はありません。一人一人が今大会の為に体を作ってきた、トレーニングしてきたと言いますが、正直みんなまだまだやれるだろうと思ったのが本音です。しかし、これが今のデフアスリートの置かれた環境を物語っているのだと強く痛感しました。自分も今は大学生のためスポーツに集中できる立場ですが、4年後も今のレベルをキープし、更に向上出来ているかと考えると、すぐに頷く事はできません。予選敗退を経験し、デフアスリートが置かれている現状を本気で変えなければ世界には絶対に勝てないと思いました。

食事の面でも毎日お腹を壊していたとはいえ、インスタント食品等、賄える所は賄えたはずですし、事前に大会から逆算して日本から栄養補助食品をもっとたくさん持参していく必要性も強く感じました。

### 3. 今後の課題

一人一人がトレーニングに毎日充てられる時間を作る事だと思います。サッカーはチームスポーツであり、チームの中の一人が伸びていても周りが伸びてなかったらそれは意味を成しません。今大会ではそれが自分の目で見てもはっきりと感じられました。残業で疲れている等、それぞれ置かれている状況のせいにするのではなく、それを割り切った上でストイックにトレーニングし、みんなが平等に励む事が今後の課題だと思います。

## 選手 桐生 聖明

### 1. 当初の目標（自己目標）

今大会は3度目のデフリンピック出場でした。合宿や自主トレ等のトレーニングで悔いのないようにやれることはやってきました。まず1戦勝利し、予選突破そしてメダル獲得を目指して目標としていました。

### 2. 結果に対する評価

今大会は出場機会がほとんどありませんでしたが、選手、スタッフ、応援の方と全員が1つになって戦いました。初戦はウクライナ戦で苦しい試合の中、歴史的な勝利をあげたことは日本チームにとって大きな一歩だと感じました。

2戦目はアルゼンチンに引き分けてしまいましたが、勝ち点1を積み重ねました。3戦目のイタリアには引き分け以上で予選突破が確定する試合でした。最初は2得点を奪い、リードしていたのですがアディショナルタイムで逆転負けとなり、予選敗退が決まってしまいました。

日本チームは以前と比べて確実に強くなっていますが、勝つためには個のレベル、連携をもっと向上させなければならないと感じました。

### 3. 今後の課題

- ・キッズサッカー教室、普及活動等でサッカーがしやすい環境を作る。
- ・個のレベルをあげ、チームの連携をもっと良くしていくこと。「サムソンの悲劇」があったからこそ「〇〇〇の歓喜」となるように歴史を塗り替えていけるように頑張っていきます。

## 選手 竹内 裕樹

### 1. 当初の目標（自己目標）

去年イタリアで開催された世界ろう者サッカー選手権大会では初戦のアメリカ戦で「左膝内側副靭帯損傷」という大怪我をし、治療やリハビリを半年かけて乗り越えてのデフリンピック出場2回目となりました。また、デフリンピック出場前の日韓親善交流試合で前歯が2本折れてしまうアクシデントがあり、色々な壁を乗り越えてのデフリンピック出場だったので、予選リーグでは最低でも一勝したいという気持ちがとても強かったです。

### 2. 結果に対する評価

自分は予選リーグ3試合すべてセンターバックとしてスタメン出場でした。なかでも、ウクライナ戦では相手が4年前のブルガリアデフリンピックの準優勝国であり、優勝候補国でもありましたが、日本代表がここをひとつにして2-1で勝利することができました。その時は「大怪我を乗り越えてきたから絶対に負けたくない!」という気持ちで相手に堂々とぶつかっていき、ディフェンスをひとつひとつできたこと、みんなの気持ちが1つになって日本初勝利のデフサッカー歴史を塗り替えることができ、とても嬉しかったです。

しかし、2回戦のアルゼンチン戦では引き分けとなり、3回戦のイタリア戦では引き分けになれば初決勝戦進出という希望のなかで臨みましたが、残念なことにロスタイムでイタリアに1点取られ、2-3で惜しくも予選敗退というサムソンの悲劇が起きてしまいました。最後の最後までディフェンスをやりきって決勝進出への切符を手に入れることができなかった悔しさを噛み締めての帰国となりました。

しかし、日本国内における知名度が4年前に比べて上がり、国会議員の方が現地のトルコまで応援しに来てくださり、日本の試合の時には観戦席が日本国旗の旗が多く振られ、グラウンドに入って周りを見た時には今までにない風景でした。応援してくれていることが何より嬉しかったのを覚えています。

### 3. 今後の課題

今回も予選敗退という結果になりましたが、ウクライナ戦で初勝利を残せたことはとても大きいことなので、次の4年後のデフリンピックに向けてトレーニングや技術などを積み重ねていきます。サポートしてくださったスタッフや応援してくださった皆さま、ありがとうございました。

## 選手 千葉 駿介

### 1. 当初の目標（自己目標）

予選リーグ突破し、メダル獲得すること。  
チームのために貢献する。

### 2. 結果に対する評価

1勝1敗1分けにより予選リーグ3位で予選リーグ敗退しました。

目標としていた予選リーグ突破し、メダルを獲得することができませんでした。予選リーグ3試合目のイタリア戦では、残り3分で決勝ゴールを入れられ、決勝トーナメントの夢が途切れてしまいました。なぜ最後の最後までゴールを死守できなかったのかと思いつ度に自分を責め、チームのために貢献で

きなかったのではと感じています。

### 3. 今後の課題

今大会を振り返ってみて、技術面やメンタル面など、メダルを獲得しているチームと比べて差があったと感じました。日本は前大会と比べて世界との差はかなり縮まってきたと思いますが、まだまだ足りない面がたくさんあります。4年後のデフリンピックに向けて一から自身を見つめ直し、サッカーだけではなく、私生活を見直していく必要があると感じました。デフサッカーだけではなく、一般（聞こえる人）チームでも活躍できるように日々懸命にサッカーに取り組んでいきます。4年後のデフリンピックは必ずメダルを取れるよう、一日一日を大切に過ごしていきたいと思っています。

## 選手 松元 卓巳

### 1. 当初の目標（自己目標）

チーム全体の目標としては、まずは1勝し、予選リーグ突破し決勝トーナメント進出すること。

自己目標は、3大会目の出場になるので経験を若い選手に伝えながら、また活かしながら試合に挑むこととしました。今大会はセカンドGKという位置だったため、チームの為に出来ることを全力でし、いつ出番が来てもいいように最高の準備しておくことでした。

### 2. 結果に対する評価

チームの結果としては、1勝1分1敗で最後の最後に決勝トーナメント進出を逃すという悔いの残る結果になりました。結果だけで見ればメダルには遠いかもしれませんが、デフリンピック初勝利、それも銀メダルを獲得した相手からの勝利を獲得しました。引き分けだった試合も、前半の負けからの後半に追いつくという価値ある引き分けでした。敗戦も、前半はリードしていた試合であり世界の強豪と徐々に対等に試合が出来るようになってきている手ごたえは感じました。しかし、最後に勝ちきれなかったのは毎回言っているようにメンタルが原因かと思っています。「何がなんでも勝つ!」という気持ちが世界に比べると、まだ甘い部分なのかなと痛感しました。

個人としてもデフリンピック初の試合出場ゼロという結果に終わりました。常に最高の準備をしておくということは自分の中では出来ていたと思いますが、出たいという気持ちが先行し、もっとチームの為に出来たことがあったのではないかと思います。

### 3. 今後の課題

個人としては、試合に出られるように周りからの信頼を勝ち取ること。そして日々のトレーニングの質と量を共に上げることです。

チームとしては試合出場できる人数は決まっているので、試合出場できない選手は、代わりに試合出場している選手がいかに集中して試合に挑めるようサポートできるかが問われます。これが勝利への大きな力になることを痛感したので、大会までに選手同士・選手とスタッフとの距離感を大事にしなければなりません。適切な距離感を作れるようにすることが次のステップに繋がることを痛感したので、次大会ではこの反省を踏まえて臨みたいと思います。

## 1. 成績に対する自己評価

サムスンデフリンピックの結果は予選リーグ1勝1敗1分、得失点差でCグループ3位となり、予選敗退でした。4大会連続予選リーグ敗退となり、チーム目標として挙げていた「予選リーグ初突破・ベスト8」の壁を乗り越えることができませんでした。それでも前大会準優勝のウクライナを倒し、そのウクライナは決勝まで勝ち進み、優勝したトルコと対等に戦い、準優勝したことを考慮すると、日本も世界と戦える実力がある、今の実力レベルを確認できたことで次に繋がる内容だったと感じました。

個人としては、右サイドバックとして予選リーグ全3試合先発フル出場を果たしましたが、勝てば初の予選突破、決勝トーナメント進出が決まるアルゼンチン戦で後半の終盤に訪れた決定的チャンスを外してしまったことに未だに悔いが残ります。逆転のチャンスを逃してしまったことで改めて試合中のワンプレー、ワンプレーが結果を大きく左右することを痛感しました。

## 2. 反省・課題

### ・コミュニケーション

毎日のことながら、必ず挙げられる課題がコミュニケーションであり、今大会でも主な敗因の1つがコミュニケーション不足でした。今大会の派遣メンバーは2017年3月の最終選考会を経て4月に派遣メンバーが発表されました。それ以降、5～7月の間3回にわたって大会に向けた国内合宿が行われましたが、日数に換算してわずか4日間しかありませんでした。その4日間でフォーメーションや戦術確認をするには限界があります。十分なコミュニケーションが取れなかったことで予選リーグ最終戦のイタリア戦では、わずかなズレから失点を喫してしまいました。この場面に関してもっとコミュニケーションを取っていれば、と悔やんだ選手は多かったはずです。

強化費が少なく合宿回数が限られている現状で出来ることは、最終メンバー発表の時期を早め、早い段階から最終メンバーでコミュニケーションを取る事です。今大会の経験を踏まえた上で次回は最終メンバー発表の時期を考慮して頂きたいと思えます。

### ・体調管理

大会期間中、私を含め、下痢症状を起こしたメンバーが何人かいました。私の場合、かなり酷い症状で完治するのに1週間を要しました。脱水症からくる発熱で、チーム練習に参加できない日もありました。おそらく選手村の食堂で提供されたサラダに原因があったと思われます。生水で水洗いされており、長時間放置されていた為、菌が繁殖したと思われます。選手村入りした初日、チームスタッフが食堂で提供される生ものを試食し、食あたりの可能性が無いことを確認しましたが、今回は生水に対する抵抗力の個人差があったと思います。大会期間中は極力サラダ等、生ものを摂ることを控え、栄養や植物繊維は青汁やサプリメントから摂取して補う等、食事においても工夫が必要であることを学びました。

2009年台北大会ではサッカー男子チームから7名がインフルエンザに集団感染した経験を活かし、それ以降の大会では食事前に手のアルコール消毒、移動中のマスク装着など、徹底した予防・衛生管理が施されるようになりました。今回の下痢症状の経験も食事管理における課題も次回に活かしてもらいたいと思います。

## 1. 結果に対する評価

今回のデフリンピックは自身初の出場となりました。昨年のワールドカップで初めて世界の壁を目の当たりにし、それから必死にトレーニングしてこのデフリンピックに挑んだつもりでしたが、結果は予選敗退に終わりました。敗因は試合の入り方が悪かったこと、最後まで集中し続けることができなかった事だと思えます。初戦のウクライナ戦はこの2つが出来ていたから勝つ事が出来たのだと思えます。また、強化合宿も3回程度しか実施出来なかったこともあり、準備不足であったこともあります。

## 2. 今後の課題

今回の自分自身の課題としては怪我したこと、これに尽きます。初戦のウクライナ戦で相手選手との接触で膝の靭帯をのびし、交代を余儀なくされました。自分ではトレーニングしてきたつもりが、少しの妥協や日々の甘さがこの結果を招いたものだと思っています。今大会を通して自分に足りないもの、課題がはっきり見えたので、また4年後に向けて頑張っていきたいと思えます。

最後にデフリンピック派遣に関わってくださった関係者の皆様、現地で選手たちをサポートしてくださった皆様、応援して下さった皆様、心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

選手 塩田 知弘

## 1. 当初の目標（自己目標）

一戦必勝 & 予選突破

## 2. 結果に対する評価

予選敗退と言う結果となりました。(1勝1敗1分により、得失点差でグループ3位)結果が全ての世界では成績は悪い方になりますが、ここで得た物は歴代の中でも一番大きな収穫です。

勝負の世界では最後まで何か起こるかわからない事、世界でも戦える力がついてきている事が明確になった大会です。死のグループと言われる激戦グループで、過去の成績もそうですが、今大会準優勝のウクライナ、ベスト4まで進んだイタリア、去年の世界大会ベスト4のアルゼンチン、いずれも世界のトップにいるチームばかりです。その相手に、今まで世界相手に勝てなかった日本が、初戦でウクライナに2-1勝利と歴史的勝利を収めました。続きアルゼンチンは2-2と引き分け、ここまで暫定予選1位でした。引き分け以上で歴史初の決勝トーナメントが懸かったイタリア戦では2-0と有利に試合を運びましたが、前半ロスタイムのFKで決められ、そこからイタリアの流れが変わってしまい、後半同点にされ残り1分で逆転されました。ウクライナがアルゼンチンに3-0で勝ち、得失点差により予選3位で決勝トーナメント進出はなくなりました。

## 3. 今後の課題

勝つチームにするために

- ①金銭負担を無くす事
- ②合宿を増やす事

今、必要な事

①認知度向上（スポンサーなど）

## 選手 松本 弘

### 1. 当初の目標（自己目標）

台北、ソフィアに次ぐ3度目のデフリンピックでした。目標は2009年から掲げている“最高で世界王者、最低でもメダル獲得”であり、今大会も自信を持ってトルコ・サムスンに乗り込みました。

### 2. 結果に対する評価

予選初勝利するも、1勝1分1敗で日本は4大会連続の予選敗退となりました。

何もわからずがむしゃらに走った2009台北デフリンピック。中堅としてベテランと若手のつなぎ役の意識をもって挑んだ2013ソフィアデフリンピック。2013年からの4年間は日本代表に選ばれ、世界と戦うためにレギュラー争いに必死にくらいつきました。

頭脳と身体をサッカー人生で一番のピークに持って行けたのですが、出発初日から体調を崩してしまい、大会期間中はチーム関係者（監督、協会、トレーナー）にご迷惑をおかけしてしまいました。

前大会と比べて、大会への準備期間また合宿の回数、環境は大きく変わってきました。

### 3. 今後の課題

前大会の報告書では、2点ほど課題があると記述したのを覚えています。

一つ目、国内合宿、国外遠征の回数の少なさが結果的に経験値を積み重ねることができませんでした。今大会までの4年間、回数は増えましたが、それでも完成度、メダルを獲得するまでにはもう少し合宿等をやる必要があるのではないかと感じていました。

二つ目はフィジカルの向上が挙げられます。スピード、スタミナ、中1日を戦い抜く力の向上です。この点に関しては“結果に対する評価”で述べたとおり日本のデフサッカーの個々のレベルはあがっており、競争も激しくなっている点から向上しています。ただ、今回予選敗退を通してあらわになったのはメンタル的な弱さだと感じています。

今大会、初出場の選手も何人かおり、ピッチ上の選手もよく戦っていました。では、何が足りないのでしょうか。勝つ気持ちが足りないわけではなくこの試合のゲームをどう終えるのか、どう戦うのかという気持ちが全員一致していなかったと感じます。4年後を目指す選手たちにはこのことをしっかり忘れずに新しい選手と共に戦ってほしいです。

最後に協会関係者、デフリンピックに携わる連盟のみなさんお疲れ様でした。ありがとうございました。

## 選手 古島 啓太

### 1. 当初の目標（自己目標）

今回のデフリンピックは、2度目の出場であり、日本選手団の旗手、またキャプテンとしてチームを引っ張っていく立場でありました。初めて出場した前大会のソフィアデフリンピック

では、メダルを獲得することが夢でありましたが、試合では何もできずに悔しい思いをしているので、今回は最低でも「予選突破」という目標を立て、一試合一試合に集中することを意識して、大会に挑みました。

### 2. 結果に対する評価

試合結果は公式記録として既に発表されていますので、ここでは自分の気持ちの面や課題を書かせていただきます。

まず、初戦ウクライナ戦を迎える前日に開会式があり、日本選手団の旗手を務めさせていただきました。開会式は2万人以上の埋め尽くされたスタジアムで、ジャポーネ！と鳴り響く声が聞こえてきました。そのまま歩くだけではもったいないと思い、右手で日の丸の旗を持ち、左手で観客席に向けて、盛り上げてもらうように手を振りました。

初戦ウクライナでは、デフリンピックでの史上初勝利が出来、協会としても、選手としても大きな自信につながりました。はじめの一歩として大きな一歩を踏み出すことが出来たと感じました。また、チーム全員がベストの状態であつたこの試合を忘れてはならないと思いました。

第2戦目のアルゼンチンはデフリンピックで最も試合の入りが悪かった試合でした。それでも0-2から引き分けに持ち込めたのは、試合中でのメンバー全員が2回集まり、メンバーの顔をお互いに見て確認したこと、平常心で落ち着いてプレーすることが出来たことによるものです。今後の試合でも苦しい状況に陥った時にこそ、メンバー同士で顔を合わせて、自分の立場や相手のことを再認識することが必要だと感じました。

最終戦のイタリア戦は前半から日本のペースで戦うことが出来ました。しかし、その2-0からなぜ逆転されたのか、直接的な原因は今でもわかりません。相手も途中から10人という状況でした。日本チームにずる賢さがなかったとも言えるのでしょうか。一つ言えることは、チーム内でのコミュニケーションが足りなかったことです。失点してから監督やベンチを見る回数がなかったように感じました。試合中に十分なコミュニケーションが取れていれば、日本は間違いなく予選突破することが出来ただろうと思います。

### 3. 今後の課題

前大会の課題もコミュニケーション不足と挙げ、また今大会もコミュニケーションが足りなかったというのが、課題でした。この逆転負けされた『サムスンの悲劇』を絶対に忘れてはなりません。これを繋げて次は必ず予選突破をすることに誓い、チームを引っ張っていきたくと思います。

## 選手 仲井 健人

### 1. 個人成果

CBとして3試合にフル出場しました。フィジカルのある相手に対して簡単に抜かれないこと、空中戦で戦えたことは収穫でした。しかし、DF陣をまとめる統率力、苦しい場面で守りきる力が不足していたことが課題となりました。

### 2. 全体を通して

予選敗退しましたが、その中で個人的に感じたことを2点述べます。

①日本が優れている点

#### ・運動量

日本は2-1で数的有利を作る場面が多くありましたが、それは相手より走る量が増えていることを示します。しかし、相手よりも動き続けていたことは、日本の運動量は世界のトップに近いことを示していると思いました。

#### ・ベンチを含めたチームワーク

ベンチの選手も試合中に助言をくれ、更にハーフタイム中は給水やマッサージ等を手伝ってくれました。

#### ・ケアへの意識

練習や試合後にアイスバスに入り、疲労回復に努めていました。

#### ②日本の弱さ

##### ・勝つサッカーができない

チーム全員が、いつ、どのようなプレーをするのがイメージ共有されていないことが一番の弱さではないかと思いました。優勝国トルコは落ち着く時、攻める時、守る時が全員共有されており、この点に関しては、日本と圧倒的な差があるように感じました。恐らく一人一人が試合の流れを読み取って考える力が不足しているのかと感じました。

##### ・リーダーの不在

上記にも共通しますが、試合中、多くが耳を傾けるように声(どのように戦うのか等)を出さず選手がいませんでした。このため、全員のイメージ共有が難しかったのではないかと思います。

##### ・1対1の弱さ

1対1の勝負に勝つシーンをもっと増やす必要があると思います。2対1でも対応ができますが、1対1で対応することで、他の選手の運動量を他のプレーに回すことができます。

### 3. 総括

日本は世界で勝つ力を持っていると実感しました。しかし、その力を高めるためには合宿を組み、各選手が自分の力を更に磨けるようなレベルの高い環境で練習する必要があると感じました。

## 選手 江島 由高

### 1. 当初の目標

表彰台に立つ事。

### 2. 結果に対する評価

表彰台に立つ事を目標に掲げ、サムスン大会に臨みました。結果は周知の通り、初戦でウクライナ相手に勝ち、続くアルゼンチン戦で2点ビハインドからドローに持ち込み、予選リーグ最終戦でイタリアに敗れ、1勝1敗1分で予選リーグ敗退となりました。個人面では、予選リーグ初戦のウクライナ戦で3分間のみの出場でした。チーム面においても個人面においても、悔しい結果となってしまいましたが、トルコから帰国して1ヶ月経った今、予選リーグを突破するだけの力が現在の日本にはまだ備わっていなかったと客観的に今回の結果を受け止めるようになりました。前回のブルガリア大会では、怪我で全試合ベンチ外でしたが、その反省を活かし、怪我することなく大会本番にピークを合わせる事が出来た点は、個人的に改善出来た点として評価したいと思います。また、公式練習が試合の為の練習となるよう全力で取り組んだ事や、試合中のベンチの雰囲気作りに気を配った点もチーム内での役割を果たした点として評

価したいと思います。

### 3. 今後の課題

日本人でサッカーをやっている人間が今回の予選リーグ最終戦を目の当たりにすれば誰もが既視感を覚えるであろうドーハの悲劇ならぬサムスンの悲劇を経験しました。日本チームが4年後の大会で同じことを繰り返さない為に必要な事は「一人一人が何事も想いを込めて取り組む事」に尽きると思います。モノを大切にすることだったり、時間を大切にすることだったり。ピッチに入るときに一礼するのも、単に礼儀がどうのこうのではなく、浮ついた気持ちで試合や練習に入らない為に必要な事だと思います。スポーツはメンタリティーに大きく左右され、姿勢や想いの差が結果に出てくるものだと身に染みて実感しています。想いを込めて取り組んだ事の数が大きければ大きいほど、今回のような失敗を繰り返すリスクも下がり、かねてからの念願である表彰台に立つ事も叶う可能性が大きくなるはずで

## 選手 大西 諒

### 1. 当初の目標(自己目標)

当初の目標はメダルを獲得することでしたが、過去の大会を遡ってみると予選突破はおろか、1勝もしていないことが分かりました。まずは1勝を目指し、それを積み重ねていけば予選突破、メダル獲得に繋がると最初はそう思いました。しかし、1勝という目標では世間からの注目や期待も今までと変わらないと考え、最低限の目標は予選突破に設定しました。個人はもちろん、チーム全体が120%の力を出していけば予選突破はできるものと信じておりました。

### 2. 結果に対する評価

1勝1敗1分けの予選敗退。今大会準優勝したウクライナに1勝したことは歴史的快挙でした。しかし、そのあとのアルゼンチン、イタリアに1分け1敗となり、特にイタリア戦は日本にとって忘れられない一戦になりました。自分自身もアルゼンチン戦の後半5分からの出場のみにとどまり、個人としては全体的に不本意な大会となりました。しかし、ウクライナに勝ったことは間違いなく日本ろう者サッカー界にとって大きな一歩になったと思います。

### 3. 今後の課題

自分の課題は2つあります。1つが体調管理の面です。出発前に体調を崩し、中々治らず、最終的に治ったのが初戦の前日でした。全体練習でも多少息苦しい感じはあったので、少なくともベストコンディションでデフリンピックに行けなかったのはチームに迷惑をかけたと思います。今後は普段の生活をしっかりし、体調を崩さない体づくりをしていきたいと考えます。

もう1つは国際大会の経験不足です。国内で試合はそれなりにやってきたとは思いますが、日の丸を背負って世界の舞台に立つとなると、国を背負っているというプレッシャーに押しつぶされそうな感じがありました。自分自身としては3年振り2度目の国際大会であり、出場したアルゼンチン戦では緊張でどこもないプレーがいくつかありました。こればかりは今後代表に関わらないと克服できないものであり、今後も関わっていくよう継続していきたいと考えます。

## 選手 山森 裕介

### 1. 当初の目標（自己目標）

今大会、デフリンピック初出場を果たしました。試合出場と点に絡むことを目標に掲げ、「1対1に負けない」ことをテーマに鍛錬に励みました。しかし、選手発表後すぐ肉離れを起こしてしまい、1か月弱のリハビリを余儀なくされました。大会まで残された時間で身体づくりに励み、大会に臨みましたが、やはり選手発表後の怪我が悔やまれます。この反省から、自分に合った負荷トレーニング、細心のコンディション調整、また、トレーナーとの積極的な相談が大切だと気付かされました。身体づくりは短期間ではなく、長期的かつ計画的にトレーニングすることで高いパフォーマンスを発揮できる身体へと変えることができます。世界と戦うためには選考に限らず、日頃から身体づくりへの高い意識が必要です。日本代表を目指す選手全員が高い意識をもつことによって日本全体のフィジカルベースを底上げでき、より競争率の高い日本代表ができるのではと思います。

### 2. 結果に対する評価

大事な初戦で強豪のウクライナを相手に勝利を挙げたことはチームにとって大きな自信を得ました。個の力においても体格は劣っていましたが、1対1では1人1人が責任を持って対応できていました。予選突破の可能性が高かったにも関わらず、その後の試合を勝ちきれずに予選敗退を喫したことで大変苦しい思いをしたデフリンピックとなりました。また、いくら良い内容であっても勝たなければ意味がありません。「良いサッカー」と「勝つサッカー」の違い、連戦で勝ち続けることの難しさを思い知らされた大会でもありました。今大会の結果を受けて、日本は表彰台を狙える位置に立ったと見えますが、トルコとイランの試合を実際に見ると世界とアジアの差を実感しました。チームと個の力の向上を図ることは勿論、短期決戦での戦い方を身につけなければ表彰台は厳しいと思います。

### 3. 今後の課題

個人的には1試合も出場できず悔しい思いをしましたが、別の形で貴重な経験ができたのも自身にとって価値のあるものになりました。また、ベンチメンバーとしてチームのために何をするべきか常に考えて行動できたことは団体競技において良い経験となりました。今後は、連戦を想定した世界と戦える身体づくり、個の力に重きを置いて向上心をもち鍛錬を継続していきたいです。また、チームの成熟度を上げていくためにも合宿の数を増やし、サッカーを取り巻く環境を変えていくことはメダルを獲るにあたって不可欠です。

最後に、応援していただいた家族、職場、協会関係者やスポンサーなど皆様に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

## 選手 東海林 直広

### 1. 成績に対する自己評価

個人として今年の3月に選出され、4か月間と短期間で、3試合フル出場。1勝1分1敗に貢献することが出来たことは大きく評価できると感じています。4か月でメンバーと馴染むことが出来、チームの為に多くのことで貢献できました。

チームとして予選1勝、予選突破が目標でした。残念なが

ら、後者の目標はあと一步のところまで逃してしまいましたが、準優勝のウクライナに勝ち、前回負けたアルゼンチンに引き分け、ベスト4のイタリアに残り10分まで勝っていたことを踏まえ、過去3大会と比較すると世界としっかり戦うことが出来た、世界に近づくことが出来た大会と感じております。

しかしながら、世界の選手のフィジカルは日本にはないものを持っていると感じたので、今後はよりウエイトトレーニングに時間をかけていきたいと考えております。

### 2. 反省・まとめ

合宿・試合を重ねるごとに選手間のコミュニケーションが活性化され、試合内でのズレを減らすことは出来ましたが、4か月間という短い期間では限界もありました。私自身、参加が遅かったということもありますが、やはりもっと早い段階でのメンバー確定ということが必要なのではないかと感じます。

会社の理解により、出発5日前からお休みを承諾いただき、大会に向けた最終調整をすることが出来ました。これにより3試合、大きな怪我をすることもなく、フル出場に繋がったと思います。その点から、派遣期間だけでなく、派遣期間前の数日を含めた派遣依頼書を用意していただくと今後の選手の為にものなると思いました。

## 選手 林 滉大

### 1. 成績に対する自己評価

今回のデフリンピックは自身にとって初の国際大会でもあり、本番に向けて大学のサッカー部でも筋肉トレーニングで身体を大きくしたり、暑い時間帯で走り込んだりと、過酷なトレーニングで自身の能力アップに徹しました。代表チームでは5月から1回の強化合宿で結果を出すなど、ベストコンディションで挑むことができました。強化合宿では仲間同士で衝突の繰り返しでしたが、最後の強化合宿で一致団結したときは「勝てる」という実感が湧きました。

日本は前回準優勝のウクライナ、昨年のW杯4位のアルゼンチン、サッカー大国のイタリア、他のグループと比べてもどの国が突破するか分からない強豪がひしめく死の予選組に入りましたが、不思議と負ける気はしませんでした。その中で、ウクライナに勝利してデフリンピック初勝利を収めたときは、これまでにない喜びをチームで共有しました。決勝トーナメント進出が決まる試合でイタリアに逆転負けをしてしまい予選敗退が決まった瞬間、チームが悔し涙を流した光景は一生忘れません。この悔しさを忘れなければ、次回のデフリンピックは予選突破、メダル獲得が見えるはずです。

予選敗退という結果に終わりましたが、内容を振り返ると、チーム全員が学業や仕事に専念しているなか、他国よりも数少ない合宿を経て、これまでにあった世界との大差が今回では対等、それ以上になくなり、世界トップレベルと戦えるようになったのは、今後の日本デフサッカー界にとって、大きな一歩となったのではないかと思います。

また4年後と考えると本当に遠く長く感じますが、厳しいアジア予選も待っているの、日本デフサッカー界のレベルアップ期間と捉えて、個人の成長のほか、デフサッカーの環境改善や人材発掘に貢献していきたいです。

僕がこのような貴重な体験をすることができたのは、今まで支え続けてくれた方々のおかげだと感謝しています。また、日本からの盛大な応援は、本当にパワーの源で心の励みにもなり

ました。応援ありがとうございました。

## 選手 伊丹 秀行

### 1. 当初の目標（自己目標）

私の目標はまずは1勝を挙げ、予選突破してメダルを取る事でした。当時、デフリンピックでは未だに1勝すらしたことがありませんでした。まずは最低限の1勝を挙げて予選突破したいと思っていました。また、自分を優先することなくチームのために全力を尽くそうと心がけていました。

### 2. 結果に対する評価

結果はウクライナ戦2-1で勝利、アルゼンチン戦2-2で引き分け、イタリア戦2-3で負けてしまいました。よって1勝1敗1分でグループ3位となり、予選敗退の結果と相成りました。予選敗退という形になり全ての目標達成できなかったことは残念です。しかし、1つの目標である1勝を挙げる事、これを達成できた事はデフサッカーでもかなり大きな成果であり、大変良かったと思います。特にウクライナは今大会では準優勝を成し遂げた強豪チームでしたが、これに打ち勝つことができました。レベルの高いヨーロッパでも日本のサッカーは通じると感じたことはとても良かったと思います。

### 3. 今後の課題

今回自分は初めてのデフリンピックで初めての国際大会でもあるので、知らないことだらけでした。しかし、今回参加したことで国際大会に出場する際の心構えが重要であること、海外でよく起こるトラブルにも動じずに対応できるようなメンタリティーが大事だと思我知道了。海外の選手は体が大きく、体格だけで言えば日本は負けているかもしれません。スタミナやスピード、ボールコントロールなど体格の差をほかの面で補っていきけるようにするしかありません。自分は今でも続けていますが当たり負けしないよう筋トレをし、ボールのキャッチングやキック精度を磨いてさらにレベルアップしていきたいです。

また、自分は判断スピードが遅いため、もっと常に周りを見て状況判断のスピードを上げ、チームの攻撃チャンスを潰さないようにしたいです。

最後に、自分は今回のデフリンピックで国際手話の存在を初めて知ったので、大会に参加して周りが何を話しているか全然分かりませんでした。少しでも世界の友人を広げ、競技力を向上させるために国際手話を覚えていきたいと思っています。

## 選手 西 大輔

### 1. 当初の目標（自己目標）

試合に出たら1点でも多く得点に絡み、チームの勝利に貢献し、まずは予選突破を決める。その後は優勝を狙いに行くと言う目標をつけて、自身初の国際大会であるデフリンピックに挑みました。

### 2. 結果に対する評価

結果は1勝1分1敗となり、得失点差で予選敗退という形になりました。初戦は準優勝国のウクライナに2-1で勝利し、アルゼンチンでは2-2で引き分け、最終戦のイタリアに引き分け以上で予選突破でしたが、最後の最後で逆転され2-3

で負けました。そして、得失点差で予選敗退となりました。しかし、今大会準優勝のウクライナに勝利出来た事やアルゼンチンに2点リードされても後半の追い上げでドローに持ち込んだ事、最後の最後で逆転負けを味わったイタリア戦。どれも色々な意味で大きな収穫になりました。

### 3. 今後の課題

正直に言うと、スピード、チームワークはどここのチームにも負けていませんでした。ただ、試合に勝つ為にはもっと1つ1つのプレーにこだわりを持ち、そのプレーの精度を上げていくべきだと思います。サッカーではたった1本のシュート、たった1つのミスで勝負が決まるということを改めて思い知らされました。この経験を踏まえ、4年後の大会は予選を突破し優勝するためには、もっと自分達の良さを伸ばし、弱点を少しでも無くしていく事が課題になると思います。

## 空手競技チーム

## 監督兼選手 坂口 健二

### 1. 選手・役員の選考基準・方法

連盟指針では、デフリンピック出場権を得るためには世界大会ベスト4以上であることを条件としています。しかし、2016年7月にトルコ・サムスン市にて開催された世界ろう者武道選手権大会に出場を予定していましたが、出発当日にトルコで軍部によるクーデターが起きてしまいました。トルコ航空が欠航となり、不参加とせざるを得ず、代表選考を決めることができませんでした。その代わりに、毎年開催されている全日本障がい者空手道競技大会の成績を基に選手選出についてよく協議した結果、選手8名を選考して連盟に提出しました。審議の結果、選手5名が派遣されることとなりました。

### 2. 空手競技チーム名簿

選手兼スタッフ（監督） 坂口 健二（沖縄）

選手兼スタッフ（コーチ） 宮下 昭宣（埼玉）

選手 稲葉 考一（東京）

選手 新垣 愛花（沖縄）

選手 北村 亀太（福岡）

手話通訳 田口 雅子（東京）

### 3. 役割

監督…チームに関する全ての責任者

TD 会議への出席、本部への報告等

コーチ…選手のお世話、相手の相手等

スタッフ（選手を含めて）…競技会場内での写真・ビデオ撮影、会場への送迎バス時刻の確認等

手話通訳者…英語もできるため、必要な時の通訳

### 4. 競技スケジュール

7月15日（土） 先発組（坂口、田口、新垣、北村）

成田空港集合、出発、サムスン市到着

7月16日（日） オフ

7月17日（月） 選手村にあるフィットネスセンターにて練習

7月18日（火） 結団式、開会式

7月19日（水） 選手村にあるフィットネスセンターにて練習

7月20日(木) 選手村にあるフィットネスセンターにて練習  
後発組(宮下、稲葉)  
7月21日(金) 選手村にあるフィットネスセンターにて練習  
7月22日(土) 14:30～16:00 公式練習  
7月23日(日) 14:30～16:00 公式練習  
18:00～21:00 TD 会議  
7月24日(月) 男子個人形(宮下、北村)、男子個人組手  
-60kg(稲葉)、-67kg 女子個人形(新垣)、  
女子個人組手-50kg、-55kg  
7月25日(火) 男子個人組手-75kg、-84kg、+84kg(坂口)  
女子個人組手-61kg、-68kg、+68kg  
7月26日(水) 男子個人組手無差別級(坂口)  
男子団体形(宮下、稲葉、北村)  
男子団体組手(坂口、宮下、稲葉、北村)  
女子個人組手無差別級、女子団体形・組手  
7月27日(木) オフ  
7月28日(金) 現地出発  
7月29日(土) 帰国

## 5. 成績

### 試合結果

空手競技は7月24～26日までの3日間にアタトゥルクスポーツホールにて18種目が行われました。今回は世界19ヶ国から男女合わせて120名のエントリーがありました。日本選手の成績は下記の通りです。

### 女子形競技

新垣選手 1回戦 1-4 ベネズエラ  
敗者復活戦 5-0 トルコ  
3位決定戦 1-4 ウクライナ→5位入賞

### 男子形競技

宮下選手 1回戦 1-4 ウクライナ  
北村選手 1回戦 不戦勝  
2回戦 5-0 ギリシャ  
準々決勝 1-4 タイ  
敗者復活戦 1-4 イタリア→7位入賞

### 男子組手 -60kg 級

稲葉選手 1回戦 不戦勝  
2回戦 0-10 ロシア  
敗者復活戦 0-3 台湾

### 男子組手 +84kg 級

坂口選手 1回戦 不戦勝  
2回戦 0-8 ロシア  
敗者復活戦 0-1 トルコ→7位入賞

### 男子組手 無差別級

坂口選手 1回戦 0-8 アルゼンチン

### 団体戦男子形

1回戦 日本0-5 台湾

### 団体戦男子組手

1回戦 日本0-2 トルコ

## 6. 空手道競技運営などの報告

空手チームは選手村にて毎日ミーティングをして、意見をまとめて決めました。皆さんの協力によりスムーズに実行することができました。

- ・公式練習日程情報は公式サイトに載っていて、計画を立てやすかったです。
- ・宿泊所から競技会場までの移動方法はバスでしたが、非常に時間がかかりました。
- ・公式練習日以外は、選手村にあるフィットネスセンターにて練習することができました。
- ・公式練習の練習場のスペースは2面ありました。
- ・試合会場には大画面スクリーンがあり、試合と大画面スクリーンを交互に見ながら試合状況がわかりやすかったです。控室で試合のモニターを見ながら自分の試合前のアップすることができました。

## 7. 競技規則の適用

空手道競技ルールは世界空手道連盟(WKF)に準じて行い、トーナメント方式で行われました。

## 8. 大会参加までの準備状況

デフリンピック本番まで、毎月1回以上の強化合宿を行いました。強化合宿では、本番に向けての練習やコンプライアンス研修やアンチドーピング講習会などを行いました。ドーピングの関係で居所調査、実施検査等について、講師より詳しく説明してもらいました。

## 9. 大会の感想と今後の課題

空手強豪国は優秀なコーチが5人程おり、万全な体制を整えていました。また、デフリンピック初出場のタイ選手は男子個人形で金メダルを獲得しており、彼はまだ18歳でしたが、スピードとキレ等がありました。それだけではなく、同行したコーチは選手として聞こえる人の世界大会に出場経験のある方でした。それと比べて日本は国際大会出場経験を持つ指導に定評のあるコーチが同行できなかったのが敗因と思われます。

今回大会の成果と課題を踏まえ、選手たちが優秀な指導者の下で鍛えられるようサポートできるか検討していきたいと考えています。また、空手道の発祥地であるにもかかわらず、日本における聴覚障害者の空手道人口が極めて少ない状況です。今回の大会に向けて、団体組手も含めて日本人全階級出場できるように選手数を増やすことが課題です。全日本空手道連盟などの各関係機関に協力を得て、デフリンピックでメダルを狙える選手の発掘をテーマに色々な方法を考えていきたいです。

選手兼スタッフ 宮下 昭宣

### 1. 結果

- ・男子個人形1回戦敗退
- ・男子団体形1回戦敗退
- ・男子団体組手1回戦敗退

### 2. 敗因

- ・男子個人形1回戦敗退

得意のスーパーリンペイ(剛柔)で臨みましたが、相手(ウクライナ)は五十四歩大でした。私の形は自分でも納得のいく形でしたが、技のスピードやキレなどは若い相手選手の方が一

枚上手でした。

#### ・男子団体形1回戦敗退

男子団体形は、日本チームにとって初出場でした。第一指定形のセーバイで臨みました。団体形メンバーは流派が違うため、メンバーで呼吸を合わせるまで時間がかかりましたが、本番では呼吸がぴったり合ったので、勝てると思いました。

#### ・男子団体組手1回戦敗退

相手トルコの戦法に対応できていなかったことが敗因だったと思います。

### 3. デフリンピックの感想

メダル大国のロシア、ウクライナ、イラン、トルコ、ベネズエラなどの空手強豪国は、前回の大会に続き今回の大会も強さを見せました。スポーツ立国を戦略的に進めている海外の選手に勝てないのは承知の上でしたが、更に指導に定評のあるコーチたちの下で厳しいトレーニングをしてきたようです。日本にもそういった環境を求めます。

### 4. 今後の課題

デフリンピックで勝つためには、スポーツ立国のように国際大会での経験豊富な総合的なコーチの力が必要です。パラリンピック組織委員会に対し、総合的なコーチ派遣要請ができるような環境が望ましいと思います。

## 手話通訳 田口 雅子

### 1. 自己の役割とその評価

手話通訳として参加させて頂きました。しかし実際には手話通訳よりもスタッフとしての仕事の方が多かったと思います。武道は選手が少ない為、スタッフは私のみで、選手もスタッフを兼任していました。具体的な仕事内容は通訳以外に、報告日誌の文章作成のフォロー、練習の様子の写真・動画撮影、体調の悪い選手のケア、試合中の荷物・貴重品の管理などでした。

手話通訳の件では監督から2点、指摘がありました。1点目は、イスタンブールに着いた際に近畿日本ツーリストの添乗員から注意点の説明通訳を頼まれ、最初は自転車の団体の専属通訳者が通訳し、その後、武道専属の私が通訳をしました。その際に、監督から今の通訳はやってはいけないと注意をされました。私は事情が分からず、どういうことか分かりませんでした。近畿日本ツーリスト専用の通訳者を手配するのは本部であり、武道専属の通訳者の私が通訳すべきではなく監督からの指示以外の通訳はしてはいけないという指摘でした。これについて戸惑いもありましたが、従いました。

2点目は、帰国時にサムスン空港からの出発が5～6時間大幅に遅れた際、再度近畿日本ツーリストから通訳を頼まれました。今回は大切な伝えるべき情報なので通訳をしてしまいましたが、この件でも通訳をしてはいけないという指摘があり、私は通訳をやめました。その後の情報は全て添乗員が筆談で伝えるというかたちになりました。事前に武道連盟以外の通訳をしてはいけない事をきちんと確認するべきでした。デフリンピックに参加する事が決まってから場所がトルコという事で選手達の安全を確保するためにも、素早く適確な情報を伝えなければと気を引き締めて参加しましたが、このようなことになり非常に残念です。通訳者として不本意ですがこのような指摘を受け、

満足してもらえなかったので達成感というものはありませんでした。

### 2. 今後の課題

今後、武道の通訳者としては、耳に入った情報は監督の許可なしで勝手に通訳してはいけない、ということを常に念頭において行動したいと思います。

## 選手 稲葉 考一

### 1. 当初の目標（自己目標）

個人組手、団体形、それぞれ1勝すること。  
体重62kgを60kg以下に減量。（個人組手）  
団体形、セーバイとアーナンを覚える。  
セーバイの技、正確なスピードとキレを出すようにする。

### 2. 結果に対する評価

体重はクリア。  
個人組手、団体形ともに完敗。  
団体形、セーバイとアーナンは覚えました。

### 3. 今後の課題

団体形については3人とも同じ流派のメンバー同士が望ましいと思います。今回は3人とも流派がバラバラだったこと、メンバーの所在地も年齢層もかけ離れていて練習量に無理がありました。

減量は成功し、2か月たった現在でもリバウンドすることなく体重を維持しています。引き続き、今後も運動量、食事をしっかり注意したいです。

## 選手 新垣 愛花

### 1. 当初の目標（自己目標）

今回、私にとって初めてのデフリンピック出場でした。今までの稽古で身につけてきた技術やキレ、バランスやタイミングなどを磨いていき、さらに自分に自信を持って全力で優勝をすることを目標に取り組んでまいりました。

### 2. 結果に対する評価

ベネズエラとの初戦では1-4で敗退してしまいましたが、敗者復活戦に挑み、トルコに5-0で勝利を得ることができました。次に敗者復活決勝戦に進出し、ウクライナに絶対に「勝ちとる！」と気合を入れて挑みましたが、残念ながら0-5で敗退という結果になりました。最終的に5位となり、初めて出場した私にとって非常に悔しい結果となりました。

### 3. 今後の課題

自分にとって初めて世界を相手に日本の国旗を背負って試合に出ましたが、自分の体力や体幹、そして筋肉をしっかりと強化していくトレーニングが十分に足りていないことを改めて実感しました。やはり自分にとってデフリンピックに向けて1年間という期間で稽古を積み重ねていくだけでは足りないほど、世界と戦うことの厳しさを今回のデフリンピックで味わいました。今回の反省を生かしてこれから4年後のデフリンピック出場に向け、①積極的に聞こえる人の大会に参加することで自分

のレベルはどのぐらいなのかを確かめながらレベルアップをしていくこと、②試合相手のレベルはどの程度かを研究し、どの形や作戦が一番良いのかを考えながら自分の得意形や苦手形を見つけていくことを課題としたいと考えています。

今回は残念な結果となりましたが、敗者復活戦を5-0で勝利したことは自分にとって初めて最高成績だったので、ひとつの結果を残せたことはとても大きなものとなりました。日本の皆さんからの応援は自分にとって大きなものだったので、とても感謝しております。応援していただいた皆さん、ありがとうございました。

## 選手 北村 亀太

### 1. 当初の目標（自己目標）

今まで練習してきたことや工夫してきたことを無駄にせず、精一杯全力を出し切って自分が満足いくような良い結果を残せるように頑張ること。

### 2. 結果に対する評価

結果は個人形の部で7位でした。自分の力を全部出し切ることが出来ました。しかし、7位という結果はメダルが取れず少しだったのでとても悔しい気持ちです。

### 3. 今後の課題

もっと沢山練習をして技術を磨いて、体力や精神などを鍛えて、集中力を保てるようにして、色々な大会に出場して、いい記録が残せるように頑張ります。4年後のデフリンピックも出場して、次こそは、メダルを取れるように頑張りたいと思います。

## 水泳競技チーム

## 監督 豊田 律

### 1. 選手・役員の選考基準・方法

#### 【選考基準について】

当協会の指定選手を対象に、連盟が定めた世界選手権大会の4位相当の記録を基準記録とし、第11回日本ろう者水泳選手権大会の場合は短水路基準記録としました。

#### 【選考方法について】

2016年4月～2017年2月まで、日本水泳連盟公認大会（長水路）、JP大会、日本障がい者水泳選手権大会、マスターズ大会（長水路）など、当協会が認めた大会をはじめ、当協会主催の第11回日本ろう者水泳選手権大会を対象としました。対象大会にて基準記録を突破した選手を候補選手として2017年3月に候補選手を対象に選考委員会にて選考の結果、連盟への推薦選手は男子5人、女子4人の計9人となりました。

（男子）

- ・金持 義和（エイベックス・大阪体育大学大学院）
- ・茨 隆太郎（東海大学大学院）
- ・藤原 慧（日本大学）
- ・津田 悠太（飛龍高校）
- ・星 泰雅（仙台大学）※1

（女子）

- ・藤川 彩夏（東京女子体育大学）
- ・齋藤 京香（酒田光陵高校）
- ・久保 南（東海学園大学）
- ・中東 郁葉（松商学園高校）

※1＝リレー要員

スタッフにおいて当協会の選考委員会にて選考の結果、連盟への推薦スタッフは監督、コーチ、トレーナーの3名体制となりました。スタッフ氏名は以下のとおりです。

- ・監督 豊田 律（京都府）
- ・コーチ 鈴木 しのぶ（静岡県）
- ・トレーナー 佐藤 学（東京都）

#### 【スタッフの役割について】

役職	氏名	役割
監督	豊田 律	統括責任者、TD 担当
コーチ	鈴木 しのぶ	選手の管理、練習担当
トレーナー	佐藤 学	選手の管理、身体ケア担当

#### 【目標設定】

金メダル2個、銀メダル4個、銅メダル4個の計10個のメダル獲得、入賞においても全員参加種目決勝進出及び入賞という目標を設定しました。

#### 【結果と評価】

金メダル3個、銀メダル7個、銅メダル5個の計15個、入賞においても16個と過去最多の獲得になりました。目標達成でき、強化合宿の成果を出すことができました。

## 2. 総評

今大会は38カ国、194名参加、世界新記録24個、大会新記録40個という大変レベルの高い大会となりました。

その中で日本選手の成績は次の通りです。

※表の見方

氏名	種目	結果	順位
----	----	----	----

(WR) 世界新、(DR) 大会新、(AR) アジア新、(NR) 日本新、(BR) 自己ベスト

藤原 慧 (日本大学)	50m 自由形	25-74	15 位
	100m 自由形	53-08 (AR)	4 位
	200m 自由形	1-52-82 (WR)	2 位
	400m 自由形	3-57-90 (DR) (AR)	優勝
	1500m 自由形	15-37-64 (WR)	優勝
	200m バタフライ	2-05-59 (AR)	2 位
	200m 個人メドレー	2-08-08 (BR)	3 位
	400m 個人メドレー	4-28-78 (DR) (AR)	優勝
	400m リレー	3-35-44 (AR)	3 位
	800m リレー	7-51-82 (AR)	2 位
400m メドレーリレー	3-55-87 (AR)	2 位	

藤原選手は聞こえる人の大会でも上位に入っており、ランキングにおいても3種目で1位の実力を持っているため、メダル獲得への期待がかかっていました。デフリンピックは初参加ですが、メイン種目以外はレースを楽しむ目的で11種目もエントリーしました。

メイン種目である400m自由形と1500m自由形は積極的

に飛ばし、持ち前のスタミナ力を活かしてペースが落ちないまま最後まで泳ぎ切り、400m自由形は大会新とアジア新、1500m自由形は2位を大きく引き離して自己ベストとなる世界新を果たして優勝しました。400m個人メドレーにおいても専門外でありながら驚異的なラストパートで3位から逆転で大会新の優勝を果たし、大会全体が興奮のつぼと化しました。他に200m自由形で惜しくもタッチの差で2位になったものの、世界記録を上回るなどハイレベルなレースをし、金メダル3個、銀メダル4個、銅メダル2個の計9個という、日本選手で最多のメダル獲得となりました。

普段よく泳ぎこんでいるのでフォームも安定していたこと、自己管理もきちんとしていたことがいい結果につながったといえます。また、リレーとメドレーリレーにおいても自己ベストを出してメダル獲得に大きく貢献することができました。他選手にも見習ってほしいところがたくさんあり、藤原選手の行動と態度には敬服します。

今後は社会人スイマーになりますが、環境が変わってもさらなる活躍を期待しています。

茨 隆太郎 (東海大学 大学院)	50m バタフライ	25-93	5位
	200m 背泳	2-09-76	4位
	200m 個人メドレー	2-05-71 (DR) (AR)	2位
	400m 個人メドレー	4-31-67 (AR)	3位
	400m リレー	3-35-44 (AR)	3位
	800m リレー	7-51-82 (AR)	2位
	400m メドレーリレー	3-55-87 (AR)	2位
	混合 400m メドレーリレー	4-13-37 (AR)	3位

茨選手は3回目の出場であり、今年ベストタイムを出しており、安定しているのでメダル獲得への期待がかかっていました。また、王者のOBOTIN選手(ロシア)に勝つことが金メダル獲得につながるというイメージを立てていました。メインとなる200m個人メドレーと400m個人メドレーは期待通り自己ベストを出したものの、両方ともOBOTIN選手に敗れ、銀メダル、銅メダルに終わりましたが、OBOTIN選手との激戦なレースは素晴らしかったです。また混合メドレーリレーにおいてアンカーとして5位から3位にあげ、メダル獲得に貢献しました。個人メドレーの勝負の難しさを身につけたと思うので色々な課題を解決し、次回の挽回できるよう今後のさらなる活躍を期待しています。

金持 義和 (エイベック クス・大阪 体育大学 大学院)	50m 背泳	27-29	3位
	100m 背泳	57-87 (AR)	2位
	200m 背泳	2-07-77 (AR)	2位
	400m リレー	3-35-44 (AR)	3位
	800m リレー	7-51-82 (AR)	2位
	400m メドレーリレー	3-55-87 (AR)	2位
混合 400m メドレーリレー	4-13-37 (AR)	3位	

金持選手は2回目の出場であり、2年前の世界大会で背泳3冠を獲得しており、メダル獲得への期待がかかっていましたが、その後、交通事故の後遺症のせいか、記録が伸びず、スランプに悩まされていました。しかし、金持選手の精神力と高いモチベーションでメインとなる背泳では50mは力み過ぎで銅メダルにとどまったものの、200mは計画通りのレースが出来て5

年ぶりに出した自己ベストに近い今季ベストをマークして銀メダル、そして100mも計画通りのレースで2年ぶりの自己ベストで銀メダルを獲得しました。目標とした金メダルは獲得できなかったものの、大会前のスランプからようやく脱出できたことが高く評価できます。そういった経験を活かしてコンディションとモチベーションの強化、そしてフォームの改善により、今後のさらなる活躍を期待しています。

津田 悠太 (飛龍高校)	1500m 自由形	17-02-56 予選 16-49-26 (BR)	7位
	200m バタフライ	2-11-48 (BR)	7位
	400m リレー	3-35-44 (AR)	3位
	800m リレー	7-51-82 (AR)	2位
	400m メドレーリレー	3-55-87 (AR)	2位
	混合 400m リレー	4-06-20	9位

津田選手は2年前のアジア大会でデビューし、1500m自由形で2位に入ったことから、初めてのデフリンピックでどんな活躍ができるか期待がかかっていました。まだ16歳ですが、様々なプレッシャーの中、1500m自由形予選で自己ベストを出し、決勝で7位入賞、200mバタフライも予選、決勝とも自己ベストで7位入賞を果たしました。400mリレー、800mリレー、400mメドレーリレーでもよく健闘し、メダル獲得に貢献しました。

津田選手にとってメダル獲得という貴重な経験になったと思います。その経験を活かして泳力および体力アップとフォーム改善により、今後のさらなる活躍を期待しています。

星 泰雅 (仙台大学)	50m 自由形	26-84	36位
	100m 自由形	57-99 (BR)	28位
	400m リレー	予選 3-45-05	3位
	800m リレー	予選 8-11-48	3位
	400m メドレーリレー	予選 4-06-45	3位
	混合 400m リレー	4-06-20	9位

星選手はリレー要員としてデフリンピックに初めて参加しました。50m自由形と100m自由形は自己ベストを出しましたが、決勝進出には遠かったです。しかし、リレーとメドレーリレーにおいてはさらなる自己ベストを出して他のメンバーを引っ張って決勝進出、そしてメダル獲得につなげてくれました。

デフリンピックという舞台にたち、貴重な経験を活かして次回には個人として参加できるようにさらなる活躍を期待しています。

藤川 彩夏 (東京女子 体育大学)	50m バタフライ	29-79 予選 29-66 (AR)	5位
	100m バタフライ	1-06-26	5位
	200m 個人メドレー	2-41-18	14位
	400m リレー	4-18-18	5位
	400m メドレーリレー	4-38-32 (NR)	5位
	混合 400m メドレーリレー	4-13-37 (AR)	3位
	混合 400m リレー	4-06-20	9位

藤川選手は3回目の出場であり、2年前の世界大会の100mバタフライで銀メダルを獲得しており、期待がかかっていました。しかし、今年に入って鼻の手術や足の怪我などで記録が伸

びず、不安はあったものの、大会当日までコンディションのピークを間に合わせ、メインのバタフライ 50m では自己ベストの日本新で 5 位、100m も今季ベストで 5 位入賞を果しました。最後の混合メドレーリレーでさらにタイムを伸ばし、念願のメダルを獲得できました。3 回目の参加で初めてメダル獲得できたことで大きな自信を持てたと思います。今後は藤原選手と同じく社会人スイマーになりますが、環境が変わっても活躍されるのを期待しています。

久保 南 (東海学園 大学)	50m 平泳	34-25 (NR)	4 位
	100m 平泳	1-16-10 (NR)	6 位
	200m 平泳	2-44-54 (NR)	7 位
	400m リレー	4-18-18	5 位
	400m メドレーリレー	4-38-32 (NR)	5 位
	混合 400m メドレーリレー	4-13-37 (AR)	3 位

久保選手は 2 回目の出場となりますが、2 年前のアジア大会にて平泳で 3 冠を獲得してからタイムを伸ばしており、大会前の試合で自己ベストの日本新をマークし、期待がかかっていました。メインの平泳で全て自己ベストの日本新を出しながら 50m は 4 位、100m は 6 位、200m は 7 位入賞にとどまりました。特に 50m はメダルまであと 0.16 秒、100m もあと 0.26 秒とタッチの差で、惜まれます。その悔しさを最後の混合メドレーリレーにぶつけて力泳し、メダル獲得につなげることができました。僅差でメダルを逃したことで勝負の難しさを身に付け、課題に向けてさらなる活躍を期待しています。

齋藤 京香 (酒田光陵 高校)	400m 自由形	4-43-58	4 位
	800m 自由形	9-47-50	5 位
	200m 個人メドレー	2-36-60	11 位
	400m 個人メドレー	5-19-58 (NR)	5 位
	400m リレー	4-18-18	5 位
	400m メドレーリレー	4-38-32 (NR)	5 位

齋藤選手は 2 年前の世界大会でデビューし、400m 自由形と 200m バタフライで 4 位入賞を果したことから初めてデフリンピックにおいて期待がかかっていました。しかし、肩の痛みからの練習不足がたたたり、コンディショニング的には不安があったものの、齋藤選手の精神力で 400m と 800m 自由形は今季ベストタイムで 400m は 4 位入賞、800m は 5 位入賞を果し、400m 個人メドレーも自己ベストの日本新で 5 位入賞を果しました。今回メダル獲得はなりませんでしたが、肩の痛みによる練習不足という悪コンディションから立ち直って入賞を果したことは高く評価できます。まだ 16 歳と若く、泳力および体力アップ、フォーム改善により、今後のさらなる活躍を期待したいです。

中東 郁葉 (松商学園 高校)	800m 自由形	10-12-63	12 位
	100m 背泳	1-11-20	10 位
	200m 背泳	2-30-34 (NR)	6 位
	400m 個人メドレー	5-28-70	10 位
	400m リレー	4-18-18	5 位
	400m メドレーリレー	4-38-32 (NR)	5 位
	混合 400m リレー	4-06-20	9 位

中東選手は 3 年前にデビューし、200m 背泳で基準記録を突

破し初めてデフリンピック大会に参加となりました。スタミナ力が素晴らしく、期待がかかっていました。初めての国際大会、15 歳の若さと様々なプレッシャーであまりよくない結果が続きましたが、終盤に慣れてきたためか、リラックスできるようになり、最後の 200m 背泳は自己ベストの日本新を出して 6 位入賞を果しました。様々なプレッシャーの中で入賞を果すことは高く評価できます。その経験を活かして、体力と泳力の向上、そして実績を積んで今後のさらなる活躍を期待したいです。

## 【まとめ】

今大会は 38 カ国、194 名参加、世界新記録 24 個、大会新記録 40 個という大変レベルの高い大会となりました。

その中で日本チームは金メダル 3 個、銀メダル 7 個、銅メダル 5 個の計 15 個、入賞においても 16 個と過去最多の獲得となりました。目標のメダル獲得 10 個を上回り、目標達成を果すことができましたが、その中で大会を通して課題が 4 つ挙がりました。

### ①「回復力」

6 日間と長いスケジュールにも関わらず安定した記録を出した選手は素晴らしい「回復力」を持っていました。厳しい練習に耐えに耐えてそこから回復力が上がります。疲労の原因となる乳酸を休憩のときにいかに減少できるかが大きなポイントです。人によってまちまちなので、練習を通して自分で乳酸のコントロール調節を身につけなければなりません。それが回復力アップにつながります。

### ②「100%の力の発揮」

試合になるともちろん 100%の力を発揮しなければなりません。しかし、なかなか発揮できない選手が数名いました。原因は練習で 120%の力を発揮できるレーススピードを出せなかったことです。練習で 100%発揮できなくても試合になれば、100%発揮できると思こんでいたそうです。試合の結果は全て練習の成果によるものです。

### ③「自己管理」

長いスケジュールのため、疲労や筋肉痛を訴える選手が出てきます。トレーナー（2 人）がマッサージして疲労や筋肉痛が軽減しても構いませんが、トレーナーに頼らず自分でストレッチしたりアイシングを使って筋肉痛を抑えなければなりません。なぜなら自分の体は誰よりも自分がよく知っているからです。自分で体のケアができるようになったら 24 時間いつでも体のケアができるので先述した「回復力」に繋がります。

### ④「コンディション」

大会に合わせてコンディションをうまく調整できた選手とできなかった選手で記録が大きく分されました。できなかった選手は普段の練習においてコンディションをしっかり管理していなかったと反省していました。常にいいコンディションを維持するためには目標とする大会に合わせて計画的に練習プランを立てなければなりません。さらにコンディションの管理によって怪我や疲労の防止につながります。

以上、4 つの課題について選手たちにしっかり認識させた。また、トレーナーにおいては身体のケアだけでなく、メンタル面もサポートし、モチベーションを上げてきたことが高く評価できます。総合的には目標を突破したことから良好に計画的に進んだと思います。

### 【今後に向けた取組み】

大会を通して全体のレベルが上がってきました。特にロシアは圧倒的な選手層でレベルも高く、金メダル 26 個、銀メダル 10 個、銅メダル 8 個を獲得していました。主力選手がまだ健

在な上、若い選手も出てきたので今後も当分は強さが続きそうです。他にポーランド、ウクライナ、そして中国も前回よりレベルが上がっており、有望な若手選手も増えてきたことから、日本は今回で満足するのではなく、さらにレベルアップしなければならないことが分かります。今後の取り組みとして①海外遠征を積極的に実施して海外でのコンディショニング力を身につける。②レースで力を100%発揮できるようにするためにレーススピードを中心とした練習を取り入れて、常に力を100%発揮できるように身につける。③技術だけでなく筋力アップもフォーム改善につながるので、ウェイトトレーニングを取り入れる。④回復力強化および自己管理徹底化、この4点を取り組んで次回の国際大会につなげたいです。

世界の伸びは想像以上のものがありました。このレベルに対応するには聞こえる人の中でも、トップレベルで戦える選手でないと世界では全く歯が立たないのが現実だと思います。ロシアをはじめとする世界の強豪国は、年間を通してナショナルチームの活動をするほか、勝者には報奨金を与えるとシステムがあります。是非、日本にも取り入れていただきたいです。また今後の選手発掘の方法や強化策を早急に考えなければ、次回のメダル獲得は厳しいと思います。

## コーチ 鈴木 しのぶ

### 1. 自己の役割とその評価

今回初めてデフリンピック（水泳）に参加させていただきました。水泳チームの全体的な結果については、メダルの数を数えただけでも、とてもよい結果を出すことができ、誇りに思っております。

今回の私の担当業務は、コーチ（主に女子選手担当）でした。日本にいる間の合宿等でも女子選手の練習を担当させていただきましたが、チームに入ってから時間は長くありませんでした。まずは選手・スタッフとのコミュニケーションをとること、選手の性格（人間性及び水泳の練習やレースについて）を知ることを第一に考え、デフリンピックまでを過ごしてきました。同時に、選手が日常練習している環境を知ったり、各選手のコーチの方々との連携をとることも大切だと考えておりましたので、できる限りの努力をしました。十分な準備とはいえなかったものの、事前の合宿や大会、現地入り後にも、各コーチから得た情報をもとに選手に対応することができたと思っています。女子の結果については、混合リレーでメダルを獲得したこと、全員が決勝に残り入賞を果たしたこと、ほとんどの選手が自己ベストを更新できたことなど、特に若手の選手にとっては次につながるよい経験となったと確信しております。

その他、男女を問わず選手との多くの会話の中で、チームや協会に対する思いや要望などがあることを知り、今後の課題になり得ることや工夫していくべき点などに気づくことができました。これも大きな収穫のひとつでありますし、そのようなことを考える選手たちをととても頼もしく感じました。

また、今回チームの中に手話通訳者がおりませんでしたので、手話通訳とは言えないほどの微力ではありましたがろう者と聞こえる人のパイプ役をさせていただきました。もちろん十分なことはできませんでしたが、私自身にとってはとてもよい経験ができたことと自負しております。

### 2. 今後の課題

このデフリンピックでの成績は、とても満足するものではあ

りましたが、今後のことを考えると不安要素は多くあります。そのひとつとして、ベテラン選手が引退した後の若手の選手育成が急務だと考えます。今回の若手選手は個人種目でのメダルはなく、これからの4年間でどのように育てていくのか、またどのようにして新しい選手を発掘していくのか、いずれにしても大きな課題であると考えます。

また、チームスタッフ及び支援スタッフにおける業務分担や業務内容の整理も課題のひとつだと考えます。特に遠征において大切な役割である「総務」業務が確立されておらず、考え直す必要性を感じました。

さらに、今回選手から得た情報（選手の思いや要望）をどのようにチーム内及び協会内に生かしていくのか、引退する選手が今後どのようにチームや協会に関わっていくのかなど、一度しっかり考えていくことも必要かと思いました。

最後に、今回私にとって貴重な経験をさせていただきましたこと、この場をお借りして関係するみなさまにお礼申し上げます。ありがとうございました。

## トレーナー 佐藤 学

### 1. 自己の役割とその評価

トレーナーとしての主な役割としては選手のレース前のコンディショニングとケアですが、スタッフの人数不足もあり、トレーナーとしての仕事だけではなく、スタッフの役割の一部も担いました。支援スタッフとしてチームドクター、トレーナーをもう一人配置して頂くことが出来たので、幅の広い活動を行うことが出来ました。他の支援スタッフに試合に必要な記録を取っていただくことができ、少人数ながらも比較的スムーズに進んだように思います。

メディカル面ではチームドクターに相談し、診断、処置までしていただくことができ、本来の役割であるコンディショニングとケアの割合を増やすことが出来ました。もう一人トレーナーを配置することで、選手一人ひとりに向き合う時間を長く取りました。私が現地に入る前は本部のトレーナーさんに対応して頂き、試合が始まってからも本部のトレーナーさんと連絡を取り合い、情報の共有などさせていただきました。選手村に宿泊できるスタッフが少ないので、村内でもスタッフとしての役割を担いました。

また、聞こえるので本部の携帯電話を持ち、本部との急なやり取りもしました。これは聞こえるコーチは試合中は電話に出れない事が多いので、比較的電話に出れるであろう私が持つこととなりました。

今大会は競泳として、目標を超える結果を残すことが出来ました。トルコという競泳としては初の土地で、デフリンピックに初めて出場する選手、そもそも国際大会が初めてという選手がいてこの結果は選手の頑張りや選手内のチームワークがあってこそだと思います。そして、それを支える監督をはじめスタッフ陣の働き無くしてこの結果はありえないでしょう。

### 2. 今後の課題

課題として、今大会は水泳であるにも関わらず外傷が目立つ大会でした。出発する前にすでに捻挫であった、(数名)空港で移動を急いだことにより捻挫した、広い範囲で擦りむいた。外傷ではないものとしては麦粒腫になった、下痢になった(数名)等、外傷への対策も今以上に準備していく必要があると思います。同時に他の症状にも対応できるようにする必要性を感じ

しました。

また、今回の選手村には湯舟がありませんでした。支援スタッフに小さなビニールプールを用意して頂き、お湯もしくは冷水中に浸かれるよう準備をして頂きました。製氷機が小さなものしかなく、大会側に用意して頂いた飲み水を選手の部屋の冷凍庫で凍らせ、連日試合会場に持っていくことができました。これは本部からアイデアを頂きました。こういった現地の状況を出来るだけ事前に情報を入手し、後手に回らないようにしていきたいと思います。

まとめとして、国際大会、特にデフリンピックのような大きな大会であればなおのこと、不測の事態が起きるのだと思います。それらに対応できるようにしていきたいと思います。そして、水泳への見識はもちろん、トレーナーとしての知識、経験を今まで以上に深める必要があると思います。今回このような機会を与えていただきまして、関係者の皆様に感謝いたします。

## 選手 藤原 慧

### 1. 当初の目標（自己目標）

200、400、1500m 自由形の3冠

### 2. 結果に対する評価

目標達成はできませんでしたが、違う形で3冠できて良かったです。(400、1500m 自由形、400 個人メドレー)

50、100m 自由形以外の種目でもメダルが取れて良かったです。

### 3. 今後の課題

競技面、生活面の2つの視点から考えます。

#### ・競技面

各選手、体が動ききっていない状態でアップを終えている選手が多かったように思います。中には30分ダラダラ泳いでレースに向かう選手も見受けられました。レース時に脈がどれくらい上がりその心拍数で何分間泳ぎ続けるのか、ということを考えればそれなりにアップをするべきだと思います。この事は全選手に言えることで、特に決勝でもう一本泳ぐ人ほどその重要性は増します。予選で体を動かせばいいと思っている人もいましたが、体が動ききっていないところに無理やり動かそうとすれば余計な力が加わり、自分が思った以上に疲れます。決勝で競り勝てない、思ったよりタイムが伸びなかったというのは客観的に見て当然のことに見えました。

また、ケアを受ける時間帯やセルフケアについても気になることがありました。今回のデフリンピックは予選競技が終わり、宿舎でケアを受けることがパターン化されていました。しかし、朝一で予選レースが終わったにも関わらず、昼の時間帯にケアを受けている人がいました。レース直後が一番疲れているにも関わらず他の応援をしている選手がいました。そういった選手がいたため、昼のケアを受けられない選手や時間短縮で疲労回復を測れない選手がいました。周りを見て先の事を考えて行動する力を身に付けてほしいです。また、セルフケアをしている選手が全くいませんでした。トレーナーがいることは良いことですが、ケアの順番を待っている時間に自分で疲労回復に費やせる時間は沢山あったともいえます。また、トレーナーに見てもらいより自分の体は自分が一番よく分かっていると思います。そうすると、セルフケアの大切さが分かってくると思います。

#### ・生活面

今回の試合を通して現地に着いた時より太った選手が数名いました。男子に関しては、明らかにお腹が出ている選手がいました。今回の宿舎の食事はある程度パターン化されていました。フライドポテト、鶏の胸肉料理数種類、野菜、デザート、果物。この中で一番食べてはいけない物、フライドポテトをよく食べている選手は試合期間中に太っていました。肉を沢山食べると太ってしまうイメージですが、今回は胸肉ということもありかなりヘルシーでした。ポテトフライより脂身の少ない鶏肉を食べることが正解だったように思えます。今回の食事の栄養バランスを考え食べている選手は少なかったように感じます。

また、レース時に力を発揮するのに一番大切なアミノ酸。今回の食事では柑橘類の食べ物がほとんどありませんでしたので、サプリメントから摂取する必要がありました。身近なものでアミノバイタルがありましたが、摂取している選手は少なかったです。

僕自身の主観的な意見に過ぎないためまだまだ改善する点は沢山あると思います。

## 選手 茨 隆太郎

### 1. 当初の目標（自己目標）

- ・複数の金メダル獲得（200m・400m 個人メドレー）
- ・800m フリーリレーでの金メダル獲得
- ・200m 背泳、50m バタフライ、400m フリーリレー、400m メドレーリレー、400m 混合メドレーリレーの5種目での表彰台圏内

### 2. 結果に対する評価

台北、ソフィアに引き続き、3度目の出場となりましたが、前回の大会を上回る6個のメダルを獲得することができたことは素直に嬉しい限りです。しかし、4年に1度の瞬間に全てを賭けるためにここまでやってきたという自負があっただけに、大事なレースで本来の持っている力を出し切れず、悔いの残る結果となってしまいました。その敗因としては、開幕直前に、ストレスやプレッシャーによる身体の変化により、心身ともにいいコンディションで臨めなかったことです。少しでも大きな不安をできるだけ取り除くようにと努力したつもりですが、それでも不安が消えることはありませんでした。今回の大会では、万全の準備をしてきたにも関わらず中途半端なレースで終わってしまい、4年に1度の最高峰の舞台で全ての力を出し切ることの難しさを改めて痛感しました。

### 3. 今後の課題

4年後のデフリンピックを見据えて、大舞台で圧倒的な力を発揮できる強靱な心身を養っていく4年間にしていきます。まず、日々の練習から全ての力を出し切ったと思えるような練習を着実に積み重ねていく必要があると思っております。

また、競技で結果を残すだけでなく、デフリンピアン当事者としてデフリンピック普及活動に努めて参ります。現在、大学院で「デフリンピアンへのデフリンピックに対する価値意識」について研究しており、当事者の1人1人がデフリンピックの存在意義やスポーツの価値を正しく理解した上で、社会に啓発することが重要であると感じています。自分の研究に自分で責任を持って、デフリンピアン同士での結びつきを強めていく手助けをしていきます。

## 選手 金持 義和

### 1. 当初の目標（自己目標）

前回のデフリンピックでは金メダル1個、銀メダル2個を獲得しましたが、自分としては100m、200m背泳ぎで負けて悔しい思いがありました。今回のデフリンピックでは、個人種目の50m背泳ぎで世界新記録を出して金メダル、さらに100m、200m背泳ぎで金メダルを獲得することです。

また、今回では男子がリレーを組むことができたので、800mフリーリレーで金メダルを獲得することを目標としました。

### 2. 結果に対する評価

今回のデフリンピックでメインであった50m背泳ぎが銅メダルで終わりました。今回の敗因は、プールの水温の低さ、試合の流れ、そして会場の雰囲気。初日であったため慣れないのがあって、いつも通りのレースができませんでした。また、1月に交通事故に遭いむち打ちになり、3週間の休養がありました。デフリンピックまであと少しのところまで不運の事故に遭ってしまい、デフリンピックまでの大会のタイムは納得といくところまで来ていませんでした。大きな不安が残ったままレースに出た結果が今回の結果です。しかし、初日のレースで不安が消え、会場の雰囲気に少しずつ慣れていきました。また、リレーに出場することで楽しい水泳を取り戻りつつ、いつも通りのレースができ、後の100、200m背泳ぎではベストに近いタイムに近づけることができました。特に200m背泳ぎでは、これまでのレース展開では前半の100mは1分1秒で、後半は1分6～7秒で後半のタイムが落ちていくのがいつものレース展開でしたが、今回は前半の100mが1分3秒、そして後半は1分4秒でした。これまでにないレース展開で、驚きました。

### 3. 今後の課題

4年後のデフリンピックで金メダルを持って帰ることを目標にしているので、それを成し遂げるためには聞こえる人の日本選手権やジャパンオープンに出場することが絶対条件です。今回のレースを振り返って練習に取り組みたいです。

## 選手 津田 悠太

### 1. 当初の目標（自己目標）

「個人種目でメダルを取る」  
「800mリレーで金メダルを取る」

### 2. 結果に対する評価

今回のデフリンピックは初出場となりましたが、3種目のリレーでメダル獲得という結果を残すことができ、非常に嬉しく思います。しかし、当初の目標であった「個人種目でメダルを取る」「800mリレーで金メダルを取る」この2つの大きな目標は達成することができませんでした。理由として、慣れない国際大会で緊張してしまったこと、そして外国人選手の身体の高さに圧倒されてしまい、心で負けてしまったこと、この2つが挙げられます。

### 3. 今後の課題

改善策として、世界水泳等の国際大会で孫陽選手やラースロー・シェー選手などといった外国人選手の泳ぎをしっかり観

察して、外国人の泳ぎをよく知るといえることをしたいと思っています。自分の泳ぎだけを見るのではなく、他の人の、特に外国人の泳ぎを見ることで、何m地点で失速しやすいのか、何m地点で加速してくるのか、ということが分かってくるはずです。そうして、相手の弱点をついたレースができるようになりたいと思っています。

今回のデフリンピックの目標は、あえて今回と同じ目標、「個人種目でメダルを獲得する」「800m自由形リレーで金メダルを獲得する」この2つにしたいと思います。さらにそれに加え、「サムスンデフリンピックの時の自分を精神面で超える」という目標も掲げます。

デフリンピックで結果を残すことも大切にしたいと思いますが、デフリンピックを人間として成長していける場にもしたい。それが、自分の1番の目標です。

## 選手 星 泰雅

### 1. 当初の目標（自己目標）

- ・50m自由形でセミファイナルに残ること。
- ・100m自由形で56秒台を目標。
- ・リレーで決勝メンバーになり、メダルをとること。
- ・日本チームに少しでも貢献できるようにすること。
- ・最低でもベスト更新すること。

### 2. 結果に対する評価

今回のデフリンピックでは、個人としては何とも言いえない結果でした。日本ろう者水泳協会に入って、初めてのデフリンピックであり、初めての国際試合でもあったので、今まで出場した大会の中で一番緊張しました。レース直前体が固まってしまう、良いタイムを出せない時もありました。個人では、ベストタイムを出しましたが、目標タイムには届いていなかったため、複雑な気持ちもあり、水泳を辞めなくなった時もありました。しかし、監督や家族や先輩、色んな人達から励ましの言葉を頂き、今回のデフリンピックはこの結果であることを受け止め、次に向かって頑張りたいです。リレーでも、納得のいかない部分もありました。飛び込みが一番だめでした。引き継ぎの練習の時は問題なくできましたが、いざ本番になると緊張しすぎて綺麗に飛び込めることができませんでした。それでも予選では、しっかり決勝上位に貢献できたのでよかったです。その結果3種目とも3位以内に入賞することができ、予選で頑張ってくれた選手にもメダルが貰えると初めて知り、メダルを貰えて嬉しかったです。次は、決勝でメダルを獲得するように頑張りたいです。

### 3. 今後の課題

課題としては、たくさんあります。まず、体を大きくすることです。自分の周りの選手達を見た時、体が大きく、泳ぐ時もしっかり前に進んでいることがわかり、隣のコースで泳いだ時に波がすごく、自分が進まないことがわかりました。そのため、練習後のプロテインは毎日欠かさずに飲むこと、トレーニングセンターで筋力トレーニングを意識しています。

次に泳ぐ時のフォームです。泳ぐ時、真下を見て泳ぐと水の抵抗が受けにくいのですが、自分は前を見て泳ぐため水の抵抗が受けてしまい前に進まないこと、呼吸する体がぶれてまっすぐに泳げてないことがあります。改善法として、まずシュノーケルを使って、真下を見て泳ぎ、呼吸の時に体がぶれてしまうので、体幹を鍛えるようにします。

2年後には、アジア大会、世界選手権があるので、そこで良いタイムを出せるようにしたいです。

## 選手 藤川 彩夏

### 1. 当初の目標（自己目標）

今回がデフリンピック出場3回目で、4年前のソフィアデフリンピックでは満足しないまま終わってしまいました。今回のサムスンデフリンピックでは専門種目100mバタフライで2年前の世界大会で出した自己ベストより世界新記録を出し、メダル獲得して満足できる結果にすることが目標でした。

また、日本代表女子キャプテンに就任して2年目、チームの目標を作りたく、400mメドレーリレーで8年前の台北デフリンピックの日本新記録を超えることを目標としました。

### 2. 結果に対する評価

個人で出場した3種目の50mバタフライだけ日本新記録を出すことができました。しかし、予選では銅メダル獲得の可能性もありましたが、決勝でスタートを失敗して5位になってしまいました。個人目標だった100mバタフライでは自己ベスト+1秒だったので、もし自己ベストが出せればメダル獲得できたはずと思い、悔しかったです。200m個人メドレーは、元々専門種目でしたが想像よりレベルが高くなり、予選落ちしてしまいました。

リレーでは女子400mメドレーリレーで8年ぶりの日本新記録を出し、400mフリーリレーも今までの順位より上がってきたので少しメダル獲得へ近づいたと思いました。また混合400mメドレーリレーは2年前の世界大会から始まり、同じメンバーがデフリンピックで日本新記録を出して銅メダルを獲得することができて良かったです。しかし、団体4種目とも自己ベストより悪かったり、個人種目も同じように前半の泳ぎより後半の泳ぎが遅かったところが課題だったと思います。

### 3. 今後の課題

3回目のデフリンピック、今までの練習の成果を出して目標を達成できたもの、できなかったもの、バラバラでした。大学に入って新しい環境に入ったおかげで今までのデフリンピックの課題を磨いてきましたが、今回は前半の泳ぎより後半の泳ぎが遅かったことでタイムが悪かったこと、コンディションを整えなかったことを課題として今後磨いて良い結果になるようにしたいと思います。支えてくれた家族や大学の水泳部・監督・コーチ・支援スタッフに感謝です。ありがとうございました。

## 選手 久保 南

### 1. 当初の目標（自己目標）

- ・50m平泳ぎでメダルを獲得すること。
- ・100m、200m平泳ぎでは前回のデフリンピックの順位より上がること。
- ・全種目もベスト出すこと→50m平泳ぎは34秒台を出すこと、100m平泳ぎは1分15秒台出すこと、200m平泳ぎは2分45秒を切ること。
- ・女子メドレーリレーでは日本新記録を破ること。
- ・ミックスメドレーリレーではメダルを獲得すること

### 2. 結果に対する評価

結果、個人種目ではメダル獲得できませんでした。しかし、全種目で自己ベストを出し、アジア新を出し、順位も前回のデフリンピックより上がっていました。全体的には目標を達成できていたので良かったと思います。一番良かったのはミックスメドレーリレーで銅メダルを獲得できたことです。リレーですが、個人で泳いだタイムが1分15秒を出せていたのでいい泳ぎができていたと思います。私はしばらくの間タイムがなかなか伸びませんでしたが、練習方法を変えたらタイムが伸びてきました。自分に合った練習方法を見つけていくことが大切だと感じました。そのおかげで、デフリンピックでいいレースができていたと思います。

### 3. 今後の課題

やはり短距離なのでパワー不足だと感じました。みんなと比べてとてもパワーが足りないように感じたので、もっと筋力肥大するべきだと思いました。ウエイトの回数を増やしていきたいです。フォームは前より改善したのでいいと思いますが、完全にいいフォームとは言えないのもっとフォームについて研究し改善していきたいです。

## 選手 齋藤 京香

### 1. 当初の目標（自己目標）

日本代表に選出された当初の私の目標は「最高のレースをし、メダルを獲得すること」でした。しかし、デフリンピックまでの数か月間、いくら練習を頑張っても一般の大会では自己ベストには程遠いタイムしか出せず、周りが『デフリンピック出場!』と盛り上がっていく中で、私は段々とプレッシャーを感じるようになっていきました。最終的にメダル獲得を目標に掲げることはできませんでしたが、「全種目でベストを更新、決勝に残ること」を目指して頑張りました。

### 2. 結果に対する評価

水泳競技は前半3日、後半3日、間に1日オフの全7日間で行われました。最初のレースは800m自由形。決勝に残ることはできませんでしたが、予選、決勝共にベストからは程遠いタイムに終わりました。一本目から目標を達成する事ができず、落ち込んだまま臨んだ200m個人メドレーも予選落ちという結果に終わってしまいました。「ここまで来て、自分はなんて情けないのか」と落ち込みました。その一方で先輩達は次々と大会記録を更新し、メダルを獲得していきました。その表彰台に上る先輩達の姿を目にし、「このままでは絶対に終われない」と気持ちを切り替えることができました。後半戦、400m個人メドレー決勝でほんのわずかベストを出し、その後400m自由形では予選、決勝共にベストを更新し、今大会最高の4位に入賞する事ができました。個人種目最後のレースを良い形で終わることができて嬉しかったです。

### 3. 今後の課題

先輩たちの活躍を見て、やはり自分も「絶対にメダル!」という気持ちが強くなりました。4年後の大会でメダルを獲得するには、苦手種目の克服と怪我をしないための体づくりが必要不可欠と考えています。また、高校卒業に伴い練習環境も今までとは変わっていきます。練習への意識をしっかりと持ち、どんどん高くなっていく世界のレベルにおいて行かれないよう、自

分に厳しくあり続けたいと思います。

## 選手 中東 郁葉

### 1. 当初の目標（自己目標）

- ・100m 背泳ぎは、01' 10' 00 を切り自己ベストを出し、日本新記録を出すこと。
- ・200m 背泳ぎは、自己ベストを更新して日本新記録、そして3位以内に入賞すること。
- ・400m 個人メドレーは、ベストタイムを出すこと。
- ・800m 自由形は、10' 00' 00 を切り8位以内に入賞すること。
- ・女子 100m × 4 メドレーリレー・女子 100m × 4 フリーリレーでは、8年前の日本新記録を4人で破ること。
- ・男女混合 100m × 4 メドレーリレーではチームに貢献できるように頑張ること。
- ・世界のろう者の方々と世界共通の手話でたくさんコミュニケーションを取りたい。

### 2. 結果に対する評価

200m 背泳ぎ以外は予選を突破することができませんでした。ベストタイムもしくはそれに近いタイムではありますが、世界のレベルを目の当たりにしました。200m 背泳ぎでは自己ベストを出し、6位入賞することができました。世界のレベルが向上していることからメダルを取るためには、国際レベルのタイムまで引き上げる努力が必要だと思います。初めて世界大会に出場することで、世界レベルを体感することができました。今後自分の目標設定を見直す必要があります。

### 3. 今後の課題

今後は以下2つの自己目標を設定し、2019年ユース・デフリンピック、世界大会、アジア大会に向けて、練習にしっかり取り組み、自己管理していきます。

1. 目標とするタイムを定めること。
  2. 体幹をしっかり鍛えて、フォームを見直すこと。
- 海外での環境、食事、体調管理について、自己管理できるように経験を積んでいきたいです。

## 卓球競技チーム

## 団長 大平 静也

### 1. 選手の選考基準・方法

連盟の派遣基準を基に、監督より男女3名ずつエントリーする提案を頂きましたが、日本ろうあ者卓球協会理事会にて協議した結果、女子3人のみを派遣させることに決定しました。混合ダブルスも入れてほしいとの要求もありましたが、前回のデフリンピック結果を含め、現在の男子の実力は前回以上のレベルに達しておらず、まだ厳しい状況であると予測できました。3月のハンガリーオープン大会に参加した際には、男子は最盛期を過ぎたベテラン選手（欧州）に全く歯が立たず惨敗でした。（全日本ろうあ連盟派遣基準）

- 1) 2016年開催予定の世界選手権大会でシングルス・ダブルスベスト4以上の選手
- 2) 2015年第8回アジア太平洋ろう者競技大会でシングル

ス・ダブルス2位以上の選手

- 3) 以上の選手を日本ろうあ者卓球協会の管理する2016年度ランキングで上回る選手  
(日本ろうあ者卓球協会の推薦基準)

- 1) 世界ランキング5位以上
- 2) 国際大会での実績がある者
- 3) 第39回全国ろうあ者卓球選手権大会優勝者  
※但し1)、2)を満たすものが優勝した場合は、強化部推薦とする。

### 2. チーム体制と各コーチの役割

監督、総合コーチは強化部からそのまま派遣し、手話通訳は大倉総合コーチ専用としました。団長は、以下の理由により、日本ろうあ者卓球協会の代表、団長としてスタッフを派遣することに決定しました。

前回のブルガリア大会では、スタッフ全員が聞こえる人で、他競技より情報発信はあまり無いため、連盟の広報担当に頼るしかありませんでした。TD会議では聞こえる人の発言は認められず、ろう者のみ発言質問できるルールだったため、選手を出席させるなどの負担がありました。（しかし国際手話もできない）その他、色々な問題があり、これらの反省からスタッフにろう者も参加させるべきと判断しました。

### 3. 成績

女子団体	銅メダル
女子ダブルス	銅メダル
女子シングルス	亀澤・川崎 ベスト16 (予選リーグ1位通過) 高岡 ベスト32 (予選リーグ2位通過)
混合ダブルスの出場	無し

### 4. 成績と評価

目標：メダルを1個以上獲得すること。

今大会は予想より全体レベルが上がっていたため、厳しい状況でしたが、競技規則の変更があり、銅メダル2個を獲得できました。

### 5. スケジュール

出国	7月16日
公式練習	7月17日～19日
開会式	7月18日
TD会議	7月19日
女子団体	7月20日～21日
TD会議	7月22日
女子ダブルス	7月24日
女子シングルス	7月25日～27日
閉会式	7月30日
帰国	7月31日～8月1日

### 6. 大会の競技運営などの報告

・卓球会場  
ITTFルール通り準備できていると通知はありましたが、コートは日本ではあまり見られない明るい水色の樹脂で塗られていました。公式練習時、窓から日差しがあり、プレーに支障が出るほど不評でした。その後、大きなポスターが貼られており、単なる工事の遅れのような感じでした。体育館は製氷器の取り付け工

事中でしたが、途中で中止されたため、選手村の部屋にある冷蔵庫で毎日氷を作る羽目になりました。ビジョンボックスがなく、テクニカルディレクター、トルコ審判長に確認するなど、混乱しました。4日目のダブルス戦になってようやくビジョンボックスが設置されました。シングルス予選リーグ終了後、テクニカルディレクター、トルコ審判長の決勝トーナメントの組み合わせ確認に大変時間がかかり、試合時間になっても組合せがなかなか決まらず、1時間遅れるハプニングがありました。組合せ発表後にすぐに試合開始となりました。

また、最後になって男子シングルス表彰式にてチャイニーズタイペイオリンピック委員会旗があがるべきところ、違う旗があげられたというハプニングがありました。そのため、大会公式YouTubeからシングルス戦決勝戦がカットされ、その後復活しています。

#### ・TD会議

トルコ卓球連盟は世界大会などの国際大会開催の経験不足から十分な準備ができておらず、プロジェクターが故障したまま第1回TD会議が進行されました。

団体戦のみの会議であるため予定時間より早く終わりましたが、翌朝会場へ行くと、急遽TD会議があると呼び出され、女子団体にインドがエントリーしていたにもかかわらず、予選リーグ戦に入れるのを忘れたというお粗末さでした。女子団体に出場する他国の承認を求められましたが、最終的に日本チームが入っているリーグで組み合わせられました。TD会議でリーグ戦に入っていないことをインドがすぐ気付いて抗議すべきです。翌日になって追加させることはオリンピック、他世界大会では認められないはずです。

また、公式試合ボールについて、競技規則ではニッタク社ボールのみ使用と書いてあったので日本しか作っていないはずと思い込んでいましたし、日本では日本製しか売られていないのに、TD会議ではニッタク社（中国製）と示されました。しかし試合当日になってみると、ニッタク社（日本製）になっていました。ヨーロッパ勢から苦情が出て、ロシアから図々しくも数個ボールを提供するよう求められましたが、拒否しました。ロシアから強く非難されましたが、このような行為は困ります。

2日目朝、TD会議があると呼び出されて行くと、公式試合ボールについて結局日本製だったのでお詫びがあり、TD会議が始まりました。ただ、テクニカルディレクター、トルコ審判長がITTFルールを熟知されているとは思えない進め方で、組み合わせ紙をその場で切ってトルコ審判長が抽選しましたが、各国も訳がわからないままの進行となりました。途中、監督が抽選の途中結果を見てITTFルール通りに行われてないことが分かりました。しかし、監督は発言の権利が無く、ろう者である私を通せば抗議できました。結果、組み合わせをやり直すことになり、スムーズに進む様子もなく、8時間もかかるTD会議となりました。

TD会議の進行が非常に遅れているという情報が入ったICSD副会長が進行状況を見に来ました。すでに5時間経過しているため、急遽、昼飯、飲料水の手配を地元スタッフに命じられたほど、異常なTD会議でした。もし私ではなく、選手だったら大変な負担になったはずですが、テクニカルディレクターとしてはもう失格です。

## 7. 競技規則の適用

#### ・ラケットコントロール

ITTFルールでは、ラバー厚などチェックすべきでしたが、実際はラケット袋に入れただけでアバウトな対応でした。

#### ・ドーピング検査

シングルスでのベスト4以上に実施されました。

日本選手は実施無し。

#### ・公式ボール

競技規則が不明確でTD会議の公示にも相違があり、混乱しました。

#### ・補聴器装着違反

会場内にて補聴器装着は違反となりますが、観客席、ロビーフロアにて平気で装着している選手が見られました。トルコ審判の認識不足と思われ、厳しくチェックされていませんでした。しかし、選手村入りする前に高岡選手、川崎選手は聴力検査を受けるように命じられました。その後、25日になって亀澤選手も聴力検査を受けるように命じられ、結局は選手全員が受けるはめになりました。何のためにICSD登録したのか分かりません。亀澤選手は3回連続出場していますが、今回で初めてでした。

## 8. 大会参加までの準備

#### 対選手

・4月～7月まで11回強化合宿を実施しました。大学生、強豪高校の生徒の練習パートナーとして組んで強化を図りました。また、監督の要求により5月からはほぼ毎週土曜日に強化合宿を行いました。

#### 対資金

・日本卓球協会からの補助金100万円

・毎日アスリート・パートナーズにて募金

・デフリンピック支援グッズ販売

・カンパなど

日本卓球協会（ミズノ）から50万円分のジャージ、ユニフォームを提供されました。

#### 対選手村

下見に行った他団体の情報から対策準備をしました。国内のホテルにあるような備品が無いので各自準備しなければなりません。また、大会対策として以下の通り準備しました。

・海外用電気ケトル購入

・ヨガマット

・スポーツ飲料、ミネラルウォーター等持参

・体重計

・ラケット検査器

・Wi-Fiルーター

・試合ボール多数

飲料の準備、写真撮影、ビデオ撮影、ツイッター等の発信を行いました。やはり準備は予想より大変でした。次回のデフリンピックは台北大会と同等とは言いませんが、1～2人スタッフを追加させるべきだったと思います。今回もトレーナーを帯同させることはできませんでした。当会に女子トレーナーが2人いますが、治安、政情不安のあるトルコへ行きたくないため、派遣させることはできませんでした。次回は是非、男子トレーナーを用意し、派遣できるように体制を準備したいと思います。

## 9. 総評

私は初めてデフリンピックに参加しましたが、色々な出来事があり、いい経験になったと思います。サムスンデフリンピック全体を見れば素晴らしかったと思いますが、ろう者が主催の

はずなのにトルコの政治家が目立ったことがあり、疑問が残りました。デフリンピックというイベントが巨大化すればろう者だけでは限界がありますし、政治家の力を使わなければ開催は不可能でしょう。日本でも同様と言えるかもしれません。日本が参加してない競技もあり、課題になるでしょう。射撃競技会場へ視察してみたら、出場していた韓国選手から何故、日本は参加しないのか？と質問されました。「日本は練習できる環境がなく、難しい。日本の法律ではろう者は射撃できるか分からない」と答えましたが、少し複雑な気持ちになりました。ちなみにその韓国選手は金メダルを3個獲得していました。

今回のデフリンピックは男子選手も派遣させたいので、海外遠征を増やして経験を積ませてあげたいと思います。まず国内でもある程度のレベルまで鍛えてあげる必要があります。

今回デフリンピックまで各選手を鍛えあげ、メダル獲得まで至った須藤監督、大倉コーチらに感謝したいと思います。ありがとうございました。

## 監督 須藤 聡美

### ①選手の選考について

連盟の派遣基準を基に、日本ろうあ者卓球協会と協議し女子3人のみをエントリー

(全日本ろうあ連盟派遣基準)

- 1) 2016年開催予定の世界選手権大会でシングルス・ダブルスベスト4の選手
- 2) 2015年第8回アジア太平洋ろう者競技大会でシングルス・ダブルスベスト2の選手
- 3) 以上の選手を日本ろうあ者卓球協会の管理する2016年度ランキングで上回る選手

(日本ろうあ者卓球協会の推薦基準)

- 1) 世界ランキング5位以内
  - 2) 国際大会での実績がある者
  - 3) 第39回全国ろうあ者卓球選手権大会優勝者
- ※ただし、1)、2)を満たすものが優勝した場合は、強化部推薦とする。

### ②成績一覧

女子 団体 第3位 (銅メダル)  
ダブルス 第3位 (銅メダル)  
シングルス 亀澤・川崎 ベスト16  
(予選リーグ1位通過)  
高岡 ベスト32  
(予選リーグ2位通過)

※男子種目、混合ダブルスの出場は無し

### ③成績と評価

前大会で金メダルを獲得した上田選手が引退し、3選手で臨んだ大会でした。今大会のレベルの高さ、現状の選手の環境を考えると2つの銅メダルを獲得できたことはとても良かったと感じています。次の世代に繋ぐことができ、大変安堵しています。

### ④チーム体制と各コーチの役割

団長→事務局長がなぜデフリンピックでは団長になったのか、なぜ卓球だけが団長を設けたのか不明です。今後はチームの

指示系統を明確にするためにも、卓球競技も連盟の選手団編成に基づいた組織を形成された方が良いと思います。

飲料の準備、写真撮影、ビデオ撮影、ツイッター等の発信を担当いただきました。日本で応援くださっている方々にリアルタイムで情報を届けることができました。

コーチ→1983年世界卓球選手権東京大会でダブルス3位の功績をもつ大倉コーチに強化合宿等で指導をお願いしていました。今回ダブルスで銅メダルを獲得できたのは選手の頑張りはもちろんですが、ベンチを大倉コーチに担当いただいたことが大きかったと思います。東北福祉大学へ度々練習に行かせていただき、中国遠征や練習試合の相手などの調整等もしていただきました。

手話通訳→手話通訳、本部やトレーナーとのやり取り、体調管理を担当してもらいました。通訳の井出様は強化合宿から帯同されていたので選手からの信頼も厚く、意思が伝わり易かったです。1分間しか認められていないベンチコーチの手話通訳、ミーティングでの技術論が選手にスムーズに伝わっていました。強化合宿中から通訳より雑務等の仕事の方が多かったと思いますが、いつも選手を想い、快く自発的に動いてくださっていました。選手・スタッフの精神的支えでした。

### ⑤競技スケジュール (旅行スケジュール)

出国 7月16日  
女子団体 7月20日、21日  
女子ダブルス 7月24日  
女子シングルス 7月25日、26日、27日  
帰国 8月1日

選手村から競技会場まではバスで30分程度でした。バスの時刻表などはなく、大会ボランティアとの交渉で行き先が決まるため、早め早めの行動を心がけました。

### ⑥大会の競技運営などの報告

#### 1) TD会議

ITTFルールを熟知されているとは思えない進め方でした。個人戦の抽選は時間を超過して行われ、プロジェクターが故障した状態で組合せが進められており、不安に感じてリーグ表を覗きに行ったところ不備を発見し、他国と連携して抗議した結果組合せがやり直しとなりました。

女子シングルの決勝トーナメントは試合時間になっても組合せが決まらず、開始時間が遅れたため組合せ発表後にすぐに試合開始となりました。また、予定された日程以外に会議が急ぎ開催されることもありました。

#### 2) ドーピング検査

シングルスでのベスト4以上に実施された模様です。日本選手には実施されませんでした。

#### 3) 待ち時間

1日1、2試合しかない日もあり、待ち時間も長くゆったりとしたタイムスケジュールでした。

### ⑦競技規則の適用

審判によって対応に差がありました。ラケットコントロールが厳正に行われていたか疑問です。試合前の集合時間も常に変動がありました。(1時間前集合、30分前、15分前など)

また、使用球が日本製なのか中国製なのか情報が錯そうし、結果日本製が使用されるという紆余曲折がありました。選球、ユニフォームカラーのチェックは行われていました。

## ⑧大会参加までの準備期間

2017年1月～4月はオープン大会に積極的に参加しました。練習試合とは違い、大会に参加することで試合感覚を磨きました。その中で東京選手権大会（全国大会）はデフリンピックを想定した準備のため、タイムテーブルに合わせたアップなどを行い、大きな会場でのボールの弾み方や身体感覚を理解していきました。

5月からはほぼ毎週土曜日に強化合宿を行いました。これは以下の理由からです。

- ・継続的に選手の様子がわかり、強化ができる。
- ・社会人の選手が日曜日に休めるので疲労が溜まらず、平日と土曜日の練習が万全の状態で行える。
- ・東京近郊で行った場合、日帰りで通える選手・スタッフが多く、宿泊費が抑制できる。

聞こえる選手との積極的な練習を行い、様々な戦型に対する対応力を磨き、試合後にはアドバイスをいただき、戦術の学習も行いました。合宿には牧山コーチも帯同され、練習パートナーや指導を務めていただきました。

### 3) ルールの熟知

ITTFルールを理解するため、日本卓球協会が発行しているルールブック、ITTFのHP、世界大会での抽選の動画などを繰り返しチェックしました。デフリンピック大会ルール、卓球競技ルールは暗記できるように何度も読み返しました。

### 4) 母体への挨拶

合宿参加、大会派遣のご理解とご協力を賜るため、所属企業や監督へ挨拶を行いました。

## ⑨反省・まとめなど

初戦のトルコ戦で良い戦いが出来ました。各選手が緊張していながらも、我慢強い試合で快勝してくれました。デフリンピック初出場の高岡キャプテンはチームをまとめながら、特に中国戦で素晴らしい戦いをしてくださいました。次の日の団体戦に繋がるベストの試合でした。

亀澤選手は抱えていた大きなプレッシャーを感じさせないほど明るく振る舞い、周りへの気配りも忘れず、試合では全力を出し切ってくれました。

川崎選手は丁寧な試合運びで粘り強い卓球をしてくださいました。女子ダブルスでギリギリの勝負を勝ち切ったのはコミュニケーションを深める努力をし、強化合宿以外でもお互いに時間を調整しながら練習を重ねてきた成果だと思います。大会が近づくにつれ、コミュニケーションを図る様子が増え、動きがスムーズになっていきました。高岡選手、亀澤選手の2人が社会人選手であり、退勤後や休日を活用して努力を重ねていました。大学生である川崎選手も練習時間の他にランニングなど自主的に活動していました。私が何より嬉しかったのは、最高のパフォーマンスがこの大舞台で発揮されたことです。持っている力、練習してきたものが全て出し切られた試合を見て、選手の心の強さを感じ胸にこみあげるものがありました。

### (医科学委員会)

大会には帯同できませんでしたが、医科学の皆様のサポートはとても大きく、強化合宿には毎回帯同いただきました。ウォーミングアップ、クールダウン、トレーニング等、練習中は常に選手の動きを注視されており、安心して強化を進めることができました。強化合宿以外でも普段のトレーニング指導、トレーニング状況の把握、ケガや薬、身体の事など献身的にサポートいただきました。

また、毎年体力測定を実施し、選手が自分の身体を数値で把握して課題を見つけ、日頃のトレーニングに繋げる機会となりました。デフリンピックでは硬い床でしたが、誰一人怪我無く終えることができました。

メンタル講習も行い、試合に臨む心得やスタッフの悩みまでアドバイスをいただきました。

栄養講習では普段の食生活のアドバイスや海外遠征時の食事の注意点などを指導いただきました。多くの方の支えがあったからこそ獲得できた2つの銅メダルです。

### (世界の技術レベル)

ミスの少ない堅実な卓球や、変化からの速攻など持ち味がある選手が強かったです。上位の選手は体勢が崩れにくく、戻りが早い。相当な練習量を感じました。

### (派遣スタッフ)

予想通り、個人戦では同時進行があり、監督、コーチ、手話通訳を派遣できたことで必ずベンチコーチがいる状況を作ることができました。TD会議は国際手話が進むため、もっと国際手話に通じる人材が必要と感じました。今回のように主催者側がルールを熟知されてない場合、頻繁に各国から国際手話での発言がありましたが、基本的に聞こえる人の発言は認められないため、会議中に抗議や質問ができて内容を把握できる国際手話通訳者もいればもっと良かったであろうと考えます。

また、各国との輪を繋ぐことで情報が得ることができるので、交流の意味でも必要と感じました。

### (男子の派遣)

2016年に開催された世界ろう者卓球選手権大会に日本はテロの影響により大会直前に派遣中止となりました。アジア大会の結果では派遣基準を満たしておらず、また、デフリンピックにはメダルの可能性がある競技者のみを日本代表として派遣するとなっているため、度々男子出場の要望を出しても今回の派遣は認められませんでした。昨年の状況では派遣中止の決断は理解できます。しかし、強化合宿等で一生懸命練習してきたのにもかかわらず、社会情勢のため世界ろう者卓球選手権に出場できなかった選手の心情を思うと大変胸が痛く、今後の活躍に期待したいと思います。

### (今後の強化)

3選手の頑張りにより、3種目中2種目で銅メダルを獲得することができました。今後、より良い色のメダル、シングルスでのメダル獲得を狙うには選手の環境整備が必要です。前大会で金メダルに輝いた上田選手は強豪の日立化成で腕を磨いていました。実業団や強豪校など、普段の練習レベルが高い中での訓練がメダル獲得には不可欠になってきます。大倉コーチとも話しましたが、技術面だけでなく、戦術・戦略面の研究も必要です。日本選手は全員同じ戦型だったので、左利きやカット主戦型等がいるとオーダーも読まれにくくなり、他国も対策が取りにくくなると思います。技術面では相手よりも一本多く返せる基礎力の徹底やサービスの正確性が求められ、特に早く出したいサービスが台から出た場合は確実に先手を取られてしまうので、3球目に繋がるサービス強化を日々継続して行くべきです。

また、若手の発掘、強化も大切であると考えます。

### (まとめ)

女子選手3名のみという、1人でも欠けたら団体戦が戦えな

い状況での参加でした。前大会よりもレベルは明らかに上がっており、強豪国はメダル獲得に命をかけておりました。その気迫に動じることなく自分の練習の成果を出し切ることに集中した選手たちを誇りに思います。強化合宿では多くの企業、学校に練習試合をお願いしており、聞こえる方々にデフリンピックを知っていただく機会になりました。今後、ますますデフ卓球、デフリンピックの知名度が上がり、選手の練習環境が良くなることを心から願っています。耳が聞こえても聞こえなくても、卓球が強くなりたいアスリートとしての立場は同じです。今後も聞こえる人、ろう者の括りではなく、お互いに協力しあいながら共に頑張り、メダル獲得を目指す関係を築けたら良いと思います。

前任の佐藤監督から引き継いだバトンを次の世代にどうすれば繋ぐことができるのか、どう強化すればメダル獲得という結果を残せるのかを常に考え、もがき挑戦し続けた4年間でした。日の丸を背負い、選手の人生に携わった責任をとるとても重く感じておりましたが、多くの方々の温かいご指導とご協力のおかげでここまで来ることが出来ました。皆様に支えていただいた4年間でした。何より最高の選手たちに恵まれ、強化合宿での頑張りを目にすることができ、デフリンピックでのメダル獲得という素晴らしい瞬間を共有することができたことは私自身の大きな財産となりました。お世話になった多くの方々に厚く御礼申し上げます。

今回のデフリンピックでは男女とも出場し、世界で勝てるように日本ろうあ者卓球協会のご活躍も心から祈っております。長い間お世話になりました。ありがとうございました。

## コーチ 大倉 峰雄

### 1. 自己の役割とその評価

私は、日本代表チームのスタッフ（卓球総合コーチ）として、初めてデフリンピックに参加しました。4年前にコーチ就任してから日本チームの目標であるメダルを取ることが、私に課せられた役割でした。この4年間に国内で強化合宿や選手・スタッフ間のミーティングを何度も行い、選手自身がデフリンピックに対する意義を深く理解し、士気を高める姿勢を作り、最終的に選手とスタッフ全体の目的意識を明確にして大会に臨むことができました。そのことが大会の好成績につながったものと考えられます。結果的に女子団体と女子ダブルスで2つの銅メダルを獲得することができました。ひとえに選手自身の努力とスタッフ全員との信頼関係が築かれたおかげだったと言えます。また、選手たちの力を最大限に発揮できたことによって、日本ろうあ者卓球協会をはじめ、応援に来てくださった方、練習相手をしてくれた大学生、そして選手の体調管理やパフォーマンスを維持管理してくれたトレーナーやお互いの意思疎通を図るために懸命に手話通訳をしてくださった方に心から感謝しています。

コーチとしての私の役割は、選手個々の技術力の向上、日々の練習への取り組みを通じての調子のチェック、そして試合中における臨機応変な戦術運用などが主なものになります。何よりも大切なのは、監督とのコミュニケーションを十分に図りながら、チーム一丸になって戦うことが勝利に導く第一の要因だと考えていました。客観的な評価をしてみると、今回のチームは技術的にはまだまだ未成熟な状態でありましたが、スタッフ全員が自分の役割を果たした総合力で手に入れたメダルだったと言えるでしょう。

## 2. 今後の課題

今回の大会は、世界でもトップレベルの技術を持っている選手が集まり、結果的にみると中国がすべての金メダルを独占しました。具体的な戦術や戦略で分析してみると、わが国の選手と世界トップレベルの選手との間には、克服すべき課題がとて多く、技術的にも大きな差があります。わが国が金メダルを取る条件について想定してみた場合、必要な環境の整備、充実した設備の提供、合宿等を含めた練習時間、そして国際大会クラスに出場する経験を積みあげることなどが重要な課題と考えられます。

特に、卓球を通して生活をかける中国やウクライナの選手、若手を中心にした台湾や韓国選手の育成、ベテランの活躍を活かしたりトアニアやスロバキアやロシアなど、技術・体力・精神面において、わが国の選手の実情と比べると決して楽観的な状況ではないです。今後の課題として、金メダル獲得の目標を達成するためには日本ろうあ者卓球協会等を中心にした組織力の向上、聞こえる人の大会に積極的に参加する機会を設けて早い段階からの若手の育成が不可欠だと思います。選考された一人ひとりの選手が、自分の体力や精神力及び技術力のアップを図ると同時に、指導者養成研修の実施や研究体制の確立、スタッフのサポート体制の充実を図りながら、各々が自分の置かれている立場を自覚し、自分の役割を果たすことが何よりも優先されるべきだろうと考えています。こういう万全な体制づくりは、決して非現実的なことではなく、金メダル獲得は決して夢物語ではなくなるだろうと確信しています。

## 手話通訳 井出 敬子

### 1. 自己の役割とその評価

選手が実力を遺憾なく発揮できるよう、環境作りに努めました。職務は手話通訳ですが、チームスタッフとしての役割の比重が大きかったように感じます。

- 手話通訳としてのコミュニケーション保障
- ・チーム内（練習、試合、ミーティング）
- ・その他（他競技選手スタッフ、旅行会社、於成田空港）
- ・報道関係インタビュー

- チームスタッフとして
- ・メディカルスタッフとの連携
- ・本部との連携
- ・補食の調達
- ・練習時の球拾い
- ・TD 会議出席

監督、コーチの通訳時には卓球の専門知識が不可欠となりますが、前回デフリンピック（2014年）以降、強化合宿39回と国際大会2回 合計101日間にほぼ全て帯同してきました。その都度、確認や修正を積み重ねてきたので不安はありませんでしたが、試合中のアドバイスは1分間と限られた時間なので、必要に応じて整文しなければならずとても緊張します。今回のデフリンピックでは、日本人選手参加の団体戦、ダブルス戦、シングルス戦の総数20試合中14試合に手話通訳としてベンチ入りしました。

大会期間中、一番神経を使ったのが選手スタッフの体調管理でした。本部メディカルチームと各競技団体トレーナーまたは

メディカル担当者のML（メーリングリスト）において、体調不良者、けが人がいるかどうかを毎朝8時までに書き込み、気になることがあるときは個別に本部トレーナーの指示を仰ぎました。MLを使って本部トレーナー、ドクター、また、他競技担当者からの情報提供もあり、水や氷、ドーピングコントロールなど、大事な現地の情報を共有することができました。さらに、「競技会場内のメディカルルーム、救急対応について確認を」とアドバイスいただき、試合が始まる前に卓球競技会場メディカルスタッフと十分なコミュニケーションを図ることができ、万が一の不安に備えることができました。このようなサポートはとても心強く、周到な準備をもって臨むことができました。

## 2. 今後の課題

デフスポーツにおける手話通訳者は人数も少なく、それぞれが現場で孤軍奮闘しています。今大会では、空手、自転車、女子バレー、男子バレー、卓球競技が手話通訳者を帯同していました。卓球競技に限っては、試合中のベンチに手話通訳がついたのは韓国と日本だけです。このような情報も含めて、今後、手話通訳者同士の情報交換、横の連携が急務ではないかと考えます。「スポーツ活動における手話通訳者意見交換会」が連盟主催で2011年2月6日に開催されました。以降、回が重ねられることはありませんでしたが、デフスポーツにおける手話通訳者の仕事、身分保障、そもそも仕事なのか、ボランティアなのか等、丁寧に検証、整理していく取り組みは必須です。ぜひ、デフスポーツ手話通訳者ワーキングチームの発足を求めます。

2016年トルコ、サムスンで開催された世界ろう者卓球選手権大会が直前のテロ等、社会情勢の不安から日本チームは派遣中止となった経緯があります。今大会のセキュリティスタッフは5300人とのことですが、とにかく怪我なく無事に、さらにはメダルを持ち帰ることができたことに心の底から安堵しています。メダルを！という周囲の期待とプレッシャーの中、全力で戦い「全てを出し切ったので悔いはありません」と笑顔で話してくれた3人の選手を、大変誇らしく嬉しく思います。

最後に、このような貴重な機会をいただいたことに深く感謝いたします。また、デフ卓球日本代表選手、及び日本ろうあ者卓球協会強化部の活動に対し、多大なるご支援、ご協力をしてくださった方々に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

選手 亀澤 理穂

### 1. 当初の目標（自己目標）

「気持ちを強く前へ！燃え上がれ！JAPAN！」というスローガンを決め、メダルをひとつでも多く獲得したい、またデフ卓球界だけでなく、デフスポーツ界への知名度を上げていきたいと考えました。

### 2. 結果に対する評価

団体戦は、4年前と同様、準決勝でウクライナと対戦しました。リベンジしたいという気持ちで試合に臨みましたが、残念ながら銅メダルで終わってしまいました。しかし、高岡と川崎は団体戦として試合に出るのが初めてにも関わらず頑張ってくれたので、最高のチームワークでした。

ダブルスでは、準々決勝でロシア選手に危なげなく4-3で勝ち、準決勝では中国選手に4-0で敗ってしまいました。結成してから約半年しかなく、正直不安や焦りはありましたが、

お互い言い合うように心掛け、練習に取り組んできたからこそ最高の銅メダルを獲得することができました。

シングルスは、決勝トーナメント2回戦で中国選手に敗れてしまいました。心技体が4年前と比べ厳しくなり、限界まで練習に取り組んでも追いつけず、残念と驚きの半分半分です。ただ、力を全て発揮することができたので、悔いはありません。

2年前にデフ卓球チームに復帰し、支えてくれた家族や応援してくれた日本の皆様のお蔭で2つのメダルを獲得する事ができました。またメダルを獲得したことで、新聞等取り上げられ、デフスポーツ界の知名度も上がってきたと実感しております。本当にありがとうございました。

## 3. 今後の課題

今後、デフスポーツ界の世界のレベルが更に上がり、今のままでは厳しい状態になるだろうと思います。現在、練習場所の確保や仕事への配慮など、取り巻く環境はまだまだ厳しい状況です。もっと多くの人々に知っていただくためには、メディア等もそうですが、各地域の講演会、デフスポーツのイベント等もっと設けるべきだと思います。またこれまでのやり方、あり方、考え方を見直し、成長が見える形を作っていく必要があると思います。

選手 川崎 瑞恵

### 1. 当初の目標（自己目標）

結果は、団体・女子ダブルスは銅メダルでシングルスはベスト16です。自分の目標は一つでも多くメダルを取ることだったので自分にとっては嬉しく、誇りを持って日本に帰ることができました。女子ダブルスをもっとコミュニケーションをとることが必要だと思い、何度も調整を重ねながら練習してきた結果なので良かったと思います。全種目において中国やヨーロッパを倒し、金メダルを獲得することはできませんでしたが、今まで4年間練習や合宿などやってきて、すべて出し切った結果が銅メダルだったので良かったと思います。4年前のデフリンピックにも出場しましたが、団体に出るのは今回が初めてです。今までアジア大会などに出場していましたが、デフリンピックの団体に出るのはとてもプレッシャーがあり、緊張感もあったので少し違う雰囲気でした。経験を積み重ねていけたので良かったと思います。

### 2. 結果に対する評価

今回デフリンピックに出場2回目となりますが、4年前に比べて若い人も増え、卓球の実力もレベルアップしていて驚きました。自分はまだ実力が足りないと感じました。初戦の団体の時はとても緊張し、自分の思うようにプレーすることができませんでした。今まで練習してきたことを全て出し切りましたが、まだ実力は足りないで次はいい結果を出せるようにしていきたいと思います。

団体も準決勝でウクライナに負け、4年前のリベンジが出来なく悔しいです。もっと細かい部分の練習が足りなかったと反省しました。これからもそこを意識しながら頑張っていきたいと思います。

最後にメダルを獲得できたのは、家族、仲間達、スタッフの支えがあったからです。または目の見えないところでたくさん私を応援してくださった方に大変感謝します。本当にありがとうございました。

### 3. 今後の課題

対応出来なかったプレーもあったので、そこを意識しながら練習して4年後はもっと良い成績を取れるように頑張っていきたいと思います。これから応援よろしく願い致します。

## 選手 高岡 里吏

### 1. 当初の目標（自己目標）

初めてデフリンピックに出るからには金メダルを目指したいと思い、今まで1セットとも取れなかった選手から何セットでも取れるよう意識しました。今後のために自信を付けられるよう、一球一球を集中するようにしました。

### 2. 結果に対する評価

団体戦での予選チームはトルコ・インド・ポーランド・中国です。トルコ・インド・ポーランドは好調でストレート勝ち、強国の中国と試合するのは2015のアジア大会以来なので、その時は何もできなくて悔しい思いしました。

今回の試合では思い切って自分から攻めようと思い、中国選手から2セットを取りましたが、相手が作戦を変え、逆転負けしました。しかし、初めて中国から2セット取れたのは自信につながりました。

予選を2位で突破し、決勝トーナメント進出することができました。又、強国のウクライナと当たり、相手のラケットのバックはイボなのに落ちないので、得意なラリーで粘ったのですが、私が取れないコースを狙って攻めてきたため、1-3で負けました。3位決定戦はないため、ロシアと同率で銅メダルを獲得することができました。

個人戦は、ハンガリー・スロバキアと当たりましたが、スロバキアに敗れ、ハンガリーに勝ち、予選を2位で突破しました。目標はベスト4以上進むことでしたが、決勝トーナメントの1回戦で韓国に敗れ、ベスト32になりました。相手は、今年から復帰したばかりで、背が高くとても動きが軽く、私が取れないコースを狙っていました。ラリーで攻めようと思っても効かず、自分からも攻めようと思ってもそれでも効かず、ほとんど相手にペースを握られ、1セットも取れないまま完敗しました。相手が攻めてきて、何もできなくて、悔しかったです。

### 3. 今後の課題

今までの試合の結果では世界の壁を越えられず、私の実力はベスト32になりました。また世界を目指すためには、技術を磨き、判断する力を身に付ける、メンタルを強くしなければならぬと思いました。この大会を通して、自分の課題を見つけ、4年後もまだ挑戦できていると思っていますので、ゼロから見直していきたいと思っています。

## テニス競技チーム

## 監督 齊藤 一茂

### 1. 選手・役員の選考基準・方法

- ① 2015年アジア大会に出場した選手とスタッフ
- ② 全国大会とランキング大会の戦績による男子選手4名と女子選手2名選出

※選考優先順位は連盟の選考基準であり、ダブルス編成については、ダブルス戦力選手を選考する。

### (1) チーム（コーチ）体制とスタッフ体制

- ① 監督…TD会議・本部との連絡手段、練習用コート予約、バスの手配、選手とのスキンシップ、自己管理確認
- ② トレーナー…選手のサポート  
コンディショニングシート
- ③ ドクター…英語通訳・本部との緊急連絡担当、選手の体調チェック（トレーナーと共同）、反省会での議事録を確認
- ④ コーチ…大会の試合前後のプレーアドバイス等

### (2) 大会運営

- ① 審判が国際資格を持っているのか疑問です。ITFルール規則があるにも関わらず、ボール交換をしない等クレームが多かったです。
  - ② 試合進行は問題ありませんでした。
  - ③ 毎日全ての試合が終了するまで退場してはならない等、マネージャーは厳しかったです。
  - ④ ベスト4から、3番コートにスピードガンがコートに設置されていたのには驚きました。
  - ⑤ ボールボーイは子供が多く、事前にルール等の練習をしてないように見受けられました。選手達の気が散るということで退場してもらいました。
  - ⑥ 一番良かったのは、センター辺りにコートごとの試合状況が掲示されているおかげで準備が出来たことです。※「選手名とスコア電子版」
  - ⑦ 初日のTD会議に出席できなかったのが痛手でした。本部との連絡受信が遅れて時間変更を知らされず、日本は全く主張できず、残念でした。
- ※競技規則の運用…運営の①にあたる。基本的にデフリンピックはITFルールに則って大会を開催するのが通常だが、ルールが生かされてなかったように感じました。

### 2. 総評

<試合結果>

#### 7/19（水）シングルス1回戦

梶下○ 6-2, 6-1 ● Sai Chandan Lingapuram（インド）  
親松○ 6-0, 6-0 ● Joshua Andrew Anburaj（インド）  
笹島● 7-5, 2-6, 4-6 ○ Sercan Yesilova（トルコ）  
松下選手はBYの為、試合なし。

#### 7/20（木）男子シングルス2回戦

梶下● 0-6, 2-6 ○ Gabor Mathe（ハンガリー）  
親松● 3-6, 1-6 ○ Mario Kargl（オーストリア）  
松下○ 6-1, 6-0 ● Hungary Gabor Varkoly（ハンガリー）

#### 7/21（金）男子ダブルス2回戦

梶下・親松 6-1, 6-2 ○  
Mahmut Can Aydin・Sercan Yesilova（トルコ） ●  
松下・笹島 1-6, (4) 6-7 ○  
Jack Alexander Clifton・Lewis Gordon Fletcher（イギリス）  
※ ダブルス1回戦はともにBYの為、試合なし。

#### 7/22（土）男子シングルス3回戦

松下 2-6, 1-6 ○ Mikael Alix Laurent（フランス）

## 7/23 (日) 男子ダブルス3回戦 (ベスト8)

梶下・親松 4-6, 1-6 ●

Urs Ferdinand Breitenberger・Hans Todter (ドイツ) ○

※対戦相手は前回デフリンピック金メダリスト

### ※ (選手コメント)

前回デフリンピックダブルスで金メダルを獲得したドイツペアとの対戦でした。長身から繰り出される高速サーブに苦しミリターンゲームはほとんど奪えませんでした。

ドイツペアはサーブアンドボレーのスタイルで日本が甘いリターンを返すと、一発のボレーで仕留められる場面が多かったです。親松選手のサーブは通用するも、全体的に力負けし、悔しさが残る残念な敗退でした。世界の壁は高く立ちはだかっていますが、今後の世界大会に向けて大きな経験になったと思います。

### ※ (監督コメント)

メダル獲得に向けて目の前のベスト4を賭けた大一番の試合でした。相手はドイツ選手で2人とも身長があり、パワーがあります。高い打点からのパワーのあるサーブにブレイクが成功したり、親松選手がサーブゲームを取ったりして大健闘しましたが、身長と経験の差で無念の敗退となりました。ですが、技術面は五分五分で負けていませんでした。4年後のデフリンピックに向けた課題として、やはり世界強豪チームと練習試合、合同合宿をやる限りやるべきだと感じました。日本から熱いご声援を頂いたのにメダルを獲得出来ず残念でとても悔しい思いです。メダルを獲得出来なかった事は監督として本当に申し訳ない気持ちです。ただ、選手達は健闘しました。今後に期待しています。

## 7/24 (月) ~

強豪国が勝ち進んだシングルス、ダブルス試合を最終決勝まで毎日観戦し、自分にとっての勉強と今後の課題を考えさせられました。

24日(月)からの午後は親松選手がシングルス2回戦で対戦したオーストリアのマリオ選手の紹介で、第1シードのMathe選手と練習をさせていただきました。これまでシードの選手から練習相手として声をかけられることは殆どなく、今回の大会で日本選手の実力が認められた証拠だと思います。

## ★反省・まとめ

7月18日から始まったデフリンピックが終わり、長くもあり、短くもあるように感じました。デフリンピック監督を初めて務め、アジア大会から約1年半、メダル獲得に向けて合宿を毎月重ねてきました。

念願のメダルを取れなかったのが大変悔しいですが、言い訳はありません。選手はあきらめず、全力で戦いました。あと一步のところまでメダルを取れたはずですが、実力面、技術面にあまり差はないと思います。ストロークやリターン、サーブのレベルの差はさほど変わらないですが、海外での試合や合宿を経験していない弱さを痛感しました。

ダブルスは世界どこの国でもポーチやボレー作戦に出るなど積極的な攻撃が多く、ほとんどが長身の選手でした。日本選手はスタミナの問題が大きかったです。それは、国内大会では1セットマッチをメインに実施しているためそれに慣れてしまい、1セット目で体力を使い切ってしまうように見えたのが課題の1つでした。特にヨーロッパブロックではフルセットを想定しているため、体力が最後まで持っています。日本だ

けでなく、アジアブロックの台湾選手や中国選手も同様に体力が持ちません。アジア選手は勝てる実力を持ちながら、2セット目から体力が持たずに負けてしまっていました。そのため、トレーナーも実際現場をみて、トレーニングをより厳しくしなければと考えを改めさせた大会でした。

次回デフリンピックに向けて、監督として引継ぎすべきことはコーチと選手とのコミュニケーションを強化し、また選手たちのメンタル強化やダブルス強化を目標にサポートしていきたいと思います。

## トレーナー 佐野村 学

### 1. 自己の役割とその評価

本競技大会は、2015年10月に開催された第8回アジア太平洋ろう者スポーツ競技会の同競技にATとして帯同させていただいた時の役割とほぼ同様な活動を行う形での帯同となりました。アジア大会の時と同様、日本を発つ前に現地の気温や湿度などを調べ、選手とスタッフに気象状況を伝えました。現地生活の注意事項として、飲料水や食事などについては水道水の飲水は絶対にしないこととミネラルウォーターを使用することを周知しました。その他、生ものは摂らないこととし、スポーツドリンクは普段選手が飲用しているメーカーのドリンクが現地になく、選手の希望に沿った粉末を全て購入し、日本から持って行くこととしました。コンディションの管理については、睡眠時間や食事、体調、身体の痛み箇所などの項目を設けたコンディションチェックシートを合宿時と同様に、現地でも記入して毎日提出してもらうこととしました。

現地入り後、すぐに日本で説明した食事や飲水、病気や事故などを含めたトルコでの生活上の留意点についてまとめたものを選手、スタッフに配布して説明しました。ミネラルウォーターの選定については、現地では硬水が多く、また、硬水が苦手な選手がいた為に、違和感なく飲用できるミネラルウォーターを探して、試飲してもらいながら決定しました。試合会場のコート上の気温は、WBGT計を用いた測定で、WBGT29~31℃、気温32~35℃、湿度50%前後でした。暑さについては、選手は日ごろから同様な気象状況で練習しているので、特にコンディションに関する心配ありませんでしたが、試合会場のサーフェイスがアスファルトのようにととても固く、アジア競技会同様に、選手の身体(特に下肢と腰部)への負担が心配でした。試合時には、各選手がコート入りする前に、事前に聞いたスポーツドリンクの数と氷嚢2個を携帯用クーラーボックスに入れて渡しました。また、練習や試合後は早期疲労回復のために、ビタミンCやクエン酸を含む100%オレンジジュースを渡してすぐに飲むように指示しました。競技大会期間中のATの主な役割は以下のとおりです。

- ・飲料水用とアイシング用の水の準備
- ・アイシング用具の準備 (RICE 処置を含む)
- ・スポーツドリンクなどの飲料水の作成と準備
- ・コンディションチェックシートの配布、収集とその確認
- ・ウォーミングアップ
- ・クーリングダウン
- ・試合前に選手に渡す飲料水(スポーツドリンク)と氷嚢の準備
- ・選手の要望に応じたストレッチなどのケアや筋肉のコンディショニング
- ・外傷、障害発生時の救急処置

- ・テーピング
- ・WBGT計(Wet bulb globe temperature(湿球黒球温度))(京都電子工業株式会社、熱中症指針計)によるWBGT、気温、湿度測定とその記録
- ・ドーピングに対する注意喚起
- ・食事の時の食事の摂り方についてのコメント
- ・選手村に戻ってからのストレッチなどのケアや筋肉のコンディショニング
- ・選手村に戻ってから行われたミーティング時でのコンディショニングに関するコメント
- ・翌日分の飲料水(スポーツドリンク)の作成

以上がATの者な役割でした。すべて評価において十分とはいえませんが、アジア大会同様、ATとして必要とされる仕事を遂行できたのではないかと思います。

## 2. 今後の課題

選手やスタッフとのコミュニケーションが特に問題なくとれたことは大変よかったと思います。前述したように、アジア大会での役割とほぼ同様な仕事内容であり、問題なく遂行できていたので、それらに関する課題は特にありません。ただ、今までの課題同様に、やはり手話がしっかりできないことについては、今後も大きな課題としています。その他、選手に対する課題として、基礎体力づくり(基礎的な筋力、持久力、柔軟性向上など)をもっと意欲的に行わなければならないと思います。世界で戦う為に必要なフィジカルやフィットネスレベルをもっと向上させる必要があると感じました。

## チームドクター 笹島 浩泰

### 1. 自己の役割とその評価

チームドクターとして参加するとともに、現地での練習コート確保や移動時のチーム引率および、トラブル発生時の英語対応など庶務を精力的に行いました。

チームドクターの役割は、ドーピング審査に確実に抵触しない範囲での選手の体調管理であり、渡航3カ月前の強化合宿からチームに常に帯同して選手の体調把握に努めました。選手1名が持病の治療で1回/月の特殊製剤自己注射を行っており、大会期間中に現地での投与が必要でした。この薬剤はドーピング審査に抵触しないものの、選手の入国審査を確実にするため、Medical Certification(診断書)を英語で作成して持参させ、問題なく現地での自己注射が可能でした。

薬剤は、ドーピング審査に抵触しない範囲で整腸剤、制吐剤、下痢止、抗胃潰瘍薬(胃薬)、消炎鎮痛剤、抗生剤(内服および静注製剤)、医療用湿布、創傷処置セット(消毒薬、ハイドロコロイドドレッシング製剤、等)、簡易縫合キットを選択し、緊急時の電解質輸液製剤とともに京都府立医科大学のご厚意により無償でご提供いただき、選手村まで持参しました。

テニスチームでは現地選手4名中3名に投薬治療を行いました。1名はやや重度の下痢と筋肉腫脹(肉離れ疑い)、1名は胃部不快感、1名は軽度の頭痛であり、それぞれ持参薬剤を使用して短時間で軽快しました。また、他チームからの依頼でサッカーチームに医療用湿布、水泳チーム・チームドクターに抗生剤(内服)と整腸剤および下痢止を譲渡し、空手チーム選手1名の創傷処置を行いました。いずれもTUE申請を要しない治療でした。

個人的には労力の9割は庶務でありました。日本選手団本部

からの公式連絡やテニス競技ディレクターからの連絡が私の携帯電話メールに届くことになり、チーム全員への情報伝達係となりました。練習コート確保は連日、前日夕方の競技終了後に英語メールで募集が開始され、希望時間のコート確保に翻弄されました。翌朝にコートに行くとは他国選手(アメリカ)が使用していたトラブルもありましたが、これらの英語対応・解決も重要な仕事でした。選手村での朝の競技会場までのバス確保は他競技も集中して混雑するとともにボランティアが英語を理解できず、難渋し辞退しましたが、連日、試合会場に遅れることなく到着できたのは幸いです。

開会式は翌朝の試合のためテニスチーム全員が参加を自粛しましたが、開会式中の夕食は選手村で提供されず、本部も全員開会式会場に向かっていた。選手村ゲートにいた職員と交渉し、同様に困っていたサッカーチームを連れてバスで街まで向い、テニスチームとサッカーチームで夕食を共にしました。交渉に奔走して狼狽しましたが、案外楽しい夕食でした。

大会期間中、医療行為および庶務雑事に選手および他のスタッフから全幅の信頼を寄せいただきました。豊富な薬剤によって医療行為も何ら問題なく遂行され、競技に支障をきたした選手・スタッフはいませんでした。練習コートの確保や選手村外での食事・買い出し等も安全に行われ、チームドクターの職務は十分に遂行されたと考えています。

### 2. 今後の課題

テニスチームとして現地での公式の連絡手段確保に瑕疵がありました。日本選手団本部からの深夜の連絡が日本の事務局にしか届いていなかったため、監督会議の日時変更に関する緊急連絡が受け取れず、監督会議に出席できなかったのです。以後は私個人の携帯電話メールを本部に登録していただきましたが、ほとんどの選手やスタッフは携帯電話のローミング処理をしていません。高額であるため当然です。今後海外大会では、チームとして携帯電話メールアドレスを確保する必要があります。

テニスチームは、他チームと比較して、医療面およびトレーナーシステムにおいて、明らかに恵まれていました。しかしながら戦術面のコーチングが皆無であったことに強い違和感を覚えました。欧州勢の高さや力に対する現実的練習や情報が事前には皆無であり、ダブルスでは日本で通用したことが試合ではまったく通用せず、試合中の選手に混乱さえ見られました。選手にとって今回の経験は非常に貴重なものであったはず。今後、現在の欧州勢と日本人選手の差を熟知し、その差を埋める努力ができる戦術面の指導者が必要であり、協会側の意識改革が必須であると思われます。

京都府立医科大学から無償で高額の薬剤等を提供していただき、帰国報告後、上層部から今後も協力を惜しまないとの言葉をいただきました。しかしながら先日、実務の事務方よりホームページ等に協賛等の掲示がまったくないと指摘を受けました。病院(大学)として、医師と薬剤を提供したつもりであるという。今後、このような機会がある場合は、配慮すべき点です。

## 選手 梶下 怜紀

### 1. 当初の目標(自己目標)

サムスン大会に出場するにあたって自分の中で最初に設定していた目標は、応援いただいている日本の皆さま、協会や事務を担当してくださったスタッフのためにも何色でもいいから、まずはメダルを獲得することを第一としておりました。結果は

メダル獲得の直前までいきましたが、あと一歩力及びませんでした。あと一歩が近いようで遠く感じる結果となりました。それでも敗退したという事実は変わらないので、次に向けて何が必要か、この経験を生かして何ができるのかというところをしっかりと考えていかなければならないと痛感しました。

デフリンピックは台湾大会以来であり、8年ぶりとなります。今回のデフリンピックで感じたことは、大会を通して全体的にアンフォースドエラーが減っていると感じました。世界のデフテニス全体のレベルが上がっており、上の選手と下の選手の差が縮まってきており、勝ち上がるということが厳しくなっていると思いました。

## 2. 結果に対する評価

今回の初戦あたりの試合や日本選手の試合は、ミスによる失点で試合が進んでいましたが、2回戦や3回戦となると攻撃的なプレースタイルによるウィナーやボールコントロールでミスを誘うという様々なテクニックによって試合が進行していると感じました。日本の選手が世界で勝つためにはこのテクニックを身につけ、試合で実行できるレベルまで持っていかなければならないと考えます。また、準決勝以降の試合のレベルになると平面的でなく、立体的にコートを使い、前後にボールをコントロールができるレベルになってきています。

## 3. 今後の課題

このレベルで戦うためにはボールが落下するまでの微妙な時間差のコントロールや落下地点を前後に変化させながらミスを誘い出すテクニックが必要になってくることから、今大会のレベルは、日本50位程度のレベルに近づきつつあり、4年後のデフリンピックでメダルを目指すのであれば、攻撃力アップと持久力の向上は必至であり、日本プロ相応の取り組みが求められると考えます。

## 選手 松下 哲也

### 1. 当初の目標

シングルス ベスト16  
ダブルス ベスト4

次世代の選手にデフリンピックなどの国際大会について知識、経験を十分に伝えていきたいです。もちろん、結果も貪欲に求めていきます。デフリンピックの為に協力して下さった方々に感謝の気持ちを忘れずに最後まで戦い抜くことです。

### 2. 結果に対する評価

シングルス ベスト16 2回戦  
6-1 6-0 16 シード VARKOLY (ハンガリー)  
ベスト16  
2-6 1-6 4 シード LAURENT (フランス)  
  
ダブルス ベスト16  
2回戦 1-6 6-7  
4 シード FLETCHER/CLIFTON (イギリス)

シングルの初戦はいきなりと16シードと当たり、選手の情報がわかりませんでした。試合前のアップの時に得意なショットや苦手ショットなどの情報を得られたので、戦略を組

み立てたおかげで勝つことが出来ました。ベスト16はデフリンピックで2度優勝したことある相手でした。長いラリーでの正攻法では勝てないとわかっていたので、短い時間でポイントを取れるネットプレー戦略を取りました。序盤はその戦略が効いて2ゲーム連取することができました。相手は世界王者でもあるので、切り替えてネットプレーを封じるプレーしてきたので、こっちもラリーで勝負する作戦に変えましたが、劣勢のまま逆転敗退になりました。

ダブルスはドロウ運が悪く、初戦4シードのダブルス巧者ペアと当たり、1セット目は相手のプレーに付いていけないままに終わった感じでした。2セット目が始まる前にパートナーの笹島選手と相談し、緩急ショットと相手は前に出てセンターを固めて来ていたので、サイドに多く突き、時々センターに突く作戦を実行したおかげで1セット目とガラッと変わり善戦し、我々がリード展開するゲームになりました。ですがタイブレークにもつれ、勝負の行方を左右する局面に焦りからイージーミスが出てしまい、敗退になりました。

### 3. 今後の課題

海外選手(アジア圏除く)に勝つには海外選手と試合を増やす必要があると感じました。背が高いため、日本選手が届かないロブでもスマッシュでやられ、サーブの角度も違うため、リターンに苦労しました。ストロークもスピンの跳ね方がアジア圏にないもので、慣れるのが困難です。試合の中で慣れる方法もありますが、その頃には勝負の趨勢が決着してしまいました。シングルス決勝戦の両選手は日本人と変わらない体格だったのが収穫でした。質の高いショットを打ち続けること、常にベスト打点まで行くフットワークを身に付けければ、日本人でもメダルを取れる可能性があると感じました。もう一つ大事なポイントは国を背負って戦うという覚悟を持っている為、ハングリー精神がありました。各国から若い選手がどんどん輩出されており、日本にも若手育成が急務になっています。若手選手発掘も含めて活動していかないとメダル獲得が困難になります。私は微力ながらサポートに回り、デフテニスの発展に貢献したいと思います。

## 選手 親松 直人

### 1. 当初の目標(自己目標)

シングルス、ダブルスともメダル獲得

### 2. 結果に対する評価

サムスンデフリンピックのテニス競技に出場しました。種目はシングルスとダブルスに出場し、シングルスは1回戦インドに6-0、6-0で勝ち、2回戦では優勝候補の一人である、第5シードのオーストリアに3-6、1-6で負け、ベスト32となりました。初戦は最初から自分の得意なプレーが出せたことでいいスタートを切ることができ、セカンドセットに入っても好調を維持できたことが勝因だと思います。オーストリア戦では、最初はいいスタートができポイント差を離れたところで相手がギアを上げてきて、徐々に自分とのプレーが噛み合わず、自分のアンフォートエラーが増えてしまい失点を重ねてしまいました。セカンドに入っても相手のペースのまま、もう少し自分からラリーを増やしていけば、流れは変わったかもしれませんが、自分のプレースタイルはパワーテニスです。一本で決めるショット、サーブで相手を崩すプレーが全く通じないわけ

ではなく、しっかり通用出来るなど感じる事ができ、自信にも繋がってきました。

ダブルスでは初戦トルコペアに6-1、6-2で勝ち、2回戦は今回のデフリンピックの準優勝のドイツペアに4-6、1-6と負け、ベスト8となりました。初戦のトルコペアにはいいプレーが多く、程よい緊張感が臨むことができ、要所要所で決めることが出来ました。ドイツペアに負けた要因は、サーブとリターンの決定力、精度が低かったことが一番の敗因だと思います。大事なところでの自分のサーブキープが出来ず、相手に流れを一気に持ってかれたこと、ペアのサーブが甘くリターンから攻められてしまったこと、相手のサーブがよくリターンから攻められなかったこと、課題がとても多く残りました。

### 3. 今後の課題

4年後のデフリンピックまでに日本チームがサーブ、リターンの改善をしない限りメダルは取れないと感じました。また、一般の国内大会に出て、たくさんのプレーヤーと試合経験を積むこと、練習環境をしっかりと整えることも大事になります。今回のデフリンピックでは他の競技がメダルを獲得している中、テニスは早く競技が終わり、一人もメダルすら届かない状況になってしまったことで日本チームに貢献出来なかったこと、皆さまの応援に応えられなかったことが非常に自分は残念に思い、恥ずかしく思います。まだ次のデフリンピックに向けてどうするかまだ決まっていますが、終わっても日本代表であったことには変わらないので、しっかりと日本代表らしく行動を心がけていきたいです。

## 選手 笹島 航太

### 1. 当初の目標（自己目標）

今回初めてデフリンピックに出場させて頂きました。デフリンピックでの目標はメダルを取ることでした。

### 2. 結果に対する評価

まず、シングルス1回戦の相手はトルコで、アウェイの中で試合に臨みました。1セット目はなんとか粘りきり、ラリーを続けて相手のミスを誘う作戦で取りました。2セット目はギアを上げ、2-0とリードしましたが、1セット目で体力を消耗しすぎてしまい、2-1の場面で全身痙攣を起こしてしまいました。そこで2セット目を捨てて、メディカルタイムやトイレトブレイクをなんとか駆使し、体を少しずつ休めながら3セット目で取りきる作戦に変更しましたが、相手に0-3とリードされてしまいました。しかし諦めたくない気持ちが芽生え、4-3に逆転しましたが、そこでさらに厳しい全身痙攣に襲われ、最後は走れなくなり、3時間14分で負けてしまいました。でも、アウェイの中で最後まで諦めず、やりきったのは誇りに思います。次の日からトルコの皆さんに励ましの声をたくさん頂き、ダブルスに挑める状態に戻せました。ただ、100%戻せたとは言えず、太ももから足まで両足全てテーピングを巻き、右腕にも巻きました。シングルスで消耗しすぎた体力をなかなか回復できませんでした。

ダブルスはデフリンピックに5回出場されたレジェンドのキャプテンの松下選手と組ませて頂きました。結果はベスト16で4シードのイギリスに負けてしまいました。1セット目は身長差に圧倒され、思い通りのプレーができない、自分の

体力が回復できていない所で簡単に取られてしまいました。2セット目から隙を突くカギを見つけ、そこをバンバン突いていき、4-2とリードしましたが、タイブレークまでもつれた結果、負けてしまいました。相手は4シードだったのですが、勝てない相手ではありませんでした。1セット目の時に簡単に取られてしまったのが一番痛かったです。今回のデフリンピックで引退される松下選手により結果を残せず、申し訳ない気持ちです。ただ、お互いのコンビネーションに悪いところは無く、全て良いものでしたのすごく責任を感じていて、キャプテンの引退試合に勝利をもたらす事ができなかったのが悔しいです。だけど、キャプテンをデフリンピックに出場の機会を与えて下さった奥様やキャプテンの家族の方々に感謝をしきれないくらい感謝の気持ちでいっぱいです。その存在が大きかったからこそ精一杯努力を尽くせたかもしれません。本当にありがとうございました。

### 3. 今後の課題

今後の課題としては4年後のリベンジを誓ったので、もう一度代表になりたいです。今回はシングルスで勝っていたのに全身痙攣を起こして負けたことに悔し涙をなしましたが、次はメダルを取って嬉し涙に変えようと思います。

その他、アジアのレベルが少しずつ上がっているのではないかと感じました。インド、台湾が勝ち上がり、メダルを獲得していたためです。日本はダブルスなら望みが見えますが、シングルスはあまり望みが見えないので、個人としてはダブルス専門プレーヤーやシングルス専門プレーヤーで勝ちにいくなど意識を作れば良いのではないかと思います。完璧なテニスをするのではなく、泥臭く自分のプレーを磨いて貰えば勝てるだろうと思っています。

日本でのデフテニスのレベルは少しずつ上がってきていると思います。今後の合宿で海外の選手とプレーすることが一番の近道なのではないかと感じました。その中で仕事や学業などの課題は多くありますが、改善していけば良いと思います。

## バレーボール競技男子チーム

## 監督 鹿谷 明生

### 1. 選手・役員の選考基準・方法

#### I. 選手 選考について

まずは重要なポイントなので、デフバレー男子日本代表と私の出会いから振り返りたいと思います。

2009年の台北、2013年のソフィアで行われたデフリンピックにおいて、男子バレーボールの日本代表を率いたのが、前任者の岩下監督です。彼は選手として小中学生時代から日本一を経験するなど、素晴らしいキャリアを持ち、その後も高校大学と強豪チームを経て、実業団での選手経験を持っていて、現在も女子のVチャレンジリーグIIの柏エンゼルクロスで監督をしています。彼と共通の友人がいたという縁から依頼を受け、代表兼監督を務めるNBK dreamers（当時全日本実業団リーグ所属。現在VチャレンジII所属）や関西学生リーグ2部上位（のちに1部昇格）だった佛教大学と合宿やゲームを行ったことが初めての出会いであり、交流のきっかけでした。デフバレーやデフアスリート同士での練習やゲームでは正直レベルが高いとは言えず、技術のみならずスピードやパワーで外国選手に対抗

できません。しかし、Vプレミアリーグなど、あまりにもレベルが違う相手とお手合わせしてもらってもお互いのためになりません。その時点では我々のチームも発展途上であり、互いに得るものがあると判断したのが交流のきっかけでした。これは余談ですが、私自身が佛教大学 社会福祉学科時代の卒業のレポートでデフリンピックなどの障害者のスポーツ大会についての研究をしたことも奇遇ですが必然であったと思います。最初に手合わせしたのが2006年、それ以後、毎年3回以上の合宿や合同練習を行ったり、私の所属するチームにデフバレー日本代表候補選手などを受け入れて練習に参加させ、試合経験を積ませたり、積極的な協力を行いました。その際の岩下監督との話の積み重ねや対戦相手として、自分の目で見たことにより、デフバレー男子日本代表のウィークポイントやストロングポイントを把握することができました。これについては後述しますが、今回のデフリンピックに向けての指導の大きな指針となりました。

私の就任が決まった2014年に岩下監督やその際の手話通訳者などの大崎さんなどのスタッフと会い、ブルガリアでの敗戦の原因や、ご苦労された点、問題点を細かく聞き取らせていただきました。そのうえで岩下監督が考える問題点の改善から、その時点でのベストの選手選考を模索しました。

岩下監督からの引継ぎ報告では

- ① 外国人の圧倒的な高さやパワーにいかに対抗するか
- ② 選手としてのキャリアのなさ（小学校、中学校、高校、大学や実業団などでの全国大会経験者がほとんどいない）故に大きな会場での試合経験が皆無。（空間認知能力や視野などの問題）
- ③ ②に加えて国際試合の経験はさらさない。外国人とのゲーム経験のなさをいかにカバーするか重複するが遠征経験の少なさも大会に対応できにくいなどの問題がある。
- ④ 合宿期間の少なさ 予算や選手の仕事上、休めない、職場の理解がない。露骨に代表に入るなど指示されるケースもある。家族の理解を得にくい。
- ⑤ 聴覚支援学校における男子バレー部のチームや部員の減少（女子に比べて顕著）
- ⑥ ろう者と難聴者、聞こえる人それぞれの間のコミュニケーションの問題や理解レベルの差などをどう埋めていくか。
- ⑦ 聴こえないというハンディを克服して、リズムやテンポという概念をいかに理解させるか。

これらの現状の問題点や課題、強みも踏まえた上で日本を代表して、世界へ、デフリンピックでのメダル獲得に挑戦するという強い意志と能力を有する希望者を募ることにしました。まずはブルガリアや台北を経験した選手で、もう一度デフリンピックに挑戦する意思のある者や私の目から見て、戦力となる可能性を判断した選手への声かけを行いました。さらにこれが一番のポイントですが、デフリンピックやデフバレーの存在を知らないまま補聴器をつけて一般の大会に参加している選手の発掘を重視しました。そのための情報収集を旧知の高体連や学生連盟の指導者層にお願いして回りました。様々な方面から頂いた情報をもとに、全国各地に足を運び、本人やその指導者、保護者との面談を何度も何度も重ねました。従来为国体である障害者スポーツ大会の地区予選（関東、東海北信越、九州、関西）や本選（長崎、和歌山）にも足を運び、試合を観戦するとともにビデオ撮影するなどして、戦力や傾向を細かく分析しました。関係者や選手自身とも話を重ねることで情報収集に努め

ました。自分の想像以上に、日本代表へのリスペクトは驚くほどなく、希望する者も圧倒的に少なく、誇りも感じていないため、そこまでしてやりたくないという意見も少なくなかったことはショックでした。情報をもとに積極的に聴覚支援学校への訪問や指導も行いました。協力的な学校や保護者の方も多く、勇気づけられましたが、大多数の学校現場のデフリンピックへの理解度の低さや、スポーツ指導のレベルの差、はっきり言って協力的とは言えない態度や温度差には大きな壁を感じたのも事実です。それは教育現場だけでなく、保護者も同様で、何回も訪問してお願いを重ねるなど、日本代表への配慮や理解を促したのですが適わず、その後も失望させられ続けました。この辺りも今後へ向けての大きな課題です。

2014年7月22日の静岡県での合宿を皮切りに、選手が集まれる可能性のある三連休のある日程を中心に、2ヶ月に1回のペースで合宿を行いました。強化費が少ないこともあり、できうる限り宿泊費の安い場所で、スタッフと選手の多い場所にする事で交通費を軽減して、最大限の努力でネットワークを駆使して安価で効率の良い場所をその都度選択しました。時にはエリア別に選手を集めての合宿や自主合宿と称して、選手スタッフともに心意気で自費でも行いました。

具体的な選手選考は合宿の中で、競技力、運動能力、特性や戦術の理解力、チーム内に及ぼす影響力、将来性やリーダーシップなどから判断しました。練習ゲームや練習態度、合宿中の行動をつぶさに観察し、他のスタッフとも協議を重ねました。

## II. スタッフの選考について

スタッフで一番の要であるマネージャーについては信頼関係のある人間がすでに選出されていたので、具体的に私のサポートのできる人材を選出、配置しました。具体的には以下の通りです。

- ・球出しや選手の技術に関するサポートのできる人材。
- ・合宿の用地選定や地元の協力や練習相手などを準備、段取りのできる人材。
- ・映像収集や分析やデータ処理などに長けている人材。
- ・選手の体調管理や治療、予防など医療的なサポートのできる人材。
- ・フィジカル的に選手の筋力や瞬発力、アジリティなどを向上させられる人材。
- ・リズム感覚の向上や柔軟性の獲得などを目的に積極的に人材。

特にスタッフに関しては「フォアザチーム」「フォアザ選手」で献身的な活動を深く要求しました。前述したように資金面の厳しさや諸事情から、満足に謝礼も払えず、ほとんど善意にゆだねるような状況が続いたことから、名誉欲や金銭的な要求の高い人、規律や指揮系統に関する理解力、協調性のない人間とは結局、袂を分かち結果となりました。これはシビアで厳しい合宿を行ったことによる成果であり、副産物であり、残ったスタッフや新たに登用した臨時も含めたスタッフにもいい意味での緊張感や、チームに欠けているところを埋めていこうとする積極性と一体感が生まれていきました。予算の少なさから、満足にウェア支給もできず、いわゆる日本代表なら当然与えられるものという意識とはかけ離れた強化体制で臨まざるを得なかったことを逆にとり、結束を図っていくことができました。残ったスタッフたちや苦労した選手たちには感謝の言葉以外ありません。最大限の賛辞を贈りたいと思います。

## 2. 総評

決して満足とはいかないなりに合宿を多数積み重ね、チーム

を作っていました。特にGWには3年にわたり休みすべて共同生活を行い、朝昼晩とバレーボールに徹することのできる環境でできました。その他の日程にはVリーグや大学チームなど多数の国内の強豪チームと練習ゲームを積み重ねました。国内の身長の大きな選手や日本在住の外国人選手にも協力してもらい、仮想外国チームを想定できたこともありがたかたかです。ちょうど2年前にパリで行われたヨーロッパ選手権大会を視察させてもらい、ヨーロッパのチームの現状をつぶさにビデオ撮影し、そこから得た情報に基づき、細かい仮説を立て、対策を練りました。そして、ちょうど一年前にワシントンDCギャロッド大学で行われた世界選手権大会にて、実際に相手と対戦することにより、その差や通用する部分に磨きをかけられました。アジア大会が開催されず、国際試合もままならず、いきなりベスト4という命題を突き付けられたことも青天の霹靂でした。正直、チーム作りの上では無謀且つ理不尽な要求をされたことは苦しんでチームを作っている現場を冒涇したものだと思っています。もちろん予算配分などのご苦労は理解できますが、ボールゲームしかも男子の競技がオリンピックなどでもどのような状況かは比較検討していただきたいです。世界選手権大会ではいきなり組み合わせが変更され、世界大会にはありえない1日2試合など、驚きの連続でありました。これは今回のデフリンピックもヨーロッパ選手権大会もそうですが、なぜFIVBルールに準じているにもかかわらず、あからさまなルールにない誤審やラインズマンの2人制など、国内大会にも劣る運営であることを報告しておきたいと思っています。これはデフリンピックを卑下する行為です。

話はそれでしたが、世界選手権ではヨーロッパ選手権チャンピオンのトルコにデュースの健闘からスタートし、ウクライナ、ロシアというメダル常連国にも善戦。開催国のアメリカ、カナダ、インドを破り、3勝3敗の五分に戻し、ブラジルとの対戦で勝てばベスト4でした。ただ、ここで痛かったのはポイントゲッターである主将が医師免許取得のための学内試験のため離脱したことにあります。結果はブラジルに負けて6位という成績に終わりました。これもデフリンピックの認知度や国を挙げての事業という意識が徹底されていないことから生まれた悲劇だと私は強く考えさせられました。そしてこの世界選手権大会を終えた後、今度はもう一つの悲劇がチームを襲いました。トルコ政情不安を理由とする辞退者続出の大量離脱です。何のためにわざわざ経験を積ませたのか、という疑問が心の中に沸き上がりましたが、これも致し方ないことでした。世界選手権の結果を受けて、デフリンピックへの派遣が決まるまでの間はひたすら忍耐の時でありました。もう一度やる気のあるメンバーを中心にコツコツとチームを作っていました。幸いなことに新メンバーの補充ができたことや成長してくれたメンバーの存在は一筋の光明でありました。結果的にはデフリンピックイヤーの5月のGW、6月に2回の合宿、7月の出発直前のVリーグサマーキャンプへの参加と亜細亜大学での合宿で固めた格好となりましたが、明らかに少ない練習時間です。世界選手権時にはかなり厳しい指導をしたが、デフリンピックでは最低限の約束を守れば、あとは選手間でやれる仕組みをスタッフとともに構築してくれました。また、過去大会を経験している選手が成長し、さまざまなことにリーダーシップを取ってくれたことも大きかったです。ぎりぎりまで大会に参加し、極暑の中で合宿、そしてサムスンへの移動などもあり、一生の思い出になると考え、開会式にも参加させることにしました。疲れや様々なことに対し、言い訳をしなくてもいい行動を心がければいいと試合前に選手を叱咤しました。

初戦のイタリア戦は徹底的に相手の弱点をつきましたが、相手の攻撃力の強さにこちらの不調も重なり、勝利はかないませんでした。ただ、チームに今までにない粘りが生まれつつあり、1セット取り返したことや後半の追い上げに手応えを感じました。

2戦目のヴェネズエラ戦はランキング的には、この試合に負けたほうが決勝トーナメントに進めない可能性が高いというのが大方の見方であったと思います。試合前に1日空いたこともあり、イタリア戦のビデオも見て、自分たちのやるべきことを確認し、相手に対する対策をした上で、かなり細かい作戦を立てました。真面目なチームほどやらなければいけないことに囚われてしまい、固くなってしまふことも選手に話しました。相手の予想以上の動きの良さと変則的なバレーに戸惑い、第1セットを競って落としましたが、若手の頑張りもあり、2セットを取り返し、波に乗るかと思われましたが、ポイントゲッターの不調が響き、第4セットを取り返され、勝負は最後の第5セットへもつれ込みました。ここでもリードされる嫌な展開となりましたが、何とか踏ん張り、追いつき逆転しますが、また再逆転されるというシーソーゲームでした。最後はベテランと若手の力がかみ合い突き放しましたが、一番印象的な試合となりました。

3戦目の地元トルコ戦は大歓声のアウェーの中、健闘しましたが、ストレートで敗戦しました。作戦が当たっても、それを遂行しきる能力の足りなさに歯がゆさを感じます。

4戦目のブラジル戦にはストレートで勝利し、トルコ、イタリアに次ぐ予選3位で8年越しの2009年台北大会以来の決勝トーナメントに進出することができました。メダルを取るために一番大事な準々決勝のロシア戦は、やはり相手が一枚上でした。高さもさることながら、相手の層の厚さに対策を絞り切れませんでした。それでも相手をあわてさせた場面はありましたが、この辺りはじっくりと取り組まないと厳しいところです。メダルを逃したことによるモチベーションの低下をいかに防ぎ、一つでも上の成績を出せるかがカギとなります。順位決定戦の一つ目は予選で完璧に勝っているブラジル戦でしたが、国際大会で続けて勝つことの難しさを痛感しました。前回の雪辱に燃える相手に2セットを奪われ、あとがない状態から何とか一つ奪い返した第4セット、あとがない状態で18-12までリードされ、絶望的な状態からベテランの活躍にチームが奮起し、26-24の大逆転となりました。しかし最終セットは相手に押し切られました。最終戦のアメリカ戦、世界選手権大会では1勝1敗でした。ベテラン選手を加えてパワーアップしたため苦戦が予想されたが、この試合は日本の意地がさく裂しました。最後の最後まで調子の上からない選手がいれば、他の選手がカバーしました。ベテランが活躍し、息の上だった時に今度は若手が出てくる、まさに今大会の日本を象徴するような試合でした。3-1で勝利し、最終戦を終えました。結果は7位でしたが、大いに健闘したといっていでしょう。

しかし戦術の徹底にはまだまだ不満があります。勝負に絶対はありません。しかし、絶対を信じられないチームは弱いです。世界を見据えて、若手をより早い段階から強化し、デフリンピックへの認知や理解など社会的な環境整備が急務です。各国の強化体制はその国のバレーボール協会と一体化しており、ナショナルチームクラスの指導者がアナリストをしているなど、福祉や障害者スポーツではなく、オリンピックと同じなのだということをも日本国民全体が理解してほしいです。選手に対するスタッフの数も圧倒的に少なすぎます。それで勝つと言っていること自体に疑問を感じます。各国は本気の戦いだと思ってやっ

ています。3位決定戦でも決勝でも判定を巡り、紛糾するなど、審判員のレベルも低いこともあげられますが、それも含めて勝負が人生を左右します。つまりオリンピックなのと同等なのです。試合ではすべてを賭けて勝利を目指します。今回、我々男子チームが行った最大の成果はトルコの方々との友好であったことです。この大会に臨むにあたって、和歌山県の串本にあるエルトゥールル号の慰霊碑やトルコ記念館を訪問しました。そこに働くトルコ人の方や大阪にあるトルコ協会の方から様々な情報を頂きました。そしてそのご縁から、試合終了後、閉会式の前日に送迎していただき、ウニエにあるエルトゥールル号の慰霊記念館を訪問しました。地元市長や町長の集まる中の式典に参列、地元の中学生ともバレーや遊びを通じて交流しました。その模様はトルコ全土にニュースとして流れていたそうです。スポーツを通じた国際友好に貢献できたことはチームの誇りです。

## トレーナー 中村 裕斗

### 1. 自己の役割とその評価

今回、私はトレーナーとしてデフリンピックに帯同させて頂きましたが、トレーナー業務だけでなく合宿でのボール拾いや練習に混ざってお手伝いさせて頂き、このチームに深く関わった様に感じています。

このチームとは約3年前から関わらせて頂き、これまで考えていたトレーナー業務では全く足りないことを痛感しました。私が保有している資格上、マッサージ・鍼灸に加えテーピングとセルフケアの指導等がトレーナーのやるべき事だと考えておりましたが、代表チームに関しては、それに加えて選手のドーピングチェック、その日の体調のチェックなど、やるべき事がまだまだ沢山存在することに焦りを感じていました。海外へ何度も帯同されているトレーナーの先生方やスポーツファーマシストさんに沢山質問させて頂き、自信を持ってデフリンピックに帯同できたように思います。

コミュニケーションについては選手や手話通訳者さんに教えて頂きながら、簡単な手話と口話でコミュニケーションを図っておりましたが、より選手との距離を縮めるには手話をより深く勉強しなければならないと感じました。

### 2. 今後の課題

今後はメディカルケアだけでなく、フィジカル強化の部分でもより深く関わっていくべきだと感じました。大会期間中に選手の訴える痛みは、特に筋肉炎や筋膜炎が多かったです。世界大会ならではの緊張感から身体への負荷も大きくなったと考えられます。大会期間中は連戦となる為、日ごろのトレーニングや練習を今まで以上に厳しく追い込み、国際大会でもベストな状態で試合に臨めるように日ごろ選手が行っているトレーニングのメニューや頻度までしっかりとチェックをする必要があると思いました。デフチームは毎日練習できる環境にいない選手がほとんどです。それぞれが練習場所を自分で確保し、週に2回はトレーニングを実施するくらいはしておかなければ、次の大会でも同じように痛みを訴える選手は出てくると思います。痛みを訴える選手がないようにトレーナーとして選手に寄り添い、選手やチームの為に行動していくことが求められると考えています。

私がこの3年間行ってきた業務は当然の事ばかりでした。鍼灸マッサージでの選手のメディカルケア、救急の手配、応急処

置等です。様々なトレーナーの先生方にお話を聞かせて頂き、それぞれ違ったところを第一に考えていらっしゃる事に気付きました。鍼灸マッサージによるケア、その日のメディカルチェック、セルフケア、競技直後のアイシングなど回答は様々でした。私と他の競技のトレーナーの先生方の違いは何か常々考えておりました。大きな差は経験値です。知識、実力でも当然負けているとは思いますが、経験値としましてはほぼ0であった為、監督、コーチ、選手の皆さんには本当に助けて頂き感謝の気持ちでいっぱいです。今後は、たくさんのセミナーに足を運び、知識と人脈を身に付けてチームに還元できるよう心掛けていきたいと思っております。そしてよりデフスポーツ、デフバレーが世の中に知れ渡るように認知活動にも力を注いでいこうと思っております。

## コーチ 海野 洋馬

### 1. 自己の役割とその評価

私は、4年前に鹿谷監督とのご縁で、今大会への出場と金メダル獲得の為に、男子バレーボールのコーチとしてチームに関わらせて頂きました。私の役割としては、練習・合宿・大会など全てがスムーズに行えるように監督・チームをサポートし、チーム力・選手個人の能力の向上と、デフスポーツ・デフバレーを世の中に広めていく事でした。また、チームの中には、私と同じようなコーチスタッフが4名、トレーナーが2名、マネージャー・手話通訳者が各1名いる為、スタッフ陣でコミュニケーションをとっていく事も大切な役割でした。スタッフ陣のコミュニケーションという部分では、監督がスタッフ陣での意見を言い合える環境を積極的に作ってくれていた為、スタッフ陣の関係性は良く、各自の役割を果たす為に、チームの為に動く事ができたのはとても良い事でした。ただ、前文に書いた役割に関しては、デフバレー・聴覚障害者との関わりという部分で初めての経験であった為、最初は選手とのコミュニケーションという部分では戸惑う事もありました。しかし、選手と合宿を通じて、一緒にバレーをする事で、コミュニケーションに関しても全く問題なくとる事ができるようになりました。4年間トルコデフリンピックで金メダルを取る事を目標に活動をし、金メダルを取る（7位入賞）事は出来ませんでした。前回大会よりも更にレベルが上がっている男子バレーボールの競技の中で、7位入賞という結果をあげられた事は、4年間の成果が出た結果だと思いました。

### 2. 今後の課題

今後の課題として、4年後デフバレー男子日本代表チームが金メダルを取る為には、チームとして新しい選手の発掘をどのようにしていくかが大事だと思いました。その為に、デフスポーツ・デフバレーをどのように認知していくかを同時に行う必要があります。現状の国民体育大会やデフバレーボール協会が主催している大会やその他聴覚障害者の大会は、聞こえる私達だけでなく、聴覚障害者の方々にも、あまり認知度や重要度が低く、大会を見渡しても、参加している選手がマンネリ化していて、新しい選手の発掘ができないような状況にあります。その結果、レベルがあまり上がらず、盛り上がらない大会になっています。そのため、まずはデフスポーツ・デフバレーの周知活動をする事が大切だと感じます。今回デフリンピック前に男子チームは、自分達でデフリンピック・デフバレーを周知するポスターを作り、企業・自治体をお願いをして貼り周知

活動をして頂きました。また、鹿谷監督が就任した4年前から、SNSでデフバレーに関して様々な人達に呼び掛けをしてきました。その活動もあり、少しずつですがデフバレーが認知され、様々な企業や個人の方から寄付金を頂いたり、今回の男子デフバレーチームのメンバーの中にも、監督の知人からの紹介で全くデフバレーを知らなかった選手が興味を持ち合宿に参加して日本代表になった選手や、インターネットで調べて存在を知り、合宿に参加をし、日本代表になるというケースもありました。今後もこのような周知活動は、新しい選手の発掘はもちろん、デフバレーのレベルを上げ、デフバレー大会を盛り上げ、デフスポーツ・デフリンピックを発展させていく為にも必ず必要だと感じます。その為に、チーム・個人単位の活動ではなく、デフバレーボール協会も一緒となって周知活動を、今よりもっと積極的に行っていく事が必要だと感じました。

最後に、今回このような貴重な機会を与えてくださった、関係各位の皆様、選手の皆、鹿谷監督にはとても感謝をしています。ありがとうございました。

## 分析コーチ 逸見 尚史

### 1. 自己の役割とその評価

私は分析担当スタッフとしてデフリンピックに参加しました。大会期間中はほとんどをチームの動きとは別に行動しました。開館時間に競技場へ行き、対戦相手のスカウティング（戦力分析）のため、会場の分かれた準決勝2試合を除き全試合をビデオ撮影しました。そしてそのビデオを監督用と選手用に仕分けを行いました。また、監督の指示のもとチームミーティング時の資料動画の編集作業等を行いました。

自己の役割に対する評価としては、対戦相手の情報収集という観点では、自己の役割を十分に担うことが出来たと考えます。しかし、情報収集した各国ビデオデータの編集作業等をもっと速やかに行えたらと思いました。また監督、選手のニーズに応える作業が行えたとは言いきれませんでした。それが出来ていたなら、結果も変わってきたのではないかと考えます。対戦相手の戦力分析をする上で必要となるデータを効率よく編集処理するにはいたりませんでした。私自身にもっとデータ処理等のスキルがあれば、それまでに蓄積されていた各国チームデータ等を含め、さらに有効活用することが出来て、チームの勝利に貢献出来たと思います。

### 2. 今後の課題

今後の課題としては、分析担当として強豪国の参加する大会視察によるスカウティングは必須と考えます。どの競技団体も同じかもしれませんが、各種国際大会、そしてデフリンピック期間におけるデータ収集、処理をスムーズに行うために撮影・編集機器、編集ソフト等の準備や、担当者のスキルアップが課題と考えます。

また、チーム全体としては、どのセクションでも同じかと思いますが、まずは今回のデフリンピック、およびそれまでの活動の総括を人的要因、環境要因、経済的要因等について多面的に、そして客観的に行い、検証することが重要です。それら検証結果をもとにして、次回大会の目標設定をし、その目標達成のための緻密な毎年の強化計画、各ブロック大会視察により有望選手の発掘や、全国各地の聴覚支援学校のバレーボール部の情報収集と将来有望となりうる選手の積極的な勧誘と強化合宿などを通しての育成をします。そしてチーム強化合宿、物品購

入、チーム強化のための活動資金等の確保をし、その資金を集めるためにスポンサー等を獲得する。スポンサー等を獲得するために、デフバレーボールの認知度を上げるためSNS、ポスター、メディア等、各種媒体を介した広報活動の全国展開が必要であると考えます。

目標設定はやはりメダル獲得です。今大会を終えて、デフリンピックにおけるバレーボール男子チームのメダル獲得は不可能ではないと考えます。前述の事項を整えることが最低条件であると考えます。次大会に向けては、海外の代表チームを招待しての国内試合開催や海外遠征の実施を行わなければならないと思います。この実施には選手の所属する職場や学校の理解や資金が必要です。そのためにはやはりデフバレーボールの認知度を上げ、皆に理解してもらい、応援してもらえる広報活動が必要です。広報活動を行うことにより、聴覚障害があるバレーボール選手が自ら代表チーム、デフリンピックに興味関心を抱き、そして夢を抱くのではないのでしょうか。

## 戦術コーチ 山下 博史

### 1. 自己の役割とその評価

私は、鹿谷監督から4年前に依頼を受け、今大会への出場とメダル獲得を目標に掲げ、戦術コーチとしてこれまで関わってきました。依頼を受けた当時は、私自身が鹿谷監督率いる奈良NBKドリーマーズの選手兼コーチとして所属していたこともあり、デフバレー男子チームとの関わりが前回大会の頃から合同強化練習会等を行っていたこともあったため、選手たちとの面識・交流はあるという状態からのスタートでありました。

私の役割は、コーチであります。コーチ業の中でも、一番大きな役割の一つとして意識的に行っていたことは、選手の中に混ざって練習・トレーニング・特に実戦形式については選手と共に同じコート内でプレーすることでした。

聴覚障害の選手たちの多くが手話と視覚的な情報のみで、これまでバレーボールを行ってきたため、聞こえる人と共に競技するという機会がほとんどない状況でした。それゆえに連携プレーや、一つひとつの技術の修得が非常に荒く、単刀直入に言うと「格好だけを身につけたプレー」が多かったです。この原因は明らかに情報不足であることが、選手達の性格や、普段から何事にもひたむきに取り組む姿勢を見受けられたことで判明しました。そこで、共にプレーをすることで、これまではなかった新たな知識等の情報を直接肌で感じてもらい、その積み重ねの結果が、競技力向上（競技レベルの底上げ）につながるという意図がありました。

このことは、スポーツでしか味わえない、その時間だけは手話のいらぬ、「目と心で会話する」瞬間であり、コーチという立場であった私自身が、選手達が感じていた以上に刺激的で何ともいえない幸せな時間でありました。

更に大切にしていたのが、練習後の確認作業でした。練習の中で「目と心で会話」したと思っても、「双方の思い過ごし」ということも多々あるため、きちんと伝わっていたか、どのように理解していたのか、どのように伝えたのか等、意思の確認作業を手話通訳の方に間に入ってもらう綿密に行いました。実際問題、いくつもの場面で、こちらが考えを伝えつつもりだったことや、何となく理解したふりをしていて、といったことがあり、練習内容の意図や、指導する側の考えと、プレーする側の共通理解を図るという丁寧で時間のかかる作業であったが、これを怠ると接触事故につながる可能性や、何より実践舞台で

パフォーマンスが発揮できないことが明確なため、毎回最大限時間をかけることに徹しました。「意図を分かった上で取り組む」ということになります。

先に述べた、「選手と共にプレーをしながら」という点では、私のポジションがセッターということと、普段は大阪で中学の体育教員であり、バレーの指導者としてもJOCのスタッフを数回経験していることもあり、私にしかできないことが重なったと思えば自己評価としても非常に高くあります。

また、役割の一つとしてスタッフ・選手も一緒になってそれぞれが行っていたことが、デフバレーボールとデフリンピックの国内での認知度を高める活動でした。これについても、中学の教員ということをも最大限に生かし、認知・PR活動に努めました。例えば大きな役割の結果として、2016年7月と2017年7月に、大阪府中学校バレーボール大会の組合わせ発表兼顧問総会という日に、私が所属していた大阪府中学バレーボール強化委員会の強化委員長より、府下全顧問が集まる前で、昨年については「デフリンピック出場をかけた、デフバレーボール世界選手権大会」の紹介、今年については「デフリンピックの紹介」を私がスタッフをしていた関係でPRを行っていただき、私自身、中学校の全校集会に講師として呼ばれ、デフリンピック・デフバレーについて話をする等を行いました。

## 2. 今後の課題

今後の課題としてまずお願いしたいのが、まず連盟によるデフリンピックの大々的な宣伝にこれまで以上に費用を投じてもらいたいことです。紙面（ポスター）や、インターネット、教育関係、マスコミ関係等、あらゆるものを利用した宣伝活動をお願いしたいと思います。これについては、JDVAも含めた大きな組織からのお膳立てがなかったため、認知・宣伝活動を行った際に非常に苦労しました。それに、今大会で、誰もがはつきりと感じたのが、日本以外の諸外国におけるデフリンピックの認知度や、デフリンピックへの各国の取組みは、噂に聞いていた通り、オリンピック・パラリンピックと何ら変わらない、「スポーツ」であり、国の名誉をかけた戦いでした。

そして、金銭面です。前回大会同様に、これほどの自己資金がかかる事が予想できていたにも関わらず、協会側の不十分な体制により不信感が募りました。そのため協会の体制を一新することが課題と考えます。その一つとして、協会の統一化を提案します。ちなみにロシア、トルコ、ウクライナをはじめ、諸外国の多くは、バレーボール協会もデフバレー協会も同じ傘下であるときいています。日本も今後一つになってもらうことを願います。

何はともあれ、今回のデフリンピックを終え、日本男子バレーの未来は、非常に期待度が高まる一方です。その理由として、今回メダルは逃してしまったものの、堂々の7位入賞。メダルを取った国の選手の多くは、普段プロリーグに所属している選手もあり、男子デフバレーのレベルは聞こえる人のレベルに匹敵するほど非常にハイレベルの中、日本の位置は確実にメダル圏内です。しかも、4年後の主力となるであろう若手選手が今回大活躍してくれたことが何よりの収穫でした。

デフリンピック中の反省としては、長時間の飛行機移動による疲労や、国外という環境の違いでの蓄積されるストレス、気合いだけでは乗り切り難い、見えてこない疲労をいかにリフレッシュさせるかでした。

このほか直接競技には関係ありませんが、日本国旗のピンバッジが非常にたくさん必要であることです。これは、どの競技も共通かと思うので、ひとり5つはあらかじめ用意していた

だきたいと思いました。現地のスタッフや、他国選手との交流の際に、毎回求められたのが「ピンバッジ交換」であり、デフリンピック経験者である他競技の日本選手は自前で数十個用意されていたことには驚きました。我々男子バレーのスタッフは、昨年アメリカでの世界選手権大会の経験を活かし、各自100円ショップ等で扇子をはじめとした日本に関するグッズを用意したことで代用ができました。他国の人たちと交流を持てる素晴らしい時間でもあるので、今後の参考になればと思います。

最後になりましたが、デフリンピックに参加するに至るまでに、連盟の方々をはじめ多くの方々の支えがあって参加～滞在、帰国することができたことに感謝いたします。

マネージャー 中野 智久

## 1. 自己の役割とその評価

私は、マネージャーとして、このチームに関わりました。これまでの台北、ブルガリアを経て、選手を引退し、本業である聴覚支援学校の教員としての業務の充実、家庭の時間を増やすことを考えていた矢先、協会よりマネージャーの打診や次期監督が高校生の時から繋がりのある方が就任されると聞き、非常に悩んだ結果、デフバレーボール日本代表男子チームのマネージャーを引き受けることにしました。その決断するにあたり、職場の皆さんの理解、家庭の理解があったから私は引き受けることができました。この場を借り、御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

さて今回のチームにおいて、マネジメント業務全般を行いました。会場や宿泊施設、チームのスケジューリング、会計業務などを行いました。特に頭を悩ませたのは、資金面での対応です。数少ない資金+世界選手権の派遣費用やデフリンピックの派遣費用の準備について、日々の合宿計画をしながら、「選手達の負担が少なくなる方法を模索すること」が今思えば、私にとっての大きな課題だったのではないかと今となって思います。また学校や企業への訪問、ポスター・チラシ制作（デザイナー依頼、発注、発送…）など、様々な業務に取り組み、私自身が選手時代にごく疑問に感じていた広報分野にも取り組み、一定の成果を得た手応えを感じています。実際に、一般の方々の目に触れるところに貼らせていただいたり、寄付金をいただいたり、見学や興味を持ってもらえることが増えました。その結果、選手たちが日本代表という誇り、プライド、憧れの対象となることができたのではないかと思います。私自身の考えとして、日の丸を背負うことは、個々の振る舞いや行動を大事にすることがとても重要であり、それは障害者であっても健常者であっても変わりがないと思います。実際、デフリンピックでは、ボランティアスタッフをはじめ、観戦に来た大人・子どもたちからスター的な扱いを日本代表選手たちが受けているのを見て、日本でもそのような価値観が生まれたいら良いのにとすごく感じました。

## 2. 今後の課題

デフリンピックが終わってから改めて思うのは、いかにデフリンピックの価値を高めることができるかが大事になってくるのではないかと、ということです。オリンピック、パラリンピックと同列として扱うことができるようになるのは、いかに一般社会の方々知ってもらうか、そのためには、やはりデフリンピックの知名度の向上だけでなく、スポーツ協会の統一化は大事なことではないかと感じます。デフリンピックに参加することだけでなく、「勝利」を強く求められている今、競技者の

新規発掘が大事となってきます。特に聴覚支援学校の競技人口が減っており、一般社会の中から発掘することが非常に重要となってきます。しかし、それにはデフリンピックを魅力的な大会にする必要があり、もし認知度が高ければ挑戦してみようという前向きな気持ち、環境の理解などプラスに働くだろうと考えます。

これまでのデフリンピックに関わる環境とはかなり違った本大会をきっかけに、さらなるステップアップを目指すことが今後の課題となるでしょう。そのためには、個々のスポーツ協会が努力だけでなく、横断的な共同活動、国や各都道府県などを巻き込み、障害者・障害のない人関係なく、スポーツという観点で捉え、プレーをする、観戦をする、支援するなど様々な取り組みが自然できるに環境づくりをしなければならないと思います。そのため、私としては様々な可能性を秘めている小学校、中学校などの教育現場と関わりを深めることで未来のアスリート育成、ポスターやチラシなどを施設等に掲示して認知度向上、そして国や統一されたスポーツ協会が連携して強化・普及を行い、各スポーツの競技力向上につなげる必要があると考えます。そして、事務的な負担や経済的な不安を取り除けるような新たなバックアップ体制があれば、より高度な指導や強化計画が可能となり、選手はトレーニングだけに集中することができるようになると思います。

最後に、本大会は本当にたくさんの方々からの応援、支援がありました。そのおかげで、皆さんの記憶に残るとても良いデフリンピックになったと感じています。本当にありがとうございました。

## 手話通訳 平 英司

### 1. 自己の役割とその評価

今回、私は手話通訳スタッフとして、男子バレーチームに関わらせていただきました。通常、手話通訳は特定のチームに属することは少なく、依頼があるごとに様々な講演やイベント等に行き、仕事をさせていただくわけですが、4年間の長きにわたり、チームに入り、通訳をさせていただいたのは、初めてでした。その意味でも、単なる「手話通訳」というよりも手話通訳を行う「スタッフ」としての意味合いも大きかったと思います。スポーツのチームのスタッフであるという事は、「チームを強くする」「試合で勝てるようにする」ということが、究極的な目的であり、その中で手話通訳を行うスタッフである自分に何が出来るかという事を絶えず、問いかけながら働いてきたつもりです。自分なりに、この4年間は精一杯、務めあげたつもりですが、手話通訳スタッフとしての課題も多く感じました。

### 2. 今後の課題

幸い男子バレーボールチームでは、スタッフ間でコンセンサスがとれ、手話通訳者がスタッフとしてどのような行動をとるべきか等確認や相談をしながら進めることができました。しかし、本来の手話通訳としての立場とは異なる、手話通訳スタッフとしての立場はマニュアルが確立されていないことも多いと思います。手話通訳を言語通訳の側面ではなく福祉やボランティアの側面で捉える傾向の強い日本では、なじみにくいかも知れませんが、ろう者の社会参加を推進するためには、手話通訳を職業として確立していく必要があると考えます。チーム事情が異なるため、全ての競技チームに共通したマニュアルを作ることがよいとは限りませんが、手話通訳者・手話通訳スタッ

フへのある程度の指針を全体で示したうえで、少なくともチームで雇用契約を行う際に業務内容を明確にしておくことも必要になってくると感じました。

また、スポーツ手話通訳の養成の課題も感じました。スポーツ通訳では、各競技に精通した知識を有することが求められます。しかし、知識を有しているだけでは対応できないスポーツ通訳独特の特徴もあります。手話表現の中でも特に写像性の高い表現（CL）の活用や通訳者の立ち位置など、通訳者としてのレベルの高い能力が求められます。また、使用している手話が選手によって異なる状況の中で、どのような手話表現をしていけばよいかなども考えなければなりません。

このような専門の知識を有し、レベルの高い手話通訳ができる者の中で、合宿や2～3週間の大会に参加できるという条件を満たす者を、日本で見つけること自体が困難な状況だと言えます。海外では、医療や司法など各専門分野での手話通訳の養成が行われているところもあると聞きます。今後、日本でもスポーツ手話通訳の養成に向けて取り組んでいくことを期待しています。

他にも、平自身は（日本）手話－日本語の通訳としてチームに帯同していたのですが、選手への聴力検査等では国際手話から日本手話への通訳なども求められました。幸い、トルコ語－日本語通訳の方が一緒にいてくださり、その場はしのげましたが、国際手話の通訳者や英語の通訳者などを各チームが有して、対応していくとなるとそれなりの予算も必要となってきます。チームでは予算のない中で、聴力検査やドーピング検査、開会式や閉会式などの際の日本の選手への情報保障の在り方を考えさせられました。

最後に、このような機会を与えていただきました関係各位の皆様、選手の皆様、本当にありがとうございました。

## 選手 狩野 拓也

### 1. 当初の目標（自己目標）

金メダル

### 2. 結果に対する評価

前回大会よりは上の成績を残せましたが、目指す所ではありませんでした。

### 3. 今後の課題

選手村の課題

- ・ランドリーが十分なキャバを確保出来ていなかったこと
- ・食堂のハエ駆除が不十分であったこと
- ・食堂のメニューのバリエーションが乏しかったこと  
(特に肉は宗教上の配慮の為か鶏しかなかったことは残念でした。)
- ・部屋にクーラーがないこと
- ・首から下げる選手IDカードを試合前に現地スタッフが回収し、試合後返却の際、何人かの紐の部分に付けていたピンバッジが無くなっていたこと（盗難）

男子バレーの課題

継続的な活動が出来なかったことが今回の敗因の1つと考えます。4年前のデフリンピックが終わり、前監督の辞任と共に一度チームが解散してしまい、新監督探しに1年と言う期間が費やされました。その時点で今大会へ向けての活動が非常に遅

れました。監督が決まってから初めて各地へ散らばる人材の発掘に着手したため、選手発掘作業も非常に遅くなりました。今回もデフリンピック直前にやっと発掘した有望な選手がいましたが、声を掛けるのが遅かったため参加が出来ませんでした。

また新体制がスタートしてからもJDVA 総GM、連盟の方針が二転三転し、合宿を定期的に行うことすら難しかったです。今回は男子スタッフの努力によりカバーした所が大きかったのですが、今後も同様の事が続けば我々の競技活動は消滅します。ぜひ運営の体制を今一度改めて頂きたいと思います。特に重要事項の決定が非常に遅く、届出書類など仕事の傍ら何度も無理を強いられたことが多かった点は早急に改善して頂きたいです。

メダル獲得へ向けてという思いは誰もが一致しており、それに向けての双方の意見のすり合わせを今後の課題としていきたいです。

## 選手 信田 光宣

### 1. 当初の目標（自己目標）

デフリンピックに出場して6回目のこの大会で「メダル獲得！」を目指し、月1回のペースで強化合宿を行いました。チームでは今まで以上に技術を高めるためには、お互いに細かくプレーを通して繰り返し練習を行ったり、過去になかった夜練習をしました。また、練習試合で欠点であるところについて皆でカバーできる修正力を高めてきました。

### 2. 結果に対する評価

今回メダルは取れませんでした。これは4年に一度のデフリンピックという大舞台においてプレッシャーが大きかったこともあったかもしれません。勝負というのは本当に分からないものだと感じました。2大会ぶりに決勝トーナメントへ進出できましたが、ベスト4の壁は厚かったです。男子の世界レベルは高かったですが、日本は全力を出し切り、結果的には世界レベルに近づいていたと感じました。

### 3. 今後の課題

今後の課題について、初戦に勝つことが大事だと思います。勝つためには、心技体の3つの大きさとバランスを取らないといけません。バレーボールは個々の選手にいつ何が起きるか分かりません。そのためには何かあっても対応できるよう「心技体」の3つのバランスを大事にし、試合のために準備を出来る身体を作る必要があります。

## 選手 秋元 翔馬

### 1. 当初の目標（自己目標）

チーム目標

メダル獲得

個人目標

ブロックをしっかりする事、Aクイックのコース打ち分け、カバーブロックを忘れずに行う事でした。今回、初めての出場でこの目標で大丈夫なのか不安もありました。世界レベルも実際に見た事がなく、更にブロックの時、相手が上げたボールに追いついて行くのに遅い方なので足を引っ張るかもしれないという不安もあって自分の実力で通用するのか心配でした。

### 2. 結果に対する評価

私が試合に出たのは、ベネズエラ戦、トルコ戦、ブラジル戦、ロシア戦でした。その中、自分にとって一番良かった内容なのはブラジル戦でした。なぜならサーブ、Aクイックで点を取る事ができたからです。世界相手から取ったたった1点でも大きな点なので、今までにない喜びを感じました。しかし、センターの一番重要であるブロックが駄目でした。1回も止めることはできません。体幹不足、ブロックの形が悪い、高さが足りない等、足りない部分を勉強できました。

### 3. 今後の課題

次の課題は、やはりブロックです。強打を止める腕力、ブロックの形を磨いていきます。また、Aクイックを打つ時ネットを少し離れ、コース打ち分けをマスターしたいです。自分はまだまだなので、活躍できるような力を身につけるために日々トレーニング、練習をコツコツやり、チームの力になるようがんばりたいです。

## 選手 若原 正享

### 1. 当初の目標（自己目標）

- ・自身4度目の出場となる今大会においては、メダル獲得（3位以上）である。そして、前大会ではセットも奪えずに予選敗退を喫したので、負のイメージから脱却すること。
- ・強化合宿で取り組んだ、サーブで相手を崩して我々が有利となる試合展開に持ち込み、不利な状況になっても自滅によるミスをせずに、次の攻撃に備えて繋げる試合運びをすること。
- ・私の役割（ポジション）は、オポジット、サイド、セッターであり、スターティング起用や途中交代によらず、持てる力を発揮し1点1点を積み重ねることに注力すること。

### 2. 結果に対する評価

予選3位で決勝トーナメントに進出しましたが、結果は7位入賞でした。前大会結果を上回ったことに評価する一方、当初の目標を達成出来なかったことは悔いが残ります。ただ、苦しい展開が続く試合内容でしたが、有利な試合運びを意識してプレーすることができたと感じています。しかし、全体的にサーブが弱く、相手に良いようにやられてしまいました。

個人としてはスターティング起用でセッターとして試合に出場しました。前大会までのアタッカーの経験を活かし、アタッカー目線で1本1本丁寧に欲しいトスを考えながら、トスを供給することに集中しました。結果、常に正確なトスをあげることはできませんでしたが、どんなボールも諦めずに拾ってくれたレシーバーと上げたトスを打ちきって決めてくれたり、繋いでくれたりしたアタッカーには感謝しています。

### 3. 今後の課題

サーブの強化、相手に不利な状況を作るアタック、ブロックとレシーブの関係の精度向上等の技術的な課題は当然ですが、なによりも国際大会で戦うためのメンタルの強化が重要であり、試合の入り方（雰囲気作り、気持ちを高める等）、会場や相手チームの雰囲気に呑まれないチームの結束が必要であると感じました。

## 選手 高橋 竜一

### 1. 当初の目標（自己目標）

メダル獲得（3位）以上

### 2. 結果に対する評価

結果は7位でした。今回のデフリンピック参加にあたり、多くの方々から応援とご支援を頂き、ぜひメダルを！とご声援をいただきました。その期待に応える事が出来ず、大変申し訳ない気持ちです。

多忙な時期に関わらず心地よく「頑張ってきてよ！」と送り出してくれた職場をはじめ、全面バックアップして下さった豊田自動織機、豊友会バレー部、仲間、家族のエールを胸に過ごした幸せな2週間でした。

今後、この感謝の気持ちをどんな形であれ、少しずつ還元出来るよう精進してまいります。

### 3. 今後の課題

自身としては3回目のデフリンピックに挑戦させていただきました。前大会の予選敗退メンバーの一人であったため、何も出来なかった悔しさだけで今日までやってきたように思います。そういった意味では予選を突破することが出来、一つ肩の荷がおりたような気がします。

今回、バレー日本代表として15歳～46歳までと若い世代からベテランまで選ばれました。ベテランになるにつれて、リスクを恐れ安全志向や確率論になりがちですが、若手が持っているキラキラ感は良くも悪くも感心させられます。ミスを恐れず純粋に、本能に従う姿にはたくさんの刺激を頂きました。良くないと思った事に対しては、こうの方がもっと良くなるのではないかと提言はしますが、口で言うよりもやって見せる姿が重要であると痛感しました。自分自身、まだまだ出来てと思っていますので今後も地道に頑張っていきます。

大会期間中24時間、共同生活を送ると非常にストレスが発生します。しかし、自分との違いを知ることでプレーに繋がる面も多々あると感じました。そしてストレスを軽減させるのに一番効率的なのが、挨拶でした。朝一番の『おはよう』をどれだけ気持ちを入れて言えるかでその日の雰囲気は全く違いました。また、見えない部分でフォローをしてくれた人への「ありがとう」の一言で皆が気持ちよくなりムードが良くなり勝利に繋がっていきと確信しました。日常生活においても当たり前なことではありますが、挨拶を心がけていきます。

今後も引き続きデフリンピックという大舞台での経験を後輩達に伝えながら、一緒に夢を持ってバレーを楽しめる仲間を増やしていきます。

## 選手 吉田 翔

### 1. 結果に対する評価

2016年7月にワシントンDCで世界選手権が開催され、世界の壁を痛感させられました。また、日の丸を背負うプレッシャーで思うようなプレーができないのも悔しかったです。それから自分なりに対策をしたつもりですが、それでも世界の壁はやはり高かったです。今回スタッフや佐賀県をはじめとした様々な方々の支援のもと、初めてデフリンピックに参加させてもらいました。人生において大変貴重な経験だったと思います。結果としては準々決勝でロシアに敗戦となり、メダル獲得には

なりませんでした。7位入賞となりました。改めてメダルを獲るには選手やスタッフの環境を整えることが重要と考えさせられました。

### 2. 今後の課題

デフバレーの選手達は高校生から社会人と幅広い年齢の方がおり、高校生はチームに所属しておりますが、社会人ではなかなか所属できず、ボールを使った練習が思うようにできない人がほとんどだと思います。私は幸い母校で練習できていたのですが、後輩の練習が優先であり、自分の強化したい練習ができないということもありました。世界の壁を越えるには選手達の練習環境を整えることも重要だと思います。スタッフの方々も多忙の中選手達のために練習環境を作ってくれようとしてくれましたが、経費等の関係でなかなか実現できませんでした。もちろん日の丸を背負っているという責任のもと、言い訳せずこのような環境でも選手は自分でなんとかしていくという努力は必要ですが、モチベーション維持が難しいです。スポーツの世界では成績が全てだと言われているのは承知していますが、デフバレーの男女間でジャージなどの支給を含めた様々なところに不公平な所が一部あったと考えます。再度体制などの見直しなども必要と考えます。

## 選手 加賀 充

### 1. 当初の目標（自己目標）

- ・メダルを獲ること。
- ・セッターとしてスパイカーが踏み込めるようなトスを上げること。
- ・ネットから1mを離れたトスを上げること。
- ・トスを上げたらブロックカバーに入ること。

### 2. 結果に対する評価

- ・男子バレーボールは7位入賞でした。
- ・前大会では予選リーグで1勝することもできずに予選敗退しましたが、今回のデフリンピックでは予選リーグでは2勝2敗、3位で決勝トーナメント進出することができました。準々決勝はロシアにストレート負けでしたが、もし勝てばベスト4に入り、メダルが獲れそうな位置だったと思います。

全体的に振り返ってみると、セッターとしての仕事は完璧に成し遂げられていないと思われ。理由として、トスがネットに近かったり、スパイカーが踏み込めるようなトスを上げることができなかったプレーが目立っていたと思います。しかし最後のアメリカ戦では悔いのないようなプレーを発揮し、7位入賞することができました。セッターとしての仕事を成し遂げたと思います。

### 3. 今後の課題

他国（イラン、トルコ、ウクライナ等）の平行トスが早いと思いました。自分のトスは山なりのオープン気味のトスが多かったと思います。それはスパイカーと合わなくなると思い、オープン気味のトスが多かったからです。後は合宿中や普段の練習から平行トスを上げるように意識が必要です。

また、サーブとブロックの強化が必要であると思われ。今後練習試合で相手が乱れるようなサーブを打ったり、ブロックのタイミング、位置を確認したりするような細かいプレーを意識する必要であると思われ。

## 選手 成木 俊介

### 1. 当初の目標（自己目標）

- ・勝ちに繋がる攻めのサーブで点を稼ぐ。
- ・自分は身長が低い為、ブロックでワンタッチを多めに取って、繋ぎのバレーを展開する。
- ・スパイクでは、空いている所にフェイントするなど、頭脳プレーで点を取る。
- ・デフリンピックでメダル獲得が目標。

### 2. 結果に対する評価

予選リーグ1試合目のイタリア戦では、スパイク決定率50%と良いスタートを切りましたが、予選リーグ3試合目のトルコ戦では、1セット目の最初から連続失点してしまうなど、チームの雰囲気が悪くなった場面で途中交代させられ、以来4試合目のブラジル戦、決勝トーナメント1回戦のロシア戦まで、1度も試合に出られませんでした。自分はコートへの入り方や気持ちに問題があって、試合に出られなかったのではないかと反省し、試合に出してもらえようコートに入った時から大声を出してチームを盛り上げながら、アピールしました。その甲斐あって、順位決定戦のブラジル戦の2セット目途中から最後のアメリカ戦まで試合に出してもらいようになり、声を出しながらセンターの役割を全うしました。最終成績は7位となり、メダルを逃すなど、結果はあまり満足出来るものではありませんでした。個人的には、ブロックを多めにし、ワンタッチを取った時は良い試合展開になる場面があり、手応えを感じましたが、スパイクやサーブは勝ちに繋がるプレーが出来なかったのと、7試合中4試合しか試合に出られなかったので、センターとしてチームにあまり貢献出来なかったと思います。

### 3. 今後の課題

世界ではブロックやサーブが強いチームが勝つので、それを強化する必要があると思います。

組織力はとても良かったので、今後もコート外でも、気配りや思いやりを大事にし、自ら率先して仕事を指示出来る人が一人でも増えれば、更に組織力が高まって行き、メダル獲得に近づけると思います。

## 選手 加賀 辰樹

### 1. 当初の目標（自己目標）

メダルの獲得は当然ですが、安定したプレーを目指す。

### 2. 結果に対する評価

7位という結果で、順位も個人的なプレーも納得いくものではありませんでした。

### 3. 今後の課題

まず、フィジカルの問題が挙げられます。身長はもちろん、体格も海外の選手の方がはるかに上であることは言うまでもありません。そのため、フィジカルをテーマに監督及びスタッフの指導を受け、取り組み、また2016年の世界選手権で改めてフィジカルの重要性を再認識しました。しかし、内容がベンチプレスやスクワット、デッドリフト等筋肉を拡大するようなトレーニングばかりで、確かにフィジカル面では向上したものの自分のポジションに果たして結びついているのだろうか疑問

を感じました。自分のポジションでは、パワーを使うようなプレーは少なく、むしろ敏捷性を要します。もちろん、ここまでやってきたトレーニングは財産となっており、プレーも向上してきたのは事実ですが、+αとしてポジションに合ったトレーニングを加えれば、更なるパフォーマンスが向上したかもしれません。また、合宿でトレーニングの指導を受けたものの、次の合宿まで期間が長いので各自でトレーニングをするのが基本ですが、義務ではありません。普段の生活から日の丸を背負っているという自覚が足りなかったのではないかと思います。義務化すれば、トレーニングせざるを得なくなるため、日本代表という自覚が自動的に植えつけられるのではないのでしょうか。つまり、普段の生活から日本代表であるという意識が薄かったことがこの結果に至ったと考えます。

最後になりましたが、臨機応変に対応する力が欠けていたことも結果に対する要因の一つと考えます。合宿で様々な約束事を設けたとしても、試合前に違う指示があった場合、それに従えず、従来の約束のままプレーしてしまったことが散見されました。指示通りにいけばボールが拾えた上に流れを変え、勝利につなげられたのではと考えると、指示をうまくインプットできなかったのが大変悔やまれ、課題の一つとして受け止めます。

## 選手 千原 浩平

### 1. 当初の目標（自己目標）

人生初のデフリンピック、ピンチサーバーとしての目標は、少しでも多く点を取ってチームの雰囲気を変えたり、流れを変えたりすることが目標でした。実際ピンチの時に出るので、初めての大きな舞台で最初は緊張しました。サーブは自分の力を最大限発揮することができましたが、レシーブなどほかの技術面では各国のスパイクに慣れず、あまり拾うことができませんでした。大会中の練習で決まったフォーメーションなども実践になると体が動かず、取ることができませんでした。先輩達のプレーは4年間かけて作り上げてきた集大成のバレーであり、今年から入った自分に真似できないプレーで、いい試合でした。

### 2. 結果に対する評価

2大会ぶりの予選突破で結果は10か国中7位でした。自分としてはもっと上にいけたのではないかと思います。それは、自分だけでなくチームみんなが思っていると思います。世界のバレーをみて聞こえる人と変わらないプレーの中で今の日本の実力がわかりました。幅広い年齢層で今大会は若い人たちが活躍したのも確かなので、そこがチームを伸ばす鍵ではないかと思いました。予選突破したときは一安心しました。

### 3. 今後の課題

今回のデフリンピックは7位という結果でしたが、勝てる試合ももっとあったと思います。今大会で離れてしまう選手もいます。これからは若手組が中心となると思うので、自分たちがプレーの質を上げないとメダル獲得ができないと思います。これからの練習や試合も互いのミスなど言い合ってボールを落とさないよう練習するのが今後の課題だと思います。

## 選手 坂下 真一

### 1. 当初の目標（自己目標）

リベロ選手として出場し、目標は金メダルを獲得することでした。

### 2. 結果に対する評価

予選リーグ戦では、イタリア3-1、ベネズエラ2-3、トルコ3-0、ブラジル0-3。2勝2敗、予選リーグ戦Aグループ3位で8年ぶりの決勝トーナメントに進出できました。決勝トーナメント初戦では、ロシアと当たり、0-3のストレート負けを喫しました。順位決定戦では、予選リーグで勝ったブラジルにフルセットまで持ち込むも、3-2で負けてしまいました。

7-8決定戦では、アメリカと対決し、1-3と最後に勝利を収める事が出来ました。日本男子バレーボールチームは、10ヶ国中7位でした。今大会は金メダルを目標にしていたが、少しも近づくことができず、とても残念に思いました。敗因は海外チームと比べ、高さやパワーは遥かに劣り、ミスによる失点が多かったことです。日本は高さやパワーがないので、技術で勝つ必要があると感じました。

### 3. 今後の課題

チームとして3つの課題があります。まず、サーブの強化です。サーブで相手を崩し、チャンスからの攻撃で流れを作ること。次にレシーブ力です。レセプションやディグで粘り強く拾い、簡単に失点しないようにすること。最後にミス減らすことです。眞鍋監督時代の全日本女子バレーボールチームが掲げていた、世界一になるためのテーマでもありました。日本が世界一になるためには、サーブ、レシーブ、ミスの少なさ。これらのテーマは必要不可欠だと思いました。

個人の課題は、オーバーハンドレシーブと読みの力です。上半身に来るスパイクに対応できなかったり、スパイクコースの読みを誤ることが多かったです。これからトレーニングはもちろん、練習時に失敗したら、すぐフィードバックするように心がけたいです。

今大会を終えて、結果に対する悔しさだけでなく、感動もたくさんありました。現地のボランティアは私達を手厚くサポートし、試合まで応援してくださいました。また、トルコの方々もとても親切で、私達に温かく接してくださいました。国境を越えてたくさんの交流ができてうれしかったです。4年後のデフリンピックはまだ決まっていない状況ですが、また日本代表に選ばれたら、次こそメダル獲得を目指して努力していきたいです。

## バレーボール競技女子チーム

## 監督 狩野 美雪

### 1. 選手・役員の選考基準・方法

選手の選考基準について

- ・金メダルを獲得するために必要なスキルを身に付けていること。
- ・体力、精神力ともに外国で約20日間の遠征、かつ7試合の連戦に耐えられること。
- ・戦術戦略やチーム理念を理解し、チームの一員としてチーム

プレーに徹することができること。

- ・日本代表としての誇りを持った行動を常にできること。

- ・その他

スタッフの選考基準について

- ・チームの方針や目標に賛同し、持っているスキルを遺憾なく発揮できること。
- ・常にチーム優先で行動できること。
- ・パフォーマンスファースト（アスリートファースト）で行動できること。
- ・経験が豊富で各場面で正しい判断ができること。
- ・その他

### 選考方法

2014年度から約3年にわたり、月に1回程度の選考合宿を行い、参加人数は40人以上いました。その中には自薦や他薦で合宿に参加してきた選手や、聴覚障害者大会の視察、聞こえる人の大会に出ている聴覚障害選手の情報収集・視察を行いスカウトして合宿に呼び込んだ選手もいました。選手・スタッフともに、日本代表としてのスキルを持っていることはもちろん、体力的・精神的にタフであること、チーム競技である以上コート内外での振る舞い、態度にも注視し選手選考を行いました。

結果としてデフリンピックでは全員がチームが勝つために正しい行動をとることができました。海外生活や長丁場の大会においては、競技スキル+αの部分、チーム内の役割分担のバランスも重要な選考要素だと考えます。また、国際大会は国内の大会とは明らかに対戦相手の質が違うので日本国内の試合での出来だけでなく、外国人と戦うことを常に想定してメンバー構成を考える必要があると強く感じます。

### 2. 総評

女子バレーボールは結果として16年ぶりの金メダルを獲得し、最高の結果でデフリンピックを終えることができました。

#### ①事前国内合宿（選考・強化）

2014年度から月に一回程度の合宿を行い、40人以上の選手が先行合宿に参加しました。約3年間選考をしながら選手の技術体力の底上げ、代表としての意識改革を徹底して行いました。その中には最初から最後まで合宿に参加した者もいれば、直前になって合流した者もいましたが、途中から入ってくる選手にはこのチームのコンセプトやルールを理解してもらい、それに則って行動できる者のみを招集しました。日本での練習ゲームでは相手チームの早いリズムに翻弄される場面が多く、自分たちに迷いが生じたり、リズムを作ることが非常に難しかったです。加えてディフェンスもしっかりしているので、打っても打ってもスパイクが決まらず、何本も打っているうちにこちらがミスを出して自滅してしまうケースが多く見られました。ただ、いざ外国のチームと戦ってみると、高さはあっても自分たちが緻密にミスなくプレーをすれば相手がミスを出すので、日本とは全く逆のゲーム展開となりました。日本で練習ゲームをした時に、先にミスを出さないことや、しつこくレシーブをしてつなぐことなど、相手チームのプレーを見て海外における自分たちのあるべき姿を見出すことができたことも勝因の一つだと考えます。日本の大学生や企業チームに比べれば海外のスピードは遅く見えたのではないだろうか？また、村井コーチを始め、時には実業団の現役選手に練習に参加してもらい、外国人の高さやパワーに備えたことも良かったと思います。

#### ②トルコでの生活・コート外での振る舞い

トルコに渡ってから選手たちには、まず今まで出来ることは全てやってきたので、あとはいかにバレーボールの神様に微笑んでもらえるかを考えて生活するようにと話をしました。試合や練習はもちろん、整理整頓や挨拶、食事やチーム内での仕事振る舞いなどを選手たちは意識して生活しました。もちろん個々の思いや細かい問題点はありましたが、それをいち早く解決していくことでチームの問題として引きずることはありませんでした。チームとしての目的意識がはっきりしていたので、誰一人ブレることがなかったと思います。

### ③本番・試合

#### 初戦 対イタリア

どこのチームのデータもない中、ヨーロッパ選手権2位のイタリアと当たるということは非常に緊張感のある初戦となりました。前回のデフリンピックではセンターのAクイックが中心で、非常にポテンシャルの高い選手が小気味良くセンターから打ち分けてくる印象でした。試合前の練習で、前回センターに入っていたエースがサイドスパイカーにポジション変更していることがわかったので、センターは警戒しつつもエースを徹底的にマークすることにしましたが、データはないのでまずは自分たちのバレーボールを確実にやっていくことを目標に試合に入りました。試合に入ると日本のサーブが走り出だしから連続ポイントを獲得、そのままの勢いを持って3セットを連取することができました。ある程度の点数差が開いたので、試したい選手やポジションを試すことができ、幸先の良いスタートを切ることができました。

#### 2戦目 対カナダ

カナダは前日のロシアとの対戦を視察し、ある程度の実力差があることは分かっていたので、自分たちのやるべきことの確認や、チーム全員を出場させ最終日まで戦う準備をしっかりとしたいと思って試合に臨みました。1セット目の出だしは今までのスターティングメンバーということで、相手を全く寄せ付けない展開になりましたが、2セット目にメンバーチェンジをしてからリズムを掴みきれなかったことが今後の課題となりました。

#### 3試合目 対トルコ

地元トルコの試合ということで体育館はいつもと違う雰囲気の中、試合がスタートしました。トルコは全体としては決して大きくはありませんが、2番、14番の高身長で2人でツーセッター制をとっており、トスを上げるのも打つのもほとんどがこの2人なので1本目をしっかり狙えばブロックが絞りやすかったです。難しい試合ではありませんでしたが、相手の良いプレーに対して観客の盛り上がりがすごく実力以上に点数を取られる場面が多く、アウェイゲームの難しさを感じました。

#### 4試合目 対ロシア

予選リーグ最大の山場と考えた試合でした。昨年行われた世界選手権では日本よりも上位の格上ということもあり、この試合に勝敗によって予選順位が変わってくるのでしっかりデータをとって試合に挑みました。ロシアはまんべんなく身長が高く、セッターに返球が返ると速いAクイックがあるのでいかにレシーブを崩して速攻を使わせないかが勝負となります。試合が始まると日本のサーブが走り、1セット目はロシアのレシーブフォーメーションの穴を攻めて楽な展開でとることができました。2セット目以降は相手がフォーメーションを修正してきた

ことや、高いブロックに苦戦したが、最後まで粘り集中力が切れることはありませんでした。前日のトルコ戦で少し中だるみして相手の実力以上に苦戦したことが結果として良い薬になった試合になりました。

#### 5試合目 準々決勝 対ブラジル

予選リーグ1位通過により、Bグループ4位通過のブラジルと対戦できる組み合わせとなりました。日本チームの力をしっかり発揮すれば決して苦戦する相手ではありませんが、3番の選手は大会一の身長とポテンシャルがあるので、3番の選手がバックにいるときに確実に連続得点をとることが大切でした。1セット目の出だしは日本のサーブが走り連続得点を取り、途中からメンバーチェンジを行い、控えの選手にも経験を積ませることができました。2セット目の出だしからスタメンの中に何人か控え選手を入れてスタートをしましたが、リズムが崩れてリードを許す展開となってしまいました。最後は交代して出た選手の連続サーブポイントでなんとかセットを落とさずに済みましたが、改めてバレーボールはリズムのスポーツだと怖さを感じました。また、変わって出る選手の重要性も改めて感じることができた試合でした。

#### 6試合目 対ウクライナ

この大会最高の山場となったこの試合では、まず会場が変わって大きな体育館で初めて試合を行うこと、相手が過去一度も勝利したことがないウクライナであることで、念入りに準備を行って緊張感を持って試合に臨みました。空き日の練習ではほとんどの時間をウクライナ対策に使用しました。

ウクライナはほかの国に比べてミスが少なく、Aパスが返った時にはクイックやブロードなど高さのあるセンター攻撃を仕掛けてきます。対策としてはまずサーブを強く打ちAパスを返させないこと、Aパスが返ったときは1番のミドルプレイヤーを徹底的にマークして、それ以外の選手が打ったスパイクは確実に拾っていくことをチームの約束としました。

1セット目は出だしのサーブが走り、体育館の感じもしっかり掴んでいるようで日本の連続得点が入りセットを奪いました。しかし2セット目は出だしから大量リードを許してしまい、ミドルのブロード攻撃にもなかなか対応できず終始相手に先に行かれる展開となってしまいました。驚異の粘りで21-23から逆転でとると、3セット目は勢いを持って、競りはしたものの自分たちのプレーをしっかり行うことで結果ストレート勝利を果たしました。2セット目を取られていたらこの試合は難しい試合になっていたと思いますが、本当に選手たちが集中して相手に付け入る隙を与えませんでした。

#### 決勝戦 対イタリア

決勝戦は初戦で当たったイタリアとなりましたが、昨年の世界選手権で絶対王者となったアメリカを撃破して初戦の時とは全く違う顔になっていました。バレーボールは勢いのスポーツなので、波に乗っているチームというのは非常に警戒が必要です。日本チームがしっかり自分たちの実力を発揮できれば問題ないとはいえ、普通にできないのが決勝戦のプレッシャーです。準決勝のアメリカ戦では粘ってレシーブをして1番にボールを集め高さのあるスパイクが面白いように決まっていたため、前日の練習ではまず徹底的に1番のエース対策と、ミドルプレイヤーの得意コースの分析を行いました。結果としては練習したことを選手がいかに試合で発揮し、1セットも取られることなく完勝しました。イタリアはアメリカ戦の時とは違って変

わって、サーブが良くレシーブを拾いミスを出さない日本チームの対応ができていないようでした。1セット目の最初から日本が勢いを持ってペースをつかみ危なげない試合でした。

まずこのチームにも言えることですが、スパイク練習だけ見るとどの国も日本よりも素晴らしいスパイクを打っていて、とても強く見えます。しかし、いざ試合になるとレシーブが返らないのでその素晴らしいスパイクを見ることがほとんどありません。バレーボールにとって、1本目のレシーブ（パス）と2本目のトスがいかに大切なことであるかを再確認しました。

優勝できた背景には選手やスタッフのこれまでの努力や選手村での過ごし方や意識の持ち方など上げれば切りがないですが、まずは戦術的なポイントとして2点挙げられます。

#### ①セッターの安定

セッターというのはバレーボールにおいて最も重要なポジションです。どんなに良いスパイカーを集めても攻撃の起点となるセッターが弱ければチームは機能しません。日本チームのセッターはチーム最年少16歳の高校生で、前回のブルガリア大会時のセッター最年長35歳の選手と比べるとその差は歴然です。日本で合宿を行っているときは正直このセッターの不安定さが一番の不安要素でした。

しかし、いざ試合になってみると今までとは別人のように終始冷静で安定したプレーをしていました。短期間での急な変化は、本人の努力はもちろん周りのサポート、そしてなによりも相手が外国のチームということで戦術的にはっきりして迷うことがなく丁寧に上げることに集中できたのではないかと推測できます。考えすぎは動きを固くしてしまうということを指導者としても再確認しました。

#### ②ミドルプレイヤー

デフリンピックでは日本チームの中で最も高さがあり、ブロック力のある山崎・宇賀耶の2選手をサイドスパイカーからミドルプレイヤーにポジションをコンバートして外国のチームの高さに対抗しました。2選手は本来レシーブも出来て攻撃力もあるので、スパイクを多く打ち点数を取りに行くタイプの選手ですが、2人の攻撃回数を減らしてでも真ん中の高さは重要だと考えました。2選手の攻撃力を考えると正直リスクもありましたが、点数を取ることは他の小柄選手でも十分に可能だと考えました。結果としてこの戦術は非常に機能し、相手の攻撃力をブロックでかなり封じることができました。本来サイドスパイカーというのはエースと呼ばれ、スパイクをたくさん打つのが当たり前という考えがあるので、スパイクを打つ回数が減ったことは2人にとって非常にストレスだったに違いありませんが、しっかり戦術を理解してチームプレーに徹して貢献してくれたことは本当に感謝したいと思います。ブロックが安定したことでレシーブが上がり、他のサイドスパイカーが好調だったこともあってブロック→レシーブ→スパイクポイントという好循環が生まれました。それに加えて、2選手は元々サイドスパイカーでレシーブができるので、リベロをミドルに限らずその試合によって必要なところに配置することができました。

他にも数人の選手が複数のポジションをこなせることによって、相手に応じて色々なメンバーで戦うことができ、長い連戦を一人の選手だけに負担が集まりすぎることなく乗り切ることができたことも勝因の一つに挙げられます。

### 3. 今後の課題

#### 選手のサポート

伝説を作ろうと言って臨んだ大会で結果として1セットも奪われることなく完全優勝することができたことは、文字通り伝説の1ページ目となったといえます。しかし、日本のバレーボール史上2大会連続で金メダルを獲ったチームはまだありません。次に2大会連続で金メダルを取るという前人未だの事をやり遂げて初めて本物の伝説と言えるのではないのでしょうか。今回は金メダルを取れたものの、私個人としてはまだまだ強いチームになったとは思わず、やるべきことは山積しています。今現在デフバレーボール競技はまるで1964年の東京オリンピックから数回のオリンピック時のように諸外国のチームがまだ日本の技術に追いついていない状況なので、今のところ結果が残っていますが、いずれ他のチームが技術を向上させてきた時、今のままでは確実にオリンピックの二の舞になると感じています。日本が今以上に強いチームを作るためには、まずは選手の発掘・強化育成となりますが、選手の練習やトレーニングを行う環境はまだまだ良いとは言えません。私たち日本代表チームは月に一度しか選手に直接指導を行うことができません。以前より選手には口を酸っぱくして言ってきましたが、まずは個の力の強化（普段の地元での練習やトレーニング）が最も大切なので、選手がいかに時間と場所を確保できるかが重要です。残念ながら今現在では学生以外の選手はボール練習を週に1、2回、トレーニングも数える程しかできていない上に、専門の指導スタッフに指導を受けることはほとんどないということが大きな課題となっています。現代ではスポーツを行うことはお金のかかることで、これを全てアフター5に自分のポケットマネーで行うとなるとなかなか機会がないことも頷けます。デフリンピックに行くにあたって自己負担金がネックとなっています。このあたりを解決し、選手の練習環境を整えていかなければ今後金メダルを獲り続けることは難しいです。サポートシステム等の整備やスポンサーの確保、デフリンピックの知名度を上げて企業に活動を理解してもらうなどの努力をしていかななくてはなりません。

#### スタッフのサポート

最後に金メダルを取れた鍵の一つに、スタッフの献身的な努力が上げられます。選手や監督だけが表に出がちではありますが、スタッフが陰ながら大量の仕事をこなし、常に選手、チームをサポートしてきました。今回のデフリンピックの結果はこのスタッフの努力なしでは絶対になし得ることはできなかったもので、監督としてこの場をかりて感謝を述べたいと思います。

しかし、先にも述べましたが、今後デフスポーツを強化していくためには、選手の環境を整えるという話は当たり前のように毎回出ますが、選手の環境面を整えるためにサポートするスタッフの環境面については注目されることはありません。私たちのようなチームスポーツは一度合宿を行うために選手・スタッフ合わせて毎回約20人以上が集まることになり、そのために毎回選手の選考、その通知、約丸2日間使用可能な体育館の確保、交通チケットの手配、宿泊施設の手配、食事やミーティング会場の手配その他など莫大な手間がかかっています。それを専門ではないスタッフが本業外の時間を利用して行っています。昨今公共の体育館事情は厳しくなり、体育館の確保に毎回苦労し、場所が決まらないとその他すべての準備はできないので毎回毎回それらは一部の事務スタッフの負担となっています。（会計業務等の苦労もありますが、ここでは合宿準備についてのみとします。）

現場の指導については監督、コーチがメインで行ってきた中で合宿の都度練習パートナーとして経験豊富なサポートスタッフに練習に参加してもらいました。デフスポーツも競技レベルを上げていくためには、より専門性の高い指導を受ける必要があります。団体スポーツは人数が多いので到底2人だけでは全員に十分な練習をしてあげられない時もあります。デフバレー女子チームは今後もっと選手のレベルが上がっていくことが想定されるので、中途半端な知識や経験では選手に先行されてしまいます。専門性の高い指導者の場合、その道のプロであるがゆえに指導で生計を立てています。正直ボランティアに近い状況で指導を行うことは時代に逆行していると言わざるを得ず、デフスポーツの指導そのものの価値を下げることになります。私たちスタッフは金メダルを獲っても金メダルはもらえないですし、表彰されることもありません。もちろん報奨金もありません。先述したように、個人競技とは全く違う団体スポーツならではの大変さもあります。デフスポーツは福祉ではないというのであれば、どうかスタッフにも価値を与え、ボランティアに近い状況でチームの犠牲にならなくてもいいような制度をしっかりと構築して次のデフリンピックに向かってもらいたいと強く願います。

最後に今回女子バレーボールチームは色々な歯車が運良くうまくかみ合って金メダルを獲得できました。日本での準備段階から選手スタッフの意識を高く持って準備を行ってきました。トルコに入ってから、現地語のわかるコーディネーターを独自で雇ったことが最終的に慣れない外国（英語のほとんど通じないトルコ）でチームとしてのストレスを減らし、選手が十分にパフォーマンスを発揮できることにつながったと強く感じます。

## コーチ 村井 貴行

まず、この5年間全日本女子デフバレーチームにコーチとして携わる機会を与えて下さった監督並びに協会関係者の方々に深く御礼を申し上げます。そして最高のスタッフ、選手には感謝の気持ちでいっぱいです。

今回のデフリンピック金メダルという最高の結果は、偏に日本女子デフバレーに関わった全ての人のおかげです。また、前年度の世界選手権4位の結果から見ても誇れるものであったと思います。そして、帰国後の反響の多さに金メダルの力は絶大で、凄いことを成し遂げたのだなと実感が湧いてきました。

全日本女子バレーボールチームは外国チームに比べ体格に劣る部分が多々ありましたが、直向きな練習態度、体調管理、最後まで諦めない姿勢、そしてチームの絆で勝ち取ったものです。これは、スタッフを含めたチーム全員が同じ方向を見てそれに向かって努力した結果であり、難しいことです。

また、大会本番は、選手の調子がとてもよく、デフリンピックにピークを合わせられたのも勝因の一つでしょう。私は、コーチとして練習から大会本番と客観的にこのチームを見てきて、その中で感じたことがあります。

- ・資金面で認められている女子バレーでさえ、いろいろな制限から金銭面、仕事面での考慮が少なく、選手個人の負担が大きすぎます。努力する動機が内発的動機に頼るしかありません。
- ・チームスポーツなので月1回の合宿では技術的な部分の習熟度を高めるには限界があります。各自、地元での練習環境の改善が必要です。
- ・基礎体力が乏しいです。普段の練習にかけられる時間と環境

の確保が難しいためではないかと思われます。

- ・狩野監督の人脈のおかげで、Vリーグのチームや強豪高校と一緒に練習や試合ができたことで、プレーの質やバレーボールに対する考えに幅が生まれました。これからも、もっとこういう団体や選手の力を借りていくべきです。

- ・聞こえる人とうろろ者がお互いをリスペクトし合える環境があることが重要です。女子バレーには、その環境がありました。

今後も課題はたくさんあると思いますが、今回のデフリンピックを通して、全日本女子バレーボールチームは上昇気流に乗れたのではないのでしょうか。その流れを維持し、さらなる発展をすることを願います。また、今度は海外のチームから追われる立場であることも忘れてはいけません。そして他競技の見本となり、デフスポーツ界全体を引っ張ってもらいたいです。

最後に、多くの方々の応援、協力、誠にありがとうございました。

## トレーナー 中川 菜保

### 1. 自己の役割とその評価

村内スタッフでトレーナーとしてチーム帯同し、試合時のウォーミングアップ・クーリングダウン、試合中の受傷など緊急対応を始め、村内では滞在期間中の村内生活におけるコンディショニングを担当しました。

大会期間中、12名の選手のサポートを村外スタッフのトレーナー1名と協力して行いました。試合・練習以外では村内で過ごす時間が多く、到着してすぐの時差調整や毎日の食事、試合がない日の運動量調整など、連戦や長期間の試合に向けての体調管理や体力維持が主な目的でした。

大会期間前半は、試合を含めて現地での生活に慣れるまでの注意や意識づけ、試合後のケア、リカバリーのためのセルフケア徹底、後半は連戦の疲労回復や食事の工夫、決勝トーナメントに向けて心身ともに選手のパフォーマンスの維持に努めました。選手のコンディションとしては、乾燥による喉の痛みや咳、食環境の変化による消化不良などの症状が数名にみられましたが、本部メディカルの協力を仰ぐこともすぐに可能だったため、いずれも軽症で済み、試合に差支えるような体調不良はなく大会期間を過ごすことができました。

選手たちのフィジカル面においては、大会以前より抱えている慢性的な外傷や、試合後の選手の訴えに対して、トリートメントの時間を設けて治療・回復に努めました。物理療法機器や鍼治療・テーピングなどの協賛支援もあり、そのおかげで、タイトな連戦スケジュールの中でも症状の悪化や、新たな外傷を防ぐことができました。総じて、決勝トーナメントまでの長い期間、特に主力メンバーの疲労は懸念されるところではありましたが、コーチングスタッフとの意見交換や選手本人とのコミュニケーションにより、アクシデントを回避しパフォーマンスを維持できたこと、チームの最大の目標に向けて選手自身が工夫と努力を継続してできたことが、金メダルという最高の結果を得られた要因と考えられます。選手のコンディショニングを担当するトレーナーとして、各選手がこれまでチームで培ってきた力を存分に発揮できた結果だと、このチームで活動ができたことに心から感謝すると共に、このような経験を今後のチームの活動や自身の仕事に新たに反映させていきたいと思えます。

### 2. 今後の課題

大会を振り返って、全体的にコンディショニングがうまくで

きたと感じています。食事については事前の情報で現地の食事内容についてあまり知ることができませんでしたが、日本食を持参し適宜使用できたことで試合時間に合せた食事や不足する分などを摂取することができました。

滞在期間の長い大きな大会では、食住環境に如何に順応できるかが選手のパフォーマンスに大きな影響を及ぼすため、事前にどれだけ情報収集ができるか、とそれに対応する準備が重要になると感じています。チームの場合は経験ある選手達やスタッフが提案やアドバイスをすることができるので、声掛けをして若い経験の少ない選手達のサポートができると安心です。選手団全体で、食情報に関する情報提供や、時差・気候に関する対応策などを共有できれば良いと思われま

す。チームとしての課題は、選手個人レベルでのセルフコンディショニングの取組みが次期代表チームの成長の一端となることを実感しています。怪我や体調不良を如何に減らせるか、如何にいつも通りのコンディションを保つことができるかが調子の浮き沈みの少ないチームを作ることに繋がります。総じて、今回のチームが得られた結果は、選手へのサポートだけでなく、コーチングスタッフや本部スタッフとの情報交換や連携がうまくいった結果と捉えています。

## 手話通訳 岡田 直樹

### 1. 自己の役割とその評価

#### ・自己の役割について

手話通訳者として、監督やコーチ、トレーナーなど聞こえるスタッフと選手・聴覚障害のあるスタッフとの間で、意思疎通を円滑にする役割を担いました。特にバレーボール競技の経験を活かし、戦術やゲーム構成などアスリートに必要な知識・技術をもって通訳にあたりました。また、任命を受けてからの4年間で通訳ニーズの広がり（スポンサーやマスコミなど対外的な折衝や取材の機会増）があり、1名の通訳者では限界を感じ、通訳の勉強もかねた知人の通訳者に応援を頼むことができました。自身は主に選手とスタッフ間の練習やミーティングの通訳を中心に通訳に集中することができました。

コミュニケーション面では、手話を知らない選手がいたため、話されている日本語も分かるように通訳を意識し、工夫する場面もありました。それだけでなくミーティング時に音声認識ソフトを試用し、文字での情報保障に努める試行も実施しました。デフリンピック期間中は、ミーティング、試合中の監督やコーチからの指示、選手からの相談に関する通訳などを行いました。若い選手は通訳活用に慣れていないこともあり、通訳を活用しながら情報を得てそれが自身の糧になること、聞こえるスタッフにとっても通訳は有益であることを情報提供する場面もありました。

#### ・評価

今回、長期間の遠征や大会に帯同しましたが、普段仕事を持っているため体力が持たないときもありました。そんな中、通訳者の2名体制で臨めたことは、通訳を最後まで続けられてきた理由の1つのように思います。通訳の質については、競技経験者ということもあり、より良い通訳パフォーマンスが発揮できたのではないかと自負しています。特に前回大会の課題として挙げられた専門用語を的確に通訳すること、監督やコーチの意図する戦術を的確に選手らに伝えることを受け、意識的に通訳したことが今季デフリンピック優勝につながる一助になれば幸いです。

また、通訳ニーズの広がりによる業務量増により、当初、応援をしてくれた通訳者がデフリンピックの前の年のデフバレーボール世界選手権の大会では、通訳者の役割を分業し、いち通訳者として力を発揮してくれました。このように選手とスタッフ間の通訳に集中する通訳者と、対外的な折衝の通訳者に分けて通訳者を分け、支援にあたる新しい体制は、評価すべき点であったと思います。人の輪が大きくなればなるほど、通訳者の業務量が増えていくことを今回は学ぶことができました。また、手話通訳者という役割だけでなく公式スタッフとして動くことも多々あり、既存の通訳者派遣制度の範囲内での学びを超えた、多くの体験や経験をつむことができたことも大きな成果と言えます。

### 2. 今後の課題

手話通訳＝仕事という認知度は相変わらず高くなく、ボランティアとして見られる風潮もいまだ根強くあります。国際レベルの大会における通訳者は通訳の質や競技の知識はもちろんのこと、人とうまく付き合っていけるだけの人間性や長期帯同にも耐えられる体力までも求められてきます。それに見合うだけの研鑽に伴う対価があって初めて、スポーツ通訳を担いたい若い通訳人材が増えていくのではないかと考えます。今後、スポーツ通訳を担いたい通訳者を養成するために自身で得た経験を活かしていきたいです。

結びに、このたび貴重な経験を下さった日本デフバレーボール協会の大川理事長をはじめ、理事の皆様、スタッフの皆様、選手の皆さん、多方面からご協力をいただいた関係者の皆様にお礼を申し上げます。

## ゼネラルマネージャー 大川 裕二

### 1. 自己の役割とその評価

#### ・自己の役割について

ゼネラルマネージャー（以下GM）として、関わった業務は以下の通りです。

#### ■大会前

- ・強化計画の立案、チーム予算管理・運用
- ・スタッフ・選手のスカウティングと選考
- ・メディアコントロール
- ・DP 派遣計画の立案

派遣予算調達、現地視察、現地スタッフ雇用、各種エントリー事務、ユニフォーム等チーム備品、用具の調達、

- ・関係団体との派遣調整（所属、連盟等）

#### ■大会中

- ・TD 会議出席
- ・ICSD バレーボールテクニカルディレクター、サムスン OC バレーボール担当者との調整
- ・日本選手団本部との調整
- ・監督・コーチ・トレーナー・選手、チーム全体の調整

#### ■大会後

- ・報告書のとりまとめ
- ・メディア対応（インタビュー、講演会の依頼調整）
- ・清算業務
- ・報告会企画・実施
- ・各種表彰等の事務調整

#### ○スタッフ体制

チーム運営の大前提として、聴覚障害者自身が真ん中で仕切っていくことにしました。スタッフは2013年DPのスタッ

フ5人に継続してもらい、予算に応じて4人のスペシャリストを追加しました。監督：元プロバレーボール選手であり、北京オリンピック元日本代表の狩野美雪氏、コーチ：2010年千葉国体千葉県チームのエース村井貴之氏、トレーナー：2010年日本代表女子バスケットボールチーム、現WBJLトヨタ自動車アンテロープスチーフトレーナーの中川菜保氏。経理に精通し国際手話が堪能な古徳愛子氏（ろう者）、GM：大川の5人を継続し、新規スタッフとして、コーダの手話通訳士でバレーボール選手でもある岡田直樹氏。手話通訳は、コーチやゲストコーチが分散して指導にあたることや合宿中にマスコミの取材等に対応を考慮するためサブ通訳に長松郁弥氏に依頼しました。12人以上の選手のケアやテーピング、トレーニング指導するためサブトレーナーとして公認アスレチックトレーナー資格保持者の清水由唯氏。広報担当、スポンサーとのつなぎ等の業務を高田広明氏（難聴者）に依頼し、9名体制でコアスタッフを固めました。ろう者、聞こえる人がスタッフとして協働し、強化及び障害理解を促しつつ、世界一の結果を出したことは、デフのトップスポーツにおけるモデルケースになると自負しています。

#### 選手スカウティング

代表選手には強豪高校（県大会ベスト4以上のレベル）やプロ選手が3人いますが、チームへの加入にあたり、協会や役員に対する信用、費用面の保障（自己負担が大きくないこと）、監督のネットワークと信用・知名度が大きく影響することがわかりました。

#### デフリンピック派遣費

デフリンピックの派遣費は、女子バレーボールチームは、公費対象スタッフ・選手が16名、対象外スタッフ1名で、公費対象者、対象外スタッフを含め、400万円程度負担しました。スタッフの自己負担金、スポンサー寄付、選手の努力で資金を賄いましたが、日本代表としてデフリンピックに出場するために必要な自己負担金が多量にも重過ぎると思います。毎回この問題が露呈し、これまで関係団体がバラバラで対応してきましたが、2021年に向けて、連盟・競技団体・代表選手等が協力し合い、広報や資金計画等の立案・活動に一体となって取り組んでいく必要があります。

#### 派遣業務等調整

ろう者と接しない環境にいる代表選手の場合、所属（会社や学校）や保護者へデフリンピックの背景、連盟会費や自己負担の支払い、都道府県ろう協会の承諾を得る手続等の説明に大変な時間と手間を要しました。デフリンピックがオリ・パラとは異なるシステムで運用されていることや諸条件をスポーツ委員会や競技団体のウェブサイトで周知していくべきではないでしょうか。

代表チーム強化事業や派遣事業にかかる一連の経理や事務は、役員が本業を掛け持ちつつボランティアで処理しています。本業務を担うには相当の知識がないと難しく、また公金を扱う責任は重いため、誰もが対応できるものではありません。役員の体力や精神的な負担が重く限界を感じています。年間5,000万円を超える公金を扱い、適正な事務処理を行うには、本職と掛け持ちでは成り立たない状況にあります。JSC強化費のうち体制整備事業費の上限額を400万円から1,000万円以上への増額と、4年限りの事業助成期間を20年あるいは永続的に延長するよう強く求めます。

#### 謝辞

日本女子デフバレーボールチームは、デフリンピックで金メダルを獲得し、ICSDワールドランキング（2017年9月発表）で1位となり、名実ともに世界チャンピオンとなりました。日本のシニア団体競技でオリ・パラ・デフをとおして、唯一の世界チャンピオンです。このことはチームを支えていただいたスポーツ庁、JSC、JPC、連盟、JDVA、優秀なチームスタッフ、選手、スポンサー企業様、応援していただいた皆様からの賜物であり、この場をお借りして皆様に心から御礼申し上げます。

女子バレーボールチームの次回デフリンピック連覇を期待してください。

選手 尾塚 愛実

#### 1. 当初の目標（自己目標）

2016年7月に開催された世界ろう者バレーボール選手権では初めての国際大会ということもあり、4位という結果に終わってしまい、自分自身も満足のいくプレーができず、悔しい思いをしました。その悔しさを今回のデフリンピックでは何があっても晴らすこと、「金メダル」を獲得すること、そして、アタッカーとして一番大事な仕事であるスパイクを決めてチームを引っ張っていくことを意識しながらプレーをすることを、大きな目標としました。

#### 2. 結果に対する評価

初めてのデフリンピックでとても緊張しましたが、チームのメンバーからいろんな言葉やアドバイスをかけてもらい、背中を叩いてもらい、試合中はとてもリラックスして落ち着いてプレーをすることができました。アメリカで開催された世界選手権で4位という結果に終わってしまった悔しさを、このデフリンピックでチーム一丸となって、最後の最後まで勝ちに行くことができました。

また、チームのためにアタッカーとしての役割を果たすため、大会まで毎日チーム合宿以外でも自主トレを欠かさず続けたおかげで、本番では世界選手権の時よりチームの勝利に貢献できたと思います。

#### 3. 今後の課題

自分たちのプレーで緊張はしましたが、練習してきた成果を出すことが出来、チームワークで勝てた試合が多かったと思います。今後は、プレー面はもちろん、試合中苦しい時、目で確認し合ったり、ろう者の世界ではとても大事な「アイコンタクト」を取ることを普段の練習の時から意識し、また、個人的には手話も覚えて色々コミュニケーションを取れるように頑張りたいと思います。国際レベルの大会では外国のどのチームも身長が高く、パワーもあるので、その相手にも負けないよう、筋力トレーニング、サーブとスパイク強打の強化により一層努めていきたいと思っています。

選手 高良 美樹

まず、選考合宿から一緒に頑張ってきたチームの皆、いろいろと指導、サポートしてくださったスタッフの皆さん、これまで支えてくれた多くの方々へ深くお礼を申し上げます。

私たちは、金メダルを目標に練習をしてきました。合宿では、

常にコミュニケーションを大事にし、技術を磨いてきました。試合でベストパフォーマンスを出すには、どうすれば良いのか常にアップから意識をし、また、人に対しての思いやりも大事にし、常に皆でプレーしているのだと言い聞かせてきました。一人一人が意識できていたからこそ、金メダル、今回の結果に繋がったのだと思います。

また試合に向けての入念な準備、ミーティング、休養、食事は、私たちチームがどの競技にも負けない世界一の準備だったと思います。合宿のときから常にやっていたことをトルコ現地でも行うことができ、常に集団行動していく中でチームワークも一つにまとまり、最高の状態で決勝戦に挑むことができました。1セットも落とさず、優勝できたことが今でも信じられません。

今後は、デフリンピックの知名度をあげるために、次日本代表になる選手がより良い環境で練習できるよう微力ながらも貢献できればと思います。また、日本代表を通して学んだことを今後の人生にも生かし、たくさんの方々に伝えていきたいです。

最後に、チームメイトの皆さん、スタッフの皆さん、本当にありがとうございました。一緒に戦うことができ、嬉しかったです。

## 選手 三浦 早苗

### 1. 当初の目標

(個人) ブロックやスパイク決定率の向上

(チーム全体) 選手間のコミュニケーションを多くすること、  
団結力の向上、相手ブロックを分散させるため、  
多彩なコンビネーションを狙うこと

### 2. 結果に対する評価

(個人) ブロックステップの踏み込みや判断が遅く、中途半端なブロックばかりになってしまったことが反省点です。スパイクも決め切れないことが多く、力を出し切れなかったのが悔しさが残る大会でした。

(チーム全体) 苦しい状況でもアイコンタクトをしっかり取ってコミュニケーションを欠かさなかったこと、年齢層の厚いチームでしたがベテランも若手もしっかり意見を言い合える信頼関係を築き上げたことで団結力が高まりました。今大会ではトスがレフトに集中せず、オポジットやミドルブロッカーにもトスを上げたことで相手ブロックが分散し、理想の試合運びができたように思います。その結果、悲願の金メダルを獲得することができましたので、監督やスタッフも含め最高のチームだと感じました。

### 3. 今後の課題

今大会ではミドルブロッカーのブロック力が高く、相手スパイカーに点を取らせなかったことが一番大きいと感じています。4年後のデフリンピックでもミドルブロッカーのブロック力が重要になってくると思います。金メダリストになったことで次世代の選手は今まではまた違う責任感やプレッシャーを背負うこととなりますが、チームが団結することで乗り越えて欲しいと思います。

一緒に闘ってきた選手やスタッフ、お手伝いに駆けつけてくださった方、応援していただいた皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

### 1. 当初の目標 (自己目標)

私は、まず日本代表として正式に選出されることを目標にしていました。そのため、高校3年生までは就職予定でしたが、日本代表になるために大学の部活で強化していく道を選びました。結果、大学に入学してから高校までとは違う本格的なトレーニングや練習を積み重ね、日本代表に選出されるという当初の目標を達成することができました。

### 2. 結果に対する評価

今回、全試合ストレート勝ちで優勝という結果を出すことができました。この結果に辿り着くまでには、これまでデフリンピックに出場した先輩方や多くの人達の支えがありました。先輩方がメダルを取り続けてくださったおかげで、デフバレーボール女子日本代表には多額の強化費が与えられ、今回日本代表となった私達は月に1回恵まれた環境で合宿を行うことができました。そして、スタッフの方々のサポートや職場・学校の人達の理解があったおかげで、私達は金メダルを目指すことに集中することができました。私にとって、世界一という快挙を残すことができたことには、周りの人達の支えが大きく影響していると考えられます。

また、私自身はレギュラーとしてコートに立つことはできませんでしたが、大事な場面でサーブを打ち点数を取り、チームに僅かでも貢献することができました。レギュラーでなくとも、大事な場面で呼ばれるような選手でいられたこと、爪痕を残すことができたことは今後の自分にとって糧になりました。

### 3. 今後の課題

今後は今回の経験を活かし、聴覚障害を持つ子ども達を始め、人に夢や希望を与えられる存在になりたいと考えています。そのためには、子どもたちにとって、人として憧れられるような人に成長していかなければならないと考えます。まずは、挨拶やマナーなど当たり前のことを当たり前にできる人になっていけるよう、意識して過ごしていきたいです。そして、デフスポーツの認知度を上げる活動に貢献していくことが私の今後の課題であると考えます。

## 選手 前島 奈美

### 1. 当初の目標 (自己目標)

前回大会では決勝でウクライナにストレート負け、銀メダルに留まりました。精一杯頑張った取ったメダルなので達成感もありましたが、目標であった優勝を勝ち取る事ができなかった悔しさもありました。今大会では一番いい色である金メダルを取りたい!という気持ちが大きかったです。

自分はアタッカーとして、得意であるスピードを生かして点数を取ることが目標でした。今よりさらに技術を伸ばし、もっと強い選手になりたいと思いました。また、年上の立場としても若い選手にアドバイスをしたりと、チームがまとまるように何が出来るかを考えて行動しようと思いました。

### 2. 結果に対する評価

金メダルを獲得でき、スタッフ、選手全員が一つになって同じ気持ちで戦えたことがとても良かったと思います。

レシーブもミスが少なく、攻める気持ちを常に忘れずにプレ

イが出来ました。サーブも相手に簡単に攻撃させないように攻めることが出来ました。また、試合の前の日に必ずミーティングをし、気を付けること、相手チームをどう崩すか、様々な作戦などを監督やコーチから聞いて、それも全員が理解し気持ちも身体も準備が整った状態で試合に挑む事が出来ました。合宿でチーム練習をし、身につけたブロックやレシーブもしっかり活かすことが出来たので、最後まで諦めずにしっかり繋ぐバレーが出来ました。

また、家族をはじめ、たくさんの方々から熱い声援をいただき、カンパをして支えて頂いたので、感謝の気持ちを表すためにも金メダルを取り、日本に帰ってみんなに報告することが出来て良かったです。

### 3. 今後の課題

スポーツをやりたい、デフリンピックを目指したいという方がたくさん来てくれるよう、自分も経験をお話したり、バレーボールの楽しさを伝えて行きたいと思います。

## 選手 島 奈々子

### 1. 当初の目標（自己）

「金メダルをとる。」

- ・そのために怪我をしない、体調管理をしっかりする。
- ・練習の時やそれ以外の行動で今までチームで約束してきたことを守る。
- ・チームメンバーに思いやりを持って繋げる。
- ・練習でも試合でも、1本1本を大切に、ボールを落とさないという意識を常に持って、全力で出し切る。
- ・世界選手権4位という表彰台に立てなかった悔しさをぶつける。

### 2. 結果に対する評価

個人としては初めてのデフリンピックで、どんな大会よりも緊張しました。その緊張から、プレーが安定しませんでした。3-0のストレート勝ちだったことに終わってから気付くほど、1試合1試合集中力を切らさないように、生活面とのオンオフの切り替えができたのがよかったと思います。国際大会の雰囲気にもまれず、日本らしい守備力を活かして、チームで粘ってボールを繋げることができたのが一番大きいと思います。誰かがつらい時は励まし、喜びを共有する。互いにプレーのアドバイスをすることで1人ではできなくても、チームではできるということを強く実感しました。最後にはみんなで心をひとつにし、優勝して良かったです。

### 3. 今後の課題

チームでは、メンバーが入れ替わったりして、お互いにもまだ理解が足りない部分があったので自主練習を増やせば良かった、もっと本音を出せれば良かった、お互いが思っていることのズレをすこしでも減らせたと思うこともありました。若い選手と経験者の間に挟まれて、自分はどういう立場なのか迷うこともありました。生活環境が違う中で、チームで行動することは、小さなことでもストレスになり、どうしたら人間関係が良くなるのか考えさせられました。

この経験を次に活かせるよう、また世界一になれたことで満足しないように、これから日本代表チームに何が出来るかを考えていきたいと思います。

### 1. 当初の目標（自己目標）

私は、3年前（中学2年）の12月から合宿に参加し、最年少としてデフリンピック金メダルに向けて取り組んできました。初めは、わからないことがたくさんあり、戸惑うこともありましたが、一生懸命練習を続けました。2016年7月に初めて世界選手権に出場しました。外国のチームと戦って、緊張してあまりいいプレーができなかった事が多かったため、今回のデフリンピックで挽回できるよう自分の目標を信じてプレーしました。

### 2. 結果に対する評価

予選リーグでは、まず初戦のイタリアに勝つことを考え、日本らしいバレーをやることだけ意識しました。また、カナダ戦の時は相手の弱いところを探し、自分が得意とするサーブで連続17得点をとることができました。その後は連勝して、準決勝で前回優勝のウクライナにストレートで勝利し、決勝まで行くことが出来ました。

決勝戦では、予選リーグの初戦であたったイタリアとの対戦でした。初戦で勝ったからと言って油断せず、はじめの試合だと思って最初から攻め、みんなと一つとなって勝ち抜くことが出来ました。

今回、予選リーグから決勝まで全試合スターティングメンバーで出場させていただき、先輩達と一緒にバレーが出来て良かったです。

### 3. 今後の目標

4年後のデフリンピックも是非参加したいと思います。今回は最年少として参加しましたが、これからは先輩達や監督から学んだことを生かして次の後輩たちに繋げられればと思っています。現在高校2年生なので、今出来ることをしっかりやり、周りの人から支えてくれたことに感謝して一日一日大切にしていきたいと思っています。

## 選手 宇賀耶 早紀

### 1. 当初の目標（自己目標）

私は今回で2回目のデフリンピックになります。前回大会では銀メダルだったこと、これまで積み上げてきた8年間の努力と先輩たちが築いてきた道をここで終わらせてはいけないという思いから、今大会は絶対金メダルを獲りにいくことだけを考えていました。また、主将としてコート内ではどんな時でも常に声を出し続けること、ミドルとして相手のスパイク決定数よりブロック決定数を取ることを目標としていました。

### 2. 結果に対する評価

どの国に対しても日本チームの強みであるどんなに難しいボールでも落とさず諦めない「粘り強い」プレーで、背が高くパワーのある外国人相手に屈することなく、最後まで強い気持ちで攻めることを頭に入れてプレーに集中しました。特に世界4強のウクライナ、ロシアはミドルブロッカーを中心とした攻撃が多いため、サーブから攻め、相手の穴を徹底的に狙った攻撃で日本チームに優勢なゲームの流れを作ることができました。前回大会に比べ、今回は若いパワーのある中心選手が増え、強打レシーブからの1本目、2本目の繋ぎの連携とスパイカー

が前衛、後衛にいたためバランス良く攻めることができたことが勝因に繋がったと思います。

また、年齢幅の広いチームで年上のメンバーは、過去のデフリンピック経験者がほとんどだったため、自分たちのプレーはもちろん、若い選手がやりやすい環境を整えて引っ張り、若手は自分たちの力を十分に発揮できるようにトルコでの生活や試合に集中していたことでそれぞれのポジションの役割を果たすことができたと思います。

### 3. 今後の課題

外国人チームは常に日本チームを見て、同じような動きを取り入れてきています。日本チームがこれまでと変化なく同じ戦術を繰り返していたら次のメダルは厳しいと思います。進化する外国人チームに対抗するためには、守備の強化、攻撃においてもパワーだけでなく頭脳的なプレーを展開していかなければなりません。全てにおいて今後さらなるチームの底上げが必要です。そのためにはやはり月1回の合宿では物足りず、できないなら自主合宿を選手が自ら立ち上げる等、選手間でのコミュニケーションを密にする方法を考え、メダルを獲るための過程への取り組み方が大切になると思います。そして、今後もこれまで以上にメディアに注目され続けることを想定されるため、そのプレッシャーに負けないことが必要です。

## 選手 長谷山 優美

### 1. 当初の目標（自己目標）

デフリンピックは初出場でした。去年は世界選手権でアメリカに行きましたが、そのときは速攻に入ってもブロックに当たられるのが多かったのが課題でした。だから今回のデフリンピックではその課題に向け、毎月行われる合宿で毎日ブロックを見て、コースを意識しながら速攻の練習に励みました。

### 2. 結果に対する評価

初めてのデフリンピックで不安もありましたが、先輩たちにいただいた言葉が心に響き、おかげで不安が減り、楽しみの気持ちが大きくなりました。試合の出番は少なかつたけど、コートの上に立ったときは自分のできることを全部出し切ろうと自分に言い聞かせて試合に出ました。先輩たちと一緒にいるコートの中でみんなとハイタッチしたり、喜んだり、もう一本！と声かけあったり、点取ることができ、本当に良かったです。楽しかったです。そして、世界選手権のときできた課題がこのデフリンピックで達成できたと思っています。

### 3. 今後の課題

今まではミドルブロッカーとしてやってきましたが、自分のできることは積極的にやろうと思っているため、ウィングスパイカーにもチャレンジしたいと思っています。私は皆より身長が低いので、もっとジャンプ力をアップし、スパイクのコースや強弱長短の工夫を常に意識しながらスパイクをしています。今は合同チームでやっているため、色々な大会にでて勉強し、それを身につけて、技術面を前よりもレベルアップしたいと思っています。

### 1. 当初の目標（自己目標）

- ・金メダル獲ること。
- ・自分のプレーしている姿を後輩達に見せること。
- ・今までの経験、技術を後輩達に教えること。

### 2. 結果に対する評価

16年ぶりに金メダル！ローマデフリンピックからずっとメダル獲得してきている中で私が出場したのはメルボルンデフリンピックでした。なかなか金メダルを獲ることができず、凄く悔しかったです。4回目のデフリンピック、絶対に金メダルを獲りたい！という気持ちで大会に臨みました。日本で合宿する時にこのままでは金メダル獲れるのか、今のままではいけないという不安がいつもありました。しかし、トルコに着いてからその不安はどこかに消え、今までやって来たことを大会で見せ、無駄なことはしないという気持ちで挑み、スタッフ、選手ともに心をつなげた結果、16年ぶりに金メダル獲ることができました。

守備は4年前の方が強く感じましたが、攻撃の幅が広がり、セッター、リベロ以外5人と共に攻撃でき、チームとしてはよかったです。これまでのデフリンピックではレフトばかりが上げており、簡単にマークされて綺麗にブロックされていました。金メダルを獲れそうで獲れない原因はそこにあると思ってきましたが、今回は相手チームに簡単にブロックされることはあまりなく、気持ちよく攻撃ができてかなり効果的でした。

また、個人としては右肩を痛めて以前のように強く打ちたくても打てない事が一番悔しかったです。若い後輩達は私よりパワーがあり、パンパンと打っている姿を見て何回も羨ましいと思ってきました。しかし、日本で通用しても海外は簡単に決めることは出来ません。日本より海外の方が背が高く、ブロックも何回も止められる可能性があるとおわっているため、自分のできることは何か考え、頭を使いました。

右肩が痛いという言い訳をせず、自分が持つてる力を出そうと思い、臨みました。その結果、頭を使ってバレーするのも楽しいと思いました。パワー、頭、それぞれのバランスがよかったと思います。それぞれが自分のプレーをし、一緒に試合に臨めたこと、とてもよかったです。

### 3. 今後の課題

4年後のデフリンピックにも出場するかはさておき、まず目の前にある目標に向けてゆっくり頑張っていきたいと思っています。全国の中には若い選手がたくさんいますし、デフリンピックを目指したい人がいれば、色々な場面で教えていきたいなと思います。国内での大会や周囲からこの人凄いな、あの選手みたいになりたいな、と思ってもらえるよう頑張りたいと思います。

## 選手 平岡 早百合

### 1. 当初の目標（自己目標）

初めてのデフリンピックで緊張もあり、不安もありました。途中参加だったため、あまり練習には参加できませんでしたが、今回のデフリンピックの為に4年間頑張ってきている皆の為に金メダルを獲得できるようにプレーしようと思いました。1戦1戦、これが最後の試合になるかもしれない、同じメンバーで

やることはもう無いかもしれないと思いつつも、試合を楽しみ、金メダルをとりたいという気持ちが強くありました。私はコートに入ったら出ていない人の分も全力で頑張ろう、思いっきりプレーしようと思いました。海外の選手はとても大きいため、なかなか経験のできない試合になるかと試合が近くなるにつれ、どんなに高いブロックでも勝ちたいという気持ちが強くなりました。

## 2. 結果に対する評価

どの国も背が高く、私は背が低いのでスパイクが決まるか不安でしたが、勝ちたい気持ちが強かったです。試合の対策もしっかりと教え合ったり、チームがひとつになればミスも恐れませんが、その結果、全ての試合で1セットも落とさず勝つことができ、1つ1つの試合を大切に最後まで諦めず日本の代表として戦えたと思います。私は得意なスパイクでブロックアウトを沢山とれ、自分の思うプレーができました。セッターとも息が合い、得点に繋げられたと思います。チームとしてお互いに声を掛け合い、とてもいい試合になったと思います。

また、このような結果に繋がれたのは生活の仕方が良かったからだと思います。自分達が体を壊さないように工夫し、試合に向けてだらだらせず、時間を大切に考えて行動することができました。

## 3. 今後の課題

今回のデフリンピックでは目標でもあった金メダル獲得が出来、凄くいい試合ができました。先輩方に沢山の事を教えてもらい、高校生としてとてもいい経験ができました。また、4年後に向けて練習にしっかり参加していきたいと思います。今回の歴史的な金メダル獲得を今後このデフバレーボールを始める方々に伝えていきたいと思いました。先輩方と勝ち取った金メダル、このデフリンピックを通しての経験をこれからも生かしていきたいと思います。また、今後のデフリンピック為に仲間と共に一生懸命頑張りたいと思います。そして、私はまだ手話が完璧にはできないため、チームで話し合えるようにする為、しっかりと覚えていきたいです。

## 1. 当初の目標（自己目標）

メルボルン、台北、ブルガリア、全てレギュラーメンバーでした。初めてのメルボルンから金メダル獲得する事が目標だったので、今回4度目のトルコデフリンピックも以前と変わらず金メダルを獲得する事が目標でした。経験者として過去のデフリンピックを通して、どうやったら金メダルを獲得できるか色々考え、チームとして沢山練習する事や一人一人のコミュニケーションとることが一番重要だと思いました。今回は私が最年長であり、下の選手達に技術面やメンタル面など色々指導をする立場です。経験者として以前よりもっと一人一人の意見をしっかりと聞き、フォローとアドバイスする事が大切だと思いました。

## 2. 結果に対する評価

一人一人とコミュニケーションをとりながら、チームをまとめ、一つになることが出来ました。一人一人の意見を聞きながら、アドバイスやフォローしたおかげでチーム全体がまとまることができました。

## 3. 今後の課題

今後のデフリンピックの新日本代表の合宿が近くであれば、お手伝いしに行きたいと思っています。デフリンピックの知名度をあげるには、もっと世の中に伝えていかなければなりません。今回は今までと違い、少しずつ知名度が上がっていますが、まだまだパラリンピック程ではありません。越えるためにはどうしたらよいか、今後も考えて行きたいと思っています。

そして、以前から個人での講演会をしていましたが、これからはより多くの講演会を開き、デフリンピックの存在を以前よりもっとアピールしたいと思っています。未来の選手達に自己負担をゼロにしたいです。

# 參考資料



# ①サムスン 2017 デフリンピック派遣の主なスケジュール

## 2015年

- 11月15日 連盟理事会  
日本選手団の編成にかかる指針を決定

## 2016年

- 1月26日 各競技団体候補選手・スタッフの名簿提出依頼  
2月～6月 競技団体と選手選考基準についての面談  
7月9～10日 連盟理事会・派遣委員会  
・危機管理体制 etc. 準備について  
7月18日 予備エントリー締め切り（団体競技、個人競技は人数）  
7月16～23日 第1回団長会議（サムスンにて）出席および下見  
→出発当日のトルコのクーデター発生により渡航取りやめ  
7月30～31日 スポーツ委員会  
・本部体制  
・下見検討  
7月31日 JPC 強化研修会（派遣基準等について説明）  
8月25日 競技団体へ推薦選手・スタッフの名簿提出依頼  
・調査書  
・所属協会確認書  
9月13日 旅行会社決定  
9月15～16日 スポーツ委員会  
・今後のスケジュール  
・グッズ検討  
10月18日 ICSD からのデフリンピック招待状の受理  
10月26～31日 トルコ下見  
・サムスン会場視察  
・選手村およびホテルの視察  
・在トルコ日本大使館訪問、トルコろうスポーツ協会訪問  
11月12日 連盟理事会・派遣委員会  
・選手の推薦について  
12月4日 JPC 強化研修会（選考・派遣に関する説明および下見報告）  
12月16日 基本健康調査・使用薬物調書等の提出依頼  
12月20日 オージオグラムの提出依頼（新規選手）

## 2017年

- 2月4～5日 スポーツ委員会  
・選手団役員について確認  
・選手・スタッフ推薦名簿確認  
2月17～22日 第2回団長会議（サムスンにて）出席  
・会場視察、組織委員会からの説明等  
3月11日 連盟理事会・派遣委員会  
・サムスンデフリンピック応援ソングの公認  
・選手・スタッフを内定  
↓  
競技団体へ内定選手・スタッフの名簿を送付  
内定選手・スタッフへ内定通知を送付  
・企業へ協力依頼文書送付  
・ユニフォームサイズ確認  
・所属協会確認書  
3月末 ICSD へオージオグラム提出（新規選手のみ）  
4月10日 ユニフォームサイズとりまとめ  
4月中旬 基本健康調査・使用薬物調書のドクターチェック  
5月1日 メディア登録申請締め切り

- 5月2～6日 トルコ下見
- ・サムスン会場視察・選手村視察
  - ・組織委員会と打ち合わせ
  - ・在トルコ日本大使館との打ち合わせ
- 5月16日 臨時派遣委員会
- ・選手、スタッフの正式決定
  - ・HPにて公表
  - ・競技団体及び選手・スタッフへ決定通知を送付
- 5月31日 持ち込み薬物申請締め切り
- 5月31日 VIPリストを組織委員会に提出
- 6月1日 理事会（選手・スタッフの正式決定→事後承認）
- 6月16日 航空券発券
- 6月18日 ファイナルエントリー締め切り
- 6月23～24日 スポーツ委員会（現地体制、渡航スケジュール確認、マニュアルの確認）
- 6月25日 本部会議・選手、スタッフへのオリエンテーション
- 6月28日 秋篠宮同妃両殿下のご接見・壮行会
- 7月8日 理事会・派遣委員会
- 7月11日 外務省への便宜供与願
- 7月14日 日本選手団 サムスンへ出発
- 7月18日 日本選手団結団式・開会式
- 7月30日 日本選手団解団式・閉会式
- 7月31日 日本選手団帰国（成田到着は8月1日）
- 8月30日 日本障がい者スポーツ協会特別表彰式
- 8月31日 秋篠宮同妃両殿下のご接見・帰国報告会

## ②日本選手団派遣に関わる公式行事・式典等の概要

### 1. 本部会議・オリエンテーション

- 1) 日 時 2017年6月25日 10:00～12:00 本部会議・13:30～16:30 オリエンテーション
- 2) 場 所 第3ヒカリビル 6階 会議室（東京都新宿区）
- 3) 参加者 日本選手団競技スタッフ、本部スタッフほか 34名
- 4) 次 第
  - ① 団長あいさつ
  - ② 総監督よりサムスンデフリンピックについての説明
  - ③ 大会総務より期間中の遵守事項、マニュアル等について説明
  - ④ 渡航に関する説明
  - ⑤ メディカルスタッフより本部メディカル体制について

### 2. 壮行会および記者会見

- 1) 日 時 2017年6月28日 13:00～15:00
- 2) 場 所 参議院議員会館 1階 101会議室
- 3) 参加者 日本選手団、ご来賓、約100名
- 4) 次 第

#### 【壮行会】

- ① オープニングムービー
- ② デフリンピック応援ソング『HERO』／HANDSIGN
- ③ 主催者挨拶 デフリンピック派遣委員会 委員長 石野富志三郎
- ④ 激励挨拶 内閣総理大臣 安倍晋三様（代読／内閣総理大臣補佐官 衛藤晟一様）
- ⑤ ご来賓挨拶 東京オリンピック・パラリンピック担当大臣 丸川珠代様
- ⑥ ご来賓挨拶 文部科学大臣政務官 田野瀬太道様
- ⑦ ご来賓挨拶 スポーツ庁 長官 鈴木大地様
- ⑧ ご来賓挨拶 厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部長 堀江裕様
- ⑨ ご来賓挨拶 駐日トルコ大使館 特命全権大使 アフメト・ビュレント・メリチ様
- ⑩ ご来賓挨拶 障がい者スポーツ・パラリンピック推進議員連盟  
デフリンピック支援ワーキングチーム 座長 衛藤晟一様
- ⑪ ご来賓挨拶 障がい者スポーツ・パラリンピック推進議員連盟  
デフリンピック支援ワーキングチーム 役員の皆さま
- ⑫ ご来賓挨拶 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会会長 鳥原光憲様
- ⑬ 団長挨拶 団長 山根昭治
- ⑭ 日本選手団紹介 総監督 栗野達人
- ⑮ 応援メッセージ ドリームサポーター 平野早矢香様  
ドリームサポーター 吉田沙保里様（ビデオ）  
ドリームサポーター 北澤豪様（ビデオ）
- ⑯ 団旗授与 石野委員長→団長→旗手（古島啓太／サッカー）
- ⑰ 主将決意表明 主将 早瀬久美（自転車）
- ⑱ 謝辞 団長 山根昭治
- ⑲ 閉会

#### 【記者会見】

- 報道関係者 17社
- ① 開会
  - ② 委員長コメント
  - ③ 団長コメント
  - ④ 総監督コメント
  - ⑤ 主将コメント
  - ⑥ 質疑応答
  - ⑦ フォトセッション
  - ⑧ 閉会

### 3. 結団式

- 1) 日 時 2017年7月18日 10:30～11:00
- 2) 場 所 選手村 (Ondokuz Mayis University /サムスン) 講堂
- 3) 参加者 日本選手団、来賓 計約100名
- 4) 次 第
  - ① オープニングムービー
  - ② 開式通告
  - ③ 国歌斉唱
  - ④ ご来賓挨拶 障がい者スポーツ・パラリンピック推進議員連盟  
デフリンピック支援ワーキングチーム 事務次長 葉師寺みちよ様
  - ⑤ ビデオメッセージ デフリンピック支援ワーキングチーム 衆議院議員 笠ひろふみ様  
参議院議員 朝日健太郎様  
衆議院議員 小松ゆたか様  
参議院議員 今井絵理子様  
参議院議員 松下新平様  
衆議院議員 野田聖子様
  - ⑥ ご来賓挨拶 スポーツ庁 長官 鈴木大地様
  - ⑦ ご来賓挨拶 駐トルコ日本大使館 臨時代理大使 中村耕一郎様
  - ⑧ 日本選手団紹介 総監督 栗野達人
  - ⑨ 団旗授与 団長→総監督→主将
  - ⑩ 主将決意表明 主将 早瀬久美 (自転車)
  - ⑪ 旗手決意表明 旗手 古島啓太 (ビデオ) (サッカー)
  - ⑫ 閉式通告

### 4. 解団式

- 1) 日 時 2017年7月30日 10:00～11:00
- 2) 場 所 選手村 (Ondokuz Mayis University /サムスン) 講堂
- 3) 参加者 日本選手団 約150名
- 4) 次 第
  - ① 開式通告
  - ② 団長挨拶 団長 山根昭治
  - ③ 成績発表 総監督 栗野達人
  - ④ 各競技チーム報告
  - ⑤ 団旗返還
  - ⑥ 主将挨拶 主将 早瀬久美 (自転車)
  - ⑦ 旗手挨拶 旗手 古島啓太 (サッカー)
  - ⑧ 閉式通告

### 5. 帰国報告会及び記者会見

- 1) 日 時 2017年8月31日 13:00～15:00
- 2) 場 所 参議院議員会館 1階 101会議室
- 3) 参加者 日本選手団、来賓 計約100名
- 4) 次 第

#### 【帰国報告会】

- ① オープニング デフリンピック応援ソング『HERO』 / HANDSIGN
- ② ムービー上映 日本選手団
- ③ 主催者挨拶 デフリンピック派遣委員会 委員長 石野富志三郎
- ④ 祝福挨拶 内閣総理大臣 安倍晋三様 (代読/内閣総理大臣補佐官 衛藤晟一様)
- ⑤ ご来賓挨拶 東京オリンピック・パラリンピック担当大臣 鈴木俊一様
- ⑥ ご来賓挨拶 文部科学大臣 林芳正様 (代読/文部科学副大臣 水落敏栄様)
- ⑦ ご来賓挨拶 スポーツ庁 長官 鈴木大地様
- ⑧ ご来賓挨拶 厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部長 宮崎雅則様
- ⑨ ご来賓挨拶 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会会長 鳥原光憲様
- ⑩ ご来賓挨拶 障がい者スポーツ・パラリンピック推進議員連盟  
デフリンピック支援ワーキングチーム 座長 衛藤晟一様
- ⑪ ご来賓挨拶 障がい者スポーツ・パラリンピック推進議員連盟

- デフリンピック支援ワーキングチーム 役員の皆さま
- ⑫ご来賓挨拶 手話を広める知事の会 会長 平井伸治様（代読）
  - ⑬ご来賓挨拶 全国手話言語市区長会 事務局長 泉房穂様
  - ⑭日本選手団総括 団長 山根昭治
  - ⑮メダリスト報告 藤原慧（水泳）・宇賀谷早紀（バレーボール）・山田真樹（陸上）
  - ⑯メッセージ ドリームサポーター 東尾理子様
  - ⑰主将挨拶 主将 早瀬久美（自転車）
  - ⑱謝辞 総監督 栗野達人
  - ⑲閉会
  - ⑳フォトセッション

#### 【記者会見】

報道関係者 13 社

- ①開会
- ②質疑応答
- ③閉会

### 6. 日本障がい者スポーツ協会による特別表彰式

- 1) 日 時 2017 年 8 月 30 日（水） 14：00～15：00
- 2) 場 所 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会 4 階 大会議室
- 3) 参加者 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会
  - 会長 鳥原光憲氏
  - 常務理事 山田登志男氏
  - 常務理事 高橋秀文氏
 第 23 回夏季デフリンピック競技大会サムスン 2017 日本代表選手団
  - 団長 山根昭治
  - 総監督 栗野達人
  - 主将 早瀬久美
- 4) 次 第
  - ①開式通告
  - ②登壇者紹介
  - ③公益財団法人日本障がい者スポーツ協会会長 挨拶
  - ④表彰状並びに副賞贈呈（協会会長→団長）
  - ⑤第 23 回夏季デフリンピック競技大会サムスン 2017 日本代表選手団団長 謝辞
  - ⑥閉式通告
  - ⑦フォトセッション

### 7. 文部科学大臣表彰（政府主催）

- 1) 日 時 2017 年 12 月 5 日（火） 17：00～18：00
- 2) 場 所 八芳園「白鳳館」
- 3) 参加者 該当選手 71 名（うち出席 60 名）、該当指導者 12 名（うち出席 8 名）、来賓、関係者 計約 100 名

# ③ 日本選手団の編成にかかる指針

## ＜トルコ・サムスン 2017 日本選手団の編成にかかる指針＞ 全日本ろうあ連盟スポーツ委員会 2015 年 11 月 15 日策定

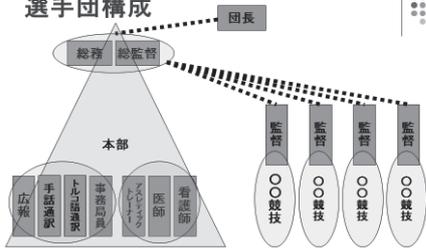
### はじめに

第 23 回デフリンピック夏季大会（トルコ・サムスン 2017）に、  
 (1) 高水準の競技に対応する準備ができていない競技者のみを派遣し、  
 (2) 競技者が持てる能力を最大限に引き出す環境を整えるために、  
 全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会は日本選手団編成にかかる指針をここに策定し、全日本ろうあ連盟 2015 年度第 3 回理事会承認後の 2015 年 11 月 15 日をもって発表する。この指針は厚労省および文科省、日本パラリンピック委員会にあらためて報告されるほか、国民に広く公開されるものである。  
 各競技団体はこの指針をもとにトルコ・サムスン 2017 でメダルを競えるための選手強化及びチーム編成準備を行う。

### 選手団編成について

競技上の様々な対応を迅速に行う指示系統の観点から、選手団編成は、団長、総監督、総務とし、それぞれの任務は下記の通りとする。  
 団長の任務は全日本ろうあ連盟の設ける派遣委員会によって委託された職務に加えて、国際ろうあ者スポーツ委員会(ICSD)事務局、デフリンピック組織委員会(DCOC)事務局との連絡調整を行うことになる。また、ICSD 総会に日本を代表して出席するため、その任務を全うできる立場である全日本ろうあ連盟理事会から理事を配置する。

### 選手団構成



団長：選手団を統括し、選手団を代表する。

総監督：団長の指示を受けて競技チームを統括する。

総務：団長の指示を受けて本部を統括する。

手話通訳：本部での手話-日本語通訳を行う。

トルコ語通訳：本部でのトルコ語-日本語通訳を行う。

広報：選手団の結団式から解団式まで、写真撮影ないしビデオ撮影を担当する。

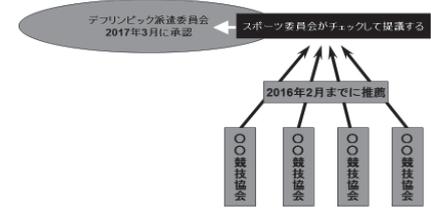
事務員：総務の指示を受けて、必要な業務を担当する。英語力ないし国際手話力が求められる。  
 アスレチックトレーナー：医師と連携して、競技チームのコンディショニング活動を支援する。手話力は上級レベルであることが望ましい。

医師：アスレチックトレーナー・看護師と連携して、選手の体調管理を支援し、必要に応じて医療処置を施す。手話力は上級レベルであることが望ましい。

看護師：医師と連携して、看護活動を行う。手話力は上級レベルであることが望ましい。

監督：各競技チームを統括する。各競技の規則に熟知し、各競技の TD とコミュニケーションをはかっていることが求められる。

## 選手決定の手順



### 選手決定の手順について

下記の選手推薦基準に従って各競技団体から 2016 年 2 月までに候補の推薦を行い、スポーツ委員会十分に審議した後、2017 年 3 月のデフリンピック派遣委員会において決定する。

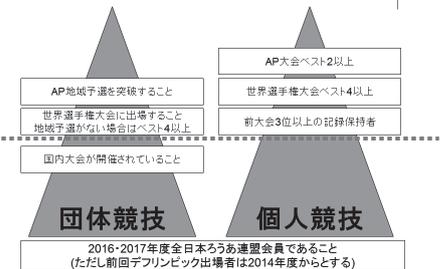
### 選手推薦基準について

高水準の競技に対応する準備ができていて、メダルの可能性がある競技者のみを「トルコ・サムスン 2017」に日本代表として派遣するために、各競技団体は次に示す推薦基準に基づいて選手の推薦を行う。スタッフについては基準を特に設けないが、各々の役割において専門性を有していることが求められる。

各競技団体は推薦する選手・スタッフがデフリンピックの精神を認識し、かつデフリンピック大会規則及び該当競技規則と世界アンチ・ドーピング規定について理解しており、日本選手団員として責任ある行動をとることを保証しなければならない。

ICSD 規約により、デフリンピックに参加する聴覚障害者を持つ選手団員は ICSD 加盟団体の会員でなければならない。新しく参加する選手は 2016・2017 年度において全日本ろうあ連盟会員でなければならない。前大会（ソフィア 2013）出場選手は、2014・2015・2016・2017 年度において全日本ろうあ連盟会員でなければならない。

## 選手推薦基準(全体共通)



### サッカー競技

- 2016 年の世界選手権大会に男子チーム・女子チームとも出場すること
- 男子チームは 2015 年の AP 地域予選を突破すること
- 女子チームは上記世界選手権大会においてベスト 4 に入ること
- 両方とも、選手推薦基準は日本ろうあ者サッカー協会の定めるところによる。

### バレーボール競技

- 2016 年の世界選手権大会男子チーム・女子チームとも出場すること
- 両方とも上記世界選手権大会においてベスト 4 に入ること
- 両方とも、選手推薦基準は日本デフバレーボール協会の定めるところによる。

### バスケットボール競技

- 2015 年世界選手権大会に男子チーム・女子チームとも出場すること
- 男子チームは 2015 年 AP 地域予選を突破すること
- 女子チームは上記世界選手権大会においてベスト 4 に入ること
- 両方とも、選手推薦基準は日本デフバスケットボール協会の定めるところによる。

### 卓球競技

- 2016 年開催予定の世界選手権大会でシングルス・ダブルスベスト 4 の選手
- 2015 年第 8 回アジア太平洋ろう者競技大会でシングルス・ダブルスベスト 2 の選手
- 以上の選手を日本ろうあ者卓球協会の管理する 2016 年度ランキングで上回る選手

### 陸上競技

- 2016 年の世界選手権大会で決勝進出の選手
- 上記大会 4 位記録又はソフィア 2013 大会の 3 位記録を超える公認記録を 2016 年 9 月から 2017 年 5 月までの間に出した選手

### オリエンテーリング競技

- 世界及び国内の公認大会で上位成績を持つ選手

### テニス競技

- 2014 年ドレマエレ杯シングルス・ダブルス ベスト 4 の選手
- 2015 年の世界選手権大会でシングルス・ダブルス ベスト 4 の選手
- 2015 年第 8 回アジア太平洋ろう者競技大会でシングルス・ダブルスベスト 2 の選手
- 上記選手を ICSD テニス TD の定める 2016 年度ランキングで上回る選手

### ビーチバレーボール競技

- 2016 年開催予定の世界選手権大会ベスト 4 のペア選手
- 2016 年度もしくは 2017 年度初めまでに国内で 8 ペア以上による大会を実施し、その大会で優勝したペア

### バドミントン競技

- 2015 年の世界選手権大会でシングルス・ダブルス ベスト 4 の選手
- 2015 年第 8 回アジア太平洋ろう者競技大会でシングルス・ダブルスベスト 2 の選手
- 上記選手を日本ろうあ者バドミントン協会の管理する 2016 年度ランキングで上回る選手

### 水泳競技

- 2015 年開催予定の世界選手権大会でベスト 4 の選手
- 2015 年第 8 回アジア太平洋ろう者競技大会でベスト 2 の選手
- 2016 年開催予定の世界選手権大会でベスト 4 の選手
- 上記選手の記録を超える公認記録を 2016 年度中に出した選手

#### ボウリング競技

- 2015年の世界選手権大会でベスト4の選手
- 2015年第8回アジア太平洋ろう者競技大会でベスト2の選手
- 上記選手を日本ろう者ボウリング連合の管理する2016年度ランキングなどで超える選手

#### 空手競技

- 2016年開催予定の世界選手権大会でベスト4の選手
- 2015年第8回アジア太平洋ろう者競技大会でベスト2の選手

#### 柔道競技

- 2016年開催予定の世界選手権大会でベスト4の選手
- 2015年第8回アジア太平洋ろう者競技大会でベスト2の選手

#### 自転車競技

- 2016年開催予定の世界選手権大会でベスト4の選手
- 2015年第8回アジア太平洋ろう者競技大会でベスト2の選手

#### 各競技チームのスタッフ

- ①デフリンピックで定める各競技につき最低1名のスタッフを保証する。
- ②選手4名毎に1名のスタッフを保証する。
- ③スタッフにどの役割を振るかは各競技チームが決定する。ただし、監督とトレーナーを必ず置くこと。尚、監督およびトレーナーは下記の条件を備えている事を条件とする。

##### ◎監督

- ★ 国際競技大会に出場および監督経験を持ち、国際大会戦略に熟達していること。
- ★ かつマネジメント及びコーチングについても一定の経験を有していること。
- ★ デフリンピック大会規則及び該当競技規則に熟知していること。
- ★ 代表選手団本部と連携できること。

##### ◎トレーナー

- ★ 国際競技大会への帯同経験を持ち、選手のコンディショニングに熟達している事。

- ④保証人数を超えるスタッフの配置を認めることもあるが、各競技協会が経費を負担することとする。

以上



様式5 (選手) 第23回夏季デフリンピック  
日本代表推薦選手候補 プロフィール②

競技名

氏名

競技について (記入日 2016年 月 日)

①始めたきっかけは？

②主な活動場所は？

デフリンピックについて

①ライバルは？ (固名や名前)

②目標は？

③あなたにとってデフリンピックとはなんですか？

\* 当用紙に記載された内容は、第23回夏季デフリンピック日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

様式6 (団体) 第23回夏季デフリンピック  
日本代表推薦スタッフ 一覧表

競技名

スタッフ候補が推薦基準をクリアしているかどうか、及びスタッフ候補推薦をどのように行ったか等を記入ください。  
(記入日2016年 月 日)

役職	氏名	性別	年齢 ※	健聴・ろう	ろうの場合所属協会名	推薦の理由
時	〇〇 〇〇					2013年の第22回夏季デフリンピック(フルガリア)でスタッフとして参加。デフスポーツに対する深い知識を有し、選手への指導力も高いと認められている。
監督						
コーチ						
トレーナー						有資格:
通訳						( 日本語 ・ 国際手話 ・ 音声言語 ) 通訳
スタッフ						
スタッフ						

※年齢は2016年9月30日現在

※私費によるスタッフを派遣したい場合、以下にご記入(役職含む)ください。

役職	氏名	性別	年齢 ※	健聴・ろう	ろうの場合所属協会名	推薦の理由

※年齢は2016年9月30日現在

競技団体名

代表者名  印

当用紙に記載された内容は、第23回夏季デフリンピック日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

様式7 (スタッフ) 第23回夏季デフリンピック  
日本代表推薦スタッフ 調査書

競技名/役職

(記入日2016年 月 日)

氏名	性	名	性別
ふりがな			
漢字			男
ローマ字			女
出生地	都道府県	市 郡	区 町村
生年月日	(西暦) 年 月 日	歳	(2016年9月30日現在)
パスポート	名前 ローマ字	有効期限	年 月 日
有・無	旅券番号	国籍	
現住所	ふりがな	〒	
	住所		
	TEL	携帯 電話	番号 号/以
	FAX		
	E-Mail (P.C)		
住民票のある住所	〒		
* 現住所と異なる場合は記入して下さい。			
出生地もしくは出身地	都道府県 市区町村		
※主に育った地域を記入ください。			
障害者手帳情報	病名	手帳No.	等級
勤務先 (在籍学校名)	名称	〒	
	所在地		
	所属部署 (学年)	役職	
	TEL	FAX	
派遣依頼 (必要な場合 記入)	所属長名	役職	
	会社名		
	送付先	※資料は原則スタッフ本人宛に郵送します。スタッフが自分で会社に持っていき、説明してください。	
TEL	事務担当者名		
緊急連絡先	連絡者氏名	連絡先	TEL 携帯/FAX/E-Mail (携帯) E-Mail (PC)
(本人との関係: )			
語学力 (英語)	Reading & Writing	良い 5 4 3 2 1	普通 できない
	Listening & Speaking	5 4 3 2 1	5段階評価 (5が最良) 該当の番号に○印
語学力 (手話)	日本の手話	5 4 3 2 1	5段階評価 (5が最良) 該当の番号に○印
	国際手話	5 4 3 2 1	5段階評価 (5が最良) 該当の番号に○印

\* 当用紙に記載された内容は、第23回夏季デフリンピック日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

様式8 (スタッフ) 第23回夏季デフリンピック  
日本代表推薦スタッフ プロフィール①

(記入日 2016年 月 日)

ふりがな	競技名			
スタッフ氏名	取得年	資格の内容		
		備考		
指導者・競技役員等の資格	年			
	年			
	年			
	年			
	年			
	年			
国際大会等の参加歴	参加年	大会名	開催地	役職・役割等
	年			
	年			
	年			
	年			
	年			
競技団体内での役職	指導歴	年		
その他特記事項を記入				

\* 当用紙に記載された内容は、第23回夏季デフリンピック日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

様式9 (スタッフ)

第23回夏季デフリンピック  
日本代表推薦スタッフプロフィール②

競技名	
氏名	

競技について

(記入日 2016年 月 日)

①主な活動場所 は？	
---------------	--

デフリンピックについて

①ライバルは？ (国名や名前)	
②目標は？	
③あなたにとって デフリンピックとはなん ですか？	

\* 当用紙に記載された内容は、第23回夏季デフリンピック日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

# ⑤健康調査票

連本第 160577 号  
2016 年 12 月 16 日

第 23 回夏季デフリンピック大会  
出場予定競技団体 各位  
出場予定選手 各位

一般財団法人全日本ろうあ連盟  
デフリンピック派遣委員会  
事務局長 山根昭治

**第 23 回デフリンピック大会（サムスン 2017）出場に伴う  
基本健康調査用紙および診断書の提出について**

平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。  
さて、第 23 回夏季デフリンピック（サムスン）大会に出場するにあたり、健康診断および使用薬物について下記の書類のご提出をお願いいたします。  
誠に申し訳ございませんが、診断書の作成にかかる費用は自己負担となりますことをご了承くださいますようお願いいたします。また、記載漏れは一切認められません。この資料は、現地において選手の安全、健康管理上、重要な書類であることをご理解ください。  
なお、帯同医師による内容チェックの結果、担当の医師より指導が入る場合がありますことをご承知頂けますようお願いいたします。

記

1 提出書類

1) 様式 1 基本健康調査用紙（本人が記入） **記載漏れは認められません。**  
2) 様式 2 医師診断書 1・2（医師が記入）  
様式 1 を用いて診断を受け、医師が記入したものを提出してください。  
3) 様式 3 コミュニケーション状況調査用紙  
4) 様式 4 選手連絡票  
5) 様式 5 使用薬物  
6) 様式 6 使用する可能性のある薬物

2 提出方法 上記すべてを各競技団体にて取りまとめの上、郵送にて提出をお願いいたします。

3 提出先

一般財団法人全日本ろうあ連盟 スポーツ委員会 事務局  
〒162-0801  
東京都新宿区山吹町130 SKビル8F  
一般財団法人全日本ろうあ連盟本部事務所内  
TEL 03-3268-8847 FAX 03-3267-3445  
担当：岡安・加茂下 (ifd-sc@ifd.or.jp)

4 提出期限 **2017 年 1 月 31 日（火）必着**

**【書類作成の手順】**

手順 1 様式 1 「基本健康調査用紙」を選手本人が記入してください。  
見本（サンプル）を参照してください。

手順 2 記入済みの「基本健康調査用紙」と、様式 2 「診断書」を持って、最寄りのクリニックや病院で医師の診断を受けてください。様式 2 「診断書」は医師に記入をお願いしてください。  
様式 2 には、受診した医療機関名・医師名の記入、捺印が必要です。

手順 3 様式 3 「コミュニケーション状況調査用紙」、様式 4 「選手連絡票」、様式 5 「使用薬物」、様式 6 「使用する可能性のある薬物」は選手本人が記入してください。

手順 4 上記すべてがそろったら、競技団体担当者へ送ってください。

手順 5 競技団体担当者、まとめて、全日本ろうあ連盟スポーツ委員会宛てに郵送にて送ってください。

**【派遣選手決定について】**

1、提出いただいた健康診断書および使用薬物調査書について、第 23 回デフリンピックの帯同医および JPC 医科学委員会の医師にてチェックします。（2 月～4 月）

2、派遣選手の内定は 3 月のデフリンピック派遣委員会にて行いますが、万一、最終的にメディカルチェックの結果、医学的な見地から派遣することには問題があると判断された選手、役員については、診断結果を競技団体に報告し、競技団体の意向を確認します。

3、派遣までに改善の余地がある場合は対策をお願いします。対策不可能な場合は派遣内定の取り消しもあり得ることをご承知ください。

連本第 160578 号  
2016 年 12 月 16 日

第 23 回夏季デフリンピック大会  
出場予定競技団体 各位  
参加予定スタッフ 各位

一般財団法人全日本ろうあ連盟  
デフリンピック派遣委員会  
事務局長 山根昭治

**第 23 回デフリンピック大会（サムスン 2017）出場に伴う  
基本健康調査用紙および診断書の提出について**

平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。  
さて、第 23 回夏季デフリンピック（サムスン）大会に参加予定の役員・スタッフは、下記の書類のご提出をお願いいたします。  
健康診断書については、最寄りのクリニックや病院にて受診の上、作成をお願いしてください。誠に申し訳ございませんが、診断書の作成にかかる費用は自己負担となりますことをご了承くださいますようお願いいたします。この資料は現地において選手団の安全、健康管理上、重要な書類であることをご理解ください。  
なお、帯同医師の内容チェックの結果、医師より指導が入る場合がありますことをご承知頂けますようお願いいたします。

記

1 提出書類

1) 健康診断書  
2016 年 7 月 1 日以降に受けた健康診断書（職場等で実施したものも可）のコピーを提出してください。7 月 1 日以降に健康診断を受けていない場合は、保健所などで健康診断を受けてください。  
**診断項目は通常受けている物で問題ありません。（洗った様式はありません）**

2) 様式 3 コミュニケーション状況調査用紙 ※聴覚障害者スタッフ対象

2 提出方法 上記すべてを各競技団体にて取りまとめの上、郵送にて提出をお願いいたします。

3 提出先

一般財団法人全日本ろうあ連盟 スポーツ委員会 事務局  
〒162-0801  
東京都新宿区山吹町130 SKビル8F  
財団法人全日本ろうあ連盟本部事務所内  
TEL 03-3268-8847 FAX 03-3267-3445  
担当：岡安・加茂下 (ifd-sc@ifd.or.jp)

4 提出期限 **2017 年 1 月 31 日（火）必着**

以 上

**【様式 1】  
選手記入**  
(2016/4/8)

**基本健康調査用紙**

選手の皆様をお願いします。  
皆様の健康を守るための調査用紙なので、できる限り正確に記載して下さい。  
医師の診察を受ける前に、Q1～Q12 までの質問にお答え下さい。

選手氏名：\_\_\_\_\_ 性別：男・女  
生年月日：昭和・平成 \_\_\_\_\_年 \_\_\_\_\_月 \_\_\_\_\_日 年齢：\_\_\_\_\_歳  
所 属：\_\_\_\_\_ 学年：\_\_\_\_\_年生  
住 所：〒 \_\_\_\_\_

電 話：( ) ( ) \_\_\_\_\_ Fax：( ) ( ) \_\_\_\_\_  
E-mail：(PC) \_\_\_\_\_  
(携帯)

競技名：\_\_\_\_\_ 競 技 歴：\_\_\_\_\_年  
クラス分け：\_\_\_\_\_ 種目（階級・ポジション）：\_\_\_\_\_

障がい名：《該当する障がい名に○をつけて下さい。また具体的な手帳の障がい内容がわかれば（ ）内に記載して下さい》

①肢体不自由（ ）  
②視覚障がい（ ）  
③聴覚障がい（ ）  
④知的障がい（ ）  
⑤内部障がい（心臓、じん臓、呼吸器、ぼうこう・直腸、小腸、肝臓、免疫機能障がい、ペースメーカー使用）

**※以下については必ずご記入ください。**

障がいの原因となった傷病名：\_\_\_\_\_

障がいの原因となった傷病の発病（受傷）日：\_\_\_\_\_年 \_\_\_\_\_月 \_\_\_\_\_日

障がいの原因となった傷病の発病（受傷）時年齢：\_\_\_\_\_歳

障がいの原因となった傷病に関する手術歴：（有、無）

有の場合 → \_\_\_\_\_歳：[手術名… ]  
\_\_\_\_\_歳：[手術名… ]  
\_\_\_\_\_歳：[手術名… ]

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を確がい者用に改良して使用しております。提出された情報は、JPC での選手強化に関する目的にのみ使用されます。

【様式1】  
選手記入

今後、大会派遣時までの手術または入院の予定（有、無）  
 有の場合詳細を記載： \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_

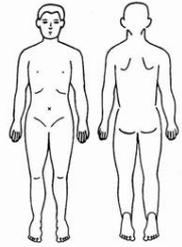
Q1. 障がいの原因となった傷病以外のこれまでの主な病気・ケガについての質問

Q1-1：これまでに以下の病気をしたことがありますか。  
 “ない”場合には( )内に×印、“ある”場合には( )内に○印を付け、そのケガをした時の年齢を\_\_\_\_部に記入、身体図にケガの場所に○を付けて下さい。

- |                    |                       |
|--------------------|-----------------------|
| 1) 貧血 ( ) _____歳   | 2) 喘息 ( ) _____歳      |
| 3) 高血圧 ( ) _____歳  | 4) 心臓病 ( ) _____歳     |
| 5) 川崎病 ( ) _____歳  | 6) 腎炎 ( ) _____歳      |
| 7) 肝炎 ( ) _____歳   | 8) 胃十二指腸潰瘍 ( ) _____歳 |
| 9) てんかん ( ) _____歳 |                       |
| 10) その他 ( ) _____歳 | [病名] _____            |
|                    | [病名] _____            |
| 11) 手術 ( ) _____歳  | [病名] _____            |
|                    | [病名] _____            |
|                    | [病名] _____            |
|                    | [病名] _____            |
| 12) 輸血 ( ) _____歳  | [病名] _____            |
| 13) 薬物アレルギー _____  | [薬物名] _____           |
|                    | [薬物名] _____           |
| 14) 食物アレルギー _____  | [食品名] _____           |
|                    | [食品名] _____           |

Q1-2：これまでに2週間以上競技や練習の支障となる“ケガ”をしたことがありますか。

ない・ある (\_\_\_\_歳)  
 “ある”場合には、右の身体図にケガの場所に○を付けて下さい。



本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障がい者用に改良して使用しております。提出された情報は、JPCでの選手強化に関する目的にのみ使用致します。

【様式1】  
選手記入

Q1-3：これまでに練習中や試合中に意識を失ったことがありますか。  
 ない・ある (\_\_\_\_歳)

Q2. 現在の病気やケガについての質問

Q2-1：現在、治療中や検査を受けている病気やケガ、障がいがありますか。  
 ない・ある [病名・障がい名] \_\_\_\_\_  
 [病名・障がい名] \_\_\_\_\_  
 [病名・障がい名] \_\_\_\_\_

Q2-2：普段使用している薬がありますか。  
 ない  
 ある：①常用（毎日使用）、②頻用（時々使用）、③常用+頻用+

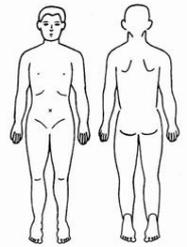
Q2-3：普段使用している健康食品、栄養剤、ビタミン剤、滋養強壮剤（ドリンク剤）などがありますか。

ない  
 ある（“ある”の場合は、下記に記入して下さい）

品名	メーカー名	使用頻度	使用量/日
_____	_____	(毎日・時々)	_____
_____	_____	(毎日・時々)	_____
_____	_____	(毎日・時々)	_____

Q2-4：現在、競技や練習の支障となる“ケガ”をしていますか。  
 ない・ある

※（“ある”の場合は、右の身体図にケガの場所がわかるように○で印を付けて下さい。また具体的なケガの内容がわかれば病名の記載もお願いします）



本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障がい者用に改良して使用しております。提出された情報は、JPCでの選手強化に関する目的にのみ使用致します。

【様式1】  
選手記入

Q8：自覚症状についての質問  
 ( )内に“ない”場合には×印、“ある”場合には○印、わからない場合には？印を付けて下さい。

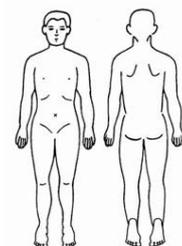
1. 全般

- |                   |                       |
|-------------------|-----------------------|
| 1) 記憶が低下してきた ( )  | 2) 練習についていけない ( )     |
| 3) 練習がこなせない ( )   | 4) 楽にできた練習がきつくなった ( ) |
| 5) 練習意欲がわからない ( ) | 6) 疲れやすい ( )          |
| 7) 疲労がたまっている ( )  | 8) 体がだるい ( )          |
| 9) 力が入らない ( )     | 10) たちくらみがひどい ( )     |
| 11) 風邪をひきやすい ( )  | 12) 体重の変動が大きい ( )     |
| 13) 体重が減少している ( ) | 14) 体重が増加している ( )     |
| 15) 寝付きがわるい ( )   | 16) 熟睡できない ( )        |
| 17) 早く目が覚める ( )   | 18) 朝起きるのがつらい ( )     |

2. 皮膚 (右の身体図に問題のある場所に○印を付けて下さい)

- |                       |
|-----------------------|
| 1) 褥瘡 (治癒したものを含む) ( ) |
| 2) アトピー性皮膚炎 ( )       |
| 3) みずむし ( )           |
| 4) じんましん ( )          |
| 5) その他 ( )            |

褥瘡がある場合、以下を記入してください。  
 状態：( ) 現在褥瘡がある  
 ( ) \_\_\_\_\_年 \_\_\_\_\_月 \_\_\_\_\_日ごろ治癒



3. 頭部

- |            |
|------------|
| 1) 外傷 ( )  |
| 2) 頭痛 ( )  |
| 3) その他 ( ) |

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障がい者用に改良して使用しております。提出された情報は、JPCでの選手強化に関する目的にのみ使用致します。

【様式1】  
選手記入

4. 眼

- |             |                 |             |
|-------------|-----------------|-------------|
| 1) 近視 ( )   | 2) 乱視 ( )       | 3) 視野異常 ( ) |
| 4) 眼鏡 ( )   | 5) コンタクトレンズ ( ) | 6) 痛み ( )   |
| 7) かゆみ ( )  | 8) めやに ( )      | 9) 異物感 ( )  |
| 10) かむき ( ) |                 |             |
| 11) その他     | 内容：_____        |             |

5. 耳

- |            |              |            |
|------------|--------------|------------|
| 1) 痛み ( )  | 2) 耳だれ ( )   | 3) 耳鳴り ( ) |
| 4) めまい ( ) | 5) 聴力障がい ( ) | ( )        |
| 6) その他 ( ) | 内容：_____     |            |

6. 鼻

- |            |             |           |
|------------|-------------|-----------|
| 1) 鼻水 ( )  | 2) 鼻づまり ( ) | 3) 鼻血 ( ) |
| 4) その他 ( ) | 内容：_____    |           |

7. のど

- |               |              |              |
|---------------|--------------|--------------|
| 1) へんとう腺炎 ( ) | 2) のどの痛み ( ) | 3) しわがれ声 ( ) |
| 4) その他 ( )    | 内容：_____     |              |

8. 口腔

- |            |           |               |
|------------|-----------|---------------|
| 1) 虫歯 ( )  | 2) 歯痛 ( ) | 3) 歯ぐきの出血 ( ) |
| 4) その他 ( ) | 内容：_____  |               |

9. 頸部

- |              |               |            |
|--------------|---------------|------------|
| 1) リンパ節炎 ( ) | 2) 甲状腺の腫れ ( ) | 3) その他 ( ) |
| 4) その他 ( )   | 内容：_____      |            |

10. 呼吸器

- |               |            |             |
|---------------|------------|-------------|
| 1) せき ( )     | 2) たん ( )  | 3) ぜんそく ( ) |
| 4) 呼吸困難 ( )   | 5) 息切れ ( ) | 6) 咯血 ( )   |
| 7) 過換気症候群 ( ) |            |             |
| 8) その他        | 内容：_____   |             |

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障がい者用に改良して使用しております。提出された情報は、JPCでの選手強化に関する目的にのみ使用致します。

【様式1】  
選手記入

11. 循環器

- 1) どうき ( ) 2) 胸痛 ( ) 3) むくみ ( )  
 4) 心雑音 ( ) 5) 不整脈 ( ) 6) 高血圧 ( )  
 7) その他 内容: \_\_\_\_\_

12. 血管系

- 1) 静脈瘤 ( ) 2) 静脈炎 ( ) 3) 血行障がい ( )  
 4) その他 内容: \_\_\_\_\_

13. 消化器系

- 1) 吐き気 ( ) 2) 嘔吐 ( ) 3) 胸やけ ( )  
 4) 消化不良 ( ) 5) 食欲不振 ( ) 6) 下痢 ( )  
 7) 便秘 ( ) 8) 腹痛 ( ) 9) 黄だん ( )  
 10) 痔 ( ) 11) その他 (内容): \_\_\_\_\_  
 11) その他 内容: \_\_\_\_\_

14. 泌尿器

- 1) 頻尿 ( ) 2) 排尿痛 ( ) 3) 血尿 ( )  
 4) 尿が濁りやすい ( ) 5) 結石 ( ) 6) 蛋白尿 ( )  
 7) 糖尿 ( )  
 8) その他 内容: \_\_\_\_\_

15. 血液

- 1) 貧血 ( ) 2) 出血傾向 ( )  
 3) その他 内容: \_\_\_\_\_

16. 神経系

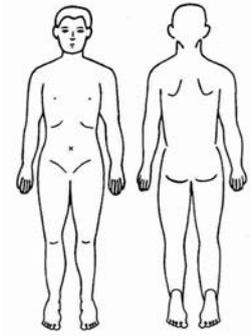
- 1) けいれん ( ) 2) てんかん ( ) 3) めまい ( )  
 4) 知覚障がい ( ) 5) 失神 ( ) 6) 意識障がい ( )  
 7) 運動障がい ( ) 8) 記憶障がい ( )  
 9) その他 内容: \_\_\_\_\_

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障がい者用に  
 変更して使用しております。提出された情報は、JPCでの選手強化に関する目的にのみ使用致します。

【様式1】  
選手記入

17. 運動器 (右の身体図に問題のある場所に○印を付け、対応する問題と線で結んで下さい)

- 1) 癒性 ( )  
 2) 不随運動 ( )  
 3) 拘縮・変形 ( )  
 4) 切断 ( )  
 5) 筋肉痛 ( )  
 6) 関節痛 ( )  
 7) 骨折 ( )  
 8) 脱臼 ( )  
 9) 捻挫 ( )  
 10) 肉離れ ( )  
 11) その他 ( )



Q4. 現在のコンディションについての質問

以下、いずれかに○印を付けて下さい。

練習意欲 : 1=旺盛 2=普通 3=なし 4=全くなし

睡眠 : 1=良好 2=普通 3=不良

食欲 : 1=旺盛 2=普通 3=低下

便通 : 1=良い 2=便秘 (1回/日) 3=下痢 (回/1日)

全般的体調: 1=極めて良い 2=良い 3=普通 4=悪い 5=最悪

選手のメモ: コンディションが悪い場合には、最近のトレーニング量が非常に多い、  
 風邪をひいているなど思い当たる理由を記して下さい

\_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障がい者用に  
 変更して使用しております。提出された情報は、JPCでの選手強化に関する目的にのみ使用致します。

【様式1】  
選手記入

Q5. 家族の病気に関する質問

Q5-1: 両親兄弟・姉妹に、以下のような病気がありますか、一つ一つチェックして  
 下さい。

□内に“ない”場合には×印、“ある”場合には○印と〔 〕内に誰であるかを記入して  
 下さい。

- 1) 高血圧□ [ ] 2) 心臓病□ [ ] 3) 脳卒中□ [ ]  
 4) 糖尿病□ [ ] 5) 痛風□ [ ] 6) 結核□ [ ]  
 7) 肝炎□ [ ]  
 8) その他□ 病名: \_\_\_\_\_

Q5-2: 両親兄弟・姉妹が以下のような病気で死亡していますか、一つ一つチェック  
 して下さい。

□内に“ない”場合には×印、“ある”場合には○印と〔 〕内に誰が何歳の時  
 に死亡されたのかを記入して下さい。

- 1) 突然死□ [ ]、歳 2) 高血圧□ [ ]、歳  
 3) 心臓病□ [ ]、歳 4) 脳卒中□ [ ]、歳  
 5) 糖尿病□ [ ]、歳 6) 痛風□ [ ]、歳  
 7) 結核□ [ ]、歳 8) 肝炎□ [ ]、歳  
 9) その他□ [ ]、歳 内容: \_\_\_\_\_

備考: 突然死とは、原因不明に急に(たとえば24時間以内)死亡すること。

痛風とは、血液中の尿酸値が高く、足の親指などの全身の関節が痛くなる  
 病気です。

Q6. 体重減量についての質問

Q6-1: 競技に際して体重減量はありますか:

1=なし 2=あり 減量前体重 \_\_\_\_\_ kg、目標体重 \_\_\_\_\_ kg

Q6-2: 上の質問で“あり”の場合

スムーズに減量できますか: 1=はい 2=いいえ

選手のメモ: サウナ、食事を極端に減らすなど、その具体的減量方法を記入して  
 下さい

\_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障がい者用に  
 変更して使用しております。提出された情報は、JPCでの選手強化に関する目的にのみ使用致します。

【様式1】  
選手記入

Q7. 女性の選手におたずねします

Q7-1: 初潮はありましたか:

1=なし 2=あり \_\_\_\_\_歳 \_\_\_\_\_ヶ月、あるいは小学校 \_\_\_\_\_年生 \_\_\_\_\_月 \_\_\_\_\_日  
 中学校 \_\_\_\_\_年生 \_\_\_\_\_月 \_\_\_\_\_日  
 高校 \_\_\_\_\_年生 \_\_\_\_\_月 \_\_\_\_\_日

Q7-2: 最終月経はいつでしたか:

1. 平成 \_\_\_\_\_年 \_\_\_\_\_月 \_\_\_\_\_日 ごろ  
 2. 既に閉経 ( \_\_\_\_\_ 歳頃)

Q7-3: 以下のいずれかに○印をして下さい (閉経されている方以外)

月経周期は: 1=規則的 2=不規則 3=無月経 ( \_\_\_\_\_年 \_\_\_\_\_月 以来なし)

月経出血量は: 1=多い 2=普通 3=少ない

月経の痛みは: 1=ほとんどない 2=痛みはあるが、日常生活に支障なし  
 3=日常生活に支障あるが、薬は使用しない  
 4=日常生活に著しく支障あり、薬を使用する

(薬剤名: \_\_\_\_\_)

5=寝込む

Dr. メモ: どのように処置しているか、具体的に記入してください

\_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障がい者用に  
 変更して使用しております。提出された情報は、JPCでの選手強化に関する目的にのみ使用致します。

【様式1】  
選手記入

Q8. 心理面について（競技活動では、こことからだが連動して実力を発揮します）

Q8-1：競技の場面で心理的問題（課題）を感じたことがありますか。  
1：ない 2：ある

Q8-2：“ある”場合に○をつけた方は、下記の事項にお答え下さい。  
1. 「その時に専門家が身近にいましたか？」→「いた」「いない」  
2. 「その時に専門家に相談しましたか？」→「した」「しない」

Q8-3：“ある”場合はどのような内容であるかを具体的に答えて下さい。また、その時にどのように解決したのかも書いて下さい。  
※例えば、競技場面であがってしまい本来の実力がだせなかった など

---

---

---

---

---

---

---

---

Q8-4：最近（この半年間）の生活で、「そうだな」と思い当たる項目の番号に○印をして下さい。  
1. 落ち着かない  
2. 集中できない  
3. ゆううつだ  
4. イライラする  
5. やる気がでない  
6. 何に対しても興味がもてない

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を確がい者用に  
変更して使用しております。提出された情報は、JPCでの選手強化に関する目的にのみ使用致します。

【様式1】  
選手記入

Q8-5：最近（この半年間）の生活で、「そうだな」と思い当たる項目の番号に○印をして下さい。

1. 眠れない
2. 食欲がない
3. 頭が痛い
4. 肩がこる
5. 疲れがとれない
6. からだがだるい
7. めまいがする
8. おなかが張る

Q8-6：これまで競技を継続していた中で、専門家による心理サポートや相談が必要と感じたことがありますか。  
1：ない 2：ある

Q8-7：“ある”場合はどのようなサポートが必要であったかを具体的にお答え下さい。

※例えば、①競技力向上につながるメンタルトレーニングの指導  
②競技と仕事や学業の両立の事で問題を感じ、他の人にアドバイスを  
して欲しかった事など

---

---

---

---

---

---

---

---

Q9. 練習頻度について

過去6ヶ月間の平均練習頻度についてお答え下さい。

- 1：週3回以上 2：週1～2回程度 3：月1～2回程度 4：月1回未満

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を確がい者用に  
変更して使用しております。提出された情報は、JPCでの選手強化に関する目的にのみ使用致します。

【様式1】  
選手記入

Q10. 移動能力について

現在の移動能力についてお答え下さい。

- 1：屋外歩行自立
  - 1a：歩行補助具（杖、装具、義足など）の使用なし
  - 1b：歩行補助具（杖、装具、義足など）を使用
- 2：屋内歩行自立
  - 2a：歩行補助具（杖、装具、義足など）の使用なし
  - 2b：歩行補助具（杖、装具、義足など）を使用
- 3：介助歩行
  - 3a：屋外介助歩行
  - 3b：屋内介助歩行
- 4：車いす使用
  - 4a：普通型車いす駆動自立
  - 4b：車いす移動介助
  - 4c：電動車いす
- 5：その他（ ）

Q11. 排尿方法について

現在の排尿方法についてお答え下さい。

- 1：自排尿可能
  - 1a：排尿障がいなく、正常排尿
  - 1b：自排尿可能であるが、一部症状あり薬物使用中
- 2：排尿障がいあり、何らかの補助的排尿方法を用いている
  - 2a：収尿器使用
  - 2b：カテーテル使用
    - 2b-1：留置カテーテル（膀胱瘻も含め）
    - 2b-2：自己導尿
  - 2c：集尿器、自己導尿の組み合わせ
  - 2d：その他（内容： ）

※自己導尿を行っている場合、使用しているカテーテル消毒液の名称がわかれば、該当するものに○をつけて下さい。

[ ① グリセリンBC液、② ハイアミン・グリセリン液、③ イソジン・グリセリン液、④ ザルコニン液10⑤単体、⑤ オスバン10%⑥単体、⑥ ハイアミン液⑦単体、⑦ 滅菌オリーブ油、⑧ その他（名称： ） ]

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を確がい者用に  
変更して使用しております。提出された情報は、JPCでの選手強化に関する目的にのみ使用致します。

【様式1】  
選手記入

Q12. 排便方法について

現在の排便方法についてお答え下さい。

- 1：自己排便可能
  - 1a：障がいなし。
  - 1b：自己排便可能であるが、内服薬物使用
  - 1c：自己排便可能であるが、座薬使用
  - 1d：特殊な器具などが必要  
(必要なもの： )
  - 1d：特殊な設備や便器などが必要  
(必要なもの： )
- 2：排便障がいあり、何らかの介助が必要
  - 2a：介助者は誰でも良い。
  - 2b：規定の介助者が必要
  - 2c：医療関係者の介助が必要
  - 2d：その他（ ）

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会作成の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を確がい者用に  
変更して使用しております。提出された情報は、JPCでの選手強化に関する目的にのみ使用致します。

【様式2】  
医師記入

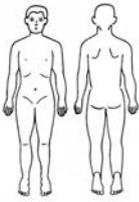
### 診断書(1) (医師記入のこと)

氏名: \_\_\_\_\_ ; 生年月日: 昭・平 年 月 日

<現症>  
身長: \_\_\_\_\_ cm 体重: \_\_\_\_\_ Kg 体温: \_\_\_\_\_ °C 脈拍: \_\_\_\_\_ 拍/分  
血圧: \_\_\_\_\_ / \_\_\_\_\_ mmHg

理学的不見 (必要に応じて右の身体図を利用して下さい)  
異常所見の有無 異常所見の内容

顔面 なし あり \_\_\_\_\_  
口腔 なし あり \_\_\_\_\_  
頸部 なし あり \_\_\_\_\_  
胸部 なし あり \_\_\_\_\_  
腹部 なし あり \_\_\_\_\_  
四肢 なし あり \_\_\_\_\_



<臨床検査所見>

心電図検査	所見:	精査の必要(無・有)
胸部X線	所見:	精査の必要(無・有)
肺機能検査	● 呼吸機能検査 (スパイロメトリー) 結果 (プリントアウトされたデータ) を併せてご提出ください	精査の必要(無・有)
尿検査	蛋白 ( ) 糖 ( ) 潜血 ( ) 赤血球 ( ) ヘマトクリット ( ) 白血球 ( ) 血小板 ( ) MCV ( ) MCH ( ) MCHC ( )	
生化学検査	AST (GOT) ( ) ALT (GPT) ( ) γ-GTP ( ) ALP ( )	
	LAP ( ) コリンエステラーゼ ( ) CK ( ) 中性脂肪 ( )	
	HDLコレステロール ( ) LDLコレステロール ( ) 総コレステロール ( ) 総蛋白 ( )	
	アルブミン ( ) 尿素窒素 ( ) クレアチニン ( ) 尿酸値 ( )	
	血清鉄 ( ) 空腹時血糖値 ( ) HbA1c (NGSP) ( ) CRP ( )	
	フェリチン ( ) Na ( ) K ( ) Cl ( )	
	Ca ( ) P ( )	
その他先生が重要と考えられる検査所見 ( )		

\* 異常値について、異常値での正常値より低値の場合は「↓」、高値の場合は「↑」を付記して下さい。【例: AST(68↑)】

コメント備考欄 \_\_\_\_\_

年 月 日 医療機関名・住所・電話番号 \_\_\_\_\_

医師名: \_\_\_\_\_ 印

\* 本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会作成の団体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障がい者用に改良して使用しております (2014年2月29日現在)。提出された情報は、JPCでの選手強化に関する目的にのみ使用致します。

【様式2】  
医師記入

### 診断書(2) (医師記入のこと)

氏名: \_\_\_\_\_ ; 生年月日: 昭・平 年 月 日

※ その他、原疾患と合併症について御記載下さい。特に、選手の障がい内容や合併症などに応じて前頁検査項目以外の検査を施行されましたら、その結果の記載をお願い致します。

※ 褥瘡がある場合、以下をご記入ください。  
状態: ( ) 現在褥瘡がある  
( ) \_\_\_\_\_年 \_\_\_\_\_月 \_\_\_\_\_日ごろ治癒  
予防策 (除圧・クッション使用等): \_\_\_\_\_  
\* その他、必要な項目について記載をお願いします。

ご診断に基づき、以下の2点について適否のご意見をお願いいたします。海外渡航、大会参加の最終決定については、協会の医学委員会が行い、その責任を負います。ご判断に迷われることもあるかも知れませんが、率直なご意見をお願い致します。

① 選手の海外渡航について 適 ・ 不適 (いずれかに○)  
② スポーツ選手としての大会参加 適 ・ 不適 (いずれかに○)

上記についてのコメント  
(上記①②について、不適とされた場合には、その理由等をご記入下さい)

\_\_\_\_\_年 月 日 医療機関名・住所・電話番号(可能なら連絡可能なEmailアドレス) \_\_\_\_\_

医師名: \_\_\_\_\_ 印

\* 本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会作成の団体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障がい者用に改良して使用しております (2014年2月29日現在)。提出された情報は、JPCでの選手強化に関する目的にのみ使用致します。

【様式3】  
選手・障がい者スタッフ記入

### 基本健康調査用紙\*別紙: コミュニケーションについて

※この用紙は「基本健康調査用紙」と一緒に「全日本ろうあ連盟スポーツ委員会」へ提出してください。

選手氏名: \_\_\_\_\_ 性別: 男・女  
生年月日: 昭・平成 \_\_\_\_\_年 \_\_\_\_\_月 \_\_\_\_\_日 年齢: \_\_\_\_\_歳

(1) あなたは普段、聞こえる人に自分の話したい内容をどんな方法で伝えますか。  
手話 筆談 音声 複数の方法 ( と )  
その他の方法 ( )

(2) あなたは普段、(手話のできない) 聞こえる人から話しかけられる内容を、どんな方法で理解していますか。  
筆談 口の形 音声 複数の方法 ( と )  
その他の方法 ( )

(3) あなたは病院で診療を受けるときに、手話通訳を利用していますか。  
いつも利用する 状況によっては利用する 利用しない

(4) あなたは「自分の病気」や「体調」について医師と話するとき、手話通訳に居てほしいですか。  
いて欲しい どちらでもいい 状況による いてほしくない

(5) あなたは医師が話す重要な点については紙にメモして欲しいですか。  
メモを渡してほしい メモは必要ない 自分でメモをしたい

(6) あなたは、診療を受けるときに、手話通訳や筆談の他に、どのような配慮を希望しますか。自由に書いてください。  
例) マスクを外してほしい (口を見せてほしい)、途中で確認を入れてほしいなど

(6) あなたは高熱や嘔吐、めまいなどで具合がとても悪いときに、どんな方法で話しかけて欲しいですか。  
手話 筆談 音声 複数の方法 ( と )  
その他の方法 ( )

\* この質問用紙は「第23回夏季デフリンピック大会(2017 サムスン)」派遣にあたり、一般財団法人全日本ろうあ連盟スポーツ委員会が作成しました。

【様式4】

### 選手連絡票

当用紙に記載された事項は、アンチ・ドーピング活動に関する連絡調整に使用いたします。

記載日: 平成 \_\_\_\_\_年 \_\_\_\_\_月 \_\_\_\_\_日

フリガナ	_____	年齢	_____歳
選手氏名	_____	性別	男・女
生年月日	_____年(西暦) _____月 _____日	昭・平	_____年(西暦) _____月 _____日
競技名	_____	クラス	ポイント
住所	〒 _____	ポジション	_____
障害内容(あれば合併症)	_____		
電話番号	携帯電話 _____	FAX番号	_____
PC mail	_____		
携帯 mail	_____		
職場名称	_____	職場電話番号	_____
日中連絡が取れる電話番号	_____		
障害上の理由などにより、代理人を通じて連絡を取りたい場合は以下にご記入ください。			
代理人氏名	_____	選手との関係	_____
代理人住所	〒 _____		
代理人電話番号	_____	代理人FAX番号	_____
代理人携帯番号	_____	代理人E-mail	_____
その他、連絡方法等、連絡を差し上げる際に気をつけてほしいことがあればご記入ください。			
_____			
【アンケート】以下質問します。いづれかに必ず✓を入れてください。			
①過去6か月以内にアンチドーピング部会で薬物調書のチェックを _____ 口受けた _____ 口受けていない _____			
②過去6か月以内にアンチドーピング部会でTUE申請が受理されて _____ 口いる _____ 口いない _____			

※ アンチドーピング部会からの連絡は、勤務の都合上、可能な限りメール連絡をさせていただいております。PC・携帯メールが使用できる選手は、メールアドレスをご記入ください。

お問い合わせ先は…

〒108-8329 東京都港区三田1-4-3  
国際医療福祉大学三田病院 リハビリテーション科  
榎野 修輔 (日本障害者スポーツ協会医学委員会 アンチ・ドーピング部会長)  
Tel: 03-3451-8121 Fax: 03-3454-0067  
E-mail: shukusano@iuhw.ac.jp

使用薬物についての調査書

欄が不足する場合はコピーしてお使い下さい（2枚以上になる場合は番号をつけて下さい）

ふりがな 氏 名	
競 技	

調査を依頼したい薬品についてご記入ください（内服、吸入、点耳、点鼻、点眼、塗布、湿布、注射<sup>\*</sup>、座薬等、あらゆる薬品が対象となります）。

例：薬品名	SM 散
例：使用量（1日 or 1回）	3g（1日）
例：使用方法（○を）	内服（ <u>常用</u> ・頓用）、吸入、点耳、点鼻、点眼、塗布、湿布、注射、座薬
例：使用理由	消化を助けるため。
薬品名	
使用量（1日 or 1回）	
使用方法（○を）	内服（常用・頓用）、吸入、点耳、点鼻、点眼、塗布、湿布、注射、座薬
理由	
薬品名	
使用量（1日 or 1回）	
使用方法（○を）	内服（常用・頓用）、吸入、点耳、点鼻、点眼、塗布、湿布、注射、座薬
理由	
薬品名	
使用量（1日 or 1回）	
使用方法（○を）	内服（常用・頓用）、吸入、点耳、点鼻、点眼、塗布、湿布、注射、座薬
理由	
薬品名	
使用量（1日 or 1回）	
使用方法（○を）	内服（常用・頓用）、吸入、点耳、点鼻、点眼、塗布、湿布、注射、座薬
理由	

※注…注射での薬物使用の場合には、関節内注射が筋肉内注射かの別についてもお書き下さい。

使用する可能性のある薬物についての調査書

ふりがな 氏 名	
競 技	

現在使用している薬品とは別に、国内外の大会・合宿などに参加する時に携行する可能性のある薬品の中で、調査を依頼したいものについてご記入下さい（内服、吸入、点耳、点鼻、点眼、塗布、湿布、注射、座薬等あらゆる薬品が対象となります）。

薬品名	

# ⑥ 聴力検査票

連本第 160585 号  
2016 年 12 月 20 日

第 23 回夏季デフリンピック大会  
出場予定競技団体 各位

一般財団法人全日本ろうあ連盟  
デフリンピック派遣委員会  
事務局長 山根昭治

**第 23 回夏季デフリンピック**  
**新規選手の聴力検査票の提出について (依頼)**

平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。  
第 23 回夏季デフリンピック (於トルコ) に出場するにあたって、ICSD から出場資格に関する規程が発表されています。その中に下記のとおり、聴力に関する規程が定められております。  
この条件に適合していることを証明するためにこれまでに ICSD 公認国際大会に出場したことがない選手は聴力検査票の提出が必要となります。  
つきましては、医療機関にて聴力検査を受け ICSD の定める聴力検査票に結果を記入してもらいよう各団体で指導をお願い致します。

記

**1. 聴力検査票**  
以前にご連絡している通り、用紙が変わっています。必ず、ICSD のウェブサイトから、氏名・大会名等必要事項を入力したものをプリントアウトしてご使用ください。  
ICSD は完璧に検査がなされたものでも旧書式へ記載された聴力検査表は受け取りません。  
【ICSD ウェブサイトー聴力検査用紙】  
<http://www.deaflympics.com/audiogramform.asp>

**2. 氏名変更のあった方について**  
アジア大会、デフリンピック等に出場経験のある選手で、婚姻等により氏名変更のあった場合は、旧姓でのパスポート《写真付きのページ》と現在のパスポートのコピーをお送りください。(聴力検査票の提出は不要です)

**【添付資料】病院へ 02, 03, 04 の資料を提出してください。**  
01-ICSD/聴力検査票の入力画面

02-医師宛依頼文書  
03-記入見本  
04-聴力検査票記載時の注意事項

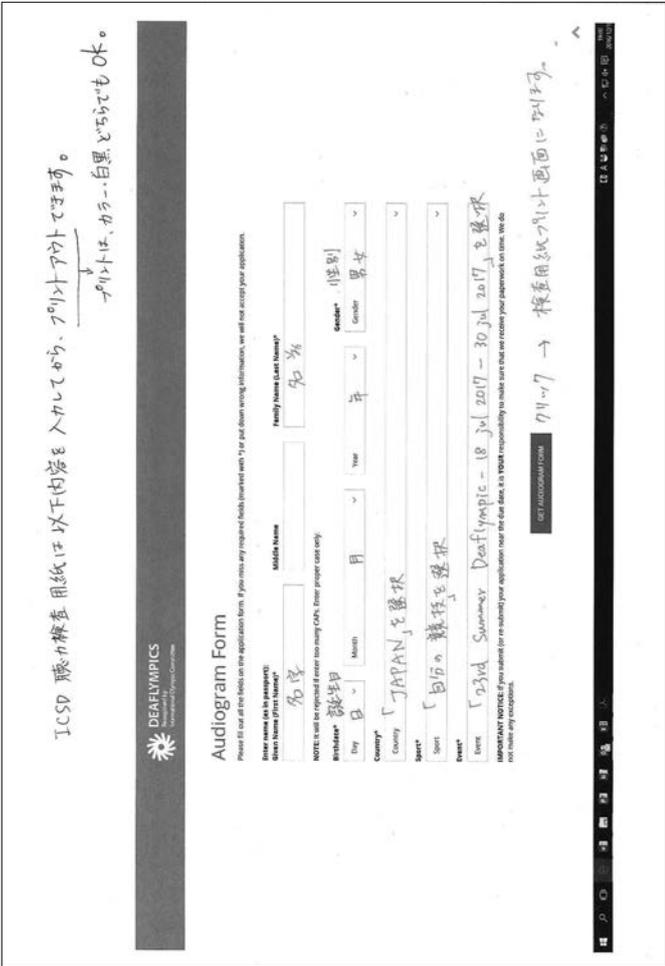
(注) 医療機関によっては全項目の検査ができない場合もありますので、検査に行く前に病院へ検査ができるかどうか確認をしてください。

**【提出物】**  
・聴力検査票  
・病院の検査機器から出力された結果のコピー

**【提出〆切】2017 年 1 月 31 日 (火) 厳守**  
※競技団体にて取りまとめの上、当事務局へご提出願います。

**【提出先】** (一財) 全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会 事務局  
〒162-0801 東京都新宿区山吹町 130 SKビル 8 階  
TEL 03-3268-8847 FAX 03-3267-3445  
担当 岡安・加茂下 ([jfd-sc@jfd.or.jp](mailto:jfd-sc@jfd.or.jp))

以上



連本第 160586 号  
2016 年 12 月 31 日

担当 医師 様

東京都新宿区山吹町 130 SKビル 8 階  
TEL 03 (3268) 8847 FAX 03 (3267) 3445  
一般財団法人全日本ろうあ連盟  
デフリンピック派遣委員会  
事務局長 山根 昭治

**第 23 回夏季冬季デフリンピック (於トルコ)**  
**聴力検査のご協力依頼**

時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。  
2017 年 7 月 18 日～7 月 30 日まで第 23 回夏季デフリンピックがトルコ/サムスンにて開催されます。当委員会では標記大会へ代表選手を派遣する予定であります。  
標記大会のような国際ろう者スポーツ委員会 (International Committee of Sports for the Deaf) 公認の競技大会 (夏季/冬季デフリンピック、世界選手権大会、地域の選手権大会を含む) では、聴力検査票の提出が義務づけられております。大会参加には選手の「良耳の平均聴力レベル (PTA) が 55dB 以上の聴覚障害を有する (500, 1000, 2000 ヘルツの三つの純音平均聴力レベル、気導、ISO1969 基準) ろう者であること」が条件となります。そのため医師の診断が求められていますので、聴力検査の実施をお願い申し上げます。検査結果を所定用紙にご記入のうえ選手にお渡し下さいますようお願いいたします。  
又、《見本》を別紙の通り用意いたしましたので、ご参考になさってください。

**<検査内容>**  
それぞれの耳について下記検査内容のご記入をお願い致します。  
1. 気導 2. 骨導 3. ティンパノグラム 4. 耳小骨筋反射 (直訳すると音響的反射となりますが、日本では耳小骨筋反射か、アブミ筋反射という。英語の別名を stapedius reflex.)

**<参考>**  
● 聴力検査表 (見本)  
● 国際ろう者スポーツ委員会公式ホームページ <http://www.deaflympics.com/>  
● オーディオグラムに関する規則 (和訳)  
<http://www.jfd.or.jp/deaflympics/icsd/audiogram-regulations.php>

以上

(お問い合わせ)  
一般財団法人全日本ろうあ連盟  
デフリンピック派遣委員会事務局  
〒162-0801 東京都新宿区山吹町 130 SKビル 8F  
TEL 03-3268-8847 FAX 03-3267-3445  
担当：岡安・加茂下 ([jfd-sc@jfd.or.jp](mailto:jfd-sc@jfd.or.jp))

**見本**

**International Committee of Sports for the Deaf**  
Recognized by the International Olympic Committee

**OFFICIAL AUDIOGRAM DATA SHEET**

Required Fields  
Name: \_\_\_\_\_  
Date of Birth: \_\_\_\_\_ Gender:  Male  Female Nation: \_\_\_\_\_  
Sport: \_\_\_\_\_ Event: \_\_\_\_\_

Audiometer: **RION AA-H1** Examiner Name: **Taro KAGANAKA**  
Calibration:  ANSI 1969  ISO 1964 Date of Examination: **26 Nov 2016**

**AIR CONDUCTION & BONE CONDUCTION**  
FREQUENCY in Hertz (Hz)

**IMPEDANCE TYMPANOMETRY**

Ear	Canal Vol.	Peak Comp.	Impedance	Peak
RIGHT	1.0ml	0.25ml	A	-3
LEFT	2.75ml	0.1ml	A	-11

**REFLEXOMETRY**

Ear	Site	500	1000	2000	4000
RIGHT	Imp	110.2	110.2	110.2	---
RIGHT	Contr	110.2	110.2	110.2	---
LEFT	Imp	110.2	110.2	110.2	---
LEFT	Contr	110.2	110.2	110.2	---

**PURE TONE AVERAGE**  
(500-1000-2000 Hz)

Ear	Air	Bone
RIGHT	99.8dB	88.8dB
LEFT	92.0dB	88.8dB

**KEY TO SYMBOLS**

Ear	Air	Air-masked	Bone	Bone-masked
RIGHT (red)	O	△	+	×
LEFT (blue)	X	□	◇	◇

**TYPE OF HEARING LOSS**  
(Check one for each ear with an "X")

Ear	Sensor-neural	Conductive	Mixed	Cochlear implant
RIGHT	X			
LEFT	X			

**ICSD HOME OFFICE USE ONLY**  
ID: \_\_\_\_\_  
Data Entered By: \_\_\_\_\_  
ICSD Audiologist: \_\_\_\_\_

**COMMENTS:** CONGENITAL PROFOUND SENSOR-NEURAL HEARING LOSS  
(In English) 先天性の重度の感音性難聴  
Tel: 03-3-2-0000-6888 Fax: 03-3-XXXX-XXXX

This form must be completed three (3) months before the event.  
Send this audiogram form to your National Deaf Sports Federation for review.

**病院様** 外国に提出するため、必ず別紙資料として(貼付)検査機器からの出力データをうつしてください。(コピーOK)

画像情報  
検査日付: \_\_\_\_\_  
患者番号: \_\_\_\_\_ 氏名: \_\_\_\_\_  
生年月日: \_\_\_\_\_年 月 日 年齢: \_\_\_\_\_歳 ヶ月 性別: \_\_\_\_\_

**標準聴覚力検査**

氏名: \_\_\_\_\_ 才 男 女

骨導検査: 乳突(開放補正なし)

平均聴力レベル

Method	3分法	4分法	5分法	6分法
右	98.3dB	98.8dB	95.0dB	96.7dB
左	95.0dB	95.0dB	95.0dB	95.0dB

マスキングノイズレベル (dB)

Masking	125	250	500	1000	2000	4000	8000
右	OFF	OFF	OFF	OFF	OFF	OFF	OFF
左	OFF	OFF	OFF	OFF	OFF	OFF	OFF
骨導	-10	-10	-10	-10	-10	-10	-10
空導	-10	-10	-10	-10	-10	-10	-10

RION AA-H1 2016/11/26

画像情報  
検査日付: \_\_\_\_\_  
患者番号: \_\_\_\_\_ 氏名: \_\_\_\_\_  
生年月日: \_\_\_\_\_年 月 日 年齢: \_\_\_\_\_歳 ヶ月 性別: \_\_\_\_\_

**チンパノメトリー** 2016年 月 日

氏名 \_\_\_\_\_ 男・女 才

右 PVT 1.06 mL  
S.C. 0.25 mL  
PEAK -8 daPa

左 PVT 0.75 mL  
S.C. 0.11 mL  
PEAK -11 daPa

プローブ: RT-64 変化速度: 200daPa/s 停止圧: 自動 スタート: 自動

MEMO RION RS-33

画像情報  
検査日付: \_\_\_\_\_  
患者番号: \_\_\_\_\_ 氏名: \_\_\_\_\_  
生年月日: \_\_\_\_\_年 月 日 年齢: \_\_\_\_\_歳 ヶ月 性別: \_\_\_\_\_

**レフレックス** 2016年 月 日

氏名 \_\_\_\_\_ 男・女 才

右 等価容積 1.32 mL  
測定圧力 1 daPa

左 等価容積 1.26 mL  
測定圧力 1 daPa

メモ RION RS-33

Notes for the audiologist:

Thank you for using the ICSD audiogram form. Our athletes need to complete this form fully to receive an identification number to participate in upcoming Championship or Deaflympics events.

In compliance with ICSD audiogram regulations, here is a guideline for you to complete the ICSD audiogram form, as listed below:

1. Official ICSD Audiogram form must be used. The form can be downloaded from [www.deaflympics.com/forms/audiogram.pdf](http://www.deaflympics.com/forms/audiogram.pdf)
2. All four (4) types of audiogram testing below must be filled out entirely for EACH ear including:
  1. Air Conduction - Please test on 500, 1000, and 2000Hz.
  2. Bone Conduction - Please test on 500, 1000, and 2000Hz.
  3. Tympanograms (Tympanometry) - Please write numbers
  4. Acoustic Reflexes (Reflexometry) - Please write numbers or NR if there are no responses. Do not use dash (-) or zero (0).

3. Below yellow box with numbers indicates required fields for you to enter:

1. **Audiometer** - Identify the name of the audiometer.
2. **Examiner Name** - Name of the audiologist who performs the test.
3. **Calibration** - Indicate the name of the calibration used.
4. **Date of Examination** - Enter examination date.
5. **Air Conduction** - Record air testing results. See 2.1 above. If there are no responses in Air Conduction, please write NR as noted in "Key to Symbols".
6. **Bone Conduction** - Record bone testing results. See 2.2 above. If there are no responses in Bone Conduction, please write NR as noted in "Key to Symbols".
7. **Tympanometry** - Record Tympanometry test results. See 2.3 above.
8. **Reflexometry** - Record Reflexometry test results. See 2.4 above.
9. **Pure Tone Average** - Add 500, 1000, 2000Hz and divided by three (3) for both air and bone testing results.
10. **Type of Hearing Loss** - Identify the type of hearing loss by placing 'X' accordingly as shown on the form for respective ear.
11. **Comments** - Please write comments as needed about this athlete. If there are no Tympanogram or reflex equipments to test, please write comments in English.
12. This is for ICSD official uses only, do not write.

The form is a detailed grid for recording audiogram data. It includes sections for:
 

- 1. Audiometer: Name of the device.
- 2. Examiner Name: Name of the audiologist.
- 3. Calibration: Name of the calibration used.
- 4. Date of Examination: Date of the test.
- 5. Air Conduction: Results for frequencies 500, 1000, and 2000 Hz for both ears.
- 6. Bone Conduction: Results for frequencies 500, 1000, and 2000 Hz for both ears.
- 7. Tympanometry: Results for frequencies 226, 370, and 440 Hz for both ears.
- 8. Reflexometry: Results for frequencies 500, 1000, and 2000 Hz for both ears.
- 9. Pure Tone Average: Calculated average for both ears.
- 10. Type of Hearing Loss: Grid for recording hearing loss types.
- 11. Comments: Space for additional notes.
- 12. Official use only: Administrative fields.

Failure to observe the requirements will result in delayed approval.

Thank you in advance for your cooperation,  
ICSD Staff

As of May 2011

聴覚検査士のみなさまへ:

ICSDのオーディオグラム用紙をご利用ください、ありがとうございます。われわれの選手は、選手権大会、デフリンピック等の大会に出場するため、この書類を完全に記入し、ID番号を得る必要があります。

以下は、ICSDオーディオグラム規則に則った、ICSDオーディオグラム用紙の記入ガイドラインです。

1. ICSD公式オーディオグラム用紙の記入が必須です。用紙は以下のサイトからダウンロードできます。  
[www.deaflympics.com/forms/audiogramForm.asp](http://www.deaflympics.com/forms/audiogramForm.asp)
2. 以下の4種類のオーディオグラム検査は、両耳について、完全に記載しなければなりません。
  1. 気導 - 500, 1000, および2000Hzの検査を行ってください。
  2. 骨導 - 500, 1000, および2000Hzの検査を行ってください。
  3. ティンパノグラム (ティンパノメトリー) - 数を記載してください。
  4. 耳小骨筋反射 (アプミ骨筋反射) - 数、もしくは、反応がない場合はNRと記載してください。ダッシュ (-) もしくはゼロ(0)を使って記入しないでください。
3. 以下の黄色い四角で囲んだ番号は、必須記載項目です。

1. **オーディオメーター** - オーディオメーターの名称を明記してください。
2. **検査者氏名** - 検査を行った、聴覚検査士の名前を記入してください。
3. **キャリブレーション** - 使用したキャリブレーションの名称を明記してください。
4. **検査日** - 検査を行った日を記入してください。
5. **気導** - 気導検査の結果を記録してください。上記2.1を参照のこと。気導検査の応答がない場合、「記号凡例 (Key to Symbols)」に従って、NRと記入してください。
6. **骨導** - 骨導検査の結果を記録してください。上記2.2を参照のこと。骨導検査の応答がない場合、「記号凡例」に従って、NRと記入してください。
7. **ティンパノメトリー** - ティンパノメトリーの検査結果を記録してください。上記2.3を参照のこと。
8. **耳小骨筋反射** - 耳小骨筋反射の検査結果を記録してください。上記2.4を参照のこと。
9. **標準純音** - 500, 1000, 2000Hzの項目を追加し、気導と骨導両方の検査結果を、それぞれ記入してください。
10. **失聴のタイプ** - 失聴の種類を識別し、それぞれの耳について、該当する欄に「X」を記入してください。
11. **コメント** - 必要に応じて、当該選手についてのコメントを記入してください。ティンパノグラム、もしくは耳小骨筋反射の検査器具がない場合、コメントを英語で記載してください。
12. この欄は記入しないでください。ICSD事務局のみが使用します。

The form is a detailed grid for recording audiogram data. It includes sections for:
 

- 1. Audiometer: Name of the device.
- 2. Examiner Name: Name of the audiologist.
- 3. Calibration: Name of the calibration used.
- 4. Date of Examination: Date of the test.
- 5. Air Conduction: Results for frequencies 500, 1000, and 2000 Hz for both ears.
- 6. Bone Conduction: Results for frequencies 500, 1000, and 2000 Hz for both ears.
- 7. Tympanometry: Results for frequencies 226, 370, and 440 Hz for both ears.
- 8. Reflexometry: Results for frequencies 500, 1000, and 2000 Hz for both ears.
- 9. Pure Tone Average: Calculated average for both ears.
- 10. Type of Hearing Loss: Grid for recording hearing loss types.
- 11. Comments: Space for additional notes.
- 12. Official use only: Administrative fields.

必須事項の確認もれは、承認の遅れという結果を招きます。

ご協力ありがとうございます。  
ICSDスタッフ

2011年6月現在

## ⑦デフリンピック開催地一覧

### 夏季デフリンピック開催地一覧

回数	開催国	開催都市	開催期間	大会規模		日本代表団派遣			日本代表団成績		
				参加国・地域数	選手数	選手	役員	計	金	銀	銅
1	フランス	パリ	1924年8月10日～8月17日	9	148						
2	オランダ	アムステルダム	1928年8月18日～8月26日	10	212						
3	西ドイツ	ニュルンベルグ	1931年8月19日～8月23日	14	316						
4	イギリス	ロンドン	1935年8月17日～8月24日	12	221						
5	スウェーデン	ストックホルム	1939年8月24日～8月27日	13	250						
6	デンマーク	コペンハーゲン	1949年8月12日～8月16日	14	391						
7	ベルギー	ブリュッセル	1953年8月15日～8月19日	16	473						
8	イタリア	ミラノ	1957年8月25日～8月30日	25	635						
9	フィンランド	ヘルシンキ	1961年8月6日～8月10日	24	613						
10	アメリカ	ワシントン	1965年6月27日～7月3日	27	687	7	4	11	0	1	1
11	ユーゴスラビア	ベオグラード	1969年8月9日～8月16日	33	1189	9	4	13	0	4	0
12	スウェーデン	マルメ	1973年7月21日～7月28日	31	1116	9	4	13	4	2	0
13	ルーマニア	ブカレスト	1977年7月17日～7月27日	32	1150	17	8	25	5	2	0
14	西ドイツ	ケルン	1981年7月23日～8月1日	32	1198	33	11	45	7	4	2
15	アメリカ	ロサンゼルス	1985年7月10日～7月20日	29	995	52	15	77	8	5	2
16	ニュージーランド	クライストチャーチ	1989年1月7日～1月17日	30	955	40	16	56	7	3	4
17	ブルガリア	ソフィア	1993年7月24日～8月2日	52	1679	41	13	54	4	7	5
18	デンマーク	コペンハーゲン	1997年7月13日～7月26日	65	2028	44	14	58	6	1	1
19	イタリア	ローマ	2001年7月22日～8月1日	67	2208	60	26	86	10	5	5
20	オーストラリア	メルボルン	2005年1月5日～16日	63	2038	102	33	135	3	7	1
21	台湾	台北	2009年9月5日～15日	77	2493	154	90	244	5	6	9
22	ブルガリア	ソフィア	2013年7月26日～8月4日	83	2711	149	70	219	2	10	9
23	トルコ	サムスン	2017年7月18日～7月30日	86	2859	108	69	177	6	9	12

### 冬季デフリンピック開催地一覧

回数	開催国	開催都市	開催期間	大会規模		日本選手団派遣			日本選手団成績		
				参加国・地域数	選手数	選手	役員	計	金	銀	銅
1	オーストリア	ゼーフェクト	1949年1月26日～1月30日	5	33						
2	ノルウェー	オスロ	1953年2月20日～2月24日	6	44						
3	西ドイツ	オーベルアンメルガウ	1955年2月10日～2月13日	8	59						
4	スイス	モンタナヴェルマラ	1959年1月27日～1月31日	9	53						
5	スウェーデン	オーレ	1963年3月12日～3月16日	9	60						
6	西ドイツ	ベルヒスガーデン	1967年2月20日～2月25日	12	77	2	3	5	0	0	0
7	スイス	アーデルボーデン	1971年1月25日～1月29日	13	92	(不参加)					
8	アメリカ	レイクブラシッド	1975年2月2日～2月8日	13	139	10	3	13	0	0	0
9	フランス	メリベル	1979年1月21日～1月27日	14	113	8	5	13	0	0	0
10	イタリア	マドンナ	1983年1月16日～1月23日	15	147	9	6	15	0	0	0
11	ノルウェー	オスロ	1987年2月7日～2月14日	15	129	10	4	14	0	0	0
12	カナダ	バンフ	1991年3月2日～3月9日	16	181	9	6	15	0	0	0
13	フィンランド	ユッラス	1995年3月13日～3月19日	18	258	9	5	14	0	0	0
14	スイス	ダボス	1999年3月8日～3月14日	18	265	10	5	15	0	1	1
15	スウェーデン	スツツバル	2003年2月28日～3月8日	21	247	14	15	29	2	0	0
16	アメリカ	ソルトレークシティ	2007年2月3日～2月10日	23	298	17	22	39	3	0	1
17	スロバキア	ハイタトラス	2011年2月10日～2月20日	中止	中止						
18	ロシア	ハンティーマンシスク	2015年3月28日～4月5日	27	336	22	26	48	3	1	1

# マニュアル



第23回夏季デフリンピック  
(2017サムスン)  
トルコ共和国

日本選手団  
必携マニュアル



大会期間：2017年7月18日(火)～7月30日(日)  
派遣期間：2017年7月14日(金)～8月2日(水)

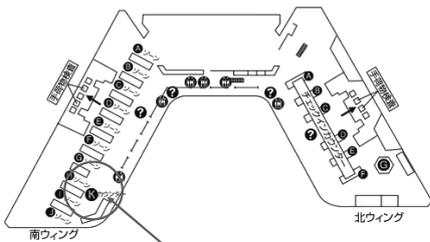
一般財団法人 全日本ろうあ連盟

第23回夏季デフリンピック 必携マニュアル ～目次～

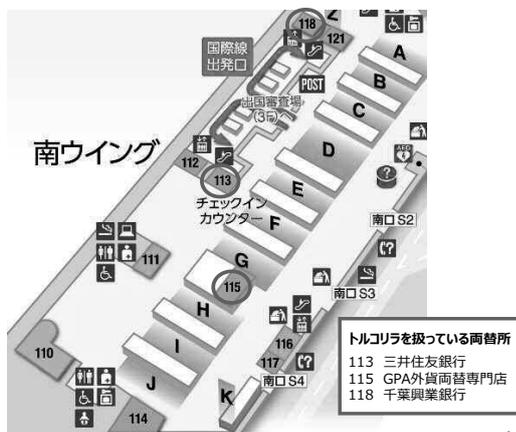
【内 容】	PAGE
1 成田空港ご集合について	1
各出発日の当日のご案内	2
出発前の準備	5
日本出発から～帰国までの流れ	10
出発日・帰国日・フライトプラン	14
競技スケジュール	18
トルコ基本情報・サムスン情報・選手村情報	19
MAP	25
2 大会期間中の注意事項	26
日本選手団組織図	29
ミーティングについて	30
事務所の開所時間について	31
3 結団式・解団式要項	32
4 医療チームマニュアル	33
現地医療施設情報	36
ドーピング検査の手順	40
5 競技中における抗議(プロテスト)について	47
6 危機管理ネットワーク図	49
緊急時の連絡方法について	50
7 報告書作成について	52
8 ISCD執行委員会一覧	53
9 夏季デフリンピック技術規則	58
10 オージオグラム規則	63
11 問診用紙	73
12 ドーピング検査報告書	75
13 第23回夏季デフリンピック日本選手団名簿	76
14 (参考) 連盟への誓約書	82

成田空港ご集合について

第1ターミナル4階出発ロビー



Kカウンター内 G12・14番にて 近畿日本ツーリストのスタッフがお待ちしております。  
ご集合時間につきましては、ご出発日ごとに異なるため別冊の「旅のしおり」をご参照ください。  
※集合時間は出発の3時間前を予定しております。



トルコリラを扱っている両替所  
113 三井住友銀行  
115 GPA外貨両替専門店  
118 千葉興業銀行

各出発日の当日のご案内

～7/14,16,17,19,20,21に出発の皆様～

【集合時間】 午後6時30分 [時間厳守]

(18時30分)

【集合場所】

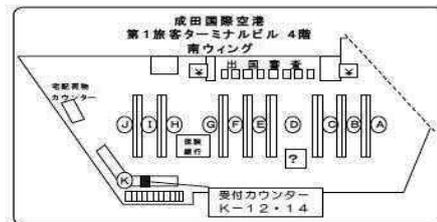
成田国際空港  
第1旅客ターミナル(南ウイング)4階  
Kカウンター12・14番のいずれかにご集合ください。

◇ご出発当日の緊急連絡先  
・近畿日本ツーリスト(株)  
成田空港サービスセンター第1ターミナル事務所  
電話：0476-32-8075(7時00分～22時00分)  
・E-mail：inukai9115@docomo.ne.jp

◇スーツケース等を前もって空港へ送ることができます。  
詳しくは下記へお問い合わせください。  
JAL ABC空港宅配  
<https://www.site.jalabc.com/agency/3966/takuhai/>

◇集合～サムスン到着までは公式ユニフォームのジャージ  
上着を着用してください。(機内は服装自由とします)

【出発便】 ターキッシュ・エアラインズ(TK)053便 21時25分 出発



■ 当日お渡しする書類  
1. チケットお客様控え  
2. 日本の税関申告書等  
3. 荷札

各出発日の当日のご案内

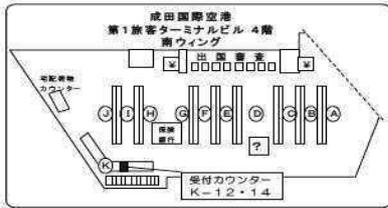
～7/15に出発の皆様～

【集合時間】 午後7時30分 [時間厳守]  
【集合場所】 (19時30分)

成田国際空港  
第1旅客ターミナル(南ウイング)4階  
Kカウンター12・14番のいずれかにご集合ください。

- ◇ご出発当日の緊急連絡先
  - ・近畿日本ツーリスト(株)
  - 成田空港サービスセンター第1ターミナル事務所
  - 電話：0476-32-8075(7時00分～22時00分)
  - ・E-mail：inukai9115@docomo.ne.jp
- ◇スーツケース等を前もって空港へ送ることができます。  
詳しくは下記へお問い合わせください。  
JAL ABC空港宅配  
https://www.site.jalabc.com/agency/3966/takuha/
- ◇集合～サムスン到着までは公式ユニフォームのジャージ上着を着用してください。(機内は服装自由とします)

【出発便】 ターキッシュ・エアラインズ (TK)053便 22時30分 出発



- 当日お渡しする書類
  1. eチケットお客様控え
  2. 日本の税関申告書等
  3. 荷札

3

各出発日の当日のご案内

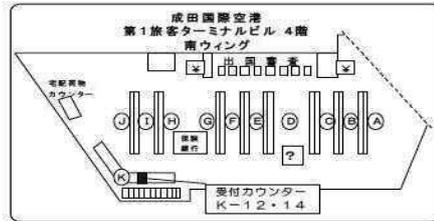
～7/25に出発の皆様～

【集合時間】 午後6時30分 [時間厳守]  
【集合場所】 (18時30分)

成田国際空港  
第1旅客ターミナル(南ウイング)4階  
Kカウンター12・14番のいずれかにご集合ください。

- ◇ご出発当日の緊急連絡先
  - ・近畿日本ツーリスト(株)
  - 成田空港サービスセンター第1ターミナル事務所
  - 電話：0476-32-8075(7時00分～22時00分)
  - ・E-mail：inukai9115@docomo.ne.jp
- ◇スーツケース等を前もって空港へ送ることができます。  
詳しくは下記へお問い合わせください。  
JAL ABC空港宅配  
https://www.site.jalabc.com/agency/3966/takuha/
- ◇集合～サムスン到着までは公式ユニフォームのジャージ上着を着用してください。(機内は服装自由とします)

【出発便】 ターキッシュ・エアラインズ (TK)053便 21時40分 出発



- 当日お渡しする書類
  1. eチケットお客様控え
  2. 日本の税関申告書等
  3. 荷札

4

出発前の準備

■航空会社にお預けになるお荷物(無料受託手荷物)

《エコノミークラス》  
個数：2個  
サイズ：3辺の和が158cm以内  
重量：23kg以内

※1個32kgを超えるお荷物は受託手荷物としてお預かりする事はできませんのでご注意ください。

■機内持込み手荷物は、身の回りの品(ハンドバッグなど)

1個の他、下記の条件となります。  
《エコノミークラス》  
個数：1個  
サイズ：23×40×55cm以内  
重量：8kg以内

【ご注意事項】

- ・パスポートは当社ではお預かりしていません。
- ・パスポート・現金・貴重品・壊れ物は、機内持込み手荷物として携行ください。
- ・電子タバコ、リチウムイオン電池を内蔵したモバイルバッテリーは、必ず機内持込み手荷物として携行してください。
- ・高感度フィルム等は、受託手荷物検査のX線、CTスキャナー検査により影響が出ることが懸念されるため、機内持込みをおすすめいたします。
- ・はさみや刃物類はお預けになる荷物に入れてください。機内には持込みできません。
- ・外国製品、高額商品は日本出国時に税関にて証明を受けます。機内持込み手荷物として携行ください。
- ・万が一のお荷物のトラブル等に備え、1泊分を手荷物としてご用意いただく事をおすすめいたします。

5

出発前の準備

海外旅行に必要な書類

- 旅券(パスポート)は海外旅行に不可欠で、旅行中の身分を証明するものです。必ず各自で所持してください。また旅行中は、盗難・紛失に十分ご注意ください。
- 任意に加入された海外旅行保険の保険証を忘れずにご持参ください。弊社にお申し込みいただいた方の保険証は、出発当日、空港でお渡しする場合があります。

① 旅券(パスポート)盗難・紛失へのご注意

旅券は世界で通用する身分証明書で、旅先では命の次に大切なものとも言えます。旅行中の旅券の管理にはお客様ご自身で十分なる注意をお願い申し上げます。

1. 旅券はカバンに入れず、身体から離さないでください。(首掛け式の袋やセーフティベルトを用いると有効的)
2. 旅券は他の貴重品とは別に各自で携帯してください。
3. ホテル滞在中はセーフティボックスへ預けてください。

【最近の紛失事例から抜粋】

- ① 食事中、離席した時やバッグから目を離した際の置引。
- ② ホテルのチェックイン時に目を離した際の置引。
- ③ バッグの口が開いていることに気づかず引かれた。

※また、日本出発時(空港・ロビー等)でも盗難・紛失が発生しています。

日本出国時および海外入国時の申告について

- ・日本出国時のご注意
  - ① 携帯する日本円、外国通貨、小切手、約束手形、有価証券の合計金額が100万円相当額を超える場合
  - ② 携帯する金の地金(純度90%以上)の重量が1kgを超える場合
 上記の①・②のいずれかまたは両方に該当する場合は、税関への届出が必要になります。税関への届出は、持出し・持込みとも『支払手段等の携帯輸出・輸入証明書』(2片制)を税関に提出します。(届出書は税関に備えてあります)

・現地入国時のご注意

入国時に現金以外も含め、持込みに制限がある国もあります。税関への届出に虚偽の申告をした際には、罰則が科せられる場合がありますので、正確に申告をお願いします。

6

## 出発前の準備

### お金の準備について

#### 【現金】

必要な分だけ両替し、持ち歩くことをお勧めします。  
盗難・紛失時の補償がきかないので、高額な現金は避け、小さいお店での買い物やチップ等のことを考えて小額紙幣を用意することをお勧めします。

#### 【クレジットカード】

利用方法は日本の場合とほぼ同じですので、紛失・盗難時に再発行が可能です。  
(一部のお店では使用できない場合もあります)  
ICチップ付のクレジットカードは使用の際、暗証番号が必要になる場合があります。

(安全性を考慮し、現金よりもクレジットカードのご利用をお勧めします。)

#### 《両替について》

空港や都市の銀行、ホテルでは日本円の両替ができますが、それ以外の場所では日本円の両替はむずかしいので、事前の両替をお勧めします。

#### 外貨両替宅配サービス

三井住友銀行  
<http://biz.knt.co.jp/link/ecc/smbc.html>

#### 《ご注意》

日本帰国後にトルコリラを日本円に再両替される際のレートが大変悪いので、両替したトルコリラは使い切つて帰国されることをお勧めします。

### 持ち物チェックリスト

お荷物は、コンパクトにまとめ最小限にとどめられることをお勧めいたします。  
旅先ではお土産等も増えがちです。

- |                                     |                                       |
|-------------------------------------|---------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> バスポート(旅券)  | <input type="checkbox"/> 旅のしおり        |
| <input type="checkbox"/> 外貨・現金      | <input type="checkbox"/> カメラ・バッテリー    |
| <input type="checkbox"/> クレジットカード   | <input type="checkbox"/> ガイドブック等      |
| <input type="checkbox"/> 海外旅行保険(任意) | <input type="checkbox"/> 簡易雨具         |
| <input type="checkbox"/> 常備薬        | <input type="checkbox"/> 筆記用具         |
| <input type="checkbox"/> 下着類        | <input type="checkbox"/> 時計           |
| <input type="checkbox"/> 洗面用具       | <input type="checkbox"/> スリッパ         |
| <input type="checkbox"/> 衛生用品       | <input type="checkbox"/> 電卓           |
| <input type="checkbox"/> 日焼け止め      | <input type="checkbox"/> 夏服・上着・カーディガン |
| <input type="checkbox"/> パジャマ       | <input type="checkbox"/> 帽子・サングラス・日傘  |

7

## 出発前の準備

### ご旅行中の注意とお願い

弊社では、みなさまのご旅行が安全かつ快適に運べるように安全管理には十分に心掛けておりますが、更に参加者各位におかれましても、外国という特殊事情を前提として次の点にご留意の上、事故防止にご協力をお願いいたします。

- ホテルの部屋に入りましたら必ずロックを施し、更にドアチェーンがある場合には必ずお掛けください。  
特に就寝される場合には、窓の戸締りと共にドアのロックを再度確認してください。
- ホテルのドアは相手を確認してからお開けください。
- 貴重品類・現金・旅券は、外出の際はホテルの部屋に放置しないでください。必ず携行されるが、ホテルの部屋またはフロント会計にありますがセーフティボックスにお預けください。
- 外出の際は、スリ・ひったくり・置き引き等に十分ご注意ください。ホテルのロビー、レストラン等での置き引き、忘れ物も同様にご注意ください。
- 外国の交通法規は日本と異なる場合が多く、歩行者よりも“車”を優先する所もありますので、外出する場合は交通事故にはくれぐれもご注意ください。
- 火災等の緊急避難の場合は、ホテル従業員の指示に従っていただきますが、必ずホテルの非常口の位置等をご確認ください。
- その他につきましては、係員の案内にご協力いただきますようお願いいたします。

### お客様へのお願い

美しい自然環境を守るためご協力をお願いします。

- ・自然の花や植物を大切にしましょう
- ・木や花を採取してもちがえるのはやめましょう
- ・遺跡や文化財を大切にしましょう

8

## 出発前の準備

～国土交通省HPより～

### 1. 概要

国際民間航空機関(ICA O)から各締約国に対して通知された「液体物の機内持込制限に関するガイドライン」に基づき、2007年3月1日から国際線に適用されています。

### 2. 具体的な内容

液体物(ジェル及びエアゾールを含む)を手荷物として客室内に持込む際の制限であり、受託手荷物には適用されません。

- ・すべての液体物は、100ミリリットル以下の容器に入れます。(100ミリリットルを超える容器に100ミリリットル以下の液体物が入っていてもいけません。)
- ・それらの容器をジッパー付の容量1リットル以下の透明プラスチック製の袋に余裕をもって入れます。
- ・旅客1人当たりの袋の数は1つのみとします。(プラスチック製の袋を、検査場において検査員に提示してください。)
- ・医薬品、ベビーミルク/ベビーフード、特別な制限食等については、適用除外です。  
(機内で必要な量に限り適用除外となりますので、検査員まで申告願います。その際、医薬品については、処方箋の写し、薬袋、医師の診断書等の提示をお願いします。)
- ・手荷物検査を効率的に実施するため、上記プラスチック袋及びラップトップコンピューター等電子機器はバックから取り出し、上着類は脱いで別々に検査員に提示します。
- ・保安検査後の免税店等で購入した酒類等は機内持込みが可能です。ただし、国際線に乗り継ぐ場合は、検査の際に、その国のルールに従い没収される可能性がありますので、事前に搭乗する航空会社に確認をお願いします。



《縦横合計40cm以内が目安》

参考URL：[http://www.mlit.go.jp/koku/15\\_bf\\_000006.html](http://www.mlit.go.jp/koku/15_bf_000006.html)

9

## 日本出発から現地到着まで ～成田空港出発の流れ～

### 受付カウンター

- ① 機内預けのスーツケース類に、受付カウンターで荷札を付けさせていただきます。その後、航空券控えをお渡ししますので、各自チェックインをお済ませいただきます。旅券(バスポート)・お金・貴重品はスーツケースに入れないようご注意ください。機内で使用する洗面具・カメラ等は手荷物の中に入れてください。  
※航空会社にお預けになるお荷物(機内)：2個/サイズ：3辺の和が158cm以内/重量：23kg以内  
※機内持ち込み手荷物(機外)：1個/サイズ：23×40×55cm以内/重量：10kg以内

### チェックイン 荷物預け

- ② 《航空券控え》《バスポート》を提示してチェックインの手続きをしてください。  
●搭乗券 ●荷物半券 を受け取ります。

### 手荷物検査

- ③ X線による手荷物検査及び、ボディチェックがあります。100ミリリットル以下の液体物は(自薬、リップジェルなども)、1リットル以下のジッパー付無色透明プラスチック袋に入れて、検査場において検査員に提示してください。透明プラスチック袋がない場合は、容器を廃棄しなければなりません。医薬品、ベビーフード、特別な制限食等については、適用除外されます。
- ④ 手荷物検査を効率的に実施するため、上記透明プラスチック袋及びラップトップコンピューター等電子機器はバックから取り出し、上着類は脱いで別々にトレイに置いてください。

### 出国審査

- ⑤ ●旅券(バスポート)と●搭乗券をセットし、カウンターの係員に提示してください。
- ⑥ 出国審査後、免税店にて旅行に必要なタバコなどが購入できますが、トルコへ免税で持ち込めるのは、タバコ600本、葉巻50本、紙タバコ600本、お酒はアルコール度数22度以上は1ℓ、22度以下は2ℓ、香水5本(各0.12ℓ)までです。(免税範囲を超える量をお持ちの場合は申告し、税金が課せられます。)

### 搭乗

- ⑦ 搭乗ゲートには、**出発時間直(予定)までにお越しください。**  
ゲートは当日空港でお伝え致します。  
搭乗開始の案内がございましたら機内へお進みください。

### 機内

- 時差は日本-6時間です。
- 機内では公式ユニフォームの着用義務はございません(到着前に再度着用し降りてください)
- 約12時間のフライト時間になりますので、ゆっくりとお過ごしください

### イスタンブール

- ⑧ 降機後、入国審査へ向かいます  
※添乗員付きの出発日の方は飛行機を降りたところでご集合ください。  
※乗継時間が長い方はホテルで休憩する場合がございます

10

## 日本出発から現地到着まで ～イスタンブール空港での乗り継ぎ～

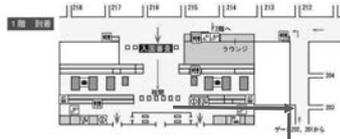
### 乗り継ぎの流れ

入国審査	「Domestic Terminal」の表示の方向へ進み、入国審査を行います。
税関検査	入国審査後も「Domestic Terminal」の表示の方向へ進み、荷物受取のターンテーブルを抜けて、税関検査へ。税関検査は申告がない限り、特に手続はありませんが、抜き打ちの荷物チェックをされる場合がございます。
国内線ターミナルへ移動	税関検査後、到着口から出て、「Domestic Terminal」の表示に従い、国内線ターミナルまで進みます。(徒歩10分程度)
手荷物検査	国内線ターミナルに到着後、手荷物検査を受けます。
出発ゲートへ移動	検査が終了したら、電光掲示板で搭乗予定便のゲートを確認し、出発の30分前までにゲート前に集合するようにしてください。



### 【トルコの手荷物検査での注意！】

パソコンをお持ちの場合、手荷物検査でパソコンの電源を入れるよう要請されることがありますので、充電された状態で渡航するようにしてください。



税関検査後は右手を進み国内線ターミナルへ移動します ※屋外に出ないよう注意してください

国内線ターミナルの廊下

## サムスン空港到着

到着	航空機から降りた後、ターミナルビルへ歩いて移動します。
手荷物受取	ターミナルビルに入るとターンテーブルがありますので、ご自身のお荷物を受け取って、出口に向かって各自お進みください。ガイドがお待ちしております。

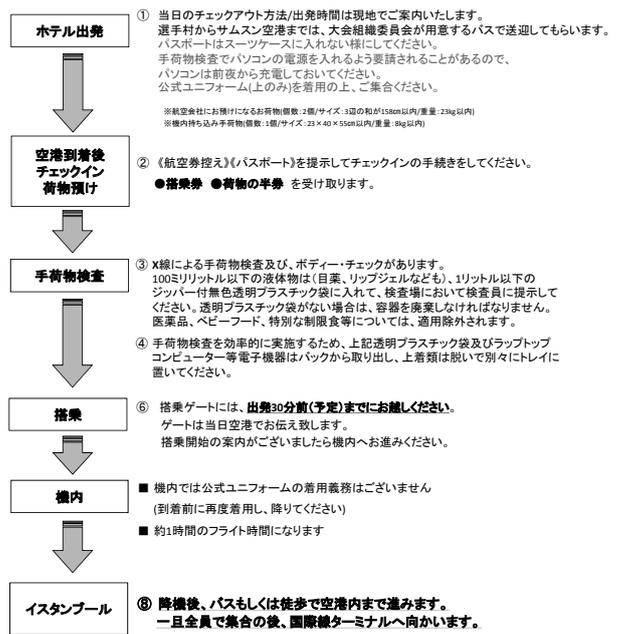


手荷物受取



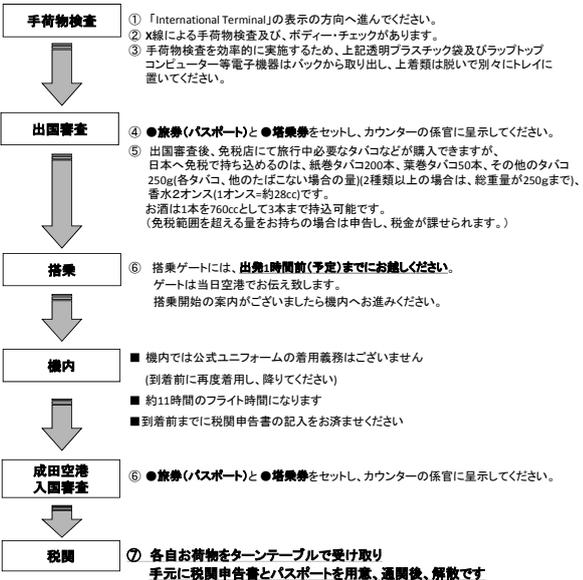
11

## サムスン出発から日本到着までの流れ～日本帰国～



12

## サムスン出発から日本到着までの流れ～日本帰国～



13

### 日本出発日の確認

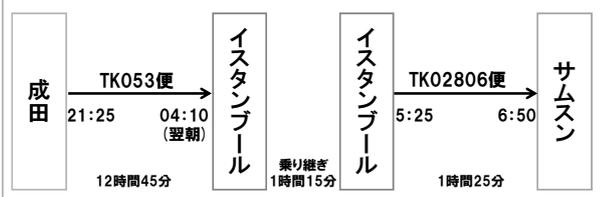
下記のように9期に分かれて出発致します。集合時間にはお忘れませようご注意ください。

成田空港出発日	計	競技団体	人数	空港集合時間	フライト出発時間	添乗員
7月14日(金)	58名	本部①	15	18:30	21:25	小出 淳子 小坂 奈々
		サッカー	26			
		水泳①	2			
		バレーボール女子①	15			
7月15日(土)	34名	バドミントン	9	19:30	22:30	田中 真美
		ビーチバレーボール	6			
		自転車	8			
		空手①	4			
7月16日(日)	52名	テニス	7	18:30	21:25	深 妻子 山上 千里
		本部②	2			
		陸上①	14			
		水泳②	10			
7月17日(月)	19名	卓球	7	18:30	21:25	穴吹 彰子
		バレーボール男子	19			
		陸上②	2			
		本部③	1			
7月18日(火)	閉会式					
7月19日(水)	2名	バレーボール女子②	2	18:30	21:25	
7月20日(木)	6名	陸上③	4	18:30	21:25	大和 輪里希
		空手②	2			
7月21日(金)	1名	陸上④	1	18:30	21:25	
7月24日(月)	1名	本部④	1	18:30	21:25	
7月25日(火)	2名	陸上⑤	2	18:30	21:40	
総計	175名					

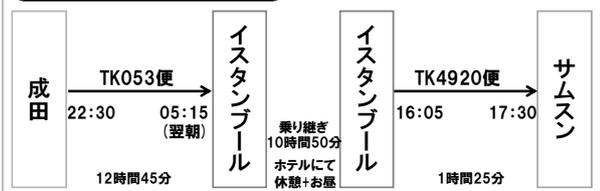
14

往路  
サムスンまでのフライトプラン

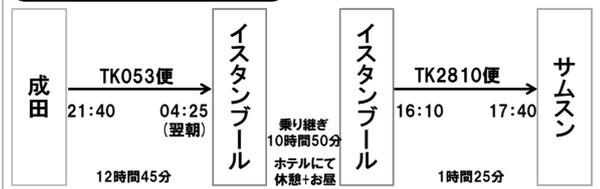
7月14日/16日/17日/19日/20日/21日出発



7月15日出発



7月25日出発



サムスン帰国日の確認

各競技団体の帰国日が異なります。帰国日もご確認の上、出発の準備を整えてください。  
選手村より送迎バスが用意されております。発時間は現地にてご案内いたします。

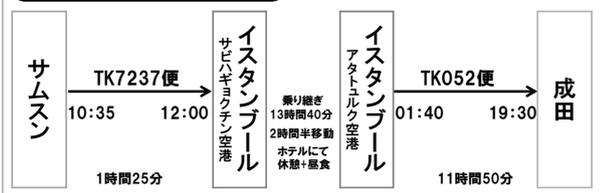
サムスン出発日	計	競技団体	人数	フライト 出発時間	添乗員
7月25日(火)	1名	本部①	1	18:35	
7月26日(水)	1名	陸上①	1	18:35	
		陸上②	1		
7月27日(木)	7名	自転車①	4	18:35	田中 麻実
		水泳	2		
7月28日(金)	16名	空手	6	18:35	山上 千里
		水泳②	10		
7月29日(土)	9名	バレーボール男子①	4	18:35	
		バレーボール女子②	5		
7月30日(日)	4名	陸上③	4	18:35	
閉会式					
7月31日(月)	137名	本部②	17	10:35	小出 淳子 小俣 奈々 深 愛子 久坂 都子 大和 絵里香
		陸上④	34		
		バドミントン	9		
		ビーチバレーボール	6		
		自転車②	4		
		サッカー	26		
		卓球	7		
		テニス	7		
		バレーボール男子②	15		
		バレーボール女子②	12		
総計			175名		

復路  
成田までのフライトプラン

7月25日/26日/27日/28日/29日/30日出発



7月31日出発



※国内専用空港到着の為  
到着後2時間半の陸路移動があります

第23回夏季アジア競技大会 競技スケジュールおよび渡航スケジュール

2017年7月	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	
本部	15																		
近畿日本ソフト スタッフ	3	1	2	1															
陸上																			
バドミントン																			
ビーチバレーボール																			
自転車																			
サッカー																			
空手																			
水泳																			
卓球																			
テニス																			
バレーボール 男子																			
バレーボール 女子																			
成田出発集計	15																		
サムスン帰国集計	61	35	54	20															
※成田到着集計																			
※成田到着集計																			
※成田到着集計																			

※黒数字は出発 (成田空港) 人数

※白数字は帰国 (サムスン空港) 人数

## トルコ基本情報

### 【基本情報】

- 正式名称 トルコ共和国
- 首都 アнка
- 面積 780,576m<sup>2</sup> (日本の2倍)
- 人口 約7,668万人
- 言語 トルク語
- 通貨 トルコリラ(TL) 1トルコリラ=約31.28円



### 【時差】

日本との時差は - 6 時間

### 【水】

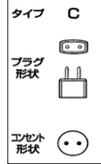
トルコの水道水は飲用不可。お水はミネラルウォーターを飲用してください。  
ガス入りは「Soda(ソダ)」、ガスなしは「Su(スー)」

### 【通貨】

一部のホテル等では米ドルが利用できることもありますが、基本的にトルコリラしか利用はできません。  
またはクレジットカードでの支払いも一部の商店では可能です。その際は暗証番号の入力が必要になりますので、日本出発前に必ず確認をしておいてください。  
また、日本帰国後にトルコリラを日本円に両替する際の両替レートは非常に悪い(1TL = 14円程度)を、両替したトルコリラは使い切つて帰国されることをお勧めします。

### 【コンセント】

電圧は220V/50HZでプラグはCタイプ。  
事前に日本で利用している製品がこの電圧に対応しているか確認してください。  
携帯電話やデジカメ、ビデオ用の充電器の多くは対応している場合がほとんどです。  
非対応の場合は変圧器が必要です。



### 【トイレ】

男性用はBAY、女性用はBAYANと表示。  
街中にはトイレはほとんどありません。  
トイレトパーは備え付けがない場合もありますので、ティッシュは持ち歩くようにしてください。  
洋式が多いが、トルコ式の場合もあります。日本の和式トイレに似ていて、左右のきざぎざの部分に足を乗せ、拭きと反対に引き、(ドア側を向く)しゃがみます。蛇口と小さな桶が備え付けられていますので、それを水にためて流します。

### 【宗教】

国民の99%をイスラム教だが、近代政策により政教分離されており、他のイスラム圏の国とは大きく異なる特色を持つ。  
1日5回の祈りの時間も、街中で放送されるが、祈りを行うは自由。服装についても、自由であり、飲酒をする人も多い。ただ、旅行者でもモスクでの振舞い、モスクに入る前は手足や顔を洗って身を清め、履物を脱いで、肌を露出しない服装で静かに見学することが礼儀です。

### 【注意事項】

- ・屋内は全面禁煙。屋外では喫煙可能
- ・礼拝中のモスク内部や軍事施設、空港内外、鉄道などの公共施設は写真およびビデオ撮影が禁止されている。
- ・トルコは節水を奨励しているが、蛇口の閉め忘れなど、水の使い方はお気を付けてください。その為、現在、トルコ国内において「バスタブのあるホテルはほとんどなく、入浴はシャワーのみとなっています。」
- ・交通事故が日本より多いので注意が必要です。道路は「歩行者優先」ではありません。
- ・予防注射をしていない野良犬や飼い犬も多いので、むやみに現地の犬と触れ合わないようしてください。
- ・国全体としてテロ対策が入念に行われておりますので、空港はもちろん、ショッピングセンターやホテルでも手荷物検査やボディチェックを受ける機会があります。

19

## トルコ基本情報

### 通関

Customs

#### 免税・持ち込みの制限

通貨	外貨の制限はないが、現地通貨はUS\$ 5,000相当額まで。
タバコ	紙巻タバコ600本と、葉巻50本、他組合せあり。
酒類	アルコール度数22度以上は1L、22度以下は2L。
香水	香水5本 (各0.12L)。
その他のもの	土産品はEUR430相当まで。US\$ 15,000以上の価値のある貴重品、骨董品は旅券登録が必要。コーヒー、紅茶、菓子も制限あり。
持ち込み禁止品 (代表的なもの)	麻薬、マリファナ。

#### 持ち出し制限

通貨	外貨の制限はないが、現地通貨はUS\$ 5,000相当額まで。
その他のもの	カーベット (新品) は購入証明が必要。 カーベット (古品) は博物館の証明が必要。 植物は特別の書類が必要。
持ち出し禁止品 (代表的なもの)	骨董品。

#### 通関に関する注意

※宝石、高額な時計など、スポーツガン (リベンディング許可証が必要)、テープレコーダー、レコードプレーヤー、トランジスタラジオの持ち込みはパスポートに記載が必要 (出国時に免税とするため)。持ち出し金額が高額の場合は申告が必要。

### チップ

Tip

一般的には不要です。

#### ホテルで

ルームメイド	5トルコ・リラ程度
ポーター	5トルコ・リラ程度 ※ツアーで団体行動中の場合は不要です。個人行動中は必要です。
コンシェルジュ	5トルコ・リラ程度
ドアマン	5トルコ・リラ程度

#### レストラン/カフェ/バーで

レストランでは、各テーブル担当のボーイがサービスします。日本のようなレブの支払いはありませんので、各テーブルで精算してください。また、レシートが出ないことが多いので、必要な方はレシート: fis (フィッシュ)、領収書: fatura (ファトゥラ) と言って受け取ってください。

サービス料込み	不要
サービス料なし	料金の10~15%
サービス税なし	料金の28% (サービス税18%、チップ10%)

#### 街中で

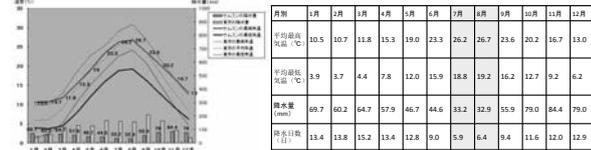
タクシー	料金を切り上げる程度
------	------------

20

## サムスンについて



サムスン (Samsun) は、トルコ黒海地方のサムスン県にある都市で、同県の県都。大きな港を持ち、黒海沿岸で最大の工業都市であるとともに、美しい黒海を望むリゾートという一面をもつ。  
また、街中のいたるところに公園やスポーツ施設がある「スポーツの街」でもある。人口は約396,900人。  
イスタンブルから約850km。  
アンカラから約450km。



### 【気候】

日本より気温は上がりませんが、乾燥しており、直射日光も厳しいことから、夏場の暑さは厳しい地方です。体調管理・水分補給等には最新の注意が必要です。また、早朝・夜間や丘の上などは反面過ごしやすい気温になります。

### 【交通】

サムスン市内の公共交通機関は海岸沿いを走る路面電車です。バスの運行しておりますが、複雑な体系の為、あまり利用は向いておりません。路面電車の時刻表や目的地までの行き方・駅までの道順などはスマートフォン向けアプリの「Moovit」から確認をすることが出来ます。(日本のナビタイムのようなサービスです。)

#### 【Moovit】

Google Play / App Store からダウンロードが可能です。

### 【サムスン広域マップ】



21

## サムスンについて

■大型ショッピングセンター: Piazza Avm 最寄り駅: Samsun Spor  
サムスン中心地にある大型ショッピングセンター。ファッションや雑貨、電化製品、スポーツ用品と幅広い種類のショップとスーパーマーケット、トルコ料理からハンバーガーまで揃ったフードコートが入っており、地元の方々が集う場所です。



■中型ショッピングモール: Life and Boulevard Shopping Mall 最寄り駅: Cumhuriyet Meydanı  
ファッションなどのショップは限られているが、カジュアルなトルコ料理やファストフード、カフェを楽しむモール。このモールの付近にも商店やレストランが多数あります。



### ■主要レストラン

No.	レストラン	カテゴリ	エリア	住所
1	Chickenesh COOL Gastro Pub	各種チキン料理とハンバーガー・ピザ	アタクム	Güzeliyah Mahallesi, Adnan Menderes Blv., 55200 Atakum/Samsun
2	SaSa Restaurant Cafe	トルコ料理	アタクム	Minar Sinan Mh. Adnan Menderes Bulv. No:263 55200 Atakum/SAMSUN
3	Saray Köfte Balik Atakum	トルコ料理	アタクム	Güzeliyah Mahallesi, Adnan Menderes Blv. No:141, 55200 Atakum/Samsun
4	Fevzi'nin Yeri	トルコ料理 シェフフード	イルカディム	Beruşhane mah. Atatürk Bul. balçipark Samsun, 55100 balçipark/Samsun
5	Simit center plus	サムスン名産のパン「サムスンシメット」	イルカディム	19 Mayıs Blv. No:2, Kalle Mahallesi, 55030 İskenderiyah/Samsun
6	KISMET BALIK RESTAURANT	シーフード	アタクム	Denizizleri Mahallesi Adnan Menderes Bulvarı No:131 Atakum/Samsun

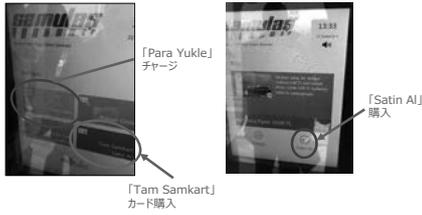


22

## サムスンについて

### ■路面電車の乗り方

日本のSUICAと同様のシステムになっています。カードを購入後はチャージをして購入し入場方式です。カード購入時のデポジットは4,00TL。カードを券売機で購入後、改札でタッチして入場します。券売機はデジタル式でカード購入の場合は「Tam Samkart」からデポジット4,00TL+チャージ6,00TLの10,00TLのカードを購入できます。「Satin All」=購入です。カード購入後のチャージは「Para Yukle」から行えます。デフリンピック期間中の運賃は未定ですが、片道最大3,00TLで運行しています。



### ■タクシーの乗り方

街中には「TAKSI」と書かれたタクシー乗り場から、もしくはホテルから乗ることが出来ます。料金はメーター制です。ドライバーは英語をしゃべりませんので、行きたい場所のトルコ語のメモなどを持って乗るようの方が良いでしょう。また、料金の精算は基本的に現金のみになります。



23

## 選手村での滞在について

今回のデフリンピックでは大学の学生向けの寮を選手村として利用します。広大な大学の敷地の中に、宿泊棟が3つのエリアに分かれています。

### ■選手村ルール

- ・アクレディテーションカードは選手村滞在中、常に所持しておくこと。
- ・男女が同室になってはいけません。
- ・室内は禁煙、喫煙は指定されたエリアのみ可能。
- ・飲酒禁止。

### ■日本選手団の宿泊棟

Munevver Ayasli Dormitory DCに全員宿泊予定です。Munevver Ayasli Dormitoryはメイン棟と宿泊棟4棟（C～F）で構成しており、メイン棟に食堂・ショップがあります。

### ■選手村のサービス

- ・お部屋設備：洗面所・シャワールーム・洋式トイレ・タオル・冷蔵庫・個人別ロッカー・ルームキーはシリンダータイプ（カードではありません。）
- ・お部屋の清掃は2日に一回（シーツ等の交換）、タオルは毎日交換されます。
- ・お部屋に空調設備はありません。（丘の上にある為）
- ・水と氷は各棟の1階で無料でもらうことができます。
- ・ランドリーサービスはお部屋の専用の袋に入れておくことで利用できます。（詳細未定）
- ・各棟の1階にインフォメーションデスクが設置される予定です。
- ・インターナショナルエリアでは銀行や両替やショップがあり、色々なイベントが開催予定です。

### ■日本選手団事務局・日本選手団デスクを設置する予定です。

※現時点では選手村の利用についての詳細が公開されておりません。上記の情報も変更となる可能性もあります。現地到着後、選手村の利用については改めてご案内致します。



24

## 【大会期間中の注意事項】

### 1 はじめに

初めてデフリンピックに出場するにあたって、自分の技術の程度や海外遠征など、不安な状態にあると思われます。参加決定後、選手団本部、競技団体やコーチからいろいろと注意、指示があると思われまますが、項目が多すぎたり、メモに書き落したりということがあっては、折角のチャンスを十分に生かさない結果になることも予想されます。ここでは、心構え、準備から帰国後までの内容を記しておきます。

### 2 心構え

- ★ 日本代表選手としての自覚を持って行動する。
- ★ 代表選手として悔いのないように練習する。
- ★ 大会参加の経験を生かし、後輩のために役立てる。

### 3 大会参加まで

#### 1) 選手団本部やコーチからの連絡事項

- ① 身体に関すること
  - ・ 健康状態の確認
  - ・ 常備薬、排便などの生活習慣チェック
- ② 競技に関すること
  - ・ エントリー種目の決定
  - ・ 競技規則の熟知

#### 2) 生活態度に関して

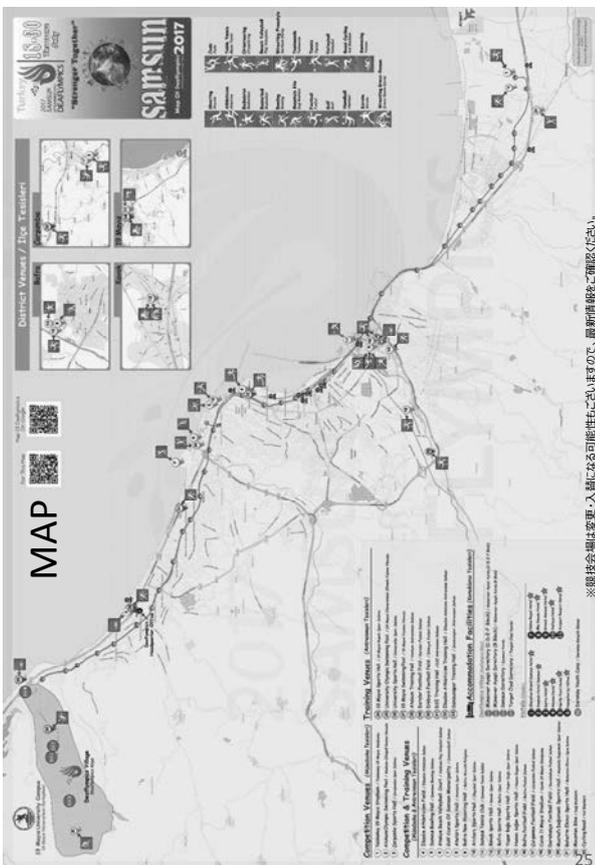
- ① 指示事項は必ずメモを取る。
- ② 集団生活のマナー（ルール）を守る。
  - ・ 時間の厳守
  - ・ 私物の管理（持ち物に名前を付ける）
  - ・ あいさつの習慣
  - ・ 喫煙場所の厳守
- ③ 生活習慣を合せること
  - ・ 食事、シャワー浴、ベッド（メイキングも含む）
  - ・ バランスのよい食事に気をつけること。
  - ・ 貴重品は各自で管理すること。
  - ・ 時間的、場所的にも制約を受けることが多くあるが、お互いのペースを尊重しながら、睡眠、食事、トレーニング、競技、応援、ミーティング、洗濯、排せつ等の生活リズムを自分でコントロールし、規則正しい生活に心がける。

#### 3) 所属するろう協会、居住する都道府県障害福祉課への連絡について。

- ① 都道府県・指定都市の障害福祉課等と十分連絡を取り、挨拶などを欠かさないこと。
- ② その他

- ① 国際手話に慣れておき、簡単な会話を学習しておくこと。

26



※競技会場は変更・入替になる可能性もございますので、最新情報をご確認ください。

25

#### 4 大会前までの練習について

- 1) 大会に合わせた練習計画を立て、質の高い練習をすること。
- 2) 初めての国際大会では、雰囲気慣れなかつたり、あがつたりするので、各自で競技に集中する方法を持っていく。
- 3) 選手1人になっても競技に参加できるように、競技会の仕組みについて理解しておくこと。
- 4) コーチの指示をメモし、頭にいられておくこと。
- 5) 大会参加までの練習で、困ったこと、わからないことがあれば、選手団本部や競技チームに連絡、相談すること。
- 6) 練習終了時に身体のチェックを行なうこと。

#### 5 ユニフォームの着用について

日本選手団として参加する者は、その自覚と誇りを持って選手団公式ユニフォーム（以下「公式ユニフォーム」）を着用しなければならない。

日本選手団より支給された公式ユニフォームは以下の通りである。

- 1) 共通ユニフォーム（ジャージ上下、パーフパンツ、ポロシャツ、帽子）
- 2) 共通ユニフォームの着用について  
結団式、開会式、閉会式及び表彰式、解団式は共通ウェアを着用すること。  
※この共通ユニフォームは他人に譲ったり交換することはできません。  
※靴は黒やダークな色とすること。
- 3) バッジ  
選手団員にはバッジを1個配布するので胸もしくは襟元に付けること。

#### 6 大会会場

- 1) 競技場、食堂、宿舎、その他の関係施設の位置を確認すること。
- 2) デフリンピックでは、雰囲気慣れなかつたり、あがつたりするので、各自で競技に集中する方法を持っていくこと。
- 3) なるべく多くの参加者と親交を深めるように努力し、またそれぞれが、日本チームの一員として責任を持った行動をすること。
- 4) 自分の競技が終了しても、日本チームの他の人でまだ競技を控えている人もいるので、他の人への心づかいを忘れないこと。
- 5) 無断に宿舎、競技場を離れないこと、また、単独行動はとらないこと。
- 6) 部屋をきれいに使うこと。
- 7) パスポート、現金、貴重品の管理をしっかりすること。
- 8) 生水は飲まないこと。

#### 7 毎日の報告について【重要事項】

- 1) 毎日の健康チェックについて
  - ① 各チームとも、毎朝出発前までにチーム全員（選手・スタッフ）の健康状態を指定の用紙（別紙参照）に記入し、メディカルルーム前のボックスに入れること。

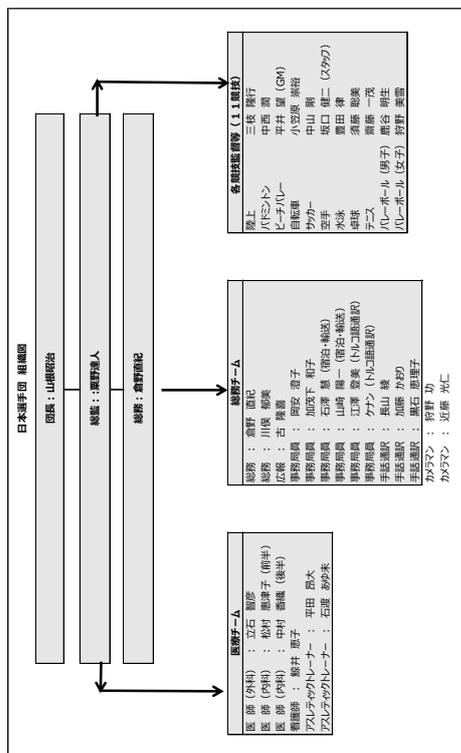
27

- ② 体調のすぐれないメンバーがいた場合、速やかにメディカルスタッフと相談すること。
- 2) 毎日の試合結果について
  - ① 各チーム監督は毎日のチームの行動日程及びリザルトを宿舎に戻り次第、選手団本部に提出すること。
  - ② 公式記録の発表は、選手団本部においてもインターネットで確認する予定。

■これらの条件遵守期間は競技種目に関わらず全員 2017年7月14日～8月2日とする。

28

#### 【日本選手団組織図】



29

#### <大会期間中のミーティングについて>

大会期間中、下記ミーティングを行います。

- 1 **全体ミーティング**
  1. 招集担当 団長
  2. 招集対象者 選手団全員
  3. 内容 選手団全体に関わる内容
  4. 招集日時 結団式、解団式など決定しているもの他は未定。
- 2 **監督ミーティング**
  1. 招集担当 総監督
  2. 参加対象者 各チーム監督、本部総務担当 (広報、翻訳、通訳)
  3. 内容 TD会議結果の報告、情報交換など
  4. 招集日時 週3回程度、日程については事務局から掲示。
- 3 **事務局ミーティング (医療ミーティング含む)**
  1. 招集担当 総務
  2. 招集対象者 本部スタッフ全員 (医療担当者含む)
  3. 内容 連絡・行動の確認
  4. 招集日時 基本的に毎日開催
- 4 **危機管理ミーティング**
  1. 招集担当 団長
  2. 招集対象者 本部役員、関係者
  3. 内容 発生した問題について
  4. 招集日時 緊急時

30

＜大会期間中の事務所などについて＞

- 1 本部事務所**：質問などあるときはこちらに来てください。
1. 開所 / 閉所 朝 8 時～ / ～夜 9 時  
2. 場所 選手村 部屋番号 ( )
- 2 ミーティング室**：詳細については現地でお知らせします
1. 開所 / 閉所 朝 時～ / ～夜 時  
2. 場所 選手村 部屋番号 ( )
- 3 医療室**：具合の悪いときにお越しください。
1. 開所 / 閉所 朝 8 時～朝 10 時 / 夜 7 時～夜 9 時 (いつでもおいていただけます)  
午後 3 時～5 時 (往診もあるので、まず連絡を入れてください)  
2. 場所 選手村 部屋番号 ( )
- 4 トレーナールーム**：チームスタッフと一緒に過ごしてください。
1. 開所 / 閉所 朝 8 時～朝 10 時 / 夜 7 時～夜 9 時 (いつでもおいていただけます)  
午後 3 時～5 時 (往診もあるので、まず連絡を入れてください)  
2. 場所 選手村 部屋番号 ( )

31

**第 23 回夏季デフリンピック  
日本選手団 結団式・解団式について**

日本選手団では、以下の式の開催を予定しています。

- 1、 結団式  
開催日時：2017 年 7 月 18 日 (火) 10：00～12：00 (予定)  
開催場所：選手村内「講堂」  
ご来賓：スポーツ庁長官・在トルコ日本大使・参議院議員  
出席者：選手団員  
式次第 (予定)  
① 開式通告  
② 国歌斉唱  
③ 団長挨拶  
④ 日本選手団紹介  
⑤ 国旗授与  
⑥ ご来賓挨拶  
⑦ 応援メッセージ  
⑧ 総監督挨拶  
⑨ 主将決意表明  
⑩ 閉式通告
- 2、 解団式  
開催日時：2017 年 7 月 30 日 (日) 10 時～12：00 (予定)  
開催場所：選手村内「講堂」  
出席者：選手団員  
式次第 (予定)  
① 開式通告  
② 団長挨拶  
③ 成績発表  
④ 各競技チーム成績報告と挨拶  
⑤ 団旗の返還  
⑥ 主将挨拶  
⑦ 閉式通告

32

**【医療チームマニュアル】**

◆ **メディカルスタッフから選手・スタッフの皆様へ**

今回の大会ではメディカルスタッフとして医師・トレーナー・看護師がご一緒にいます。メディカルスタッフの仕事は、皆様の健康管理、病気や怪我の予防や治療を行います。

場 所 選手村 部屋番号 ( )  
診療・治療時間 8：00～10：00、19：00～21：00(予約なしで受診可)  
15：00～17：00 (往診もあるので、まず連絡を入れてください)

◆ **メディカルルーム (内科) ・ (整形外科)**

医師と看護師が対応します。  
・ 怪我をした方、具合の悪い方(病気)  
・ 体の調子がいつもと違うと感じる方  
・ **自分の持ってきた薬を飲む前に医師に相談してください。**  
眠れない時や気持ちが落ち込んだ時も看護師に気軽に声をかけてください。

♥ **トレーナールーム**

トレーナーが対応します。  
・ ケア及びコンディショニングが必要な方は**チームスタッフと一緒に**来てください。  
ストレッチング、テーピング、トレーニング、アイシング、超音波治療、低周波治療、その他のコンディショニングに関わること  
・ **初めて利用する方はまず医師の診断を受けてください。**  
・ 2 回目以降は時間の予約をしてください。

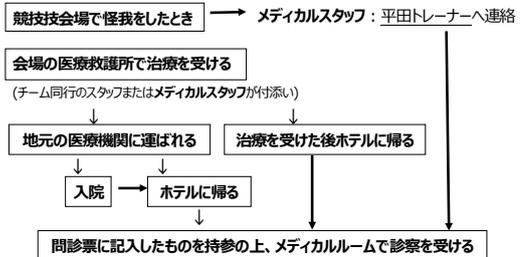
**毎朝出発前までに (各チーム)** → 選手・スタッフの体調を確認し、異常があれば午前 8 時に**メディカルルームへ連絡して下さい。**

**診療時間外の急病時**

緊急連絡先

メディカルスタッフ： 鯨井 (看護師) 号室  
本 部： (事務局) 号室

33



- ※ 日本チームの医師は、競技会場や会場の医療機関で治療を行うことはできません。地元の医療機関に付添うことはできます。
- ※ 各競技団体に配布した問診票に記入し、それを持参の上、メディカルルームにお越しください。

**大会期間中に守っていただきたいこと**

◆ **毎日健康をチェックしましょう**

チームごとに選手・スタッフの体調を管理してください。毎朝チェックし、異常があれば午前 8 時からのメディカルルームに当事者を連れて来てください。

◆ **自分の健康管理をしましょう**

皆様から大会の前に提出していただいた診断書および基本健康調査用紙は大会前に選手の健康状態を把握するための調査で、大会期間中に医師の診察が必要な場合に参考にするものです。既往 (持病) や大会前の怪我が大会期間中に悪化する場合があります。また、大会中に病気になる、怪我をする場合があります。選手の皆様自身で健康管理をすることが大切です。早めに医師やトレーナーに相談することが健康管理です。大会期間中に病気やけがなどについて心配なことは何でも医療担当者にご相談ください。

**うがいと手洗いをしてください。インフルエンザや風邪など、病気を予防します**

- ・ 熱が出たときは、必ず**メディカルスタッフに連絡**してください。
- ・ **人ごみに出るときはマスク**をしましょう。
- ・ 咳や熱が出たときは**マスク**をしましょう。

34

- ・個人(競技団体)で滞在日数分のマスクを持参しましょう。
- ・マスクは1日1枚(使い捨て)使いましょう。
- ・個人(競技団体)で体温計を準備してください。

- 1) ドーピング申請について  
大会において、ドーピング禁止薬の治療目的使用の適用措置 (TUE) を必要とする選手の方は申請をお願いします。なお、以前、連盟に申請した薬以外に新たな薬を使用している選手は、必ず追加報告するようにして下さい。
- 2) ドーピング検査対応の薬・サプリメントのリスト  
現在使用している「くすり」は、使用目的ごとに、名前、メーカー、薬品名、番号などについてリストを作成し常に携帯して下さい(ドーピング検査で必要となります)。  
また、サプリメントは禁止物質が含まれていた場合に救済措置がありませんので、内容が不明な場合には決して摂取しないようにして下さい。

- 3) 服用薬などのチェック・持参、ドーピング相談について  
大会を万全の体調で迎えるにあたって、普段使用している『常備薬』などを次のように準備してください(本部メディカルチームでは、外傷性と緊急性の高い時に使用するものは準備しますが、それぞれにあった「くすり」を準備することは不可能です)。  
また今回は事前に英文リストを提出していますので、できるだけ変更しないようにして下さい。変更があった場合はメディカルチームまでご連絡ください。

- ・各自で日頃使用している「くすり」を少し多めに確保しておく。
- ・定期的な服用をしているもの以外でも、自分にあった「くすり」を持っていく。
- ・薬などの服用に関してはドーピングに注意し、各競技チームのコーチ、医療担当者必ず事前に相談すること。「飲んでしまったんですが大丈夫ですか?」と質問する方がいらっしゃいますが、**大丈夫かどうかはわかりません**。禁止物質を含む「くすり」を服用していることがわかったときは、出場前に強制帰国させる等の措置を取る場合もありますので、必ず事前に相談すること。
- ・出発前や帰国後、急きょ病院にかかる可能性があるため、健康保険証(できるだけ写してないもの)を持参すること。

- 4) 健康管理について  
大きな体調の変化は直ちに各競技チームのコーチ・医療担当者に連絡してください(事前に処理できるのに、出発時にチェックされ出場できなかった例がある)。外国は、医療制度が異なり、日本のように簡単に医療を受けることができないため、細心の注意が必要で。特に現地での水・食事・油物・感染などに注意が必要で。

食事について:

- ・油っこい食事は胃腸が耐え切れず下痢につながるので摂取しすぎないようにする。
- ・生野菜なども、胃腸炎の原因となる可能性がある。
- ・食材が明らかでないものはドーピング違反になる事があるので注意する。
- ・現地で自己判断で薬剤・ビタミン剤などは購入および服用しない。

35

- ドーピングで「点滴治療」は禁止方法の一つであることから、滞在先のホテルや選手村で行うことはできず、組織委員会の指定した医療機関で行うことができないことを理解してください(医療機関であっても、禁止物質を含む点滴を行う場合は TUE 申請が必要)。
- 特に生活習慣・生活環境・食生活・飛行機の移動など、長期間にわたり日常生活が異なることによって生じる精神的疲労を含め、健康管理に十分注意し予防を心がけることです。

- 5) その他
- ・海外でメガネ、コンタクトを作る場合は、診断書が必要な場合があるので、メガネやコンタクトは予備を持っておくこと。紫外線対策としてのサングラスもあると良い (UV カット)。
  - ・歯の治療をすませておくこと。歯痛がなくても歯の検診をうけておくこと。
  - ・リラックスできるものを用意すること。
  - ・風邪の予防 (マスク、うがい薬、体温計の持参)、水分補給等を考えておくこと。

\*選手を持参品リスト(必携)

- ①ドーピング検査対応の薬(常用薬・屯用薬)
- ②ドーピング検査対応の薬・サプリメントのリスト
- ③マスク・うがい薬・体温計(風邪予防用)
- ④サングラス(屋外外出時の紫外線からの目の保護)
- ⑤防寒を含めた雨天対策用品
- ⑥健康保険証(できるだけ写してないもの)
- ⑦出国1週間前から口にした薬・サプリメントのリスト

\*スタッフ及び本部役員を持参品リスト(必携)

- ①常用薬・屯用薬
- ②マスク・うがい薬・体温計(風邪予防用)
- ③サングラス(屋外外出時の紫外線からの目の保護)
- ④防寒を含めた雨天対策用品
- ⑤健康保険証(できるだけ写してないもの)

【現地医療施設】

★治療費はお立て替えいただき、帰国後の保険金請求となります。

★トルコでは日本語が通じる病院はありません。

[アンカラ]

■Güven Hastanesi

所在地: Şimşek Sokak No.29, Kavaklıdere, Ankara  
電話: (0312) -457-2525 (受付), (0312) -457-2519 (救急部受付)、(0312) -474-0646 (救急車受付)  
ファックス: (0312) -457-2887 Eメール: guven@guven.com.tr  
ホームページ: <http://www.guven.com.tr/en>

概要: 私立総合病院。救急は24時間受診可(内科, 外科, 小児科を含む)。検査・点滴・外科処

36

処置・入院が必要な時、緊急移送が想定される時は成人も小児も早めを受診する。外国人への対応に習熟している。日本語不可。カード使用可。

■TOBB ETÜ Hastanesi

所在地: Yesam Caddesi No.5, Söğütözü, Ankara, Armada モール隣  
電話: (0312) -292-9900/9719 (受付), (0312) -292-9988 (救急車受付)  
ファックス: (0312) -292-9910  
ホームページ: <http://www.tobuetuhastanesi.com.tr/>  
概要: 私立総合病院。救急は24時間受診可(内科, 外科, 小児科を含む)。歯科あり。診療時間: 月～金曜日8時30分-18時, 土曜日8時30分-13時。検査・点滴・外科処置・入院が必要な時、緊急移送が想定される時は成人も小児も早めを受診する。外国人への対応に習熟している。

■Bayındır Hastanesi Söğütözü

所在地: Kizilirmak Mahallesi 1443 Caddesi No.17, Söğütözü, Ankara, Next Level モール隣  
電話: (0312) -287-9000 ファックス: (0312) -285-0733  
ホームページ: <http://www.bayindirhastanesi.com.tr/Iletisim>  
概要: 私立総合病院。救急外来あり。歯科あり。診療時間: 月～金曜日8時30分-18時, 土曜日8時30分-13時30分。英語可能。外国人への対応に習熟している。

■Ankara Eğitim Ve Araştırma Hastanesi, Enfeksiyon Hastalıkları ve Klinik Mikrobiyoloji Kliniği, Kuduz Asi Merkezi ve Seyahat İlişkili Enfeksiyonlar Danışma Merkezi (Ankara Training Research Hospital, Infectious Diseases and Clinical Microbiology, Rabies Vaccine and Travelers Health Center)

所在地: Ulucanlar Caddesi, Cebeci, Dikimevi, Ankara  
電話: (0312) -595-3501/3506  
概要: アンカラ国立病院感染症科狂犬病予防接種センター。犬に咬まれた際に狂犬病の予防接種が可能。診療時間: 月～金曜日8時-19時, 土・日曜日15時-17時, 緊急時24時間受診可。バスポート持参要。患者用駐車場なし。

■Ankara Seyahat Sağlığı Merkezi (Ankara Travelers Health Center)

所在地: Ceyhan Atuf Kansu Caddesi No : 102, Balgat, Ankara  
電話: (0312) -431-0727  
概要: 予防接種センター。黄熱の予防接種が可能。事前予約要。月～金曜日9時-17時。日本語不可。

■Portdincin, Ankara Esenboğa Havalimanı, International Flights Building

所在地: Esenboğa Havalimanı, Dış Hatlar, Ankara  
電話: (0312) -398-0373, (0312) -398-0559  
ホームページ: <http://www.esenbogaiairport.com/en-EN/airportguide/health/Pages/Clinics.aspx>  
概要: アンカラ・エセンボア空港の国際ターミナルの空港診療所。黄熱の予防接種が可能。診療時間:

37

■Medikodent

所在地: Filistin Caddesi, Kader Sokak No.6, Flat:3-4, GOP, Ankara  
電話: (0312) -467-0901/3454  
営業時間: 月～金曜日9時～19時30分, 土曜日9時～14時, 日曜日休  
ホームページ: <http://www.medikodent.com/index.php>  
概要: 歯科診療所。一般歯科, 小児歯科, 矯正歯科, 審美歯科があり, 歯石除去, 入れ歯, インプラント可。小児の虫歯予防として3才からフッ素塗布, 永久歯にはシーラントを用いる。小児には注射による全身麻酔をすることがある。3D撮影のX線検査あり。外国人への対応に習熟している。1週間前に予約要。英語可。カード使用可。

【イスタンブール】

■Acibadem Maslak Hastanesi

所在地: Büyükdere Caddesi No.40, Maslak, İstanbul  
電話: (0212) -304-4444, ファックス: (0212) -304-4440  
ホームページ: <http://www.acibadem.com/en/hospital/maslak-hospital-12>  
概要: 私立総合病院。救急は24時間受診可(内科, 外科, 整形外科, 小児科を含む)。救急車あり。予防接種可能(狂犬病と黄熱は除く)。院内に英語表記あり。医療職は英語可。成人にも小児にも利用しやすい(時間外含)。入院が想定される時、緊急移送が想定される時は早めを受診する。診療時間: 月～金曜日8時-18時, 土曜日8時-14時。英語可。カード使用可。

■Amerikan Hastanesi

所在地: Güzelbahçe Sokak, No.20, Nişantaşı, İstanbul  
電話: 444-3777, (0212) -311-2000, ファックス: (0212) -311-2190  
ホームページ: <http://www.americanhospitalistanbul.org/Default.aspx>  
概要: 私立総合病院。救急は24時間受診可(内科, 外科, 小児科を含む)。救急車あり。予防接種可能(狂犬病と黄熱は除く)。外国人患者への対応に習熟。院内に英語表記あり。成人にも小児にも利用しやすい(時間外含)。病院周辺の道路は細く慢性的渋滞が発生しておりアクセスに時間を要する。入院が想定される時、緊急移送が想定される時は早めを受診する。外国人への対応に習熟している。診療時間: 月～金曜日8時30分-18時, 土曜日8時-13時(受診料によって異なるため確認)。英語可。カード使用可。

■Acibadem Etiler Tıp Merkezi

所在地: Nispetiye Caddesi No.40/8, Levent, İstanbul  
電話: (0212) -283-0333, ファックス: (0212) -283-5483  
ホームページ: <http://www.acibadem.com/en/hospital/etiler-outpatient-clinic-1063>  
概要: 外来診療用の診療所。内科, 外科, 整形外科, 耳鼻咽喉科, 産婦人科, 小児科あり。予防接種可能(狂犬病と黄熱は除く)。日本人学校や在留邦人居住地区に近く、在留邦人が多く受診している。軽症疾患の対応、生活習慣病の外来受診に利用しやすい。診療時間: 月～金曜日9時30分-20時, 土曜日9時-14時。要予約。英語可。カード使用可。

38

## ■Acibadem Taksim Hastanesi

所在地：İnönü Mah. Nizamiye Caddesi No: 1-9, Şişli, İstanbul  
電話：(0212) -273-4444, 444-5544

ホームページ：http://www.acibadem.com/en/hospital/taksim-hospital-1078

概要：私立総合病院。救急は24時間受診可（内科、外科、整形外科、小児科、産婦人科を含む）。救急車あり。予防接種可能（狂犬病と黄熱は除く）。外国人患者への対応に習熟。院内に英語表記あり。成人にも小児にも利用しやすい（時間外含）。外来検査が必要な時、入院が必要な時、外科処置が必要な時、緊急移送が想定される時は早めを受診する。外国人への対応に習熟している。英語可。カード使用可。

## ■Acibadem International Hastanesi

所在地：İstanbul Caddesi No:82, Yeşilköy İstanbul  
電話：(0212) -468-4444

ホームページ：http://www.acibadem.com/en/hospital/international-hospital-1053

概要：アタテュルク空港近く。救急は24時間受診可。小児救急受け入れ可能。英語可。カード使用可。保険会社によってはキャッシュレスサービス使用可能。

## ■Haseki Eğitim Ve Araştırma Hastanesi (Haseki Training Research Hospital)

所在地：Millet Caddesi, Aksaray, Fatih, İstanbul  
電話：(0212) -529-4400 ファックス：(0212) -589-6229

ホームページ：http://hasekieah.saglik.gov.tr/

概要：犬に咬まれた際に狂犬病の予防接種が可能。救急は24時間受診可。事前連絡要。日本語不可。パスポート持参要。

## ■İstanbul Seyahat Sağlığı Merkezi

所在地：Rihim Caddesi No.31, Karaköy, İstanbul  
電話：(0212) -244-2594

ホームページ：http://www.seyahatsagligi.gov.tr/Site/YetkilMerkezAdresleri

概要：予防接種センター。黄熱の予防接種が可能。月～金曜日8時-16時30分。事前予約要。日本語不可。

## ■Hudut ve Sahiller Baştaibiği

所在地：Atatürk Havalimanı, Yeşilköy, İstanbul  
電話：(0212) -465-5463, (0212) -463-3000 (7381/7382)

ホームページ：http://www.ataturkairport.com/tr-

TR/HavalimanıRehberi/Saglik/Pages/HudutVeSahiller.aspx

概要：アタテュルク空港の国際線ターミナル出発ロビーの空港診療所 Portclinic の隣にある検査所。黄熱の予防接種が可能。診療時間：月～金曜日9時30分-12時30分,13時30分-16時30分。

39

## 【ドーピング検査の手順】

### 1. 全体的な考え方

ドーピング検査の対象競技者は、競技順位やくじで決定されます（従って、予告なしに通告されます）。

#### (1) 行動の監視

ドーピング・コントロール・オフィサー（DCO）からドーピング検査対象となったと通告を受けた時点から検査終了まで、選手の全行動は DCO から監視を受けることになります。

#### (2) 検査の種類

尿検査と血液検査の2種類となります。  
選手が検査の種類を選択することはできません。注意してください。

#### (3) 検査途中での異物混入を防ぐために

検査中は外部から検体（尿・血液）への異物混入を防ぐために、容器の選択、ボトルへの分注、ボトルの密封まで、選手本人と DCO 双方が確認した上で各操作が実施されます。検体は、密封された状態で検査機関に搬送され、成分が分析されます。

#### (4) コーチ等の同伴

選手にはコーチやチームドクターなどの同伴者を1名帯同することが認められています。特に視覚障害のある選手や上肢機能に障害のある選手については、採尿も同伴者が手伝うこともできます。未成年の選手には、検査が正しく行われたかを確認するためにコーチを同伴することが強く勧められていますが、どうしても難しい場合には、DCO によりシャペロンを1名配置するなど、DCO と選手が二人きりで検査を行わないように配慮されています。なお、通訳は上記同伴者の人数に含まず帯同することができます。

### 2. 検査手順

以下は検査手順ですが、検査の際にはドーピング・コントロール・オフィサー（DCO）が丁寧に一つずつ手順を説明してくれますので、その指示に従って検査を受けてください。また、(公財)日本アンチ・ドーピング機構（JADA）のサイト上（ドーピング検査の流れ）に、手順が紹介されているので、必ず大会前に見ておくようにしてください。

アスリートサイト <http://www.realchampion.jp/>

アスリートに求められる世界基準の手続き <http://www.realchampion.jp/process>

尿検査 [http://www.realchampion.jp/process/examine\\_urinalysis](http://www.realchampion.jp/process/examine_urinalysis)

血液検査 [http://www.realchampion.jp/process/examine\\_blood](http://www.realchampion.jp/process/examine_blood)

1.	ドーピング・コントロール・オフィサーから、検査対象者になったことを通告されたら、検査への同意を確認するための申告書に署名する（検査を拒否することは規則違反となる。）
----	--

\* DCO から検査対象になった旨を伝えられます。通告後は、速やかにドーピング・コントロール・ステーションに出頭してください。表彰式や別種目へ出場する、メディアに対応する、ウォームアップを行う、必要な医療処置を受ける同伴者または通訳を探す、写真付きの身分証明書を探するなど行動は、DCO にその旨を伝え、許可を受けてください。DCO あるいはシャペロン（検査対象者への通知およびドーピング・コントロール・ステーションまでの付き添いと監視を行う検査係員）の同伴があればこれらを行うことは可能です。検査には1名の同伴者（コーチなど）を連れて行くことができます。検査を拒否することは規則違反とみなされます。

40

（ここからは尿検査の場合を説明します。基本的な流れは血液検査も一緒です。）

### 2. 尿意をもよおすまでウエイティングルームで待機する。

\* 検査室には安全なミネラルウォーターなどが用意されていますので、飲みながら尿意を催すまで待ちます。採取した尿量が90ml以下の場合は、再度の採取が必要です。

\* ドーピング検査の際は対象選手だけでなく同伴者（スタッフ、通訳など）もきちんと手を洗ってから検査キットなどにまわらぬように注意書きを加えてください。体につけている化粧品や日焼け止めからグリセリンなどの禁止物質が混入することを防ぐためです。

### 3. 待機中に、いくつかの採取カップの中から、使用するカップを自ら選ぶ。

\* 必ず複数のカップの中から自分で選択します。破損や汚れがないか、気をつけて確認しましょう。

### 4. 採尿する。

\* 同性のオフィサーと一緒にトイレに入り、選手が正しく採尿しているかどうかを目で見て確認します。

### 5. 採取した尿を保管するためにいくつかの密封されたサンプルキットの中から、使用するものを自ら選ぶ

\* サンプルキットには外箱に確認用のシールが貼ってあります。また中にボトル2本が入っています。あらかじめサンプルキットが密封されているか、また容器に破損がないか確認します。

### 6. 2本のボトルに、指示された量の尿を分注し、しっかりとふたをする。

\* 指示に従い、自分で行います。

### 7. 残った尿で、比重が測定される

\* DCO が、カップに残った尿に尿スティックを浸して測定するか、または屈折計を用いて比重を測定します。

### 8. 検査7日以内に使用した薬物・サプリメントについて申告する。

\* 大会前7日以内に使用した処方箋や処方箋のない薬および栄養補助食品類（サプリメント）を記載して下さい。吸入喘息治療薬（例えば吸入ベータ2作用薬、糖質コルチコイド吸入薬）を使用した場合、あるいは糖質コルチコイドの局所注射（関節内、関節周囲、腱周囲、硬膜外、皮内）をした場合は、診断名、使用した薬品名、および処方した医師の氏名や病院名などを記載して下さい（**常時、薬名、サプリメント名とその成分がわかるものをリスト（日本語と英語）にして所持すること**）

### 9. ドーピング検査公式記録書にすべての関係者が署名した後、控えを受け取る

\* 選手と同伴者も記録書の内容が間違いないか確認し、署名をします。

### 10. その後の措置

\* 結果は2週間程度で、公式検査機関を通して実施団体及びJADAに報告されます。結果が陰性であった場合にはJPCおよび選手へは連絡は入りません。陽性の反応が検出された場合にのみ、JADAより選手へ直接通知されます。JPCIにも連絡が入りますので、選手の所属競技団体にその旨を伝えます。その後、聴聞会を経て選手の処分（罰則）が決定されます。

41

## 採尿の方法

(株) LSI メディエンウェブサイトをより

DCO : ドーピングコントロールオフィサー



※「血液検査」については次頁を参照してください。

### 【注意】

① 現在使用しているくずりは、使用目的ごとに、名前、メーカー、薬品名、番号などを英語でリストにし、常に所持して下さい。（検査で必要となります。）

② ドーピング検査を受けたら、必ず「ドーピング検査報告書」を本部メディカルに提出してください。

42



### 【競技中における抗議について】

- 抗議する場合には、必ず事前に総監督に相談をすること。
- 下記を熟読し、手順の流れについてつかむこと。
- 抗議する際の申し立て金については競技団体負担とする。
- 抗議の補償金がUS \$ 50→US \$ 100 に金額アップしているので注意。

### デフリンピック規則 (Deaflympics – Regulations) より

#### DG24. 権限・判定権異議申し立て及び上訴 (紛争)

1. ICSD会長または会長に指名された者は、主催国連盟 (又は組織委員会) 又は大会参加国連盟により提出された、大会に関係するあらゆる申立ての仲裁において最高権力を有する。
2. 試合会場において、試合についてなされた異議については、審判によって判断が下される。これらの審判の判断の対象となるのは、試合結果が決定してから2時間以内に英語で書面で異議を申立てた場合に限られる。紛争に関して、さらに明確にする必要であれば、該当する国際スポーツ連盟規則を参考にしなければならない。
3. 役員決定に対する申立ては、抗議委員会に提出する。併せて評議員会で決められた額の申立て金を納めるものとする。
4. 抗議委員会の決定に対する申立ては、申立人である選手団の役員が、抗議委員会の決定後、4時間以内にデフリンピックの審査員団に対しておこなわなければならない。
5. 抗議委員会は5名からなり、1名は技術委員とする。他の4名は組織委員会が指名する。
6. 審査員団は5名で構成し、うち3名はICSD執行理事会が指名し、残りの2名は組織委員会が指名する。
7. 申立てが受け入れられた場合、申立て金は訴えを起こした選手団に返却される。
8. 聴力テスト及びドーピングに関する申立ては、(医療委員会、選手委員会などの主要代表者と協議の上)、ICSD執行理事会が判定権をもつ。

47

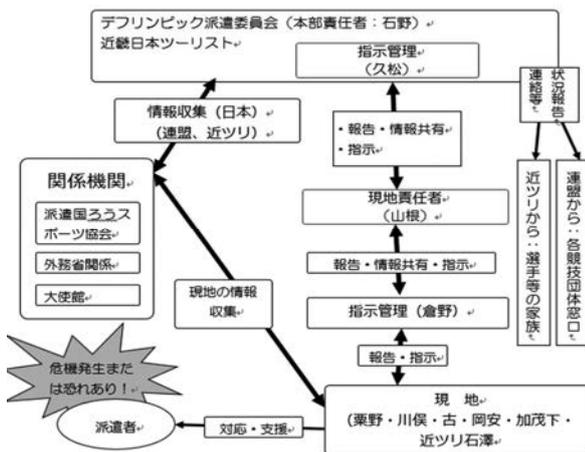
### 技術規則 (General Technical Rules – Deaflympics) より

#### 11. 権限・判定権

- 11.1 ICSD 執行委員会は、大会組織委員会および参加国ろう者スポーツ委員会によって提訴された夏季デフリンピック競技大会に関する全ての争議に対し、最終判定を下すことのできる最高権限を有する。
- 11.2 試合に関することにおいて、審判に待たせかける抗議は彼らによって判断されるものであり、夏季デフリンピック競技大会の抗議用の所定用紙に英語で記入して提出しない限りは抗議とはならない。その抗議は競技それぞれ定める時間内に手渡されなければならない (各競技の技術規則を参照)。
- 11.3 競技役員判定に対する抗議は、問題となる競技の審査委員会のメンバー誰に対しても申立てが可能であるが、その際には100米ドルの保証金を納めることとする。
- 11.4 審査委員会は各競技で定められている制限時間以内にその抗議に対する判定を下し、抗議を申し立てた参加国ろう者スポーツ委員会へその判定内容を速やかに通知しなければならない。
- 11.5 審査委員会の下した判定に対して抗議する場合、審査委員会が最初の判定を下してから4時間以内に、抗議を申し立てた参加国ろう者スポーツ委員会の役員が夏季デフリンピック競技大会の上訴審判へ提訴することができる。
- 11.6 抗議が受理された場合、保証金は抗議を申し立てた参加国ろう者スポーツ委員会へ返却される。
- 11.7 聴力、ドーピング検査、選手の国籍問題に関する訴えは ICSD 執行委員会が単独で判定する。

48

### 【危機管理ネットワーク】



49

### 緊急時の連絡方法について

- 渡航に関する緊急連絡 (出発前日、及び当日の大幅な遅延、及びアクシデントの際)

【旅行会社専用デスク】  
 近畿日本ツーリスト株式会社 トラベルサービスセンター東日本  
 『第23回 夏季デフリンピック (サムスン2017)』係 石渡 (イシワタ) ・高橋  
 〒160-0023 東京都新宿区西新宿8-14-24 西新宿KFビル3階  
 TEL: 03-6730-3220 FAX: 03-6730-3229  
 Eメールアドレス: tourdesk80@or.knt.co.jp  
 営業時間: (月)~(金) 09:30~17:30 ※土・日・祝日は休業

【成田出発日の緊急連絡】  
 近畿日本ツーリスト株式会社  
 成田空港サービスセンター第1ターミナル事務所  
 電話: 0476-32-8075 (7:00~22:00)  
 Mail: inukai9115@docomo.ne.jp

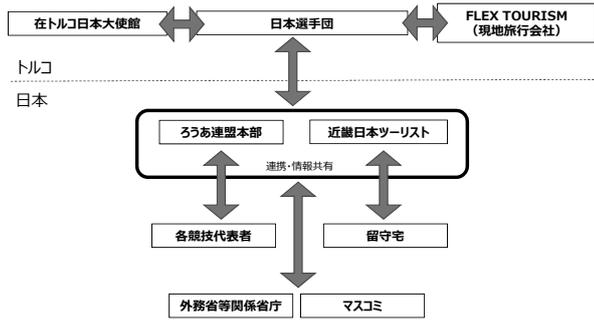
- 現地での連絡体制について

<b>日本選手団事務局</b> 携帯: 90-530-222-5267 Mail: jfd-sc@jfd.or.jp		
<b>メディカルチーム</b> 携帯: 90-533-202-1741 Mail:	<b>メディアチーム</b> 携帯: 90-533-208-9603 Mail:	
<b>陸上</b> 携帯: 90-533-393-5397 Mail:	<b>バドミントン</b> 携帯: 90-533-208-9614 Mail:	<b>ビーチバレー</b> 携帯: 90-533-208-9607 Mail:
<b>自転車</b> 携帯: 90-530-222-5271 Mail:	<b>水泳</b> 携帯: 90-533-208-9663 Mail:	<b>バレーボール(男子)</b> 携帯: 90-533-208-9609 Mail:
<b>サッカー</b> 携帯: 90-533-208-9649 Mail:	<b>卓球</b> 携帯: 90-533-491-9996 Mail:	<b>バレーボール(女子)</b> 携帯: 90-533-202-1754 Mail:
<b>空手</b> 携帯: 90-533-208-9662 Mail:	<b>テニス</b> 携帯: 90-533-491-9995 Mail:	

現地にて各競技団体へ現地用携帯電話とWifiルーターをお渡します

50

## 緊急時連携体制



## 連絡先一覧

■手配旅行会社  
【専用デスク】  
近畿日本ツーリスト株式会社 トラルサービスセンター東日本  
【第23回 夏季アジア大会（サムスン2017）】後 石塚（イシヅカ）・高橋  
〒160-0023 東京都新宿区西新宿8-14-24 西新宿KFビル3階  
TEL : 03-6730-3220 FAX:03-6730-3229  
【空港事務所】  
近畿日本ツーリスト株式会社 成田空港サービスセンター第1ターミナル事務所  
電話：0476-32-8075（7:00～22:00）  
【手配支店】  
近畿日本ツーリスト株式会社 ECC営業本部 第1営業支店  
〒101-0024 千代田区神田和泉町1-13 住友商事神田和泉町ビル14階  
TEL:03-6891-9301 FAX:03-6891-9401  
【現地事務所】  
FLEX TOURISM  
住所：Buyukdere Cad. Merkez Mah. No:15-A Hur Han A Blok Kat:8 Sijli / Istanbul  
TEL +90-212-231-6770 FAX:+90-212-231-6771

■在トルコ日本大使館  
住所：  
Japonya Buyukelçiligi,  
Resit Galip Caddesi No. 81, Gaziosmanpasa, 06680, Cankaya, Ankara, Turkey  
電話：+90-(0)-312-446 05 00 (代表)  
FAX: +90-(0)-312-437 18 12 (代表)  
メール：culture@an.mofa.go.jp  
領事業務窓口：9:00～13:00, 14:30～17:30  
時間外連絡先：一寸木氏 +90-534-266-3186

■保険会社  
東京海上日動 トルコ サポートダイヤル 00-800-8191-9611

51

## 【報告書作成について】

大会終了後、日本選手団員は「全員」報告書の作成が義務付けられています。  
【手順】  
日本選手団員は報告書を作成→競技団体で取りまとめ→派遣委員会事務局へ提出。

### 【事務局への提出メチ】

2017年9月30日（土）厳守

※事務局提出メチりを勘案し各競技団体でのメチを決められますよう、お願い致します。  
※こちらの報告書は助成金を受けた結果を報告するためのものです。

### 【報告書の内容】

- 選手団員は下記のページ数を厳守して、報告書を作成して下さい。
- 事前に作成できる内容は、準備を進めておくことをお勧めします。
- 報告書をスムーズに作成できるよう大会期間中はメモを取ることをお勧めします。

#### 1) 団長・総監督・総務・競技監督（文字数：4800字～6400字）

- ① 選手の選考について
- ② 成績一覧
- ③ 成績と評価
- ④ チーム（コーチ）体制と各コーチの役割
- ⑤ 競技スケジュール（旅行スケジュール）
- ⑥ 大会の競技運営などの報告
- ⑦ 競技規則の適用（問題点など）
- ⑧ 大会参加までの準備状況
- ⑨ 反省・まとめなど

#### 2) スタッフ（競技スタッフ・本部スタッフ）（文字数：1200字～1600字）

- ① 団体内の担当とその内容
- ② 反省・まとめなど

#### 3) 選手（文字数：600字～800字）

- ① 成績に対する自己評価
- ② 反省・まとめなど

### 【様式について】

競技団体から事務局へ提出する際は、下記の点に注意し、提出下さい。

- ① パソコン（ワード）で作成。
- ② 書式
  - ・サイズ：A4 タテ
  - ・文字：横書き
  - ・余白：上下左右 2.0 cm
  - ・段組：2 段
  - ・文字サイズ：8 ポイント

※ 文書作成は「ワード」、表については「ワードまたはエクセル」を使用下さい。

写真は日本選手団広報担当が撮影したのから選びます（事務局）。

52

## ICSD（国際ろう者スポーツ委員会）役員一覧表

### ①執行委員会



氏名：RUKHLEDEV Valery  
役職：President  
e-mail: president@ciss.org



氏名：CHEN Kang  
役職：Vice President – World Sports  
e-mail: vicepresident-sports@ciss.org



氏名：LANESMAN David  
役職：Vice President – World Youth Sports  
e-mail: vicepresident-youth@ciss.org



氏名：ADAM Rebecca  
役職：Member at Large  
e-mail: adam@ciss.org



氏名：LUSIC Marijo  
役職：Member at Large  
e-mail: lusic@ciss.org

53

### ②技術委員



陸上  
氏名：PEARCE Richard  
Email: td-athletics@ciss.org



バドミントン  
氏名：BOGARD Martin Lawrence  
Email: td-badminton@ciss.org



バスケットボール  
氏名：ENDRESS Jurgen  
Email: td-basketball@ciss.org



ビーチバレーボール  
氏名：KNETZGER John J.  
Email: td-beachvolleyball@ciss.org



ボウリング  
氏名：KUEHN Rainer Wolfgang  
Email: td-bowling@ciss.org

54



自転車（サイクリングロード、マウンテンバイク）  
氏名： FERNANDEZ Ralph  
Email: [td-cycling@ciss.org](mailto:td-cycling@ciss.org)



サッカー  
氏名： DE CARO Rosario  
Email: [td-football@ciss.org](mailto:td-football@ciss.org)



ゴルフ  
氏名： BALHARRIE Gavin Peter  
Email: [td-golf@ciss.org](mailto:td-golf@ciss.org)



ハンドボール  
氏名： HENSEN Norbert  
Email: [td-handball@ciss.org](mailto:td-handball@ciss.org)



柔道  
氏名： ANTOINE Damien  
Email: [td-judo@ciss.org](mailto:td-judo@ciss.org)

55



空手  
氏名： FARAONE Francesco Paolo  
Email: [td-karate@ciss.org](mailto:td-karate@ciss.org)



オリエンテーリング  
氏名： DULA Olga Alexandrovna  
Email: [td-orientteering@ciss.org](mailto:td-orientteering@ciss.org)



射撃  
氏名： ADAM Mac  
Email: [td-shooting@ciss.org](mailto:td-shooting@ciss.org)



水泳  
氏名： GERSHWIND Reed  
Email: [td-swimming@ciss.org](mailto:td-swimming@ciss.org)



卓球  
氏名： SCHEFFEL Horst-Peter  
Email: [td-tabletennis@ciss.org](mailto:td-tabletennis@ciss.org)

56



テコンドー  
氏名： JEONG Bongkyu  
Email: [td-taekwondo@ciss.org](mailto:td-taekwondo@ciss.org)



テニス  
氏名： BURZ Tobias  
Email: [td-tennis@ciss.org](mailto:td-tennis@ciss.org)



バレーボール  
氏名： SCHELVIS Cathy  
Email: [td-volleyball@ciss.org](mailto:td-volleyball@ciss.org)



レスリング（フリースタイル・グレコローマン）  
氏名： GRIGORYAN Grigor  
Email: [td-wrestling@ciss.org](mailto:td-wrestling@ciss.org)

57

## 夏季デフリンピック・技術規則

### 1. 期間

第23回夏季デフリンピック大会はトルコのサムスンにおいて、**2017年7月18日から7月30日まで開催するものとする。**

### 2. 競技

第23回夏季デフリンピック大会では以下の競技を行う。

- 2.1 個人競技：陸上、バドミントン、ビーチバレー、ボウリング、自転車（ロード）、ゴルフ、柔道、空手、マウンテンバイク、オリエンテーリング、射撃、水泳、卓球、テコンドー、テニス、レスリング（フリースタイル）レスリング（グレコローマン）
- 2.2 団体競技：バスケットボール、サッカー、ハンドボール、バレーボール
- 2.3 個人競技の種目は各々の競技特有の規則に規定する。
- 2.4 最低でも2つの地域および5か国以上からの予備登録/ファイナルエントリーを受けた男子と女子それぞれの競技および種目のみが公式種目として残る。
- 2.5 デフリンピック一般規則 7.5 に基づき、競技および種目の中止（キャンセル）は国際ろう者スポーツ委員会の事務局長によって予備登録の締切日から14日間以内、ファイナルエントリーの締切日からできるだけ早く、影響が見込まれる各国のろう者スポーツ委員会に対して通告しなければならない。

### 3. 参加規定

- 3.1 第23回夏季デフリンピック大会は公平無私な競技を行う目的のもとに、加盟国全てのろう者スポーツマンが集い団結する場である。
- 3.2 人種、宗教及び政治的所属などいかなる理由においても団体及び個人を差別する行為を禁ずる。
- 3.3 デフリンピック大会に参加する選手は以下の条件に適用者でなければならない：
  1. ろう者：この場合は両耳のうち、聴力が優れた方の耳の聴力レベルが最低でも55dB以上の者を指す（1964年に定めたISO基準：500、1000、2000ヘルツの3つの振動数平均を基準とする）
  2. 加盟国連盟の会員
- 3.4 原則として競技者に年齢制限は設けない。但し、個別の競技または種目に関しては、その規則において年齢制限を設ける場合がある。
- 3.5 登録用紙に参加規定項を明記し、以下の同意文を載せるが、各連盟の2人の役員（通常は会長と事務局長）がこれに同意してサインしなければならない：「我々著名者は夏季デフリンピックの参加規定を読み、我々及び選手はその条件に従うことを誓います。我々は国際ろう者スポーツ委員会によって認可された条件と目的において、夏季デフリンピック大会の期間中、テレビ撮影及び写真撮影などを受け入れることに同意します。」
- 3.6 以上の規程に違反しない限り、参加登録は正式な手続きを経て認められる。
- 3.7 参加者は自分が所属する国連盟の国籍を有していなければならない。異議申し立てがあった場合、当該連盟はパスポートコピーの提出により国籍を証明しなければならない。

58

#### 4. 取締り・罰則

- 4.1 聴力検査表（オージオグラム）を提出済みの選手リストを各連盟に配布する。リストに名前のある選手は新たに聴力検査表を提出する必要はない。その他の選手全員（リストに名前のない者）は、大会参加前に ICSD 公式 HP にアップされている ICSD 指定の聴力検査表を事務局宛に提出しなければならない。
- 4.2 夏季デリンピック登録選手に対し、大会前または期間中に新たに聴力検査を課す場合がある。
- 4.3 全ての選手に対し、いかなる時でもドーピング検査を課す場合がある。
- 4.4 これらの検査で不適格な結果が出た選手は即刻退場となる。もしその選手がその競技でいくつかの種目を掛け持ちしている場合は、違反が認められた種目のみ出場失格となる。
- 4.5 そのような不適格な選手がチームの一員であった場合、その選手は試合中でも即刻退場となる。その選手はその試合の残り時間および次の試合において出場失格となる。その選手に代わり交代選手を出場させることは可能である。
- 4.6 不正行為が発覚した場合には、ICSD 執行委員会が課す全ての手続き料金と罰金を当該国連盟が支払う義務を負う。
- 4.7 夏季デリンピック大会期間中に行われるその他の全ての検査諸経費は大会組織委員会が負担する。
- 4.8 持病（アレルギー、喘息、てんかんなど）により薬または禁止物質を使用している選手は治療目的使用のための適用除外申請用紙の提出により特別許可の承認を得なければならない。詳細については ICSD アンチドーピング規定を参照のこと。

#### 5. エンゲージメント（関係者）

- 5.1 加盟している各国のろう者スポーツ委員会のみが夏季デリンピック競技大会の大会参加者を登録できる権限を持つ。
- 5.2 それぞれの競技および種目における関係者の最大人数は各競技の規則に明記されている。
- 5.3 各国のろう者スポーツ委員会の会員である競技選手 3 名につきスタッフ 1 名を任命できる。それに加え、競技ごとに 1 名ずつ競技役員を登録し配置できる（評議員会に出席する各国代表者の分を除く）。
- 5.4 第 23 回夏季デリンピック競技大会の登録申請用紙は ICSD 事務局から配布される。

#### 6 団体競技

- 6.1 団体競技の予備エントリーの申込み締切日は 2015 年 1 月 18 日とする。
- 6.2 団体競技の参加意思確認の提示締切日は 2016 年 7 月 18 日とする。
- 6.3 団体競技のファイナルエントリーの申込み締切日は 2017 年 6 月 18 日とする。
- 6.4 ファイナルエントリーは 2017 年 6 月 18 日より遅れることなく、提示されている各種目の出場選手の名前や背番号と共に ICSD 事務局へ提出しなければならない。この登録申請は公式のオンライン登録を通して行われるものとする。

59

- 5.1 2017 年 6 月 18 日を過ぎる追加登録は受け付けない。
- 5.2 2016 年 6 月 18 日～7 月 18 日の間の出場辞退は罰金 2,500 米ドルが課せられ、辞退した後にすぐさま支払わなければならない。
- 5.3 2017 年 7 月 18 日以降の出場辞退は 5,000 米ドルが課せられ、辞退した後にすぐさま支払わなければならない。

#### 7 個人競技

- 7.1 予備エントリーは 2016 年 7 月 18 日より遅れることなく、それぞれの競技および種目に出場が見込まれる選手数を示すと共に ICSD 事務局へ提出しなければならない。
- 7.2 ファイナルエントリーは 2017 年 6 月 18 日より遅れることなく、提示されている各種目の出場選手の名前や背番号と共に ICSD 事務局へ提出しなければならない。この登録申請は公式のオンライン登録を通して行われるものとする。
- 7.3 2017 年 6 月 18 日を過ぎる追加登録は受け付けない。
- 7.4 登録選手が競技に出場しなかった場合には、選手 1 名につき 100 米ドルが徴収される。ただし、医師からドクターストップがかかり、選手（彼/彼女）の出場を許可しない旨の診断書が提出された場合は例外とする。

#### 8. 財政規定

- 8.1 各選手団は旅費、食費、宿泊費その他諸経費を負担しなければならない。
- 8.2 各選手および競技役員（代表者も含む）は夏季デリンピック競技大会の開会式の前までに参加費 40 米ドルを支払わなければならない。
- 8.3 あらゆる未払い金は夏季デリンピック開会式の前までに全て支払わなければならない。さもなければ、チーム全体が大会への参加を認められない。

#### 9. メダルと賞状

- 9.1 全ての個人競技および種目において、第 1 位には金（金メッキした銀）のメダルと賞状、第 2 位には銀メダルと賞状、第 3 位には銅メダルと賞状を授与するものとする。
- 9.2 全ての団体競技および他のあらゆる競技における団体種目において、「疑似的な」状態を除き（9.3 参照）、夏季デリンピック競技大会の期間中に行われた試合および競技会に最低でも 1 つ以上参加し、勝ち残ったチームの各メンバーに第 1 位が授与される、同じく 2 番目のチームの各メンバーには第 2 位が、3 番目のチームの各メンバーには第 3 位が授与される（9.1 参照）。それ以外のチームの各メンバーには賞状が授与されるがメダルはない。
- 9.3 個人競技では第 4 位から第 8 位までの選手に賞状が授与される。

#### 10 テクニカルミーティング（監督会議）、抽選会

- 10.1 全ての競技において、最初の試合が始まる前に少なくとも 1 回は競技ごとに監督会議が行われる。日時と場所は後日通達される。

60

- 10.2 監督会議には、競技委員会、審判員（jury）、デリンピックの技術委員、各参加国からの代表者 2 名（2 名のうち、1 名はろう者でなければならない）が出席する。聴者が代表者として会議に出席する場合は、通訳者をつけることが認められる。
- 10.3 団体競技の抽選は（発表された抽選日時）において（発表された会場）にて団体競技に参加登録した各国のために行われる。
- 10.4 卓球、テニス、バドミントンのトーナメント戦の抽選は、これらの競技における技術会議の前または会議中にサムスンで行われる。シード権は抽選会開催前に発表される。

#### 11 権限・判定権

- 11.1 ICSD 執行委員会は、大会組織委員会および参加国ろう者スポーツ委員会によって提議された夏季デリンピック競技大会に関する全ての争議に対し、最終判定を下すことのできる最高権限を有する。
- 11.2 試合に関することにおいて、審判に待ったをかける抗議は彼らによって判断されるものであり、夏季デリンピック競技大会の抗議用の所定用紙に英語で記入して提出しない限りは抗議とはならない。その抗議は競技それぞれ定める時間内に手渡されなければならない（各競技の技術規則を参照）。
- 11.3 競技役員への判定に対する抗議は、問題となる競技の審査委員会のメンバー誰に対しても申立てが可能であるが、その際には 100 米ドルの保証金を納めることとする。
- 11.4 審査委員会は各競技で定められている制限時間以内にその抗議に対する判定を下し、抗議を申し立てた参加国ろう者スポーツ委員会へその判定内容を速やかに通知しなければならない。
- 11.5 審査委員会の下した判定に対して抗議する場合、審査委員会が最初の判定を下してから 4 時間以内に、抗議を申し立てた参加国ろう者スポーツ委員会の役員が夏季デリンピック競技大会の上訴審判へ提訴することができる。
- 11.6 抗議が受理された場合、保証金は抗議を申し立てた参加国ろう者スポーツ委員会へ返却される。
- 11.7 聴力、ドーピング検査、選手の国籍問題に関する訴えは ICSD 執行委員会が単独で判定する。

#### 12 身分証明カード

- 12.1 全ての選手および役員は身分証明カードが与えられ、試合会場などに入場する際には必ず携帯しなければならない。身分証明カードがない場合、選手は競技に出場できない。

#### 13 宣伝広告

- 13.1 通常の特徴的なデザインパターンの一部またはそのデザインパターンから独立したものも含め、衣類の前後に付ける面積の合計が 400 ㎡以下の小さなロゴやその他の広告を衣類や用具に付けることは認められる。（デリンピック規約 DG15.2 参照）。
- 13.2 夏季デリンピック競技大会区域内外ではいかなる政治的、宗教的、人種的なデモや宣伝広告を禁止する。（IOC オリンピック憲章 2015 年 8 月版第 50 条を参照）

61

#### 14 補聴器

夏季デリンピック競技大会の試合中はいかなる種類の補聴器、増幅器、および人工内耳の外部装置の着用を厳禁する。

#### 15 その他

現在のデリンピック規則および ICSD 規約で定められた範囲以外の予想外の事態が発生した場合には、IOC や国際競技連盟の規則を参照する。これらの規則は大会主催国のろう者スポーツ委員会の規約や規則よりも絶対的に優先するものであり、抗議なしにこれに従うものとする。

62

## オージオグラムに関する規則

国際ろう者スポーツ委員会（第4版 改訂版 - 2016年3月7日）

<http://www.jfd.or.jp/deaflympics/icsd/audiogram-regulations.php>

### 目次

1. 前文
2. 参加資格に関する規則
3. 定義とどうであることの証明
4. オージオグラム承認の提出手順
5. デフリンピックおよびその他 ICSD 認定競技大会において
6. 選手の自己責任
7. 発覚
8. 違反と罰則
9. 機密事項
10. オージオグラム・データベースで使用されている重要な記号

#### 1. 前文

スポーツ精神とは、人間の精神・肉体・心を祝い、以下の価値観によって特徴づけられるものである：

- 倫理感、フェアプレイ、正直さ
- 健康
- すくれたパフォーマンス
- 人格と教育
- 楽しみと喜び
- チームワーク
- 専心と献身
- 規則や規約の遵守
- 自身および他の参加者の尊重
- 勇気
- コミュニティと連帯

63

ICSD は、**PER LUDOS AEQUALITAS** 「スポーツによる平等」というオリジナルのモットーを掲げ、オリンピク精神の本質をろう者とわかちあう。

夏季・冬季デフリンピックおよび世界選手権、地域選手権、その他 ICSD 認定競技大会には、ろうおよび難聴の選手だけが参加することができる。

正会員、準会員、地域連盟および賛助会員は、地域別および国際スポーツイベントにおいて、以下のオージオグラム規則を遵守する。

#### 2. 参加資格に関する規則

夏季・冬季デフリンピック、世界選手権、地域選手権、その他 ICSD 認定競技大会は、加盟団体である全国ろう者スポーツ協会のろうの選手が集結する場である。

デフリンピックおよびその他の ICSD 認定競技大会の参加者は、以下のとおりでなければならない：

- ・ **良耳の平均聴力レベル (PTA) が 55dB 以上の聴覚障害を有する (500, 1000, 2000 ヘルツの三つの純音平均聴力レベル、気導、ISO1969 基準) ろう者であること。**
- ・ **加盟団体である全国ろう者スポーツ協会の会員であり、その国の国民であること。**

選手は、禁止エリア内でのウームアップおよび試合中には、いかなる補聴機器、増幅器および人工内耳体外装置の装着も厳しく禁止されている。スポーツ競技において、音の増幅器の使用が、使用していない者よりも有利に作用することは明白である。そのため、ウームアップならびに試合中は使用が禁止されている。「禁止エリア」は、各々の競技において定義されている。詳細は、各競技の技術規則を参照のこと。

#### 3. 定義とどうであることの証明

**3.1.** 「ろう」とは、良耳の平均聴力レベルが 55dB 以上の聴力障害を有することと定義される (500, 1000, 2000 ヘルツの三つの音の周波数平均、ISO1969 基準) が、55-65dB の境界線の聴力については、慎重に審査すること。

**3.2.** 選手が片耳に人工内耳を装着している場合には、その耳については検査をする必要はないが、オージオロジストは人工内耳が装着された耳がどちらであるかを明確にオージオグラムシートに記載しなければならない。

選手は人工内耳を装着していない耳については検査を受ける必要がある。

64

**3.3.** 各選手の聴力検査の確認とその個々のオージオグラムについての正確さと誠実性については、各国ろう者スポーツ協会が全責任を負う。

**3.4.** 初参加の選手は、ICSD 公式オージオグラムの書式を用いなければならない。書式はインターネットからダウンロードできる。<http://www.deaflympics.com/audiogramform.asp>

**3.5** オージオグラム検査は、以下の4項目の全てがそれぞれの耳について完全に記載されなくてはならない。

##### 1. 気導

250Hz - 8kHz

##### 2. 骨導

500Hz, 1kHz, 2kHz, 4kHz

##### 3. ティンパノグラム (ティンパノメトリー)

音量

圧

コンプライアンス

##### 4. 耳小骨筋反射 (リフレクソメトリー)

同側

反対側

適切な検査が行われない場合には、承認が遅れることになる。

**3.6.** 全てのオージオグラムは、正当と認められ、検査を受けた選手自身のものである。その有効性については、各国ろう者スポーツ協会が保障しなければならない。

#### 4. オージオグラム承認の提出手順

##### 4.1. 競技前:

**4.1.1** 新しいオージオグラムを提出する前に ICSD 事務局 (office@ciss.org) に連絡し、当該選手がすでに ICSD のオージオグラムデータベースの中に登録されているかどうか、自国の最新リストを確認する。もしリストに選手名がない場合、ICSD 事務局はその選手のオージオグラムデータを保有していないことを意味する。

The image shows a sample audiogram form with four numbered callouts: 1 points to the 'Air Conduction' section, 2 points to the 'Bone Conduction' section, 3 points to the 'Tympanogram' section, and 4 points to the 'Otosclerosis Reflex' section.

65

**4.1.2** いかなる ICSD 認可の競技大会 (夏季/冬季デフリンピック、世界選手権、地域選手権を含む) においても、全ての新しいオージオグラムは大会の **3ヶ月前**までに提出されなければならない、かつ **1年以内**のデータでなければならない。

**4.1.3** 新規参加選手のオージオグラム提出遅滞の罰金は、**書式受領日を基準に 1書式・選手あたり 40米ドル** (競技前3ヶ月未満)、また **1書式・選手あたり 100米ドル** (競技前1ヶ月未満) となる。

**4.1.4** 新規参加選手の競技初日にオージオグラムが未提出の場合には、**試合参加は認められない。**

**4.1.5** すべての新しいオージオグラムは、**各国のろう者スポーツ協会によってのみ**、直接 ICSD 事務局に送付されなくてはならない。

**4.1.6** 受領されたオージオグラムは ICSD のデータベースに入れられ、「**本国検査済み**」であることを示す「N」(国内)と入力される。

**4.1.7 3.5**に規定されたとおり全ての記入がされていない場合、完全な情報を記載して再提出されるまで、そのオージオグラムは「INC」(不完全)と入力される。提出が3ヶ月未満となった場合には、提出遅滞料 **金 40米ドル** または **100米ドル** を支払うものとする。

**4.1.8** 次に、オージオグラムは更新の確認のため ICSD オージオロジストへ送付される。

**4.1.9** ICSD オージオロジストは承認するものと危険/境界線上にあるものと明示する。

**4.1.10** 承認されたオージオグラムは、ICSD オージオロジストによってのみ「N」から「C」(CISS)に変更される。

**4.1.11** 「X」記号の「危険」な選手、または「N」記号の本国検査のみの選手は、ICSD オージオロジストによって夏季・冬季デフリンピック、世界選手権、地域選手権、その他 ICSD 認定競技大会期間中に再検査される。

66

4.1.12 平均聴力レベル 55dB 以上という資格要件に当てはまらない選手は「DQ」記号で参加資格なしと判定され、**書式受領日**から最低 **2 年間**はオージオグラムを再提出できない。

#### 4.2. 最終登録用紙:

4.2.1 最終登録用紙には「選手の ID 番号」欄がある。

4.2.2 オージオグラムが ICSD のデータベースに既に登録されている選手は、全国ろう者スポーツ協会が該当箇所に選手の ID 番号を入力する。これらの選手は、改めてオージオグラムを提出する必要はない。以下の例参照。

姓	名	生年月日	選手のID番号
DOE	John	31 Jan 1975	12345
SMITH	David	5 May 1978	
SHARP	Alfred	10 Dec 1977	22678

上の例では、**DOE, John** と **SHARP, Alfred** は ICSD のデータベースにオージオグラムが登録されているが、**SMITH David** は登録されていないことを示している。

4.2.3 オージオグラムのデータベース上、不十分であることを示す「INC」あるいは資格がないことを示す「DQ」が記載されている場合には、参加は許可されない。

4.2.4 オージオグラムを提出していない者には参加資格が与えられない。

#### 5. デフリンピックおよびその他 ICSD 認定競技大会において

5.1. オージオグラム・データベース上、その選手が各国のオージオリジストによって検査されたことを示す「N」である場合、当該選手は夏季・冬季デフリンピック、世界選手権、地域選手権、その他 ICSD 認定競技大会期間中に、ICSD のオージオリジストによって再検査される場合がある。

5.2. 新規登録選手（「N」ステータス）の予備的聴力検査が、ICSD 認定の全ての大会と予選、地域大会および世界大会を問わずに行われる。ICSD は全ての大会に対し、ICSD 公認オージオリジストを派遣できる。予備的聴力検査は選手が試合に来る前に行われなければならない。ICSD

67

は 1 人または 2 人の公認オージオリジストをデフリンピックおよびいくつかの地域・世界選手権のために選定する。

5.3. 非公認のオージオリジストが ICSD 認定の大会にいた場合、その検査は ICSD オージオグラム検査規則に則って行う。そのオージオリジストは選手のオージオグラムステータスを「N」から「C」に変更することはできない。その選手も検査機関に行き、最新の聴覚検査技術（携帯検査機器）を使用した検査対象となる。ICSD 執行理事代表は、聴力レベルの許称の有無を検査するためにその場で新規登録選手（「N」ステータス）を選ぶことができる。万一、不正や疑惑が検査中に見つかった場合には、当該選手は病院の聴覚センターで更なる検査を受け、その費用は選手が所属する全国ろう者スポーツ協会が負担する。

5.4. 現場で検査を受けて「境界線上」と判定され、参加資格基準に適合しない選手は、PTA（純音平均）が参加資格要件から 5 デンベル以内であることが明らかになっていれば、再度検査を受けることができる。一度だけ ICSD オージオリジストにより資格認定以前の別の日程で検査を受ける。

5.5. ICSD の公認オージオリジストによって検査・認証を受けた選手は「V」と表示される。

5.6. ICSD は、以前に承認を受けている選手であっても、いつでも検査、再検査を行う権利を有する。

5.7. 選手の聴力の資格基準に疑義が持たれる場合、ICSD はまず選手のオージオグラム・データベースを、下記の要領に従って調べる。

5.7.1 当該選手が「V」で示されている場合は既に ICSD によって検査されているため、その場のオージオリジストがこれ以上の検査を行う必要はない。

5.7.2 当該選手が「C」「N」もしくは「X」で示されている場合は、過去に ICSD による検査がなされていないため、オージオリジストは必ずこの選手の検査を行う必要がある。

5.8. オージオグラム検査は、試合のスケジュールを邪魔したり、変更させたりしてはならない。

5.9. 選手管理の下、検査時間の確保はチームリーダーの責任である。

68

5.10. 当該選手のチームリーダーは、検査を受ける選手とともに決められた時間に ICSD オージオリジストと会う。その選手と同行者は各自のパスポートを持参しなければならない。

5.11. 予約を守らなかった場合、料金が課せられる。

5.12. オージオグラム規則にしたがって検査を受けずに大会終了時に去った選手は、参加資格を失う。

#### 6. 選手の自己責任

6.1. ウォームアップ中ならびに試合中にいかなる補聴器/増幅器ないしは人工内耳体外装置も禁止エリア内で着用しないようにすることは、各選手の**完全なる自己責任である**。

6.2. 試合会場に入る際、全ての選手はいかなる補聴器/増幅器ないしは人工内耳体外装置の装着を認められない。全ての選手は、試合前の最終練習の間に、補聴器/増幅器ないしは人工内耳体外装置をはずさなければならない。

#### 7. 発覚

##### 7.1. 聴力機器類の使用

ウォームアップ中ならびに試合中に、禁止エリア内で選手が補聴器/増幅器ないしは人工内耳体外装置を装着していることが発覚した場合、ただちに、当該競技の技術委員と異議申し立て委員会にその旨を報告しなければならない。

当該試合において承認を受けているリーダーおよびトレーナーだけが、補聴器/増幅器ないしは人工内耳体外装置の装着について、公式な異議申し立て文書を提出することができる。

異議申し立て文書と共に、日時が刻印されたビデオによる、追加の証拠を作成しなければならない。伝聞による証拠は作成できない。

##### 7.2. 参加資格認定期間中の聴力検査

選手が 55dB 以上の平均聴力レベルに適合しないことが、デフリンピックまたは地域・世界選手権において ICSD オージオリジストによって判明した場合、またはその大会のために任命されたオージオリジストにより判明した場合、当該選手は参加資格を得ることができない。選手が役割を「役員」等に変更しても、いかなる形の参加資格をも与えられない。

69

#### 7.3. 異議申し立てもしくは ICSD 役員の出選による聴力検査

競技者が 55dB 以上の聴力障害を有していないことが、ICSD のオージオリジストによって判明した場合、当該選手は参加資格を剥奪される。また、当該選手の出場したすべての競技において、失格とされる。当該選手が団体競技に出場していた場合、それまで出場していた試合は没収試合とされ、そのスコアは国際スポーツ連盟 (ISF) の規則に従って没収される。

#### 8. 違反と罰則

##### 8.1. 違反:

8.1.1 個人競技の選手が補聴器/増幅器ないしは人工内耳体外装置を装着している場合は、当該選手は即時に競技から除外されなければならない。当該選手が同じ競技で他の種目や、別の競技にも出場している場合には、違反が行われた種目についてののみ失格となる。

例 A : 陸上競技 : 選手が 100m、200m、400m に登録している。その選手は 200m のレース中に補聴器/増幅器の装着が発覚した。この選手は 200m は失格となるが、100m と 400m レースには影響はない。リレーで違反が行われた場合には、チーム全員がそのレースを失格となる。

例 B : バドミントン : 選手がシングル、ダブルス、ミックスダブルスに登録している。その選手は、ダブルスでの補聴器/増幅器の装着が発覚した。当該選手はダブルスのみ失格となり、シングルとミックスダブルスには影響しない。もし違反がチーム競技で行われた場合には、チーム全員がその種別は失格となる。

8.1.2 チーム競技の選手が競技中に補聴器/増幅器ないしは人工内耳体外装置を装着していた場合、各競技の試合没収に関する規則に従い試合が没収され、チームは負けとなる。選手は、次の試合には自由に出場することができる。しかし、試合の得点状況によっては、負けることがかえってそのチームにとって有利になる場合がある。このことも考慮にいれ、チームが没収試合の敗戦によって逆に有利になることが決まらなければならない。

8.1.3 同じ選手が違反を繰り返した場合、当該選手とチームは、即座に試合から除外されると同時に ICSD 事務総長に報告され、執行委員会が定める一定期間出場停止になる。

##### 8.2. 罰則:

8.2.1 これらの規則に違反した場合、技術委員と ICSD 役員はすべての違反を ICSD 事務総長に報告する。失格した選手と（あるいは）そのチームに授与されたすべての賞品、賞、メダル、証

70

書が取り消され返還される。更に ICSD 執行委員の決議に基づき、1 0 0 0 米ドルの罰金が課される。

8.2.2 いずれかの全国ろう者スポーツ協会が、2 度以上、本規則 3.1、3.2、3.6 の規定違反をした場合、ICSD 執行理事会は、当該全国ろう者スポーツ協会に対し認定競技大会への 2 年間の出場停止を言い渡す場合がある。

8.2.3 出場資格を失っている期間中は、その全国ろう者スポーツ協会とその国のチームは、ICSD 認定の競技大会に出場することはできない。

9. 機密事項

データや選手個人情報は機密扱いにしなければならない。管理スタッフも同時に選手のデータの機密性の維持において誠実に細心の注意を払うことを確実にするために注意深い管理が必要となる。参加者の機密性を保護し、尊重するために適切な予防措置というは：

- ・個人情報をご公開することのない漏洩発見リサーチ
- ・リサーチ記録の確実な保存と権限保持者のみの限られたアクセス
- ・個人情報の削除、隠蔽、コード化

ICSD 理事会、ICSD 事務局スタッフ、地域ろう者スポーツ連盟、各国ろう者スポーツ協会、国際ろう者スポーツ連盟を含む ICSD 関係者全てが、選手の医学的記録の機密性を保持することを求められる。各国ろう者スポーツ協会が受領している全ての選手の記録は機密扱いとされ、情報が非特定化され統計や概要データとしての目的以外では、受領者の書面での同意なしに開示されない。

10. オーディオグラム・データベースで使用されている重要な記号

PTA - 平均聴力レベル、純音平均

dB - デシベル

V - ICSD のオーディオロジストによって検査され、有効とされた選手

C - ICSD のオーディオロジストによって確認され、承認されている申請書

R - 地域のオーディオロジストによって承認されている「地域検査済み」

N - 自国のオーディオロジストによって審査、承認されている

X - 危険/境界線上

DQ - 平均聴力 55 dB の基準を満たしておらず失格

INC - オーディオグラムが不完全。詳細は 3.5 参照

TD - 技術役員

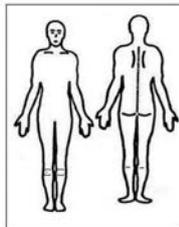
ICSD - 国際ろう者スポーツ委員会

外科用 問診用紙

記入日: 2017年 7月 日

氏名: \_\_\_\_\_ 種目: \_\_\_\_\_  
 生年月日: S・H 年 月 日 生まれ (男・女) 満 歳  
 身長: \_\_\_\_\_ cm 体重: \_\_\_\_\_ kg ベスト記録: \_\_\_\_\_  
 ポジション: \_\_\_\_\_ 得意種目・技: \_\_\_\_\_

○現在痛めている部位(気になる部位や違和感のある部位を下記に記入してください)



○現在治療を受けていますか? (はい・いいえ)

- ① \_\_\_\_\_
- ② \_\_\_\_\_
- ③ \_\_\_\_\_

○いつから症状がありましたか?

- ①平成 年 月 日～( )
- ②平成 年 月 日～( )
- ③平成 年 月 日～( )

現在の症状(下枠より)	原因(下枠より)	治療内容(下枠より)
① _____	① _____	① _____
② _____	② _____	② _____
③ _____	③ _____	③ _____

A 何もしなくても痛い	B さわる痛い	C 動かす痛い	D 多く痛い	E まとる痛い
F ジャンプすると痛い	G 伸ばすと痛い	H 曲げると痛い	I ひねると痛い	J 歩くとき痛い
K 股げると痛い	L 腫る痛い	M ズキッと鋭い痛み	N ズーンと鈍い痛み	O 腫れている
P 重たい	Q 腫れている	R 違和感がある	S つまっている	T 腫を持っている
U じびれがある	V 出ている			

○過去の主な怪我、病気、生まれつきの障害、手術など (特になし・ある場合は)

○現在服用している薬、サプリメント(薬の種類や服用状況)  
 特になし・ある場合は⇒( )

○アレルギーの有無(食べ物、薬物、化学物質、環境など)  
 特になし・ある場合は⇒( )

○女性の方への質問です。月経は定期的ですか? (はい・いいえの方は)

口婦人科に受診していますか? はい・いいえ (服薬している薬名: \_\_\_\_\_)

口月経頻度は? ( 日/回 もしくは 回/日・週・月・年)

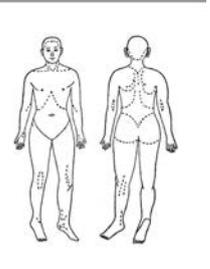
※この用紙に記載の個人情報、個人情報保護方針に基づき保護を徹底いたします。

内科用 問診用紙 (1)

受診される方もしくは代理の方が記入ください。受診日 2017年 7月 日

氏名: \_\_\_\_\_ 性別: 男・女  
 生年月日: 昭和・平成 \_\_\_\_\_年 \_\_\_\_\_月 \_\_\_\_\_日 年齢: \_\_\_\_\_歳  
 [ (どちらかに○をお付けください) 選手, 役員 ]  
 競技名: \_\_\_\_\_ [種目(階級・ポジション): \_\_\_\_\_]

1. どんなことで診察を希望されましたか?



2. 診てもらいたいところを右図に○をつけてください

3. これまでの主な病気やけがを記入ください。

病気 \_\_\_\_\_  
 けが \_\_\_\_\_

- 4. 現在、服用中の薬 (あり、なし) 薬品名 \_\_\_\_\_
- 5. 薬物アレルギー (あり、なし) 薬品名 \_\_\_\_\_
- 6. 食物アレルギー (あり、なし) 食物名 \_\_\_\_\_
- 7. 女性にお尋ねします。妊娠の可能性はありますか? (あり、なし)

ご記入ありがとうございました  
 発熱がある方は裏面にも記入下さい

以下はメディカルスタッフ記入 問診用紙を確認したスタッフ氏名 \_\_\_\_\_  
 予想される問題点: どちらかに○を付ける 内科系, 外科系

ドーピング検査報告書

ドーピング検査を受けたら本部メディカルチームまで報告してください。

Form for doping test report with fields for date, time, athlete name, age, medal status, and test type.

日本選手団名簿

※年齢・2017年6月1日現在 ※所属団体は選手・監督等がメダルの獲得を目指す国より記載します

Table listing athletes with columns for No., Name, Position, Name, Age, Sex, Height, and Affiliation.

日本選手団名簿

Table listing athletes (continued) with columns for No., Name, Position, Name, Age, Sex, Height, and Affiliation.

日本選手団名簿

Table listing athletes (continued) with columns for No., Name, Position, Name, Age, Sex, Height, and Affiliation.

日本選手団名簿

順位	No.	競技名	種目 (オリンピック種目)	名前	生年月日	性別	年齢	種別	所属	所属団体
105	22	サッカー	選手	山崎 拓斗	2001年10月17日	男	24	選手	東京体育大学	日本サッカー協会
106	23	サッカー	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本サッカー協会
107	24	サッカー	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	25	選手	東京体育大学	日本サッカー協会
108	25	サッカー	選手	伊藤 勇将	1995年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本サッカー協会
109	26	サッカー	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本サッカー協会
110	1	空手	準決勝	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
111	2	空手	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
112	3	空手	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
113	4	空手	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
114	5	空手	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
115	6	空手	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
116	7	空手	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
117	8	空手	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
118	9	空手	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
119	10	空手	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
120	11	空手	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
121	12	空手	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
122	13	空手	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
123	14	空手	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
124	15	空手	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
125	16	空手	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
126	17	空手	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
127	18	空手	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
128	19	空手	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
129	20	空手	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
130	21	空手	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
131	22	空手	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
132	23	空手	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
133	24	空手	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
134	25	空手	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本空手道連盟
135	1	テニス	監督	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
136	2	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
137	3	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
138	4	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
139	5	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会

日本選手団名簿

順位	No.	競技名	種目 (オリンピック種目)	名前	生年月日	性別	年齢	種別	所属	所属団体
140	4	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
141	5	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
142	1	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
143	2	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
144	3	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
145	4	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
146	5	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
147	6	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
148	7	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
149	8	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
150	9	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
151	10	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
152	11	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
153	12	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
154	13	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
155	14	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
156	15	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
157	16	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
158	17	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
159	18	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
160	19	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
161	1	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
162	2	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
163	3	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
164	4	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
165	5	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
166	6	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
167	7	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
168	8	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
169	9	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
170	10	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
171	11	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
172	12	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
173	13	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
174	14	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会

日本選手団名簿

順位	No.	競技名	種目 (オリンピック種目)	名前	生年月日	性別	年齢	種別	所属	所属団体
175	18	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
176	19	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会
177	20	テニス	選手	藤原 拓也	1997年10月20日	男	24	選手	東京体育大学	日本テニス協会

参考

一般財団法人全日本ろうあ連盟 デアリンピック派遣委員会

誓約書

私は、第23回夏季デアリンピックの日本選手団員として、一般財団法人全日本ろうあ連盟デアリンピック派遣委員会の意向に従い、以下の事項について誓約いたします。

- 第23回夏季デアリンピックの日本代表としての名誉をもち、国際ろうあスポーツ委員会の規則を遵守して競技・行動すること。
- 出発前までに配布する選手団必携を熟読し、派遣期間中は団長の指示・決定に従い、規律を守り集団行動に努めること。
- 任命から大会期間中、以下に掲げる理由等によりデアリンピック派遣委員会が代表団員に相応しくないと判断し、任命取消の決定がされた場合受け入れること。  
(医学的な見地から派遣することに問題がある、規律を守らない、団長の指示・決定に従わない場合)
- 国際アンチドーピング機構規程および関連ドーピング規定を遵守すること。
- 派遣期間中、組織委員会の許可した報道機関および日本選手団事務局の撮影・録音・インタビュー等には、極力応じる。  
また、以下に掲げる場合の写真や動画の使用については承諾するとともに、その都度の連絡を求めないこと。  
(当会が作成するデブスポーツの周知・広報を目的としたパンフレットやPR動画への掲載、または、当会が許可した印刷物や映像作品等への使用の場合)
- 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会、一般財団法人全日本ろうあ連盟の主催および許可した行事への参加要請に応じること。
- 公式ユニホームの支給を受けた団員は、ユニホームを他人に譲ったり売買しないこと。

以上

一般財団法人全日本ろうあ連盟  
デアリンピック派遣委員会 委員長 石野 富志 殿

2017年 月 日

競技: \_\_\_\_\_

自筆署名: \_\_\_\_\_ 印

保護者署名: \_\_\_\_\_ 印

※未成年の場合は保護者のサインを添えて提出 82



Japan Deaf Sports Federation

## 第23回夏季デフリンピック競技大会

### ソーシャルメディアガイドライン



一般財団法人全日本ろうあ連盟

## ソーシャルメディアとは

ソーシャルメディアとはユーザーにより作成された内容を創出、交換することのできるインターネット・ベースのアプリケーション。

### ブログ

一般的に誰もがアクセスできるウェブサイトの一つで、ジャーナルや日記の形で投稿、構成され、通常新しい順に表示されるもの。

### ソーシャルネットワークサービス (Facebook, MySpaceなど)

利用者各人を表現する(通常個人プロフィール)、または利用者所有のリンク先など多種多様な追加サービスを含むオンラインサービス、コンピューターシステムおよびサイトのことである。

### ウィキ

ウェブブラウザを経由でリンクされたいくつものウェブページを作成したり編集したりできるウェブサイトのことである。

### Twitter、YouTube、他…

— 1 —

## デフリンピック資産の例

！ 許可無く、営利目的で使用することは固く禁じられています。



ICSDロゴ



日本選手団ロゴ



大会ロゴ



静止画



動画・音声

— 2 —

## デフリンピック資産の例

デフリンピックを広く知っていただくためにも、規制はいたしません。ただし、誤解を招くような使い方は控えて下さい。  
(例：「ソフィアデフリンピック」という名前だけの単独ブログを立ち上げる、など)

### デフリンピックを特定する単語

Deaflympics

デフリンピック

### 第23回夏季デフリンピック競技大会を想起させる単語

SAMSUN2017

トルコ2017

2017年トルコ

— 3 —

デフリンピック派遣期間中  
2017.7.14～2017.8.2

ソーシャルメディアへの文字投稿

■投稿していい内容■

○ デフリンピックで自分自身が  
経験したことについて  
個人的な感想を書くこと

思った以上に  
いいペースで  
走ることが  
できた

〇〇国の  
ディフェンスは  
すごいと感じた

MVPに  
選ばれて  
うれしい

現地スタッフの  
人たちが  
とてもあたたかくて  
親切



- 4 -

デフリンピック派遣期間中  
2017.7.14～2017.8.2

ソーシャルメディアへの文字投稿

■投稿していい内容■

○ 文章の一部に「デフリンピック」  
という言葉を使うこと

3回目の  
デフリンピック、  
がんばります！

ソフィアデフリンピックは  
これまでで一番  
競技参加チームが多い

ソフィアデフリンピックの  
開会式はすばらしかった



- 5 -

デフリンピック派遣期間中  
2017.7.14～2017.8.2

ソーシャルメディアへの文字投稿

■投稿してはいけない内容■

✕ 企業・団体や商品のPRに  
つながる記載

〇〇（商品名）  
のおかげで疲労  
回復した

〇〇（企業名）  
のおかげで競技  
に専念できた

〇〇社の『商品名』  
は私の必需品です！



- 6 -

デフリンピック派遣期間中  
2017.7.14～2017.8.2

ソーシャルメディアへの文字投稿

■投稿してはいけない内容■

✕ 他の参加者や組織の個人情報、  
秘密事項  
・施設のセキュリティー

〇〇選手村の  
「部屋番号」に  
〇〇選手が泊まっている

〇〇選手は昨日  
足を痛めたので、  
マッサージを受けました

明日の  
スタメンから  
はずされた

〇△口会場の  
地下は誰もいない  
から自由に入れるよ



- 7 -

デフリンピック派遣期間中  
2017.7.14～2017.8.2

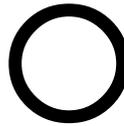
### ソーシャルメディアへの文字投稿

■投稿してはいけない内容■  
× 他者や他の組織の  
批判・誹謗・中傷



— 8 —

デフリンピック派遣期間中  
2017.7.14～2017.8.2



■被写体の許可があれば掲載可■

スタンドからの撮影写真  
(特定選手のクローズアップ写真は不可!)

スタンドからの撮影(競技、表彰)  
※特定選手のクローズアップ写真は不可

— 9 —

デフリンピック派遣期間中  
2017.7.14～2017.8.2

× 個人で撮影した動画を、本人の許可無く  
あらゆる媒体で公表することは禁止



<例外>

デフリンピック会場で自分自身を撮影したもの

デフリンピック会場・宿泊場所以外で撮影したもの

— 10 —

デフリンピック派遣期間中  
2017.7.14～2017.8.2

## メディア行為は禁止

デフリンピック期間中、メディアとして資格認定  
を受けた人以外は、会場や宿泊場所などで、  
記者・レポーター・カメラマンの他、いかなる  
メディアとしての活動もしてはいけません。



他者へのインタビュー

ネット番組などのパーソナ  
リティやレポーターとし  
て大会や選手の様子をし  
レポートすること



マスコミや企業・団体の広報媒体  
への記事や写真、動画・音声の投  
稿

大会や競技の様子を生、録画を問  
わず放送すること

— 11 —



デフリンピック区域  
～撮影できる場所～

■競技会場■

スタンドからの撮影(競技、表彰)  
※特定選手のクローズアップ写真は不可

■練習会場■

スタンドからの撮影(日本選手を撮影)

— 12 —



デフリンピック区域  
～撮影禁止の場所～

■競技会場■

競技区域(field of play)からの撮影

ウォームアップ区域(出入口、屋内)

更衣室(出入口、屋内)

招集所(出入口、屋内)

■宿泊場所■

他国選手団の居住区

食堂(出入口、屋内)

本部(出入口、屋内)

アスレチックストレナー室(設備など)

— 13 —

デフリンピック派遣期間中  
2017.7.14～2017.8.2

## 競技結果の情報発信について

各自の競技に限り、リアルタイムでの  
結果情報発信はしても構いません。

※ただし、公式結果と相違が出る場合がありますので、  
各競技団体で責任を持ち、発信の際は十分にご注意く  
ださい。

※自分の競技以外の結果情報発信はしてはいけません。

※ネットマナーは必ず守って下さい。

【投稿してはいけない内容】

- ・他の参加者や組織の個人情報や秘密事項
- ・他者や他の組織の批判・誹謗・中傷

全競技の結果は、ICSD公式結果報告を受け  
たあと、「日本代表選手団公式サイト」に毎  
回掲載します。

競技団体サイトやブログなどにも、  
「日本代表選手団公式サイト」のリンクを  
貼って下さるようお願いいたします。

— 14 —

## 大会後の写真の取り扱い

(日本選手団公式サイトに掲載した写真や動画)

ケースにより  
取り扱いが異なります



全日本ろうあ連盟に  
お問い合わせください

一般財団法人全日本ろうあ連盟 スポーツ委員会  
FAX: 03-3267-3445 TEL: 03-3268-8847  
E-Mail: ifcd-sc@ifcd.or.jp (受信専用)

— 15 —

## 第 23 回夏季デフリンピック競技大会報告書

---

発行日：2018年1月25日

発行：一般財団法人全日本ろうあ連盟

〒162-0801 東京都新宿区山吹町130 SKビル8F

TEL 03-3268-8847・FAX 03-3267-3445

ホームページ <http://www.jfd.or.jp/>

Eメール [jfd-sc@jfd.or.jp](mailto:jfd-sc@jfd.or.jp)

編集：全日本ろうあ連盟 デフリンピック派遣委員会

編集協力：一般社団法人日本聴覚障害者陸上競技協会／日本ろう者バドミントン協会／  
日本ろう自転車競技協会／一般社団法人日本ろう者サッカー協会／一般社団法人  
日本ろう武道連盟／一般社団法人日本ろう者水泳協会／一般社団法人  
日本ろうあ者卓球協会／一般社団法人日本ろう者テニス協会／一般社団法人  
日本デフバレーボール協会

印刷：日本印刷株式会社

「国庫補助金 平成 29 年度民間スポーツ振興費等補助金総合国際競技大会  
派遣等事業」にて作成



公式ユニホームの胸につけられた  
日本選手団のロゴマーク